

9603 | space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第378号 1996年3月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

特集 アジア同時代シリーズ2

ベトナム建築大博覧

A Panorama of Architecture in Vietnam



KAN DEN KO



快適な環境をお届けするのも —— 関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

 **関電工**

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎:NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

人にやさしいテクノロジーは、いま……。

新生活提案型の感性豊かな商品づくりは、数多くの最先端技術が支えています。

そのひとつがアクアエレクトロニクス技術。

便器の洗練されたフォルムも、高機能を満載しながら小型化した新技術がバックボーン、
これによって美しさと機能の調和が実現しました。

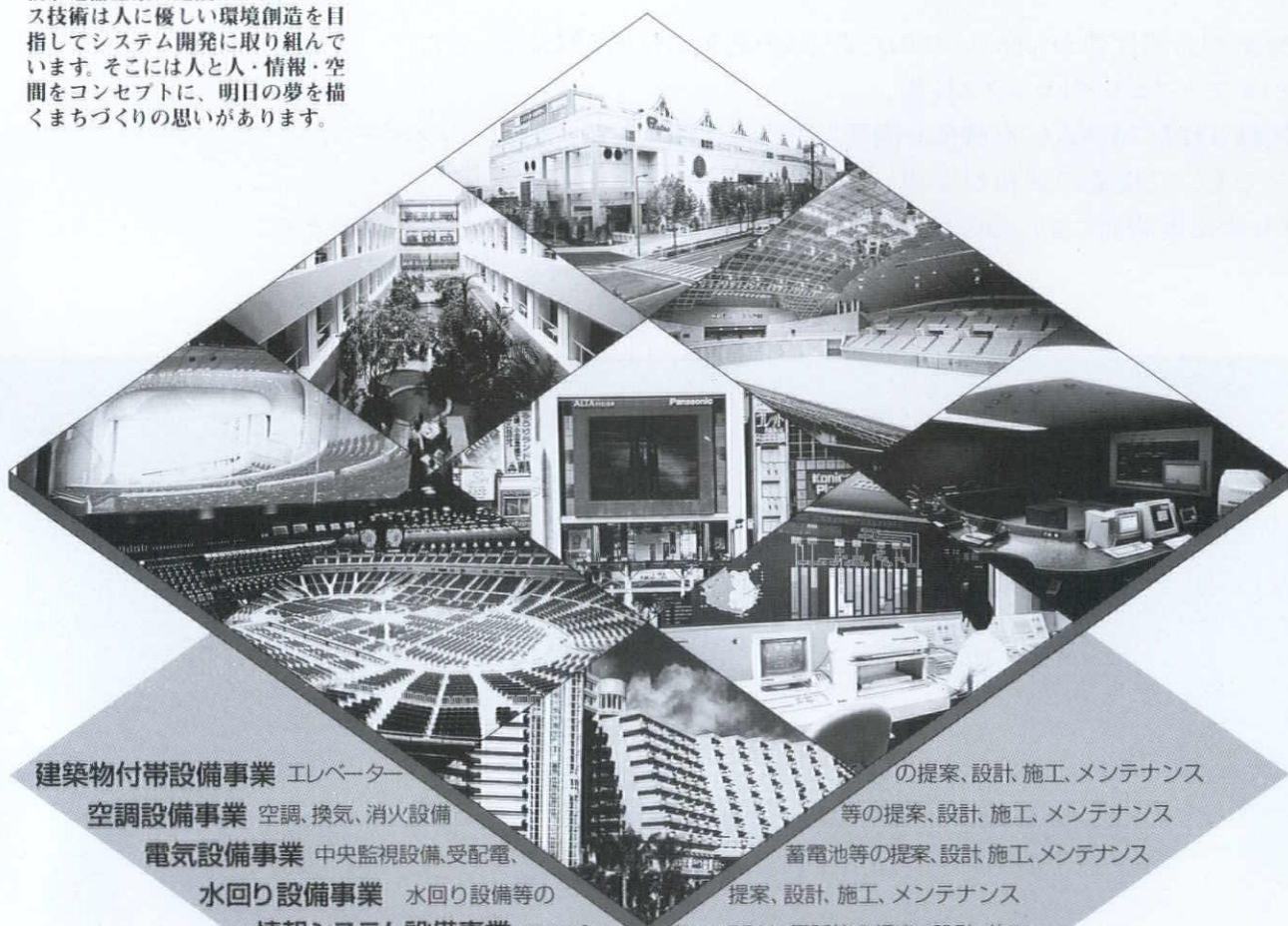
着々と進む新技術開発により、心のくつろぎや快適性をひろげる商品が続々と誕生しています。



National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めています。



松下電器産業(株)システム営業本部
建設システム営業部

☎03-5460-2809

北海道支店 ☎011-222-5815

東北支店 ☎022-223-5111

首都圏建設システム支店 ☎03-3436-5045

神奈川支店 ☎045-682-3701

中部支店 ☎052-951-6010

関西支店 ☎06-949-2251

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0678-21-3133

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎0988-53-2826

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

ビルオートメーション
オープンにしたならBAに創造力が生れた。



「オープン」だから、リーズナブル。

高性能で低価格な量産品機器をベースに、きんでん独自のエンジニアリング・ノウハウを生かし機能的で信頼性の高い「A&Aシステム」が実現。お客様にご満足いただける価格でご提供できます。

「オープン」だから、フレキシブル。

制御プログラムをリモートステーションに実装する分散処理システムの採用で、さまざまな建物や施設の運用目的にあわせた対応が可能。将来の拡張にも柔軟に対処することができます。

「オープン」だから、ユーザーオリエンテッド。

お客様のご要望をじゅうぶんに反映させ、細部にいたるまで、投資コストを生かす最適なシステムを構築。導入後の変更や保守はお客様ご自身で行うこともできます。

総合設備エンジニアリング

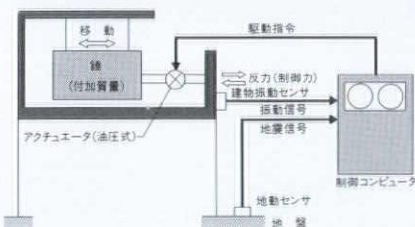
株式会社 **きんでん**

本店 大阪市北区本庄東2丁目3番41号 〒531
東京本社 東京都品川区東五反田5丁目25番12号 〒141

世界初のアクティブ制震システム。

AMD【エー・エム・ディ】

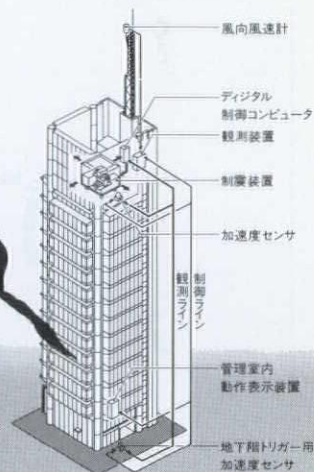
カジマが世界で初めて実用化したアクティブ制震システム。建物荷重の約1%の錘を屋上に設置。コンピュータ制御で錘を駆動して揺れを制御。地震や強風時にビル内では全く揺れを感じさせない優れた制震効果を発揮します。高層、超高層、超々高層ビルなどに。



優れた頭脳とバランス感覚をもった新しい制震システム。

DUOX【デュオックス】

AMDをさらに進化させた複合型アクティブ制震システム。高度な技術力により省エネ化、小型化を図りながら、制震効果は大型装置と同等以上の優れた性能を実現。高層、超々高層ビルはもちろん、リニューアルでの既存のビルへの設置と適用範囲を大きく広げた新しい制震システムです。

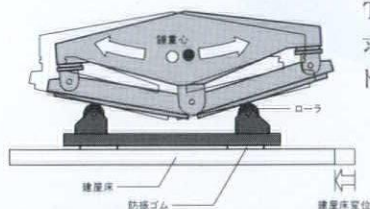


小さな装置で大きな制震効果を発揮。

TRIGON【トリゴン】

振子運動を行う錘をアクティブに駆動するハイブリッド制震システム。コンパクトな装置でイニシャルコスト、ランニングコストともにわずか。地震や強風による揺れも1/2以下に制御。

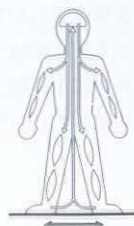
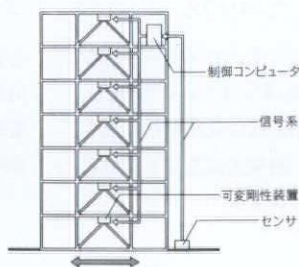
TRIGONは居住性と快適性が求められる超高層インテリジェントビルに採用されています。



建物の剛性を変えて揺れをかわす。

AVS【エー・ビー・エス】

走る電車の中に立っている人が身体のバランスを保つように、プレースに接続された可変剛性装置が瞬時にプレースの<有効><無効>を切替え、揺れをかわします。中小地震から大地震まで効率よく対応し、大地震にともなう停電時にも確実に作動。シンプルで確実なアクティブ制震装置です。



地震から交通振動まで、あらゆる振動をカット。

免震防振構法

建物をまるごと積層ゴムで支え、大地震から交通振動まで、あらゆる振動をカットします。交通振動などの細かな振動から建物を守り、静かな室内環境を確保。道路や線路に隣接した建物に優れた効果を発揮します。

安全で快適な環境を創造するカジマの高度な制震技術。

快適をより確かなものに。

ビルを連結して揺れを抑える。

JDS 【ジェー・ディ・エス】

360度あらゆる方向の揺れに対応する制震システム。高さの違う建物(=振動周期の異なる建物)を特殊ダンパで連結し、双方の揺れを相殺します。シンプルな構造のダンパは素材・製造・設置コストも少なく、構造体コストの低減を実現します。

高性能オイルダンパが振動を吸収。

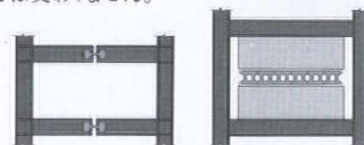
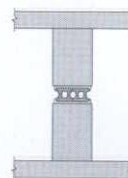
HiDAM 【ハイダム】

建物の骨組みと一体化されたオイルダンパが地震や強風による振動を吸収します。優れた振動減衰性能により建物の軽量化が可能となり、構造体コストを低減。建物耐用年数より長い耐久性が自慢です。

壁や梁が振動を吸収。

HDS 【エイチ・ディ・エス】

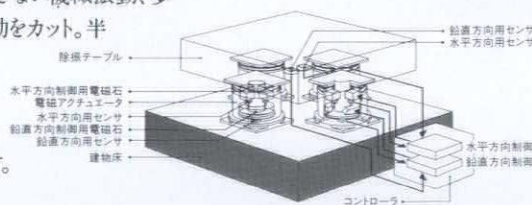
壁や梁など構造体そのものにハチの巣型のダンパ等を組み込み、振動エネルギーを吸収させます。特に震度5以上の大地震に大きな効果を発揮。中高層から超高層に至るまで幅広く対応。低コストで設置でき、柱や梁などを軽減しても快適さは変わりません。



精密機器を磁気で浮上させる
次世代の除振装置。

MLIS 【エムリス】

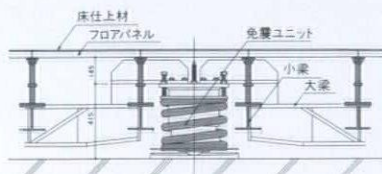
完全非接触型の理想的な除振を実現した磁気浮上式除振装置です。建物レベルの振動対策ではカバーできない機械振動、歩行振動などの微細な振動をカット。半導体をはじめ、先端テクノロジーの分野でこれから、ますます求められる次世代のシステムです。



コンピュータを地震から守る
免震床システム。

KIFS 【ケー・アイ・エフ・エス】

コンピュータなど精密機器を載せた床を建物本体から分離して振動を遮断。必要なフロアだけを免震構造にすることができ、地震の規模を問わず優れた効果を発揮します。コンピュータセンターや医療施設、精密機器生産施設、美術館など振動を嫌う設備機器のある建物に最適です。



鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7
お問い合わせは
技術営業部 03(3404)2011

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

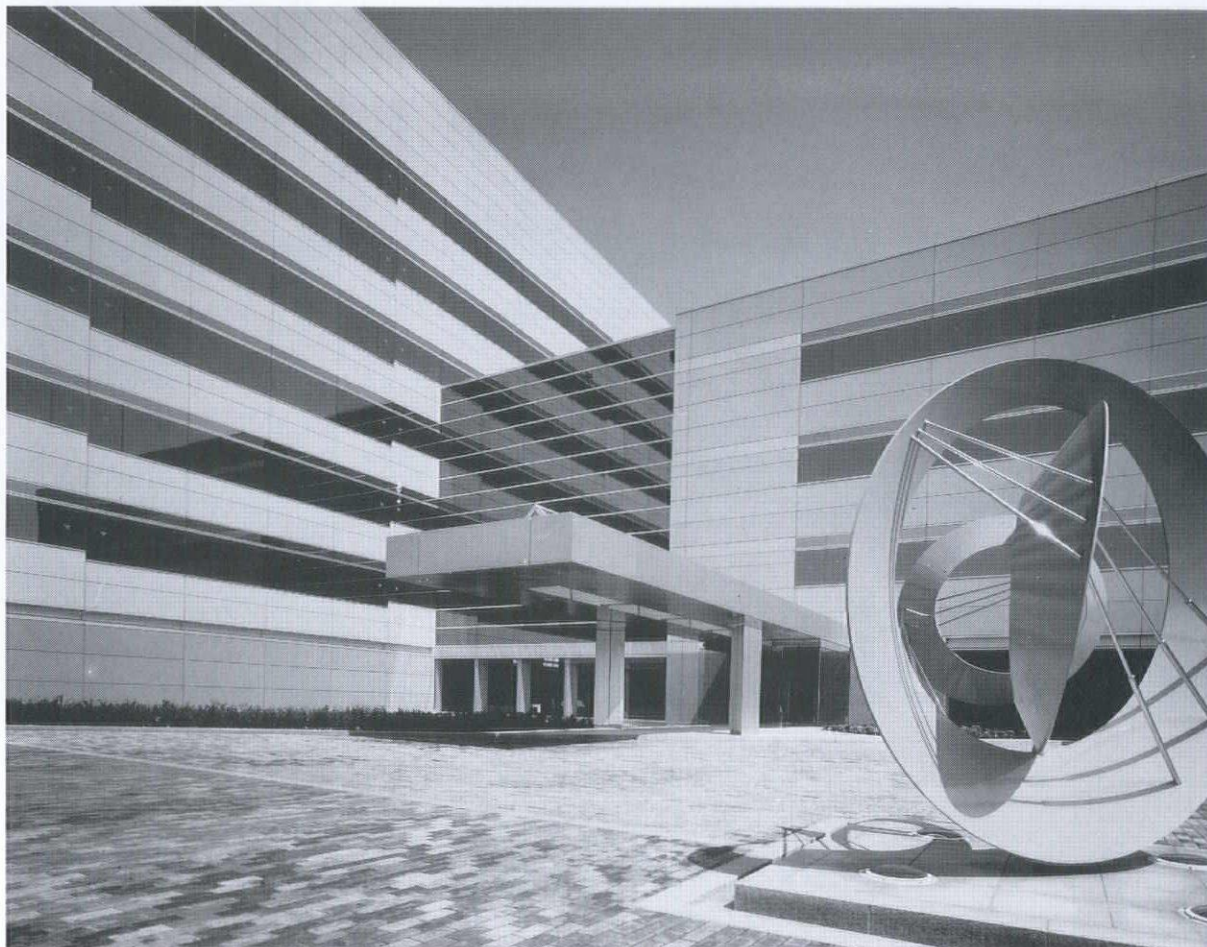


軽井沢
ホテル 鹿島/森
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ:
ホテル 鹿島/森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335

大興物産の海外建材シリーズ

No.4 ガラス



埼玉・パイオニア鶴ヶ島総合研究所

大興物産では、米国・ガーディアン社の製品をはじめガラスの国際調達を推進しています。

この製品のお問い合わせは、大興物産株式会社・海外建材事業本部へどうぞ
〒107 東京都港区元赤坂1-3-4 TEL.03-3423-2511 FAX.03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店	☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポール オフィス	☎65-3440590 FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		



ロビーラウンジ

ようこそ、クラシカル・エレガントな世界へ。

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。

ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、
あなたの新しい物語がはじまります。

(客室&施設)

●ビジネス向き、女性向き、観光、ファミリー、個人滞在用と、目的に応じて選べる全404室。
(シングル¥15,000～ ツイン¥25,000～) ●ジャグジー、ヒーティングルームなどを付帯した
2,000㎡の“ガーデンプール”。●クラシカルなインテリアや絵画で統一された趣のあるロビー。
●個性的なステンドグラス、パイプオルガンを配したチャペル(3F)。ガーデンプールの一角
に設けられたガーデンチャペル(5F屋外)。厳肅な神殿(八幡殿=やひろでん)(3F)。●最
大800名様まで可能な大宴会場(永代)、中、小、さまざまな8つの宴会場。●最新設備を完
備したビジネスセンター。●心身の健康管理と増進、心の交流を目的とした新しいタイプの
ヘルスクラブ“ジ・イースト”。●都内初のホテル直結型多目的ホール“イースト21ホール”。

(レストラン&バー)

●フランス料理を主としたコンチネンタル料理……………【プラスリー ハーモニー(2F)】
●本格的広東料理……………【中国料理 桃園(2F)】
●アフリカンムードのメインバー……………【バー エレファント(2F)】
●旬の素材が織りなす食の芸術……………【日本料理 さざんか(21F)】
●四季折々の味覚……………【鉄板焼 木場(21F)】 ●心に残る夜景……………【カクテルラウンジ パノラマ(21F)】



大宴会場 永代

HOTEL
East
21
T O K Y O

地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。
東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3
TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775



日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 103/ 東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

東京 ☎03(5644)7221 (代表)	福岡 ☎092(451)1095 (代表)
千葉 ☎043(245)0201 (代表)	札幌 ☎011(281)6328 (代表)
横浜 ☎045(316)7885 (代表)	仙台 ☎022(263)0315 (代表)
大阪 ☎048(642)5811 (代表)	広島 ☎082(294)6006 (代表)
名古屋 ☎06 (533)3191 (代表)	高松 ☎0878(34)0336 (代表)
金沢 ☎052(933)4761 (代表)	金沢 ☎0762(22)3321 (代表)

広告についてのお問合せの際は<SDを見て>と御明記願います

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

● General Electrical Work ● Internal / External Wiring for Lighting & Power ● Electrical Work
for Power Stations & Substations ● Design, Execution & Management of Telecommunication Work

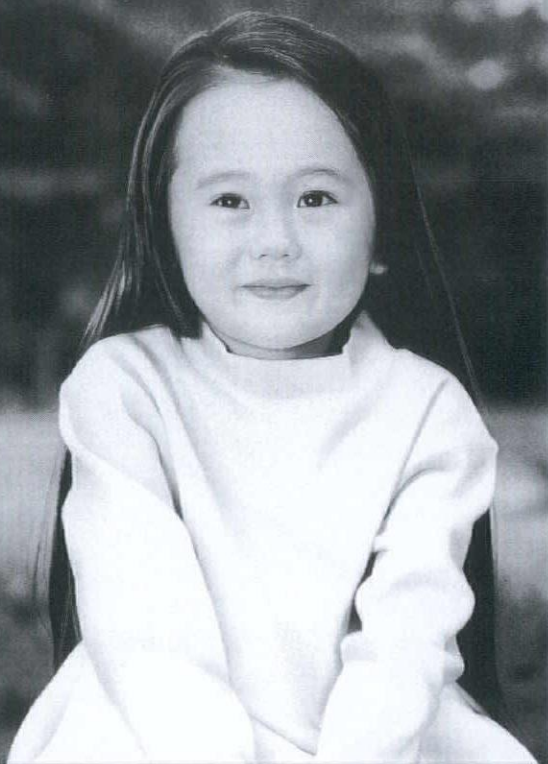
テクノロジー&システム



中立電気株式会社

〒114 東京都葛飾区新富1-1-1 (新富1丁目) 03-5636-2811

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



未来をみつめる目

生活環境の改善から

ハイテク時代に対応した新技術の開発まで

大成温調は最適な空間づくりを追求しております。

● 空気調和・給排水衛生設備



人の呼吸にもっと優しく

大成温調株式会社

〒140 東京都品川区大井1丁目47番1号 TEL.03-3774-1111 (大代)

支店・営業所 青森・八戸・盛岡・秋田・山形・仙台・郡山・いわき・水戸・宇都宮・前橋・大宮・千葉・川崎・横浜・
甲府・新潟・長岡・金沢・静岡・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・高松・福岡・長崎・鹿児島・那覇

技術研究所 〒134 東京都江戸川区東葛西2-3-4

TEL.03-3877-3770

横浜技術センター 〒226 神奈川県横浜市緑区川向町806

TEL.045-471-1801



100

おかげさまで100周年

鉄筋とラスの補強で
GRCを超えた
軽量コンクリートフロア

ワンタッチ施工を実現したパネルロックシステム

低コスト、ワンタッチ施工を 実現！

抜群の耐ローリングロード性を約束する新軽量型コンクリート製フロア

オフィスを快適に演出するオメガフロアは、ローリングロード試験300kg・1万回をクリアし、300kgの集中荷重にも耐える強靱さ。居住性、安全性も抜群で、経済性にも優れています。

- モジュール500mm角、支柱分離型のフリーアクセスフロア設計
- 吸音性に優れ疲労感も少なく、カー



ペット仕立てで快適オフィスを美しく演出

- パネルも支柱も不燃性で安心
- 押えプレートと止めボルトのコンビで、パネルを支柱にガタなくワンタッチ固定

**ニチアス
オメガフロア®**



ニチアス

本社・建機エンジニアリング事業部／〒105 東京都港区芝大門1-1-26 ☎(03)3433-7257
東京営業部／〒105 東京都港区芝大門1-1-26 ☎(03)3438-9751
大阪営業部／〒542 大阪市中央区南船場4-11-10 ☎(06)252-1301
名古屋営業部／〒457 名古屋市中区東又兵衛町2-30 ☎(052)611-9217
九州営業部／〒810 福岡市中央区白金1-1-15 ☎(092)521-5648

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話:03-5561-2111(代)
振替:00160-2-180883

年間定期購読料

25,000円(特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー寄贈店

【東京】
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
【大阪】
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167

【札幌】
旭屋書店 011-241-3007
【横浜】
有隣堂本店 045-261-1231
【京都】
大福堂書店 075-231-3036
【大学生協内書店】
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9403 バイオクライマティックタワー 1950円
自然環境との適合を課題とした高層建築を模索するマレーシアの建築家ハムザ&ヤング。文:池田武邦、ケン・ヤング、他。【都市を考へる——The Cityの提案】大都市を複数の細胞に区分する新提案

9404 堂夢の時感/木島安史の世界 3000円
作品:青狸庵、風風院、YAS邸、球泉洞森林館、折尾スポーツセンター、設計競技作品、他。文:木島安史、柳敷賀次郎、木村俊彦、高橋青光一、橋本文隆、他。略年譜、作品データ、執筆一覧

9405 東ドイツの近代建築 1950円
旧東ドイツの近代を席巻した表現主義建築を、35都市にわたる調査をもとに紹介。クリンゲンベルクのダム(H.ベルツィヒ)、アインシュタイン塔(メンデルゾーン)、他。文+写真:長谷川康

9406 アートがつくるワークプレイス 2500円
「働く人々のための空間とアート」に着目し、海外の事例を紹介。文:南條史生、D.F.ハルセン。アーティスト:アンドレア・プラム、他。企業等:IBM、ブリティッシュ・カウンスル、他

9407 ビーター・ウォーカーの世界 2200円
アメリカ・ランドスケープ・アーキテクトとしての彼の初期から現在にいたるまでの主要作品を紹介。東京海上東日本研修センター、IBMクレアレイク、パーネットパーク、ロングエーカー公園、他

9408 マッシミリアーノ・フクサス 1950円
フランスを中心に展開する近作を紹介。ロアンのヨーロッパ建築研究所、他。文:マンドレリ、堀池秀人、他。【異界の僧院——モルドバのルーマニア正教会堂】写真:平岡、文:山崎雄史

9409 思考と建築・都市:アメリカ東海岸の新たな動向 1950円
B.シャードル&キブニス、マイケル・ソーキン、他。文:松雄雄、他。【「手法」から「縁起」へ】吉川油断寄宿舎/TAO ARCHITECTS/野田俊太郎。写真:堀内広治

9410 トロハの遺した構造と空間 3000円
鉄筋コンクリートを表現の素材として追求したエドアルド・トロハの遺作を紹介。【芸術都市への蘇生/イタリア・シベリナを試み】地震で全壊した同市の復興プロジェクト

9411 シティ・ターミナルの空港建築 3500円
世界22の空港を挙げ、ターミナル・ビルを技術的、デザイン的可能性を探る。シャルル・ド・ゴール、スキポール、ヒースロー、ソウル・メトロポリタン、関西国際空港、他。文:ディヤン・スジック、他

9412 SDレビュー1994 1950円
第13回SDレビュー誌上発表。荒木正彦、Jビザル+P.ルーグ、吉松秀樹、石黒由紀+田嶋繁、遠藤秀平、城戸崎和佳、中村勇大、他。【国際競争プロジェクト/オシヴィエンチム風見院】

9501 山本理顕 3000円
作品:緑園都市、岩田山町立総合中学校、橋梁性老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真:北嶋雅治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。原稿:横文彦+植田実+山本理顕

9502 南イタリアのパロク建築 1950円
地中海の島シチリアとプーリア地方サレント半島のレッツェを中心に、南部イタリアのパロク建築を紹介。掲載都市:パレルモ、シクリ、他。写真:小野一徳、文:竹山博英、長谷川正光、岡田新史



9503 集合住宅の現風景
近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文:作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴。座談会:植田実+室伏次郎+松原洋
1950円

9504 テクノスケープ
テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視座を提示する。文:宇野求、岡河貴、永瀬唯、A.ロジェ、他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ
3000円

9505 メガ・アーキテクチャ
巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作を紹介。シャルル・ド・ゴール空港、TGV-REPER、他。対談:安藤忠雄+P.アンドルー。【神戸外国人居留地の形成とその展開】文+構成:坂本誠比古
1950円

9506 デジタル・アーキテクチャの可能性
インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性:佐田研究室、岡角・位寄研究室、他。【自然と共存する家具】写真:浅川敏
1950円

9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール
作品:東京現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+鈴木博+柳澤孝彦。写真:村井修
2700円

9508 まちのバブリックススペース
人々の日常生活と密着した公共施設である文庫・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリエ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明
1950円



9509 丹下健三
最新作シンガポールの超高層ビル[UCBプラザ]、新居の新たなスカイラインを構成する[新宿パークタワー]を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。
3800円

9510 環境に呼応する建築:シーザー・ヘリの最新作
近年、海外での活躍が目されるヘリの最新作を紹介。【ランドマーク・グラフィティ——「タワー・アート」の過天閣:ヴァナキュラーな電脳都市展】より
1950円

9511 長谷川逸子:1985-95
過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品:山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館、他。全30作品。論文:ビーター・クック、他。対談:多木浩二+長谷川逸子
3000円

9512 SDレビュー1995
第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美樹、手嶋勇、トム・ヘネガン+アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana:ローマのヴィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン]
1950円

9601 都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例:くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス
2800円

9602 建築のメモリア:イタリアの合理主義の流れ
イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステラ、他。
1950円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・プロジェクト：武蔵野、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭雄、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。横濱、ノアビル、聖アキラ館、時雪軒、民別山荘、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟一。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

4000円



横文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、新沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で育かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバーク・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京道草少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磊々とした独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣I、III、他。

3800円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILLAGE、ラビリス、成城交差点の家、アトリウム、他。

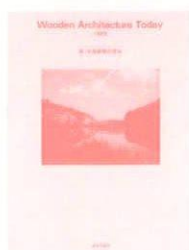
4300円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の風。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥敏。対談：今川憲英 X 安村基。

3708円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスボラス海峡に臨む別荘、ヴァイナル通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高橋秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコ形成、折衷主義の世界、近代の憂鬱、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館(TEPIA)というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流に分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨルディパレス、お茶の水ステア、他。

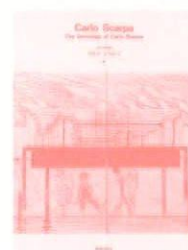
4800円



磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ディーム・ディズニー・ビルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディウム、[蝶々夫人]舞台美術、他。

4500円



カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地和めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓池、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増設案、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

3500円



安藤忠雄③ アニマル・プロジェクト

70年代からの見過せないアンビエルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトII、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×斎藤敬×小澤憲一、他。

5000円

特集 アジア同時代シリーズ 2

ベトナム建築大博覧

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚りえ
アドバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川優子

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大塚屋・大洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：2,500円
[本体2,427円]

年間直接購読料：25,000円
特別定価号・送料込み

表紙：バゴダ
ベトナム仏国寺／ホーチミン市
表紙写真：鈴木 豊
表紙デザイン：小泉均

6	はじめに——ベトナム・都市と建築への招待	村松 伸
9	「折衷」という大きな流れ	写真+文＝鈴木 豊
25	ベトナム建築史とその特質	重枝 豊+中沢信一郎+村松 伸
33	ベトナムの都市と建築1：ハノイ	東京大学生産技術研究所 藤森研究室+ 東京大学工学部都市工学科 西村研究室
34	ハノイ・ハノイ・ハノイ	村松 伸
36	ハノイ近代建築100選+古建築10選	
44	重層するハノイの歴史	大田省一
46	36通り地区の成り立ち	土田 愛
50	ホーコーの暮らし	辻 鈴子
53	ハノイ36通り地区の町屋の建築類型	大嶋信道
59	ベトナムの都市と建築2：フエ	中川 武+早稲田大学アジア建築研究室
64	阮朝の歴史／フエの都城／フエの王宮——午門、太和殿、世廟、崇禁城 王都の舞台装置——南郊壇、文廟、天純寺／皇帝陵	
79	ベトナムの都市と建築3：ホイアン	
80	歴史都市ホイアン	福川裕一+友田博通
89	ホイアン貿易陶磁博物館	平 幸夫
90	遺跡が語るホイアンの歴史と町並み形成	菊池誠一
92	ホイアン町家の修復	林 良彦
95	ベトナムの都市と建築4：チャンパ遺跡	重枝 豊／日本大学理工学部建築学科 片桐研究室
96	チャンパ建築再発見	重枝 豊
102	チャンパ建築巡礼	
108	チャンパの遺跡保存事情	
113	ベトナムの都市と建築5：ホーチミン	東京大学生産技術研究所 藤森研究室
114	動き出したベトナム最大の都市ホーチミンシティ	大田省一
116	ホーチミン近代建築30選	
121	ベトナム少数民族の住まい	重枝 豊
122	北部少数民族の住まい	上田博之
123	中南部少数民族の住まい	重枝 豊
125	中南部チャム族の住まい	中村理恵
127	ベトナム南部のオクエオ文化と前アンコール期の建築遺跡	菊池誠一
130	ベトナムの木造架構 ハノイの金蓮寺とフエの太和殿について	中沢信一郎
134	フエ阮朝王宮の修復保存	中川 武+中沢信一郎
138	ベトナムの都市住宅	内海佐和子+友田博通+北川泰三
142	「建築家なし」のミニ・ホテル	村松 伸
144	ベトナムの工業団地	阿部俊行
146	北部の開発：ハノイ周辺の新都市開発	森 映子
147	南部の開発：タントアン輸出加工区とサイゴンサウス計画	高橋俊介
148	発熱・ベトナム現代建築事情	村松 伸
154	連載：apple tomology トムの時空形象学 6	MOVE FORM たためる彫刻 戸村 浩
157	ニュース 1995年度ブラウン賞発表	
158	照明探偵団：連続実践講座レポート1 みること——目のうろこを落とすこと	葛西玲子/LPA
161	連載：ヤマトホテル巡礼 都市とホテルの空間文化誌	2. 異国への玄関口／大連ヤマトホテル ホテル文化研究会 永井良和
166	書評	
168	新刊紹介	
169	お知らせ	
173	海外建築情報リミックス：「機能」その1 「場所」による機能	

A Panorama of Architecture in Vietnam

Chief Editor: Koji Akawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03 5561 2551 (Management)
03 5561 2555 (Editing)
FAX:
03 5561 2561 (Management)
03 5561 2565 (Editing)
TELEX:
02422467 KAJIMA J

Printed in Japan

This Copy: ¥2,500
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 188

Cover:
Viet Nam Quoc Tai Ho Chi Minh
Cover Photo:
Yutaka Suzuki
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/niD

6	Introduction: Invitation to Vietnam's Cities and Architecture	Shin Muramatsu
9	A Tradition of "Compromise"	Yutaka Suzuki
25	The History and Characteristics of Vietnamese Architecture	Y. Shigeeda+S. Nakazawa+ S. Muramatsu
33	Architecture and the Vietnamese City 1: Hanoi	Fujimori Lab., Univ. of Tokyo+ Nishimura Lab., Univ. of Tokyo
34	Hanoi Hanoi Hanoi	Shin Muramatsu
36	Selected Architecture of Hanoi: 100 Modern and 10 Traditional	
44	Hanoi's Many-layered History	Ohta Shoichi
46	The Beginnings of the "36th Street" District	Ai Tsuchida
50	Life in Pho co	Suzuko Tsuji
53	Architectural Types in the houses of Hanoi's 36th Street District	Nobumichi Ohshima
59	Architecture and the Vietnamese City 2: Hue	T. Nakagawa+Waseda Univ. Asian Regional Arch. Lab.
64	History of the Nguyen Dynasty/The City of Hue/The Palace of Hue/ Stage Equipment at the Royal Capital/Tomb of the Kings	
79	Architecture and the Vietnamese City 3: Hoi An	
80	The Historical City of Hoi An	Y.Fukukawa+H.Tomoda
89	Ceramics Trade Museum of Hoi An	Yukio Taira
90	The Story of Ancient Sites: Excavation Survey Report	Seiichi Kikuchi
92	Restoration of Townhouses in Hoi An	Yoshihiko Hayashi
95	Architecture and the Vietnamese City 4: The Champa Ruins in South-Central Vietnam	Y. Shigeeda/Katagiri Lab., Univ. of Nihon
96	The Rediscovery of Champa Architecture	Yutaka Shigeeda
102	Pilgrimage to Champa Architecture	
108	Preservation of the Champa Ruins Today	
113	Architecture and the Vietnamese City 5: Ho Chi Minh	Fujimori Lab., Univ. of Tokyo
114	Ho Chi Minh: Vietnam's Biggest City on the Move	Ohta Shoichi
116	Thirty Modern Buildings of Ho Chi Minh City	
121	Dwellings of Vietnam's Minority Peoples	Yutaka Shigeeda
122	Dwellings of Minority Peoples of Northern Vietnam	Hiroyuki Ueda
123	Dwellings of Central-Southern Minority Tribes	Yutaka Shigeeda
125	Dwellings of Central-Southern the Cham People	Rie Nakamura
127	The Oc Eo Culture of Southern Vietnam and Early Angkor Period	Seiichi Kikuchi
130	Architectural Site from the Wood Construction in Vietnam	Shinichiro Nakazawa
134	Restoration and Repairs at the Ancient Court of Hue	T.Nakagawa+S.Nakazawa
138	Urban Architecture of Vietnam	S.Utsumi+H.Tomoda+ T.Kitagawa
142	Mini-Hotels Built Without Architects	Shin Muramatsu
144	Vietnam's Industrial Parks	Toshiyuki Abe
146	Development in the North	Shunsuke Takahashi
147	Development in the South	Eiko Mori
148	The Fever of Vietnamese Contemporary Architecture Today	Shin Muramatsu
154	Series: apple tomology 6	MOVE FORM Foldable Sculpture Hiroshi Tomura
157	News New Perspective in Braun Prize 1995	
158	Symposia on Illumination:	Seeing: Having Your Eyes Opened Reiko Kasai/LPA
161	Series: Yamato Hotel Pilgrimage	A Cultural Record of Hotel Space in the City 2. Portal to Other Lands/ Dairen Hotel Culture Research Society Yoshikazu Nagai
166	Book Review	
168	Book Information	
169	Announcements	
173	Eminent Works Abroad: Function 1: The Function of Place	

特集

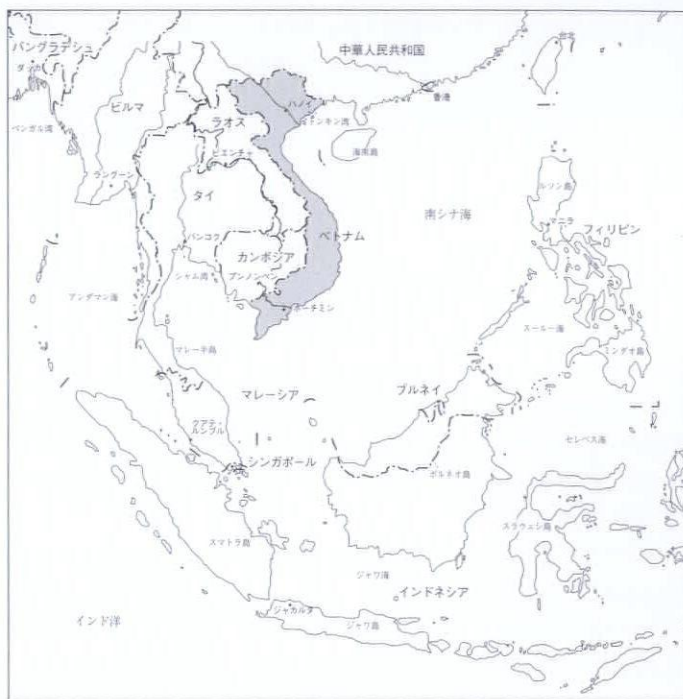
アジア同時代シリーズ 2

ベトナム建築大博覧

Special Feature

Contemporary Asia Series 2

A Panorama of Architecture in Vietnam



ベトナム戦争の記憶もまだ新しいのに、その記憶はどこかに追いやられ、社会・経済の成長とともに今まさにアジアの中で活気に満ちた、エキゾチックなベトナムの情報ばかりが私達の目の前に入ってくる。

猛スピードで事物が変化し、ベトナムのあらゆる建物の名称や住所が、そして物価までもが半年、数カ月といったスパンで変動を強いられる。そこに、ベトナムの「動」なる姿を見る。

しかし、一方でわれわれは『愛人』『インドシナ』や『青いパイパイの香り』の映画に見るような、オリエンタルな、中国の、もしくはベトナムの、とでもいえる空間に、そして「静」なる文化、伝統、歴史に興味を覚える。それらは、アジアの多くの国々にも見られる、様々な文化が折り重なって生まれた、ミックス・カルチャーによるものである。

「ベトナム建築大博覧」。本特集は、そんな「動」と「静」の顔をもつ現在のベトナムを、都市的・建築的視点から掘り下げようというものである。SD9402号「台湾現今設計観察」に続く「アジア同時代シリーズ」の第2弾として、ハノイ、ホーチミン、フエ、ホイアン、チャンバ遺跡地域の都市と建築、歴史・文化を通して、アジアにおけるベトナムの「同時代性」を多面的に見出していこうとするものである。

はじめに——ベトナム・都市と建築への招待

村松 伸

1. ベトナムは呼ぶ

映画やテレビが、ほくたちのベトナムへの思いをかきたてる。伝統的服飾アオザイ、細くてもろい麺「フォー」のさっぱりとした味、ベトナム戦争の悲惨さやアメリカ軍の傲慢さ、ベトコンの粘り強さ。カトリヌ・ドヌーブ主演の『インドシナ』に登場する屹立した山々、在仏ベトナム人監督トラン・アン・ユンの『青いパイアの香り』で舞台となった町並みやパイアの樹が植わる中庭空間のしっとりとした美しさ。難民、ホーチミンの都市の活況、農村の青々としたひろがりなど、無数の映像の断片が、メディアを通じてほくたちの頭に進入し、記憶の中にモザイクのように収まっている。

最後の「フロンティア」。ベトナムはそんなふうに日本人の目に映っている。学生、OLたちにとっては、観光旅行の「フロンティア」、企業人にとっては工場進出の「フロンティア」である。日本から多くの人々が駐在し、留学し、観光旅行に訪れ、商談のためにベトナムに足を踏み入れる。

ほくもベトナムのイメージに手招きされ、建築の「フロンティア」を求めてベトナムにたどり着いた。その感動は鮮烈だった。ホーチミンの街中を駆け抜けるモーター・バイクに跨がったアオザイ姿のベトナム娘。メコン河クルーズで風をきって突き進む8月の空気。じりじりと焼けつくようなフエの大地を自転車をごきながら、やっとたどり着いて見た阮王朝の陵墓。ダナンからタクシーに乗ってフエに向かい、ハイヴァン峠から見下ろす青い海。ハイフォンから船に乗ってハロン湾に航行し、突如とくわす奇岩の数々。遭遇した感銘の量を数えていくならきりが無い。

だが、その感動は長続きはしない。1回きりの旅行だったら、それでよいのだが、度重なる訪問はエキゾチズムを越えることを要求する。ベトナムを歩くためのノウ・ハウは『地球の歩き方/ベトナム編』を見ればよい。ホーチミンやハノイのレストランや土産物屋の場所は、『Hanako』のベトナム特集に詳しい。

ベトナムの歴史やひとびとの生活、経済やファッションについて述べる書籍も、ベトナム熱が嵩じるに従い、増加の一途をたどっている。だが、建築や都市に関する書籍は驚くべき一冊も無い。英語でも、フランス語でも、中国語でも、ベトナム語でも、無い。

異国の見学で行なっていることの大半は、実は都市や建物を見ることである。ベトナムでもそれは同様だ。シクロに乗ってうろつくのが都市ならば、市場の喧騒を包含しているのも都市である。メコン・クルーズで見るのが民家であるなら、ハノイ郊外への観光の目的も寺院の見学である。

必要性は高いのに、町を見る手立てがない。どこにどんな建物があるかさえわからない。伝統建築を見るための方法がわからない。そして、本がない。じゃあ、自分たちで作るほかはない。そこでできあがったのが、このベトナム都市と建築の指南書、名付けて「ベトナム建

築大博覧」という。

2. ベトナム建築大博覧

「大博覧」の意味は、すべてを網羅的に見ること。「博覧会」の「博覧」であると同時に、「博覧強記」の「博覧」でもある。本特集には、主要都市と建物がすべてにわたって述べられている。

その見所は都市で言えば、北から、以下のようになる。

- ・ハノイとその近郊
- ・ハイフォン
- ・フエ
- ・ホイアン
- ・チャンパの遺跡地域
- ・ホーチミン

ハノイは、ベトナムの首都、フランス植民地時代の建物や都市計画、そして、伝統的雰囲気漂う「36通り地区」が併存している。ここで、ほくたちは3つのものを見ることができる。華麗なるフランス建築、伝統から生み出された町家、古跡。少しばかりハノイ郊外に遠出すると、伝統の木造建築が多く見られる。4時間ほど車に乗る用意があるならば、越洋折衷の教会堂も見られる。

ハイフォンは、フランス植民地時代の港街。ハノイへ送られる物資は、この港に荷卸しされ、鉄道で運ばれる。ベトナムで言えば、ホーチミン、ハノイ、ダナンに続く、第4の都市。小さな街だが、フランス時代の建物の幾つかが残る。なかでもオペラ・ハウスは必見。もし、時間的余裕があるならば、ここからハロン湾に船で行くのもよい。

フエは古都。阮朝の宮殿や陵墓が広い大地のなかに建つ。アメリカ軍の爆撃を受け、フエの都城の一部は廃墟のまま。郊外には、阮朝皇帝の陵墓が数多く造られ、それらを見ることによって、ほくたちは阮朝の建築文化の全体像を把握することができる。

ホイアンはチャイナ・タウン。ベトナムでも古く、上質の民家が残る。ここから、チャンパの遺跡は近い。タクシーをチャーターするなら、主だったところは2～3日で見られる。

ホーチミンは、ベトナム最大の都市。阮朝時代に造られた城郭を中心に、フランス植民地時代に都市が形成されている。少し離れた位置に、チョロンというチャイナ・タウンがあって、映画『青いパイアの香り』の舞台となった近代の町家建築が並ぶ。

あるいは、ベトナムの各地に分布する少数民族の民家、これらすべての情報を体系化して解説してある。読んだだけで、見ただけで、眼の前にベトナムの都市や建築の全貌が浮かび、そしてそれをいかに料理するのか、一目瞭然たること請け合いである。

3. 同時代としてのベトナム建築

本特集の目的はもうひとつ、「アジア同時代シリーズ」の一貫であるこ

と。1994年2月号の『台湾現今設計観察』に引き続き、第2弾として「アジア同時代シリーズ」ベトナム編をここにお届けする。

ただ、台湾とは、特集の表現方法がずいぶんと違っているのは言うまでもない。台湾について、われわれの感じる「同時代性」は、伝統から脱却して、新しい地点に向かおうとしているその建築の姿の中にあった。彼らとぼくたちの共通性は、ほぼ同じ地平で繰り広げられている建築的闘争にある。

しかし、ベトナムの現代建築にそれを求めることは難しい。むしろ、1996年という時間的な同時代を生きつつあるベトナム人たちやその都市や建築が、ぼくたち日本人のそれとは全く異なった位置にあることを知ること、この場合それが重要である。

世界はネットワーク化でますます小さくなりつつある。パソコンの前で、ネット・サーフィンし世界中のあらゆる場所へと瞬時に移動することができてしまう。CNNは、情報の均質化を促し、世界的な建築雑誌は建築界の動向を決める。その動きの中にベトナムやベトナム建築界も呑み込まれようとしている。

ハノイの建築学科の学生たちの話題やベトナムで刊行される建築雑誌の内容は、他のアジア、そして、アジアに含まれるぼくたち日本人と大差はない。だが、実際に巻き起こっている建築の現象は、ぼくたちの眼には異様に映る。

例えば、現在、ハノイを中心に族生しつつあるミニ・ホテル。その詳細は本文で書いてるので重複はさけるが、伝統的な町並みのなかに、によきによきと生え出る超薄べらの建物やその装飾、そしてインテリアには、人間や建築の欲望がデフォルメされて付着している。

台湾と日本との「同時代性」が、情報の均一化によって生まれたものとするならば、ベトナムと日本との相違も、実は同じことから生まれている。だが、受け取る側の状況によって、発現の形態が異なる。まずは建築や都市の歴史に踏み込み、基盤となる建築文化の網の目を把握しないことにはどうしようもない。

「アジア建築の同時代」。それは、ひとつに決して括れない。日本との共通性のみを模索するのは不遜きわまりなく、だからこそ、均質情報世界に生きながら、異なった「同時代」の建築や都市を生み出すベトナムが、座標役として必要となる。都市や建築の歴史に少々偏向しつつ、だが、あえて「同時代シリーズ」の第2弾と銘打った理由はここにある。

4. ベトナム建築に向かって

ぼくが初めてベトナムを訪れたのは、わずか5～6年前のこと。手元には、まだフロンティア・シリーズの一冊であった『地球の歩き方/ベトナム編』だけ。自由旅行もままならず、国営のベトナム旅行社からわたされたスケジュール表のチリ紙のような紙質に驚嘆し、そこに記された日程通りの旅に、不満に満ちた旅の日々を過ごしたものだ。

それがあれよあれよと言う間に、ベトナムはブームの中心となった。ベトナムの都市や建築を調査研究する人々も、あつと言う間に増えてしまった。ベトナムの都市や建築は、ほくだけでなく、すべての人々にとっても研究の「フロンティア」であったのだ。

ベトナムの都市と建築の研究を精力的に進めるグループは、今主だったところで、4つある。研究歴の長い順で言えば、

- ・重枝豊さんを中心とするチャンバ遺跡調査グループ
- ・友田博通さん、福川裕一さんを中心とするホイアン民家調査グループ
- ・藤森照信さん、西村幸夫さん、村松伸を中心とするハノイ都市調査グループ
- ・中川武さん、中沢信一郎さんを中心とするフエ古建築調査グループ

グループによって調査期間はせいぜいのところ5～7年ほど。ぼくたちに到っては、わずかに3年しかたっていない。多くの研究者が、まずはチリ紙質のスケジュール表に泣き、『地球の歩き方/フロンティア・ベトナム編』を携えて、続いて『Hanako』のベトナム特集の出現に驚いたり、敵意を抱いたりしながら、それでも十分にお世話になった口である。

だがそれは、この本の内容が未熟であると言っているのではない。むしろ、建築や都市を捉え、分析し、理解するといった行為がどうやって行なわれているのか、この特集で臨場感たっぷりに体験できる利点のほうを強調したい。

チャンバ遺跡をほとんど手弁当で歩き回って観察した重枝さんの熱心さ、ホイアンの町並みをいかに保存しようかと駆け回っている友田さんと福川さんの情熱、酒も飲まずにハノイの近代建築について論ずる藤森照信さんの大声やいかに現地のひとびととの協同を進めるかを説く西村さんの冷静な知性、汗だくでフエの宮殿を実測する中川さんと中沢さんの姿のすべてが、この本に込められている。

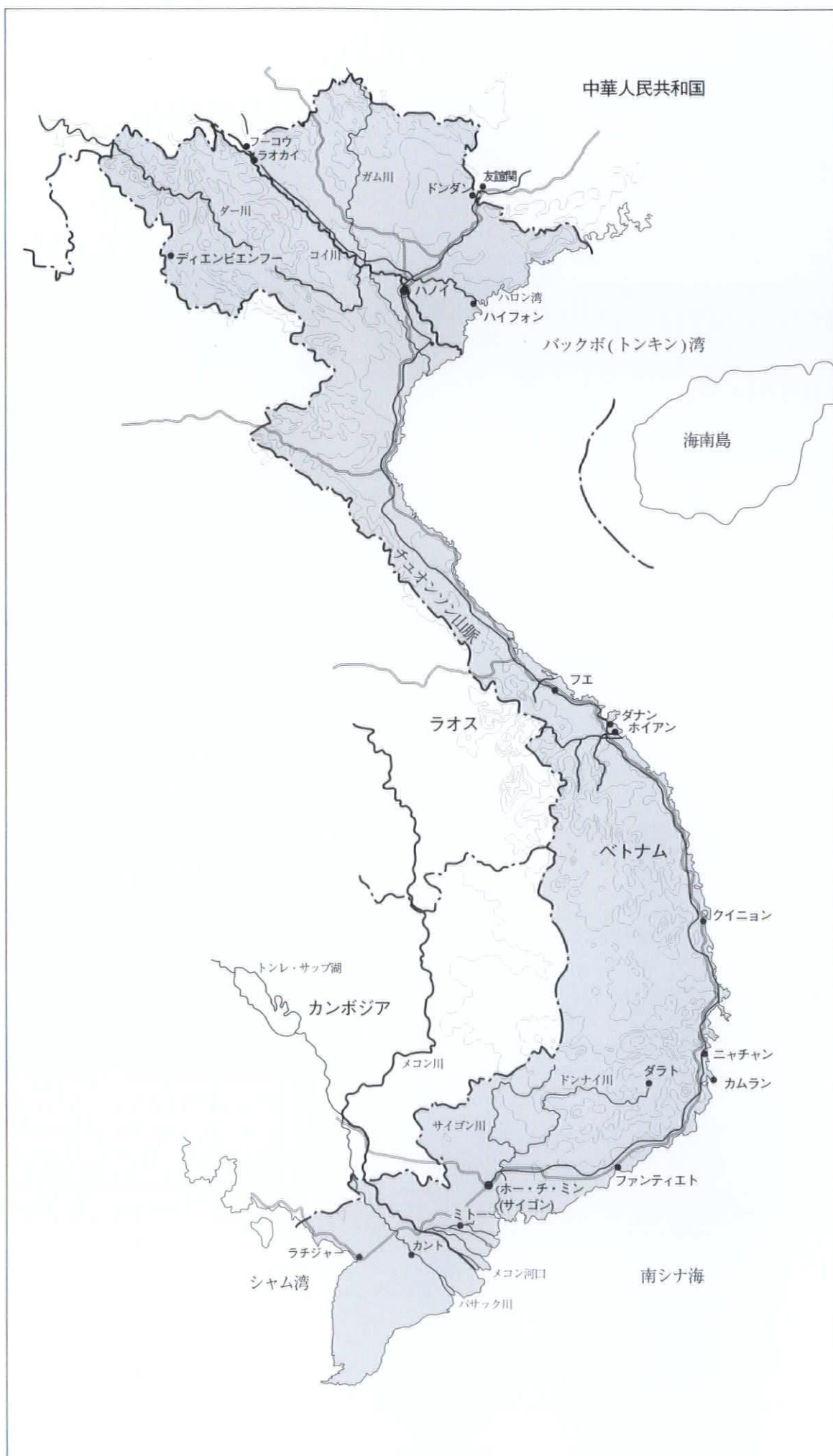
そんな、大勢のチーム・リーダーやさらに多数の研究参加者、病に陥るまでベトナムにのめり込んだ写真家の鈴木豊さん、そして東京でベトナムを夢見つつ、編集してくれた編集者の淑女・紳士の皆さんの汗と涙の結晶のこの本を携えて、ぼくはこれからもベトナムに何度となく行くはずだ。研究も調査もまだまだ緒についたばかり。この特集「大博覧」をさらに「大々博覧」へと進化させること、「同時代」としてのベトナム建築と都市の行方を見届ける使命が残されている。

そして何より、ハノイやフエ、そしてホーチミンで、ぎらぎらの太陽の下、この本を小脇に抱えて歩きたい。

1996年1月吉日

●むらまつ・しん/建築史、東京大学生産技術研究所助手

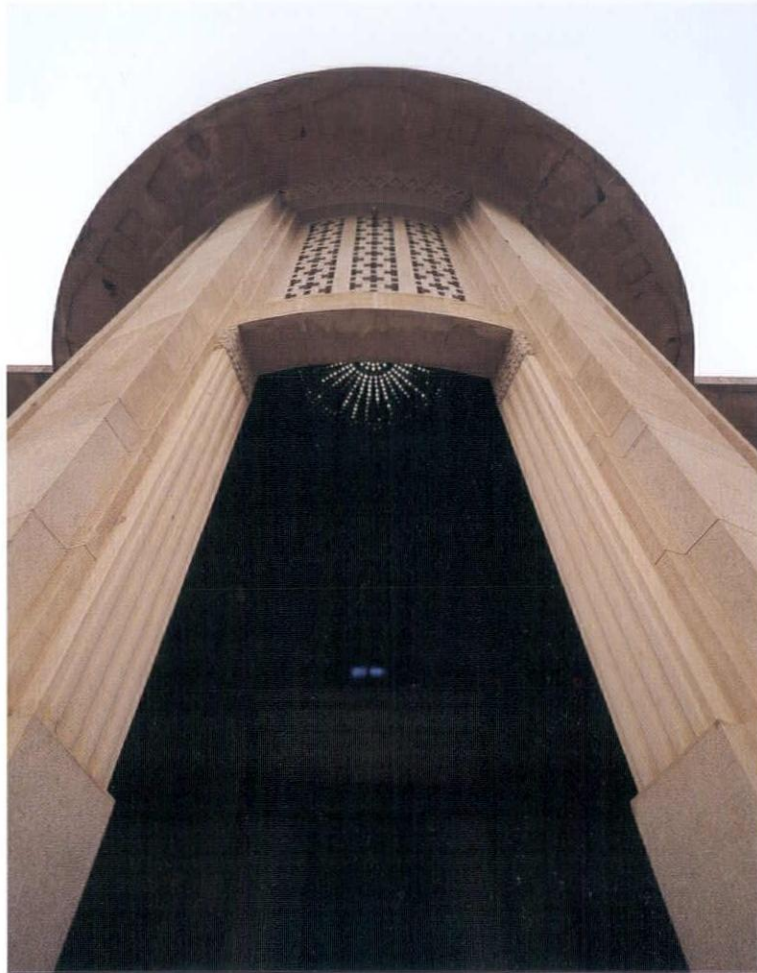
ベトナム全図



作図=久世 健

「折衷」という大きな流れ

——ベトナムの都市と建築



国立銀行のエントランス (Ngân Hàng Nhà Nước)、ハノイ

ベトナムのことを適切に表現しようとする形容詞が少しおかしくなる。

例えば、「新型の中古車」としか言いようのないような車に乗った。

ステレオタイプだが、「社会主義の市場経済」というものもある。

人も物も経験も形容矛盾はまだまだある。

「過激な穏やかさ」「豊かな貧しさ」、

「中国風な日本人橋」「仏壇のあるクリスチャンの家」……

こうしてみると、ぼくの見たベトナムとは、

こんな形容矛盾が成立しうる、あらゆる文化の

「折衷」という大きな流れなのかもしれない。

ホーチミン

1: 中央郵便局 (Bưu Điện Thành Phố)

2(p.11): 統一教会堂 (Hội Trường Thống Nhất)。旧大統領官邸





ホーチミン

3: アンドン市場 (Chợ An Đông)

4: チョロン (Chợ Lớn) 地区の路地

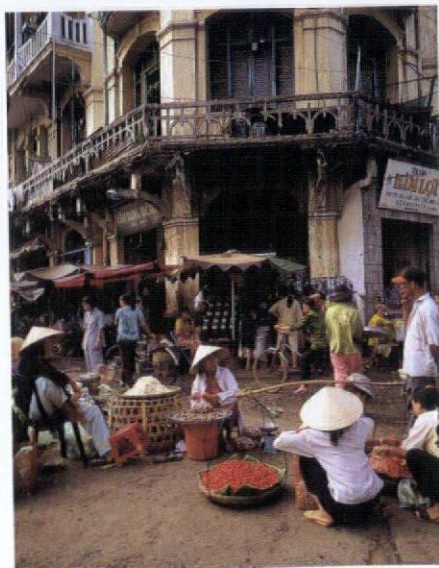
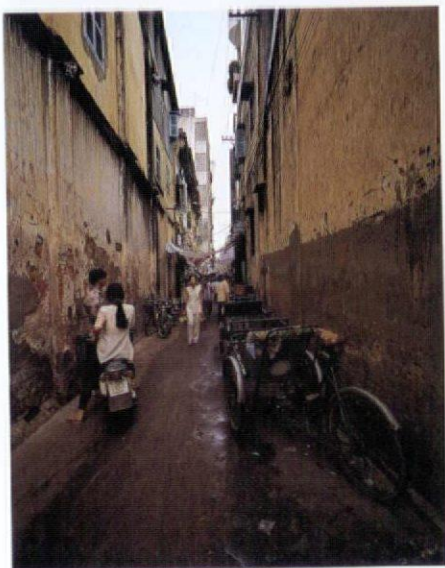
5: ビンタイ市場 (Chợ Bình Tây)

6: チョロン (Chợ Lớn) 地区の路地

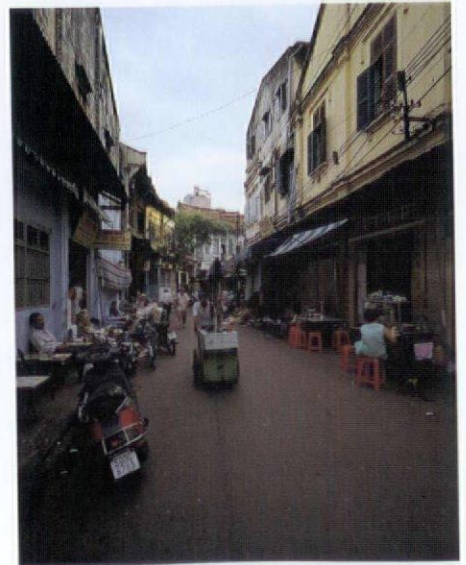
7(p.13): バゴダ／ベトナム仏国寺 (Việt Nam Quốc Tự)



3

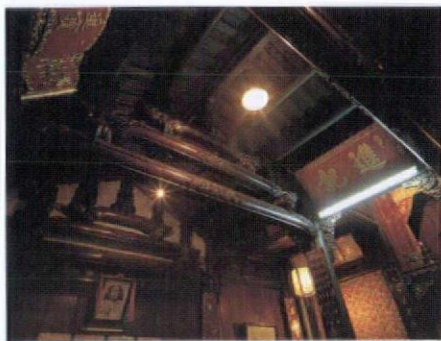


5



6





8



9



10



11

ホイアン

8：伝統的町屋の前家内部。通称タンキーハウス

9：タンキーハウスの中庭。約200年前の建築家屋

10：タンキーハウスの後家。数事場

11：洪水の街並み。毎年洪水の被害を受ける

12(p.16)：グエンチミンカイ通り (Nguyễn Thị Minh Khai) の街並み

SD9603

14

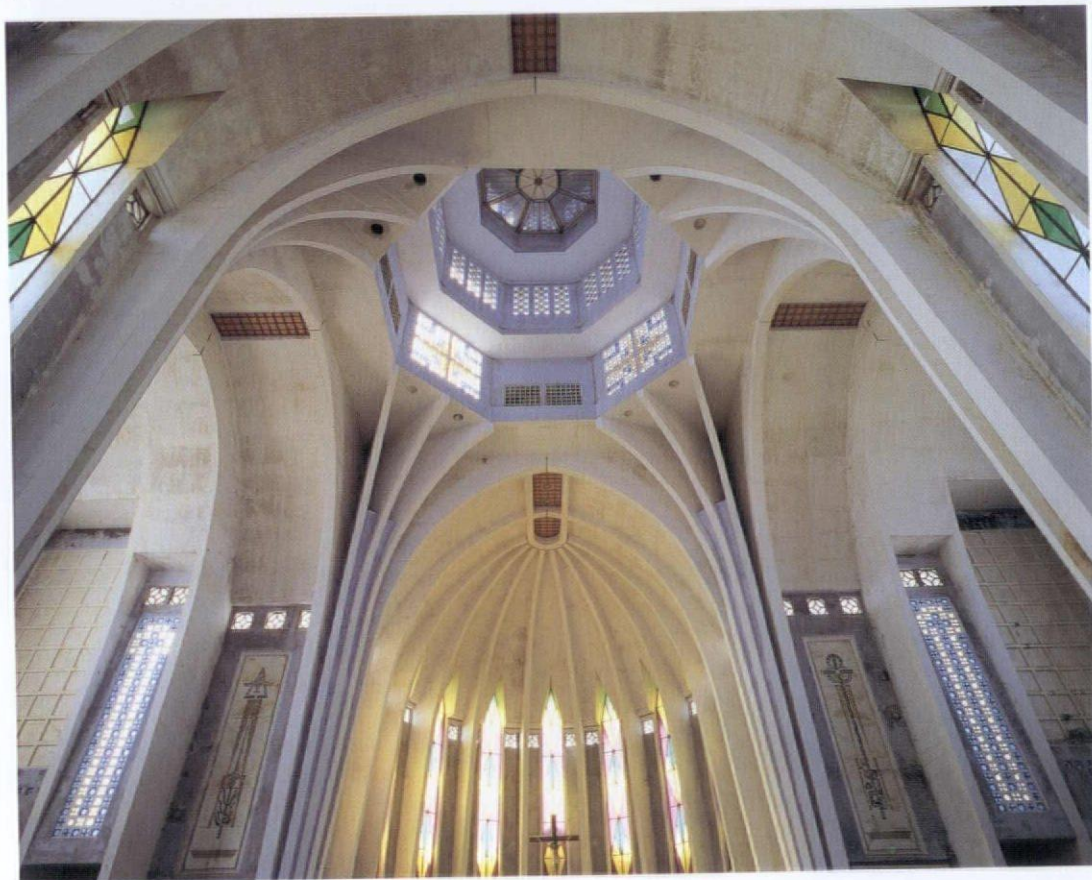








14



15

ミソン

13(p.17)：チャンパ王国の聖地ミソン遺跡。副祠堂から宝物庫の眺め

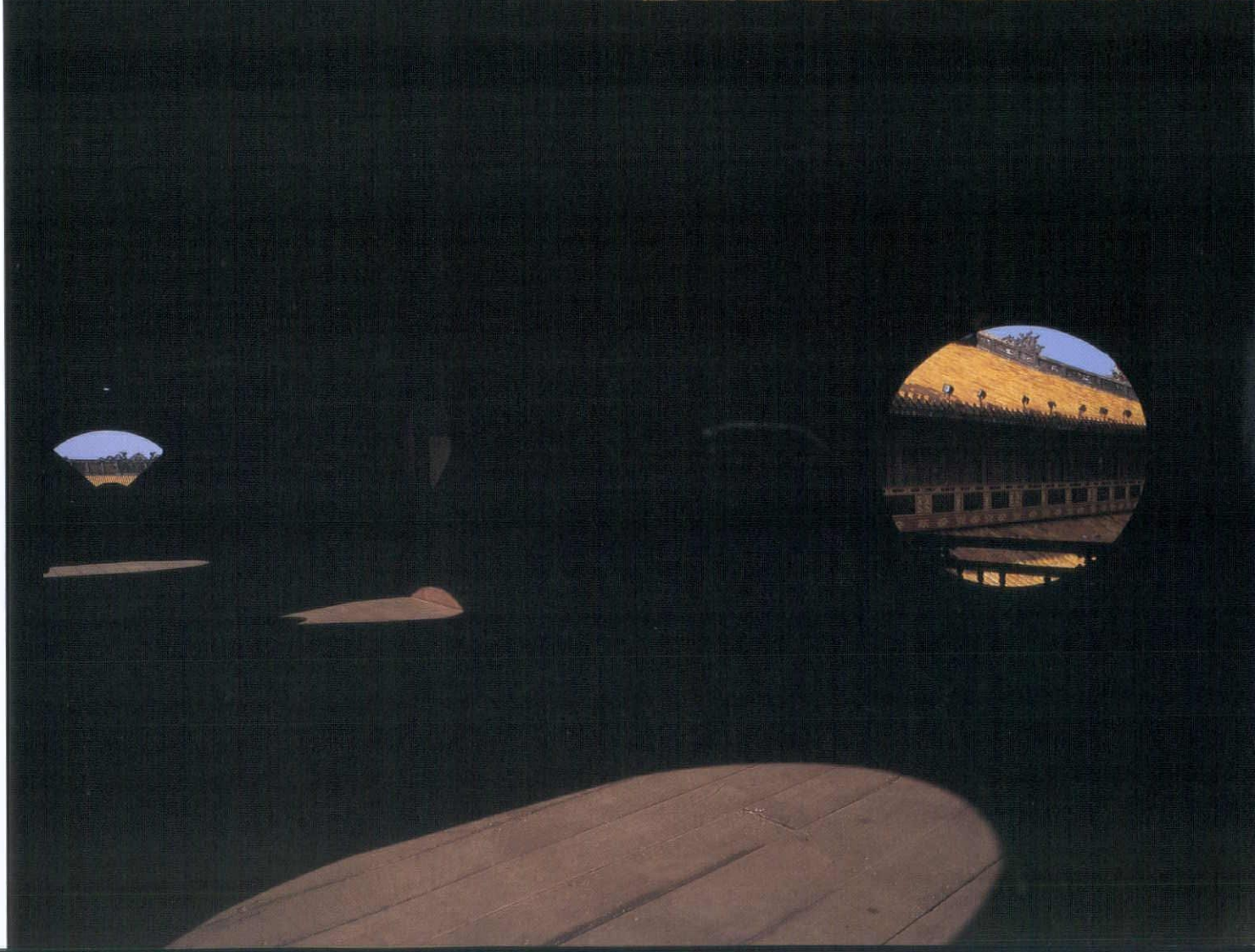
フエ

14：聖マリア救済教会（Dòng Chúa Cứu Thế）

15：教会内部。建築を学んだ神父により設計された

16(p.19上)：グエン朝の王宮の正門（午門）の上部の望楼

17(p.19下)：午門の望楼の内部。正午に太陽が午門の真上にくる



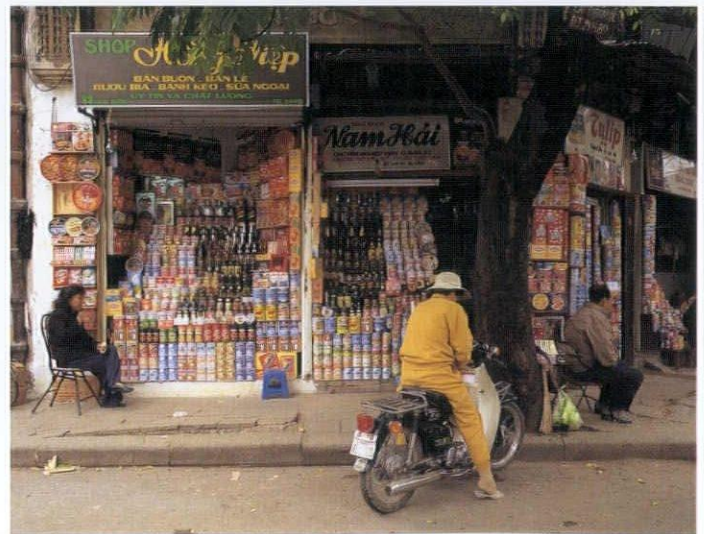


18

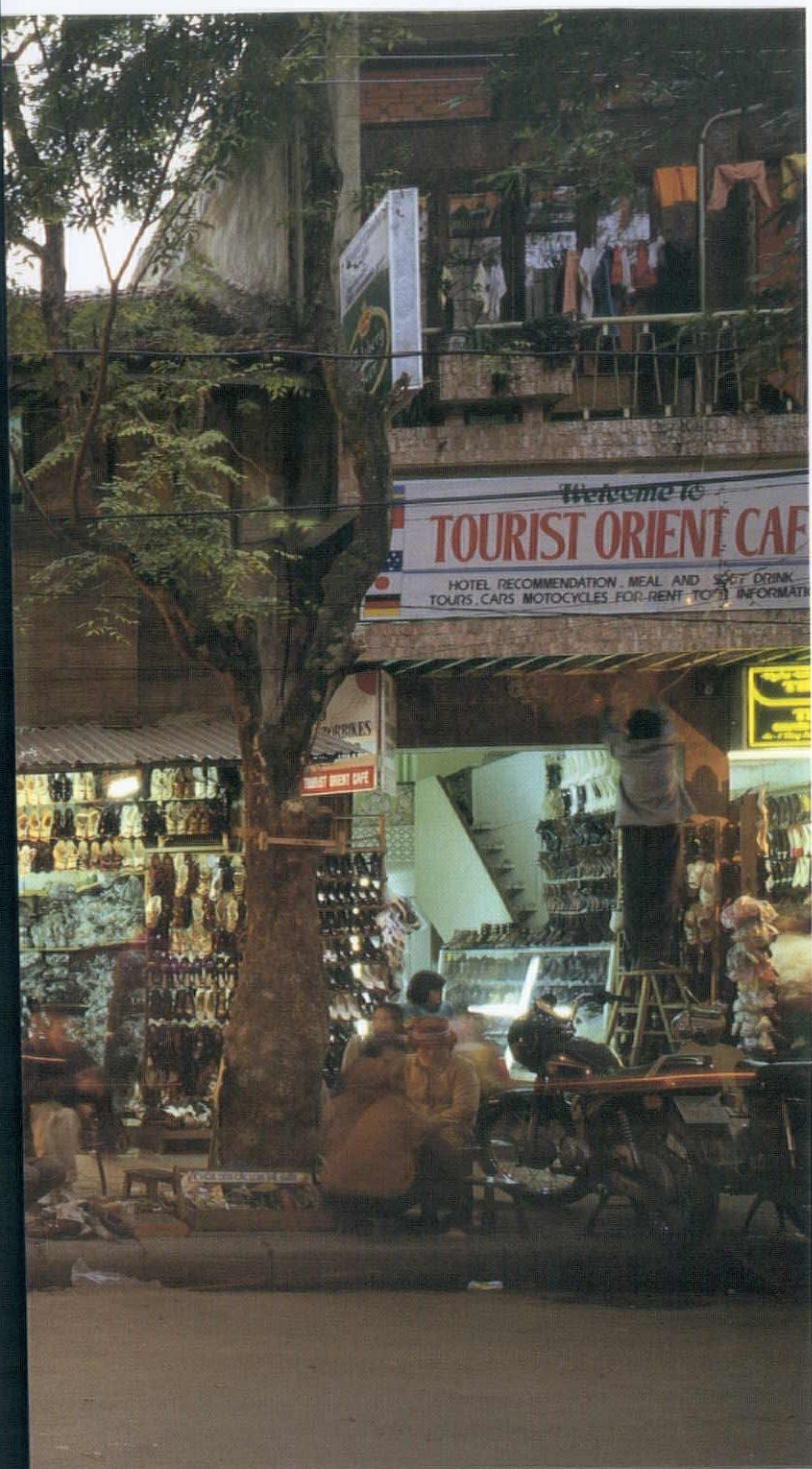


SD9603
20

19



20



ハノイ

- 18: 36通り地区の「くつ屋」通り (Hàng Dâu)
- 19: 36通り地区の「衣料品屋」通り (Hàng Đường)
- 20: 36通り地区の「缶詰食料品屋」通り (Ngõ Gạch)
- 21: 旧市街から少し離れたリタイ通り (Phố Lý Thái Tổ)







22



23



24



25

ハノイ

22：旧市街36通りの街並み

23：旧市街1948年に建てられた邸宅の屋上テラス

24：36通り地区の町屋の中庭

25：屋上テラス邸宅の寝室。一部屋に一家族が暮らす

26(p.24上)：市民劇場（Nhà hát Lớn）の客席。旧オペラ座

27(p.24下)：国立銀行（Nhãn Hàng Nhà Nước）の内部



重枝 豊+中沢信一郎+村松 伸

はじめに

1. 伊東忠太とベトナム建築

日本の建築界で、ベトナムをもっとも早く訪れたのは、建築史家の伊東忠太であったろう。明治45年（1912）1月8日、新橋を發ち、12日長崎を船で出航している。香港を経由し、ハイフォンに到着したのは19日のことであった。伊東忠太のベトナム旅行は、翌2月9日、再びハイフォンを出発し、帰国するまでの22日の短い滞在であった。

この間、伊東忠太は、ハノイ郊外の寺廟の見学、当時フランスにおけるアジア研究のメッカであった極東学院の視察、付属博物館でのスケッチなどにあけくれている。フエやさらに南部への調査旅行は、時間の関係か、残念ながらなされていない。

周知のごとく、伊東忠太は日本最初の建築史家であり、建築家としても著名であった。築地本願寺、明治神宮、兼松講堂など、日本の名建築に叙せられているものも多い。建築史家としては、法隆寺の地位を確定し、そこに見られる柱の胴張りとし、ギリシアのパルテノンのエンタシスとの類似性を「発見」し、伝播のルートを探索するための大旅行にでかけたことでも知られている。

ベトナム——忠太の表現を正確に再現するならば「仏領印度支那」——への渡航は、ユーラシア大陸横断の大旅行から5年ほど隔たっている。ついに、「エンタシスの道」は発見できなかったが、東洋建築史の体系化を目標としていた彼にとって、ベトナム（そして、カンボジア、ラオスも含む）は、実際に見ておかなければならない重要地域のひとつであった。しかも、ここにはフランスのアジア研究のセンター、極東学院が位置している。そこに行けば、アジアについての研究成果がたちどころに手に入るのである。

忠太は、旅行に際して小さな手帳を携えることを習慣としていた。それに見聞したことをこまめに記し、見たものをスケッチとして丹念に描くのである。仏領印度支那の旅行でも、同様に、2冊のフィールド・ノートが作成されている。ハノイの農村の風景、そこに住むひとびと、地図や使われている文字、見たもの、聞いたものが、癖のある文字と着色された絵として、ノートの中に踊っている（図1）。

2. 仏領印度支那建築の特色

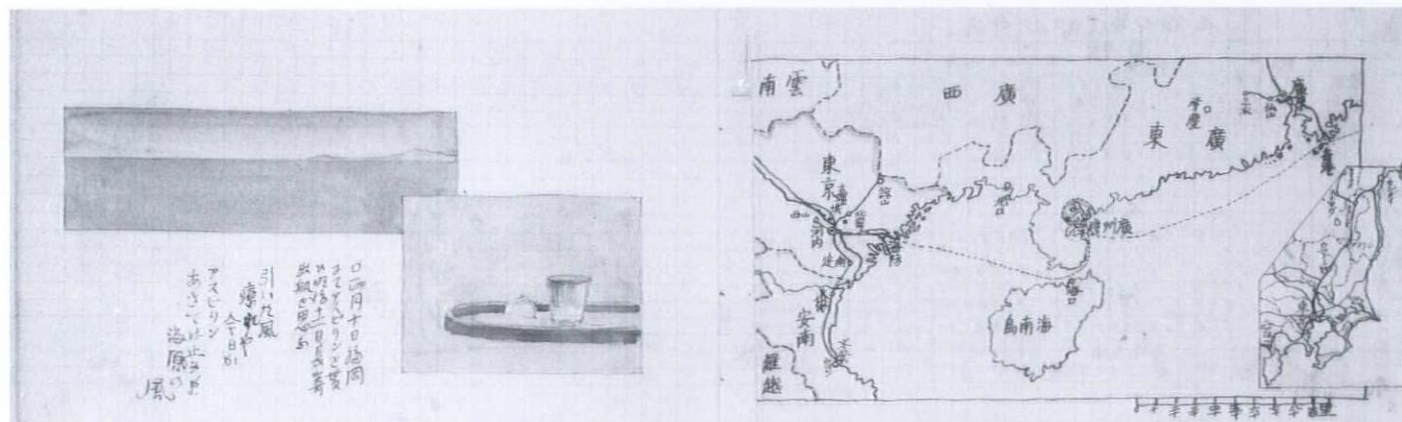
ノートの1冊目の冒頭に仏領印度支那での見学を始める場合に考えなければならない建築史の問題点が、8つほど箇条書きされている（図2）。そこには、フランス植民地の建築についての関心が示されているものの、おおかたは中国建築とインド建築との連関を主題とする。そして、「仏領印度支那建築の特色」も忠太がこの調査旅行で考究せねばならない問いかけのひとつとして掲げられている。

「仏領印度支那」で記された2冊目の忠太のフィールド・ノートの巻末には、20日間の調査で獲得した成果が「調査事項成績」として載せられている。これが、調査の前に提示した「問題点」への解答であったろう。そこには、「仏領印度支那建築」を「東京、安南、交趾、Cambodia、Laos」の5地域に分け、それぞれの建築について観察の結果が記されている。この時、ベトナムという国は存在せず、忠太が挙げた5地域は、それぞれ現在のハノイを中心とするベトナム北部、フエを中心とするベトナム中部、ホーチミンを中心とするベトナム南部、そして、カンボジア、ラオスである。

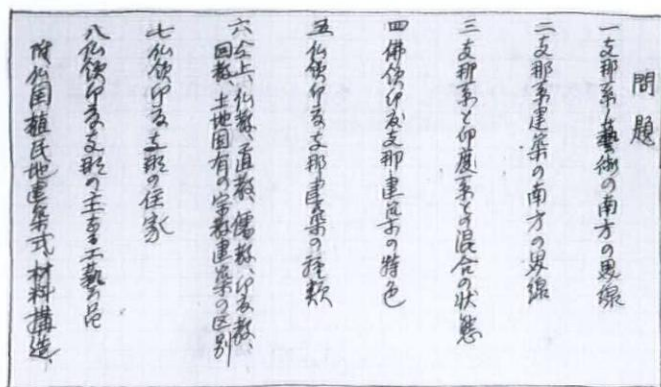
2冊目のフィールド・ノートの最後にある記述は、帰国後の建築学会でなした講演の内容とほぼ同じである。『建築雑誌』のバックナンバーで、忠太が行なった講演は簡単に知ることができ、そこにはフランス領インドシナの5地域の建築の系統が、民族とともに図表化されている（図3）。

東京、安南、交趾支那を「支那系」とし、ラオス（老撾）は「暹羅系」、カンボジア（東南部・真臘）は「印度系」とする。図表には、この他に、当時の地域区分とは、少しずれて「占城」地方を「印度南洋系」としている。すなわち、現在言うところのチャンパである。

忠太の旅行は、ハノイ近郊のみであったから、ノートに書かれたその他の地域の建築の特質は、主にハノイのフランス極東学院での学習の成果だと言ってよい。当時、研究が開始されたばかりのチャンパの建築について言及し、なかなかの勉強ぶりである。だが、結局ここで「仏領印度支那建築の特質」は、提出されていない。地理的な5地域と、歴史的な1地域の建築の特質に解体され、そのモザイクだといのであろう。



1：伊東忠太のスケッチ。日本から香港を通してハノイに向かう旅のルートが描かれている（伊東家所蔵）。



2：伊東忠太は、ハノイの見学を前に、8つの問題点を手帳に書き記している（伊東家所蔵）

系統	支那系	支那系	支那系	暹羅系	印度系	印度南洋系
民族	安南人	安南人	安南人	タイ	クメール	チャム
地方	東京	安南	交趾支那	老撾	真臘 東南塞	占城

3：伊東忠太はその論文「仏領印度支那」で、地域・民族・芸術の系統の関係を結論として述べている



4：伊東忠太は、多くの木造建築を見学し、中国との関係を理解した。図は天福寺（伊東家所蔵）

いま、われわれが問題としているベトナム——東京、安南、交趾支那は、たしかに、忠太の言い方通りすべて「支那系」であるかも知れないものの、これでは何もいっていないに等しい。講演の原案となったノートの「交趾建築」の項には、「今、支那化せり。古えは占城式なり。今、柴棍の建築は支那系にて、detailに南洋臭味（ママ）を加味せり」とあって、チャンパ（占城式）から「支那系」への歴史的変容がしっかりと理解されている。

だが、ここで問題となるのは、仏領印度支那の建築が、簡単にインドや中国の建築というアジアの2大建築に解消されてしまっていることである。すべてが、「支那系」と「印度系」、「南洋系」というレッテル貼りに終始し、それより先に進むことはない。

3. 安南の人と建築

さらに問題なのは、次のような文章に出会うことである。

「かくのごとく（安南の建築は）大体において支那的であるが、ここにまた安南独特の性癖があって、何人もこれを直感するにたかくない。その第一は建築の調子が多くはどこかに尊重さを欠き、引き締まった気分に乏しく、洗練の妙技が示されてをらぬことである。

安南には巍巍堂々たる巨宇はない。国が狭小貧弱のためであろうが、安南人の気迫の乏しいことが第一の原因であろう。堅実剛健の観を呈する建築も稀であり、真摯純朴なる気分の建築も少ない。多くは怪奇にして、浅薄であり、猥雑にして薄弱である。これは恐らく安南人の性質を遺憾なく暴露したものであろうと思う。

安南建築の特質を、ひとびとの性癖と結び付け、「怪奇」、「浅薄」、「猥雑」、「薄弱」などという偏見に溢れた形容詞でひとくくりにして

しまう（図4）。ここでも「支那的」とレッテル貼りをして、あとは思考停止を起こす。同時に「支那的」建築を規範として「安南建築」を一刀両断する。しかし、われわれは忠太の先入観に呪縛されたベトナム建築への視点を笑うことはできない。なぜなら、われわれとて伊東忠太の80年前の「偏見」と同じ位置にいるやも知れないのであるから。

例えば、中国建築を出発点とした研究者は、ベトナムで建物に出会うごとに中国建築との相違を問題とする。フエの宮殿の前では、北京の紫禁城を想起し、その「矮小性」について微笑んでしまう。これと、伊東忠太の「偏見」に満ちた言説とどれほどの差があるのだろうか。それはインド建築を知っているものにとっても同じである。ベトナム建築のあらゆるものが、周辺地域のどこかの国のものと似て、その重流にすぎない、われわれはついそういう歴史観に引き入れられ、そこで判断を停止してしまう。

4. 本論の構成

本特集の「総説」となるはずのこの文章がめざすのは、

- ・ベトナムの建築史とはいかに描かれるのか
- ・ベトナム建築とは一体何か

という、どこの国の建築でも問題となる一連の問いに向けて、現時点での解答を出すことにある。たしかに、建築や都市の面白さは、個別の事実をいかに丁寧に観察するかであり、続いて、そこに存在している空間やデザインの構造を明らかにすることである。この特集を読み進むならば、読者は多様性の中に深く埋没することができるであろう。

しかし、もう一方で、事実は事実として、建物は建物として存在しているのではないということを、常に銘記していなければならない。そこには、数々の事実や建物、遺跡を統御する歴史観が必要とされ、ここで、再び、われわれは伊東忠太にでくわすこととなる。ベトナム史の枠組み自体が、ベトナム建築史同様、いま問い直しの季節にある。ここ10年ほどの歴史学の解体、再構築、周辺諸国史の研究の進展、そして、ベトナム研究への新しい血の参入等の要因が絡み合って、従来のベトナム史は粉碎されようとしている。そのすべてをこの中に盛り込むことは、伊東忠太以来、80年ぶりにやっと書かれるベトナム建築史の側としてはいささか荷が重い。その前にやや図式的であるが、後に建築史を理解するための便宜として、ベトナムの歴史の流れを単純化して頭にたたき込むこととしよう。

ベトナム略史

1. 先史から「北属期」

数十万年前の旧石器時代には、すでに人類が住んでいたが、金属器・稲作文化の発展は紀元前10000年以降に開始される。北部ベトナムの銅鼓に代表されるその金属器文化は、「ドンソン文化」と呼ばれる。同時期、中部（サーフィン文化）や南部でも、別系統の金属器・稲作文化が興り、そして海を通過して、インド文明が組織的に流入する。

西方からインド、そして、東南アジア、中国へと通じるいわゆる「海のシルクロード」は、ベトナムにいくつかの国家形成を促す。北部ベトナムの紅河中流には伝説にいう「文郎王」が出現する。だが、交易権益の掌握を目論む、北方の巨人中国は南に触手を伸ばし、北部ベトナムを併呑してしまう。趙陀が建国した「南越」が漢の武帝に征服されたBC111年からAD905年までの約1000年間、北部ベトナムは中国歴代王朝の領土の最南端であった。ベトナムではこの時期をさして、「北属期」という。

中国の王朝は、前漢から、後漢、六朝、隋、唐へと代わり、初期に

設置された交趾、九真、日南の3郡は、名称を若干変えて存続する。交趾郡はハノイ近郊、日南郡はフエ付近、そして、九真郡はその間の海岸地域をさしている。この時期、ベトナム南部と中部では、インド系の文明から影響を受けた扶南やチャンパが割拠していた。扶南は、現在のメコン・デルタからカンボジア南部、そして、マレー半島におよぶ領域を支配し、2世紀頃から隆盛を誇り、7世紀半ば頃、クメール族の真臘国に滅ぼされるまで存続した。一方、ベトナム中部のサーフィン文化を基盤として、2世紀末、「北属期」の日南郡の南側に自立した国家がチャンパである。中国の史書では「林邑」と呼ばれる(図5)。

4世紀までに、この林邑はそれ以前中国領の南端であった日南郡全域を支配下に置き、「海のシルクロード」を通過する南シナ海地域交易の支配者にのしあがる。「チャンパ」という名称は、7世紀の碑文に使用され、中国史書では9世紀に「環王」、9世紀末から「占城」と名前を代えて登場する。

2. 「大越」の誕生と発展

ベトナム北部は「北属」していたが、中国の王朝勢力が衰えると、北の支配に反抗し、中国との戦いで明け暮れた。唐末や五代十国の動乱期の938年、呉権が広東を領域とする南漢軍の侵攻をくい止め、翌939年、「王」と称した。この時点をもって、一般にはベトナム北部の独立王朝の最初とする。

以後、年表風に記せば、丁朝(966~980年)、前黎朝(980~1009年)、李朝(1010~1225年)、陳朝(1225~1400年)の王朝が交代する。丁、黎朝は、王都を華閩とし、李朝は1010年に現在のハノイに遷都して、昇龍と名付けた。

李朝の1054年、「大越」を名のつたが、陳朝のもとで、ダイナミックに社会が変わったとされる。まずは、紅河デルタでは集約的農業が確立した。ついで、13世紀末のモンゴル軍の侵攻をかわしたことから、自信を強め、自らを「京」族と呼称する。北の中華に対抗した「南の中華」国家へ変貌したのである。

胡朝(1400~1407年)は、明の軍門にくたり、黎朝(1428~1786年)で再び、独立する。南にあるチャンパを攻撃し、朝貢国として強圧的態度で接したのも、「南の中華」意識の現れである。チャンパも負けてばかりいたわけではないのだが、国家体制の強固な黎朝の南進によっ

て、決定的なダメージを受ける。1471年、時のチャンパ王国の中心、ヴィジャヤ以北を占領されてしまった。

南進政策に明け暮れる黎朝は、1527年に武将の莫登庸に篡脱され、32年擁立された傀儡黎朝との間で内戦が始まる。しかし、王朝は弱体で北部(ハノイ付近)は武将鄭氏が政権を支え、中部(フエ、ダナン付近)には阮氏が半独立政権を打ち立てた。南北分裂の時代である。

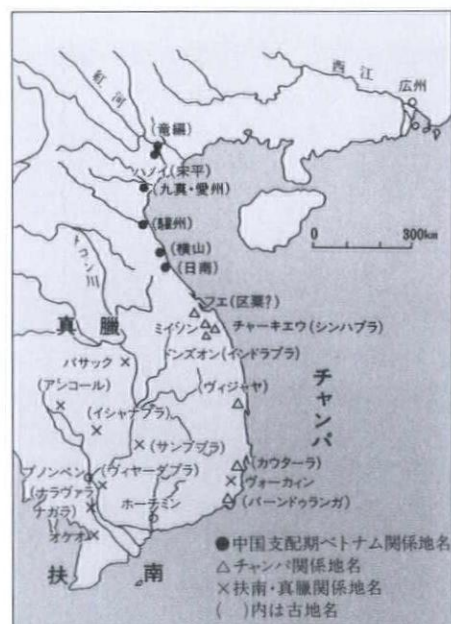
南北の均衡が破れたのは、1771年にヴィジャヤに近い西山で起こった反乱である。北部も中部も混乱し、清軍が加わり、動乱は続く。この動乱を平定し、1802年南北を統一したのがフエの阮氏の末裔の生き残り、すなわち阮朝(1802~1945年)の嘉隆帝であった。

チャンパの勢力が後退し、空白となった南部を埋めたのが、北からの移民だった。阮朝は北部農村の過剰人口を植民として南に送り、明末、中国からの亡命者を利用し、メコンデルタの開拓を進めた。この動きは19世紀半ばまで継続され、現在のベトナムの領土とはほぼ同じとなって止む(図6)。

3. フランス植民地から現代へ

西洋人たち——ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人——のベトナム渡来は16世紀に始まる。とりわけ、フランス人はキリスト教宣教師として、技術者として多数入ってきている。阮王朝の創始者、嘉隆帝を支える勢力の中には、フランス人も入っていた。だが、フランスは次第にベトナムの植民地化をはかり、キリスト教徒の保護を名目として、1858年ベトナムに攻撃を加える。この第一次仏越戦争は、1862年のサイゴン条約で幕を閉じ、以後、ベトナムは転がるように植民地化される。やがて来る1887年のフランス領インドシナ連邦——コーチシナ直轄地(南部)、トンキン保護領(北部)、アンナン保護国(中部)、ラオス保護王国、カンボジア保護王国——の成立をもって、悲惨な近代に突入するのである(図7)。

フランスは、ハノイにインドシナ連邦の首都を置く。フランスは、この連邦の維持のために「ベトナム人中心主義」を採用した。官僚機構の人材としてベトナム人を教育し、連邦内の保護王国ラオスやカンボジアに派遣した。具体的にはベトナム語を漢字からローマ字表記にし、科学の制度をフランス風の教育制度に改めている。この改革は1910年代に効果が現れ、フランス語やローマ字ベトナム語を操る新しいタ



5: 2世紀頃のベトナム地図。北部は中国領、中部はチャンパ、南部は扶南であった。桜井由紀雄編「もっと知りたいベトナム 第2版」、弘文堂、1995年、67頁より



6: 京族は次第に南下していった。坪井善明著「ヴェトナム—「豊かさ」への夜明け」(岩波新書、1994年)、35頁より



7: 仏領インドシナの行政区。古田元夫著「ベトナムの世界史」(東京大学出版会、1995年)、52頁より

イブのベトナム人が出現した。

ベトナムはフランスの植民地ではあったが、1936年、本国フランスにおける左翼の勝利で、ここベトナムでの植民地的抑圧もやや緩和され、インドシナにも共産党の活動が公然と行われた。40年から日本軍の進駐が始まり、日本の敗戦をはさんで、ベトナムは戦争に明け暮れなければならなかった。フランスとの戦い(1946年頃)、南北の分断(1954年)、アメリカの本格的介入(1965年)と、戦争が続いた。

1975年、サイゴンが解放され、翌年にはベトナム社会主義共和国が成立する。だが、ベトナムは今度は攻める側にまわる、78年のカンボジアへの侵攻は約10年続き、79年には中越戦争が始まった。ただ、NIESやアセアン、そして、中国の経済的繁栄を周りに見て、ベトナムも市場経済へと突入していく。86年には「ドイモイ」を提唱し、91年には中国とも関係を正常化する。

1994年、アメリカはベトナムへの経済封鎖を解除し、ベトナムのアセアン加盟も議題にのぼった。ホーチミンはもとより、ハノイでも、ほんの5年前とは違った光景が繰り広げられるようになったのである。いま、ベトナムは「政治」の季節から、「経済」の季節へと移行してきている。

ベトナム建築史への道

建築の歴史は、当然、一般史とは違う。まして、80年ぶりに再開された日本のベトナム建築史の研究界に、新たな視点でしかも詳細に通史を描くほどの蓄積はない。ここでは、6つの視点、

- ・「大越建築文化」という視点
- ・「中華モデル」の建築
- ・華僑と建築
- ・チャンパの建築
- ・植民地建築
- ・近代化の向こう側

について述べ、ベトナム建築史を考える上での問題提起としたい。

1. 「大越建築文化」という視点

ベトナムは常に北側の中国とともにあった。このことは3つの点をさして言っている。ひとつは、中国の領土の一部であったこと。ふたつ目は、中国の王朝を文明のモデルとしてとらえていたこと。3つ目は、華僑による北からの人の往来が多かったこと、である。そして、それぞれがベトナムの都市と建築の性格を形作っていく。伊東忠太のように「支那的」とひとことで済ませるのではなく、中国建築との関係をとこのように3分類することは、重要である。

まずは、中国の南に近接するという環境がベトナムの都市、建築の

基層を形作った。城郭を巡らし、なかに宮殿を作る都城の制にはじまって、梁と柱の間に斗拱を介在させて接合するという中国建築文化圏の木造建築技法、風水という大地を読み、都市や墓、住宅を建設する思想が、ベトナム建築に深く根を張っている。では、ベトナム建築は中国建築の亜流なのか。

これは、ふたつの点で間違っている。第1に、「中国建築」として一点に集約される理想の建築像が存在するわけではないからだ。唐代の長安の建築と山西省の元代の建築、あるいは北京の明代の建築と、時代と地域によって大いなる格差が存在している。われわれは、それらすべてをあわせて漠然と「中国建築」と呼んでいるにすぎない。

ベトナムの木造建築に見られる様々な個性は、そんな中国を巨視的に見た時の地域的特徴と似ている。ハノイの近隣のどの村にも「亭」と呼ばれる村の集会場が建つ。大きな屋根と短く太い柱で構成される空間をいくつもいくつも見ていくと、ここに中国のどの地域とも異なる建築美学が存在していることが判ってくる(図8)。

もう少し詳細に述べるならば、本特集の項「ベトナムの木造建築」(p.148)で論じられているように、ベトナムの木造建築の特色は、斗拱が斗拱としての役割を果たしていないことである。その結果、登り梁を巧みに使うという別の特色が生み出され、亭の独特な空間が誕生する。あるいは、ふたつの棟を並列させる連棟式もハノイばかりでなく、フエの宮殿に多く見られる特色である。中国の広州を中心とした華南地域の建築にみられる、過剰な装飾性や構造形態と類似のものがここにも見られ、その近親性が感じられる。

「亜流」というのは、主流に対する言葉である。中国建築が「華北建築文化」や「山西建築文化」、「華南建築文化」などに解体され、主流が存在しないとすれば、ベトナム建築も、ルーツを同じくして容容し、それらと併存する「中国系」の地域建築体系のひとつである。これが、ベトナム建築は中国建築の亜流だという命題の間違いの第2点。そこで、11世紀に「大越」と自称したことにちなみ、これを「大越建築文化」と命名したい(図9)。

もっとも、現存するベトナムの木造建築の遺構は、17世紀あたりまでしかさかのぼれず、現在の時点でその総体を明らかにすることはできない。まして、「北属期」の建築文化は何も判っていないし、現在、ハノイ近郊で見られる「大越建築文化」は、むしろ、次に述べる「中華建築モデル」の移入かもしれない。

いずれにしても、この早くから始まり、ずっと継続する中国との密接な関係から生み出された建築文化は、ベトナム北部建築の基層をなし、自立した建築体系として捉えてもよいであろう。そして、「大越建築文化」の地域的まとまりや、その変異の理由を探り出すことは、ひいては大文字の「中国建築」の幻想性を打ち砕く契機になるであろう。

2. 「中華モデル」の建築

しかし、ベトナムは一方で、「北の中華」を国家のモデルとして、文明のモデルとして、高く仰いだ。ベトナム略史で述べたように、13世紀の元寇をかわしたことから自信をつけると、かえってこのモデル志向が高まっていく。さらに、1802年に建国の阮朝は、自らを「南の中華」とみなし、国号も「大南」と号した。そこでは、中国に倣って、周辺諸国に朝貢を強いている。都市や建築においても阮は清朝の方法を「制度」として学習した。これこそ、「中華建築」のモデル化の極限と言ってもよい。

比喩的に言えば、中国の南に近接していたことが建築や都市の血となり、肉となって、「身体」を作り上げたとするならば、南の中華体制は、イデオロギーとして、この国の都市・建築に覆いかぶさっている。それは、阮朝の都となったフエの都城や宮殿を見れば、たちどころに、



8: 天福寺。「大越式」のひとつ



9：北部ベトナムの木造建築文化の基層には、中国と関連のある「大越建築」が横たわっている。筆者作成

ここでいう「イデオロギー」の何たるかが判明するであろう。

清朝の都城や宮殿を統御していた文法は、「礼」と「文」である。「礼」は、秩序を具現化する技術、フエで言えば、朝貢体制の中心、もっと言えば、世界の中心、すなわち「中華」を、都城、宮殿全体で表現する。方形の都城の形態、中央に位置する紫禁城や太和殿の名称と外貌、太廟等の配置、都城の南に置かれた天を祀る南郊壇等々、すべてが「中華」であることの表象装置である。

「文」は、それによって文明の正統性を示す。宮殿に掲げられた扁額（へんがく）の文字、柱に懸かる対聯（たいれん）の内容は、いずれも中国の典籍のなかから採りだされた佳句である。フエ宮殿の背後には園林（えんりん）が広がり、そこにも中国古典の詩文から拾われた風景がパノラマのように展開する。

中国の南側からこぼれ落ちてきてベトナム建築の基層となった技術は、大工職人たちの「手」の中にゆっくりと刻みこまれ、そこで成長をとげた。だが、この「南の中華」を表現する建築文法は、大工職人の手にあるのではない。北京を訪れた朝貢使節の帰朝報告と礼制に通曉したベトナム文人の頭の中にあった。したがって、フエに並び建つ阮朝の宮殿建築は、構造的には基層の「大越建築文化」を踏襲し、その上に、北京からやってきた「中華モデル」の様式が被さっている。（図10）

3. ネットワークとしての華僑建築

中国建築との寄り添い方の第3は、華僑たちによって直接たずさえら



10：フエ、紫禁城午門は、北京紫禁城の午門をモデルとしている



11：華僑たちの進出によってベトナムのあちこちにチャイナ・タウンが出現した。写真は、フエの広肇会館

れてくるものであった。中国の南下政策の目的は、単なる領土拡張ではない。南方、さらにその彼方から運ばれてくる珍品、奢侈の品々を拠点ごとに確保することであった。「海のシルクロード」を通して中国商人たちは南下し、そして、拠点を築いた。そればかりではない。中国からの亡命者や移民は、絶えずあったはずである。明朝滅亡期に、現在のダナンに到達した3千人の明の遺臣たちは、メコン・デルタに入植させられている。

本特集でも紹介されるホイアンやハノイ、そして、フエ、ホーチミンにも、華僑たちの居住地があった。そこには必ず、出身地別の複合施設、「会館」がおかれた。福建会館、広東会館など、現在でもいくつか残るその施設は、現在でいえば、ホテルであり、クラブであり、劇場であり、宗教施設であった（図11）。

ホイアンやハノイのチャイナ・タウンに密集する都市住宅の起源も、華僑たち、それもととりわけ中国南部のひとびとが携えてきたものに違いない。短冊状の敷地、中庭の存在、いずれも、南中国に広がる華僑たちの出身地の民居と類似している。体系的理解は今後の実証的で緻密な研究を待たなければならないが、おそらく、これらの会館、町屋は中国人大工が介在したものであろう。

4. チャンパの都市と建築

チャンパ国に建てられた多くのもののうち、中国の史書や遺跡からわかるのは、都市と宗教施設である。遺跡の分布や現況は、本特集「チャンパ遺跡」（p.95～109）の項に詳しく、ここでは、簡単に都市と宗教施設の特徴を述べておく。例えばチャンパの都市は、どれも自然の地形を巧みに利用する。山々を防御とし、河川を交易に用いるのである。

機能的に言えば、政治型都市と港湾都市のふたつのタイプに分類できる。特にミソンやボー・ナガルのように宗教都市が誕生する場合もある。が、10世紀以降はチャバン（クニオン市から北へ26km）のごとく、防御のために宗教施設を周囲に配置し、宗教都市が独立しない。都市には城壁が巡らされ、濠が掘られるのが通常である。

ヒンドゥーの神々を祀る宗教施設は、「カラン」といわれる祠堂を主とする。周壁、楼門、宝物庫などの付属施設とともに伽藍（がらん）を設けるのは10世紀以降である。また、初期のものはことごとく木造で、現在に残っていない。

祠堂やそれを中心とした伽藍は、明らかにヒンドゥー教の宇宙観を具現化したものである。方形台状の基壇、角筒が突き出た軀体部、3層段台ピラミッド状の屋根の3部にわけるのは、宇宙を3相とみなすヒンドゥー教思想の表象化である。

チャンパは、中部ジャワのボロブドゥール遺跡（8世紀後半から9世紀初期）、カンボジアのアンコール・ワット遺跡（12世紀後半）、ビルマのバガン遺跡（11世紀から12世紀）と比べて、遺構の残り具合や

数では見劣りするものの、ほぼ、同じ時期に、「インド系」の建築や都市文化が東南アジア一帯で開花していたことがわかる。

現状では、個々の遺跡の調査や研究に学者たちは労力を割き、緻密な個性の探究が先行している。だが、少なくとも、ここでも、伊東忠太がしたように、「印度系」というひとつの理想的建築像へと解消してしまわないほうがよい。いくつかの建築体系の「属」がネットワーク状に結びつく状況を想定することはできるはずだ。

北部ベトナムに成立した独立王朝の「南進」が、ベトナム史のひとつの幹をつくっているとはすでに述べた。建築や都市について、この京族の「南進」が何をもたらしたかははっきりしない。ただ、移民たちや中国人たちは自らの住居や集落形態を携えて南下したであろうし、地方政府の官衙、例えば、サイゴンの基礎となった嘉定城などにも北の「大越建築」や「中華モデル」の建築手法が入ったと推測できる。

一方、「南進」はチャンパにとって征服されることを意味していた。現在、チャンパはベトナム国内の中部や南部に追いやられ、少数民族として98000人が住んでいる。北からきた京族が都市に住むのと異なると、農村に自らの集落を作ってひっそりと住まう。ベトナムを北から南へと辿ってその建築や都市、集落、民家を見ていくと、きわめて感覚的に言うことが許されるならば、その雰囲気はどこかでがらっと変わってしまう。

それが果して、「大越」的であった北部とチャム王国の影響下の南部との差異なのかははっきりしない。南部は、チャムやクメールなどの少数民族の住居や建築文化という大海に、京族の建築文化が小島のように浮かび、そして、その差異の影響が現在の都市や建築にまでおよんでいると考えるのは、空想的すぎるのであろうか。

5. 植民地建築

1880年、フランスのハノイ駐在領事はハノイの城砦がフランス人によって、洋風技術で整備されたことを報告している。サイゴンやフエの城郭も、日本の五稜郭のような恰好で建造されている。最初にベトナムに流入したフランス建築は、教会と居留地建築、そして城郭建築であった。1873年以降に、紅河河岸に設置されたハノイの租借地や現在でも見られるハノイ大聖堂がその具体例である。

が、1887年にインドシナ連邦が成立すると、トンキン、アンナン、コーチシナは徹底的に改造された。1945年まで続くこのフランス植民地期の都市や建築を、われわれは、

- ・フランス建築の歴史として
- ・アジアの植民地建築史として
- ・ベトナムの内的建築史として

の3つの角度から見ることがあるだろう。

第1のフランス建築史から見る見方は、いわゆるオーソドックスな西洋建築史や都市史の一支脈に、フランス人たちによってベトナムに建てられたこれらの建設物を位置づけることである。本特集のハノイの項、大田論文(p.44~45)にあるように、インドシナ連邦の成立を契機に、都市はバロック的に改造され、そこに建つ建物もフランス風の新古典主義に彩られていく。

ハノイの近代建築調査は、ほぼ悉皆的に行なわれたが、そこで得られた1200棟あまりの建物を見つめていくと、大方、フランスでの建築の様態が何年か遅れて入ってくるのがわかるのである。都市計画で言っても、1924年の「ハノイ市整備・拡張計画」、1943年の機能的な「大ハノイ計画」と、フランスの都市史の順序を守りつつ、移り変わっていく。

だが、ここは何と言っても植民地であったから、フランスの他の植民地やアジアにおけるイギリス、ドイツ、ロシア、日本の植民地建築・

都市と比較する眼が導入されなければならない。これが植民地建築をとらえる第2の見方である。都市ハノイやホーチミンは、他の帝国主義の植民地都市と常に比べられる運命にあったし、被植民者に支配の威厳を視覚的に明示する重要な装置であったのだ(図12)。

この見方で重要なのは、現地への「同化」の手法である。ベトナムは気候で言っても、フランス本国とは大きな隔りがある。本国の公共建築や住宅をそのままこの地に持ってきて、不快な状況が発生する。微や暑さである。それを解決するために、例えば、初期はイギリス植民地から持ってきたペランダ植民地様式が使われ、ついで、通風を重視したスタイルが生まれる。

ベトナムの植民地時代の建築史でもっとも重要な建築家は、エルネスト・エブラールである。1920年代半ばから彼が創り上げた「インドシナ様式」は、ベトナムの「伝統」を身にまとわせるものであったが、それは決して、ベトナム人のために考えられたものではない。植民地政策を円滑に執り行うために現地のベトナム人への妥協と自らを植民地の理解者とする偽善が入り交じっている(図13)。

それでも、この期間がベトナム人自身にとってまったく影響を与えなかったわけではない。例えば、ハノイの36通りに建つ短冊状プランの町家も、実はフランス植民地時代に発達した可能性が高い。また、成り金ベトナム人たち(もしくは、華僑たち)は、フランス人のヴィラ住宅を模倣して、しかも、ベトナム風のディテールで飾りつけている。

1925年、インドシナ・ボザール学院が創設され、建築教育が開始された。インドシナ連邦における建築が、フランス人建築家のみではまかないきれず、ベトナム人の中級技術者養成を目論んだのである。しかし、それによって、毎年5人を越えぬ生徒数であったが、ベトナム人建築がここに誕生したのである。卒業生の何人かは、事務所を開設し、そして、金持ちベトナム人の住宅を設計した。独立以後の建築事業も、彼らが主となって担うことになる。皮肉なことに、植民地時代が戦後のベトナム建築を生み出したのだ。

6. 近代化の向こう側

1945年以降のベトナム現代建築は、米ソ対立に翻弄された。南ベトナムには、アメリカ風モダニズムの白い箱が立ち並び、北ベトナムには、ソ連派遣の建築家による社会主義リアリズムやその進化スタイルが導入される。ハノイ市内に70年代以前に建てられた公共住宅も、社会主義ソ連の手法を踏襲している。

75年にベトナム社会主義共和国が成立すると、ソ連直輸入の建築スタイルや技術は、かつての南ベトナムへも入っていく。南ベトナムは、市場経済国家であったから、その間建物の更新が盛んに行われたが、一方の北側は植民地時代のストックをそのままの形で使用した。ホーチミンより、ハノイに植民地建築がより多く残るのはそれによる。

90年代、ベトナムが孤立から、開放へと政策を転換した時、建築のモデルは、ソ連から再び、資本主義のそれへと大転換をとげる。アメリカや日本の「現代建築」が西側の建築雑誌を媒介としてどっと流入するのである。その中には、古い町並みの保存や、植民地建築への再評価といった建築観も含まれる。大学の学者たちは、そんな世界建築の情報や最先端の建築保存について驚くほどよく知っている。

だが、一方で、なし崩しの変革はもっと急激である。フランス風植民地建築のノスタルジーに溢れたハノイの町並みの中に、ガラス張りのモダンなオフィス・ビルが出現する。外国人目当てに作られる「ミニ・ホテル」の実態は、本特集にも語られている。そんなラブ・ホテルに似た装飾過剰のペンシル・ビルがハノイの町を埋め尽くそうとしている(図14)。



12: ハノイのオペラ・ハウス



13: ハノイ歴史博物館



14: ホー・タイ付近の外国人用邸宅

海外にいる親戚からの仕送りや、社会主義で国外に逃亡した華僑資本の帰還やらで、ハノイやホーチミンにはミニ・バブルが訪れている。そこでつくられるミニ・ホテルや成り金たちの邸宅は、近隣諸国のタイやシンガポール、香港のそれと驚くほどよく似ている。

「アセアン式現代建築」とでも命名できるそのスタイルは、何やら、近世ベトナムの「華僑式建築」と似ていないこともない。現在、ベトナムの建築はわれわれから見れば、混沌の極致にある。一体、いかなるビジョンをもって、どちらに行くのか、まったく掴むことはできない。外側からの観察者はただ傍観する他はないのである。

ベトナム建築史とその「特質」

ベトナムという国民国家ができたのは、ほんの最近のことである。80年前の伊東忠太が、「ベトナム建築史」ではなく、「安南建築史」や「チャン建築史」を書いたのも、当たり前であった。ベトナム人として初めて『ベトナム建築史』を著したグォー・フィ・クインは、植民地時代のインドシナ高等芸術学院に学んだ建築家であったが、彼がベトナム建築史研究を始めた理由は、大学時代、教えられたのが中国建築史だったからだという。以後、発奮して、休みにはスケッチ旅行にでかけ、民家や古建築を描き、やがて、それがベトナム建築史へと結実していく。

現在、ベトナムで刊行されているもっとも良い建築史書は、グー・タム・ラン『古代ベトナム建築史』（建築出版社、1991年）である。著者のグー氏は、50年代末から60年代初頭にかけて中国北京の清華大学で建築を学んだ。彼の描く建築史が、中国の建築史の叙述とよく似ているのは、そんな関係である。そして、さらにソ連の社会主義の建築史の書き方にオリジナルを求めることができるのかも知れない。

最初に、建築を生み出した背景とその流れを述べ、そして、城郭、宮殿、宗教建築、民家、園林と、建築類型に沿って、具体例を示す。構造や材料、生産、装飾についても、別に項目を建て、最後に、ベトナム建築の「特質」に言及して、次のように言う。

- 1: ベトナム古代建築は、民族的特徴と地方性を有する独特なものである。
- 2: 建築的風格は、簡潔で、謙虚、軽巧、明朗であって、ベトナムの民族性や習慣、そして、熱帯気候に合致する。
- 3: 地形や自然の風景にうまく溶け込んでいる。
- 4: 配置は対称を尊び、リズムがあり、比例がよい。
- 5: 色彩や装飾は美しく、民間の芸術をよく取り込んでいる。
- 6: 地域の建材を巧く利用し、構造は強固であり、また、科学性に富んでいる。

ここに述べられた内容を見て、われわれは伊東忠太が安南建築に浴びせかけた「怪奇」、「浅薄」、「猥雑」、「薄弱」という偏頗な罵声を思い出

す。グー・タム・ランは、それに対して、ベトナム建築を「簡潔で、謙虚、軽巧、明朗」と美辞麗句で表現するが、実は伊東忠太とグー・タム・ランは、同じことを正反対の角度から述べているに過ぎない。前者は中国建築中心主義、後者はベトナム建築中心主義、だが、いずれにしても、不毛な議論に陥っている。

それに対して、われわれが提出できるベトナム建築の「特質」は、次のようなことであろう。北部ベトナムの木造建築文化、中南部のチャンパの建築文化、そして、植民地時代の建築文化、戦後から現在にかけての建築文化、いずれにも3つの変容のシステムが存在している。

- ・モデル化による変容
- ・土着的変容
- ・直輸入的変容

北部ベトナムの木造建築の例は判りやすい。だが、それはそれ以後の状況でも当てはまる。文明の辺境に位置した民族の建築史は、おおよそこれに当てはまる。日本の建築史としてそれは変わることはない。ベトナムという一国のなかで、建築史を捉えることから出現したのが、グー・タム・ランの自画自賛である。一方、地域に広げながら、日本や中国の建築を基準とする大アジア的意識が伊東忠太の頑迷さを醸成している。

ベトナム建築をもう少し広い視野のなかに置き、しかも、中心をどこかに固定するのではなく、移動させつつ見る見方をわれわれは鍛える必要がある。日本でも、そして、ベトナムでも、ベトナムの建築や都市についての研究は、緒についたばかりである。本論も、そして、この特集全体も、ベトナム建築の集大成でなく、ここからすべて始まるというスタート・ポイントなのである。

- しげえだ・ゆたか／建築史、日本大学理工学部建築学科研究員
- なかざわ・しんいちろう／建築史、早稲田大学アジア建築研究室
- むらまつ・しん／アジア建築史、東京大学生産技術研究所助手

参考文献

- ・伊東忠太著、「仏領印度支那」『伊東忠太建築文獻——東洋建築の研究（下）』、龍吟堂、1937年
- ・菊地一雅著「インドシナ少数民族社会誌」、大明堂、1989年
- ・重枝豊著「アンコール・ワットの魅力」、彰国社、1944年
- ・斯波義信著「華僑」岩波新書、1995年
- ・千原大五郎著「東南アジアのヒンドゥー・仏教建築」、鹿島出版会、1982年
- ・坪井善明著「近代ヴェトナム政治社会史」、東京大学出版会、1991年
- ・坪井善明著「ヴェトナム—「豊かさ」への夜明け」、岩波新書、1994年
- ・坪井善明編「アジア読本ヴェトナム」、河出書房新社、1993年
- ・古田元夫著「ベトナムの世界史」、東京大学出版会、1995年
- ・桃木至郎著「ベトナムの「中国化」」「変わる東南アジア史像」池端雪浦編、山川出版社、1994年
- ・桃木至郎・高田洋子・桜井由躬雄著、桜井由躬雄編「ベトナムができるまで」『もっと知りたいベトナム／第2版』、弘文堂、1995
- ・山本達郎編「ベトナム中国関係史」、山川出版社、1975年

ベトナム史年表

作表=大田省一

ハノイを中心とする北部	フエを中心とする中部	ホーチミンを中心とする南部
BC10000 ドンソン文化	BC2000 サーフィン文化	
—— 北属期 —— BC111 南越が漢に征服される 639 安南都護府がハノイに設置される	—— チャンパ王国 —— 2世紀 チャンバが南シナ海交易を支配 1000 ヴィジャヤ遷都 12世紀 アンコール王朝との抗争 1471 ヴィジャヤが陥落 16世紀 ホイアンが栄える	—— 扶南 —— 2世紀 扶南の隆盛 2世紀 チャンパ建国 7世紀 真臘が扶南を滅ぼす 802 アンコール朝の創建 12世紀 アンコール王朝の隆盛 16世紀 カンボジア王国成立
—— 初期王朝 —— 939 中国からの独立、呉朝成立 966 丁朝成立 980 前黎朝成立		
—— 李朝 —— 1010 李朝成立 昇龍遷都		
—— 陳朝 —— 1225 陳朝成立 1258～88 元の侵攻 1407～27 明による占領		
—— 黎朝 —— 1428 黎朝成立 1527 莫登庸の帝位篡奪 1532 黎朝の復興	1471 ヴィジャヤが陥落 16世紀 ホイアンが栄える	16世紀 カンボジア王国成立
—— 南北分裂 —— 17世紀 鄭氏が実権を掌握	—— 南北分裂 —— 17世紀 阮氏の半独立政権 1771 西山党の乱	17世紀 明朝の遺臣によるメコンデルタの開墾
1805 ハノイ城修築 1873 フランスがハノイを攻撃 1875 ハノイに租借地が置かれる —— 仏領インドシナ —— 1887 仏領インドシナ連邦成立 1921 総督府に都市計画委員会設立 1924 ハノイ市整備・拡張計画 1925 エコール・デ・ボザール・インドシナ設立 1930 ベトナム共産党結成 1940 日本軍仏印進駐 1943 大ハノイ計画	—— 阮朝 —— 1802 阮朝の創立 フエに遷都 1858 フランスがダナンを砲撃 1883 フエ陥落、保護国となる	1698 サイゴンがベトナムの勢力下になる 1790 嘉定城築城 1861 サイゴンの開拓計画 1862 コーチシナがフランスに割譲
—— 北ベトナム —— 1945 ベトナム民主共和国独立宣言 1946 対仏第一次インドシナ戦争勃発 1954 ジュネーブ協定による南北分断 1976 南北統一、ベトナム社会主義共和国となる 1986 ドイモイ政策採用、経済開放へ 1995 ASEAN 加盟	1945 阮朝崩壊	—— 南ベトナム —— 1949 ベトナム国樹立 1955 ベトナム共和国成立 1965 アメリカのベトナム戦争介入 1975 サイゴン陥落



ホーチミン廟、1975年

ベトナムの都市と建築 1

ハノイ

Hà Nội

東京大学生産技術研究所
藤森研究室
+
東京大学工学部都市工学科
西村研究室

村松 伸

1. ハノイ・ハノイ・ハノイ

初めてハノイに行ったのは、4年ほど前のことだったと思う。30代の最後の夏8月、焼けつくような暑さと100%の湿度の連続であった。カメラと地図を片手に、街を歩き続けた。汗がしたたり落ち、携えているミネラル・ウォーターが喉の渇きを癒してくれる。

よりによってそんな季節に、というかも知れない。だが、発汗作用は健康にとって決して悪いことではない。新陳代謝を促進し、溜まっていた疲労やストレスをすべて体外に押し流してくれる。一日の見学が終わるとホテルに帰り、クーラーの効いた部屋で冷たいビールを飲む時、バス・タブに入浴剤を入れてゆったりとひとときを過ごす時、大げさに聞こえるかもしれないが悦楽を感じる。

心地良いのは、身体だけではない。街自体にも、もちろんぼくは魅惑された。町中にフランス植民地時代の建物がそのままの姿で残る。いささか煤けてはいるものの、60年前のハノイとほとんど差異はない。「36通り」と呼ばれる伝統的街区には、古そうな町家が所狭しと立ち並んでいる。東南アジアのどこの町にもあるような、活気ある雑踏——湧き出てくるような群衆、溢れかえる店先の品々、オートバイやシクロの騒音——がそこに満ちている。

ハノイにいるひとにも、ぼくは感銘した。ひととなつこい古本屋のおばさん、一生懸命行き先を探してくれるシクロの若い運転手、私設秘書のように世話をしてくれたホテルのフロントの青年、日本料理屋の可愛らしいウェイトレス、それぞれの顔が、記憶のなかに長く留まっている。道路際にある小さな仮設のレストランで食べるベトナム風タンメンの味も忘れることはできない。

都市ハノイをもう少し深く、全体的に理解したい。そう考え、ぼくたちは調査を始めた。だが、その根底にあったのは、ハノイという

街に対する「愛」である。研究調査などと言うのは、端から見るとしかめっ面した、がちがちの「アカデミズム」の心から生まれてくるように想像されるが、そうではない。対象に対するきわめて人間的な好き嫌いが、研究の深度や継続性を左右する。悦楽から調査研究へと移行できたことは、ハノイにとって、はくにとって幸せであった。

研究について言うならば、このハノイ調査はぼくたちの10年間の蓄積の上で構想されたものだ。中国、韓国、台湾、香港、マカオという東アジアの国々に残る「近代建築」の全貌を順次調べくり、リストとして公開する作業のことである。

パラシュートのようにどこからともなく降ってくる大理論にがんじがらめになるのではない。自分の眼、耳、鼻、口、足、そして、頭とで獲得した無数の事実を積み重ね、陳腐かもしれないが、独自の論理を作り上げる。そんな「地道」な行為によって、初めて都市が十全に理解できると考えるのである。理論は天からも、海の向こうからも降っては来ず、ハノイの街の自らの足元に転がっているのだ。

2. ハノイの都市史

ハノイは、都市史的に見るならば、

I: 都城昇龍 (行政区)

II: 36通り地区 (商業区)

III: フランス植民地時代の都市区域

IV: ハノイ近郊の農村

V: 戦後のスプロール

の5つの区域にわけることができる。都市ハノイを理解するとは、この5つが地層のように積み上がってきた過程すべてを視野に入れるということでもある。

李朝時代の1010年、首都がここに移されて以来、1803年、阮朝のフエ遷都までの約800年間、ここはベトナムの北部王朝の首都であった。その当時の城郭はハノイに残ってはいな

い。現在見られる北門は、1803年副都となって以降のものである。現在では、軍隊が占拠し、その中にはわずかに数棟の古い宮殿建築が朽ち果てて残っているにすぎない。

36通り地区は、紅河と王城の間にできた商業空間である。紅河という河川を通して運ばれた食料や燃料、その他もろもろの物資は河岸に一端卸されて、小さな運河や道路で王城内に運び込まれる。アジア各地の船がここに集まり、ひとびとが住みついた。それがこの起源である。17世紀頃には中国人たちがチャイナ・タウンを形成し、会館をつくり、同業者が集まって住み、現在の街の原型が造られた。

3つ目は、1873年、フランスが紅河岸に租借地をつくって以来のフランス系の都市空間である。租借地の位置は、36通り地区にアクセスする船着場より川上で、やがて、そこを中心に計画的な都市がつくられていく。王城は浸食され、36通り地区が整頓されたのも、このフランス時代のことであった。

ハノイの都市を構成する4番目は、ハノイ近郊の農村である。都市ハノイの喧騒の巷の雰囲気は、ほんの10km離れた農村には存在しない。亭と呼ばれるベトナム版の「神社」を核として、農家が集合して村を構成する。建物のタイプも異なれば、配置やライフ・スタイルも大きく違う。

最後に、戦後、そして、現在にまで続く都市のスプロールがある。20年前の地図では農家が点在するその集落が、いまでは都市の膨張に飲み込まれてしまっている。その無秩序な拡大は、あたかも数百年前の36通りの地区形成の再来のようにも見える。あるいは戦後、社会主義兄弟国によって郊外につくられたアパートや、河川敷に広がるスクオッターも、この類に属する。

かつてのフランス人地区は、戦後になると空き家になって、住み手はベトナム人に交代

する。90年代になると経済的バブルの影響で、ハノイには新しいタイプの建築群が出現する。ミニ・ホテルや成り金ベトナム人の邸宅、駐在外国人用の賃貸住宅などがそれである。これも第5の部類に入れることができよう。

3. ハノイを歩く

中国やその他のアジアの国々でのフィールド調査で、ほくたちが体得した知恵のひとつは、研究の成否は現地の研究者との連携にかかわるということであった。

ひとつは、きわめて調査技術的な側面についてである。上海でも、ソウルでも、そして、このハノイでも、都市内を学生たちが歩きまわり、建物ひとつひとつを写真にとり、建物名や住所をカードに記そうとするならばもう、すぐさま、おいおいと肩を叩かれること請け合いである。まして、一軒ならばいざ知らず、系統的に建物の平面図をとることなど、現地の協力なしではやってはいけない。

しかし、現地との協同にはもっと重要な意味がある。そもそも、調査の発端は、「愛」であると述べた。その街が好きだからという単純なきっかけは、そして、調査の成果がその街に返っていくという考えを自然に生み出す。ハノイのひとつとが、ハノイの街をより良く知り、この街をより良い方向へもっていきたいという気持ちへとうまく連携するならば、やがてそれがこちら側へも返ってくる。

とりわけ、ここハノイでは、近年の世界的な町並み保存ブームで、ユネスコやカナダ、フランス、スウェーデンの専門家が乗り込んできて、この街の保存を強く主張している。現地の大学や専門家も、その重要性を再発見し、保存と再開発を共存させつつ進めたいとの模索のただなかにある。

ハノイ建設大学という、ハノイに3つある建築大学のひとつと提携して、ほくたちの調査が始まったのは、1994年5月のことである。

以来、毎年5月と11月にはハノイに1か月ほど滞在する。40歳の誕生日も、そして、41歳も、ほくは誕生日をこの街で迎えた。

ハノイの都市調査は、次の4つに分けられる。

- ・住宅類型調査
- ・近代建築悉皆調査
- ・保存、再開発の行政システム調査
- ・36通り地区の再生プロジェクト

東京大学生産技術研究所の藤森研究室と都市工学科西村研究室を中心に、外部から強力な助っ人を何人かお願いして、チームが組まれた。個人の持っているノウ・ハウや知識はそれほど万全ではない。目的が決まれば、それに相応しい専門家は、例えば、北海道であろうと、パリであろうと、お願いするのが、調査成功のもうひとつのコツである。

ここに掲載するいくつかの論考は、ほくたちのハノイ調査の経過報告である。ハノイという都市を多面的に分析してある。自画自賛の誹りを省みず述べるならば、これらは世界初、ほやほやできたてのハノイ都市論である。

4. ハノイはどこへ行く？

1995年の11月、ほくたちはハノイでシンポジウムと写真展を行なった。調査で得た知見を日本側や少数のハノイの共同研究者の間にとどめず、広く一般のひとつとに公開するという意味である。2日間にわたるシンポジウムは専門家たちとの討議の場であり、10日間のハノイ近代建築写真展はひとつとに、この都市のすばらしさを知ってもらうことであった。

都市の良さは、本気で歩き、本気で考えなければわからない。東京に漫然と住んでいても、東京の良さがわからないのと同じことだ。ハノイの名所旧跡の写真はあっても、この街の骨格をつくったフランス植民地時代の建物は軽視されつづけてきた。写真家の眼は、普通のひとつとが考えもしなかった光景を鋭く捉え、感動的に1枚の写真に定着させる。増

田彰久さんによる写真展は、その意味で大成功であった。

近代建築の調査では1200棟の物件を収集し、その中から100の重要建築と150の主要建築を選んだ。その結果は、この特集でも見ることができる。36通り地区の調査では、古い町並みの歴史的歩みや現状が明らかにされた。それもこの本の中で読むことができるであろう。

しかし、調査が実施され、シンポジウムが開かれるその傍らでは、「ハノイ近代建築選」に挙げられた建物が無造作に取り壊されていく。ミニ・ホテルは36通り地区のなかに侵入し、既存の景観を大いに「かき乱して」いる。ハノイの古い町並みを観光する外国人が急増し、彼らが落とす外貨で潤ったひとつとは建物の改築にそれを利用する。

ミニ・ホテルの設計を請け負い、壊された近代建築の跡地に建物を建てるのは、実はほくたちの共同調査者そのひとつや、そのすぐ親しい人々である。意気込めば、意気込むほど、別のところに波紋のように力がおよび、それが街を変えてしまう。ほくたちの「善意」は、「善意」の中に納まることはないのだ。

ハノイの建築社会という大きなコスモスの中では、当然ながらほくたちも、ひとつの構成要素にしか過ぎない。だからといって、ハノイの街をより良くしたい、その「善意」が無効だと言うのではない。要素である自らの動きとコスモス全体の動向との連関を頭に入れた歩む歩むはかばかあるまい。

「ハノイ・ハノイ・ハノイ」。ほくは時折、この言葉をつぶやく。それは、ハノイに魅惑された感動であるとともに、これから、どこへ行くのかかわからない都市ハノイへの呼びかけの言葉でもある。

●むらまつ・しん

尚、この調査研究は、平成6年度平和中島財団国際学術助成、および平成6、7年度旭硝子財団研究所助成の成果の一部である。

ハノイ建築マップ

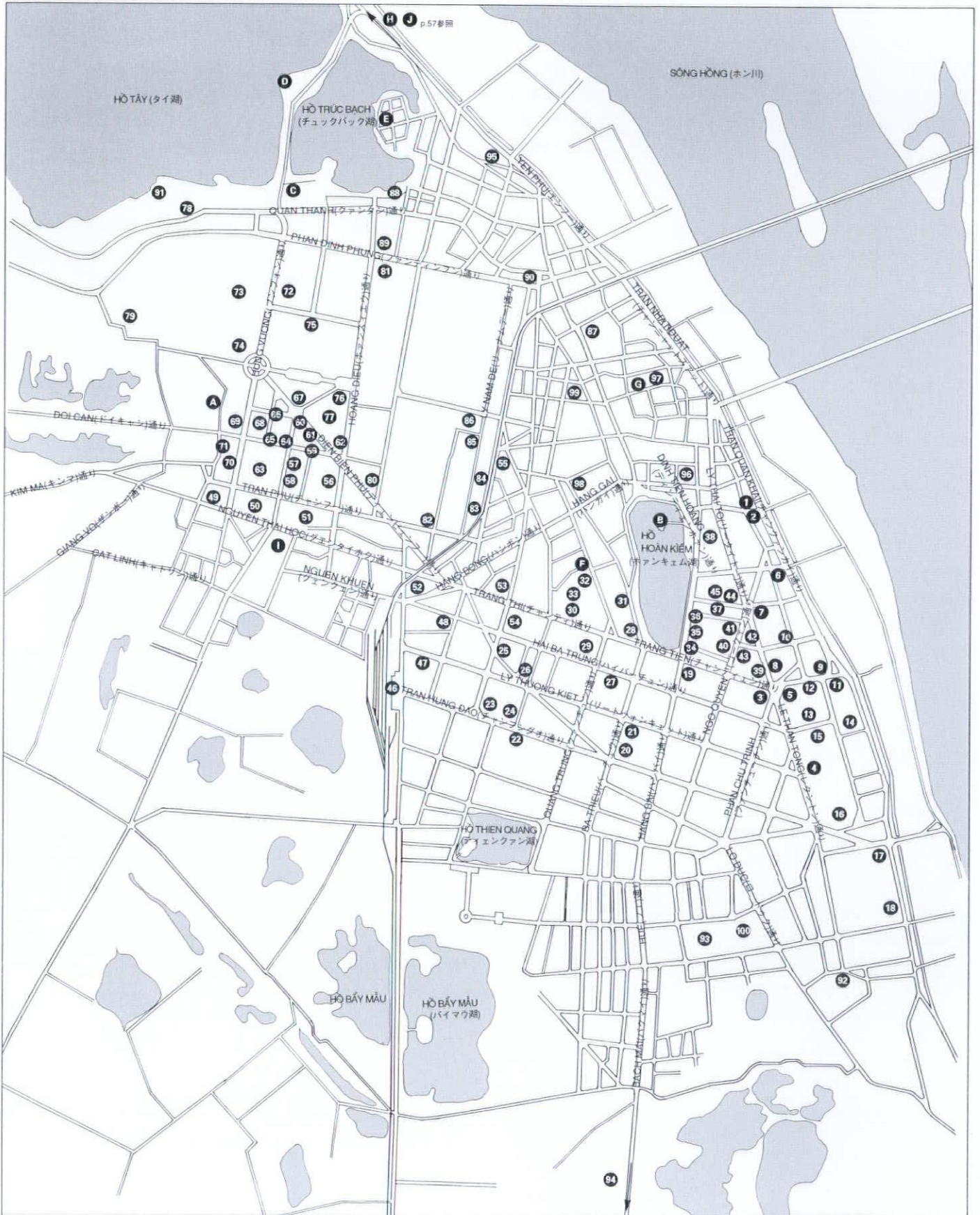


凡例 (近代建築)

1~100 現名称
旧名称
所在地/竣工年/設計者
解説

凡例 (古建築)

A~J 現名称
建立年代



約1000年の歴史を有するハノイの町にとって、1875年の租借地時代から1945年までのフランス植民地の時代はわずか70年、期間の長さで言えば1/10以下にすぎない。ただ、現在のハノイでわれわれがいくつ都市光景の大部分が、この70年の時間内に建設されている。

36通り地区の町家は別にして、それ以外のフランス建築の影響を受けた建物は、現在約1200棟にのぼる。ハノイの今後の発展を考える時、フランス時代に建設されたインフラや建物をすべて無視することはあまりにも暴挙であろう。ここに掲載した100棟

は都市ハノイのそんな活性化のためになくてはならないものである。

建築のよさ、建築史的意義という「建築的価値」、都市内でどういった位置にあるかの「景観的価値」、史跡の意味を考慮する「社会的価値」の3つの基準をもうけ、1200棟の中から、われわれは「重要建築」100棟、「主要建築」150棟を選んだ。ここに掲載するのは、その前者である。

分布図で見ると、大方がホワンキエム湖の南側に偏在しているのがわかるであろう。フランスが都市計画を施した部分である。ついで左上部分は、

かつて王城があった場所。城郭を撤去し、フランスはそこにインドシナ連邦の首都関連施設を置いた。この部分にも100選のいくつかが点在する。

36通り地区の建物は、バナキュラーな形態ではあるものの、建設年代はフランスの影響下の建築と同様、ここ100年間である。ただ、それは個々よりもむしろ、群として、そして生活を含めた全体として、価値がある。36通り地区の中で、「100選」に入るのは、ベトナム人や華僑たちの金持ちや中産階級が勃興した後に建てられた「擬洋風」に似た建物である。(村松)

古建築10選 (解説＝早稲田大学アジア建築研究室)



A. 一柱寺 Chùa Một Cột
1049年(李朝時代)

一柱寺は延佑寺内の正方形の池に建つ樓閣である。水中から立つ1本の石柱で支えられており、その外観は蓮を模したものとされる。



B. 玉山祠 Đền Ngọc Sơn
陳朝(1225-1400)期

還剣湖の玉山島に建つこの祠へは、朱塗りの橋を渡る。その規模は次第に拡大してゆき、湖上に建つ樓閣・亭・正殿等の見事な景観が整えられていった。



C. 真武觀 Đền Quán Trấn Vũ
11世紀初頭

李太祖在位期に創設されたこの公的寺院は昇龍城を守護する場所であった。17世紀に建造された銅像・銅鐘や彫刻など価値の高いものを有する。寺内の建物は修復中である。



D. 鎮国寺 Chùa Trấn Quốc
6世紀

ベトナム最古の寺院のひとつで創設は6世紀といわれる。現在の西湖に移築されたのは17世紀であり、修築も多く重ねられてきた。寺内には精巧な仏像が多数安置されている。



E. 五社亭 Đình Ngũ Xã
不詳

チュックバック湖にある街中の十字路の角地に建つ。T字型の平面の小さな亭である。



F. 李朝国師寺 Chùa Lý Quốc Sư
不詳

もとは明空国師を奉る寺であったが、1954年に仏教寺院となった。明空国師像は今も寺院の最奥に安置されている。外陣と鐘樓部分が新しく、内陣にも修理が加えられたことが窺える。



G. 白馬大王 Bạch mã Đại Vương
不詳

旧市街のチャイナタウンにある。規模の大きな中国式の寺で、複雑な屋根形態を有する。柱や梁は朱塗りがされ、白馬などのきらびやかな像が置かれている。



H. 金蓮寺 Chùa Kim Liên
陳朝(1225-1413)

創設は陳朝時代であり、当時の名は「権龍寺」。1639年に改修し「大悲寺」と改名。1771年の改修で「金蓮寺」となる。1792年に大修理がされた。門の龍や花の彫刻が見事である。

I. 文廟 Văn Miếu
11世紀

ベトナム最初の大学であり、1076年から1779年の700年にわたり多くの学者や政治家等を輩出してきた。現在までの900年の間には増改築が度々なされ、各時代の建築が混在している。

J. 燕夫亭 Đình Láng Yên Phụ
不詳

湖に臨んで建ち、周囲の街並はフランス統治時代の様子を残している。正面は妻入りであり、入口の左右には門神が描かれている。儀式等の行なわれる拝殿の奥には紀堂が配されている。

近代建築100選 (解説＝大田省一)



1. ハノイ市水利局 Sở thủy lợi
公共事業局
23 Hàng Tre/不詳/不詳

コーナーを意識したプランを持つ。新古典主義時代の公共建築だが、装飾は抑え目でハノイでのマンサード建築の流行後の建設と思われる。両翼にはベランダを付けている。現用途の前には裁判所に使用されていた。



2. 水利省 Bộ thủy lợi
公共事業局
164 Trần Quang Khải/不詳/不詳

簡素な装飾の建築であり、本格的アーキテクト兼任以前のサーベイヤーによる建築。最上階は後の増築である。



3. チャンティエン5番住宅・店舗
Nhà ở và cửa hàng 5 Tràng Tiền
店舗
5 Tràng Tiền/不詳/不詳

市劇場前の広場に面する。コーナーに塔を建てアーチを使った、優雅な印象の建築。内部の吹き抜けのホールはガラスと鉄柱による、工業技術を背景とした作品。19世紀後半のフランスからの直輸入品という趣である。



4. ハノイ総合大学
Trường Đại Học Tổng Hợp Hà Nội
インドシナ大学
19 Lê Thánh Tông/1938年/エルネスト・エブラール

インドシナ様式による建築。西洋建築とベトナム建築の融合を、モダンデザインによる抽象化で行おうとした作品。躯体は煉瓦造だが、底部を木造にして付加部分とし、違和感の無い仕上がりを得ている。ディテールにはベトナム伝統建築からの取材が見られるが、プロポーションはボザールの趣である。



5. 市劇場 Nhà hát Lớn Thành Phố
オペラ座
1 Tràng Tiền/1911年/アルレイ

チャンティエン通りのアイストッブに位置する、パリのガルニエのオペラ座に酷似した劇場建築。植民地同化政策のために過剰な装飾、過大な規模で建設された。最近修復計画が立案され、現状を活かしつつ近代設備を備えた劇場に改装される予定。



9. 革命博物館
Viện Bảo Tàng Cách Mạng
税関局
25 Tôn Dãn/不詳/不詳

20世紀初期の公共建築を代表するもので、規模も大きい。良く原型を保っている。ハノイではかつて紅河岸で交易が行われていた関係で、税関が置かれた。



13. 鉱業・地質総局
Tổng cục mỏ địa chất
地質博物館
Phạm Ngũ Lão/不詳/不詳

アーチ窓が連続する様式建築ながら、フランス瓦の屋根を載せている。この形態の建物は、雨への対策としてかなりの数がベトナムで建設された。この建物は1階建てながら細部にも彩色模様を描かれた保存状態の良い建築物である。



17. チャンフンダオ1番住宅
Nhà ở 1 Trần Hưng Đạo
ラネッサン病院内建物
Trần Hưng Đạo/不詳/不詳

ハノイのフランス建築のうちブラック建造物としては最古のもので、租借地開設当時の建築物。フランス人の設計ながら現地の伝統建築の形態である入母屋屋根を使った、開港期の応急的な建築物である。構造は木骨煉瓦造。



6. 会計局 Kho Bạc nhà nước
事務所
194 Trần Quang Khải/不詳/不詳

公共建築が本格的様式建築へと移行する時期の建築。初期の簡略なものから、装飾への欲求が表現されている。現在は会計局が使用しているが、原型を良く保っている。



10. ベトナムユネスコ委員会
Ủy ban UNESCO của Việt Nam
邸宅
Tôn Dãn/不詳/不詳

マンサード屋根を持つ邸宅風建築で、装飾は簡素。使用状態は良好。前載の木と相まって北方的な風情を演出している。ハノイ市内には、大型公共建築にマンサード屋根が幾つも見られるが、小規模のものは少ない。



14. 国防省ゲストハウス
Nhà khách bộ Quốc Phòng
フランス軍参謀本部
33A Phạm Ngũ Lão/1874-77年/不詳

旧フランス租借地に建つハノイでの最古の西洋建築物。公共建築の最初期の姿を伝えている。当初は切り妻の小規模なものだったが、1884年から1887年にかけて増築され、正面中央に車寄せをつけた姿となったようである。煉瓦造であるが小屋組には鉄骨が使用されている。植民地時代はフランス軍の駐屯地だった。



18. 軍隊病院 Bệnh viện Quân đội
ラネッサン病院
1 Tràng Hưng Đạo/1893年/不詳

軍の技師による公共建築でも最大規模の部類に入る。この種の建築は、簡素ながら粗石部にはルスティカ仕上げをする等、様式建築を意識して作られている。



7. 国立銀行 Ngân Hàng Nhà nước
インドシナ銀行
47-49 Lý Thái Tổ/1930年/
ジョルジュ・トロロー

ハノイにモダンデザインの潮流が到着したことを告げる作品。アールデコの装飾が各所に施され、特に内部ホールは素晴らしい。一方キャピタルの名残や、八角窓等のベトナム伝統建築の装飾も用いられ、過渡的な面も見られる。インディラガンジー広場のアイストッブに位置し、ホアンキエム湖からの軸線を受けた都市景観上も重要な建築である。



11. 歴史博物館 Viện bảo tàng lịch sử
フランス植民地学院ルイ・フィノー博物館
1 Phạm Ngũ Lão/1925-32年/
エルネスト・エブラール

エブラールの提唱したインドシナ様式の第1作。木造伝統建築の模写に力が注がれている。八角形の楼閣を持つエントランスホールに、入り母屋屋根を載せた部分が続く。柱梁や斗拱をRC造で再現し、壁面には左官仕事で小屋組を描き込んである。紅河沿いの道とオペラ座からの道の交差する点に置かれ、ランドマークとなることが意図されている。



15. ドンタイタン1B番住宅
Nhà ở 1.B Đặng Thái Thân
フランス軍住宅
1B Đồng Thái Thân/不詳/不詳

旧フランス租借地に位置するハノイ最古のフランス建築のひとつ。ほぼ旧状を保っている。1階は煉瓦造であるが、2階部分は木造の寄せ様屋根で、ふたつの建築方式の併合が興味深い。



19. 国営百貨店
Công ty thương mại Hà Nội
レユニ百貨店
3 Tràng Tiền/不詳/不詳

ハノイの繁華街であるチャンティエン街にある市内最大の商業建築。当初は様式建築だったが、後に改装されアールデコの装飾で覆われた。通りに面した部分にはアーケードが設置されている。昨年より取り壊し工事が始まり、跡地には外資との合併によるデパートが建設される予定。



8. リータイトー63番店舗
Cửa hàng 63 Lý Thái Tổ
フランス将校クラブ
63 Lý Thái Tổ/不詳/不詳

市劇場前の広場に面する。インドシナ様式の流れを受けた建築で、小規模ながら良くまとまった作品。木造軸組を再現し、換気孔は破風を模している。



12. 基礎科学物質総合会社
Tổng công ty phân bón và hóa chất cơ bản
鉱業部
1A Tràng Tiền/不詳/不詳

様式建築でも後期の公共建築。ガーランド等の装飾が簡略化され、直線的造形が現れている。陸屋根にパラペットを立ち上げているスタイルは、雨水への対応には不向きである。



16. 給水塔 Tháp cấp nước
給水塔
8 Đinh Công Tráng/不詳/不詳

軍施設の中にあるが、現在は使用されていない。同様の給水塔は市街北部にも存在する。産業施設ながら1層部分はアーチによる造形が見られる。



20. パーチュウ41-43番住宅・店舗
Nhà ở và cửa hàng 41-43 Bà Triệu
住宅・店舗
41-43 Bà Triệu/1890年/不詳

フランス人地区は紅河岸からグリッド状街路が建設されたが、この建築はフランス人地区の最初期のものである。棟割りに5件が入居できるようにしており、商店建築の古い形態を伝えている。1995年現在、使用されていない。



21. 商工省 *Bộ Công Thương*

個人邸宅

33 Bà Triệu / 不詳 / 不詳

旧フランス人地区に残るマンサード屋根の邸宅建築。壁面装飾は簡素である。残存するマンサードの邸宅建築はハノイでは僅かだが、この建物は増改築が無く原型を保っている。



22. ハノイ市公安本部

Công an thành phố Hà Nội

警察部

84 Trần Hưng Đạo / 不詳 / 不詳

マンサードの公共建築。中規模だが、それだけマンサードの普及を物語っている。ドーマー窓のガラスは失われているが、これもこの様式が熱帯に不向きであったことを示している。



23. 総労働組合連合

Tổng Liên Đoàn Lao Động

インドシナ・ユンナン鉄道会社

65 Quán Sứ / 1902年 / 不詳

大型の堂々としたマンサード建築。全体を黄色で塗ってあるが、これはフランス人にとって南方を意味するようである。この建築が面するロータリーにはかつて展覧館もあり、フランス人地区の中心のひとつであった。



24. 交通運輸省

Bộ Giao Thông Vận Tải - Cục Đường Bộ

個人邸宅

80 Trần Hưng Đạo / 不詳 / 不詳

ヨーロッパの民家建築をモチーフにしたと思われる屋根を載せている。邸宅建築としては規模が大きい方である。



25. ホアロー刑務所

Nhà giam Hỏa Lò

中央刑務所

1 Hỏa Lò / 1899年

／オーギュスト・アンリ・ヴィルデュ

刑務所は植民地都市ではしばしば重要な都市施設となる。この建築は本職の建築家により、市街の中心に建てられている。ベトナム戦争中は捕虜が収容され、「ハノイ・ヒルトン」と仇名された。1995年より正面入り口を残して取り壊され、ホテルが建設される。



26. 最高人民裁判所

Tòa án nhân dân tối cao

最高裁判所

48 Lý Thường Kiệt / 1900-1906年

／オーギュスト・アンリ・ヴィルデュ

初期の公共建築の中でも最高の作品。派手な装飾は無いが、ドリス式オーダーのコロネードを正面に据えた風格ある建築。煉瓦造の躯体は黄褐色で塗られている。



27. 聖マリア教会チャペル

Nhà thờ nhỏ st. Marie

聖マリア教会チャペル

37 Hai Bà Trưng / 不詳 / 不詳

中央に鐘塔を立てた教会施設で、カトリックの修道会である。植民地時代から継続して存在している貴重な存在。



28. ホアンキエム地区公安

Công an quận Hoàn Kiếm

第1区警察署

2 Tràng Thi / 不詳 / 不詳

ホアンキエム湖南端にあり、この地区のランドマークとなっている。双塔にはマンサード屋根が付く。1995年に修復された。



29. 国立図書館 *Thư viện Quốc Gia*

国立中央図書館

Tràng Thi / 不詳 / 不詳

両脇に文書館、書庫を従えたコの字型の構成をしている。前庭には美しい庭園がある。正面入り口を大きくアーチにする意匠は、旧展覧館等にも見られ、一時流行した。



30. 自転車工場

Xí nghiệp Xedạp Ví Ha

工場

10B Tràng Thi / 不詳 / 不詳

街中にある小規模な組立て工場。躯体自体は簡略化した様式建築であるが、正面のステンドグラスは素晴らしい。



31. 新ハノイ新聞社編集部

Tòa soạn báo Hà Nội mới

アブニール・トンキン社

44 Lê Thái Tổ / 不詳 / 不詳

植民地時代から新聞社に使用されているマンサードの商店建築。ホアンキエム湖畔に優美な姿を見せる。



32. ハノイ大聖堂 *Nhà Thờ Lớn*

ハノイ大聖堂

40 Nhà Chung / 1883年 / 不詳

仏教寺院を取り壊した後の、同化政策の先兵として建設された。白と黒の石材を使っていたが、湿気のため黒塗に覆われている。双塔ゴシックの教会建築はハノイ随一の威容を誇る。正面の街路に面した建築も尖頭アーチで描かれている。



33. ハノイ大聖堂内礼拝堂

Tòa Giám Mục

ハノイ大聖堂内礼拝堂

40 Nhà Chung / 不詳 / 不詳

大聖堂の敷地内にある礼拝堂。かなり古い形態を残している。現地の形式の屋根に、底部の柱には2層部分に欄が付けられ、一見ベランダのように見える。



34. 貴金属店・通信展覧会

Cửa hàng vàng bạc đá quý Nhà thông tin triển lãm

インドシナ不動産銀行

89-93 Đinh Tiên Hoàng / 1931年

／ジョルジュ・トロブ
ハノイの公共建築におけるモダンデザイン最初の作品。全体的に直線状の造形となっているが、柱頭部に細かい装飾がある。



35. 国際郵便局

Giao dịch viễn thông quốc tế

商業農業会議所

6 Đinh Lễ / 1941年 / セルッティ

モダニズムの公共建築。エントランスには2層分の列柱があり、ホールとともに古典的な構成が行われている。設計者のセルッティはヴィラ建築の設計も手掛けた他、都市計画にも携わっている。



36. ハノイ郵便局

Bưu điện Hà Nội

ハノイ郵便局

1 Lê Thạch / 1896年

／オーギュスト・アンリ・ヴィルデュ

最初の官衙街（現インディラ・ガンジー公園周辺）に建設されたマンサード建築。スタコ壁、スレド葺きの本国風の作りによる公共建築は、ベランダ様式による植民地建築からの脱却を意味する。郵便局本館が50年代に隣接して建てられ、現在は補助的業務に使用されている。



37. 八角堂 Nhà Bát Giác

八角堂

Công Viên InDraGanDi/不詳/不詳

ホアンキエム湖からインドシナ銀行へと通じる
ブルバール（現インディラ・ガンジー公園）
の中のフォーリー。木造による現地伝統様式を
基本としながらも柱頭、ペジボードに西洋的
手法が見える。



38. 通信文化局

Sở văn hóa thông tin

林務局

49 Hàng Đậu/不詳/不詳

様式建築ながら寄せ棟屋根を載せている。ホア
ンキエム湖に面した36通り地区との境にあり、
フランス人建築の最前線に位置する。



39. 農産物輸出入総会社

Tổng công ty xuất nhập khẩu nông sản

事務所

6 Tràng Tiền/不詳/不詳

ハノイの様式建築後期の作品。ピラスターのキ
ャピタルをイオニア式にしている他は、直線的
造形で仕上げられている。雄大なチャンティエ
ン通りの中で、際立った建物。



40. 労働省社会傷兵課

Bộ lao động thương binh xã hội

トンキン理事長官邸

12 Ngô Quyền/不詳/不詳

理事長官邸の業務棟。理事長官はトンキン（北
部ベトナム）の地方行政機関の長である。隣接
する理事長官邸に比べれば、装飾も少なく簡
素な仕上がりになっている。両翼を伸ばしたコ
の字型のプランをとり、前庭を囲んでいる。



41. 迎賓館 Nhà Khách Chính Phủ

トンキン理事長官邸

12 Ngô Quyền/1895-1911年

/オーギュスト・アンリ・ヴィルデュ

ホアンキエム湖東岸の官庁街地区でもひととき
優雅な姿を見せる。マンサード建築だが、ポー
チにはアール・ヌーボーの造形が見える。他
のヴィルデュの作品と違い、壁面は白に塗ら
れている。現在は迎賓館に使用されているため
綺麗に整備されている。



42. 記念碑 Bia kỷ niệm

記念碑

Vườn Hoa Con Cóc/不詳/不詳

理事長官邸の前の街路の一角に作られた三角公
園の中に建つ。イオニア式オーダーやペディメ
ントの足下には龍や蛙等の現地の図像を使っ
ている。



43. ソフィテル・メトロポールホテル

Khách sạn Sofitel Metropole

メトロポールホテル

15 Tràng Tiền/1901年/不詳

植民地時代からのハノイ最高級のホテル。数
次に亘る増築が行われているようである。社会
主義政権下ではトンニャット（統一）ホテルと
呼ばれ、日本大使館も一時ここに入居してい
た。フランス資本が導入されてから再整備され、
現在に至る。



44. ハノイ文化宮

Cung Thiệu Nhi Hà Nội

事務所

8 Lê Lai/不詳/不詳

インドシナ銀行前の一角に位置する。壁面が赤
紫色に塗られ、マンサード屋根は傷みが目立つ。
文化宮はRC造の別棟が増築されている。



45. ベトナム商工銀行

Ngân hàng công thương Việt Nam

会計局

12 Lê Lai/不詳/不詳

インディラ・ガンジー公園に面する。隣接する
市庁舎のペラタ建築とともに、古いタイプの
公共建築。



46. ハノイ駅 Ga Hà Nội

ハノイ駅

Lê Duẩn/1900-1902年/不詳

中国雲南への鉄道開通によって開業し、ハイ
フォン、さらにサイゴンへのインドシナ縦貫鉄
道が開通して、国内交通の拠点となる。ベトナム
戦争時に爆撃を受け、中央部はその後改築さ
れる。現在北部方面への出札は駅西口で行わ
れており、この駅舎はサイゴン方面のみの扱い
になっている。



47. 公安警察病院

Bệnh viện công an Hà Nội

病院

89 Lý Thường Kiệt/不詳/不詳

植民地時代からの病院建築。屋上の文字もそ
のまま残っている。典型的なアールデコで、ハ
ノイ市内ではその純度の高さで貴重な存在で
ある。グリルの装飾も凝っている。



48. ハイバーチュン59番住宅

Nhà riêng 59 Hai Bà Trưng

個人邸宅

59 Hai Bà Trưng/不詳/不詳

アールデコの邸宅建築。窓枠周辺の直線、魚
のレリーフが目目を惹く。全体をライトブルーで
塗り、状態も良好である。



49. 郵便設備工場

Nhà máy thiết bị bưu điện

郵便設備工場

61 Trần Phú/不詳/不詳

1920年代からの公共建築整備の一環として建設
された、ノコギリ型の屋根が特徴の工場建築。
市街地の中では目立つ存在である。増築も行わ
れている。



50. セントポール病院病棟

Bệnh viện Xanh Pon

セントポール病院病棟

69 Trần Phú/不詳/不詳

中庭の彫像を囲むようにコの字型に病棟が配置
され、全体として良好な環境を得ている。錠戸
が壁面デザインに活かされている。



51. 美術博物館 Bảo tàng mỹ thuật

インドシナ大学寄宿舍

66 Nguyễn Thái Học/不詳/不詳

インドシナ様式後期の作品。寺院風に反り上
った屋根を、忠実に模写した組み物が支える。
インドシナ大学の寄宿舍は市街南部にもつ
くられたが、こちらは市街中心部にある。



52. クアナム市場 Chợ Cửa Nam

市場

13 Lê Duẩn/不詳/不詳

簡素ながらもよくまとまった建築。煉瓦造のファ
サードの裏には鉄骨によるホールが広がる。ク
アナムとは南門の意で、ハノイ城塞の南門外
の集落の名であった。



53. ベトナム祖国戦線中央委員会
Ủy ban Trung ương mặt trận tổ quốc
Việt Nam

事務所

46 Tràng Thi/不詳/不詳

瓦屋根に破風を付けたヴィラ建築。正面バルコニーの造りはベトナム建築の木組を採用している。本体の裏にはベトナム風の回廊がある。



54. K病院 Bệnh viện K

ラジウム研究所

43 Quán Sứ/不詳/不詳

大規模な病院建築。特に中央病棟は本格的な新古典建築である。昨年、修復工事が実施され、フランス時代のレリーフ等が復活した。



55. 都市葬儀場

Nhà tang lễ thành phố

不詳

125 Phùng Hưng/不詳/不詳

ビルディングタイプとして特異なもの。ベトナム風意匠を中心に構成されている。中央の楼閣部分や側面の門の造りが見物である。



56. 中華人民共和国大使館

Đại sứ quán nước cộng hòa Nhân Dân Trung Hoa

個人邸宅

46 Hoàng Diệu/不詳/不詳

ヴィラ建築ながら全面ベトナム風意匠に満ちている。屋根や軒下の模様、門のデザインが特に顕著である。敷地も広く、戦前は阮朝王族の邸宅であったともいわれている。



57. チェコ大使館領事部

Phòng Lãnh sự và thị thực Đại sứ quán Séc

個人邸宅

9 Chu Văn An/不詳/不詳

北方ヨーロッパの民家建築を移入している。深い屋根は数多いヴィラの中でも特異な存在である。大使館施設のため保存状況も良い。



58. チェコ共和国大使館

Đại sứ quán nước Cộng Hòa Séc

個人邸宅

11 Chu Văn An/不詳/不詳

前出のベトナム祖国戦線中央委員会の建物とともに正面中央のバルコニーが特徴であるが、こちらは洋風の意匠。木枠も壁面と同色に塗られている。



59. レーフォンホン4番住宅

Nhà riêng 4 Lê Hồng Phong

個人邸宅

4 Lê Hồng Phong/不詳/不詳

塔屋を持つヴィラ建築。壁面は左官仕事による装飾が施されている。保存状態も良好である。



60. スイス大使公邸

Nhà riêng của Đại sứ Thụy Sĩ

個人邸宅

49 Điện Biên Phủ/不詳/不詳

ヴィラ建築では規模が大きい部類である。ヒップゲブルの屋根に塔屋を持つ。壁体のページュと屋根のえんじ色の取り合わせが美しい。



61. ハンガリー大使館

Đại sứ quán nước Cộng Hòa Hung-gari

個人邸宅

45 Điện Biên Phủ/不詳/不詳

壁面の左官仕事の装飾、丸窓が特徴である。隣接して同様の建築が、左右を違えて線対称の形で並んでいる。屋根の葺き替え等の改修も行われている。



62. 国防省施設

Thanh tra Bộ Quốc Phòng

個人邸宅

30 Điện Biên Phủ/不詳/不詳

旧城塞地区の角地に位置する。ヴィラ建築の中では珍しく正統な新古典様式のものである。同様の建物が通りの向こう側にあり、そちらは韓国企業の本社に使用されている。



63. ロシア大使館

Đại sứ quán Liên Bang Nga

女子学校

58 Trần Phú/1905年/不詳

かつての学校建築。総督府隣りのリセとともに、広大な敷地にその巨大な姿をみせる。雨に対応するためにノルマンディー風の屋根を付けている。



64. ロシア人住宅

Nhà ở của người Nga

個人邸宅

8 Lê Hồng Phong/不詳

/フイン・タン・ファット

表現派的な装飾が見られるモダニズムの住宅。設計者はエコール・デ・ボザール・ハノイ出身で、その後ベトナム建築家協会の副会長を務めている。



65. ロシア人住宅

Nhà ở của người Nga

個人邸宅

9 Bà Huyện Thanh Quan/不詳/不詳

モダニズムのヴィラ建築。塔屋部には2階までガラス面を通す等の自由なデザインも見られる。パゴラの上に屋根を架けたり、改変も若干ある。



66. ポーランド大使公邸

Nhà riêng của Đại sứ Ba Lan

個人邸宅

5 Chùa Một Cột/不詳/不詳

モダニズムのヴィラ建築。直方体の塔には2階にわたるガラス面があるが、その枠のデザインが興味深い。底の出が大きいのは雨への対応のためであろう。



67. 外務省 Bộ Ngoại Giao

財務部

Điện Biên Phủ/1931年

/エルネスト・エブラール

エブラールによって計画された新官街計画で、唯一実現した建築。これと同等のものが4棟計画されていた。インドシナ様式による官庁建築で、底と破風で西洋建築の構成を再現しようとした。ベトナム伝統意匠を抽象化したデザインが各所に使用されている。



68. ロシア軍駐在武官邸

Nhà ở của tùy viên quân sự Nga

個人邸宅

12 Bà Huyện Thanh Quan/不詳/不詳

モダニズムのヴィラ建築。気候に対応して深い庇やベランダを備える。階段室にはガラス面が大きく採られている。



69. ホーチミン警察備司令部
Nơi ở của Bộ Tư Lệnh Cảnh vệ
教会
18c Lê Hồng Phong/不詳/不詳

かつて教会であったため、ファサードには今も十字が残っている。ベトナム寺院風にデザインされ、正面の鐘楼も木造の伝統様式に依っている。身廊も寺院の架構法を採用している。



70. 郵政局
Cục bưu điện Hùng vương
事務所
16 Hùng Vương/不詳/不詳

様式建築の躯体の上に粗物を並べて、寄棟屋根を支えるようにしている。インドシナ様式後期には、モダニズムの躯体に寺院風の屋根という取り合わせが目立ったが、この建物のような例は極めて珍しい。



71. ベトナムコーヒー企業連合
Liên hiệp các xí nghiệp cà phê Việt Nam
個人邸宅
5 Ông Ich Khiêm/不詳/不詳

窓回りの装飾が特異である。部分的に歴史様式が見えるが、RCを取り入れたすっきりした躯体が基調になっている。



72. 共産党中央渉外部
Ban đối ngoại Trung Ương Đảng
リセ・アルベールサロー
18 Hoàng Văn Thụ/1919年
ノヴィルニユ&グラヴェロー

巨大な学校建築。サーベイヤー建築を基としながらも、豊かな装飾で風格を出している。城塞跡地に建てられた大建築は周囲を圧倒し、ハノイ都市計画の引き金となる。



73. 大統領府 Phủ Chủ tịch
総督府
Hùng Vương/不詳
ノオーギュスト・アンリ・ヴィルデュ

総督の権威強化を目指したポール・デュメールにより建造が計画された。ハノイにはそれまで仮官邸があるだけで、総督官邸はサイゴンにあった。ヴィルデュの作だが、この頃多用されたマンサード屋根は使っていない。



74. ホーチミン廟内倉庫
Khu di tích của Bác Hồ
植物園内倉庫
Hùng Vương/不詳/不詳

総督府ができる前からこの地には植物園がつくられ、その後博覧会場となったが、この倉庫は植物園ができた頃のものと思われる。倉庫の形態としても古い形を伝える。コーナーを飾る濃淡の縞模様特徴的である。



75. バディンクラブ
Câu lạc bộ Ba Đình
フランス人クラブ
1 Hoàng Văn Thụ/不詳
ノジャック・ラズク

モダニズムの公共建築。フランス人のスポーツ施設として建造される。幾何学的造形が主体でブルの飛び込み台には放物線が取り入れられている。現在も地域の住民交流のための施設となっている。



76. Va邸 Nhà riêng Va
個人邸宅
26 Hoàng Diệu/不詳/不詳

現在、軍の高官の邸宅。寄せ棟屋根を頂き、塔屋を持つ。煙突を高く挙げている。旧城塞地区北部は政府要人や軍高官の邸宅として使用されている。



77. Vb邸 Nhà riêng Vb
個人邸宅
30 Hoàng Diệu/不詳/不詳

財務部（現外務省）庁舎の横に位置し、街路計画上重要な地点に建っている。広い前庭を持っているが、本来ここは公共の公園であった。建築物自体は寄せ棟2階建ての一般的なもの。



78. チューバンアン高校
Trường phổ thông trung học Chu Văn An / Ba Đình
保護領リセ
10 Thụy Khuê/不詳/不詳

測量技師の建築物では大規模なもの。3階建ての校舎が2棟並んでいる。昨年に修復工事を行い、外壁の色も変更された。ベトナムでは人口増加に校舎建設が追いつかず、午前部と午後部で別々の学校がひとつの校舎を使用する例が多い。この高校もバディン高校と共用している。



79. 農業食品工業部内建物
Bộ Nông nghiệp Công nghiệp Thực Phẩm
事務所
Ngọc Hà/不詳/不詳

寄せ棟の一般的な建造物であるが、窓上アーチの塗り分け等が美しい。全体的な保存状況も良好である。城塞地区の東側に位置し、開発の遅れたこの地区では出色の存在。



80. 軍事博物館
Viện Bảo Tàng Quân Đội
フランス軍兵營
28 Điện Biên Phủ/不詳/不詳

開港初期のバランタ建築。正面ベディメントとポーチは後補。城塞地区で一般公開されている数少ない建物である。修復工事が施されて新築同様になっている。



81. 国防省 Bộ Quốc Phòng
総理部
1 Hoàng Diệu/不詳/不詳

城塞跡の北端に位置する。ドーマー窓の付いた深い屋根を持つが、腰折れのマンサード屋根ではない。状態が良く、壁面の白さも保たれている。



82. ベトナム軍住宅
Nhà riêng của Quân Đội
フランス軍クラブ
34 Trần Phú/1886年/不詳

初期古典建築の簡略パターン。軍建物の中でもオフィシャルなものに見られる。同様建築があると2棟ならんでいるが、この建物が最古である。現在共同住宅となっているため、状態は必ずしも良くない。



83. リーナムデ93番住宅
Nhà riêng 93 Lý Nam Đế
個人邸宅
93 Lý Nam Đế/不詳/不詳

陸屋根の初期古典建築だが、一面の錯戸が壮麗である。城塞地区の開発の足跡を示す建築。



84. 軍図書館 Thư Viện Quân Đội
住宅
83 Lý Nam Đế/不詳/不詳

入母屋屋根の軍建築。城塞地区には旧租界地とともに最も古い西洋建築が残るが、この建物はバラックの古い形態を伝える。基壇を高くした煉瓦造1階建て。



85. 軍住宅 Nhà riêng của Quân Đội
フランス軍施設
30 Lý Nam Đế/1886年/不詳

前出の軍団書館とともに軍バラックの最古のもの。軍高官の住宅のため比較的状态がよい。妻面に建設年代の表記がある。入母屋屋根はフランス瓦葺きである。



86. 国防省クラブ
Nhà khách bộ Quốc phòng
師団本部

28 Lý Nam Đế/1897年
/オーギュスト・アンリ・ヴィルデュ
城塞地区はかつてフランス軍の駐屯地であったが、その中でもこの建物は現国防省庁舎とともに本格的な新古典建築。



87. ドンファン市場 Chợ Đồng Xuân
中央市場
Đồng Xuân/不詳/不詳

フランスの施策により露店収容のために建設された市内最大の市場。36通り地区の北端に位置する巨大な建築。デザインは開港初期の倉庫建築からの引き写しである。後にファサードを残して改築されたが、出火して1994年から使用されていなかった。現在再建工事中。



88. ハンガリー常駐領事部
Đại sứ quán Hunggari - Văn phòng
Tham tán Thương vụ
個人邸宅
154 Quán Thánh/不詳/不詳

城塞地区の北の邸宅地に位置する。ファサードの装飾が見物である。屋根はトタンで張り替えられてしまっている。



89. 北門教会 Nhà thờ Cửa Bắc
北門教会
27 Nguyễn Biểu/不詳/不詳

旧城塞北門の正面に位置する大規模な教会建築。塔はハノイ随一の高さである。薔薇窓やコロネード等が特徴。屋根のデザインにベトナム建築の様式を取り入れている。



90. 給水塔 Tháp nước
給水塔
Phan Đình Phùng/不詳/不詳

旧租借地地区のものと同様の建築。隣接して公園があり、ランドマークとしても重要。3層構成で、1層部がアーチ、2層部が組石、3層部がスタッコ仕上げと、各層で表現を変えている。



91. ホータイ八角館
Nhà bát giác Hồ Tây
個人邸宅
Bờ Hồ Tây/不詳/不詳

ホータイ（西湖）に面したヴィラ建築。豊饒な装飾に覆われている。その規模と装飾でハノイ最高のヴィラに挙げられる。正面入り口にはベトナム風の意匠も取り入れられている。現在は使用されておらず、再利用が検討されている。



93. ハノイ酒造所
Công ty rượu Hà Nội HALICO
酒造所
94 Lê Đức/不詳/不詳

市街南部にある植民地時代からの工場建築。ビールの醸造所であった。かつてその排煙、臭気のエブラールにより都市問題として提起されている。現在は食品工業省の酒造所となっている。



94. 工科大学校舎
Nhà của trường Đại Học Bách Khoa Hà Nội
大学都市
Bạch Mai/1942年/不詳

ビノアの都市計画の下に計画された大学都市の建築で、官僚建築家によるインドシナ様式後期の作品。当初は学生寄宿舎で、また同様に4棟建設された。その後正面入り口は塞がれた。現在改装工事中で、完成後はフランス友好・言語センターとなる予定。



95. 浄水場
Công ty kinh doanh nước sạch Hà Nội
浄水場
44 Yên Phụ/不詳/不詳

ビルディングタイプとして重要な存在。上水道は36通り地区を含めて19世紀中から整備が進められた。切妻屋根の裏面を階段状にしている。



97. チュオイト小学校
Trường mẫu giáo Tuổi Thơ
広東会館
22 Hàng Bưởi/不詳/不詳

36通り地区には華僑も住んでいたため、会館施設（中国人の同郷者の集会場）もいくつか見られるが、この建築はよく原型を残している。棟飾り等は派手だが、壁面は簡素である。



98. 紅河小学校
Trường tiểu học Hồng Hà
福建会館
40 Lãn Ông/不詳/不詳

福建省出身の華僑のための会館であった。通りに面した部分は煉瓦造だが、中庭を挟んで奥側は木造の中国建築となっている。



99. ボートウックヴァンホア高校
Trường trung học bổ túc văn hóa
北圻致知会
47 Hàng Quạt/1927年/不詳

簡素な躯体に貼り付けるように、ベトナム風意匠が各部の装飾として用いられている。北圻はトンキン地方（北部ベトナム）を指す。



96. ハンベ-44番小学校
Trường tiểu học 44 Hàng Bè
個人邸宅
44 Hàng Bè/不詳/不詳

36通り地区に存在する西洋建築。かつてはベトナム人の邸宅で、中庭を囲むように構成されている。回廊の鉄製の柱や2階の手摺のアイアンワークが特徴的である。



100. ハンチュオイ28番住宅
Nhà riêng 28 Hàng Chuối
個人邸宅
28 Hàng Chuối/不詳/不詳

表現派色を残すモダニズム。1階の半円アーチや3階のデザインが特徴的である。

重層するハノイの歴史

大田省一

王朝時代のハノイ

ハノイは「河内」とも書き、紅河デルタに市街地が広がる。ホアンキエム湖、ホー・タイ（西湖）等の湖が街中に散在した、湿地帯の上の都市である。紅河デルタ地域には歴史上いくつかの拠点都市が存在したが、ハノイもそのうちのひとつであった。本格的に都が置かれたのは1010年のことである。中国的な都城として建設されたが、デルタ地形に対応して変則的な形態を取ったようである。その後の王朝の交替に際しても都は受け継がれ、15世紀頃には商業街区が形成される。1802年からの阮朝の時代になると城塞の改築が行われ、フランス人の指導の下、ヴォーバン式と呼ばれる幾何学的プランに変更される。この城塞は、フランス人の手になるハノイ都市改造の先駆例とも言える。

フランス占領下のハノイ

1873年にフランスがハノイを攻撃し、1875年には紅河岸に租借地を獲得する。これを契機として、フランスによる都市改造が開始され、阮朝の城塞と商業街区（ケチョー地区、現在「36通り地区」と呼ばれている）から成っていたハノイの街に第3の要素が混入されることとなる。まず、租借地と城塞を結ぶ道路が整備され、これを嚆矢としてフランスは近代土木技術による街路整備を行い、微地形を読み込んで敷かれた在来の道とは異なる、直線道路によるグリッド市街が形成された。フランス人地区はホアンキエム湖の南側に立地し、ケチョー地区とは湖を挟んだ形となり、異なった性格の2地区を湖という緩衝帯が繋ぐという理想的な構造が出現した。

植民地政府の意図に反して、フランス人のハノイ入植はあまり進まなかったが、政治都市としてのハノイの整備は次第に進捗していった。ポール・ペールによってホアンキエム湖と紅河に挟まれた所に行政地区が計画され、緑地帯をたっぷり取ったブルーパルを中央に配置して各庁舎が建設された。1887年には仏領インドシナ連邦が成立。ハノイはその首都となり、政治都市としての色彩を強めていくこととなる。単なる入植開拓地としての存在だった時期は、グリッドの広がるだけだった市街地が、都市としての機能を求められるようになると、街路空間にも演出が行われ、ビスタが導入されている。

20世紀に入ると、植民地国家としてインドシナが自立するようになる。ポール・ドゥメールが総督となり、行政機構の整備、大規模な国土開発を推し進めた。彼はハノイに首都跡地の体面を持たせようとして、新総督官邸を城塞跡地に新築するとともに、1902年には博覧会を開催している。フランスの威光を示すために、マンサード建築が堂々たる軀体を現したのも、この頃である。

ハノイ都市計画

着々とハノイの開発は進展していったが、未だ統一
SD9603
44

した都市計画はなく、そのためハノイには、一国の首都にふさわしい景観が備わっていなかった。このような状況をよしとしなかったモーリス・ロン総督は、都市計画最高委員会の設置を決定、エルネスト・エブラールを担当者として招聘した。こうして、1924年には「ハノイ市整備・拡張計画」が提出された。この計画では、首都にふさわしい空間の演出、良好な都市環境の達成が目指されていた。具体的な項目としては、官庁集中計画、ゾーニングの導入、工業地区計画、公園整備等が盛り込まれた。エブラールの描いたプランは、3本の基軸となるブルーパルを放射状に通して都市の骨格を作り上げ、街路空間を演出するバロック的都市計画であった。既存のグリッド街路を単調であるとして、都市空間に壮麗さを演出しようとしたのである。その3本の通りが交わる所には官衙街が予定され、従来のハノイにはない美観を備えた地区が割り上げられることになっていた。良好な都市環境のために緑地帯が広く取られ、熱帯の気候に合わせて風通しにも配慮された市街地の整備が考えられた。西湖を水景公園とする他、スポーツ公園の計画も立てられ、住民のレクリエーションにも対応できる豊かな環境の都市にすることが計画されていたのである。

市街地の秩序立った開発のためにゾーニングが導入され、産業区、行政区、ヨーロッパ人居住・商業区、現地人居住・商業区という区分を指定し、目的に沿った開発を行おうとした。ここでは、ヨーロッパ人とベトナム人の区分は徹底され、「良好な居住環境」はヨーロッパ人のためのもので、現地人地区は在来の生活習慣に則り、固定されることになっていたのである。

エブラールはまた、この計画に合わせて、ランドマークとなる建築を設計した。フランス極東学院博物館、インドシナ大学、インドシナ政府財務部の3つであるが、これらの建築には、気候風土に対応し現地の文化に順応した新しいスタイルが考案され、「インドシナ様式」と名付けられた。この計画は、立案の翌年には総督の承認を得て、官衙街建設から着手された。しかし、脆弱な財政基盤しかないインドシナ政府には大規模開発は負担となり、さらに1929年からの世界恐慌によって、計画はほとんど実行されないまま頓挫してしまうこととなる。

ベトナム都市・ハノイ

都市開発には受難の時代となったが、建築には新しい息吹が起っていた。モダン・デザインの潮流が、この地にも到達したのである。インドシナ銀行等がその先駆けとなり、以後ハノイにおいては、インドシナ様式の建築と、勢力を二分することとなる。

30年代のハノイでは、弱体化したフランス人の代わりに、ベトナム人の活動が表に出てくる。ハノイの人口は、ベトナム人を中心に増大の一途をたどっていた。このような中、1940年には日本軍の仏印進駐が行われる。フランスは再度、自国の威光を示すことを都市計画に託し、1943年にはルイ・ジョルジュ・ピノーにより「大ハノイ計画」が立案された。

この計画では、財政規模を鑑み大規模開発は減らされ、既存の都市のポテンシャルの活用が意図された。ピノーは、建設官僚としてインドシナの地に長年滞在していたため、都市の現実の姿を十分に理解した上で計画を立てることができた。このプランで特に顕著なのは、郊外住宅地区の開発である。在来街路ネットワークを中心としながら、ベトナム人のための居住区がつくられる予定になっていた。ハノイ旧市街の住宅研究の応用も考えられ、住宅改良を目的とした社会政策的な側面も持っている。エブラールのプランが現地人街の保存を考えたことは対照的である。これには、時代的背景とともに考古学的、歴史学的視点を持ったエブラールと、官僚として現地経験を持つピノーの違いがあると思われる。

ハノイ市南部には新都心が計画されたが、大学施設、鉄道施設、病院等の実際に必要とされている施設が中心だった。行政施設にしても老朽化したものの建て替えのみとし、大規模な土木工事は避けられ、財政的負担を考慮しつつ、効果的に首都の顔を整備しようとしていたのである。このプランによる新築建築は、インドシナ様式によるものも相当多く、大学都市等の公共建築が実現している。一方で、モダニズム建築も勢力を広げ、ホアンキエム湖沿いの商業農業会議所、総督府近くのフランス人クラブがその代表例である。このふたつの勢力は、他の一般住宅建築にもそのまま広がり、インドシナ様式とモダニズムが隣接して建っている姿は、市内の各所で見受けられる。この流れの中で大きな役割を果たしたのが、エコール・デ・ボザール・インドシナである。建築部門の教官には官僚建築家と共にフランス極東学院の研究者が参加し、本国の建築の動向とベトナム伝統建築の双方に触れることができたのである。ここでは多くのベトナム人建築家が養成され、第二次大戦後のベトナム建築界をリードする存在となる。

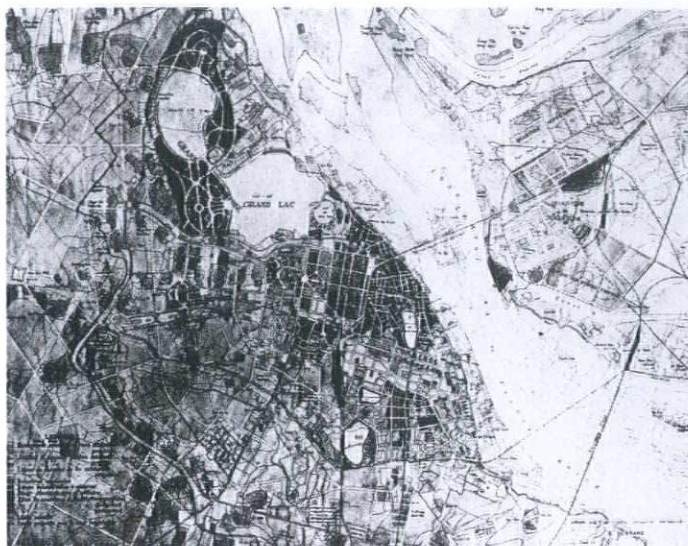
大戦中のこの動きも、突如中断を余儀なくされてしまった。1945年の3月に日本軍はフランス軍を武装解除し、仏領インドシナ連邦は崩壊してしまうのである。日本の敗戦の報が入ると、ハノイで蜂起が起こり9月2日にホーチミンがベトナム共和国の建国を宣言し1954年の停戦まで内戦状態が続く。その後、都心の公共建築の改築が進み、郊外宅地も大規模に開発された。ピノーのプランは形を変えて蘇ったのである。

かつて、インドシナ連邦の官衙街が計画された場所は、現在、国会議事堂等の建築が並ぶ国家祝祭空間へと変貌している。新総督府の建設が予定された同じ場所に、今はホーチミンが革命の父として眠っている。

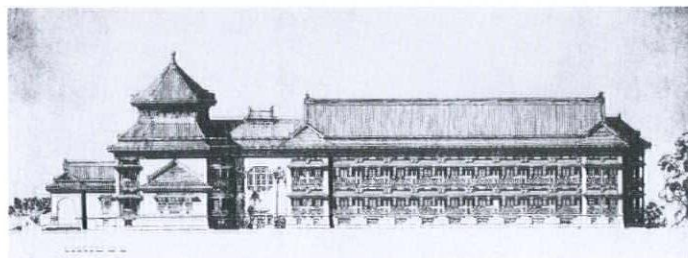
●おた・しょういち

参考文献および図版出典

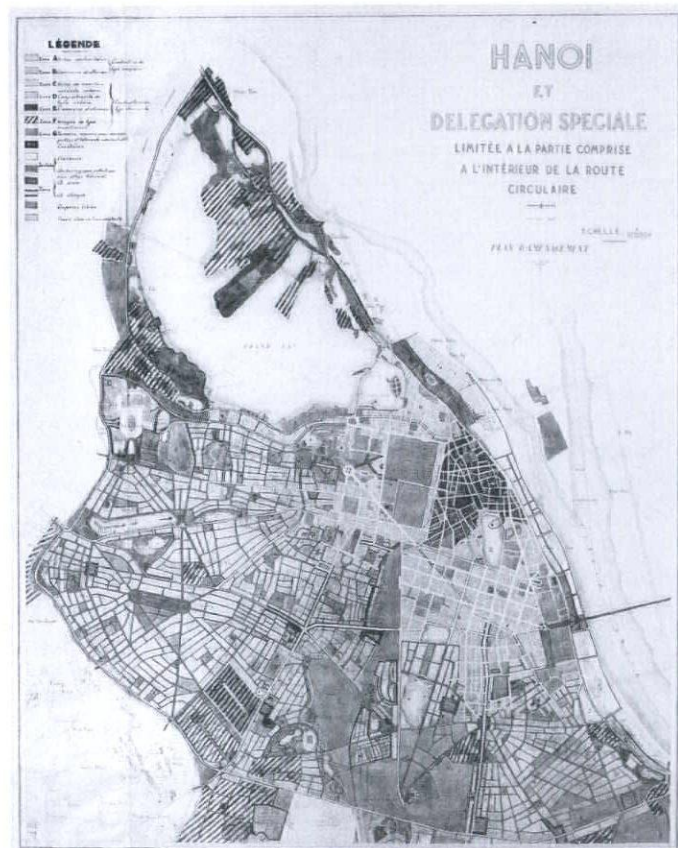
- ・ Christian Pedelahore, "Hanoi Miroir de l'Architecture Indochinoise", Architecture Francaises Outre-mer, IFA, 1992
- ・ Ernest Hebrard, "L'urbanisme en Indochine", L'urbanisme aux colonies, La Charite-sur-Loire, 1935
- ・ H. Guiries, "Les Realisation dans le plus grand Hanoi", Indochine, Oct. 1943



エルネスト・エブラールによる「ハノイ市整備・拡張計画」



フランス極東学院/E.エブラール設計



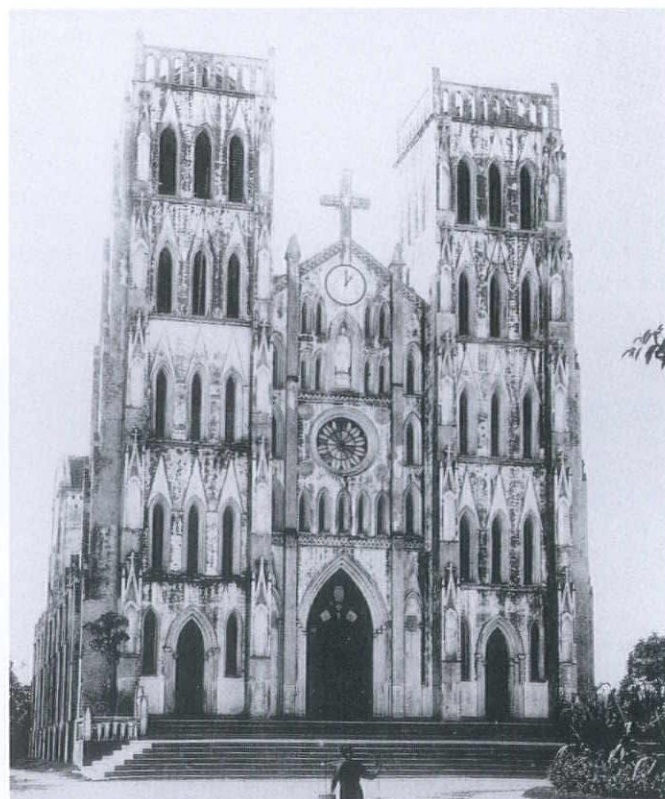
ルイ・ジョルジュ・ピノーによる「大ハノイ計画」



インドシナ総督府



E.エブラールのハノイ都市計画における中央官衙街



ハノイ大聖堂

36通り地区の成り立ち

土田 愛

ハノイ中で最も活気に溢れ、最も人口密度が高く、商業地として、観光名所として、最も注目されている旧市街、36通り地区。歴史上、常に商業の中心であり続け、ハノイ特有の伝統的な街並みを残している。しかし、他の地区と同様、近年の経済開放による激しい変化の圧力にさらされている。どこの通りも狭い道路と歩道にバイクと人、行商人があふれ、喧騒でのもんぱり歩くこともままならない。通りの両側には間口の狭いショップハウスが並び、ファサードは、1〜2階建の「ベトナム風」と言われるものから、フランスヴィラ風のもの、そして、ここ数年急増している4〜5階建のビルまでが、まさに入り乱れている。どこもかしこも建設ラッシュで埃が舞い、観光客目当てのミニ・ホテルやカフェが建ち並び、唯一のオアシスは、たいていの歩道に植えられている街路樹である。

およそ85haもの、一見均質のようにも見える36通り地区であるが、その発展過程を追ってみると、通りや街区ごとの興味深い背景が浮かび上がり、36通り地区の成り立ちと構造が見えてくる。

1. 商業都市

「36通り」という名前は、ハノイ旧市街に対する通称であって、直接的には20世紀前半にヒットしたという小説の題名『ハノイ36通り』に由来する。そもそものは歴史的に、旧市街の通り名が、「絹物屋通り」「金銀細工通り」といったように、その通りにあった個別の小商工業の名前であることに関係がある。

36通り地区は、1010年にハノイが首都になり建設されたかつての昇龍城の東側、紅河との間に、おそらくは宮廷に貢ぐために村から職人が呼び寄せられてきたのが始まりだと言われる。その後13世紀頃から、次第にいくつかの村から職人や農民が、各地の特産物の交換市場として集まってくるようになった。14世紀頃には、すでに中国人も集住して商業活動を行っており、大きな勢力を持っていた。17世紀には定期市が開かれ、職能、特産品ごとのギルドが形成されるようになり、村ごと、ギルドごとにそれぞれ特定の商区を持っていた。現在も使用されている行政区界「フォン」(Phuong、坊)の名前にはそれぞれの職業、特産品の名前が付けられている。15世紀から18世紀までの間、商業地区のフォンの数は全部で36あった。これが、「36通り」の名前の由来である。政治の中心である城郭地区に対して、城外の商業地区は「ケチョー」(Ke Cho、大きな市)と呼ばれ、ベトナム北部の商業の中心として名を馳せていた。

現在もほとんどの通り名はそれぞれの商工業の名に由来しており、かつての名残をとどめている。商業地としては、戦争中など、活気を失いかけた時期もあったが、常に中心としての地位を保っている。特にドイモイ政策以降多くの店が開かれ、その賑わい振りは凄まじい。しかし、近年は公務員、工場労働者として働く若者が多く、職人の確保、技術の継承が困難になっている。通り名に残る本来の商工業自体は、現在に残っているものもいくつかあるが、なくなってしまったり、名前とは別の商業が発達し集まっている場合が多い。



1873年の36通り地区

出典：フランス国立図書館

2. 水路と舟運

ハノイ(河内)は、その名の通り紅河のデルタ地帯にあり、基本的に低湿地帯であるが、城郭地区と同様に、紅河西岸の自然堤防上の微高地に形成されたので、他の地区が洪水で浸水しても、これらの地区だけは無事だという。それでも、1873年、フランスが植民地化する直前の地図を見ると、小さな湖が、周辺はもとより、36通り地区内にも点在し、小さな湖同士は水路でつながっていたことがわかる。さらに、36通り地区のほぼ中心を東西に、城郭と紅河を繋ぐ河が流れていた。この河はかつてハノイの区域を囲む境界となっていた、トリーク河(蘇歴江)と呼ばれる重要な河である。小さな湖の連続が水路として舟運に利用されていたかは定かではないが、少なくとも蘇歴江は、1889年に埋め立てられるまで紅河から城郭の東門に至る主要な交通路であった。紅河との合流点付近には港があり、交易都市の玄関としての役割を果たしていた。蘇歴江にほぼ平行して北側に直線的な通りがこの時点ですでに通っている。現在も紅河沿いの突き当たりには門(河東門)が残っており、通りの両側には大きな街路樹が並ぶだけの幅員の余裕もあり、この通りが城郭東門へ向けての陸路のメイン・ストリートであったことを示している(現在のハンチュエー通り)。

36通り地区内の水路、湖はすべて、フランスが入

って間もなく埋め立てられてしまったが、その痕跡は現在も見えて取れる。かつて蘇歴江であった通り(現在のグエンズー通り、ゴーガック通り)は、流れに沿ってゆるやかに湾曲して、歩道にはカジュマルの木が残り、また両側に隣接する街区には主要な宗教施設がいくつか現存する。かつての河口付近の、明らかに他とは異なっていて急激に湾曲しているハンブオン通りは、堤防の名残りとも、湖の縁に沿った通りだったとも、あるいは蘇歴江から水揚げしたものを陸送する機能が合ったとも言われるが、はっきりした理由はわかっていない。

中国人は、現在のチュオンドウオン橋の辺りに独自に橋を架け、そこから上陸した。福建人はランオン通りで漢方薬、潮州人はハンボー通りで米・穀物、広東人はハンニャン通りとハンブオン通りで乾物(のちに場所が狭くなったためタヒエン通りに移った)の商売をそれぞれしていたが、いずれの通りも36通り地区のまさに中心部であり、その勢力の強さが窺われる。ランオン通りには福建会館、ハンブオン通りには広東会館が今も残っており、小学校や幼稚園として利用されている。

3. フランスの整備・開発

1873年、フランスがついにハノイを占領すると、湿地が埋め立てられるとともに市街地は急激に拡大

した。36通り地区も例に漏れず、蘇歴江や点在していた湖は埋め立てられ、道路が整備され、次第に建物が密集し、鰻の寝床状の町屋地区が形成されていた。それまでは湖を避けるように道路が通っていたが、既存の道路は拡幅、舗装され、埋め立てた土地には新しく道路が通され、街区はより小さく分割された。1936年の地図では、ほとんど現在に近い道路網ができ上がっている。しかし、地区のどの部分も同じように整備されたわけではなかった。地区の東半分は、湖の埋め立て後に街区を分割する道路が通されているが、やや西よりの、ハンボー通りを挟んだ南北の2街区は、道路が通されないまま建てまわっている。さらに最も西より、城郭沿いの地域は、比較的街区が小さく道路も直線的で、計画的に整備されている。これは、1805年阮朝が城郭を狭くしたために生まれた、かつて城内であった部分であり、そのため計画的に整備しやすかったためである。ただ、ハンボー通りを挟んだ2街区になぜ道路が通らなかったのかに関しては、そもそも中国人街であり、非常に裕福な住民の地域だったために、フランスが手を出せなかったのではないかという説もあるが、推測の域を出ていない。

フランスによって、鉄道が36通り地区の西端から北端をなぞるように敷設され、鉄橋で対岸へと繋がれるなど、派手な都市改造が進められた。しかしフランスは、現地人街である36通り地区に対しては、基本的に現状維持の姿勢を取っていた。あまりの衛生状態の悪さに上下水道整備は一応行なわれたとは言うものの、特に地味な下水整備は後回しにされていた。この他、地区に直接影響を与えたものとしては、路面電車が整備されたこと、地区内に兵舎やヴィラがつくられたこと、北部にドンヌアン市場が建設されたことなどの点的な開発がある。

このドンヌアン市場がつくられたこと、さらに市街地の拡大とともに中心が南に移動したことによって、36通り地区に構造的な変化が起こる。すなわち、それまでは城郭と紅河を結ぶ東西方向が主要な移動方向であったのが、フランスの開発によって、ドンヌアン市場、さらには城郭北側と、ホアンキエム湖以南に新しく建設されたフランス租界を結ぶ南北方向がより重要になった。この構造は現在にまで至り、地区の中心部を南北に縦断する2本の通りはそれぞれ北行き、南行き的一方通行とし、地区のメインストリートとなっている（ハンカン通り、ハンダオ通りなど）。また、地区の南端を区切る通り（ハンガイ通り、カウゴ通り）には、観光客目当ての土産物店が並び、南側が36通り地区の玄関であることを示している。

1945年、フランスの支配は一応終わるが、その後も続いた長い戦争の時代のために、現在の都市基盤はほとんど当時のままと考えてよい。特に深刻な問題は、未整備なままの下水、そして、すでに老朽化してしまった上水設備である。中でも、道路が通されず、大きな街区がそのまま建てまわったハンボー通りを挟む2街区は、鰻の寝床が特に長く、街区の奥の劣悪な居住環境が非常に問題になっている。下水管を通すためにも街区を分断する道路が必要だが、建てまわったところに道路を通すことは困難で、フランスが整備しようとした当初と同じ理由で現在も手がつけられずにいるのかもしれない。

4. Phuong (坊)

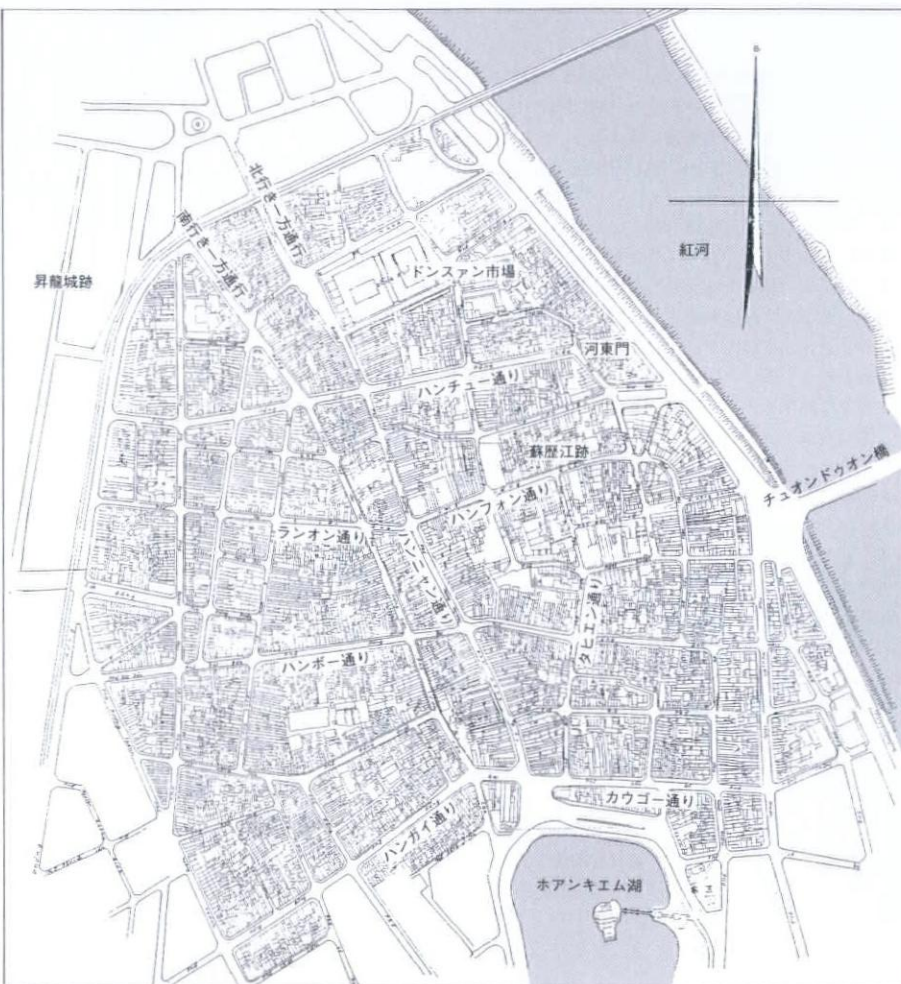
ベトナムの都市における行政組織のレベルは、タインフォー (Thanh Pho、城市)、クアン (Quan、区)、フォン (Phuong、坊)、クム (Cum)、トー (To) という段階に分けられる。タインフォー「ハノイ」は、中心部4クアンと郊外部5クアンから成り、中心4クアンには84のフォンがある。最も中心部のク



36通り地区、20世紀初頭



ドンヌアン市場、1926年



現在の36通り地区



道路建設年代図

- 1873年の道路網
- 1890年にすでに建設されていた道路
- 1902年にすでに建設されていた道路
- 1925年にすでに建設されていた道路
- 1925年以降に建設された道路

ァン「ホアンキエム」には18フォンあり、そのうち8フォンがおおよそ36通り地区に対応する。1フォンはおおよそ7000～20000人で構成され、それぞれ人民評議会、人民委員会を持つ。フォンが最小の公式な行政区界であり、たいいてはその下にクム、トーという非公式の組織がある。1フォンは8もしくは9クムを持ち、クムは、選挙の投票、予防接種、家族計画キャンペーンなど公的な活動を行う。トーはクムの下で、数家族から成り、ごみ収集、道路の掃除といった日常活動を行なう。

ハノイの行政区界を歴史的に見てみると、古くは李朝時代(1010年～1225年)に遡り、全部で61フォンあったのが始まりである。後期黎朝時代(1428年～1788年)の1466年からおよそ300年の間は、2県に分かれ、各々18フォンを持ち、合計36フォンの時代が続いた。その後は変化を繰り返し、中心4区郊外5区の現行の形になったのは1991年のことである。

フォン(坊)とは、都市組織の伝統的形態として非常に重要な単位であり、すべての基本であった。そもそもフォンは、職業ギルドに対応しており、同じ村の出身であるかまたは同業者の集まりであった。かつてはフォンごとに門があり、街区の奥へアクセスする歴史的な小道ゴ(Ngo)が多くあったが、現在では住宅が建てられ、その多くはなくなってしまった。ちなみに、ゴとはいわゆる「路地」程度の道路のことである。ベトナム語で道路を表す単語はレベルごとに変わり、大きい方からドウオン(Duong)、フォー(Pho)、ゴ(Ngo)、ヘム(Hem)となる。最も一般的なものがフォーで、標識があるのはゴまでである。

1954年、第一次インドシナ戦争終結時の大規模な住民の入れ替わりや、1975年サイゴン陥落以後の人口増やその後の人口過密状態で、住民はかなり混乱しており、フォンはかつてほどは住民の生活に影響力を持ててはいない。しかし、現在も行政区界として最も重要な単位であることに変わりはなく、その境界は歴史的に決められてきたものである。ハノイにおけるフォン、クム、トーの区界を示す地図が、1995年初めて作成されたが、境界線は背割線であったり道路であったりと、単純ではない歴史を物語っている。

5. 宗教施設

儒教、仏教、道教が混合した民間信仰を含めると、ベトナム人のおおよそ9割は、仏教徒である。祖先崇拝や英雄崇拝などの民間信仰が盛んで、かつてに比べ、また農村部に比べると混乱しているとはいえ、宗教が都市とその住民に与えている影響は大きい。とりわけ36通り地区には、仏教、民間信仰関連の宗教施設が非常に高い密度で分布しており、ひとつひとつの宗教施設が持つ背景は、この地区の成り立ちを知る上で重要な鍵になる。

一見、判別がつきにくい宗教施設には実は多くの種類があるが、主なものは、仏教寺院であるチュア(Chua、廟)、村の守護神や職業の始祖を奉っており、村の集会所であるディン(Dinh、亭)、国民的英雄などを奉っており、いわゆる神社にあたるデン(Den、壇)の3つである。ディンは最も数が多く、住民の生活と密接なつながりがあり、村ごとに欠かせないものであるが、チュアは皇帝や裕福な人々などが村の外側に建てて寄進したものが多い。36通り地区のように密集した地域では、チュアとディン、ディンとデンなどが結合して建っている場合もある。

36通り地区には、1994年11月に確認した時点で、チュアが7か所、ディンが36か所、デンが15か所で、その内すでに完全に消滅してしまったものが、ディンが12か所、デンが2か所であった。ディンはもと



蘇歴江沿いのディン (Dinh Thanh Ha)

もと、村から職人などが来た時に、村の守護神、職業の始祖を奉るために同時に建てられたものであり、現在も職業ごと、通りごとにディンがあるが、通り名と立地は必ずしもきちんと対応しているわけではない。また、ディンは本来集会所であったため、宗教機能をすっかり失って、人民委員会の集会施設として利用されている場合も多い。

残存する多くの宗教施設では、現在も毎月1日と15日には近所の住民がお参りをし、行事や儀式も健在しており、本来の機能はあまり失われていない。しかし、スペースに関しては、本来の敷地をそのまま保っているものはわずしか少ない。多くの場合、敷地の中に住宅が建てられていたり、さらには本殿の中にまで壁をつくり、住民が占拠したりする場合さえある。1960年の土地改革で農村から追われたり、戦災で家を失くしたりして住みついた者たちである。しかし、必ずしも不法占拠者というわけではなく、洪水などの天災や幾度もの戦災で住居を失った者が、一時的住居として合法的にスペースを与えられ、そのまま住みつき、子孫が増えていった場合も多い。誰が合法的に住んでいて、誰が不法占拠しているかを判断する手段はもはやないという。

1990年頃から、経済的に豊かになったこと、宗教政策が緩和され民間信仰も認められるようになったことなどから、文化財指定が盛んになり、修復ブームが起こっている。ベトナムの行政官や学識者たちが口をそろえて言うように、歴史があり住民の生活に関わりの深い宗教施設は、本来の姿に戻すべきであるのかもしれない。過剰な人口密度を減らし、オープンスペースを確保するためにも、効果的である。しかし、多くの住民の住居となっている現状を考えると、問題はそれほど単純ではない。

ハノイ建設1000年である西暦2010年を目標にした、「ハノイマスタープラン2010」の最新版が、1994



旧福建会館。現在は小学校として利用されている

年認可された。それによると、36通り地区は、フランス植民地時代の発展地域とともに、初めて「保存すべき歴史地区」として位置付けられた。さらに、新しい商業の中心を、36通り地区の北に位置するタイ湖周辺に整備するという計画が盛り込まれている。36通り地区に対し、初の保存を目的とした規制がかけられたり、保存計画の作成が、建設省から大学や政府系研究所に委託されたりと、近年にわかに注目を集めている。局所的には、1000人/haを超す過密状態の解消と居住環境改善のための人口移転計画、交通混雑解消のためのシクロ禁止政策などの交通計画、無秩序な建て替えラッシュに歯止めをかけようとする旧市街保存のための規制と、36通り地区には解決すべき問題が山積みで、混乱を極めているようにも見える。しかし、政策の思惑通りに、人口の減少とともに行人が減り商売の活気がなくなり、シクロが通りから消え、そこら中で鳴り響く建設中の音が聞こえなくなったら、36通り地区はどうなるのだろうか。「保存すべき歴史地区」の「保存」とは一体何を保存するつもりなのか。ベトナムの行政官や学識者の口からは、「建物のファサード」「宗教施設」「道路ネットワーク」といった物理的な要素しか聞くことができなかった。36通り地区の最大の魅力である、過剰な人口密度と商業活動から生まれる活気、賑わいがなくなったら、36通り地区はその歴史的な存在価値を失ってしまうのではないだろうか。ふと、初めて夜中の36通り地区を歩いたとき、昼間の喧騒からは想像できないほど通りが広く、淋しげに見えたことを思い出した。

●つちだ・あい／東京大学工学部都市工学科西村研究室

参考文献

・Hoang Huu Phu, "The Administrative System of Hanoi", 1995
・大西和彦著「宗教と祭祀」、桜井由朝雄編「もっと知りたいベトナム」第2版、弘文堂、1995年



宗教施設分布図



ホーコーの暮らし

辻 鈴子

ベトナム語には「古い、昔の」という概念を表す単語が「コー（古）」と「クー（旧）」の2種類あり、前者はより古いものを示す単語である。ハノイの36通り地区は、現地の人にホーコーと呼ばれている、古い町と言う意味だ。

町は古いのだが、住んでいる人は決して古くない。20世紀に入ってから、住民の大規模な入れ替わりが2度あった。1度目は1946～54年の第一次インドシナ戦争、2度目は1979年の中越戦争に付随するものである。1度目の時は、それまでの支配者であったフランス人や裕福なベトナム人が、2度目の時は華僑と中国系のベトナム人が南部や国外に避難していった。その空き家に、地方出身の元兵士とその家族が大挙して移り住んできたのだ。したがって、今現在36通り地区に住んでいる生粋のハノイっ子は非常に少ない。

ハンカン通りに住む71歳のおばあさんは、その数少ないハノイっ子のひとりである。彼女の家は5代前からこの場所でお茶の販売をしていた。彼女の代からは国営企業に勤めに出て生計を立てていたが、引退した今は、以前の店舗だった間口の片隅で細々とお茶を販売している。1895～1896年頃に建てられた伝統的な町家（ニャーヒンオン・管の形をした家）に小規模な修復を加えながら、娘と息子世帯と一緒に家族10人で暮らしている。

過密居住

前述の彼女の家は、煉瓦造の壁とベトナム瓦を屋根材に使用した、ベトナムの伝統的な町家である。しかし、ホーコーには伝統的な町家だけでなく、仏領インドシナ時代に建造されたと思われるフランスのヴィラを模した外観の町家も多い。それらの多くは2、3階建てで、現在は街路に面した1室が店舗として利用され、商業地としてのホーコーを構成している。奥や上部は居住部分で、1部屋に1家族が居

住しているのが普通である。昔は1館全体が1家族のものだったのだが、「相続時に分割され、それが人手に渡る」というのを繰り返し、今は集合住宅になっている。

ベトナム人の血族間の結びつきは強く、ホーコーでも親族が1館に同居するのは当たり前であった。しかしここ数十年、1世帯当たりの家族数が増えすぎて、子供が結婚したら独立して別居するのが普通になっている。それでも独立する際には、できれば近くに住みたいと願い、子供世帯もホーコーに住居を探すことになる。そのため、部屋数の多い住宅は、一室単位で切り売りされ集合住宅に姿を変えた。

集合住宅といっても、集住するために建てられたわけではないため、水まわり（コンチンフ）は基本的に1箇所に集められている。商売をしている家では専用のトイレ（ニャーベーション）、浴室（フォンタム）、上水道を所有しているところが多い。室単位での増改築が盛んで、そういう家庭にはテレビはもちろんビデオ、ステレオ、クーラーという高級電化製品が揃っている。

ただ、所得格差がかなり大きいので、現在でも水まわりを共同で使用している家庭も多い。水道が敷地内がない場合は、街路沿いの共同井戸を利用し、野菜を洗っている隣で洗濯をしたり、歯を磨いている光景を見かける。敷地の奥にある数家族が使用している共同トイレや浴室のメンテナンスは、居住者が当番制で掃除したり、業者に任せたりといういろいろである。

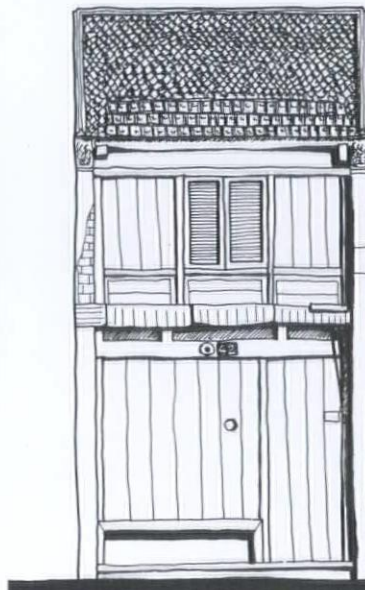
「仲の良い家族とは一緒にお寺にお参りに行ったりのもするけど、挨拶程度しかしないところも多いよ」とレンタルビデオ屋の女主人に言われたが、様々な経済事情によりやむなく集住しているようで、一般には地縁のコミュニティの結びつきは固くない。「ベトナムの都市は基本は農村だ」と、ベトナムの学者は言うが、流動性が高いホーコーには農村特有の強固な地縁コミュニティは存在しない。特に最近では、ホーコーに住み続けることさえ困難になっている。

人口が飽和状態にある今、郊外に新しい家を建て、ホーコーでは商売だけ続けるケースが多いようだ。ますますコミュニティの断絶が進んでゆくのだろう。

商業地区・ホーコー

政府から正式に許可されている市場は、ホーコー内には3カ所しかない。市場では生鮮食品、乾物、衣類、生活雑貨等、生活必需品がほとんど揃えられるため、いつも買い物客でごった返している。ここで店を開くためには、政府にまず、頭金として数百万ドンを支払い、その後、月々の売り上げの数%を買貸料として支払わなければならない。現在、多くの人はその頭金を支払うことができないため、政府に無許可で仮設の市場を作ったり、自宅や近所の店先を借りたり、行商をして収入を得ている。ホーコー全体が市場であるかのような印象を与えるのはこのためだ。

1986年からのドイモイ政策、特に89年の私的企業の認可により、個人で店を開くことが可能になり、それ以前は、普通の住宅しかなかった通りが商店街化ようになった。特に顕著なのは、ハンクアット通りである。以前は秘密裡に仏具を製造・販売する家が数件しかなかったはずのこの通りは、ドイモイにより宗教的弾圧が和らぎ、現在では仏具屋通りになってしまうている。ここは製造と小売を兼業している家が多く、ほとんどが職住一致である。だが、職住近接型も増えている。街路に面した一軒家の店舗部分の利用権だけを購入し、近くの家から通勤するスタイルがここ3年ほどで増加している。男性はハノイ市近郊の国営もしくは私営企業に勤務し、女性は大規模な小売を営むケースが多いため、ホーコーで働く人の中では女性が圧倒的に多く、遊んでいる人は男性が多いようだ。人口が飽和状態になっているため、就職口を見つけるのは困難らしく、1990年頃に地方から親戚を頼って出てきた出稼ぎ労働者



- 1: 仏領時代の兵舎跡にある市場。朝6時頃から夜8時頃まで客足が絶えない
 2: HÀNG CẦNを通り42番地町屋ファサードスケッチ／画＝津村泰範
 普段は1階の開口部のハメ板をはずして商売（紙屋）をしている

- 3: HÀNG BỒを通り26番地町屋内部。修理店の2階。天井高3.8m
 4: 敷地の奥にある共同井戸で野菜を洗う
 5: 人だけでなく物資の運搬にも使われるシクロ
 6: 道端の青空理髪店
 7: HÀNG CẦNを通り42番地断面図／画＝大嶋信道

は、シクロの運転や建設業に従事しながら暮らしている。一家の何人かが働けば、家族十数人全員が食べてゆける仕組みになっている。

外食産業

一般にベトナム人の朝は早く、仕事を始めるのが朝7時半頃である。朝食は通勤途中に屋台や行商、大衆食堂等のうどん（フォー）、粥、サンドイッチ等で済ませることが多い。都市生活者の食生活を支えている屋台、大衆食堂（コムビンザン、クアンアイン等）は朝7時ぐらいから夜9～10時ぐらいまで営業している。一食5000～6000ドン（50円程度）でまかなえるこの食堂は、家と家の隙間や路地の入り口付近に何軒か集まって営業している。近所の自宅調理した料理を、ビニールクロスを広げた低めのテーブルの上に並べ、木製のベンチかプラスチック製の風呂用椅子をテーブルの周りに配置して準備は終わりである。食事時だけではなく、昼下がりにも客足が途絶えることはない。

喫茶だけの小さな露店（ハンヌック）も多い。店先に小さなテーブルと小さな椅子をいくつか並べてガム等の駄菓子とベトナム茶を売っていて、いつでも近所の人たちのたまり場になっている。低い小さな木の椅子に腰掛けると、それまでは狭いと感じていた街路の空間が驚くほど広く感じられる。現地の人がここで1日のうちの何時間かを過ごしているのは、自分の狭い家の中にはない、広い空間を求める生理的な欲求があるからかもしれない。

また、ホーコーには行商をしている女性が多い。野菜や果物の行商は、ハノイ近郊の農村から週に1～2回徒歩で通ってきている。安い賃宿（1500ドン・13円程度／日）に宿泊しながら、家族が栽培した農産物を完売するまで売り歩く。軽食やデザートなどの行商はホーコーの住人で、自宅で調理をしてそれを竹の籠に乗せ、天秤棒でかついで売り歩く。ただ、



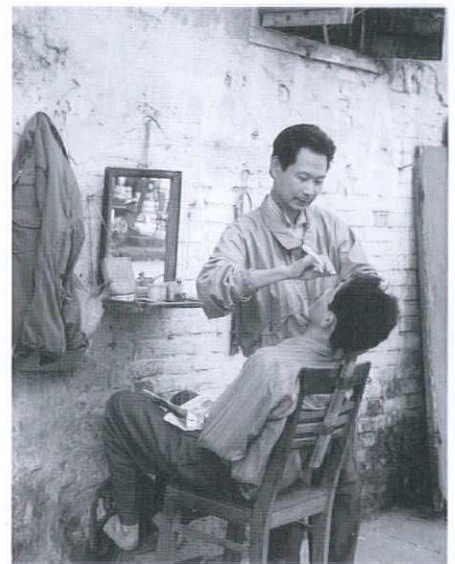
3



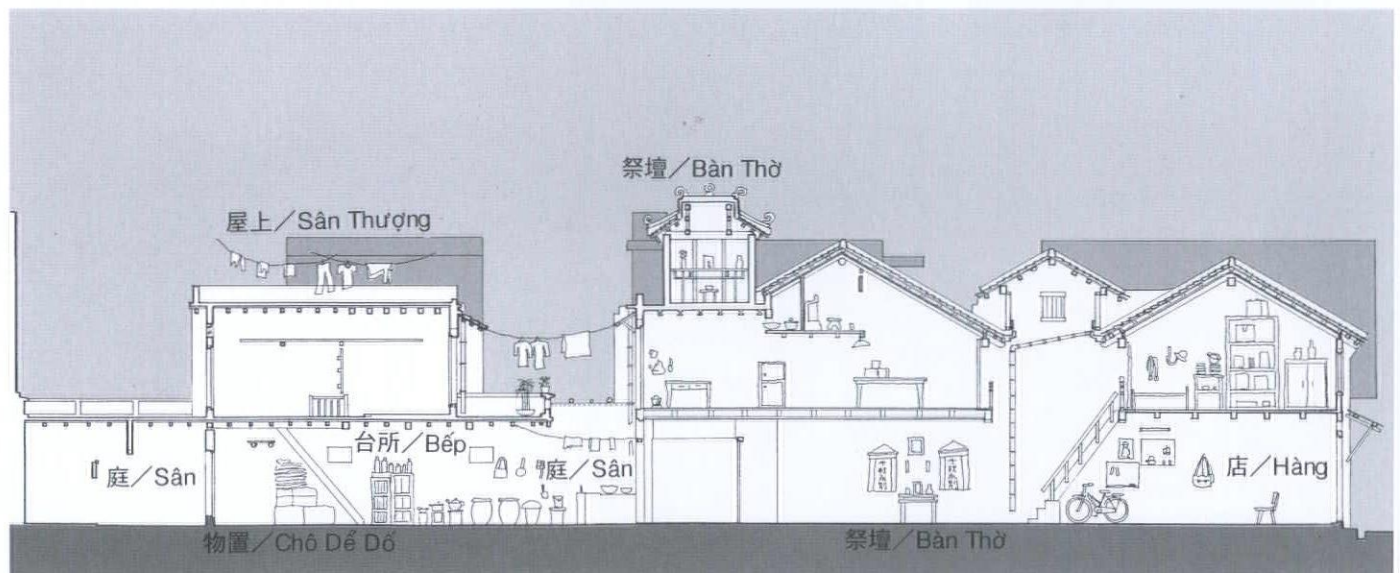
4



5



6



7

街路で立ち止まっただけの販売は禁止されているので、彼女たちは公安に見つかったら2万ドンを払わなければならない。ドイモイ以前からこのような行商は存在していたが、近年、その数が増えている。店を開業したため一日中店番をしなくてはならず、自分で市場に食材を買いに出掛けられなくなった人達が増え、行商に対する需要が大きくなったためだ。本来ならば取り締まらねばならないのだが、当局側も見て見ぬフリをしている。

建設ラッシュ

ドイモイ政策により皆がベンチャー・ビジネスに目覚め、様々な新しい職業が見られるようになった。特にホーコーで台頭しているのは5〜6階建ての数室しか客室がないミニホテルである。コロニアル風の外観を模したものがほとんどで、1991〜1992年から建設が盛んになった。すでに飽和状態であるにも関わらず、建設計画中のものもまだ多い。オーナーにはカナダやシンガポールにいる越僑の親族がいて、その送金でミニホテルを建てる。建設資金は1000万円から2000万円で、2、3年で回収できる見込みだそうだ。オーナー自身は近くに別の家を持っていて、そこから通ってくるのが普通だが、ホテル内の一室を家族用にしている場合もある。「ホテルは不動産だから元利を失うことはない。資金の流用としては良好な方法だ。ただ、これからはミニ・ホテルではダメだ。もっと設備の良い、客室数の多いものを建てなければ商売にならない」と元軍隊のパレーボール選手だったオーナーは、そう言っていた。

街区の中心部でも建て替えラッシュは進んでいて、ペンシルビルが林立している。また、香港の衛星放送、スターテレビを見るためのパラボラアンテナも多い。ドイモイ以前は建設材料も不足していたため、建て替えが盛んになったのはここ2〜3年のことだ。真新しい3、4階建ての白い住宅と、古い低層の瓦

屋根の住宅がモザイク状にせめぎあっている光景は壮観だ。「ホーコーの住人は金持ちだ」という、ハノイの他の地域の住人の言葉は正しいようだ。

最後に、冒頭のおばさんの一日を紹介しよう。

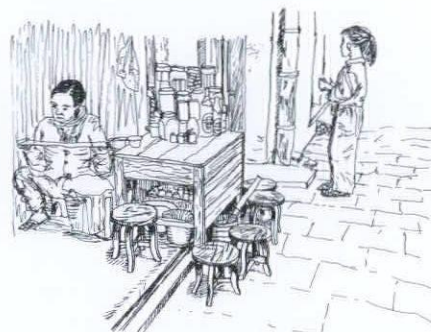
彼女の娘や息子は皆私営企業に勤めている。朝と昼は孫達と彼女だけなので、行商の売り歩く軽食などで軽く済ませる。普段家にいる孫達が店番をしたり、お茶の袋詰めをしたりと、彼女の商売を手伝っている。その間に彼女は近所の人たちのおしゃべりや昼寝、散歩を楽しむ。家族全員が集まるのは夕食のみであるため、昼過ぎ頃に近くの市場へ行き、夕食の材料を買い求め、娘や嫁と夕食の支度をする。

彼女の家には、中庭に貯水槽（ベヌォック）があって、その周りで洗濯、炊事が行なわれる。トイレと浴室はセットにされ、敷地の奥に独立して建てられている。昔は台所（ベップ）も敷地の奥に独立して建てられていたが、電気炊飯器等の電気製品の普及に伴い「あそこもここもベップだよ」という状況になっている。また、信心深いベトナム人の例に漏れず、彼女の家にも電飾付きのご先祖様の祭壇や地祖神の祠があり、朝夕お祈りをしているそうだ。

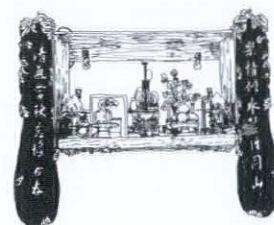
彼女は古い家に大いに不満があるらしく、「今はお金がないから建て直しができないけど、孫が大きくなったら新しくして便利なのに建て直すんだから、古い家が良いと言って建て替えて反対しないでくれ」と釘をさされた。現地の住民も古い町家の重要性を理解しているものの、だからといって、不便な生活を強いられるのはまっぴらなのだろう。自助努力で改善しようとしているこの町の、今後何年か続くであろう変容を見続けたい。

●つじ・すずこ／東京大学工学部都市工学科西村研究室

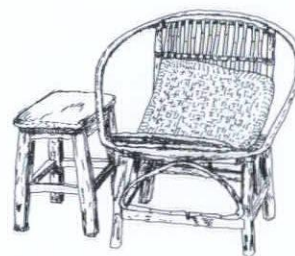
スケッチ：辻 鈴子



アクセサリー屋の店先にある茶店／Hang Nước



吊り祭壇（電飾付き）／Ban thờ



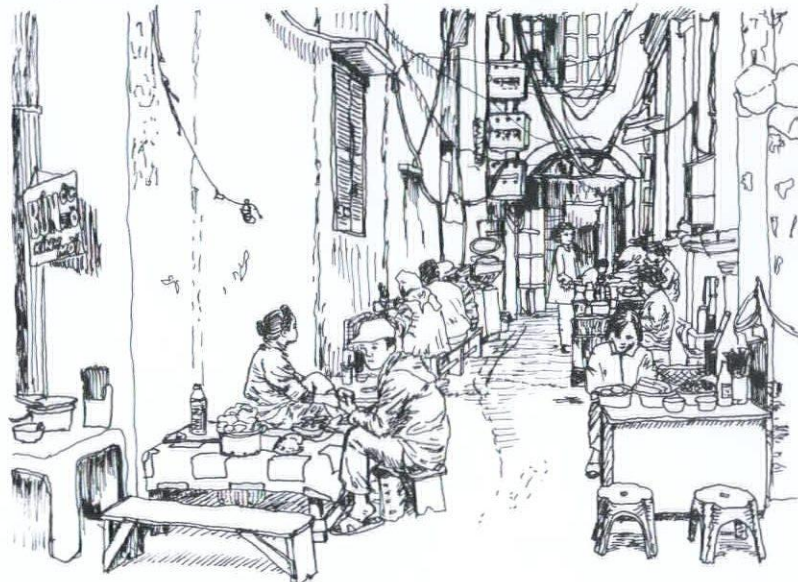
籐製椅子／Ghế mây。道端でばあさんが座っている



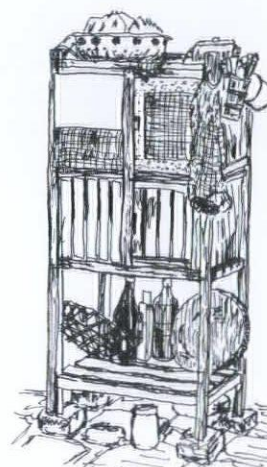
ベトナム茶用の茶器セット
茶碗の口径4〜5cm／Bộ ấm chén



練炭のかまど／Bếp than



大衆食堂／Cơm bình Dân。どこの店も作りとメニューは、ほとんど同じ



食器棚／Chạn

町屋の構造

36通り地区の町屋の間口は、ほとんどのものが2m～5.5mの範囲にある。構造的には、1930年代にコンクリートスラブが現れるまでは、敷地の両側にレンガの界壁を建て、間口方向に、木造の床梁、屋根梁を架ける形式である。界壁の厚さはレンガ1枚積みであるが、隣地の建物が先に建っていて新しい建物の高さが隣地建物より低い場合は半枚積みの壁を添わせているケースもある。隣り合う界壁は、隙間を空けずに建てられるが、1枚の界壁を両方の家で共用する共有壁タイプのものは見られなかった。

梁の端部は建物の側面に露出していないので、レンガ半枚分界壁の中に食い込ませていると考えられる。梁は間口の幅に1本で架けられ、鉛直力は両側の界壁で受け持つ。よって構造的な柱は1本もなく、柱がある場合も間仕切りの方立的な扱いとなる。これは36通り地区の町屋の架構形式の特徴で、ハノイにおける宗教施設やハノイ近郊の農家に見られるような柱を立て、その間に梁や桁を架け渡して自立した木造架構を構成し、その外側に組積造の壁を廻す形式とは原理的に異なっている^{*1}。

町屋の建築類型

1. 伝統的町屋・タイプI（登り梁構造）

36通り地区の町屋で、ファサードに底を出した勾配屋根を見せるものを本稿では「伝統的町屋」と呼ぶ。

伝統的町屋の屋根架構に注目すると大きく分けて2種類ある。まずひとつは本稿で「タイプI」とした屋根架構で、間口方向に架けた梁ないし、桁の上に登り梁を屋根勾配に沿って渡し、30～40cmピッチの母屋を受けるものである。母屋上には厚さ1～2cm幅10cm程度の野地板を間隔を空けて並べる。登り梁は軒先から棟上まで1本の材を用いる。外部から見えるファサード側の小口には「寿」の字が彫り込まれている建物も複数見受けられる（図1）。登り梁の本数は間口の狭い建物で2本、広いもので4本で、4本以上のものはない。4本登り梁がある場合、登り梁相互の間隔は均等ではなく、中央部分がその両側より広く配置される。外側の登り梁から界壁までの距離は、界壁の屋内面にほぼ接するものから30cm程度離れたものまで様々である。

登り梁の棟側の収まりは、棟梁によって支持される場合と^{*2}、中間梁の上に渡し梁を置き、登り梁と仕口を組んで緊結するものがある（図2）。この場合、登り梁同士を棟の下で交差させ、屋根瓦の下に接するぐらいまで延ばし、交差部分の上に棟母屋を載せる。

この形式の屋根架構をもつ建物は、断面形状から以下の3つに細分される。

タイプIa：外観上、平屋建てに見えるが内部の奥行き中央部分に中2階を持つタイプ（図4）。中2階の床は間口方向の梁によって支持される。2階床と天井の間が一番低い所は高さが1m程度で、この部分は開放になっている。この2階に上るための階段はなく、はしごを使って昇降する。

- 1：Hang Can通り42番地町屋の軒先ディテール
- 2：Hang Can通り22番地町屋の小屋組
- 3：Hang Can通り20番地町屋の2階部分
- 4：Can Go通り40番地町屋

タイプIb：タイプIaの2階部分の屋根が高く持ち上がり、凸型断面になったのがこのタイプである。外部から見える2階の壁面には、小さな開口部が1ヶ所、または2ヶ所穿たれる。

この部分の軒は壁面からほとんど出さずに、桁と登り梁の小口が漆喰で塗り込められ、屋根瓦との取り合い部分の壁面上端にコーニス状のモールディングが付く（図3）。室内側から見える2階床梁と1階の屋根の間の面は、無開口の壁になり、2階床に空けられた開口部にはしごを架けるか、急勾配の階段で2階に上る。

タイプIaおよびIbの2階部分は、現在では物置、仏間、あるいは寝室と様々に用いられているが、建設当初の用途は不明である。

タイプIc：総2階建のタイプで、2階は明らかに居室として造られている。ファサード面は改変されているケースが多いが、2階部分の中央に開口部を設け、両側の袖は板壁のものが当初の姿であると思われる（図5）。

2. 伝統的町屋・タイプII（垂木構造）

町屋の中には、外観のシルエットは前述のタイプIaあるいはタイプIcとほぼ同じで、屋根架構の異なるものがある。これが「タイプII」で、梁あるいは母屋に相当する材を間口方向に屋根勾配に沿った高さで架け渡した上に、垂木を30cm程度のピッチで並べた架構となっている。この場合、野地板の向きが屋根の流れに対して垂直になる（図6）。タイプIIの町屋がタイプIと異なる点は、他に屋根瓦の形状が拳



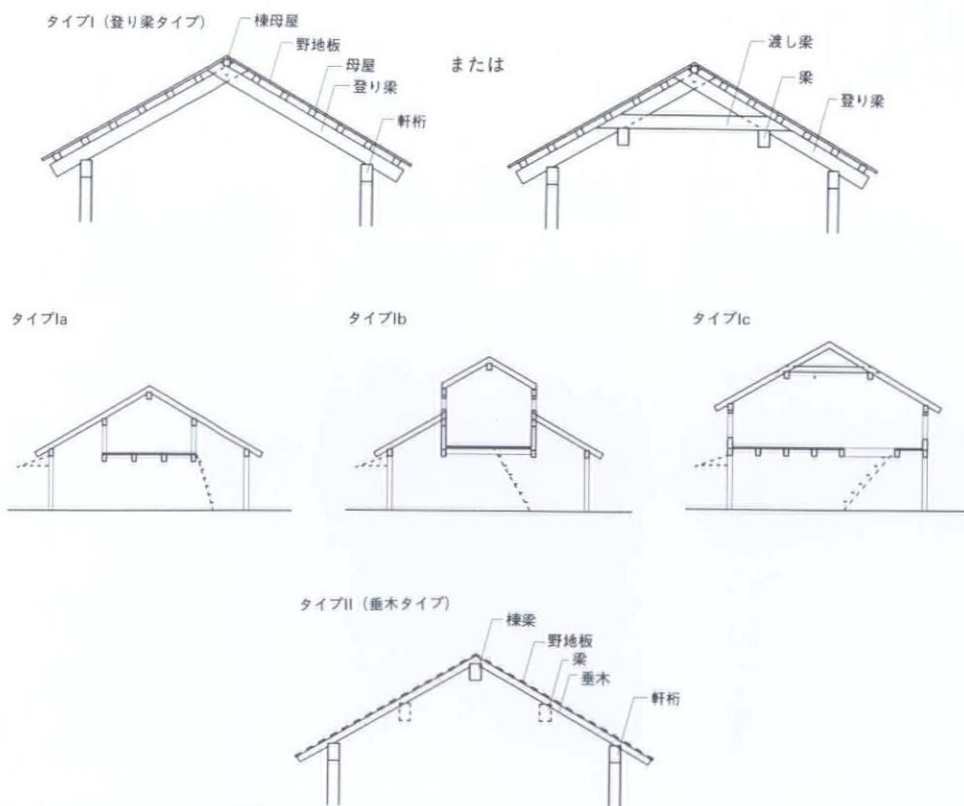
1



2



3



36通り地区の伝統的町屋の架構模式図

- 5: Hang Can通り42番地町屋
 6: Luong Van Can通り26番地町屋の2階部分
 7: 伝統的屋根瓦 (Hang Duong通り13番地町屋)
 8: Hang Luoc通り24番地町屋
 9: Hang Bo通り57番地町屋
 10: Hang Giai通り26番地町屋
 11: Hang Bo通りの共同水道

げられる。タイプIの屋根は野球のホームベース状の平瓦を鱗葺きにする(図7)。この葺き方は、宗教施設や古い農家に広く用いられているベトナムの伝統的な技法である。これに対して、タイプIIのものは、いわゆるフランス瓦と呼ばれるリブ付きの平瓦で葺かれている。この瓦は文字通り、フランスにおいて一般的な屋根材で、ハノイのフランス植民地建築にも多用されていることから、フランス人技術者によってベトナムにもたらされたものと考えられる。ちなみに、垂木構造の屋根架構は、1890年にフランス人技師によってハノイに建てられた商館で用いられている³⁾。よってこの架構形式は、フランス人技師の技術が町屋建築に波及した可能性も考えられる。

3. ベトナム古典主義町屋

今世紀の初頭あたりから1930年前後まで、ファサード全体が漆喰塗のヨーロッパの古典主義系の意匠で構成される町屋が建てられ始める(図8)。ファサードを詳細に観察すると、1階は店舗のため、間口いっぱいに開口を取るのとは以前と同じであるが2階は、古典主義的なピラスターで多くの場合3分割し、それぞれのスパンの間に縦長の両開き窓を取る。中央の窓は小さなバルコニー付のフランス窓にする場合も多い。2階の上部は、パラペットを高く立ち上げて凸型のスカイラインとし、その部分に建設年代を書いたメダリオンが付くこともある⁴⁾。パラペットの背後は、伝統的町屋と同様の勾配屋根があり、日本における「看板建築」と同様な構成となっている。

ファサードの初期のデザインは、比較的小さな新しいうルネサンス系のヴォキャブラリーを用いているが、20年代に建てられたものは、ネオ・バロック風に派手である(図9)。また、中国風モチーフとの折衷は程度の差はあれ広く見られるが、個々のディテールは、ヨーロッパの古典主義オーダーにかなり忠実で、日本の擬洋風建築の様なごちなさは見られない。

このタイプと同様の町屋形式は、ハノイに限らず、中国南部を含む東南アジアの植民地都市の中華街に広く分布する。よって、伝統的町屋からこの形式への移行にはベトナムのフランス植民地建築の影響の他に、華僑の情報ネットワークによって、アジアの別の都市から伝播したということも十分考えられる。

4. ベトナム・アールデコ町屋

1930年代になると、ファサードのデザインモチーフが古典主義系からアールデコに移行する。これは、フランス人地区のヴィラ建築でも同時期に同様の変化が現れる。またこの時期、床が木造からコンクリートスラブに変わり、屋根もフラットルーフとなる。また、3階建の建物も増えてゆく。このベトナム・アールデコ町屋の中には、店の名前をスーパーグラフィックで屋上のパラペット部分と1階の上部に造り付けたものも多い(図10)。これは、同時期のフランス建築にも見られる⁵⁾。

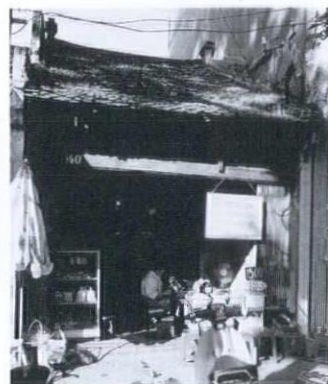
このアールデコの影響は、戦後に建てられたり、改装された町屋にも、ファサードデザインや看板文字の書体に根強く残っている。

各タイプの町屋の建築時期

1873年のフランス人のハノイ占領当時の36通り地区は、紅河の氾濫による洪水に度々見舞われる湿地帯であった。また、通りには排水施設がなく悪臭が漂い、馬車が通るのが困難なほど商人の露店がひしめき合っていた。現在のこの地区の通りは、フランス植民地時代に整備された歩道と排水溝がそのまま残り、生活用水も歩道の下に通っている水道に依存している(図11)。これらの施設は、フランス人のポール・ペールがハノイに総督として着任した1886年以来、順次整備されていったもので、フランス当局は道路整備にあたって、街路を浸食していた小屋と屋台を取り払う大規模なクリアランスを行い、また同時に旧来の通りを拡幅した。現在の36通りの町屋は、基本的に、フランス時代に整備された道路に沿って建てられている。一部の通りには数軒にわたって、現在の道路境界線より50cm程度突出している所もあるが、これは、その通りが市電を通す等の理由により拡幅される以前の、最初に整備された道路境界に沿って建てられたものであろう。

以上のことから、街区の中央部に位置する宗教施設を除き、現存している町屋の少なくとも道路に面した部分の建設時期は、ポール・ペール時代の1886年以降であると考えられる。

次に、各タイプの町屋の建設時期だが、伝統的町屋タイプIに属する町屋は、36通り地区の1902年以降に新設された街路には現存しない⁶⁾。このことが



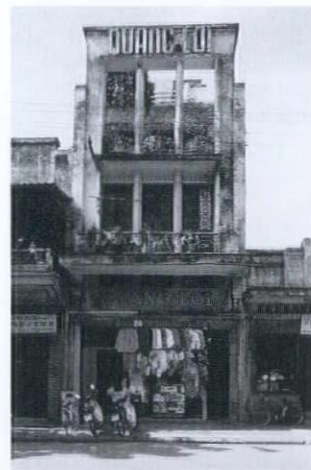
4



6



7



10



5



8



9



11

ら、直ちに伝統的町屋タイプIが、1902年以降に建てられなくなったとは言いきれないが、少なくとも今世紀初頭以降、タイプIの新築は、急減したと考えられる。また、これはベトナム古典主義の町屋の発生時期に重なる。

一方、伝統的町屋タイプIIは、36通り全域に存在するのみならず、ハノイ郊外のHoang Hoa Tham通りや、ハノイ近郊の幹線沿いで、現在でもこのタイプの構造形式の町屋が建てられ続けている。また、タイプIIの建物は、タイプI、ベトナム古典主義のものに比べて建物全体のつくりが雑で、木の部材も貧弱である。

前世紀末から今世紀初頭にかけて、フランス当局によって記録された建物の構造種別ごとの建物着工件数によると、36通り地区を含む現地人街では当局によって、防災上、美観上好ましくないと制限されていたにもかかわらず、1904年当時には相当数の藁葺造の町屋が建てられていた。しかし、今は1棟も現存していない。

以上の点から町屋の遍年を類推すると、1級町屋と2級町屋のふたつの流れが存在すると考えられる。

まず1級町屋は今世紀初頭に、伝統的町屋タイプIからベトナム古典主義町屋に、その後1930年代以降、ベトナム・アールデコ町屋に推移する。伝統的町屋タイプIは、構造形式上Ia→Ib→Icの順で進化していったことは容易に想像できるが、現存するタイプIの町屋の建設時期の前後関係は、はっきりと断定できない。

一方2級町屋は、今世紀初頭以降、藁葺造町屋が

36通り地区の密集化の進展や建築規制などにより、伝統的町屋タイプIIに変化していったと想像される。

町屋の敷地形状と建物配置

1. 鰻の寝床状敷地（管状住宅）

36通り地区の町屋の特徴として、間口が狭く、奥行きが非常に長い敷地割りが挙げられる。極端なものでは間口2.5mに対し奥行き58mに達するものもある。このような町屋を現地ではNha Hinh Ong（直訳すると管の形の家）と呼んでいる。ベトナム独立以前に建てられた町屋の中で、後の改装が少ないものの建物配置を見ると、タイプIaおよびタイプIbのものは、同形式の棟が中庭を隔てて3棟ないし4棟建てられ、多くの場合道路側から2番目の中庭が炊事用途に充てられ、水瓶ないしコンクリート製の貯水槽を備える。ここで注目すべき点は、各々の棟は、伝統的な宗教施設のように谷樋を介して接するような配置はほとんど見られないことである。敷地の一番奥は、後ろ側の隣地境界壁に接して便所棟があり、便所の前の中庭は他に比べて奥行きが長い。これは便所からの臭気の影響を避けるためだと考えられる。

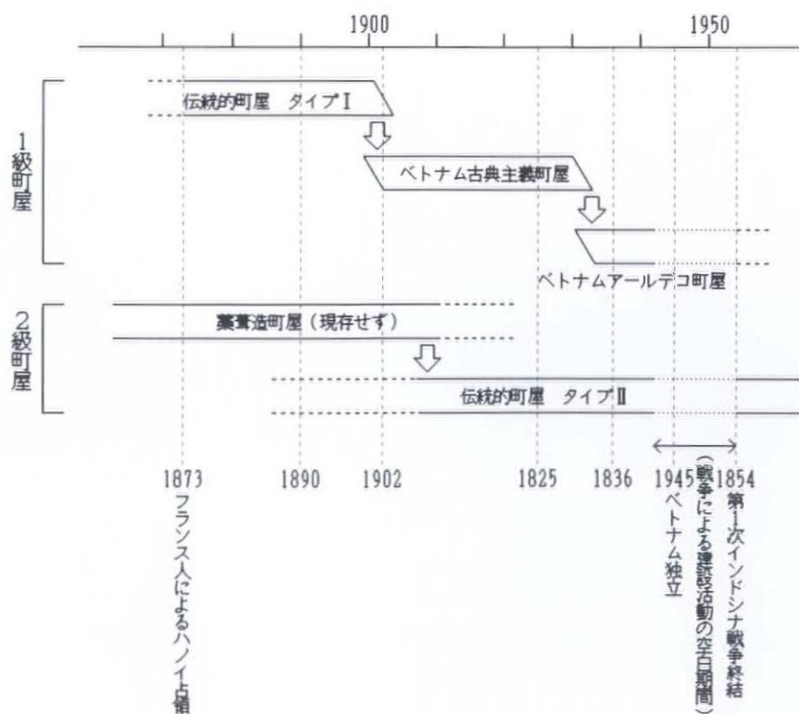
タイプIcのものは、道路側から最初の中庭に切妻の上屋がかけられ、吹抜の階段室となっているものがあり、この部分は、前後の棟と同時期につくられた場合と、後の増築によるものの両方がある。この上屋は、前後の棟の屋根より高い所にあり、前後および両妻から光を採る。前後の棟の排水は、境界壁の

内側に露出した樋による。また、当初からのものか後の増築によるものかは定かでないが、間口の広い町屋の場合に道路側から最初の棟と2番目の棟を境界壁から片流れの屋根を持つ渡り廊下でつなぐ形式のものもある。

ベトナム古典主義町屋の建物配置については、今回の調査では確認できなかったが、屋根がフラットルーフになったベトナム・アールデコ町屋では、道路側から1番目と2番目の棟の一体化が進み、最初の中庭は完全に内部空間化するが、この空間構成は、タイプIcの階段室を継承したものといえる。また、2番目の中庭が炊事用途に用いられることは以前の場合と同様であるが、この空間にコンクリート製の外部階段を設けて、ここから2階の居室にアクセスするような変化が見れる。伝統的町屋においても、コンクリートの普及した後に、2番目の中庭へ外部階段を設置する改装例が一般的に見られるようになる。

2. 奥行きの浅い敷地

36通り地区には、前述の管状住宅の系列とは別に、比較的奥行きの浅い敷地割りに建つ町屋がある。この敷地の間口は、管状住宅と同様であるが、奥行きは3~4mから10m程度であり、母屋棟の後ろの空間に付属屋や便所棟がついた程度の規模で、便所は母屋に接して建てられる場合もある。このような奥行きの浅い敷地の成立には、2通りある。まずひとつは、4本の通りに囲まれたあるブロックに注目したとき、そのうちの3つの通りは鰻の寝床状の敷地割りで、残りのひとつは、奥行きの浅い敷地割りに



36通り地区の町屋の建築時期



12



13

なっている場合である。これは、この浅い敷地に面する通りが、管状住宅の立ち並んだ後に新設されるか拡幅整備されたことを物語っている。もうひとつのケースは、ブロック中央部の宗教施設の前面部分にこの敷地形状の町屋が立ち並ぶ場合で、これは宗教施設の敷地が、徐々に町屋に浸食されていったものと考えられる。宗教施設の中には当初の前面空間が町屋によって完全にふさがれ、本堂には本来とは別の曲がりくねった細い路地からしかアプローチできないものもある。

これら奥行き浅い敷地割りに建つ町屋には、伝統的町屋タイプ1のものはない。よって、この形状の敷地は今世紀に入って、管状住宅の成立より遅れて現れたものであるといえる。

町屋以外のビルディングタイプ

36通り地区建物の中で、宗教施設、工場、市場等以外の建物で、町屋タイプ以外の形式の建物も総数としては少ないが存在する。

1. 集合住宅

図12は、ベトナム古典主義のファサードを持つ集合住宅の例で、2階部分は窓3つで1単位になっている。この集合住宅は、内部の改変が激しく、当初棟割り形式であったか、フラット形式であったかは不詳である。図13は、ベトナム・アールデコタイプの

集合住宅で、シンメトリーのファサードの中央にエントランスを持つフラットタイプの集合住宅である。集合住宅は、奥行き浅い敷地割りの通りにのみ存在し、管状住宅の並ぶ通りに混在することはない。

2. 角地タイプ

街区の角地に位置し、ベトナム古典主義、およびベトナム・アールデコのファサードを持つ建物がある(図14)。階数は2階～3階建てで独立した階段室を持ち、1階の店舗と2階以上の住居空間との独立性は高い。この角地タイプの立地と敷地形状には共通した特徴がある。まず立地は、管状住宅の並ぶ通りと奥行き浅い敷地が並ぶ通りとの角に位置し、建物は管状住宅側の間口は狭く、3～5m程度で、他方の間口は広い。またコーナー部は、大きな角切を伴う。このことから、このタイプの建物は新しく道路が新設、または拡幅整備されたときに建てられたものであると考えられる。

3. ヴィラタイプ

36通り地区の町屋の並ぶ通りに建物の1階部分が店舗としてつくられていないものがある(図15)。これは明らかに、フランス人地区の商館やヴィラをモデルにしたもので、裕福なベトナム人や華僑の邸宅としてつくられたものと思われる。また、街区の奥まった所にあるかなり大規模な邸宅も現存する¹⁷⁾。この敷地には狭い路地によってアプローチする。

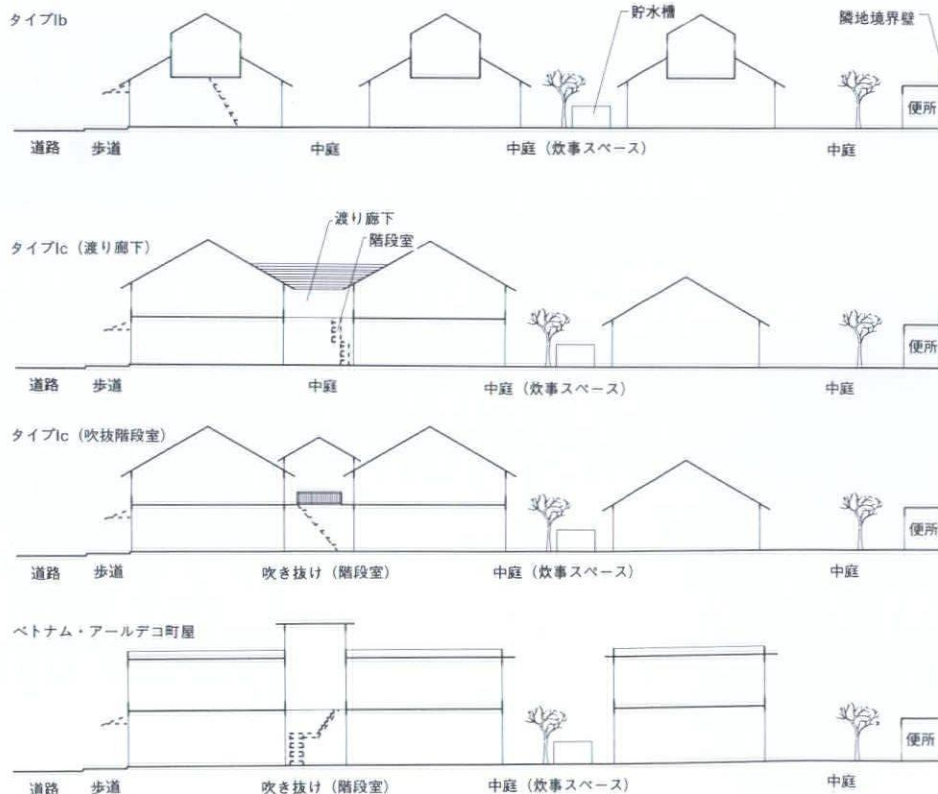
●おおしま・のぶみち/建築家

注

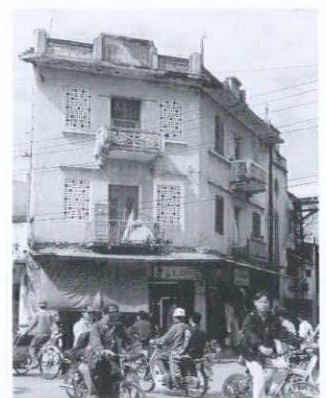
- * 1: ホイアンおよびフエにおける伝統的町屋も柱を建てた外側に界壁を廻す形式である。久布自兼昭+福川祐一=著「ホイアンの町屋とフエの民家」、昭和女子大学国際文化研究所紀要(Vol.1, 1994)を参照。
- * 2: Hang Can通り42番地町屋。p.51 図7参照
- * 3: Ba Trieu通り41～43番地建物
- * 4: ベトナム古典主義町屋の中で、建築年代が書かれている最古のものは、1902年のDien Bien Phu通り8番地町屋、最新のものは1930年のTa Hien通り3番地町屋である。
- * 5: 現公安警察病院、Ly Thuong Kiet通り89番地
- * 6: p.47 「道路建設年代図」参照。
- * 7: cf. 田中ユウ子。Hang Be通り44番地、1926

参考文献

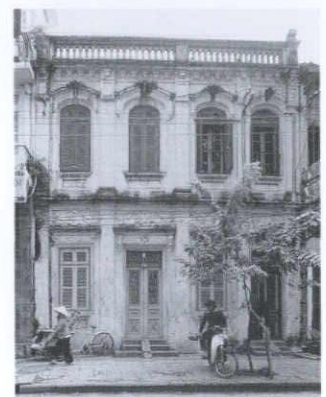
- 『看板建築』藤森照信=著、三省堂、1988年および、拙稿
- 『商店建築観察ガイドブック』『東京人』、1995年4月号
- 『フランス植民地時代のハノイの都市計画と建築』大田省一=著、1994年東京大学大学院修士論文、p.20、25-26、30-31
- 『The Historical Environment and Housing Conditions in 'The 36 Old Streets' Quarter of Hanoi』、Hoang Huu Phê+西村幸夫=著、Asian Institute of Technology Bangkok, Thailand, 1990 p.40



管状住宅の断面模式図



14



15



凡例
現名称
旧名称
所在地/竣工年/設計者



1. 西方崇福寺 Chùa Tây Phương
3世紀/不詳/不詳

高さ約50mの山上に建つこの寺の創設は3世紀といわれる。1632年に改築され、像および鐘が新たに造られた。西山時代の1794年、2年後に金蓮寺を建てた工匠によって寺全体が改築された。



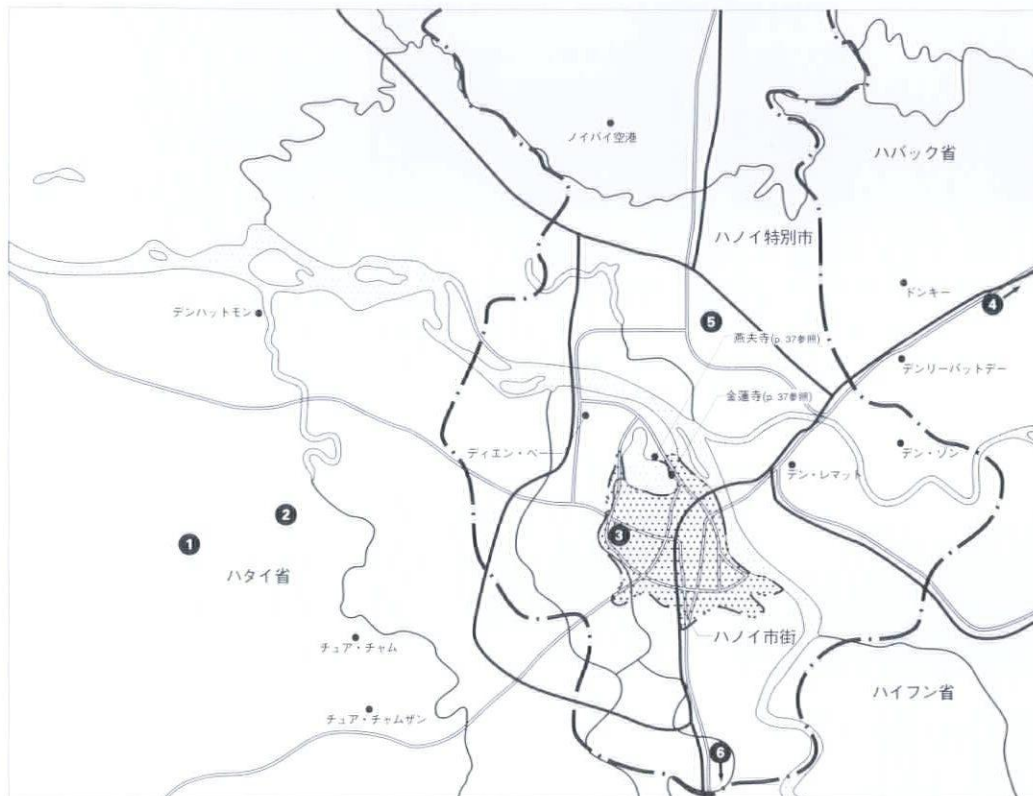
2. 天福寺
Chùa Thầy (Thiên Phúc Tự)
11世紀~12世紀/不詳/不詳

寺の創設は李仁宗時代である。当時は小庵であったが増改築を重ねられ、現在は大伽藍を構成している。背後には山が聳え、前方には池があり、池中の樓閣では伝統芸術である水中人形劇が行なわれる。



3. 昭禅寺
Chùa Láng (Chiêu Thiên Tự)
12世紀/不詳/不詳

約60mの参道を通ると八角亭があり、その後に本殿がある。改修を重ねられており、中国とベトナムの建築要素が混在する。現在の建物は19世紀中頃に改修された時のものである。



作図=久世 健



4. ディンディンバン
Đình Đình Bảng
1736年/不詳/不詳

村の集会所であるディンの中でも最大の部類である。大きく重い屋根を低い柱が支える、アルカイックな魅力のある建築。本殿はクアバックバンといい、集会所に当たる。豊富な彫刻が施されている。



5. コーロア城跡 Thành Cổ Loa
不詳/不詳/不詳

紀元前3世紀に安陽王が築いたのが始まりといわれる。現在は煉瓦造の城壁が残り、ベトナムでの煉瓦による築城の歴史を知ることができる。



6. ファットジェム大聖堂
Nhà thờ Lớn Phát Diêm
1875-99年

ベトナム人神父陳六が建造した。越洋折衷の巨大な木造教会建築。正面から池、拝殿、本殿と配置されている。本殿の正面は煉瓦造だが、その後ろには木造の礼拝堂が伸びる。巨木の柱が並ぶ礼拝堂は壮観である。

紅河デルタには古来王権が立地し、都が置かれたが、抗争や遷都が相次いで、本格的な都城はハノイが最初である。ハノイの紅河対岸には、旧都コーロアの城郭が残っている。デルタ上には、このほかにもホアルー等の都の跡がある。

北部ベトナムは村落の結集が強く、村の施設には立派な建築が多い。村の集会所であるディン(亭)、神々を祠るディエン(殿)の他、歴史上の人物を祠るデン(廟)や仏教寺院がある。ハノイ近郊には、このような建築が散在している。

ハノイの南方、トンキン湾に面するファットジェムは、ベトナムに宣教師が上陸した地点といわれ、カトリックの聖地になっている。キリスト教建築が多い地域である。(大田)

ハイフォン建築マップ (解説=大田省一)



凡例
現名称
旧名称
所在地/竣工年/設計者



1. ハイフォン大聖堂
Hội thánh công giáo Việt Nam trung tâm địa phận Hải phòng
ハイフォン大聖堂
46 Hoàng Văn Thụ/不詳/不詳
RC造の身廊の横に独立して鐘塔が付属する。リブボルト屋根で、アプスがひとつの単純な造りである。同敷地内にはカトリック布教所がある。



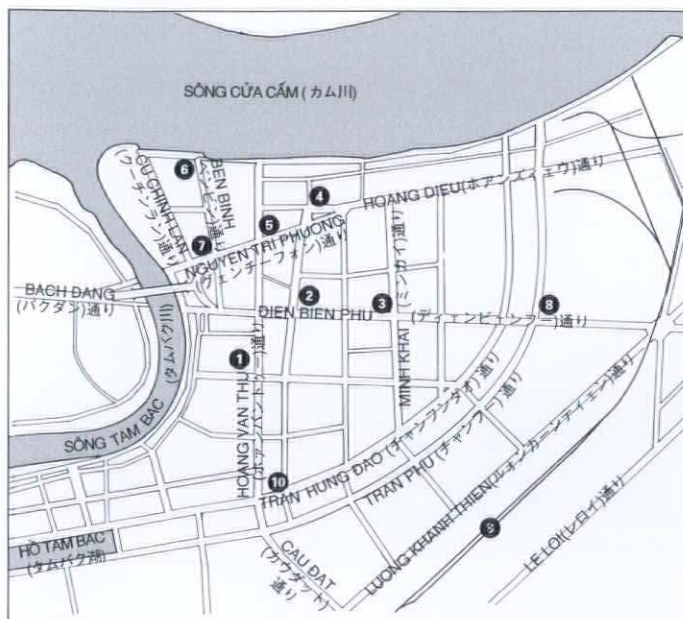
2. ハイフォン博物館
Bảo tàng Hải Phòng
中仏銀行
66 Điện Biên Phủ/1918年/不詳
市街中心部に建つ堂々たる様式建築。イオニア式列柱を持つ銀行建築である。当初は中国興業銀行の建物であった。現在は赤紫色で全体が塗られている。この博物館は週3日しか開館していない。



3. ハイフォン人民委員会文化局
Sở văn hóa thông tin UBND TP. Hải Phòng
商業会議所
18 Minh Khai/1886年/不詳
建設当初はペランダをもつ様式建築だったが、後に改築されてモダニズムの形態になったと思われる。ペランダは残され、時計塔はランドマークになっている。



4. ハイフォン人民委員会
Ủy ban nhân dân TP. Hải Phòng
ハイフォン市庁舎
18 Hoàng Diệu/不詳/不詳
ハイフォンの港沿いにはマンサード建築が並んでいるが、これはその中でも最大のもの。中庭を挟んで、市長公邸、市議会が向かい合う市政の中枢であった。



作図=津村泰範



5. 郵便局
Bưu điện
郵便局
5 Nguyễn Tri Phương/不詳/不詳
マンサード建築が並ぶハイフォンのバンドでも最もデザインが凝ったもの。煉瓦の地を出した所とスタッコを塗った所が壁面でうまく組み合わされている。



6. ベンビンホテル
Khách sạn Bến Bình
個人邸宅
6 Bến Bình/不詳/不詳
ハイフォンでのモダニズム建築。ペランダ建築やマンサード建築が並ぶバンドの中で異彩を放つ。近年、壁が塗り直されて、改造の少ない姿が庭園とともに保たれている。



7. 国立銀行
Ngân Hàng Nhà Nước Việt Nam
インドシナ銀行
4 Nguyễn Tri Phương/不詳/不詳
ハイフォン旧フランス人地区西端にある。ペランダを部分的に採用している。石張りの外観は、ハイフォンでは他に例を見ない。現在は対岸に橋が架かれ、橋詰のロータリーに面した形になっている。



8. ベトナム商工銀行
Ngân hàng công thương chí nhanh TP. Hải Phòng
フランス植民地銀行
36 Điện Biên Phủ/不詳/不詳
ハイフォンでのインドシナ様式の建築。モダニズムの躯体にベトナム風屋根を載せている。軒下には斗拱を模した造形が見られる。1階のアーチ窓にはモノグラムが残っている。



9. ハイフォン駅 Ga Hải Phòng
ハイフォン駅
75 Lương Khánh Thiện/1902年/不詳
中国雲南の開港のために敷かれた鉄道の始発駅。同鉄道の駅舎でも、マンサード屋根の立派なもの。ホーム側上屋の側柱は鉄製のオーダーとなっている。



10. 市劇場
Nhà hát Lớn Thành Phố
市劇場
56 Đinh Tiên Hoàng/不詳/不詳
地方都市のオペラ座では規模が大きく、サイゴンのものに匹敵する。広漠とした劇場前広場に面している。行政機関が集中するバンド地区ではなく、フランス人地区南部に位置し、グリーンベルトに隣接する。

トンキン湾に程近いハイフォンは、ハノイの外港の役割を担っており、北部ベトナム最大の港湾都市である。3つの政府直轄都市のひとつであり、重要な拠点都市であるが、その本格的な発展はフランス領時代に入ってからである。紅河の支流のカム川に面して租借地が造られ、中国雲南にまで伸びる鉄道の始発駅が置かれたことで、フランス帝国主義の基地としての役割を担うことになる。港が開かれ、タムバック川の2筋の流れに挟まれて、整然としたグリ

ッドによる旧フランス人地区がつけられた。ホアンズー通りには公共建築が建ち並んだが、現在でも、マンサード建築が続いている様は壮観である。商業の中心はディエンビエンフー通りで、ホテルや商店が多数存在した。タムバック川の南側の支流は埋め立てられて、現在はグリーンベルトとなっているが、この周辺までがフランス建築の多い地区である。タムバック川が分岐する地点の近くには、計画的に開発されたベトナム人地区があり、近代町家が軒を連

ねている。旧フランス人地区の外側には、ベトナム人の居住区が広がり、鉄道線路がほぼ第二次大戦前の市街地の外縁となっていた。ドイモイ以降は個人商店が増えて、現在ではフランス人地区よりもこちらの方が活気がある。ハイフォンでも1920年代に都市計画が立案され、郊外にもバロック街路を敷くことになっていたが、ほとんど実施されず、そのままスプロールしてしまっている。

ベトナム中部、ダナンから100kmほど北西にフエという小都市がある。南シナ海に注ぐ清流、香河の河畔に開けたこの街には、かつてベトナム最後の王朝、阮朝（1802～1945）の都が置かれていた。

フエの市街は河を境にして北岸の旧都城を中心とする旧市街と南岸のフランス植民地時代の建物が並ぶ新市街とに二分され、ほぼ4km四方に広がっている。旧市街の過半はフランス式の城壁を廻した都城が占め、その周りを囲むように鉄道と香河に沿って商業地域が連なる。特にドンバ市場の近辺はいつも賑わっていて、フエの中心となっている。駅、銀行、放送局などの都市機能は新市街に集中する。新市街には植民地時代の建築の他に近代建築も幾つか見られ、また最近では観光客が増えたためかホテルが目立つ。市街から南方の丘陵地帯には香河上流に沿って歴代の皇帝陵や寺院が建ち並ぶ。

ベトナムは紀元前から中国の影響下にあったため、その歴史的な政治形態や文化は多く中国に倣ったものになっている。しかも中国と陸続きのため、その影響は日本に比べてはるかに強く、かつ連続的なものであった。ベトナム各地の寺院などの古建築も多くに中国建築からの影響が認められ、左右対称の配置計画や柱に煉瓦の壁を廻す手法は定型化している。特に皇帝の権力を象徴するフエの王宮や陵では、北京のそれらの模倣が行なわれている。しかし一方では、フランス式の城壁、ベトナム中部特有の屋根架構をした宮殿建築、様々な趣向を凝らした皇帝陵などベトナムとしてのオリジナリティも併せ持っている。そうした意味でフエはまさにベトナムの京都といえるであろう。

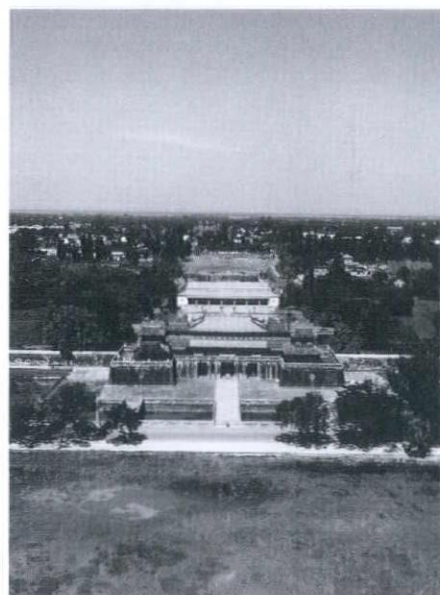
かつては偉容を誇ったこの王都も度重なる戦争や時間の流れの中で廃墟と化し、今は市民生活の穏やかな背景となっている。19世紀に編纂された『欽定大南會典事例』や『大南一統志』等の史料は、宮殿や寺観について規模・歴史から装飾に至るまで事細かに記し、フエの往時の姿を今に知らせる。それらを参考にして阮朝時代の建築を見てゆきたい。なお、フエの遺跡群は1993年ユネスコの世界遺産リストに登録されている。

ベトナムの都市と建築 2

フエ Huế

中川 武

+
早稲田大学アジア建築研究室



フエの王宮。午門と太和殿



凡例
漢字名称
ベトナム語名称
建立年代

1. 午門 Ngọ Môn
1833年(明命14年) 建造



2. 顯仁門 Hiển Nhơn Môn
1811年(嘉隆10年) 建造

王宮の東門。午門は儀式専用であるため日常の通用門として使われた。壁一面が鮮やかな陶片モザイクと漆喰細工で装飾され、屋根や扉の上には皇帝の象徴である龍が処決しと並んでいる。

3. 和平門 Hòa Bình Môn
1811年(嘉隆10年) 建造

4. 彰徳門 Chương Đức Môn
1811年(嘉隆10年) 建造

5. 北關台 Bắc Đài

6. 中道橋 Trung Đạo Cầu

7. 太液池 Hồ Thái Dịch

8. 銅柱坊門 Đồng Trụ Môn

9. 大朝儀 Đại Triều Nghi

10. 太和殿 Điện Thái Hòa
1805年(嘉隆4年) 建造。1833年(明命14年) 改築・移建。1923年(啓定8年) 大規模修理

11. 日精門 Nhật Tinh Môn

12. 月英門 Nguyệt Anh Môn

13. 太廟 Thái Miếu
1804年(嘉隆3年) 建造。1947年改築。焼失後1970年再建



14. 肇廟 Triệu Miếu
1804年(嘉隆3年) 建造
初代阮主の父、阮淦(1468-1545)を奉る。肇廟は創建時のものと云われるが、前に建つ太廟は1970年に南ベトナム政権によって再建されたものである。

15. 内務府 Nội Vụ

16. 瀛洲 Doanh Châu

17. 欽文殿 Khâm Văn Điện

18. 鎮北島 Đảo Trần Bắc



19. 顯臨閣 Hiển Lâm Các
131 Nam Kỳ Khởi Nghĩa/1884年
明命年間初期
世廟の南に建つ三層の樓閣。中央の4本の柱は約12mで、三層を貫いている。この北側に九鼎が並ぶ。左右の門は三間二層の樓門であり、それぞれの楼に鐘、太鼓を持つ。



20. 九鼎 Cửu Đỉnh
1835年(明命16年) 鑄造
世廟の正面に並ぶ9つの大鼎は第2代の明命帝が造らせて伝世の家宝とした。全身に鳥獣や風景の愛らしい彫刻が施された鼎はそれぞれに代々の皇帝の名がつけられている。



21. 世廟 Thế Miếu
1822年(明命3年) 建造
阮朝の歴代皇帝が奉られている。王宮に現存する建物の中では最大のこの世廟の中には各皇帝の祭壇がずらりと並んでいる。

22. 興廟 Hưng Miếu
1804年(嘉隆3年) 建造。1947年焼失。1951年再建。

23. 奉先殿 Điện Phụng Tiên
1814年(嘉隆13年) 太廟垣の北に建造。1826年(明命7年) 修理。明命18年世廟垣の北に移建。



24. 延壽宮 Điện Diên Thọ
1804年(嘉隆3年) 建造
皇太后の宮殿であったこの宮殿にはかつて10の建築物があり、西洋風要素の採り入れられたものもあったが、現在は破損が著しい。



25. 長寧宮 Cung Trường Ninh
1822年(明命3年) 建造。1846年(紹治4年) 改修
太皇太后の宮殿であったが、現在はほとんど破損している。モザイク装飾の見事な長安門を入ると三日月形の池が掘られている。

26. 長安門 Trường An Môn

27. 大宮門 Đại Cung Môn
1833年(明命14年) 建造



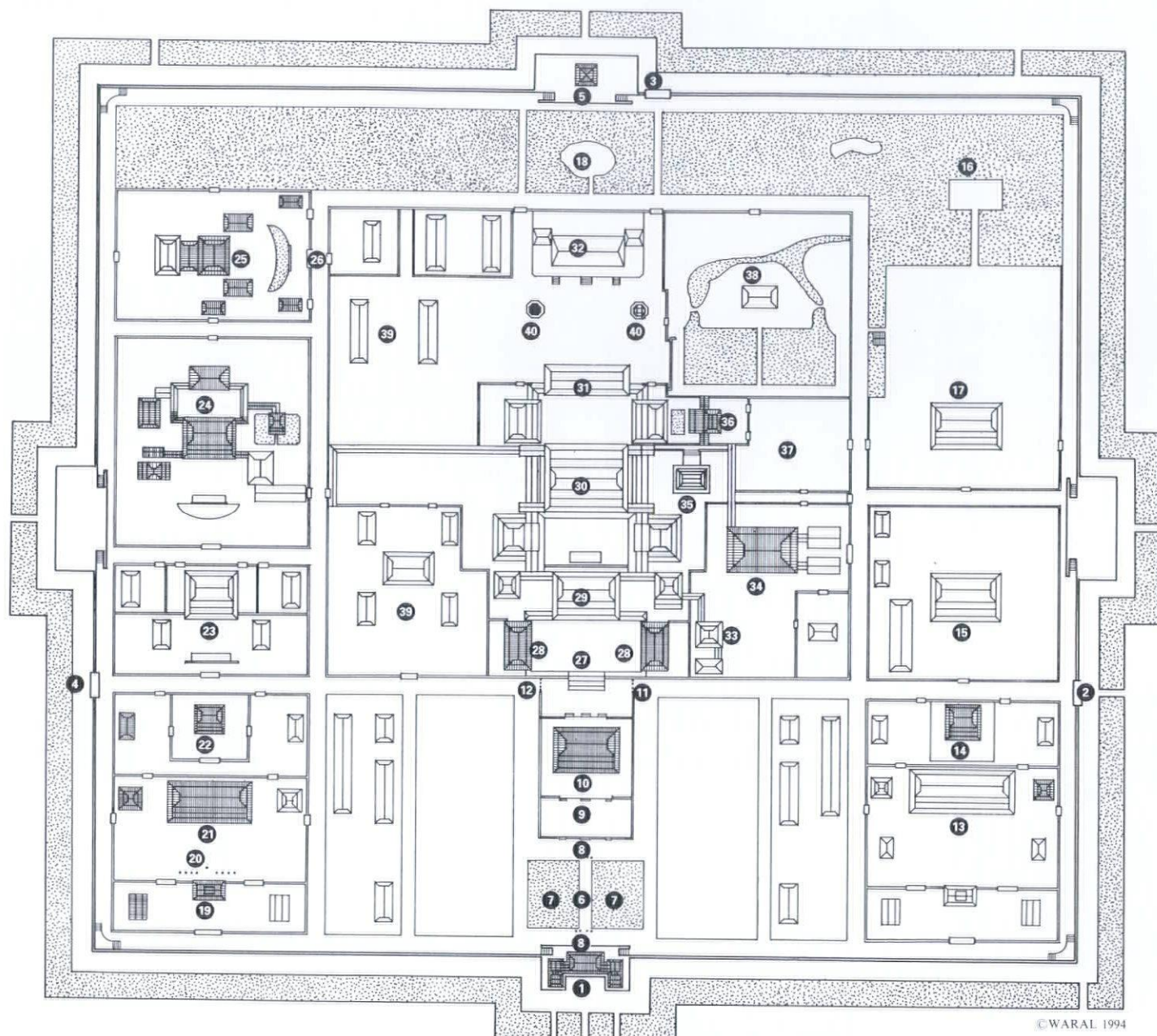
28. 左廡・右廡 Tả Vu, Hữu Vu
1819年(嘉隆18年) 建造
勤政殿前庭の東西側に建つ勤政殿の付属施設。皇帝と家来達が謁見式の準備をした場所。かつては両廡に付属施設があった。

29. 勤政殿 Điện Càn Chánh
1804年(嘉隆3年) 建造

30. 乾成殿 Điện Càn Thành
1811年(嘉隆10年) 建造。もとの名は中和殿。1839(明命20年) 改名。

31. 坤泰殿 Điện Khôn Thái
1804年(嘉隆3年) 建造。もとの名は坤寧宮。1832(明命14年) 改名。

32. 建中殿 Điện Kiến Trung
1921年(啓定6年)～1923年(保大6年) 建造。



©WARAL 1994



33. 東閣 Đồng Các

35. 日成楼 Nhật Thanh Lâu

37. 紹芳園 Thiệu Phương Uyển

39. 内宮 Lục Viện

34. 閱是堂 Duyệt Thị Đường
1825年（明命7年）現在の位置に移築

明命7年、清風堂が移築され、閱是堂となった。かつては宮中劇場として使用されていた。現在修復中である。

36. 太平御覧書楼
Thái Bình Ngự Lâm Thư Lâu
1844年（紹治4年）建造

創建時は清暇書楼という名であった。小御河（御園内の池）に隣接する、皇帝のための書楼。

38. 御園 Ngự Uyển
明命初期造営

皇官の遊興の場所であった園内は、池が掘られ小島や築山が造られていた。かつては楼閣、殿屋、祠堂、橋などが池に臨んで建っていたが、現在これらはほとんど存在せず、深い緑が茂るばかりである。

40. 八角亭 Bát Giác Đình
不詳

建中殿の前に対をなして建つ、八角形平面の亭。破損が著しいが、階段や欄干の意匠がフランス的意匠を持つ建中殿のものと類似していることがわかる。

凡例
現名称
旧名称
所在地／竣工年／設計者

1. 旗台 Kỳ Đài

2. 敷文楼 Văn Lầu

3. 体仁門 Thể Nhân Môn

4. 広徳門 Quảng Đức Môn

5. 鎮平台 Trấn Bình Đài

6. 社稷壇 Đàn Xã Tắc

7. 先農壇 Đàn Tiên Nông

8. 浄心湖 Hồ Tịnh Tâm

9. 機密院 Cơ Mật Viện

10. 隆安殿 Điện Long An
1845年(嘉隆6年)建造。1909年(維新3年)
移築。1923年(啓定8年)フエ博物館となる。

11. 明徴閣 Minh Trưng Các

12. 南郊壇 Đàn Nam Giao
1806年(嘉隆5年)建造



13. 文廟 Văn Miếu
1808年(嘉隆7年)移築。
ハノイには11世紀に建てられた文廟があるが
こちらは阮朝のもの。香河沿いにあり、現在は
門・石碑・碑亭のみが残る。毎年の春祭と秋祭
にはここで盛大な儀式が行なわれた。

14. 天姥寺 Chùa Thiên Mụ
1601年創建。



15. 虎園 Hồ Quyền
1830年(明命11年)建造。
阮朝宮廷や民衆の余興として象と虎を戦わせた
闘技場。屋外の煉瓦造建築物で、直径44mの円
形の闘技場は高さ6mの観覧席から眺められる。



16. 延福長公主祠
Nhà thờ Diên Phước Trương Công
Chúa
1854年(嗣徳7年)建造。

紹治帝の長女のために建てられた住宅。棟木は
一間分の長さであり、屋根が深く覆い被さるよ
うな外観を呈している。敷地への入口の門は西
洋風の石積み三間アーチ門である。



17. 扶光郡王祠
Nhà thờ Tôn Thất Hân
啓定・保大帝に仕えた高官の住宅。敷地入口の
門や建物外装にフランス風の装飾が見られる。
内装が素晴らしく繊細な比例感覚が窺える。その
柱はジャックフルーツの木で造られている。



18. 頼世亭 Đình Lại Thế
この周辺の地区寺院であった。正面入口はオベ
リスク状の花表柱門が立つ。内部には祭壇があ
り、その脇には儀式で使用する鐘がかつてはつ
ていた。

19. 嘉隆帝陵 Lăng Gia Long
1814年(嘉隆13年)～1820年(明命元年)造営。

20. 明命帝陵 Lăng Minh Mạng
1840年(明命21年)～1843年(紹治3年)造営。

21. 紹治帝陵 Lăng Thiệu Trị
1847年(嗣徳元年)造営。

22. 嗣徳帝陵 Lăng Tự Đức
1864年(嗣徳18年)～1867年(嗣徳21年)造営。

23. 育徳帝陵 Lăng Dục Đức
1889年(成泰元年)建造。

24. 同慶帝陵 Lăng Đồng Khánh
1889年(成泰元年)、計画・建設。修復・改築
が啓定帝の時代、1916年(啓定元年)、1917年
(啓定2年)、1921年(啓定5年)に為され、
1923年(啓定8年)に完成。

25. 啓定帝陵 Lăng Khải Định
1920年(啓定4年)～1931年(保大7年)造営。



26. フエ総合大学
Trường Đại Học Tổng Hợp Huế
エコール・ベルリン
3 Lê Lợi／不詳／不詳
インドシナ様式*の影響が各所に見受けられる。
軒下には斗拱のモチーフがみられ、装飾もハノ
イのインドシナ大学と共通するものが多い。



27. 5 レロイホテル
Khách Sạn 5 Lê Lợi
迎賓館
5 Lê Lợi／不詳／不詳
モダニズム建築。中央に円形ホールを持ち、両翼
を伸ばし屋上にはパーゴラが付く。庭園側には
円形のバルコニーが張り出している。ホテルに
使用されているが修復工事は行なわれていない。



28. コックホック高校 Quốc Học
Cock Ho 中学校
10 Lê Lợi／不詳／不詳
広大な敷地を持つ学校建築。隣接するハイパー
チュン高校(旧リセ・ドンカイン)とともにフ
エを代表する学校。門はベトナム風だが、校舎
は入母屋屋根を載せた西洋建築である。中庭を
囲むように校舎が配置されている。



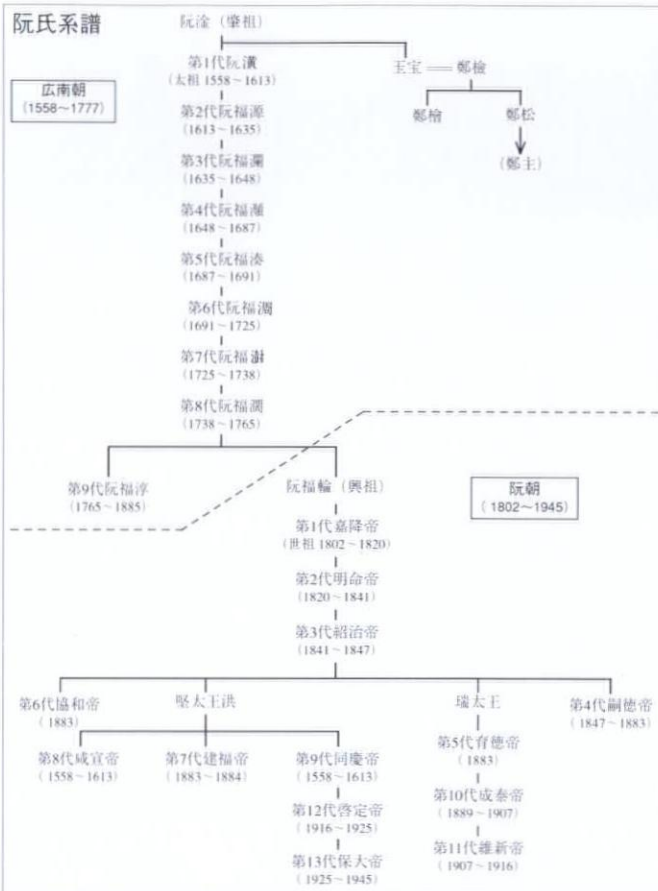
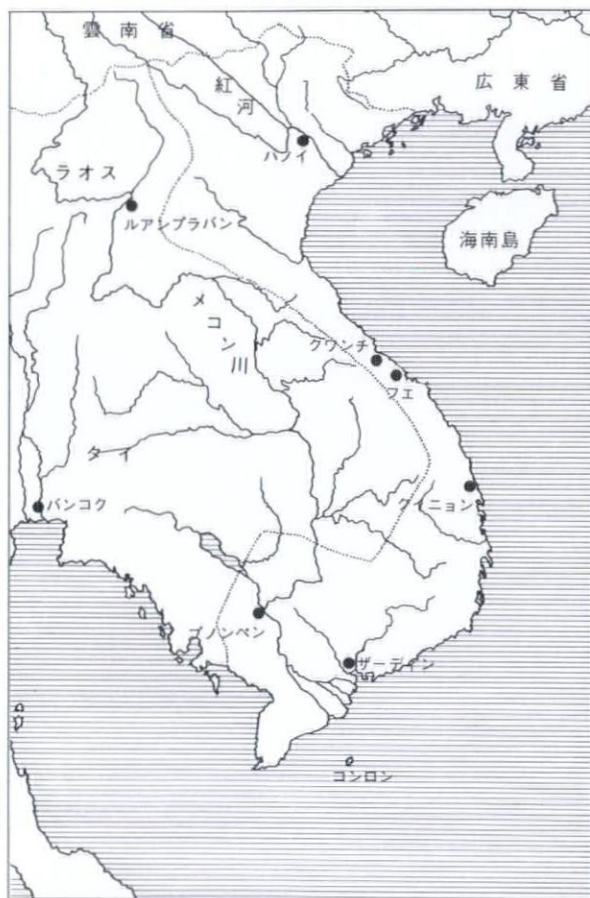
29. 聖マリア救済教会
Nhà thờ Dòng Chúa Cứu Thế
ノートルダム教会
Nguyễn Khuyến／不詳／不詳
市街南部にあるRC造の建築。特異なシルエ
ットの屋根が印象的である。屋根の他にも袖壁の
曲線等にベトナム風意匠があり、越洋の建築の
融合を目指した跡が窺える。



30. 安定宮 Cung An Định
安定宮
Phan Đình Phùng／不詳／不詳
バオダイ帝が母親のために建てた別荘。豊饒な
装飾を持つフエ市街で最高の西洋建築。市街南
部の小川に面しており、舟寄せ場が正面にある。
阮朝の様式の門の中には四阿と、啓祥楼と名付
けられた西洋建築様式の城館が建つ。ポーチに
は漢字を使った装飾がみられる。現在は労働者
クラブに使用されている。

* ハノイの項 (p.44～45) 参照





阮朝は1802年から1945年まで続いたベトナム最後の統一王朝である。ベトナムは939年、千年におよぶ中国支配から独立して以来、李朝（1010～1225）、陳朝（1225～1400）、黎朝（1428～1786）と各王朝が続いたが、黎朝の1527年（統元6年）権臣莫登庸によって王位が篡奪されると、黎王を奉じた旧臣阮瑋とその娘婿鄭檢の一派との間に内乱が起こる。阮瑋の死後、復讐した黎朝の実権を握った鄭檢は、自ら当時辺境であったフエの鎮守を請願し許される。1558年（正治元年）一族郎党を引き連れてフエに入った阮瑋は、鄭氏の対莫氏戦に協力すると同時にフエでの勢力基盤を固めた。その後を継いだ阮福源は鄭氏と袂を分かち独立する。これ以降、黎朝は名目的には続くものの、北方の鄭氏と南方の阮氏の二主並立の時代となる。彼等の一統はそれぞれ鄭主、阮主と呼ばれる。鄭阮両主はしばしば衝突を繰り返したが、1672年（嘉宗陽徳元年）の休戦以後は広治の澧江を境として約100年、南北間の平和が保たれる。一方で、歴代阮主は南方のチャンパ王国の地を徐々に侵し、第6代阮福源（1691～1725）の時代にはメコンデルタまで達する領土を獲得する。この時期の阮主政権を広南朝ともいう。

この均衡が崩れたのは1773年（景興34年）、阮主の圧政に対して帰仁の西山阮氏三兄弟による反乱（西山党の乱）が起こること、それに乗じた鄭主は軍を南下させフエを占領。阮氏は南部の嘉定に逃れるが、

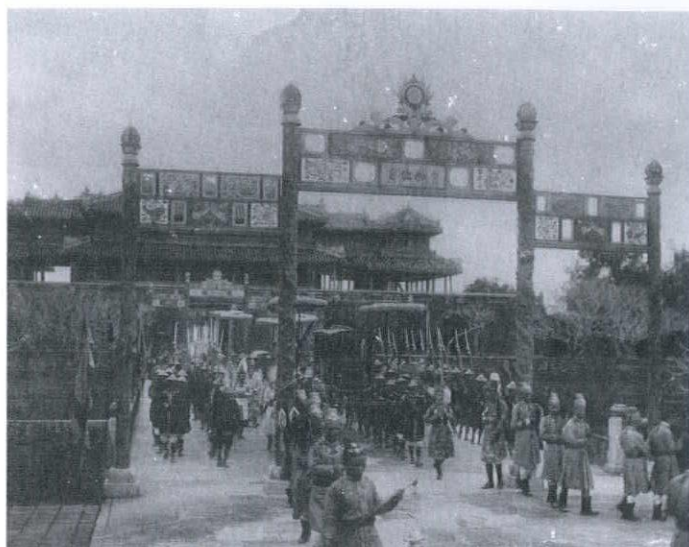
鄭主と結んだ西山阮氏により阮福映を残して全滅する。西山阮氏はその後、鄭軍も討ち南北を統一するものの、やがて一族内の対立から阮氏一党に反撃の余地を与えてしまう。阮福映は初めタイに頼り、後にフランス人義勇軍や華僑の助力を得て嘉定を拠点に反撃を始める。1799年までにベトナム南半を回復、1801年フエを奪還、翌年即位し年号を嘉隆（1802～1819）とした。その後、さらに北進してベトナム再統一を果たした嘉隆帝は、諸制度を整備するとともにフエを国都と定め都城を造営、外にはカンボジアを保護国とした。30年の苦闘を経て偉業を成し遂げた嘉隆帝であるが、その過程でフランスの宣教師と義勇軍の助力を仰いだことが、後のフランス進出の起因ともなってしまった。

次の明命帝（1820～1841）から紹治帝（1841～1847）にかけて阮朝は最盛期を迎える。明命帝は国力の増強を図る一方で、国史館を建て文芸を盛んにし、中国や西洋諸国の情報収集、技術移入を進めた。タイ、カンボジア、ラオスとは積極的な外交を行ない、しばしば兵を派遣。農民反乱も多かったようである。この時期、インドの覇権をイギリスに奪われたフランスは先手をインドシナに転じ、ベトナムに対して再三通商条約の締結と宣教師の保護を申し入れる。明命帝はそれを拒み、逆に外国人の通商を厳しく規制、キリスト教を排斥、各地の港に要塞を築く等の政策をとったため、対仏関係は急速に悪化してゆく。

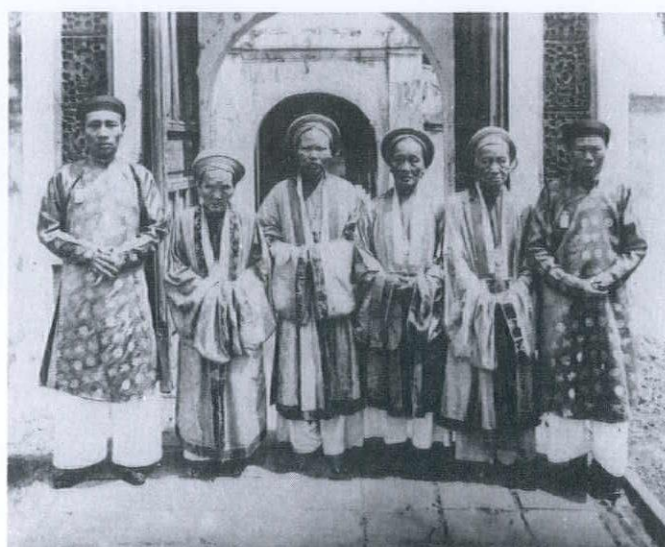
嗣徳帝（1847～1883）下の1858年、フランスは開国を迫り、ダナン以下各地の要塞を攻撃、翌年までにサイゴンを占拠。1862年、メコンデルタの一部割譲・カトリックの布教・各港での通商等を認める条約が結ばれる。フランスは引き続き1867年にメコンデルタの南半を占領、1882年にはハノイを陥れる。その後、フランスによるベトナムの保護国化に反発した清の介入と嗣徳帝の崩御で政局は混乱化。皇位を継いだ育徳帝は排仏派の権臣阮文祥・尊室説等によって在位3日にして廃立、次に立てられた協和帝も4ヵ月後、幼い建福帝に捧け替えられる。しかし、その混乱の中フランスはベトナム北部で清軍を破り、1885年ベトナムを保護国とする。これ以後、阮朝は存続するものの、実権はフランスが握り事実上植民地となる。早世した建福帝の後を継いだ咸宣帝は、1885年フエを出奔、紳豪を率い仏軍に対してゲリラ戦を展開するが（文紳の乱）、1888年には捕えられアルジェリアへ流竄される。

咸宣帝の出奔後、フランスは新たに同慶帝（1885～1888）を立て、王朝の機構を形だけは残したまま、旧官僚や土豪を使って巧みに植民地経営を行なった。皇統は成泰帝（1889～1907）、維新帝（1907～1916）、啓定帝（1916～1925）、保大帝（1926～1945）と続く。成泰と維新の両帝は第一次大戦中の1916年反乱を企てるが、捕えられアフリカのレユニオン島に流竄。第二次大戦後退位した保大は香港に亡命、現在はフランスに暮らすという。

- 1: 明命帝時代のベトナム全図
- 2: 阮氏系譜
- 3: 午門から入ってくる皇帝の行幸行列。中央の輿に皇帝が乗る
- 4: 太和殿の前庭に整列し皇帝に拝謁する百官
- 5: 世廟の前に並ぶ青銅製の大鼎
- 6: アオザイを着けた官吏と宦官
- 7: 第12代皇帝、啓定帝



3



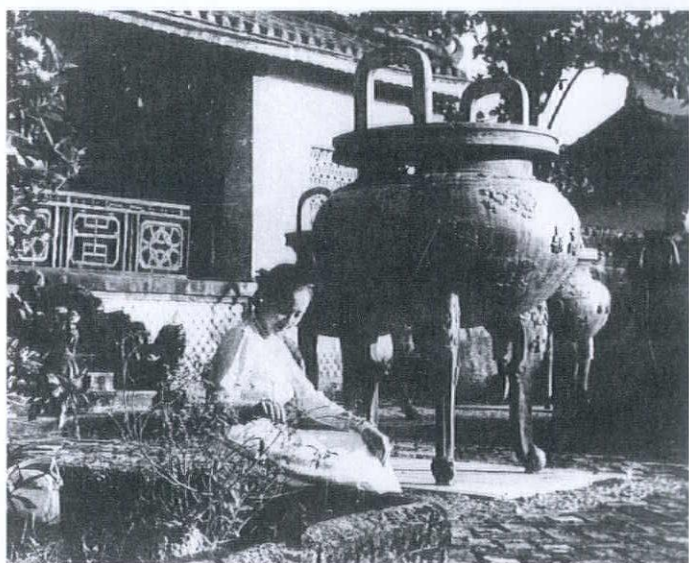
6



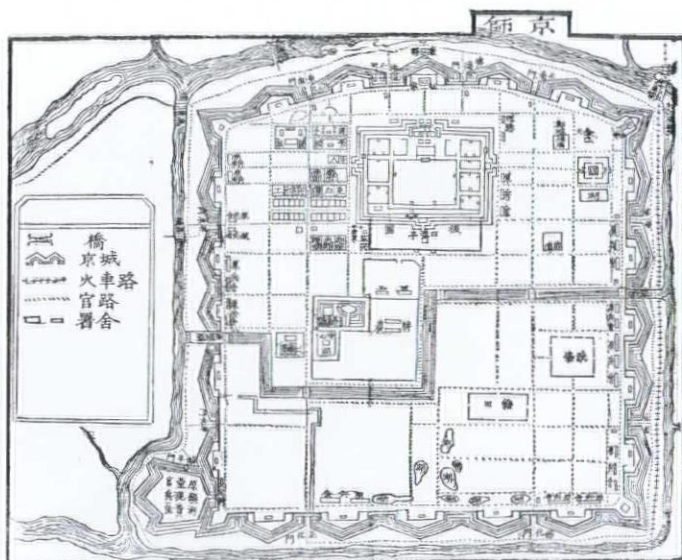
4



7



5



8



9

フエは古くはチャム族の土地であったが、北方のヴェトナム族の国大越との境にあるため、双方の勢力の消長に従って大越に属したり、チャンパに奪還されたりを繰り返してきた。しかし、1470年(洪徳元年)黎朝の聖宗の大遠征からは常に大越に帰属。1558年(正治元年)阮潢が鎮守に就いた後は代々阮主の治めるところとなる。阮潢の治所は初め広治府近の葛管に置かれたが、次の阮福源のとき広田県福安社に移され、さらに次の阮福瀾によって香茶県金龍社に移された。

1686年(正和8年)王統を継いだ阮福瀾は富春社に新府を建てる。これが富春城で現在の都城の東南隅に当たる。福瀾は新府を建てるのに特に風水に基づいて土地を探し、南に御屏山が相対するこの地を選んだ。城壁に囲まれた王宮が造られ、その前に大池が掘られた。また彼は、香河上流の治水工事も行なったという。

1757年(景興18年)には阮福瀾によって規模が拡張されるが、この時初めてフエは都として整備され、「都城」と呼ばれるようになった。王宮には金華殿や光華殿を始めとする数多くの宮殿が軒を連ね、中でもひととき高い朝陽閣からは香河をよく見渡す

ことができた。また、その後ろには方池や曲池を中心に釣台、築山や奇石を配した中国風の庭園が設けられ、それらを囲む2重の壁には龍虎麟鳳の聖獣や草花の装飾が施されたという。基盤状に区画された都城内には軍舎や官舎が並び、城外には市街が連なる。香河には漁船や商船が行き交い、その上流には離宮も置かれた。その様はまさに一大都会を為していたと伝えられる。

その大都会も1774年(景興35年)鄭軍の侵略を受け、間もなく西山党の阮岳によって占領されてしまう。

1801年、フエを奪還した阮福映は一旦城を修築するが、その後全土を掌握し越南国王(嘉隆帝)として即位した彼は、1803年(嘉隆2年)ベトナム全土の都として誇るべく都城の大規模な増築を始めた。旧都城の背後を流れていた香河の2本の支流が埋め立てられ、香河の北岸500haを超える土地にほぼ正方形を為す都城(史料では京城と称される)が計画された。それは中国の伝統的な都市計画を踏襲する一方で、城壁にはフランスの影響を受けヴォーバン式城塞が用いられている。周長10kmにおよぶ城壁は高

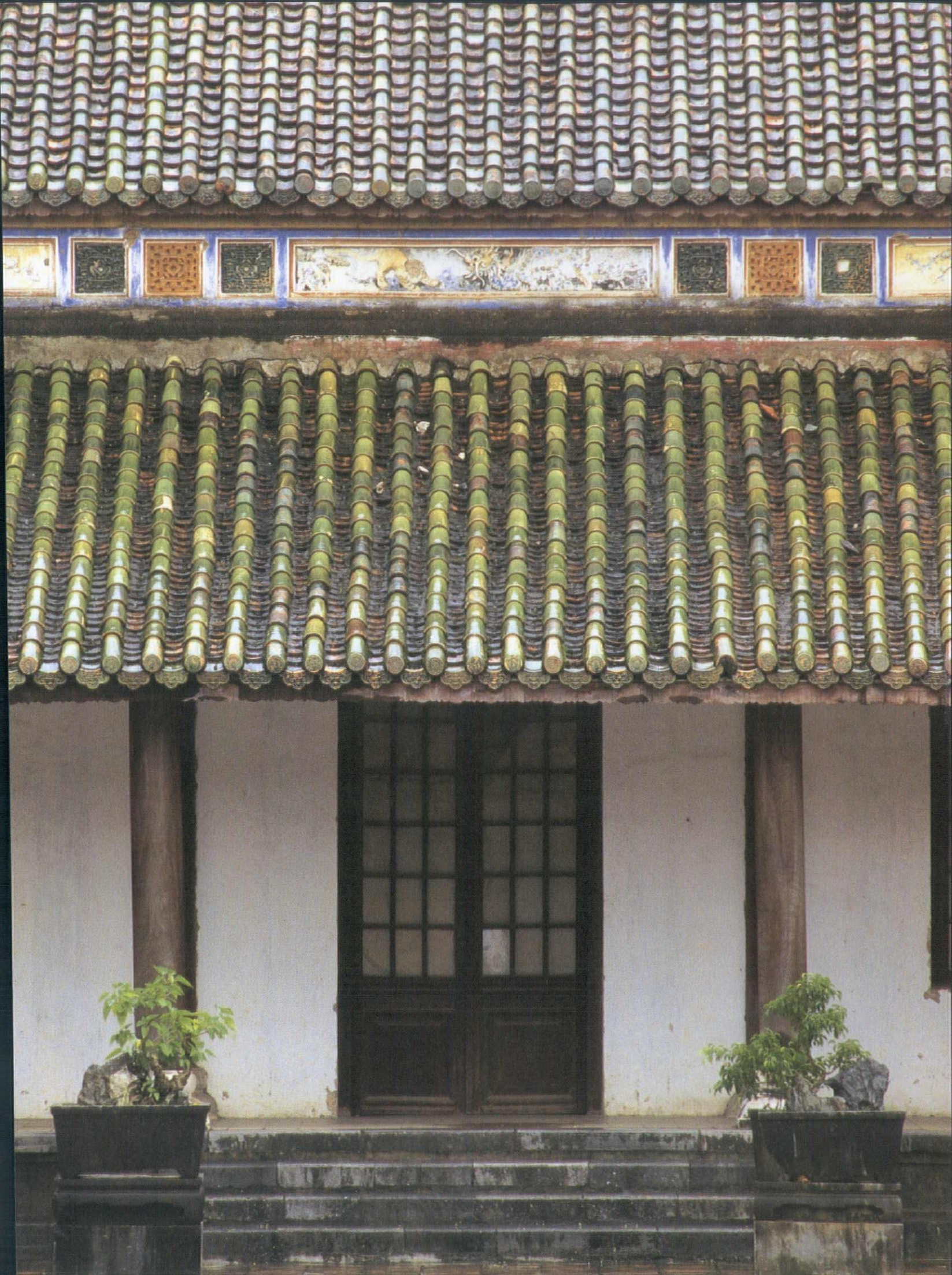


10

さ6.6m厚さ21mの重厚なもので、四面に400基の大砲で武装した24の稜堡を備え、鋸歯状に廻る。そのうち正面中央の稜堡は3層の旗台となっていて、マストの頂には皇帝の旗が翻る。また城壁の北東角には鎮平台と呼ばれる砲台が張り出し、河口から香河を遡ってくる外敵に備えている。各稜堡の間には10カ所に門が通り、各々に2層の監視塔が設けられている。城壁の外には幅23mの濠が廻らされ各門からの石橋で外と結ばれているが、その外側にはさらに護城河と呼ばれる香河から引かれた幅40mの濠が廻り幾重もの防衛線を形成している。護城河は都城の左右両面から各々城内に導かれて武庫に達するが、その水路を御河という。

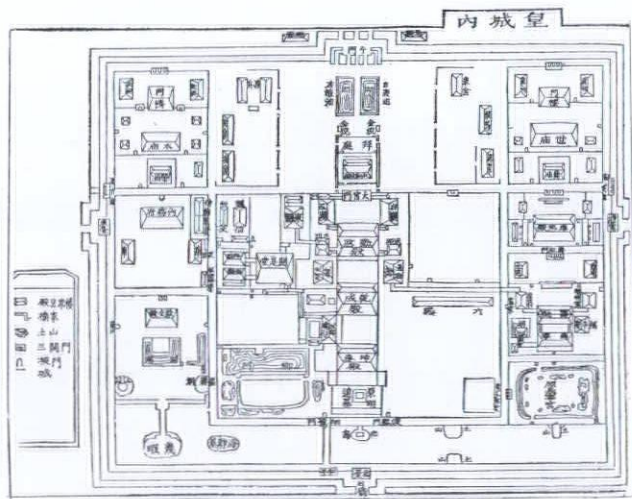
城内は、日本の京都の町並と同様に縦横に走る街路によって95の坊に区画され、各坊には王宮の他、六部、機密院などの政府機関、慶寧宮、保定宮、浄心湖などの離宮あるいは官僚以下市民の住宅が配された。それらの施設も現在は浄心湖など幾つかが残るだけで、王宮背後の城内は小住宅と畑に占められている。

大量の労働力と時間を要するこれらの土木工事は次の明命年間によりやく完成する。



フエの王宮

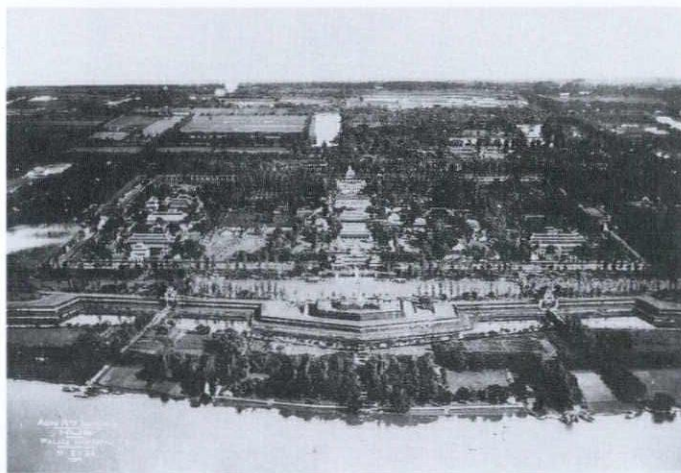
午門、太和殿、世廟、紫禁城



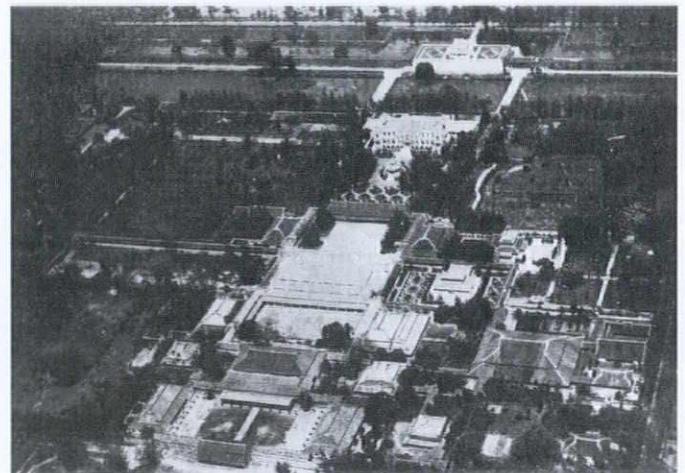
12



14



13



15

嘉隆帝から保大帝まで13代の皇帝の鎮座した王宮は、都城の南辺中央に位置して、皇城あるいは大内と呼ばれた。敷地は東西642m南北568m、高さ6mの磚（焼成煉瓦）積みの城壁に囲まれる。その外側をさらに幅16mの濠が廻っている。門は四面に一つずつ開き、南を午門、東を顯仁門、西を彰徳門、北を和平門という。また城壁の東西北の各面中央には闕台と呼ばれる物見台が張り出している。

皇城内は都城と同じく縦横の街路によって区画される。南半中央は午門、太和殿を中心とした行政区。その左右に各々歴代阮主を奉った太廟と歴代皇帝を奉った世廟。北半中央は皇帝の居住区である紫禁城。紫禁城の西側には歴代皇帝を奉った皇族専用の廟である奉先殿と皇太後の宮殿嘉壽宮（後に延壽宮）、さらに太皇太後の宮殿長寧宮が並び、紫禁城の東側には内務府と幾暇園と称する庭園が配される。

ベトナムの歴代王朝は儒教や陰陽思想の影響を強く受けているが、それは皇城の配置計画にも見ることができる。陰陽思想では南面して前と左を陽（公的・男性的・優）、後と右を陰（私的・女性的・劣）として捉えるが、これを皇城の配置計画に当てはめると

「太和殿（公的＝前）⇔紫禁城（私的＝後）」

「太廟（祖先＝優＝左）⇔世廟（子孫＝劣＝右）」

「世廟（公的＝前）⇔奉先殿（私的＝後）」

「他施設嘉壽宮・長寧宮（女性＝右後）」

という配置構成の観念的体系が明確に現われてくる。

これらの各区分にそれぞれ幾十という殿舎が建てられ壮大なコンプレックスを為していた皇城であるが、現存する建物は少なく、注目すべき建物はかなり限定されてくる。中心はやはり皇城正門の午門であろう。ベトナムのカラッとした空に黄や緑の屋根瓦が映える。午門を入ると方形の太液池の向こうに皇城の正殿である太和殿が建つ。太和殿は決して大きな建物ではないが、やはり黄の瓦と漆喰塗の白壁が鮮やかである。太和殿の背後には、かつての勤政殿跡の基壇の両脇に左廡、右廡が建つ。このほか世廟区に建つ世廟と顕臨閣、紫禁城内の関是堂と清暇書楼などが現存する主な建物である。建物のほかに注目すべきものとしては、太液池や太和殿の背後に建つ龍雲銅柱や日精門等の儀門（3間の鳥居状の門）、世廟に置かれた大鼎などであろう。また皇城の至る所に現われ、皇帝を象徴する龍の意匠にも注意して欲しい。そして現存する建築だけでなく廃虚となった宮殿や樓閣を見て歩くのもひとつの楽しみ方である。



16

12: 皇城地図 (『大南一統志』より)
 13: 皇城全景。午門の背後に諸殿が連なる
 14: 王宮の正門、午門
 15: 保大帝時代の紫禁城。保大帝は一番奥の洋館で暮らした
 16: 現在の紫禁城
 17: 太和殿の屋根。2体の龍が載る

p.70
 18: 世廟区全景
 19: 世廟
 20: 頤臨閣。手前に大鼎が並ぶ
 21: 長安門
 22(p.71): 大和殿の玉座



17

午門

午門は北京の紫禁城の午門に倣ったものであり、明帝は午門を造るために工匠を北京に派遣して学ばせたともいわれる。磚を積んだ凹型平面の台状構築物の上に、同じく凹型に並んだ5つの樓からなる五鳳樓を載せた午門は、北京のそれをフエの皇城の規模に合わせて両翼を短くしたミニチュア版である。しかし、朱の柱に金銀が塗られ黄や緑の瓦に彩られた南国の午門は、北京のそれとは異なった独特の華やかさを持つ。そして午門は皇帝専用の門である。基台に開けられた5つの門口も、皇帝の輿のみが中央の門口を通ることが許され、行幸行列の人員は象や馬も含めて4つの脇門を用いた。また午門は、科挙の合格発表や観閲式などの宮廷の公式非公式な祝典のための舞台としても使われ、その際には皇帝は五鳳樓の黄色の瓦を葺いた中央の樓に座し、緑の瓦を葺いた両翼部に廷臣達が控えた。最後の皇帝保大が退位を宣言したのもこの午門の台上であった。1833年(明命14年)建造。それ以前は皇城の他の面と同じように闕台があり、その左右に門が開かれていた。

太和殿

太和殿には玉座が置かれ、即位式や外国使節の引見、

元旦の朝賀など宮廷儀式の舞台となった。「大朝の正殿」、つまり王宮の正殿である。柱間9間、ふたつの棟を連結する形で梁行き7間として、ほぼ正方形の平面をなす。最高級の鉄木(非常に固い良質の材で格式のある建築に用いる)を使った80本におよぶ朱塗りの柱には皇帝の象徴である金の龍が描かれ、玉座の天蓋には精巧な彫刻がなされている。大棟や降棟の上には漆喰とモザイクの色鮮やかな龍が載り、楹先にはガーゴイルならぬ怪魚の装飾が施される。前後の階段にもまた龍が彫られ、かつては皇帝専用を示すために丹に塗られていた。殿前の大朝儀と呼ばれる拜庭には正一品から従九品までの官位の記された石碑が並び、朝儀の際には百官が各々その定められた位置に整列した。この太和殿もまた午門と同じく北京のそのミニチュア版ではあるが、登り梁による二棟造りの屋根架構と木彫やモザイク、漆喰細工による華麗な装飾というベトナム中部独特の建築様式で造られている点が注目される。フエの宮殿建築はみな太和殿と同様の構成を持つが、造り合いに仕つけられた装飾天井には殿毎に様々な趣向が凝らされており、それらに施された彫刻絵様を比較して見て回るのも面白いであろう。1804年(嘉隆3年)建造。

紫禁城

かつて皇帝の居住区であった紫禁城は皇城の中央、太和殿の背後にあり、東西342m南北308mの敷地は高さ4mの周壁に囲まれている。門は7つあり、南面中央に正門である大宮門、東面に興慶門と東安門、西面に嘉祥門と西安門、北面に祥鸞門と儀鳳門を開く。大宮門から祥鸞門、儀鳳門に至るまでの紫禁城の中心軸上には勤政殿、乾成殿、坤泰殿が並ぶ。その左右には皇帝の多くの妾妃や皇子皇女の住んだ諸殿、閱是堂と呼ばれる劇場、紹芳園や御園と呼ばれる庭園などがあり、それらは皆回廊によって結ばれている。その回廊は東西の各門を通り、紫禁城外の嘉壽宮・長寧宮・養心殿へつながられた。

勤政殿は皇帝が政務を執った建物である。「大朝の正殿」である太和殿に対して「常朝の正殿」とされ、日本における太極殿に対する紫宸殿に相当する。建物は柱間9間二棟造りで装飾なども太和殿とほとんど同じであるが、フランスの影響を受けたためか早くから窓にガラスが入れられ、後には列柱にランプが付き、玉座の前には洋式の椅子やテーブルが置かれた。官位の序列を示す石碑のある前庭の左右には左廡、右廡と呼ばれる脇殿があり、中には機密院や内閣などの直房が置かれ、当直の官吏が詰めていた。乾成殿は皇帝の寝所であり、日本でいう清涼殿に



18



19

当たる。柱間11間三棟造りの大規模なものである。明命以前は中和殿と称し、ここより前の紫禁城の半分を乾成宮、後の半分を坤泰宮といった。勤政殿は乾成宮の前殿に当たる。その背後の坤泰殿も同じく柱間11間三棟造りの規模を持ち、坤泰宮つまり後宮の中心となっていた。しかし後の啓定、保大の時代には規模が縮小され、その背後にフランス風洋館の建中殿と庭園が造られた。

現在、大宮門をはじめ勤政殿や乾成殿などの諸殿は何れもなく、勤政殿跡に立つ龍壁の裏にはただ野原が広がっている。草に埋もれた基壇だけが、かつてここに大宮殿があったことを知らせる。

世廟

紫禁城の前面右に位置する世廟はその領域を壁で南北に3区画し、その中央に阮朝歴代皇帝を奉った世廟を置く。世廟の周壁の南面には重櫓を象って煉瓦と漆喰で造られた3間の世廟門が開き、その奥の壁の中央には3層の顕臨閣が聳える。顕臨閣の左右には同じく正面3間の峻烈門・崇成門が開くが、それらは2層で各々鐘樓と鼓樓になっている。世廟門と顕臨閣を通りすぎると世廟に達する。世廟は柱間13間二棟造りと横に長く、各柱間には歴代皇帝および皇后の祭壇が並ぶ。また左右の脇殿には同じく歴



20

代の功臣が奉られている。世廟の正面、顕臨閣の下には明命帝が造らせた9つの大鼎（重さ約2t、直径1.4m）が並ぶ。鼎とは青銅で造られた3本脚の鍋のことで、中国では古代から祭器として用いられた。9つの鼎には各々高、仁、章、英、毅、純、宣、裕、玄の名が刻まれ、またそれらの全身には鳥獣、植物、フエ近郊の風景、天体などの様々なモチーフが彫られている。世廟の後方には嘉隆帝の父母を奉った興廟がある。柱間7間二棟造り。これはさらに一周の壁に囲まれ、正面に世廟門と同形の興廟門を開く。この世廟区域は残存状況が良く、ある程度修復もなされ、午門や太和殿と並んでフエ王宮の見所のひとつになっている。また、太和殿を挟んで東側反対には同じ構成を持った歴代阮主を奉る太廟とその祖阮塗を奉る肇廟があるが、破損が著しい。

その他の見所としては、皇城東門の顕仁門と長寧宮正門の長安門が挙げられよう。これらはともに煉瓦と漆喰による3間の門であるが、棟には多くの龍や鳥獣が載り、壁体や付け柱には陶片を使った色鮮やかなモザイクの装飾が施されている。特に長安門では付け柱に複雑なモールディングを伴う台座やコリント様式風な柱頭が見られたり、門の両脇に影壁様のうねる壁を続けたり、東西の様式を融合して華麗



21

な造形を生み出している。

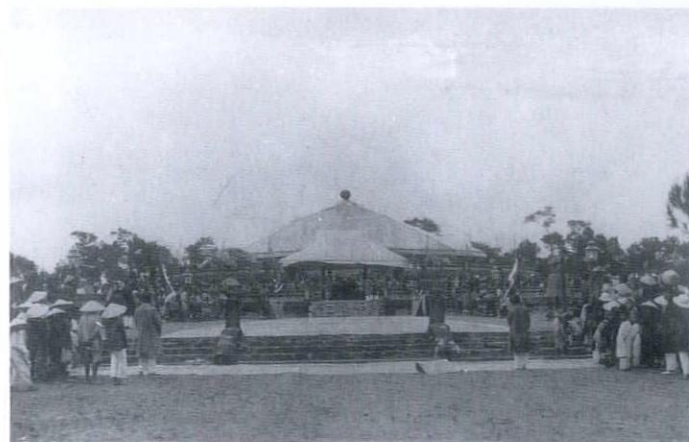
嘉隆帝による創建後、阮朝の最盛期である明命、紹治両帝の時代、城内には主要な殿舎の他に多数の庭園と幾十もの遊楽のための樓閣が建てられ、まさに優雅な別天地を為していたという。しかし、フランス支配下の成泰帝の時代になると建物も老朽化してきて、大規模な修復工事が行なわれると同時に、維持が難しく不必要な建物は多く撤去される。その後、形式的なものであれ一国の王都として維持されてきた諸宮殿も、第一次、第二次インドシナ戦争の戦火によって半数の建物は全壊、残る半数も相当の被害を被り、王宮は廃虚と化した。特に紫禁城内の被害は激しく、左廡、右廡、聞是堂、太平御覽書樓など若干が残るに過ぎない。戦後も20年を経て、城内に設立された保存修復センターにより、ようやく午門、太和殿以下の修復事業が始まり、徐々に往時の姿を取り戻しつつあるが、早急に手を加えなければ倒壊してしまうであろう建物も多く残されているのが実状であり、海外からの修復保存協力が強く求められている。



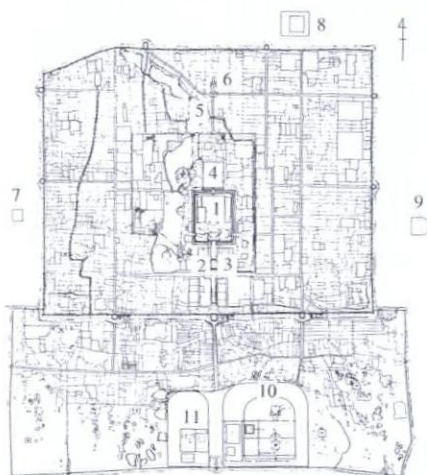
王都の舞台装置

南郊壇、文廟、天姥寺

23：南郊壇での儀式の様子
24：北京の京城
25：天姥寺福祿塔

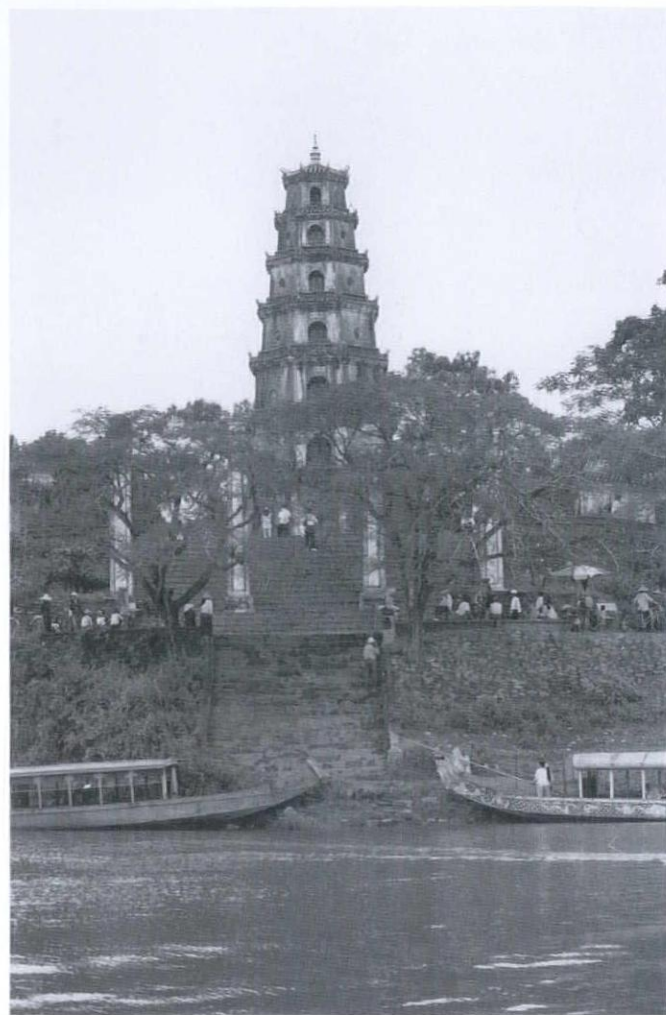


23



24

- 1：宮殿
- 2：社稷殿
- 3：太廟
- 4：景山
- 5：鼓樓
- 6：鐘樓
- 7：月壇
- 8：地壇
- 9：日壇
- 10：天壇
- 11：先農壇、神祇壇



25

王宮のある北岸から香河を越えて南に4kmほど行くと、南郊壇と呼ばれる天壇がある。周壁と松に囲まれた10haの敷地の中央に位置する天壇は、磚積みの3段からなり、下段と中段は一辺がそれぞれ135m、80mの方形、上段は直径40mの円形。円形は天を表わし、方形は地を表わすという。高さは各80cm、各段には石の欄干を回し、かつては下から赤、黄、青に塗られていた。四方から階段が上り、中段には8つの小祭壇が配される。天壇とは天を祭る祭壇であり、天の子である皇帝のみが儀式を行なうことができた。阮朝においては毎年春の三吉日を以て執り行われた。中国古来の「天円地方」の宇宙観や陰陽五行の思想に基づいたその計画は、天を象徴する円や陽を表象する奇数を多用し、敷地の北東に神倉、神廚、西南には祭祀の前夜皇帝が身を清めるための斎宮を置く。

前述の様に、フエの都城と王宮は清の北京城および紫禁城をモデルとして造られているが、それは宮殿建築だけでなく、その背後に潜む宇宙観をも含めた都市の全体計画にまでおよんでいる。清の北京城は南端に城の南北主軸を挟んで天壇と先農壇が、紫禁城の前面には同じく太廟と社稷壇が並び、紫禁城

の背後には景山（人工の小山）、鼓樓、鐘樓が続く。フエの都城は背後の景山などは持たないものの、前方に天壇と影壁の役を果たす御屏山を持ち、紫禁城の前面に太廟と世廟のふたつを構え、都城の南西隅と北西隅にそれぞれ社稷壇と先農壇を設けている。このことから「皇帝の都」として十分な舞台装置を備えているといえるであろう。ここに南の中華帝国を目指した嘉隆帝の強い意気込みが窺える。

社稷壇とは土地と五穀の神を祭る祭壇である。2段の方形の壇で、壇上には中央に黄、東方に青、南方に赤、西方に白、北方に黒の5色の土が敷かれた。史書には嘉隆帝はベトナムの各地から浄土土を貢がせてこれを造ったとある。春夏秋冬の4度儀式が催された。

また、中国では各府県に孔子を祭った文廟があるが、阮朝においても文廟は重く扱われ、ベトナム統一の後嘉隆帝がまず行なったのは、太廟を旧皇城の左に建てることと文廟に詣で秋祭を行なうことであった。フエの文廟は古来のものを1808年（嘉隆七年）に京城の西、香河に臨む今の場所に移築。以来、明命・

紹治兩帝により拡大され多くの殿、樓、門を持つに至り、毎年春祭秋祭が盛大に催されたが、現在は門と石碑が残るのみである。

文廟の手前、少し都城寄りには天姥寺がある。伝説によれば昔、現在寺の建つ丘に毎晩現われる不思議な老女が「王が現われて国家の繁栄のために仏寺を建てるだろう」と予言し、それを伝え聞いた初代阮主の阮演が早速寺を建立したといわれる。以来この寺は歴代の阮主・皇帝により修築増築を繰り返してきた。香河に乗り出す様に建つ7層の福祿塔が印象的である。

嘉隆帝は、その治世5年目（1806）の2月南郊壇を建て、親ら文廟に詣で春祭を行ない、3月には社稷壇を建て、そうして5月改めて太和殿で「皇帝」の位に就いた。

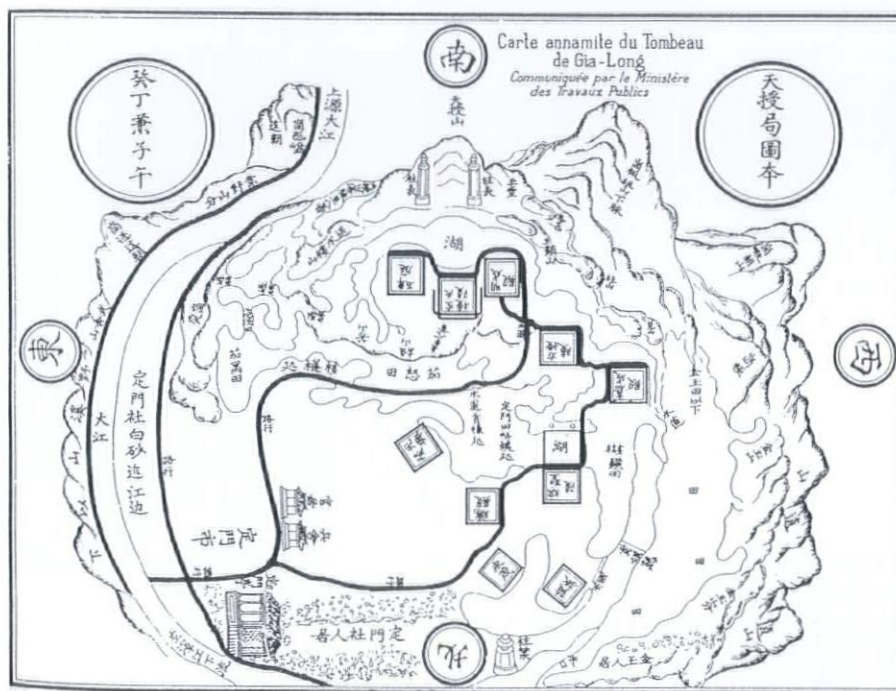
皇帝陵

- 26: 嘉隆帝陵の絵地図。陵はそれ自体でひとつの世界を成していた
- 27: 嘉隆帝陵配置図
- 28: 嘉隆帝陵の嘉隆帝と承天皇后の石屋
- 29: 嘉隆帝陵の明成殿

フエに存在する建築物の中でも、とりわけ興味深いものは歴代の皇帝陵であろう。都城の南西方に広がる丘陵地帯には阮朝歴代皇帝の陵墓が点在する。それら嘉隆、明命、紹治、嗣徳、育徳、同慶、啓定の7つの皇帝陵は各々が建築的に独創性を持つだけでなく、総体として阮朝の歴史的な流れをも体現化している。

皇帝陵は風水思想に重きを置き、河か池を前面に持ち、拝庭、碑亭、段台状テラス、廟殿、円陵あるいは多重の周壁に囲まれた石屋、の5つの要素から構成される。拝庭には左右に侍衛の石形や石象石馬が並び、円陵や石屋は多くの場合前方に一組の花表柱（オベリスク）を伴う。これらは明、清代に確立された中国の陵制に使われる諸要素である。しかし、中国の陵制に倣う一方で、皇帝達は各々自らの趣味に合わせて陵を計画したため、共通の要素を持つにもかかわらず各皇帝陵は驚くべき多様性を見せる。また、配置計画におけるフエの自然環境の巧みな利用も共通した特徴である。

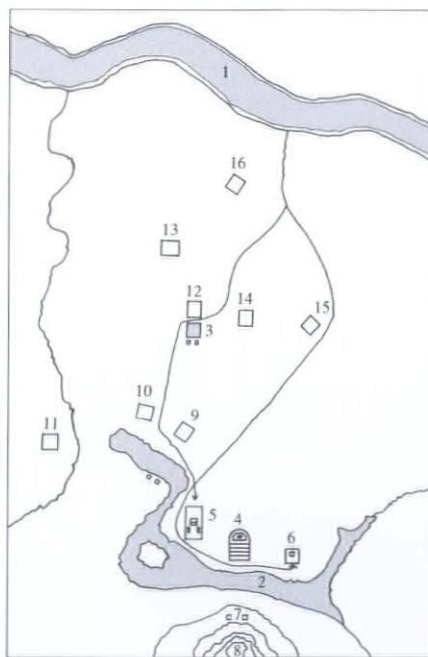
各陵は王宮に比べると比較的保存状況が良く、また表面的なものではあるが整備も一通り行なわれているため、かなり見応えのあるものとなっている。



26

嘉隆帝陵

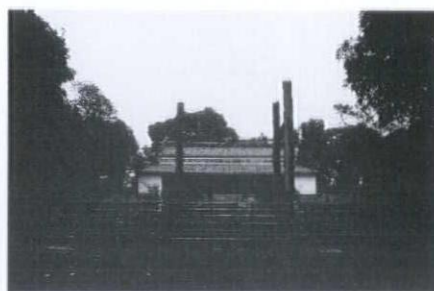
王宮から香河を舟で15km程通り、左岸を南に歩いておよそ30分程行くと、初代皇帝の嘉隆帝陵（1814～1820造営）がある。段台状テラスの奥に、壁に囲まれて嘉隆帝と承天皇后のふたつの石屋の並ぶ荘厳な陵は、月湖と呼ばれる龍形をした湖に臨んで、影壁の役割をなす南の天授山に正対する。陵の左右には碑亭と廟屋が並び、陵の正面天授山の下には2本の花表柱が立つ。また北西方には同じく月湖に臨んでもうひとりの皇后順天の陵と廟があり、さらにその北方、香河側には嘉隆帝の家族や過去の阮主などの陵と廟が多数建ち並び、周りをひろく36の峰に囲まれて境界もなく自然と一体化した嘉隆帝陵は、その計画の元となっている風水や陰陽の世界観とは別に、亜熱帯の原野の中に溶解するような混沌としたイメージを強く抱かせる。



27



28



29

嘉隆帝陵（世祖高皇帝天授陵）

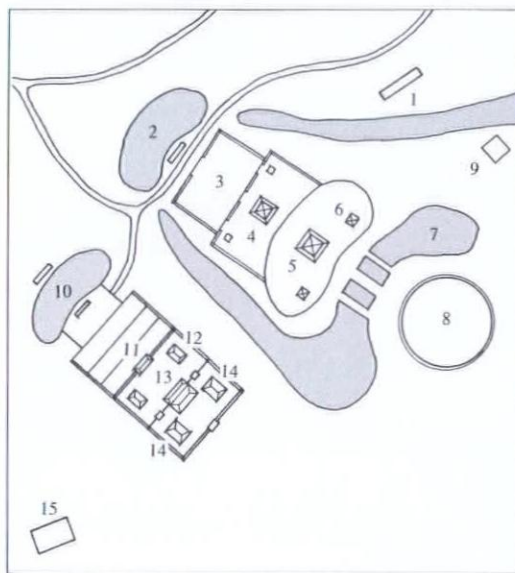
- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1: 香河支流 | 9: 右授陵（嘉隆帝の皇后の墓） |
| 2: 月湖 | 10: 嘉成殿（嘉隆帝の皇后を奉る廟） |
| 3: 方湖 | 11: 長豊陵（阮福洞の墓） |
| 4: 嘉隆帝陵 | 12: 瑞聖殿（嘉隆帝の母の墓） |
| 5: 明成殿（嘉隆帝と皇后を奉る廟） | 13: 黃孤陵（嘉隆帝の姉の墓） |
| 6: 碑亭 | 14: 瑞聖殿（嘉隆帝の母を奉る廟） |
| 7: 花表柱 | 15: 光興陵（阮福湖の皇后の墓） |
| 8: 天授山 | 16: 永茂陵（阮福漢の皇后の墓） |

7つの陵のうち最も調った構成を持つのが明命帝陵（1840～1843造営）である。周長2kmの壁に囲まれた長円形の敷地の主軸上には、大紅門、拝庭、碑亭、段台状テラス、顕徳門、崇恩殿を中心とする廟、明樓、新月池、円陵と主要な建造物が一直線に並ぶ。これは明や清の陵制を忠実に真似たもので、大紅門や崇恩殿、明樓の名もそのまま使われている。しかし、その陵制が表わす厳格な秩序とは別に、その背景として改造された敷地は、主軸の左右を澄明湖と名付けられた大池が挟み、その周りを囲む幾つもの丘の頂に各々楼閣を建てる優雅なものである。王宮の積極的な設計者であった明命帝は、この陵においても厳格である陵と優雅な大庭園をひとつに融合させることを試み、それは見事に成功した。この長大なコンプレックスの中では、門を抜けたり楼に上ったりする度に、訪問者の目の前に新たなパノラマが開け、徐々に深い懐に抱かれるように進んでいく。しかし帝は、1841年惜しくもその完成を見ることなく落馬が原因で亡くなってしまう。

第3代紹治帝は治世7年目、陵の造営に着手する前に崩じ、それは紹治のプランに従って息子の嗣徳によって1848年に造られた。明命陵においてひとつにまとめられた各要素は、紹治帝陵でふたつのコンプレックスに分割される。ひとつは拝庭、碑亭、德馨樓、円陵からなり、前面に月形の潤沢湖、横に凝翠池を構える。これは明命陵のコンプレックスから中央の段台状テラスと廟を除いたものにほぼ等しい。テラスと廟は南西100mほどの所に平行する別のコンプレックスをつくっている。明命陵のような周りを囲む壁もなく森林の中に長閑にたたずむ紹治陵は、次の嗣徳陵への過渡的な存在である。



30



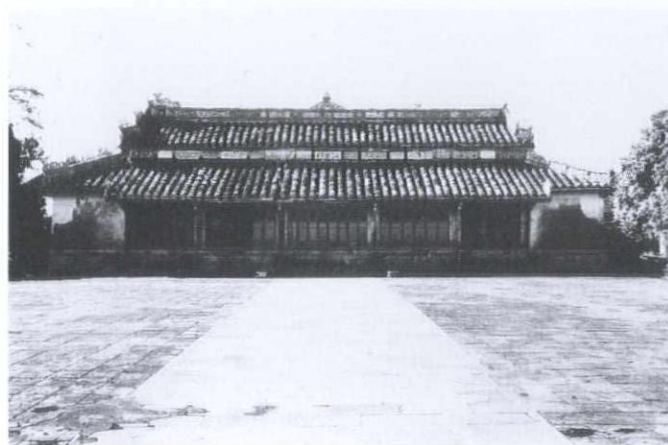
31

紹治帝陵（憲祖章皇帝昌陵）

- 1：兵舎
- 2：潤沢湖
- 3：拝庭
- 4：碑亭
- 5：德馨樓
- 6：花表柱
- 7：凝翠池
- 8：皇帝墓
- 9：顕光閣
- 10：月湖
- 11：満澤門
- 12：左右配殿
- 13：表徳殿
- 14：左右従院
- 15：昌寿陵



32
SD9603
74



33

- 34: 明命帝陵の碑亭
- 35: 明命帝陵の明楼
- 36: 明命帝陵の崇恩殿
- 37: 明命帝陵
- 38: 明命帝陵配置図
- 39: 明命帝陵の明楼から崇恩殿を望む

- 明命帝陵（聖祖仁皇帝孝陵）
- 1: 大紅門
 - 2: 拝庭
 - 3: 碑亭
 - 4: 顕徳門
 - 5: 崇恩殿
 - 6: 弘澤門
 - 7: 偃月橋
 - 8: 明楼
 - 9: 聰明正直橋
 - 10: 皇帝墓
 - 11: 澄明湖
 - 12: 迎涼館
 - 13: 釣魚亭
 - 14: 新月池
 - 15: 追思齋
 - 16: 觀瀾所
 - 17: 靈芳閣
 - 18: 左從房
 - 19: 右從房
 - 20: 虛懷榭



34



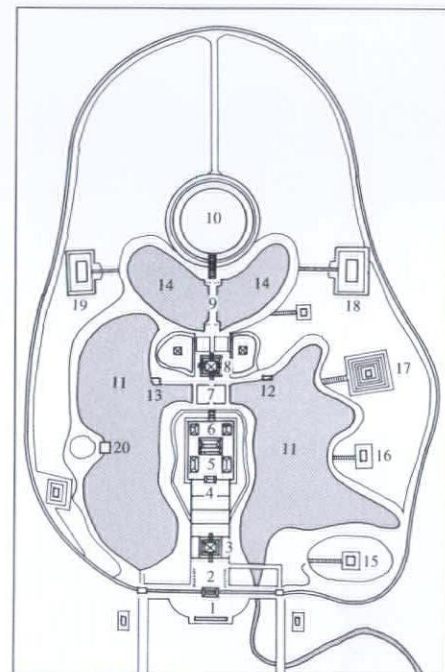
36



35



37



38



39

- 40: 嗣徳帝陵の謙湖に臨む愈謙樹と謙宮門
41: 嗣徳帝陵の謙宮門
42: 嗣徳帝陵の鳴謙堂
43: 嗣徳帝陵の謙湖と沖謙樹
44: 嗣徳帝陵
45: 嗣徳帝陵配置図



40



41



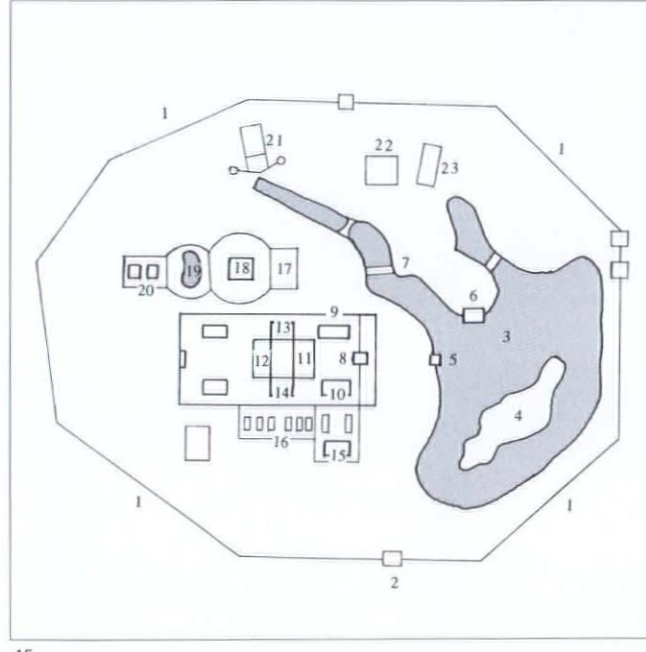
42



43



44



45

嗣徳帝陵 (翼宗英皇帝謙陵)

- 1: 羅城
- 2: 務謙門
- 3: 謙湖
- 4: 謙島
- 5: 愈謙樹
- 6: 沖謙樹
- 7: 踐謙橋
- 8: 謙宮門
- 9: 礼謙廡
- 10: 法謙廡
- 11: 和謙殿
- 12: 良謙殿
- 13: 鳴謙堂
- 14: 温謙堂
- 15: 至謙堂
- 16: 依謙院・持謙院
- 17: 拝庭
- 18: 碑亭
- 19: 小謙池
- 20: 皇帝墓
- 21: 謙寿陵 (皇后墓)
- 22: 執謙殿
- 23: 建福帝陵

阮朝の君主の中で最も長く35年に渡ってベトナムに君臨した嗣徳帝は、詩人であり哲学を好んだが、しかし統治能力に欠けていた。彼はベトナムが西洋の帝国主義に直面した困難な時期に王位に就いたが、彼に嫡子がいなかったことはさらに状況を悪化させ、彼を厭世的にしていって。そうした彼は、隠居して詩を詠む仙境とすべく陵を調べ、終生かつ死後の休息の地とした。

嗣徳帝陵 (1864~1867年造営) も陵と廟のふたつのコンプレックスに分かれるが、ここでは陵では

なく離宮として営まれた廟の方が中心となっている。敷地は長さ1.5kmの周壁に囲まれる。南の務謙門を入り、敷地の東半を占める謙湖に沿って行くと湖に臨んで廟である謙宮が建つ。段台状テラスを上り宮門を入ると、そこには3つの中庭を囲んで和謙殿をはじめ9つの殿閣が並ぶ。その一角には鳴謙堂という小劇場も設けられた。謙湖に浮かぶ中島には3つの亭が建ち、また湖畔には愈謙樹と沖謙樹のふたつの台樹 (釣台) が乗り出す等、中国の離宮に見られる典型的な構成である。陵は謙宮の斜め後方にあり、

謙湖から引いた小謙池を前に拝庭、碑亭、石室が並ぶ。また、陵内には僞天后や養子の建福帝の陵も置かれている。

嘉隆帝から嗣徳帝までの4陵は専制支配を反映して非常に大規模なものであった。しかし、阮朝が実権を失った後の皇帝陵は規模が縮小あるいは父祖の陵内に棺が置かれるだけで、唯一啓定帝陵のみがその絢爛さで先達に匹敵し得た。

- 46: 育徳帝陵
47: 育徳帝陵配置図
48: 同慶帝陵の凝禧殿
49: 同慶帝陵の碑亭
50: 同慶帝陵配置図
51: 同慶帝陵石屋。殿屋の姿が棟飾りまで忠実に象られている

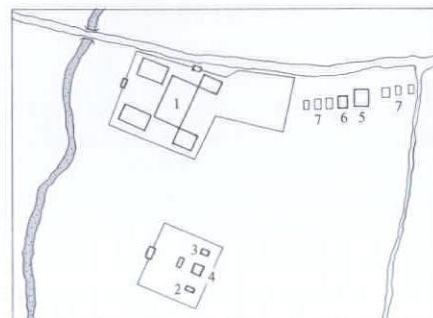
- 育徳帝陵（恭宗惠皇帝安陵）
1: 隆恩殿
2: 皇帝墓
3: 皇后墓
4: 黄屋
5: 成泰帝墓
6: 維新帝墓
7: 成泰帝の妻子の墓

他の陵がほぼ香河に沿って配置されているのに対して育徳帝陵は王宮の正面から2km、御屏山の前に建つ。2重の周壁に囲まれた育徳帝と皇后のふたつの石棺と、少し離れて隆恩殿を中心とした廟からなる育徳帝陵はきわめて質素なものである。嗣徳帝の養子で指名後継者であった育徳帝は即位後3日で権臣により廃立処刑された。彼の陵はその6年後、仏支配下に皇位に就いた息子成泰帝によって1890年に造営された。その成泰帝は息子維新帝とともに1916年に対仏反乱を企て、アフリカ・レユニオン島に流竄される。彼等の死後、成泰帝は1954年、維新帝は1987年に祖父の廟の背後に埋葬された。現在、隆恩殿には祖父、父、子の3人の皇帝が奉られ、成泰、維新の墓の両脇には彼等の家族の墓が並んでいる。

同慶帝は在位3年にして25歳の若さで崩じる。彼の陵は次の成泰帝によって1889年に造営され、後に息子の啓定帝により何度かの改修増築が行なわれた。同慶帝陵の構成は規模に違いはあるものの紹治帝陵とよく似ていて、陵と廟のふたつのコンプレックスに分かれる。陵は3重の周壁に囲まれた石屋と前面の段台状テラス、碑亭、拝庭からなるが、フランス風の碑亭は次の啓定帝陵への前兆といえよう。廟の中心の凝禧殿はおそらく、フエに現存する唯一の三棟造りの宮殿建築である。その質素な外観とは反対に、凝禧殿の内部は朱あるいは金に塗られ、様々な装飾が施されている。また、凝禧殿には帝とふたりの皇后が奉られる他、彼の好んだ香水などの舶来品が展示される。これら陵、廟は何れも前方に香河を臨む丘の上に建ち、特に陵からの眺めは素晴らしい。



46



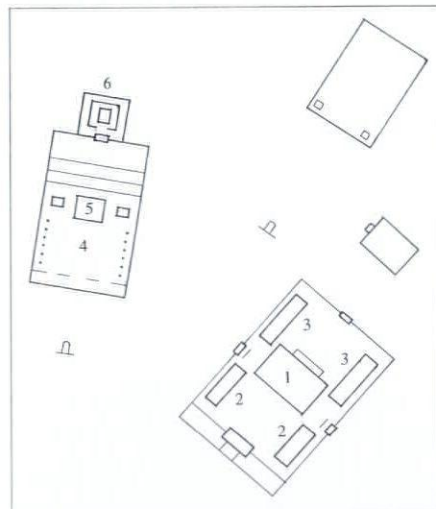
47



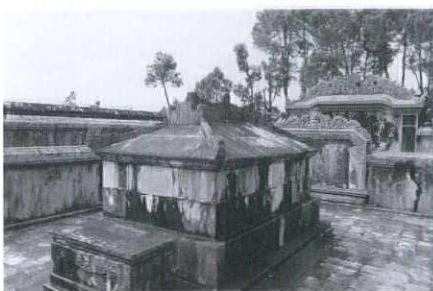
48



49



50



51

- 同慶帝陵（景宗純皇帝思陵）
1: 凝禧殿
2: 左右配殿
3: 左右從院
4: 拝庭
5: 碑亭
6: 皇帝墓

啓定帝陵（1920～1931造営）は、急勾配の大規模な段台状テラスに拝庭、碑亭、廟を配したコンパクトなものである。明命陵以来のひとつのコンプレックスにまとめられた陵は、しかし、明命陵のような大庭園は持たず、フランスのバロック様式で過剰なまでに装飾された。特に廟である天定宮は、鉄筋コンクリートの躯体にスレートの屋根を葺き、内外の壁面や付け柱を漆喰細工あるいは陶片で造られた多彩な龍のモザイクで飾るなどして、驚くべき折衷様式を造り出している。入口の階段から見上げるそれは圧倒的でさえある。覇王嘉隆帝の実権を失った末裔がフランス趣味でつくった瀟洒な陵墓、啓定帝陵。そしてこれは間違いなく今世紀で最も重要なベトナム建築のひとつであろう。

おわりに

フエの遺跡群は北京の故宮や十三陵のような壮大さは持たない。故宮を造営するには国力が小さすぎた。また、日本建築の歴史がそうであったほどには「国風化」が現れる、時間の厚みがあるわけではない。これは中国との距離が近すぎたと同時に、王宮の誕生が比較的新しい時代であったことに起因する。フエの遺跡群は自己主張をするというよりはベトナムの風土にしっかりと溶け込んでいる。フエをどのような見るとかは人それぞれであるが、ユネスコのA. M. マボウ氏の語った「賞賛すべき建築上のボエム」というのが一番的確な表現かもしれない。熱帯雨林の中に眠るその一篇の詩の如き美しい都市が経てきた歴史に思いを馳せながら歩くと、やはり深い感慨を覚えずにはいられないものである。

- 中沢信一郎／早稲田大学アジア建築研究室
- 田口康子／早稲田大学アジア建築研究室
- 土屋武／早稲田大学アジア建築研究室

参考文献および図版出典

- ・『欽定大南會典事例』
- ・『大南一統志』
- ・岩村成光著『安南通史』、富山房、1941年
- ・『NHK—美の回廊をゆく東南アジア至宝の旅3』、NHK取材班他、日本放送出版協会、1991年
- ・『教おう！ベトナム・フエの文化遺産』、ユネスコ・アジア文化センター、1994年
- ・Phan Thuan An, "Kien Truc Co Do Hue," Hue, 1995
- ・Jaques Dumarcay, Michael Smiths, "The Palaces of South-East Asia: Architecture and Customs," Singapore, 1991

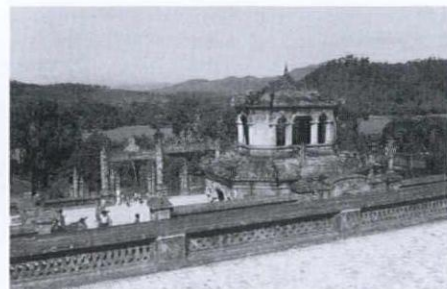
写真提供

フエ遺跡保存センター
ハノイ社会科学研究所

- 52：啓定帝陵の入口から折衷様式の門をのぞむ
- 53：啓定帝陵の天定宮からの展望
- 54：啓定帝陵の啓成殿のファサード
- 55：啓定帝陵の啓成殿の天井装飾
- 56：啓定帝陵の天定宮に納められた啓定帝の人形
- 57：啓定帝陵配置図



52



53



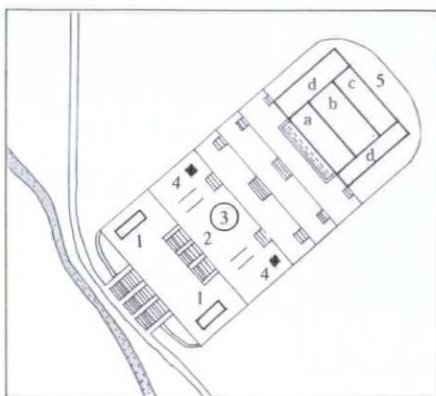
54



55



56



57

啓定帝陵

- 1：左右廡
- 2：拝庭
- 3：碑亭
- 4：花表柱
- 5：天定宮
- a：啓成殿
- b：啓定帝の像
- c：祠
- d：左右直房

ホイアンは、ベトナム中部の大都市ダナンの南約30kmの地点に位置する、トゥボン川の河口に開けた港町である。現在ダナンの人口は約400万人、ホイアンは6万人。しかし最初に国際商業港として栄えていたのはホイアンであった。逆転は19世紀の末から20世紀の初めにかけて起こる。年々巨大化する船にホイアンの港が適さなくなり、しかも港自体が土砂の堆積で浅くなってしまったのである。そのかわりホイアンにはチャーミングな町並みが遺された。

ホイアンにはいくつかの顔がある。我々が第1に気になるのは、ここにかつて日本人町があったということだろう。ただし痕跡はさほど多くない。日本橋という名前の橋（橋そのものは中国風）、4つの日本人墓地、近くの五行山の日本人名が刻まれた石碑、といったところだ。日本人に比べると中国人の存在がはるかに大きい。ホイアンの第2の顔は、東南アジアの代表的な華人街のひとつということである。

第3の顔は、この地がチャンパ王国の商業センターであったということである。チャンパは2世紀から15世紀にかけて中部ベトナム一帯に広がった王国である。中心はトゥボン川流域で、上流に宗教都市ミソン、中流に政治的都市チャキュウ、そして下流に商業都市ホイアンが配された。かつてホイアンは「海のシルクロード」の東の窓口であった。決して単なる日本人町で片付けるわけにはゆかない。

さて、第4の顔はその町並みである。ホイアンはおそらく東南アジアで随一の歴史的町並みを持っている。この町並みを政府が文化財に指定したのは、戦後の混乱が続く1985年。しかし保存は思うように進まなかった。1990年3月ダナンで開催された国際シンポジウムでは次のように訴えている。

「政府、クアンナム・ダナン省、およびホイアン住民は文化財の保存のために最善を尽くしてきたが、もはや修復や復元はもとより、その維持すら能わぬ状態となっている」

国の資金を投じる規則はあるが、廟など公共性の高い建築の修復で精一杯であり、民家にはほとんどまわらなかった。

そして第5の顔は、現代都市としてのホイアンだ。賑やかな市場はここが近在の物資の集散地であることを示す。町では家具づくりなどの産業が盛んである。ここ2、3年は観光ブームに沸いている。ベトナムのひとつの成長点と目されるダナンの近郊に位置するという立地条件は、否応なくホイアンをベトナムの経済発展に巻き込んでゆくだろう。ここには現代都市としての成長と町並みの保存をどう両立させるかという普遍のテーマがある。

ベトナムの都市と建築 3

ホイアン

Hội An

福川裕一+友田博通

平幸夫

菊池誠一

林良彦



チャンパー通り。中央は日本橋

歴史都市ホイアン

日本人も活躍した国際交易都市の町並み保存

福川裕一＋友田博通

調査の経過

文化庁と大学よりなる私達のチームが、ホイアンで本格的な調査と修復事業を開始したのは1993年からである。前述のシンポジウムがひとつのきっかけとなり、文化庁が技術上の協力を申し出、またベトナム側の要請があって実現した。チームには建築だけでなく、考古学関係者も加わり、総合調査として進められてきた。後掲の菊地誠一氏の論文はその成果の一端である。

大学チームは主に建築調査を担当、ハノイ建築大学と協力しつつ毎年2回の調査を行い、95年3月にメインストリートであるチャンフー通り沿いの調査をほぼ終えたところである。文化庁チームは修復を担当、その第1号のチャンフー通り80番の建物（以下、建物は通り名と番地と呼ぶ）は95年9月に貿易陶磁博物館としてオープンした。さらに、何軒かについて屋根替えなどの応急工事を行ってきた。この間の事情や経過はそれぞれの報告にある通りである。

この間、試行錯誤の連続の中で、やはり考えさせられたのは「町並み保存というその国固有の課題に外国チームが関わることの意味」あるいは「関わり方」という問題であった。

1. 町の概要

日本人町と華人街

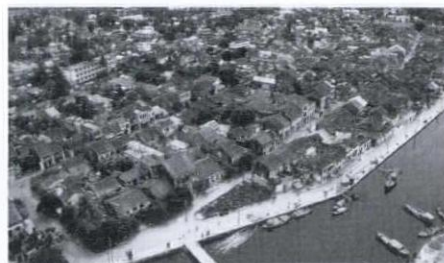
17世紀はじめの記録には次のように書かれている。

「この都市はかなり大きく、ふたつの町を区別できる。日本人町と中国人町である。彼らは別々に生活し、別個の総治官を置き、各国の風俗と法に従って生活した」。名古屋の茶屋新六が朱印船に乗って長崎から交趾国へ渡った様子を描いた茶屋新六交趾国貿易図には、ホイアンとおほしき町並みが描かれている。しかし、菊地氏の報告にあるとおり、その場所はまだ確認されていない。

17世紀末になると、もはや中国人が主役になったことを記録は伝えている。「ホイアンは各国の商品が集まる大きな埠頭である。河に沿って街が真っ直ぐ3、4里続く。この街を大唐街という。道の両側に店舗が隙間なく並んでいる。住民はすべて福建人である」。この大唐街が現在のチャンフー通りであるかどうかはにわかに判定しがたい。しかし、この時期に華人街としてのホイアンの基礎が築かれたことは確かであろう。その後、ヨーロッパ人たちが商館を構えるようになって中国の主役の座は揺るがなかった。そして現在のホイアンには東南アジア各地の華人街と共通する特色が数多く見出される。

アウトライン

まず町並みの概要を説明しよう。古い街はトゥボン川沿いの東西に伸びる3本の街路からなっている。川沿いがバクダン、次がグエンタイホック、そしてチャンフーの各通りである。前2者は19世紀半ばに建設されたことが知られており、チャンフー通りが



旧市街の西端部

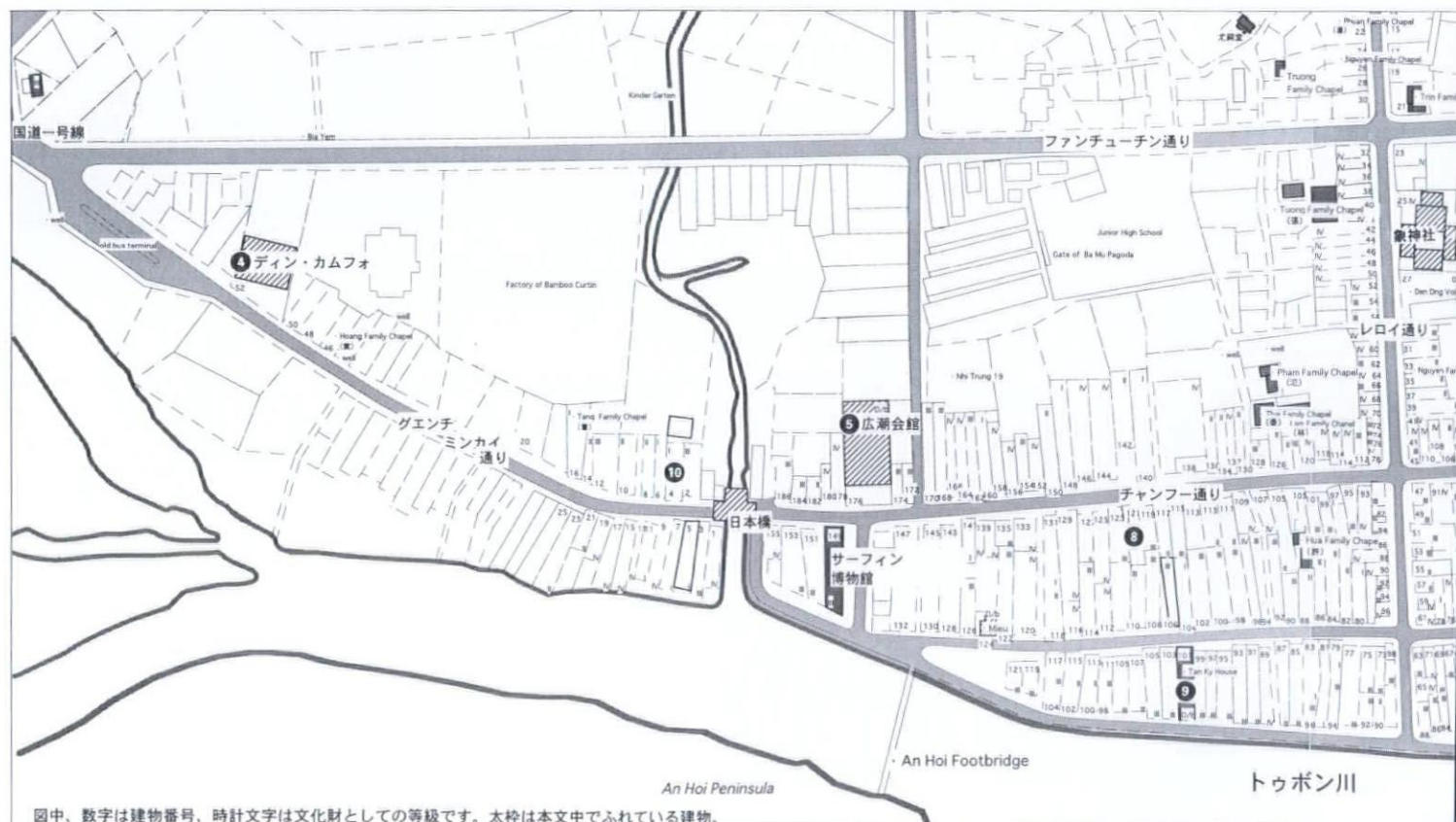
一番古い。チャンフー通りの西端に日本橋があり、日本橋から西はグエンチミンカイ通りと名前を変える。さらに内陸にはファンチューチン通りがあるが、これはもちろん新しい。

ファンチューチン通りの東端の広場になっている一帯が現在のホイアンの官庁街である。西側では、古い通りは日本橋の手前でグエンチミンカイ通り1本にまとまり、やがてファンチューチン通りほかの新しい街路と合流して国道1号線まで続いていく。仏領時代はこの合流点の少し手前にバスターミナルがあったが、現在はもっと西へ移された。町並みの東側には市場がある。その川縁には魚市場も立ち、ものすごい賑わいだ。しかし市場はもともとは町並みの真ん中を南北に横切るレロイ通り沿いの象神社（現幼稚園）前の広場に設けられていた。

地図をよく見ると、主要な街路とは別に内陸部と川とを結ぶ何本かの小道が目につく。古い集落の状態を物語るものと思われるが、それ以上の想像は現段階では困難である。

主な建物：会館、寺院、ディン……

町並みでもっとも目立つ建物は、中国人たちが彼らの出身地別に建てた会館である。もっとも規模の大きいのが福建会館で、ほかに潮州会館、海南会館、広潮会館の計4つがある。チャンフー通りのちょうど真ん中あたりには華僑全体を対象とした中華会館がある。商工会議所のような役割を果たしたものと



図中、数字は建物番号、時計文字は文化財としての等級です。太枠は本文中でふれている建物。

ホイアン市街地

SD9603

80



トゥボン川から見た町並み

思われる。現在の市場の向かい側には、華人街につきものの閩帝廟がある。そのすぐ北は観音寺で、ホイアンの歴史を展示する小さな博物館として使われている。神社（デン）もある。昔その前庭で市場が開かれていた象神社である。

ベトナムのコミュニティにはディンと呼ばれる集会所がある。古い町並みの中にはミンフォンとカムフォのディンがある。1994年の発掘で後者の前庭から、16-17世紀の日本の古伊万里を含む大量の陶器が発見された。

これら主だった建物はチャンフー通りの北側に川を向いて建てられており、いくつかの会館の前には参道のような川へ真っ直ぐに抜ける道がついている。東南アジアの華人街に詳しい筑波大学の泉田氏によれば、このような街路形態や建物配置は南シナ海沿岸の華人街の特徴であるという（近隣ではフエの華人街がそうだ）。さらに町の立地については儒教や風水思想の影響を示唆されている。

そのほか、各家族が先祖を祭る多くの族廟（ファミリー・チャペル）が見られる。それらは町の西側に多い。泉田氏は、死者を西（日没の方向）へ置くという中国人の信仰と関係があるかもしれないとしている。

会館やディンの建物大部分は中庭を囲んだシンメトリーで、中国の四合院を彷彿とさせる。一方、族廟はより一般の町家に近い。そこで次に民家の紹介に移ろう。

ホイアン 建築マップ

凡例
現名称
旧名称
所在地／竣工年／
設計者
解説



1. 福建会館
Assembly Hall of the Fukien
キムソン寺
46 Tran Phu St., Hoi An／キムソン寺建立は180
末、福建会館：1900年／不詳
同郷会館の中でも最大規模を誇る。訪れる観光
客も多い。



2. 海南会館 Trieu Chau Assembly Hall
不詳
10 Tran Phu St., Hoi An／1900年／不詳



3. 中華会館
Chinese All-Community Assembly Hall
洋商會館(Duong Thuong Hoi Quan)または五邦
寺(Chua Ngu Bang)
64 Tran Phu St., Hoi An／1928年／不詳
中国人全体のための会館

4. カムフォのディン Dinh Cam Pho
64 Nguyen Thi Minh Khai St., Hoi An, Quang
Nam-Da Nang／創設：1818年、現建物：1903
年／不詳



5. 広潮会館
Assembly Hall of the Quang Dong
176 Tran Phu St., Hoi An／1884年／不詳
広州出身の中国人の同郷会館。会館の前にはこ
のような「参道」のある場合がある。



6. 関公廟 Quang Cong Temple
24 Tran Phu St., Hoi An／2000年初頭／不詳



7. チャンフー77番住宅
77 Tran Phu St., Hoi An／1900年／不詳
チャンフー通りの中で随一の美しく保存の良い
家として知られる。チャンフー85番などと同じ
古い形式である。



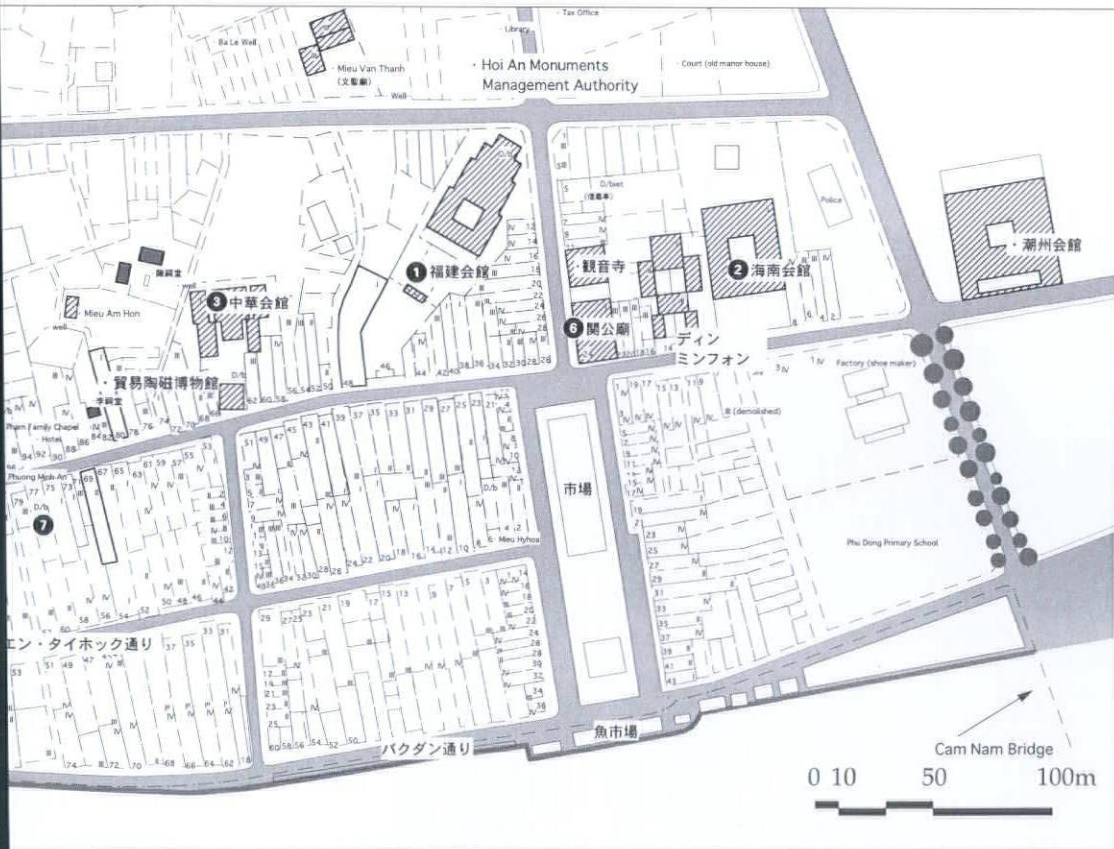
8. チャンフー121番住宅
85 Tran Phu St., Hoi An／1900年初頭／不詳
日本チームによる修復第2号として現在工事中
である。傷みが激しい。



9. グエンタイホック101番（タンキ
ー・ハウス）
101 Nguyen Thai Hoc St., Hoi An／1900末／不詳
タンキー・ハウスという名称で親しまれ、美し
く保存の良い家として観光客が必ず訪れる建
物。下屋底、土壁で窓の小さい2階の壁など、
日本の町屋を彷彿とさせるところがある。



10. グエンチミンカイ4番住宅
4 Nguyen Thi Minh Khai St., Hoi An／1900末
- 2000年初頭／不詳
最近持ち主が文化財指定に持ち込み、修復して
土産物店として公開した。グエンチミンカイ5
番と同じ形式の建物である。



2. 町並みの建物

チャンフー48番

典型的ないくつかの住居の中から、まずチャンフー48番を観察してみよう。これは福建会館の東に隣接する大変美しい建物である。

敷地は間口10m、奥行35mほどの細長い形である。そこに道路側から、前家、中庭、後家、後ろ庭が配置されている。後家は多少簡略化されているが、前家とよく似た建物である。中庭には、前家と後家とをつなぐ小さな橋家が西側に寄せて設けられている。後ろ庭には便所や釜家が設けられるが、この例では新しい住宅が増築されている。この例ではどの棟も平屋である。

棟の配置は驚くほど日本の町家に似ている。もちろんこれはホイアンに日本人町があったことは関係ない。洋の東西を問わない都市住宅の普遍的な姿と言えよう。

正面を見よう。まず印象に残るのは3つの柱間(スパン)からなる左右対称のデザインである。両側面は厚い壁である。屋根には段があり庇が独立している。庇は4本の柱で支えられ開放されている。建具は中央の柱間では両内開きの板戸、両側の柱間では小幅の板を落としこむ。入口の上につけられたふたつの龍眼が印象的だ。

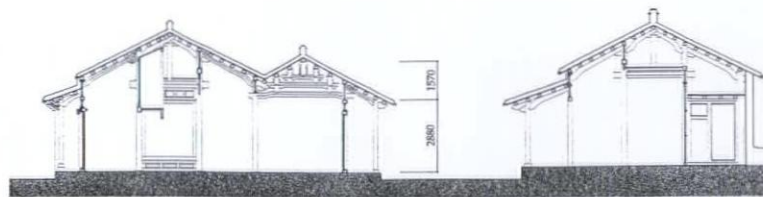
断面および平面からは、前家も後家も奥行3間、間口3間からなるコアが母屋となっていることがわかる。この母屋の前後に庇や独立した子棟が付加され空間が拡張されている。前家、後家とも天井はなく、屋根裏まで吹き抜けている。母屋の屋根は4×4の計16本の柱で支えられているが、中央には4本の柱が4辺形をなしてそびえていることになる。これは大変象徴的であり、上部には中庭側を向けて神棚が設置されている(たまに道路側を向いている場合もある)。柱の間は適宜壁で仕切られ、部屋が作られるが、一般的には開放的である。

屋根は切妻、平入りである。この例のように、一般に屋根と屋根の間に谷ができることは嫌わない。橋家は入母屋が一般である。したがって橋家の屋根と前家および後家の屋根の間にもそれぞれ谷ができる。

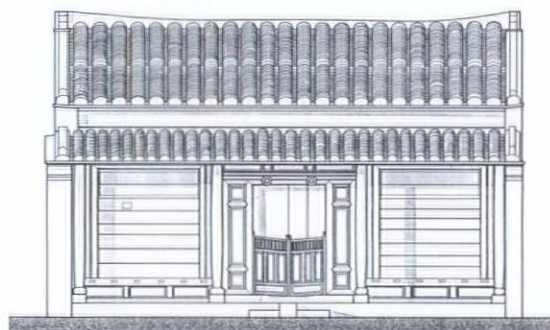
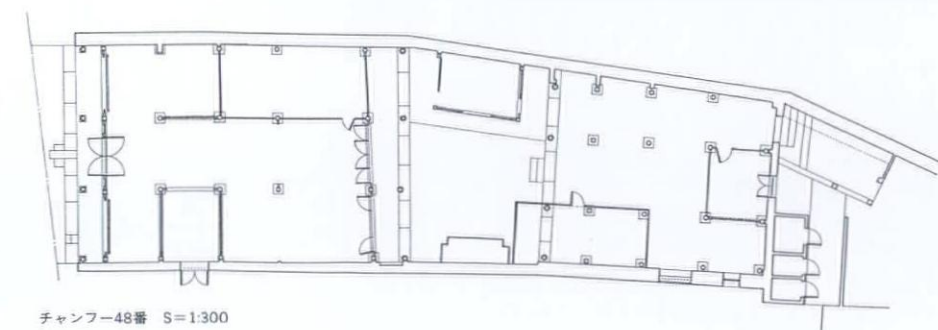
断面図において、母屋を支える4本の柱のうち、真ん中の2本は母柱、外側の2本は側柱と呼ばれる。庇を含めて1スパンづつ登り梁(ケオ)を架け柱の頭をつなぐ。母柱の間では合掌が組まれ棟を支える。柱の前後では、上からおりてくる登り梁が少し柱を突き抜け、下へおりていく登り梁を載せる。この形式は、ベトナムでは「ケオ・チョン」と呼ばれる。登り梁は微妙に湾曲した材となり、鼻先には彫刻がほどこされる。登り梁の上に母屋桁がおかれ、野地板がひかれる。母屋桁は丸太であるが、柱の上については角材が用いられ、頭つなぎを兼ねる。母柱はまた間口方向および奥行き方向の貫のような水平材で固められている。奥行き方向の貫からは、合掌を支える束がたてられている。

子棟の小屋は、梁と束を組み合わせた構造である。縁り型や彫刻が施されており、虹梁、大瓶束と言った方がよいかもしれない。ベトナム語ではこの形式は「チョン・ズオン」と呼ばれ中国的であると言われる。

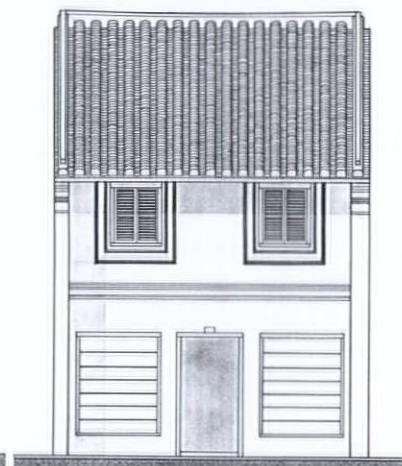
以上から構造において水平方向の荷重はほとんど考慮されていないように見える。水平力をもつばら側面の煉瓦壁が受けもつことになる。ちなみにベトナムには地震がないといわれている。



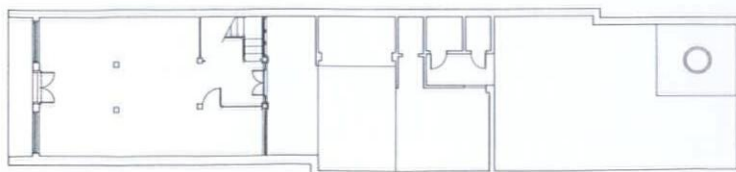
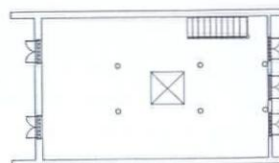
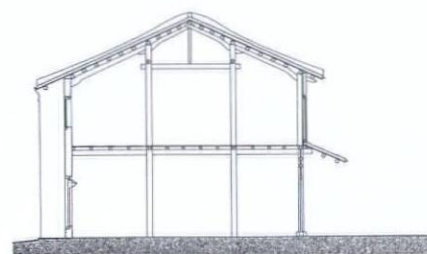
チャンフー48番 S=1:300



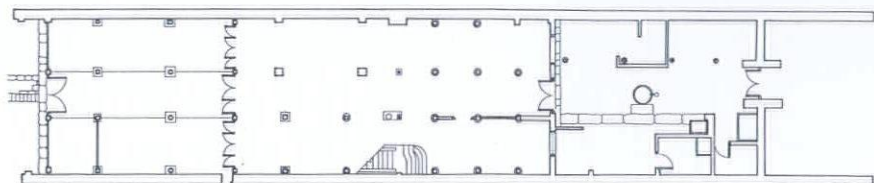
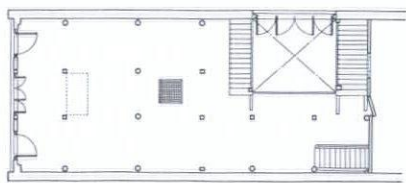
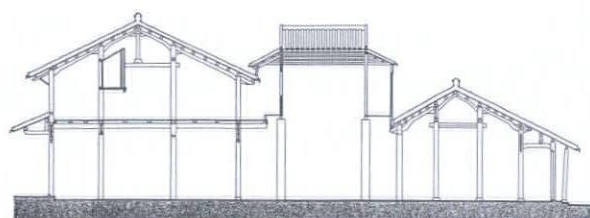
チャンフー48番ファサード



チャンフー69番ファサード



チャンフー69番 S=1:300



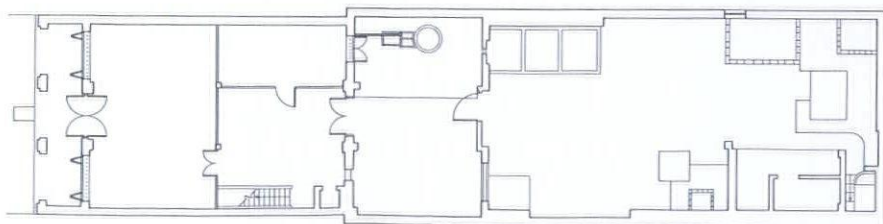
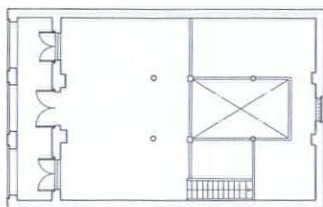
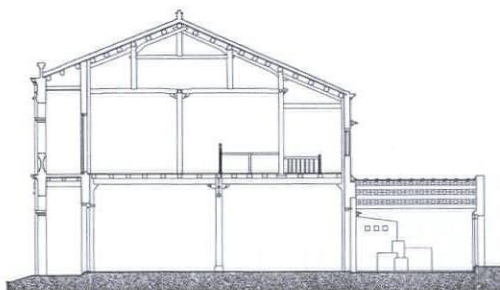
グエンチミンカイ 5 番 S=1:300



グエンチミンカイ 5 番ファサード



グエンタイホック 106 番ファサード



グエンタイホック 106 番 S=1:300

ほかにどんなタイプの建物があるか

チャンフー85番は基本的には48番と同じなのだが、合掌を支える束がないこと、底が独立していないこと、床が街路よりかなり低いことなどから、ホワイアンでもっとも古い建物のひとつと推測されている。我々はこの建物の後家部分を発掘した。2層の床が発見され、今の建物は3代目であることがわかったが、同時に一番下の床でも17世紀まで溯ることはないことも判明した。このことの意味は菊地氏の報告を参照されたい。

グエンチミンカイ3番は2階建てで正面に底が出ている。しかも2階は低く、壁は漆喰仕上げなので日本の町家にとってもよく似ている。観光客が必ず訪れる有名なタンキー・ハウス(グエンタイホック101番)と同じ形式である。背後は直接川に面しているが、かつてのチャンフー通りの南側の建物もこれと同じ立地条件であったのであろう。中庭に屋根がかかっているのは、ここで特産品のビンロウの仕分けをしたからだということだ。

チャンフー80番は総2階で、正面にベランダのついた建物である。建具にはガラスやよろい戸が用いられ、明らかに新しい。装飾が実に賑やかで、軒裏には黄檗天井が使われている。正面のドアにオランダ東インド会社のマークがはめ込まれているが理由は不明だ。詳細は修復チームからの報告を参照されたい。

チャンフー69番は総2階のもうひとつのタイプである。正面の1階と2階の壁は一体で煉瓦で作られている。軒裏が黄檗天井になっているのは80番と同じ。壁にはちょっとしてリレーフがあり西洋の臭いが少しする。

グエンタイホック106番は西洋風ファサードの建物。たつぷりとベランダをとったコロニアル・スタイルである。小屋組は3×3の伝統的な形式が守られているが、柱はもはやそれに従っていない。西洋式の建物ではプランが構造からの自由を獲得し始めている。

ホワイアンの伝統的な建物はほぼ上記の形式に分類される。興味深いのは、これらタイプごとに分布上の特徴があることである。1階建は、チャンフー通り沿い、特にレロイ通りより東側の地区に多い。1階に底をもつ2階建ては、グエンチミンカイ通りなど周辺部に見られる。2階建てのベランダ付きはまんべんなく分布するが、ベランダのない煉瓦壁のものは、グエンタイホック通りに特に多い。コロニアルスタイルはグエンタイホック通りの東側に集中し、フレンチ・クォーターともいふべき趣の地区を形成している。このような地区ごとの雰囲気の違いを味わうこともホワイアン散策のひとつの楽しみだ。

さて問題は建設年代である。残念ながら絶対年代のわかる建物はない。修復チームはチャンフー80番を1920年ごろと推定している。「タンキー・ハウスのあるグエンタイホック通りの建設は1840年である」「最も古いと思われるチャンフー85番が3代目であって初代は18世紀である」といったことを組み合わせるしかない。今のところの推定は次の通りだ。最も古いのは1階建ての棟束のないタイプ、場合によっては18世紀に溯るかもしれない。棟束のあるタイプはそれよりは新しいだろう。1階の底の出たタンキー・ハウス型は19世紀後半から、そして2階建ては多くは20世紀に入ってからのものであろう。ホワイアンの建物は存外新しいと言えそうである。

このような建物のルーツは何か。これが問題になるのは、この町が、当初華人街であるところから中国ルーツではないかとの推測がなされたからである。結論からいえば、ホイアンの町家はベトナム中部固有の形式を備えた民家である。このことは同じ中部の古都フエの民家を調べてみて明らかになった。まだまだ調査すべき点が多いが、現在分かっている範囲でフエの民家をまとめてみよう。

P.84中段右に示した図は、1840年代の建築とされる間口5間、奥行4間の建物である。壁が柱より半間ほど離して作られているが、3間×3間のコアを見出すことは容易であろう。コアに対して、正面と左右に庇を出す。屋根は、コア部分に棟を置いた入母屋形式である。ただし登り梁はこのコア部分では1本である(ホイアンにも数は少ないが例がある)。

紙面の都合上、図を掲載することはできないが、このほか、上の形式から、正面の庇が独立した小さな棟となったもの(これはホイアンの子棟に相当する。大和殿の断面と規模は異なるが酷似している)、3間×3間のコアの4方すべてに庇が付加された形式、などのバリエーションが見出された。これらはいずれもかつてのグエン朝の官僚の家として建てられた独立住宅であるが、町家では、3間×3間の母屋に道路側に独立した小さな屋根をもつ棟をつけたものが見出された。子棟の扱い方が異なるが、空間構成的には大変よく似たシステムである。

またフエの都城内には、3間×3間のコアだけの住宅が存在する。屋根は入母屋形式で、正面以外は厚い煉瓦の壁となっている。中心の4本の柱は貫、および頭貫で固められ、下は3方から、上は1方からの登り梁を受けている。この部分は簡単に仕切られ先祖壇が設けられている。この形式の住宅はロイと呼ばれベトナム中部、クワンチーからフエまでに多いということだ。この建物はかつての王族(女性)用住宅で、素朴な形式が好まれたのであろう。これをベトナム中部住宅のプロトタイプと見、ホイアンの町家のルーツと考えると大きな間違いではなさそうだ。

もはや詳しく触れる余裕はないが、実はホイアンの族廟はこれらフエの住宅に大変よく似ているということを示しておこう。なお、北ベトナムの民家(宗教建築も含む)との違いは小屋組に見出される。中部では上の登り梁が下の梁を載せるのに対して、北ベトナムでは下の梁が上の梁を載せるのである。

ホイアンの町家は、基本は都市住居としての普遍的な性格に根ざしたものである。同時にベトナム中部固有の建築構法や様式に基づいて作られている。そしてそこに中国風や西洋風の装飾が加えられ、国際交易都市としての魅力につながっているのだ。ホイアンの町並みの建築的価値はまさにこれらの事実の上に組み立てられる。

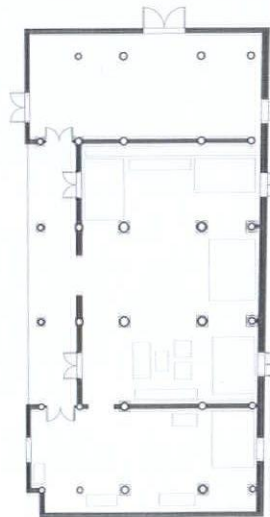
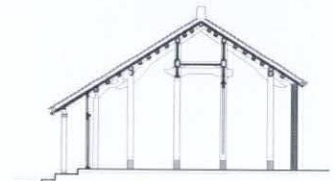
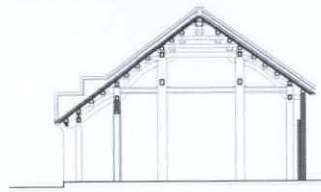
3. 町並み保存の課題

基本的課題

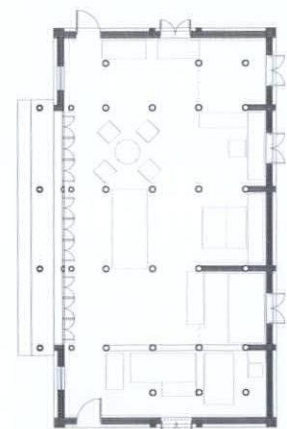
町並み保存の基本的な課題は、歴史的な町並みを現代の文脈の中にどう位置づけるかということである。住まいでいえば、伝統的な住居を現代の住居としてどのように住みこなすかというテーマである。もっともホイアンではそれ以前に、老朽化という問題が大きい。すでに見たようにホイアンの歴史的建物は雨仕舞への対応が十分とは言えない。屋根の手入れさえきちんとしていけば良いのだろうが、戦後は多くの建物が放置されてきた。そしてベトナムの気候は厳しい。夏の暑さはともかく、冬には湿った



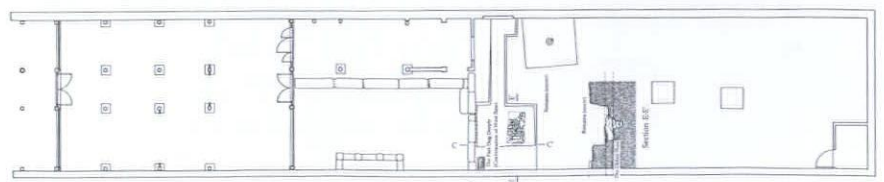
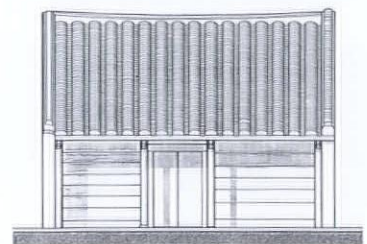
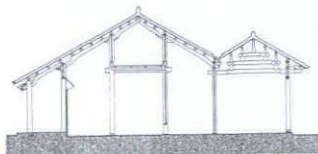
いらかの波。重畳する屋根はホイアンの最大の魅力のひとつ



北ベトナムの住宅



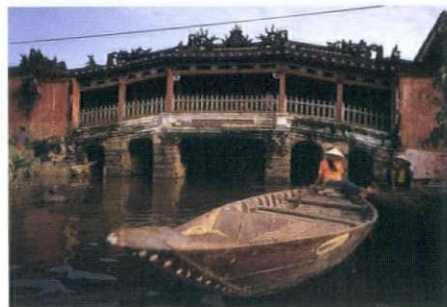
フエ住宅(ルオン)



チャンフー85番 S=1:300



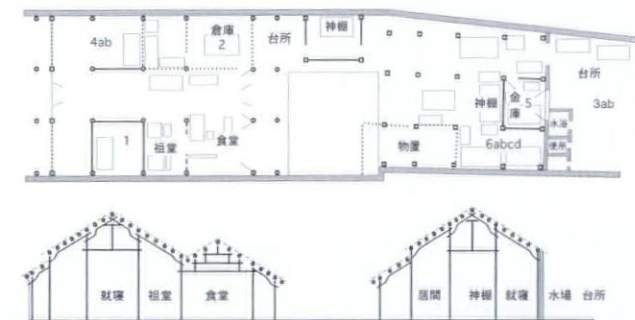
チャンフー通りの町並み。ホイアンのメインストリートである



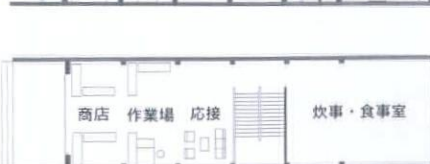
日本橋。普段は水は無いが、撮影時は洪水



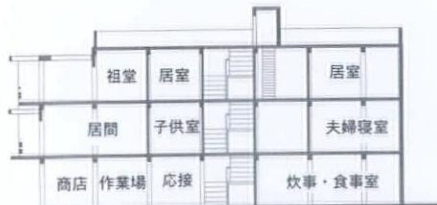
チャンフー・ストリート



チャンフー48番、家具配置と住み方



グエンタイホック68番、家具配置と住み方



グエンタイホック68番・居間

寒い天気が続くのである。この季節には屋根や道など町中がコケや草で覆われる。多いのは蟻害である。とりわけ、政府所有でアパートとして使われている住宅は悲惨な状況におかれている。

最近では自然の厳しさに秋の定期的な洪水が加わるようになった。洪水の原因は米軍の枯葉作戦とも木材の伐採ともいわれ、定かではない。ただトゥボン川が土砂の堆積で浅くなりつつある一方で、川岸が削られつつあることに危機感が募っている。浚渫と護岸は緊急の課題なのだが、手は打たれていない。

住まいの変化

現代のベトナムの人たちの住まいへの要求を検討する前に、伝統的建物における住み方を明らかにしよう。といっても当初の商業形態が崩れている今ではこれは聞き取りによるしかない。そしてそれはあまり成功していない。日本の町家でも同じことだが、建物の内部空間は融通無碍で、居間、寝室など明確な区分がそもそも困難なのである。それでも大まかなゾーニングはできる。先に例としてとりあげたチャンフー48番にもう一度登場を願おう。

この建物には現在、66歳の当主を筆頭に12人、6家族が生活している。家族の内訳は、独身が3人、あとは夫婦十子1人、夫婦十子2人、母十子1人だ。夫婦十子1人の家族は最奥部の新しい棟で生活している。図に見るように、各家族は建物を適宜仕切って分割使用している。炊事も別々に行われている。もちろんこれは本来の住み方ではない。聞き取りに想像を加えたかつての住み方は次のようなものである。

まず基本は前家が商売、後家が生活のための空間である。橋家は帳場として使われ、前家の道路側第1スパンは店舗である。第2スパンは仕切られており、商品倉庫のような役割を果たした。ここには根太天井があり屋根裏も使えるようになっている。第3スパンには祭壇が設けられている。子棟は接客に用いられた。後家は奥中央に囲まれた部屋があるほかは間仕切りはない。この部屋には窓がある。わが国の民家の塗籠のようなものだったのだろうか。中庭側の柱間中央には現在椅子とテーブルが置かれているが、このゾーンはかつても家族の居間的な空間であったのだろう。

ベトナムでは、1坪ほどの台をベッドに使う（そこに蚊帳をかける）。これは就寝時以外にも活用される便利な移動式の床である。一般には建物の入り隅に置かれてそこが寝室になるが、気候によっては風通しの良い中庭周辺へ移動する。昼間は商業空間である前家も、夜は就寝空間へ早変わりする。

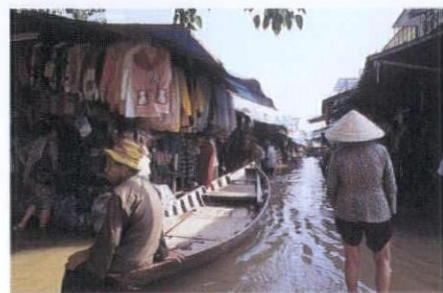
2階建てでは、前家の2階はもっぱら倉庫に用いられた。多くの場合、2階の床には荷物を上げ下ろしするための穴があいている（チャンフー80番）。4本柱の間に設置されていた祭壇は2階へあがる。このことは2階建てになると次第に柱の配置が崩れていくことと関係がありそうだ。

では、新しい建物の状況はどうであろうか。ここではホイアンでももっとも現代的な住宅を紹介しよう。場所はグエンタイホック通り68番。3階建てで、屋根のルーバーやテラスがひととき目立つ建物である。デザインはコルビュジエ風というのか、構成主義風というのか。ただし建てられたのは解放前である。最近のベトナムの人たちの好みはそれこそデコレーション・ケーキ風の様式的外観である。

1階の店は貴金属店と薬局に使われている。その奥は作業場、そしてソファの置かれた接客空間だ。階段室の奥は台所と食堂である。炊事台などが備えられ、コンロは電気と、近代化されている。天井は高く換気のための吹き抜けが屋上まで通じている。



グエンチミンカイの町家。中庭から通りを見る。通り庭は建物の中央を貫通する



中央広場。撮影時は洪水で水浸し



洪水



コロニアル様式の建物が並ぶ一角

SD9603

86



総2階タイプの代表的町家。現在は政府所有で、6家族が住む

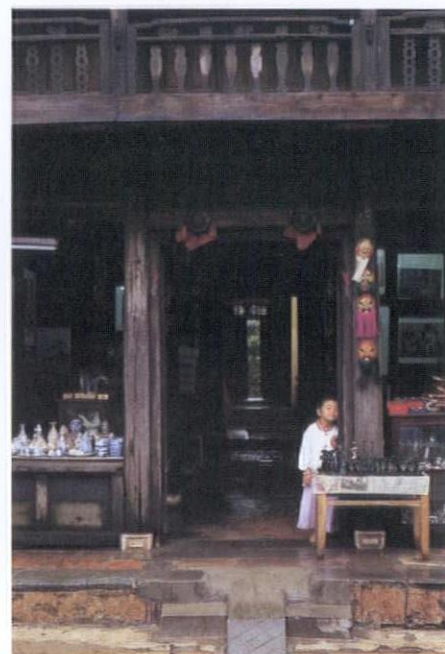
2階は街路側が家族の居間。大変明るい。あとは個室だ。3階も、街路側に大きなテラスと祖先を祀った祭壇を備えた部屋があるほかはほぼ同じである。個室は閉鎖的である。天井高を高くとり、ハイサイドで換気をとるようにしているが、風通しは悪そうだ。ただし日差しの強いベトナムでは寝室が全面的に外部空間に開放されることは好まれない。

伝統的な建物とどこが異なっているだろうか。興味深いことに、階段室と台所の吹き抜けを中庭に相当すると考えると全体的な構成はある程度保たれている。第1の違いは個室の確保であろう。第2は街路に面した居間があげられる。伝統的住宅では中庭に面していた居間がここにあげてきた。個室と居間の確保のために、今まで居住空間として重視されなかった2階以上が積極的に活用されている。第3に台所の近代化とダイニング・キッチンが整備があげられる。住宅近代化の要求の中身は日本とそっくりだ。

町並み景観への影響もさることながら、中庭の喪失が問題である。そのため1階の階段まわりの応接コーナーは暗い。個室は風通しが悪い。将来的には、エアコンが必須となるだろう。開放的で自然との馴染みの良い住宅を選ぶのか、プライバシー確保を第1として機械設備に頼った住宅を選ぶのか、我々は前者を選んで欲しいと思うけれども、現実には後者と調和させるさまざまな工夫が今後の課題となるだろう。

町の変化

ひとつには厳しい建築規制のため、ひとつには経済的な事情から、今のところ建築そのものに著しい変化は少ない。しかし町は私たちが調査を開始してから大きく変貌した。猛烈な勢いで観光化が進行しているのである。正確な統計はないのだが、管理事務所の話では、外国人観光客の数は、1993年2万5000人、1994年4万人と推移し、1995年には5～6万人が見込まれるという。うち6割はフランス



総2階タイプの町家正面。グエンタイホック通り

人だ(日本人が少ないといつも指摘される)。ベトナム人の観光客数は不明であるが、すでに国際的に観光客をひきつけているホイアンへの観光客数がさらに急速に伸びることは想像に難くない。

問題はそのことによる町の変化である。現在のところそれはみやげ物店やレストランの急増となって現れている。1993年春から1995年春までの3年間に、みやげ物店は21店から43店へ、レストランは47軒から59軒へ増加した。新たに3軒のミニホテルも誕生した。半面、製造業は46社から34社へ減少した。

わが国の1960年代の旅行ブーム時のような観光地の俗化がここでも起こるのだろうか。行政サイドも問題意識は持っている。ミニホテルのうちの1軒は歴史的遺跡に隣接して派手なピンクの姿を見せたために物議をかもしたのだが、若い市長は果敢にもしばらく営業を認めなかった(結局は開業したが)。もう1軒のエメラルド・グリーンの看板についても、それをきっかけに色の規制を考え始めた。

観光地化のもうひとつの課題はコミュニティがどうなるかということである。建設省は、内陸部に新住宅地を造成して、歴史的市街地の住民の一部を移住させ、過密を解消したり、建物を観光・商業施設化するという計画をもっているが、これは少し問題だ。私たちが1993年に調査した1ブロックについてみると、54の敷地に58家族289人が生活していた(ただし4敷地は不明)。このうちアパートは5つで、19家族67人が生活している。空き家を含め非住宅が6。これらを除くと、39の敷地に39家族222人となる。1敷地あたりの平均は5.69人である。政府所有のアパートは確かに過密だが、それ以外は特に過密とはいえない。冷静な判断が必要とされるところだ。

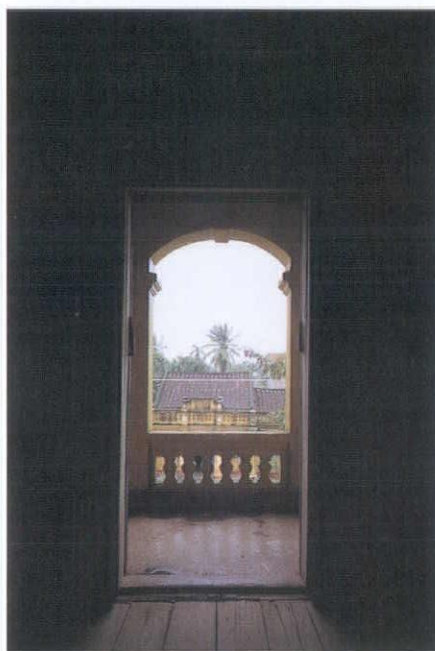
ほかに、今後増えるであろう自動車の問題、水の使用量増大に伴う水質汚染、ゴミ、地価や物価の上昇など、さまざまな問題が予測できる。これら広い意味での町の変化を、我々の体験に照らしてどのように読みとることができるか、それをどのように伝えることができるか、今後の大きな課題といえよう。



総2階タイプの2階。中庭を通して通りの方を見る



内陸から川へ続く小道。季節により両側の漆喰壁の表情が変わる



コロニアル・スタイルのテラス越しに見る



総2階タイプの建物のベランダ。天井は黄桷天井



グエンタイホック通り 町屋ファサード



チャンフー通り 町屋ファサード

4. 保存の体制と今後の課題

文化財保護制度

最後に、ベトナムの文化財保護や都市計画の制度の現状を報告し、今後の我々の関わり方を考察しよう。

文化財保護の基本ルールは1984年3月に発令された「歴史文化遺跡（遺物）と名勝旧跡の保護と利用に関する法令」である。ホイアンはそのほぼ1年後にこの法令に従う政府決議（1985年3月19日）によって国家の文化財とされた。

町並みのほかに20件の個別の文化財が指定されている。うち、歴史的町並み内にあるのは8件で、カムフォのティン、日本橋、福建会館、関帝廟、観音寺、ホイアン開祖廟、そしてタンキーハウスほかのふたつの住宅である。ほかは、周辺部にある日本人墓地、ディン、寺院などである。これら個別指定と地区指定の関係は、わが国の単体指定と伝建地区指定に比肩しようであるが具体的な違いは明らかでない。面白いのは住宅の場合で、文化財指定に要する経費が自己負担になるということだ。指定はかなりの名誉とされており（そして未だ希少価値だから観光客へのアピールにも良い）受けたいと思っている所有者はかなりの多いのだという。

1986年7月に省人民委員会から地元へ示された規制によれば、建築物を4種類に分類し、「1類：歴史建築と美術の特別の価値がある遺跡」については政府が経費等を支出、2、3類についても政府が専用物資を供出するとされている。さらに、「古い建物の改造は、もとの構造を出来る限り残し、遺跡の区域の風景に被害を及ぼさないという条件」を守らねばならないこと、「保存区域においては新築禁止」などが定められている。しかし、十分な財政措置をとれずにいることはすでに述べたとおりである。

保存のための調査を行い、保存計画の立案やアドバイスをしてきたのはハノイにある国家建築デザインおよび文化財修復センターである。ここには優秀な建築家があり、実際の修復にもあたっている。しかし人手は十分ではない。一方、ホイアンの現地で最前線に立っているのは1986年2月に設立された「ホイアン遺跡管理事務所」である。こちらには考古学者はいないが建築家はいない。我々は管理事務所に建築家が雇われることを望んでいるが、なかなか難しい。ベトナムには建築の大学は2つしかなく、しかも建築ブームのさなか、彼らがホイアンのような「田舎」にくることはまず考えられないのだという。我々の調査や修復はちょうど両者のギャップを埋める形で行われている。

規制は具体的には次のように行われている。ベトナムでは建築許可はまず自分の属する区（フオング）の人民委員会に申請する。フオングは書類をホイアンの設計計画院に回す。設計計画院は、申請が保存区域に関わるものであるときには、それを遺跡管理事務所に通知し、一緒に現地へ赴く。両者が計画に合意すれば、修復の方法を決め、設計に入る。できあがった設計について再び遺跡管理事務所がチェックし、設計計画院がサインをし、最後は人民委員会の許可を得る。ただし、建物の種類や文化財への影

響の程度によっては、省あるいはハノイ文化省の許可やチェックが必要となる。

つまりチェックと設計は同一機関で行われる。しかもここには建設会社も併設されている！そしてここには土木系の設計者が1人いるだけである。それでも1994年には修復も含め80件の設計を行なったという。

管理事務所が判断するにあたっての具体的な基準は決められていない。建築物の最高の高さは10メートル程度とする、鉄の扉は避ける、町並みでは3階建ては避ける、屋根を付ける、といったいくつかのルールはおおざっぱに考えられているようであるが、文章化はされていない。ベトナムでは「サッカーのルールは選手がつくる」というそうである。人治主義の側面がまだ強い。

とはいえ、住民との間の駆け引きには厳しいものがあるようだ。申請を出したが、事務所が現場を見に行く前に壊されてしまったり、私のお金で直すのがなぜいけない、とかみつかれたり。罰金はその人の所得に拠るので、私は貧乏ですと主張すると罰金はきわめて低額となる。あの人が出来たのに私はなぜ許可されないのかと食い下がられたり……現場にはどこでもよく似た話があるものである。

都市計画

都市計画は、建設省の所属機関である都市農村計画センター（NIURR）が、一括して立案している。ホイアンは小都市なので通常はその対象にならないが、観光や文化的価値などから重要と見なされ、センターによる計画の対象となっている。つまり、ホイアンの都市計画についての情報は、地元のホイアンではほとんど入手できないのである。

ホイアンについては、文化省と協力しつつ、1992年に総合計画が作成された。その内容は次のようなものである。1）ダナンーホイアン間の道路の設備とクワダイ海岸までの延伸（同海岸のリゾート開発を期待）、2）歴史地区の周辺の文化施設（歴史博物館等）を含む施設設備。3）内陸部に新市街地を造成、歴史的地区の住民が移動させ、現在9000人いる住民を2000人程度まで減らし、歴史地区内の建物を観光施設として整備、4）護岸の強化、5）上水、排水施設の完備、各戸の井戸はかつての生活の証として保存、6）歴史的街区の外周に道路を整備、内部を歩行者用空間化、路面は石畳へ、7）主な街路に町並みにふさわしい街路灯を整備。

以上のように、この計画は、土地利用計画というよりも公共施設計画という性格が強い。ゾーニングや建築規制のルールなどは含まれていない。これもまた、財政等を含めた地区レベルの計画へ至っていない。

このような状況の中、1992年1月、地元の史跡管理事務所は独自の「ホイアン古都史跡の保存・修復・美化計画」を作成している。1）保存から住民のための公共施設まで含んだ総合的な計画である、2）住民の合意を重視し、それを配慮するためのアイデアが盛り込まれている、3）護岸の改修が重視されている、4）土砂で埋まりつつある日本橋周辺へ水

を引き入れる水路の開削、などの特徴をもつ計画である。最後に、これらにかかる費用を算出し、海外からの投資を呼びかけている。地元の切羽詰まった事情と熱気が伝わってくる。

我々は何をなすべきか

当初のテーマに戻ろう。「町並み保存に日本チームはどのように関わるべきか」。我々が町並み保存や町づくりの主体でないことだけははっきりしている。では技術協力か？

確かに、調査や修復について、わが国の経験や技術、そして考え方は一定の意味を持つであろう。また、我々は日本における経験から、経済の発展に伴って住宅や町並みが今後どのように変わり、何が町並み保存の阻害要因となっていくかについてある程度具体的に予測することができる。このような意味での技術協力の意義は否定すべくもない。

しかし単に、日本側が報告書を作るとか、修復工事を終えるというだけでは十分でない。1985年という時点での文化財指定から明らかとなり、ベトナムの人たちの保存についての意識は明確だ。ホイアンに関心を持つ建築史や都市計画の研究者もいる。そして文化財修復センターには修復技術も蓄積されている。ただ、技術者や専門家、制度インフラ、そして財政が圧倒的に不足しているのである。おそらく課題は、狭義の技術の移転だけでなく、思想、制度、行政システム、人材、財政などを含めた調査から修復に至るまでの一連のシステムの構築にあるのである。もちろん求められているのは日本のシステムを押しつけることではない。ベトナムのシステムを組み立てるプロセスに少しでも寄与することである。逆に言えば、狭い意味での「技術協力」はこうした実現のシステムの構築を伴うことによってようやく意義のあるものになるのだ。

この協力には資金も含まれる。これはベトナム経済の現状を見れば避けがたい現実である。日本の経験から明らかなように、経済が軌道に乗ってからの保存では手遅れである。保存修復は一刻を争うのである。残念ながら、この種の事業に対する日本政府の援助はきわめて貧弱といわざるをえない。このため我々は民間組織としてホイアン・ソサエティの準備を進めてきた。そして本年6月ベトナム政府により認可・設立された。これをどのように盛り立てていくかが今後のひとつの課題だ。技術協力それ自体とともに、技術協力を意義あるものにする戦略が不可欠である。

●ふくかわ・ゆういち／千葉大学工学部

建築学科助教授

●ともだ・ひろみち／昭和女子大学生活美学科助教授

【追記】ホイアン・ソサエティの日本側事務局は昭和女子大学国際文化研究所です。関心のある方は御連絡下さい。（03-3411-1511、担当：マーク・チャン）

【参考文献】

小倉真勇著、『朱印船時代の日本人』、中公新書、1989年
『ホイアン国際シンポジウム一海シルクロードとベトナム』、日本ベトナム研究学会編、穂高書店、1993年
『国際文化研究所紀要一ベトナム・ホイアン特集』vol.1 昭和女子大学国際文化研究所編、1994年

平 幸夫

「ホイアン貿易陶磁博物館」は、日本チームの協力による修復第1号であるチャンフー通り80番の建物に開設された。この建物の特徴や修復工事の経過等についてはそれぞれの報告にある通りである。この建物は政府所有で、修復以前は住宅として使われていた。我々は町並みを保全してゆくためには住民ができる限り住み続けることが重要であるという立場であり、修復後も住宅として使われることを希望した。しかし現地政府は修復工事にあたって住民をチャンフー通りの向かいの建物へ移し、工事完了後はこの建物を越日友好を記念する施設として使用するという方針をとった。日本チームによる修復第1号ということで、このような計らいがなされたものと思われる。しかし町並み保存にとっては日本チームが協力していることが重要なのではない。これではあまり町づくりに積極的に役立つとは思えない。もしどうしても公共施設として利用するのならば、ホイアンの歴史や風土に関係する施設であるべきではないだろうか。そこで、ここ数年の間にホイアンおよび周辺地域で行われた考古学調査により発掘された世界各地の陶磁器などの考古資料を収蔵、分類、展示する施設として利用することを提案したところ、受け入れられ、オープンに至ったものである。

ホイアンには、現在のところ博物館的な施設としては、公開されている住宅を除けば、かつての寺院(観音寺)を利用した小さな歴史博物館があるだけである(これ自体は手作りの心のこもった展示で、なかなか味わい深い)。ホイアンホテルの背後に大規模な博物館を作る計画はあるが、実現の目は立っていない。これではせっかくホイアンの歴史に興味を持って訪れた人々の知的欲求は満たされないし、地元住民も近年盛んに町並み調査や発掘調査が行われているのにその成果を知る機会も持てない。そこで我々は次のように提案した。今後、徐々に建物の修復が進んでいった場合、第1には住宅として使われるべきであるが、何軒かは公開されていくことになるだろう。そのような場合、ただ単にそれらの内部を公開するだけではなく、テーマを決めてミニ博物館と

して利用してはどうだろうか。将来造られるであろう総合博物館では町全体を総論的、入門的に紹介し、かつ研究機能を充実することにすれば、既存の計画と矛盾することもない。ミニ博物館のテーマとしては、ホイアンの貿易商人たちの生活、ホイアンを介して交易された物資、ホイアンの建築、などいろいろと考えられるのではないか。このような施設を点在させることで近年レストランや土産物屋ばかりが乱立気味の町並みに本物の魅力を添えることができるのではないかと……。この考え方は弱冠38歳のグエン・スー市長によって即決された。当時、日本橋そばの旧郵便局を再利用してサーフィン文化の出土物を展示する施設とすることが決められており、その延長上に直ちに理解されたようだ。(このサーフィン文化博物館は、1995年の11月にオープンした)。

次に「ホイアン貿易陶磁博物館」の展示概要を紹介したい。チャンフー通りに面する正面入り口から入った前家1階はホイアンの交易上の地理的、文化的位置関係を示す導入的な展示である。前家1階奥には9世紀のイスラム陶器をはじめとする古い陶磁器。前家2階には、16世紀から19世紀にかけてのベトナム、中国、日本の陶磁器が遺跡別、時代別に展示されている。これには菊地誠一氏が別稿で紹介されている最新の成果が含まれる。またホイアン沖合いの海底深く眠る沈船から引き上げられた北部ベトナムの陶磁器にお目にかかることもできる。この博物館の展示手法は現物展示を基本としつつも、日本の研究機関等の協力を得て、日本および東南アジア各地で発掘されたベトナム陶磁器や肥前磁器の写真を展示し、歴史的貿易都市ホイアンの世界的広がりを理解できるよう構成されている(まだまだ充分とは言えない)。

後家には企画展示として、これまでの調査により採取されたホイアンの建物の図面や、博物館となった建物の修復過程などを解説するパネル、建物の軒先部分模型、修復工事により発生した古材などが展示されている。これは臨時的措置であり、調査をすれば必ずや何らかの発見のあるホイアンでは、この

後家空間も早晚陶磁器などの遺物で埋められるであろう。

博物館化の工事は修復工事の後を受けて、1995年の6月から9月にかけて行われた。工事にあたっては、建物それ自体も展示物と考えて、建物の構成要素を壊ることがないように展示什器は全て独立式とし、建物本体には手を加えないことを原則とした。展示施設はベトナム国内で製作、維持、管理できる仕様とし、すべてホイアンおよびダナン周辺で購入、制作した。幸いにもホイアンは家具の製造が盛んな町であり、今回も腕利きの家具職人に恵まれた。収蔵品は基本的に陶磁器を中心としているため、収蔵庫には特別な設備は設置していないが、いずれ増加していくであろう史料等の保管については、他の施設との分担関係が必要となるであろう。

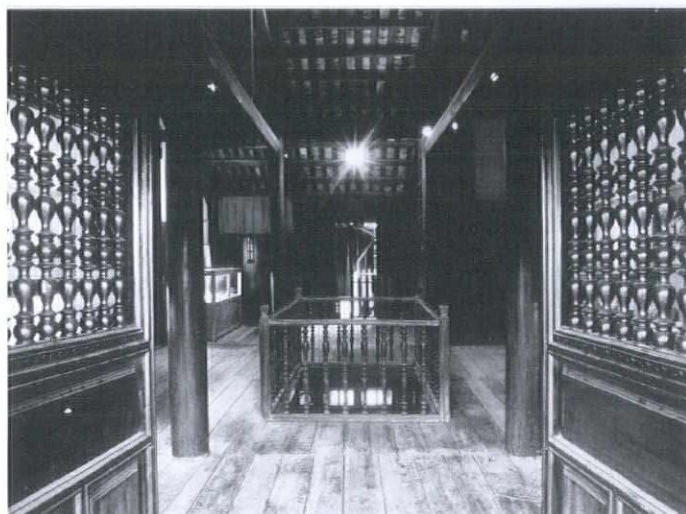
「ホイアン貿易陶磁博物館」は越日の協力で実現した最初の施設である。ベトナム側、日本側双方ともに手探りの共同作業で、ホイアン遺跡管理事務所および様々な関係者の尽力により無事に開館することができた。しかしこれはまだほんの第1歩である。今後調査の進展とともに内容と展示を充実させ、成長させていかなければならない。そのためには適切な運営が欠かせない。今後この博物館はホイアン市立の博物館として運営されるが、市がそれにどのような体制で取り組むのかが重要なポイントとなりそうである。

今後の博物館計画は、これらの問題を町並み保存全体の問題とも関連づけながら、また今回の博物館が町並みへ及ぼす影響なども検証しながら、進めてゆかなければならないだろう。

●たいら・ゆきお/山手建築事務所

[追記]

博物館の展示にあたって、陶磁器の鑑定、写真資料の借用等で佐賀県九州陶磁文化館、長崎県教育委員会、福岡市教育委員会、堺市埋蔵文化財センター、中近東文化センターの御協力をいただいた。ここで改めてお礼を申し上げたい。



貿易陶磁博物館。2階ベランダから内を見る。



貿易陶磁博物館。2階吹き抜けからベランダを見る。吹き抜けは、荷を上げ下ろすことに使われる。

遺跡が語る

ホイアンの歴史と町並み形成

——ホイアン遺跡発掘調査

菊池誠一

遺跡が語るホイアンの歴史

中部の古都ホイアンは昔からアラブ、インドと中国を結ぶ東西交易の重要な拠点のひとつであった。そのため、各時代にわたる遺跡が重層し、ベトナム史ばかりでなく東南アジア史を理解するうえで重要な地域である。

ホイアンは中部高地のゴックリン山を水源地とするトゥボン川の河口に形成された三角州上の町である。そのため、紀元前2千年頃はまだ海が深く入りこんでおり、旧石器・新石器時代の人々の活動痕跡はない。

ホイアンで確認される最古の遺跡は初期金属器時代、紀元前後頃のサーフィン文化からである。サーフィン文化とは、ベトナムのクアンガイ省で1934年にフランスの考古学者マドレーヌ・コラニーによって発見された遺跡から命名され、壺棺墓を特徴とし、副葬品にガラス小玉や各種の耳飾り（有角欠状耳飾り、双獣頭形耳飾りなど）や青銅製品、鉄器を伴う。同種の耳飾りは、フィリピン西海岸、タイ、マレー半島や台湾でも出土しており、南シナ海域の海上交流の活発な存在を証明する。また、遺物の中には中国新代（紀元後8—22年）の王莽銭もあり、この時代は確実に中国との交流もあった。

サーフィン人の人種系統はまだはっきりとしない。しかし、ハノイ国家大学のルオンニン教授の研究によれば、東南アジア島嶼部と同じオーストロネシア系である。ホイアンにおけるサーフィン文化の遺跡はすべて郊外の砂丘上に立地し、現在52遺跡が分布調査によって確認されている。これらの遺跡はすべて後期サーフィン文化（紀元前後頃）に属し、前期・中期の遺跡は皆無である。これはおそらく、中部ベトナムの海岸部にいた中期サーフィン人が、何かの契機でこの地に移住してきたためであろう。

ホイアン郊外で発掘された後期サーフィン文化のホウサーⅠ・Ⅱ遺跡は、大規模な壺棺墓地である。その壺棺には、ガラス小玉や耳飾りなど豊富な副葬品をもつものと、まったく副葬品のないものがある。性別などを考慮しなければならないが、遺跡の様相は、階級社会の発生を示唆するものである。出土中国銭や素環頭太刀の鉄分析などから、中国との交流は明瞭である。おそらく、こうした交流や影響のもとに、サーフィン文化社会での初期国家形成への胎動がはじまったのであろう。

この初期国家形成の動きが、のちにつづくチャム族を中心とした国、チャンパ王国の母胎となったと考えられる。チャンパ王国は4世紀末以降、インド文明の影響を受け、チャキュウに都を造り、ミーソンの地に祀堂群を建立し、貿易港をホイアン地域においた。現在のクアンナム・ダナン省は当時のチャンパ王国の中心地域であり、ホイアンは海のシルクロードの窓口であったのである。

ホイアンの旧市街から西約4kmの砂丘上にチャンソイ遺跡がある。1994年の調査によって、9—10世紀の初期貿易陶磁のイスラム陶片や中国の越州窯青磁片などが出土した。イスラム陶片が発掘調査で出土したのは、ベトナムで初めてである。1993年には、ホイアン沖のクーラオチャム（チャム島）でも

表採され、この地域が西方との貿易をおこなっていたことを考古資料からも証明することになった。

このホイアンが飛躍的に発展するのは、16世紀から18世紀にかけての時代である。時にベトナムは南北対立の時代で、北部では鄭氏が、南部（現在の中部）では阮氏がそれぞれ実権を握り、この南部の貿易港がホイアンであった。この時期、ヨーロッパや中国船、そして日本の朱印船がたびたびやってきて市がたち、生糸や香辛料などの売買が行なわれた。日本人町や中国人町がつくられ、オランダ東インド会社の商館も建ち、活発な交易がおこなわれたのであった。江戸時代の日本で「南蛮もの」として珍重された茶道具は、その大半が中部ベトナム産の陶器であり、ホイアンから日本に運ばれたものである。

ホイアンの町並み形成と朱印船時代の居住地の発見

ホイアンのチャンフー通りは、別名「日本通り」といわれ、この通りの西端に日本人が造ったという日本橋（遠縁橋）がある。従来、この通り沿いに古い町家が多いことや伝承などから、朱印船の頃の日本人町はこの付近にあったのではないかと考えられてきた。この仮説を検証すべく、4回の発掘調査を実施した。その成果からおぼろげながら、ホイアンの町並み形成が明らかになってきた。

まずチャンフー85番後家跡を発掘した。この後家は対フランス戦争の時に爆弾によって破壊されており、現在は庭になっていたのだ。そこにトレンチを設定、3時期にわたる家屋の遺構を確認した。

上層の建築遺構は、建物入り口にもなう基礎、床面、排水溝であった。これらの遺構は、現存する前家と対をなす後家のものであった。また、東西の側壁もこの時期のものであった。中層の建築遺構は、石敷き遺構とそれから一段高くなったレンガ敷きの床面であった。石敷き遺構は中庭で、レンガ敷きは橋屋の床面と考えられる。下層の建築遺構は、レンガ敷きであった。その下は貝殻を含む砂層であり、遺構はなかった。この砂層から中国陶磁片が数点出土し、それらはすべて18世紀以降のもので、日本人町があったとされる17世紀代の遺物はなかったのである。

この発掘調査の結果、チャンフー通りの南側は朱印船の頃にはまだ家屋がなく、付近は川岸であったと考えられる。

このことは、85番家に保存されていた家屋台帳の記載とも合致した。この家の最古の台帳は1811年のもので、それには「南に大江有り」と記され、1812年、1838年の文書も同様に記されている。しかし、1876年の文書によれば、この85番家の南に家が建ち、川岸が南下していることがわかる。19世紀前半代には、チャンフー通りの家並みの南側は、部分的に川岸に接していたと考えられ、その後川が徐々に埋まり、川岸が南下していったのである。

この85番家の最古の家屋台帳は建築時代を意味するものではない。建築時期はその台帳の記載年代から、おそらく数十年さかのぼるものであろうが、考古資料と家屋台帳の記載事項から、チャンフー通り

の南側は18世紀以降の町並みであることが判明したのである。また、チャンフー通りの北側、たとえば現在、貿易陶磁博物館に生まれ変わった80番家の調査でも、1921年に建築された家屋の前家床下にレンガによる別の建物の基礎が検出された。しかし、その下は砂層であり、出土遺物は19世紀以降のものであった。また、チャンフー通り北側126番の前家跡の発掘調査でも同様な結果であった。つまり、チャンフー通り北側でも17世紀代にさかのぼる遺構の検出はなかった。このように、チャンフー通りに接する南北両側は18世紀以降の形成であることが判明したのである。チャンフー通りの南側に位置するグエントイホック通り、そして最南端のバクダン通りの町並み形成はどうであろうか。発掘調査をしていないが、古文書調査、聞き取り調査、建築調査によってえられた情報では、トゥボン川後退にともなって形成された家並みで、19世紀以降であることが判明している。

このように、現在のホイアン旧市街の保存指定地区にある家並みの形成はトゥボン川の後退に伴って形成された比較的新しい町並みで、朱印船が活躍し、日本人町があったとされる17世紀代の町並みの上に形成されたものではなかったのである。

このことから、1990年におこなわれた国際シンポジウムで、ハノイ総合大学グーミンザン教授が「かつての日本人町は現在のチャンフー通り、より具体的には通りの南側に当たると推定している」という見解は、否定されるに至った。

では、16世紀から17世紀代の朱印船が活躍し、日本人町があった頃の町並みはどこにあったのであろうか。

チャンフー通りの西端に位置する日本橋をわたると、通り名はゲン・ティ・ミンカイになる。1785年、1802年の古い年号の土地家屋台帳をもつ家がこの通りにある。

1994年1月に、日本橋から西約200m、ゲン・ティ・ミンカイ通りの北側に位置するディン・カム・フォー（カム・フォー地区集会場）の庭を発掘調査した。その結果、16世紀末頃に掘られた溝が検出され、溝のなかから大量の陶磁器が出土した。溝の下層から16世紀末から17世紀前半代の中国陶磁器（景德鎮窯、福建・広東系窯）、上層から17世紀後半代の日本陶器（伊万里焼）が、またホイアンやフエで焼かれたベトナム陶器が出土した。その他、箸、子供の遊び道具、キセル、銅銭もあった。3月から4月にかけて、このトレンチの隣接地を発掘調査し、この溝のつづきと溝の北側に川跡を検出した。出土遺物から判断して、川跡は18世紀には完全に埋められていた。

こうした成果をもとに、当時の人々の居住地を溝の南側と推定し、7月に調査をしたところ、貝殻のつまった17世紀代の土坑、陶磁器類、建築資材であるレンガが出土した。また、ディン・カム・フォーから西約100mのディン・トゥ・レー（トゥ・レー地区集会場）の前庭を発掘調査したところ、17世紀代の野外の窟跡が検出された。こうして、この地域が朱印船時代の人々の居住地の一部であることが初めて確認されたのであった。しかし、この居住地が



集会所前庭より大量に発掘された陶磁器



ホイヤン市街地



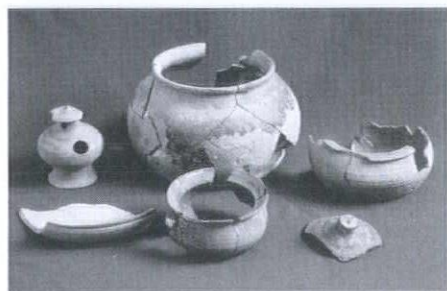
ディン・カムフォの発掘、グエンチミンカイ通り



遺物出土状況



チャンフー通り85番家の後家の発掘。石敷の庭と、その下にレンガの基礎を検出。18世紀以降



17世紀ベトナム陶磁



出土遺物。右：伊万里(17c後半) 中：中国福建、広東系窯 左：中国景德鎮系窯(16c末-17c前半)

日本人町であったのか、中国人町であったのか、現在のところまだ不明といわざるを得ない。発掘調査によって、ようやく16世紀から17世紀代のホイヤンの様相がわかりかけてきたのである。

発掘調査の成果

発掘調査の成果から、以下のようにまとめることができるであろう。

まず、現在のホイヤン保存地区の町並み形成は18世紀以降のことであり、16-17世紀の町並みの上に形成されたものではないことである。

国際貿易港として賑わい、日本人や外国人が住んでいた16-17世紀の居住地域は、グエン・ティ・ミンカイ通り周辺および、偶然に出土した遺物の観察から、おそらくチャンフー通りとファン・チュー・チン通りの間に存在した可能性が高いとみられる。つまり、この時期の居住地は現在の町並みの北方と西方にひろがっていたと予想される。しかし、その居住地が日本町か否かは今後の調査の進展をまたねばならない。

つぎに、日越の交流史の解明に貴重な資料が得られた。それは、溝から出土した日本の肥前磁器（伊万里焼）であり、ベトナム陶器である。肥前磁器はこれまで、インドネシアやタイなどで発見されていたが、ホイヤン調査ではじめて層位的に中国陶磁器との前後関係がとらえられ、1650年前後を境に中国磁器から肥前磁器への変化が指摘される。これは、中国の明・清王朝交替に伴う内乱で窯業地が疲弊し、また清朝になって商船の私的出海を禁止したことにより、中国陶器の代替品として肥前磁器が東南アジアに輸出されるようになった事実を消費地遺跡ではじめて確認することができたのである。

また、出土したベトナム陶器は、それまで焼造時期が不明であったが、共伴した中国磁器や肥前磁器によって、年代を決定することができた。最近、わが国でもこの種のベトナム陶器が長崎や堺、大阪、京都の各遺跡から出土しており、また伝世された「南蛮もの」とよばれる茶道具のなかにもある。こうしてベトナムと日本との交流が明確になりつつあり、ホイヤンは両国交流の重要な位置を占めていたものと思われる。このベトナム陶器を焼いた窯跡群はフエやホイヤン周辺にあり、生産窯の特定も今後可能であろう。

このほか、17世紀前後頃の陶器製の「キセル」も出土し、これはわが国へのキセル伝播をめぐっての議論に一石を投じるものであろう。

今後、ホイヤンの総合調査を継続するなかで、過去の居住地の変遷や町並み形成、そしてチャンパ王国時代のホイヤンの様相が徐々に解明されていくであろう。それは、日本人町の位置確定とその建物群の遺構を明らかにし、ひいては当時のホイヤンに生きた日本人の生活の様子を浮き彫りにしていくことであろう。

●きくち・せいいち／宇都宮大学非常勤講師

ホイアン町家の修復

——文化庁・アジア太平洋地域文化財
建造物保存修復協力事業より

林 良彦

文化庁建造物課では「アジア太平洋地域文化財建造物保存修復協力事業」を1990年度から開始し、現在までネパール、ベトナム、ブータン、インドネシアを対象国に主として文化財修理の専門家を派遣する事業を展開している。ベトナム・ホイアンにおける伝統的建造物の修理もこの事業の一環として1993年度から取り組んでいる。

この事業は、長年の経験を有する日本の文化財建造物修復の技術をこれらの国々に伝え、文化財保存に役立ててもらおうとするもので、ホイアンにもこれまで文化庁建造物課の技官を始め、滋賀県、奈良県、(財)文化財建造物保存技術協会の技師、日本建築セミナーの建築家が訪問して、実際の建物の修復を通じて技術的な交流を行ってきた。1993年度には予備調査として建造物課の技官がホイアンを訪問し、試験的に修理工事を行う候補物件の選定を行った。この予備調査で修復工事をすべく選定されたのがチャンフー通りの中央北側にある80番地の家屋の橋家である。この家屋が選ばれた理由は次の諸点からである。

- 1 不明な点の多い諸事情の中で短期の工事期間で修理を行う必要があり、小規模な建物が望ましい。
- 2 工事の効果を明確に理解できるように、ある程度破損が進行していること。
- 3 修理工事に際し、居住者との所有権や工事期間中の一時退去に関するトラブルをさけるため、公共所有の建物であること。

こうして修理工事が始まったが、居住者との調整はなかなか進まなかった。史跡管理事務所は、建物は政府所有で工事に問題はないと説明していたが、居住者はこれを認めず、この家で生活し続ける中での修理工事となった。このことで、工事管理上いくつかの問題が生じた。安全上の問題や、十分な広さの作業場を確保できないという問題、解体を終えた修復に使用する部材がカマドに消えてしまったというような笑い話のようなこともあった。工事後、長年暮らしてきた愛着のある家に居住し続けることができるのかどうかの不安から、居住者の老婆が突然泣き出すというようなことも経験した。しかし、逆に夜間の防犯は彼らに任せられたし、日本側の技師が体調を崩したときは親身に介抱してくれた。破損してしまっただけの旧状の解らない建物の痕跡について、教えてくれたりもした。何よりもここに暮らすベトナム人の日常生活に接し、彼らが何を望み、何を必要としているかを知ることができたのは大きな収穫であった。

結局、居住者は橋家の修理が完了した1994年に、史跡管理事務所が改修した近くの町家へ引っ越した。工事管理上は喜ばしいことであるが、日本側の関係者一同、何か一抹の寂しさと割り切れなさを感じたのも事実である。

その後、1994年度の事業で、同じチャンフー80番家屋の後家、前家の修理を行い、現在、ホイアンで発掘された陶磁器の展示を行う博物館としてオープンしている。また、1996年1月から3月には、倒壊の危険があったため、94年度に緊急に解体してあったチャンフー通り121番家屋の修理工事を予定している。

チャンフー80番家屋の概要

この家はチャンフー通りの北側にあり、(通りの北側が偶数、南側が奇数番地で、東側から順番に番地がつけられる)間口が狭く奥行きが深い敷地に、正面側から前家、橋家、後家(呼び名はベトナム語の直訳)の3棟が軒を接して建つ。

前家は桁行3間、梁間4間、総2階建、切妻造平入りで、敷地の間口一杯に建てられている。両妻壁は敷地境界に接して立ち上げられた煉瓦1枚積みで、その内側に接して木造の骨組みが組まれている。間取りは1階は正面から第3の柱間で前後の2室に分け、2階は正背面に間口一杯に跳ね出しのベランダを設け、正面ベランダは黄檗宗建築に見られるようなアーチ形の天井を設けている。内部は大きな1室で背面東寄りの1間四方を小部屋に区切る。背面ベランダの西半は接続する橋家の内部に取り込まれている。

橋家は前家背後西寄りにあり、桁行1間、梁間1間、2階建、入母屋造の棟を南北に置いている。西側は敷地境界の煉瓦壁に接して柱が立てられている。内部は1、2階とも前家との合いの間を取り込み、一室としている。東は中庭で、2階は跳ね出しのベランダを設けている。橋家、後家の合いの間は階段室となっている。

後家は敷地幅一杯に建てられた桁行3間、梁間4間、総2階建、切妻造平入りで、両側面と背面が煉瓦壁となっている。背面煉瓦壁は2階梁や小屋の登梁等を差し込み、両妻のように壁とは別に木造の柱を立てる構造とはしていない。2階は内部の柱筋を1階とは変え、梁間5間になっている。1階は北西隅の桁行1間、梁間2間を部屋に区切るほかは間仕切を設けず、2階は中庭に面して跳ね出しのベランダを設け、内部は北東、北西の桁行1間、梁間2間を部屋とするほか1室である。

後家の背面寄り東側は煉瓦造平屋の付属屋が取り付き、その東はチャンフー通りから北へのびる小路に通じる通路となっている。この通路は現状では小路の手前で閉ざされ、突き当たりは便所になっていた。後家背面には後庭があり、ここには東寄りに釜家があったが、現在は屋根が欠失し、残骸だけが残る。

建物の構造は、身舎・庇構造で、棟を構成する身舎の柱間は柱頭の梁間方向に設けた溝に合掌尻を輪薙ぎ込むことともに、両側の柱に繋ぎ梁を抜き通し、鼻栓で止めて固める。庇は身舎合掌尻の上端に太枅を植えて登り梁を受け、疵柱上では身舎柱と同様登梁尻を輪薙ぎ込み、これを繰り返して孫庇とすることもある。側柱上は登梁尻上に手先肘木を置き、壁通りから前に出た軒桁を受ける。

柱はエンタシスのついた丸柱が主であるが、間仕切のある正背面の柱は角柱とする。各柱筋の交点には必ず柱が立ち、梁を跳ばして柱を抜くようなことはしない。

2階床は、1階柱の柱頭を梁行きに繋ぐ床梁の上に根太を置いて受けるが、前家の四隅の柱、橋家の東面2本、後家の前面2本は通柱となっている。ベランダは床梁を延ばして受けるが、通柱のところは

ほぞを延ばし、側の梁形が翳き付く。

垂木は板状のもので、登り梁上に置いた母屋に釘止めされる。瓦は陰陽と呼ばれ、同一の形の平瓦を表裏交互に葺く形式である。

チャンフー80番家屋は、2階の床高が揃い、取り合いの状況からも3棟同時に建てられたと考えられる。その建築年代は建物そのものからは墨書等の資料を得ることはできなかった。また、ホイアンにおける建築史的な偏年の研究がまだ不十分であるために、構造形式から判断することも困難である。しかし、現在のところ次の諸点からほぼ今世紀初頭頃と判断している。

1.ホイアンに残る外観が洋風コロニアルスタイルの建築の中には外壁に建築年代を表示した例がある(ほぼ今世紀初頭)。これらの建築と部材の風触や小屋構造がよく似通っている。

2.より古い要素を残している建築では断面が角形のいわゆる「和釘」が見られるのに対し、この建物に使用されている釘は、転用材以外は洋式の断面が丸い釘である。ベトナムでこの変化がいつ起こったのかは不明であるが、日本ではほぼ1880年代である。

3.ホイアンの町家の中には、前面が切断されて庇が段違いに改造されている例があるが、これは平屋建てに多く2階建にはない。道路が拡張されたのはフランス植民地時代(1862~1940年)とされ、チャンフー80番のような2階建はその後の様式と判断できる。

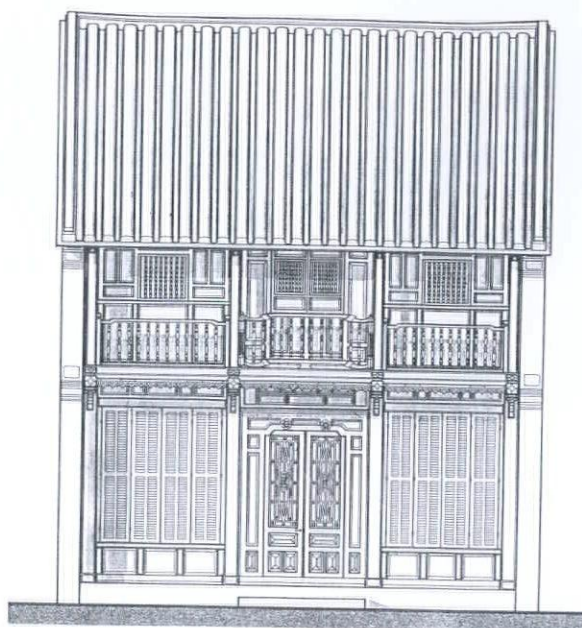
4.文書調査から現在の居住者の先祖がこの土地を今世紀初頭に入手したのが確認でき、居住者の老人(80歳代)が自分が幼ない頃にあった建築工事のことを記憶している。この工事が新築か修理かは解らないが、この建物がそれほど古いものではないことから考えると、そのときに大規模な修理が必要なほど老朽化していたとは考えにくい。もしこれが新築工事なら、建築年代は1920年代に下がることになる。

チャンフー80番家屋の修理

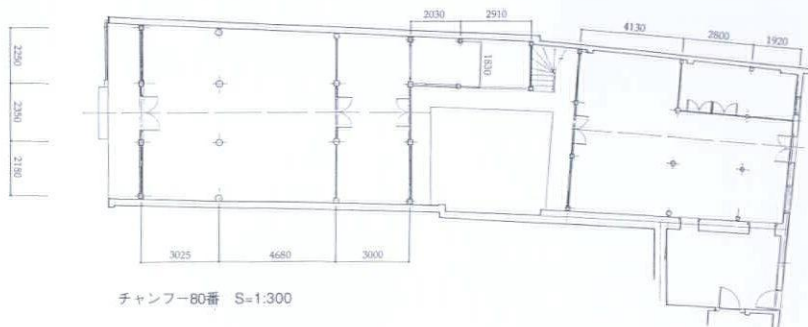
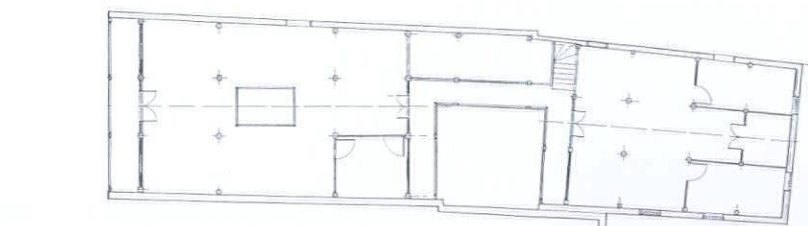
ホイアンの伝統的建造物の破損の多くは、複数の棟の屋根が各々水平の谷で接続されていることに起因している。高温多湿の土地でこの形状の屋根では不断の維持修理は免れないが、現在までのベトナムの経済状況ではこれは無理なことであった。一旦雨漏りが進行するとシロアリが発生し、これが腐朽を促進するという悪循環に陥って加速度的に破損を拡大するという経過である。

チャンフー80番家屋の3棟も同じ原因で腐朽破損が生じていた。従って、破損の程度は谷を取り込んでいる橋家が最も甚だしく、後家との取り合いの階段部分は原型を留めていなかった。次に破損の程度が大きかったのが後家で、東側の前から第3の柱上部には直径30cmに達するシロアリの巣があり、全体にも蟻害と雨漏りが甚だしかった。前家は部分的に雨漏りが生じ、蟻害も認められたが軸組に破損が生じているほどではなかった。

これらの破損状況を勘案して、工事方針は橋家は全解体修理、後家は2階部分を一旦解体する半解体修理、前家は軸組には触らない屋根葺替部分修理と



チャンファー80番 S=1:150



チャンファー80番 S=1:300

した。

工事は橋家からかかり、1993年9月に解体調査を行い、93年12月から94年2月にかけて補修、組立を行なった。94年9月には後家、前家の破損を調査し、95年1月から3月にかけて修理工事を行なった。95年5月には陶磁器の小博物館とする利用計画が具体化し、そのための展示ケースの作成や照明、見学者用の便所の建設を行い、9月8日に開館した。

工事関係者は、日本側から派遣した文化財修復専門家、ベトナム側からは文化財修復センターの技師、それに現地の史跡管理事務所のスタッフと3者で、ホイアンに適した木造建築物の修理の方法を相談しながら行なった。

修理には日本の技術をそのまま持ち込むことはできるだけ避け、現地で調達できる材料と在来の工法で修理することを基本とした。幸い木造の継手や仕口には日本の金輪継ぎや送り蟻に似たものがあり、木工事に関してはほぼ共通の前提があると考えられた。取替材として発注した材料の寸法精度や、断面の矩の悪さは悩むところであったが、「古材の精度もこんなもんだ」と割り切って極力収めることとした。何しろ現場には電動工具はひとつもなく、人力で木取りを行うことは恐ろしく手間がかかる。

煉瓦壁は極力積み直しを行わない方針を立てた。ただし、後家背面の煉瓦壁は、敷地境界の煉瓦壁と違って、直接建物の荷重を受ける耐力壁で、実測してみると上方が背面側に倒れ、中央が外に孕みだしていた。これは登梁から受ける荷重による変形と考えられ、放置することはできなかった。背面側に鉄筋コンクリートの柱を付加してこれ以上の変形を防止した。

屋根の陰陽瓦は、現在一般の住宅の建築工事には使われていない。この瓦は非常に薄く、一旦瓦を降ろすと半数近くが割れて使えなくなるので、特注する必要があった。橋家の工事の時は天候不順で焼成が間に合わず、結局古瓦をかき集めることになった。

収穫と課題

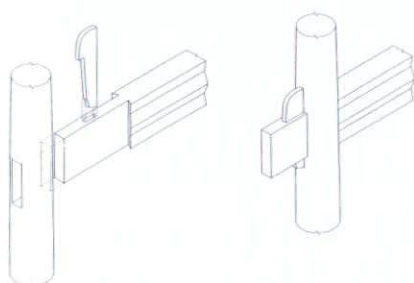
ハノイから派遣されたベトナム文化財修復センターの技師は、普段1人で設計から施工管理までをこなしているだけあってなかなか優秀で、積算や木造建築の細かい納まり、破損部材の修理法などに習熟しており、我々が教えられることも多かった。特に工事当初、確かな積算根拠を持っていなかった我々にとって、彼の存在は貴重であり、常に情実に流されず、冷静な技術者としての判断を持って仕事に当たってくれたことは特筆に値する。それと共に、お互いに慣れない英語を通じての不完全なコミュニケーションの中で、同じ技術者としての思いを共有できたことは大きな収穫であった。

ベトナムはこのような技術者が存在するが、その数は数人で、通常は国宝級の建物の修理に携わっており、ホイアンの町並みのようなレベルの仕事に継続的に関わることは難しい。従って地元で工事管理ができる修復技術者を養成することが求められている。そこで遺跡管理事務所の研究員に工事に関わってもらって技術移転を目指している。日本では、建

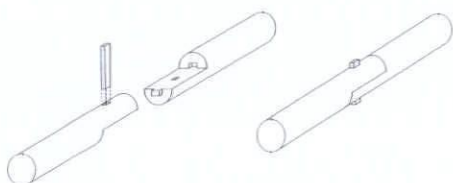
築の専門教育を受けた技術者が数年間現場に張り付いてやっと修理工事の采配を振るえる主任になるのに対し、歴史を学んだ研究員が年間3ヶ月程度の工事期間で、ある程度の判断ができる現場の主任になるのは並大抵のことではないと思われるが、ベトナム側に絶対的に修復技術者の不足している状況から、現在のところ地道に現地で修復技術者を育成するしか方法はない。もっとも、数十人単位で修復技術者のいる日本でも、実は市町村レベルでは同じ問題を抱えているのである。

ホイアンの町並みは、全体に長年放置され、危機に瀕している。我々が関わった3年間の間でもいくつかの家屋が自然倒壊した。これに対し我々にできる協力はあまりにわずかである。最終的に、ホイアンの地元で文化財としての修理工事が自前のスタッフでできるようなシステム作りをすることができれば、この事業の成功と考えて良いのではないだろうか。

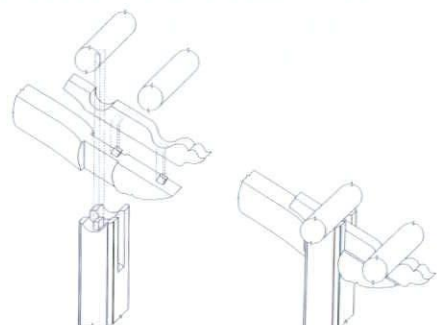
●はやし・よしひこ／文化庁文化財保護部建造物課



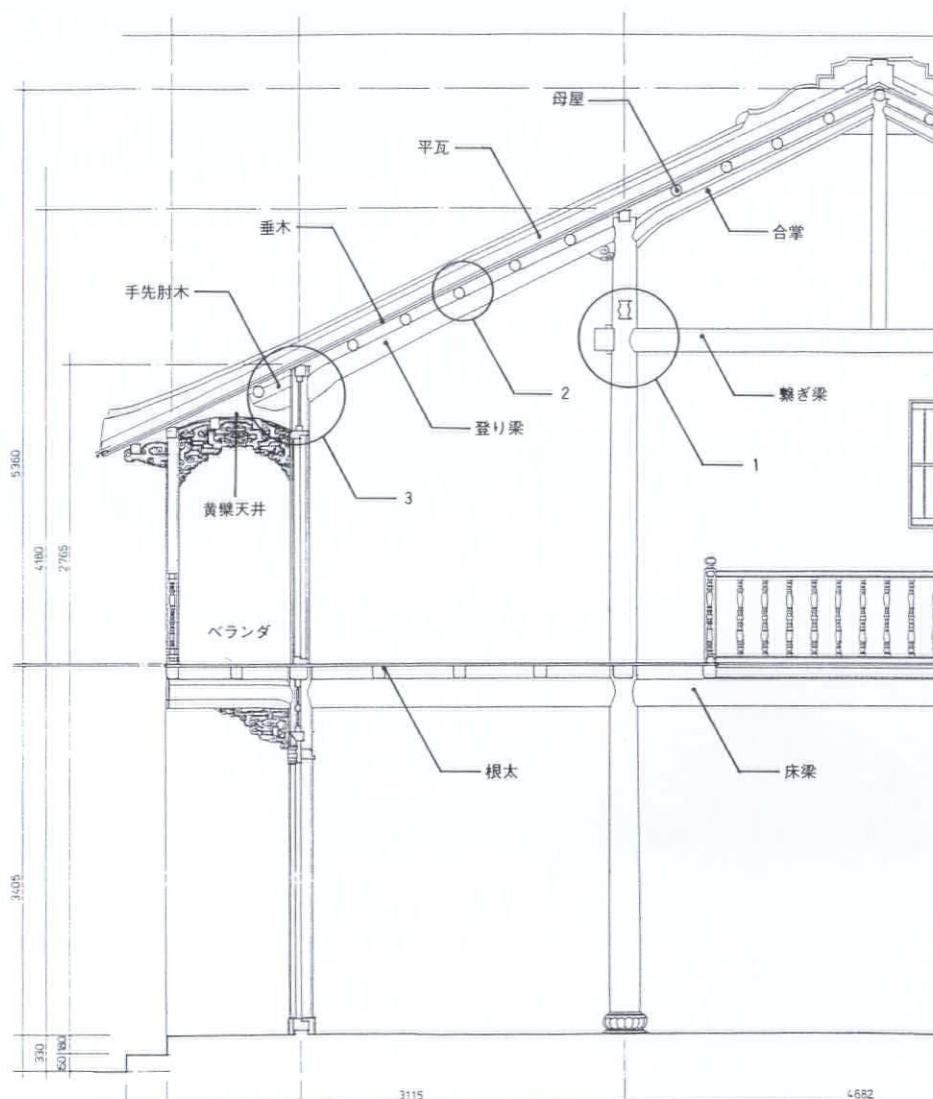
1: 柱と繋ぎ梁の仕口——日本の枘差鼻栓打の仕口に似るが栓の方向が違う



2: 母屋の榼手——日本の金輪榼ぎに似る



3: 側柱と登梁、桁の仕口——登梁は柱に輪蓮込み、太枅を植えて手先肘木を載せる



チャンファー80番断面図部分

紀元前後から東南アジアには、金、香料、真珠などを求めてインド人航海者が頻繁に來航していた。そのためインドを中継地として古代ローマ世界、そして中国世界とインドシナは通商で結び付いた。さらに、宗教面ではヒンドゥー教と仏教がさまざまな経路を経て伝わり、土着信仰と結びついて定着し、東南アジアとインド、中国文化圏との関係は一層深まった。アジア各地の文化交流の軌跡の中でも、扶南、クメール、チャンパというインドシナの国々の果たした役割は極めて大きい。

扶南は1世紀初頭、メコン河のデルタ地帯に建国されたクメール族の古代国家で、インド文化の影響下に海上交易と肥沃な後背地の農業開発によって国力を増大させた。ベトナム南部に残された扶南の外港オケオは海上交通の要所で、ローマ時代の金貨、青銅製仏像やヒンドゥー教の神像、イランやクシャーナ朝など西方世界の影響を受けた工芸品、漢代の銅鏡などが出土している。この地域で最初にインド文化の扶植された扶南は、7世紀半頃に北部の真臘（クメール）の南下に加え、チャンパとの衝突等によって衰え、最終的にはクメール王国に併合される。その後、クメール王国はメコンデルタ、現在のタイの大部分、マレー半島にまで勢力を広げた。その最盛期にはアンコール・ワットで知られる宗教施設群を次々と造営する。

これらの国と接した中部の海岸平野を中心に、2世紀末からチャンパという王国が存在しており、その北部には中国文化の影響を直接受けたキン（京）族の国家が存在していた。いわばチャンパは、北の中国文化圏、南のヒンドゥー・仏教文化圏の接点に位置していた。これらの国々は相互に戦いを繰り返すことによって、文化面では互いに刺激を与えあった。チャンパやクメールの王族たちは海を越えて中部ジャワ（インドネシア）との交渉もあった。こうしたことから東南アジアの文化交流史上でチャンパをはじめとしたベトナム地域の文化遺産研究は、東南アジアの文化史、建築史そして建築技術交流史を解明するための重要な鍵を握っている。

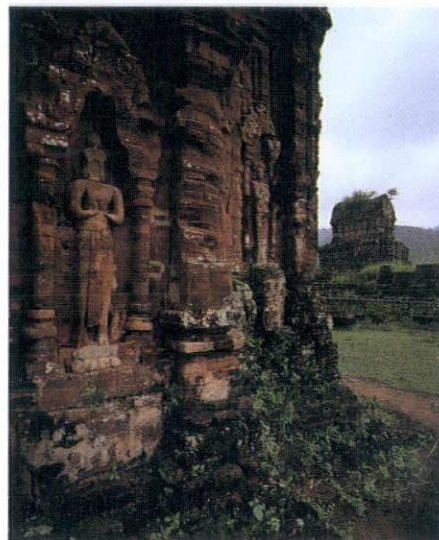
本項ではこれまで建築として紹介されていないベトナム中部に存在したチャンパ王国の歴史と残された遺構を軸にして、チャンパ建築の歴史と修復の現状を紹介する。

ベトナムの都市と建築 4

チャンパ遺跡

Tháp Chàm

日本大学理工学部建築学科
片桐研究室
重枝 豊



手前：ミソン遺跡主祠堂C1 奥：ミソン遺跡宝物庫B5

チャンパ建築再発見

重枝 豊

チャンパ王国の歴史と遺跡の分布

4世紀末、チャンパ王国の中心は中部ベトナムのアマラーヴァティ地方で、王都チャキエウ近傍のミソンの園谷が聖域とされる。8世紀中頃から南部のバードゥランガ、カウターラに新しい勢力が勃興し繁栄する。しかし、875年には、再びクアンナム地域のインドラブラを都とする新王朝が出現するなど、王国の中心はたびたび移動する。

さらに、中国に隷属していた北部のキン族の勢力の復活によって11世紀にはインドラブラを放棄し、王国は南方のヴィジャヤへの後退を余儀なくされる。また、隣接するクメール王国からの侵攻や北方のキン族が建国した大越の圧迫を受け、15世紀にはキン族の大規模な南進を許し、15世紀末にはチャンパは王国としての独立を失ってしまう。

チャンパ建築史研究の重要な視点は次のふたつである。ひとつはチャンパ王国が各地域の独立性の高い国家群であったことで、これは「チャンパの王た

ちの中の王」(フウカイ寺碑文)という記録からも明らかである。例えば、クアンナム・ダナン省のアマラーヴァティ地域では、モン・クメール系のカトラー族が高地から香木や翡翠を王都チャキエウにおいて塩と交換し、チャム族はこれらを貿易港ホイアンから輸出していた。

このように中部ベトナムの地理的背景は、チャンパという王国の構造と領土の形成に強く関係をもち続けたのである。この範囲に分布するチャンパ遺構を詳細に研究することは、各地域の技術水準や近隣地域との技術体系の相違を明らかにすることになる。このような建築史的な研究は、マンガラのともいわれる国家構造の解明に結びつくであろう。さらに、東南アジア地域を広域としてとらえる建築史の再構成の可能性を持つ。

もうひとつは、北方からの中国文化、南方からのインド文化の接点としてチャンパが果たした文化的役割という視点である。扶南、クメールという未だ解明のすすんでいない歴史、特に建築史の解明には

チャンパ建築、ベトナム建築の科学的な実証研究が必要とされている。

王国の繁栄していた時期に建立された遺跡は、ほぼ8世紀末から15世紀にかけてのものが残っている。遺構の建設された地域と王国の政治・経済の中心地の移動を考え合わせると、1、聖地ミソン地域に残る遺跡群で「ミソン遺跡群」、2、ミソンを除くダナン近郊に残るもの「クアンナム遺跡群」、3、クニヨン近郊に残る「ビンディン遺跡群」、4、ニャチャン地区に残る「ボー・ナガル遺跡群」、5、ファンラン、ファンティエットの「ボー・ハイ遺跡群」に分類できる。さらに、チャンパの遺跡のうち、王国末期に属するボー・クロン・ガライ(14世紀)、ボー・ロメ遺跡(15世紀)の創建時には、王国はすでに国力を失っており、地方の小勢力として存在していた。この周辺部にあるボー・ハイ遺跡群とは、建築様式の直接的な関連性は少ない。そのため、これらの遺跡は「衰亡期の遺跡群」に属するとして6つに区分できる。



14世紀頃のインドシナ半島



チャンパの各遺跡群の配置と分布

チャンバ遺跡研究の流れ——極東学院の業績

チャンバ史の研究は、中国史料によって紹介されたヴェトナム南方の扶南研究に伴った1887年のE.エイモニエの遺跡調査の開始が嚆矢とされる。その後1910年のG.マスベロによる碑文を中心にした研究などによってチャンバ史の本格的解明が開始される。チャンバの遺跡そのものに関する

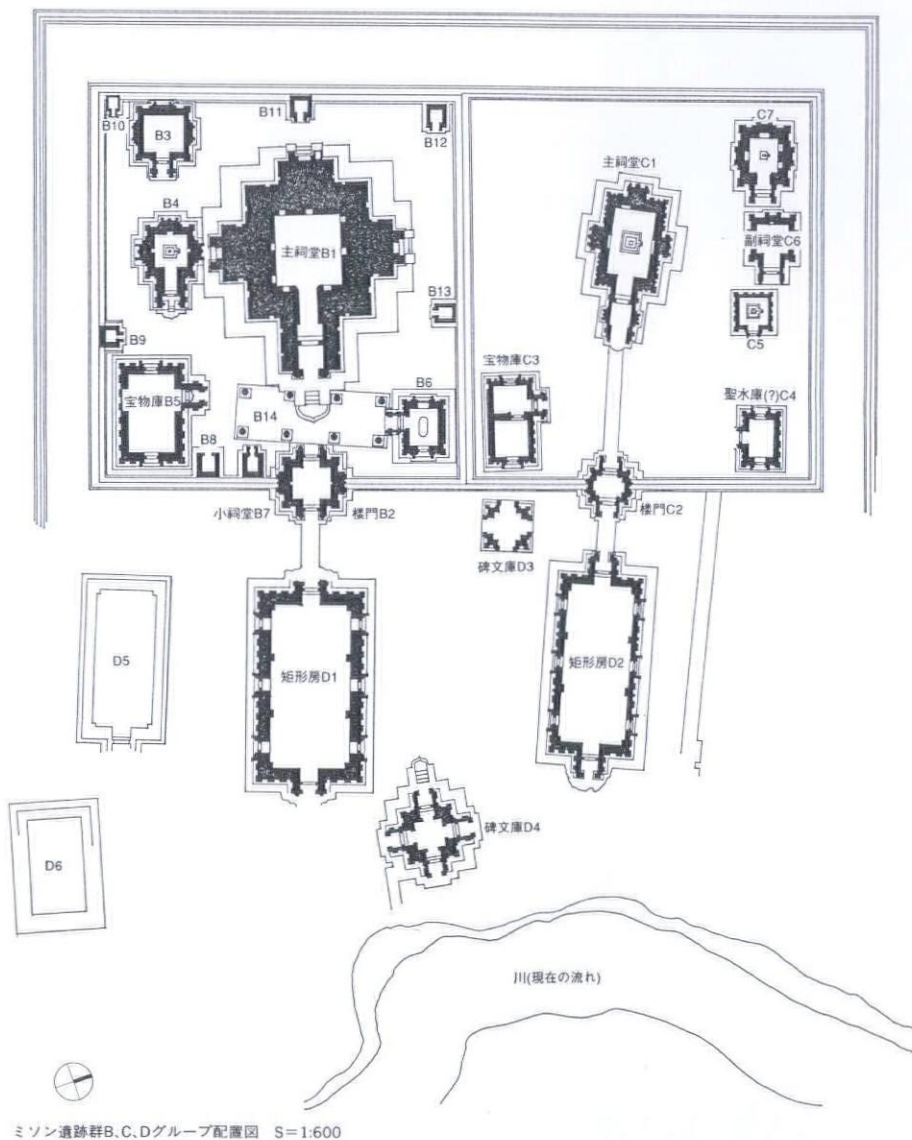
研究は、20世紀初頭のフランス極東学院 (E. F. E. O.) の学者によって先鞭がつけられている。主にチャンバの歴史的遺物を対象としたのは、H.バルマンティエ、Ph.ステルン、J.ポアスリエの3人である。基本的にはバルマンティエの調査報告をベースにしてステルンが美術様式の体系化を提示し、ポアスリエがその様式論を理論的に補正・発展させ今日に至っている。

チャンバ建築の伽藍構成

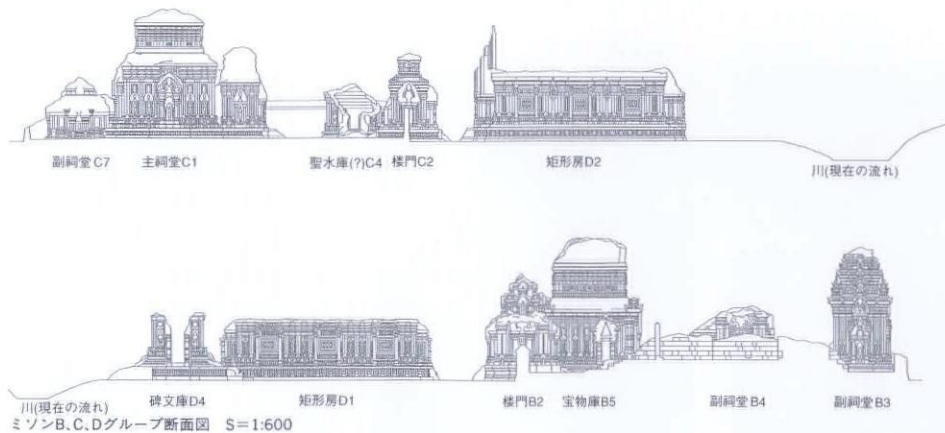
チャンバの宗教建築で中心となる建物は、ヒンドゥー教の神々、特にシヴァ神を祀るための祠堂で、チャム語でカランと呼ばれている。周壁に囲まれたひとつの伽藍の中に、祠堂は一棟だけの場合と、大小数棟で構成される場合がある。この場合に中央に位置する祠堂を「主祠堂」(B1、C1)、それ以外の副次的なものを「副祠堂」と呼んでいる (B3、B4、C5～C7)。さらに、主祠堂の回りや周壁に沿って、入口を祠堂に向けて配置された規模の小さな「小祠堂」もある (B7～B13)。これらの各祠堂内部には崇拝の対象物であるリングや神像が祀られ、入口以外に開口部が設けていない。

さらに、副祠堂や小祠堂と同様に祠堂を囲むように、小さな窓を設けた建物がある。内部に手足を清めるための聖水を入れる石製の水盤が残されている建物を、その用途から「聖水庫」と名付けている (B6、C4)。その他、祭祠に関する用具や宝物を保存したり、それらを身に纏うために設けられた「宝物庫」と考えられる建物もある (B5、C3)。聖水庫と宝物庫はいずれも矩形の平面で舟形屋根がかけられている。この舟形屋根の造形はインドネシアなどでみられる木造の穀倉に極めて類似している。木造のモチーフをレンガで置き換え続けるという発想はチャンバ建築に共通するが、この地域に木造系文化を基底とした初期段階があったことを示している。

祠堂入口に向かって開かれた「楼門」が周壁に接続して、一箇所設けられる (B2、C2)。楼門に続く周壁の外は、広い内部空間と窓と、祠堂に向かって通り抜けられる二つの入口が設けられていることから、祠堂に対する拝殿に類似した機能を持つか、あるいは僧房と考えられる。ここでは機能を特定せずに、仮に「矩形房」と呼ぶ (D1、D2)。方形平面で四方に入口を開いた建物は、内部に石碑を収めた建物であるとされ、「碑文庫」として分類できる (D3、D4)。チャンバの宗教施設は、これらの各種の機能を持つ建物の組み合わせによって伽藍が構成されている。



ミソン遺跡群B、C、Dグループ配置図 S=1:600



ミソンB、C、Dグループ断面図 S=1:600

伽藍の種類と立地

次にチャンパの伽藍の立地と構成について整理してみたい。伽藍の立地条件は大別すると3つの種類がある。第一に、ミソンなど山里深くに隠れるように造営された「聖地型」が挙げられる。この類例は他の地域では少ない。二つ目は、穀倉地帯や主要街道沿いの平原に造営された「平地型」で、クアンナム遺跡群のチェンダン、クオンミー、バンアン、ドンジュオン、この他にビンラム、トゥーティエン、フンチュオン、ホアライがこれに属する。三つ目は、平地型と同様に平原地帯に立地するが、丘上に位置する「丘上型」で、ビンディン遺跡群の金塔、銀塔、象牙塔、雁塔、ポー・ナガル、ポー・ハイの各遺跡がこのグループに属する。

敷地の選択に関して見てみると、平地型のビンラムは南シナ海に近い二つの河川が合流した平野部にあり、遺跡の周囲に水路網を巡らしている。シュリーヴィナイ港に隣接したこの遺跡は、交易に直接結び付いた水利都市的な配置の代表例である。

また、丘上型の中でも銅塔は、チャバンというチャンパの王都の中心寺院とされる。城壁で囲まれた城郭都市の事例は、他にチャキエウ、チョウサなどが知られているが、本格的な考古学調査は行われていない。王国の都市的な研究は進展していないが、現在いくつかの調査が進行しようとしている。今後の新たな都市像の解明に期待が膨らむ。

次に、祠堂の構成についてみると、配置計画上の中心となる祠堂はほぼ東に入口を向けて配置されている。他方ミソン遺跡群においては西向きの祠堂も存在する。例外的にポー・ダム遺跡だけは東西軸を

意識しない配置がなされているが、これらを除く遺跡では東西軸が強く意識されている。伽藍を構成する祠堂の数は一棟または三棟で、その数によって一塔主堂型、三塔主堂型に分類できる。祠堂が数棟あっても主堂から離れた副祠堂を伴うものはここでは一主堂型系に含める。

以上からチャンパの伽藍構成を整理すると、平地型はクアンナム遺跡群に多く、南部のファンラン、ニャチャンなどでは平地型と丘上型が混在している。また、平地型には三塔主堂型が多くみられるが、これらの祠堂は同時期に建設された事例は少なく、半世紀程度の造営期間をもって、随時追加されながら伽藍が整備されている。

祠堂のプロポーシオンについても、いくつかの相違がみられる。聖地型のミソンの遺構は近距離からの鑑賞を意識して造形されており、丘上型のように遠望を重要視して造形されたものとは、個々の建造物の構成、比率、配置が著しく異なっている。また11世紀以降に建設された丘上型祠堂の多くは、平地型に比べて装飾が減少している。これらの変化は、王族を中心とした限られた人々の宗教施設から、都市住民を意識するようになるというように、宗教観の変化から造営意識が推移したこと、隣国クメール建築や中部ジャワ建築からの造形的刺激など様々な要因が考えられる。

同時期のクメール建築の立地を見ても、チャンパと同様に変化に富んでいる。一元化されない形式で伽藍が構成されることに、チャンパそしてインドシナ建築の特徴がある。

チャンパ伽藍の原型

チャンパ祠堂の平面の配置を丹念にみると、いくつかの疑問にぶつかる。例えば同じ伽藍の中で各建造物の中心軸が微妙にずれている。その理由としては、施工上の誤差や方位にあまり厳格でなかったことが考えられる。しかし、そのズレ方にはあまりにも法則性がない。これまでのフランス極東学院の研究者の編年によると、同時期に伽藍全体が造営された事例は極めて少ない。さらに、周壁、樓門、矩形房、宝物庫といった付属建築は、10世紀以前にはみられず、この時期までは祠堂が単独で造営され、後に伽藍として整備されたとみられる。10世紀から11世紀にかけて最も多くの祠堂が建設されており、この時期に大きな政治、経済的な変化があったとみなされる。ちょうど9世紀後半からのインドプラ建都、ドンジュオン寺院の造営がその時期に該当する。時の王インドラヴァルマンII世はこれまでのヒンドゥー教の色彩の濃かった王家の宗教に、大乘仏教を取り入れて始めた。硬直化していた政治システム、政治力を持つバラモンなどの聖職者、貴族などの行財政改革の一貫として新たにこれまでと異なった宗教を導入し、チャンパの再興を図ったと想像される。

その大乘仏教のシステム、そして建築様式がどこから来たのかは不明である。南インド、クメール、中国南部など伝搬には諸説あるが明らかではない。しかし、現在のところドンジュオンで発見されている青銅仏に中国の影響が強くみられることに注目しておきたい。周壁を設け、樓門を配した伽藍配置が中国系の寺院造営の理念が大きく影響したとすれば、インドシナの建築史はまた違った方面への展開が期待されるであろう。



聖地は聖山であるマハー・バルヴァダ山の麓に広がる



ミソンBCDグループ

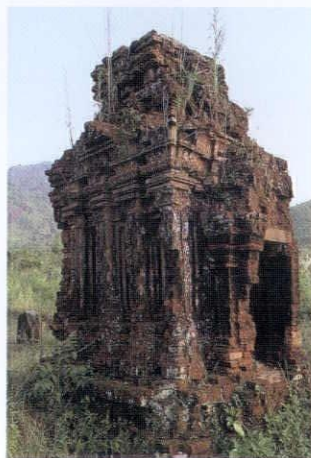


SD9603
98

チャンパの中心建物である祠堂、ミソンC1



舟形屋根の造形が用いられた宝物庫ミソンC5



方位神を祀るとされる小祠堂B7

チャンバ建築の特徴

チャンバの宗教建築の中心となる建物は祠堂(kalân、カラン)と呼ばれ、神格化された王のリンガやシヴァ神像などを中心に、同様の用途を持つ副祠堂、小祠堂、付属建築物、周壁などで構成されている。

チャンバの祠堂の中には、ヒンドゥー教の神像、特にシヴァ信仰の強かったチャンバでは、リンガが多く安置されている。祠堂は基本的に、王や貴族による儀式空間として位置付けられる。この祠堂建築を中心に、チャンバ建築の技術的特徴を整理しておきたい。

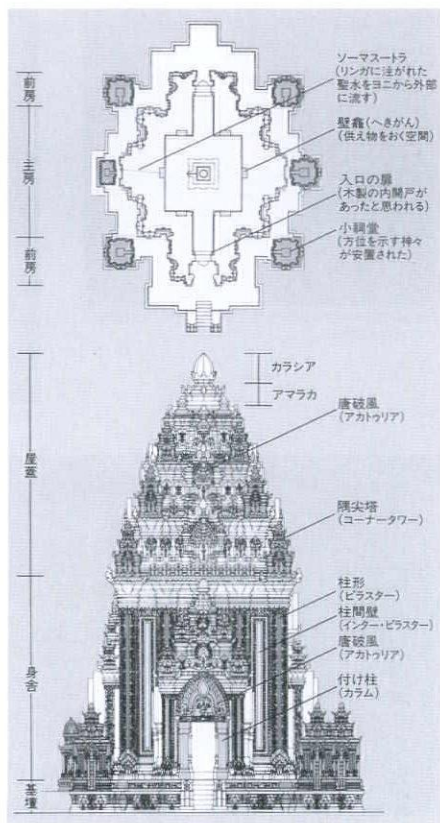
ひとつめは、チャンバの宗教建築は、迫り出し構造で内部空間を構成している。迫り出し構造とは、レンガを少しずつずらして積んで屋根を支える技術で、大きな空間を造ることは難しい。より大きな建築物を造るためには、建築的な要求として建物そのものを高くする必要があった。つまり、それぞれの迫り出しの幅を小さくする事によって、より一層大きな空間を造ることを可能にしたのである。

ふたつめは、チャンバ建築に限らないが、古い建物ほど壁体が厚く、技術・構造的な解明が進むにつれて壁厚は薄くなる。遺跡から受ける印象は、古いものほど重々しく、構造技術の解明につれて次第にリズムカルな、軽快な建築を目指すようになる。これは建物に施される彫刻装飾も同様で、力強さが徐々に失われる傾向がある。

三つめは、チャンバの宗教建築では焼成レンガが建築材料として主に使われた。そのレンガの各面は擦り合わせて施工されている。さらに、建物の形ができあがってから、レンガの壁面に外部の装飾彫刻を行なっている。装飾彫刻を後にする工程から考えると、分業化されていない、非合理的な工法を取っていたと思われがちだが、明快で合理的な分業システムがあって初めてチャンバの宗教建築は造営可能ではずだ。

その他、チャンバの建築の特徴を整理すると、

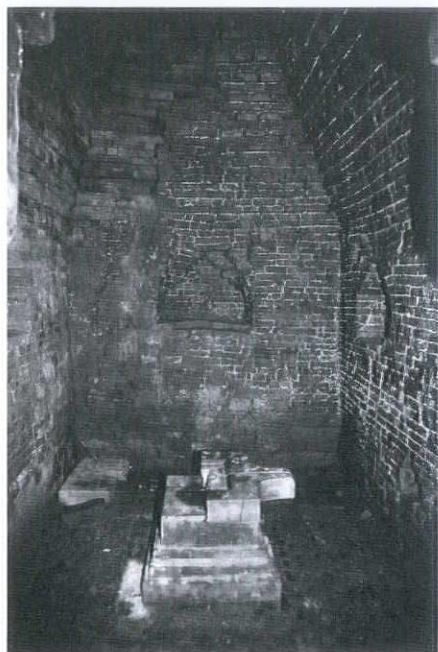
1. 屋根を支える基本構造はレンガを用いた迫り出し積みである。
2. レンガは擦り合わせて施工され、厚みを含めて不揃いのレンガを、様々な用途に合わせて使い分けている。
3. 基本となる祠堂は台状の基壇、角筒状の身舎、三層の段台ピラミッド状の屋蓋で構成されている。
4. 祠堂の屋蓋の形は、三段ピラミッドが基本だが、宝物庫などに舟型屋根が用いられることもある。
5. 外壁には彫刻が施されることが多い。レンガにあらかじめ彫刻したものを積み上げるのではなく、完成後に彫刻作業を行っている。
6. 建物内には装飾を施さないないが、祠堂には壁龕(ニッチ)を設けることが多い。
7. 祠堂の身舎には窓を設けず、開口部は入口だけである。



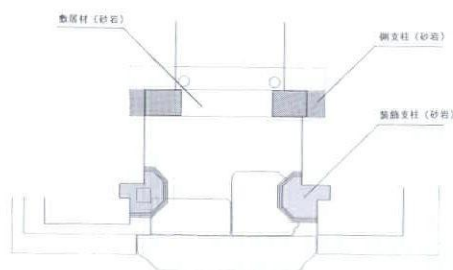
チャンバ祠堂の基本構成



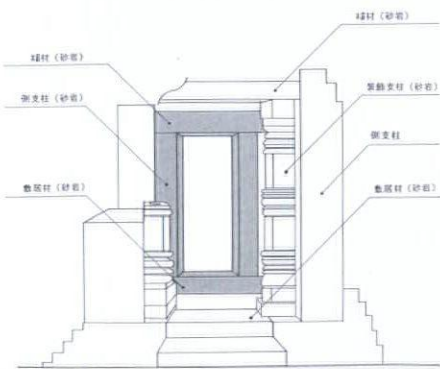
迫り出し構造で造られた屋蓋の見上げ、ミソンC3



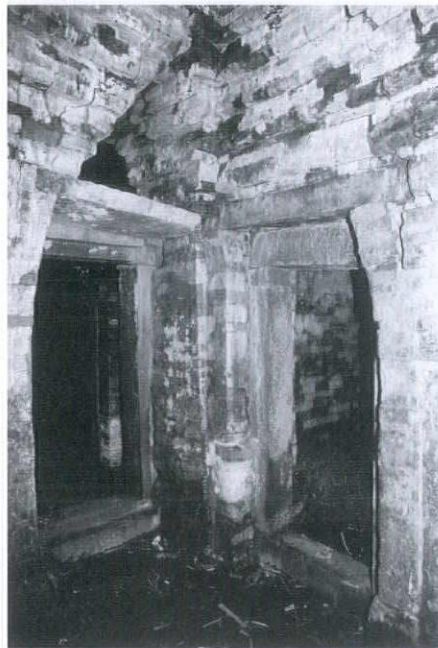
チャンバ祠堂の内部構成 中央にリンガを設置するヨニが残る。ミソンC7



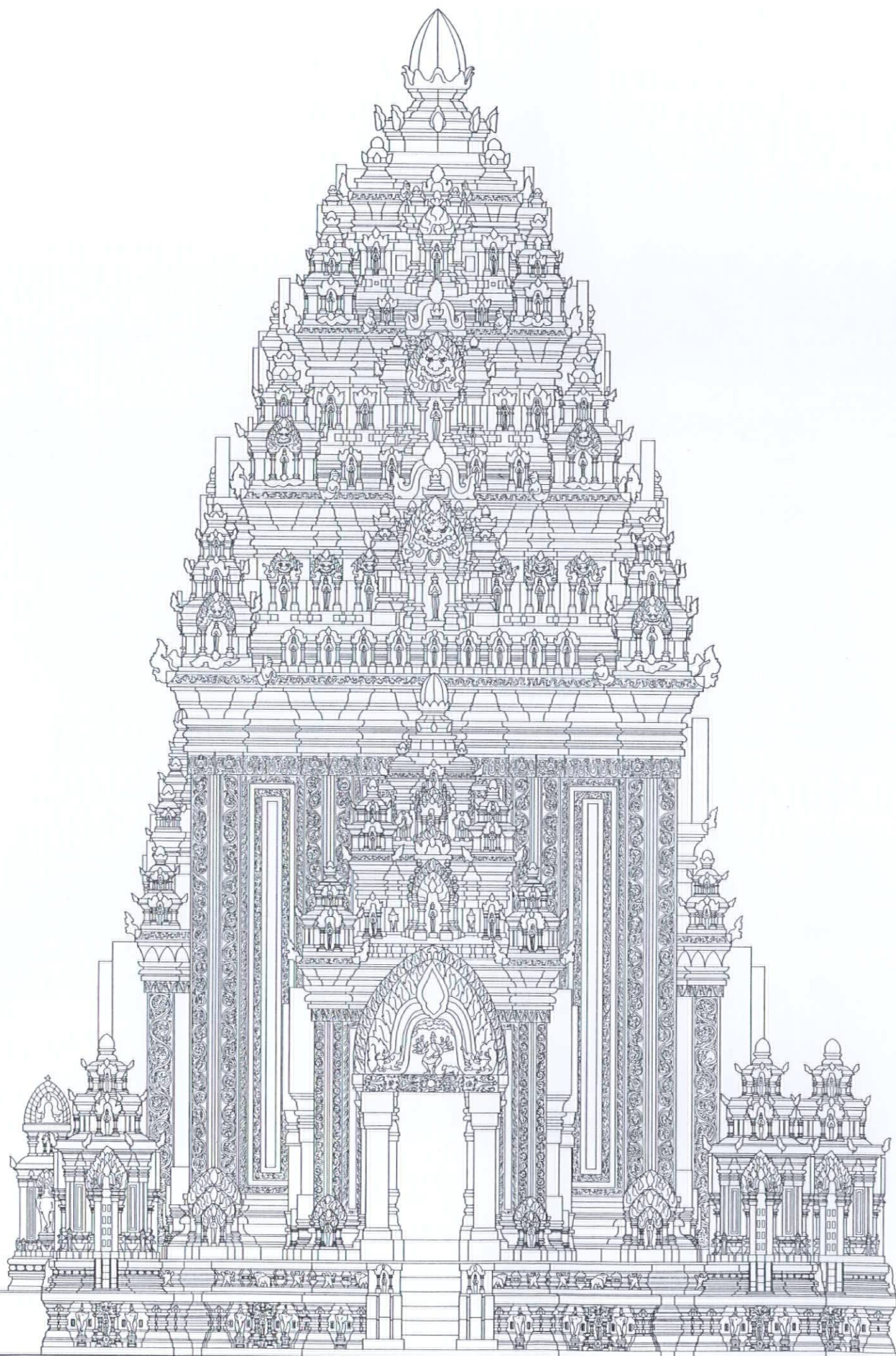
祠堂の入口部平面図



祠堂の入口部構造概念図



砂岩で補強されたレンガ造の開口部構造、ミソンC3



ミソン主祠堂A復元図（西立面図）

SD9603
100

作図＝大橋智子



ミソン遺跡群

4世紀末から8世紀中葉まで、チャンパの王都は、ベトナムの中部都市であるダナン西方チャキエウにあった。ここがチャンパの政治の中心で、その東方河口に貿易港ホイアンが経済の中心として栄えていた。チャキエウの西方には、ヒンドゥーの神々を祀る宗教の中心地として、聖地ミソンが造営され、王都チャキエウからは聖山マハーパルヴァタの存在によって、ミソンの方向が暗示されていたのである。チャンパの王都は多くの場合、このような経済、政治、宗教の核をもつ都市群と聖山が一組となって構成されていた。

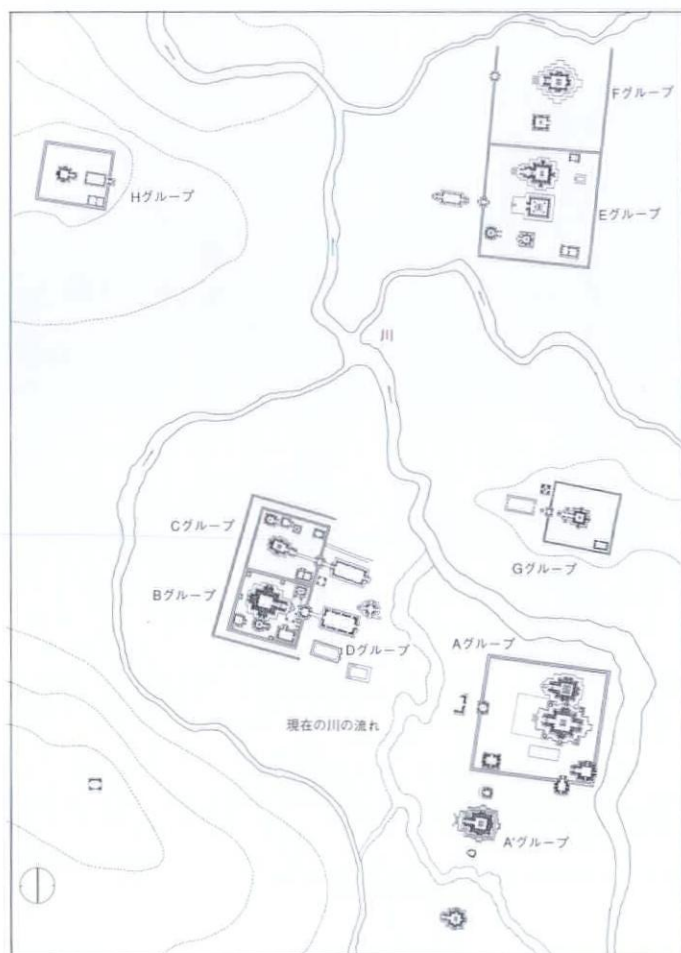
この国ではヒンドゥー教を主として、仏教と土着信仰が混在して崇拝され、特にミソンでは王と一体化したシヴァ神（破壊と創造の象徴）が主に祀られた。ミソン遺跡は四方を山で囲まれ、南に聖山マハーパルヴァタが聳える盆地の中央にあり、どこか俗世とは異なった神聖な緊張感を感じさせてくれる。碑文によると4世紀後半にパドラヴァルマンという

チャンパの王がシヴァ神を祀った中心建物である祠堂を創建したこと、木造の祠堂が火災により焼失し、7世紀に再建されたことが明らかになっている。その後も13世紀末までミソンはチャンパの各王によって庇護され、宗教建築の寄進と修復が継続される。

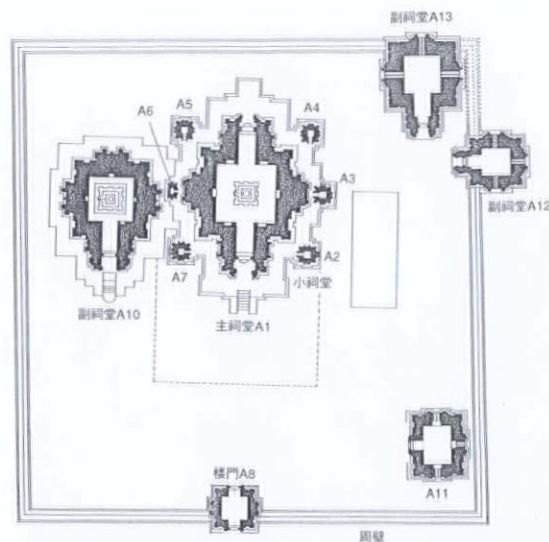
チャンパ政権は8世紀中葉には南部の勢力に握られ、9世紀末に再びインドプラ王権が復活する。しかし、長くは続かず、10世紀中葉には国の中心は再度南部に移動する。にもかかわらず、ミソンに王の寄進が続けられたのは、このミソンという地域が、チャンパの人々にとっての国家的な聖地であったからと考えられる。今は8世紀から13世紀末までに建てられた、60棟を超える遺構が草木に埋もれてたまま残っている。

ミソンAグループの中心建物であるA1は、1969年8月の米軍による爆撃を受けて、上部構造の大半を失った。この塔は「ミソンの大塔」と呼ばれ、チャンパの黄金期を彩る28mの高さを誇った優美な姿

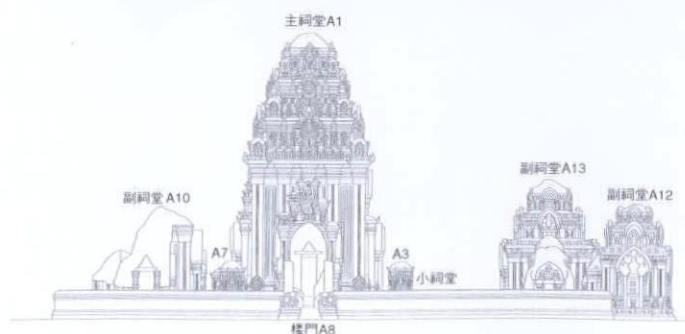
のレンガ造建築として知られていた。美しいプローションと同時に、軽快で優雅な花葉文様で塔全体が飾られていた。往時の姿を知るには、今世紀初頭の記録と僅かに残された部位、散乱したレンガに施された彫刻の跡からの推測に頼るしかない。チャンパ建築史上、10世紀から11世紀はミソンA1様式と呼ばれるが、代表作を失ってしまったのである。奇跡的に残されたカーラとマカラを冠した壁龕の細部意匠や、西北面に残された連続花葉文様は、中部ジャワの遺跡にも共通点が見られる。しかし、それらの部分も徐々に自然の脅威によって侵食され、数年後にはその存在すらも失われてしまうであろう。このミソンA1を復元できるように研究を進めることは、世界のチャンパ建築愛好者の願望とさえされている。



ミソン遺跡群
SD9603
102



ミソン遺跡群Aグループ配置図 S=1:800



ミソンAグループ断面図 S=1:700

クアンナム遺跡群

ベトナム中部クアンナム・ダナン省に残るこの遺跡群には、ドンジュオン(9世紀末～10世紀初頭)、クオンミー(10～11世紀初頭)、チェンダン(11～12世紀)、バンアン(12世紀)が含まれる。建設された時期は異なるが、平坦な敷地に伽藍が配置していること、ミゾン遺跡群の建物に比べて規模が大きいことも共通点である。

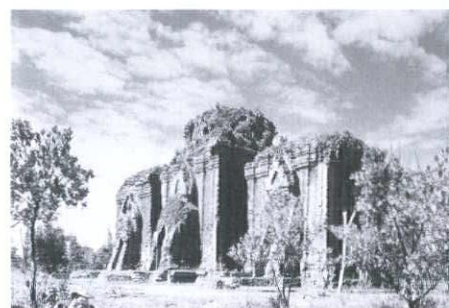
クオンミーは3基の祠堂が残り、その壁面の、クメールとジャワの美術様式を融合したと見られる装飾で知られている。チェンダンも3基の方形平面をした祠堂と、基壇の装飾に砂岩を用いた彫刻に特徴がある。クオンミー、チェンダン遺跡はともに3基の祠堂が東面して配置されている。しかし、3棟のそれぞれの構造形式が異なっており、随時祠堂が建設されて3塔式の伽藍が建設されたと見られる。



ドンジュオン



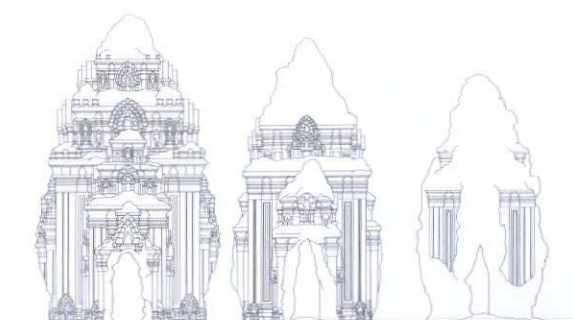
建立年代の違う3塔が並ぶクオンミー



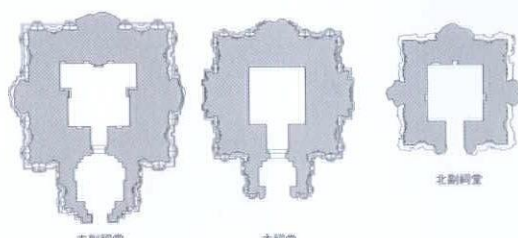
3塔式の伽藍配置のチェンダン



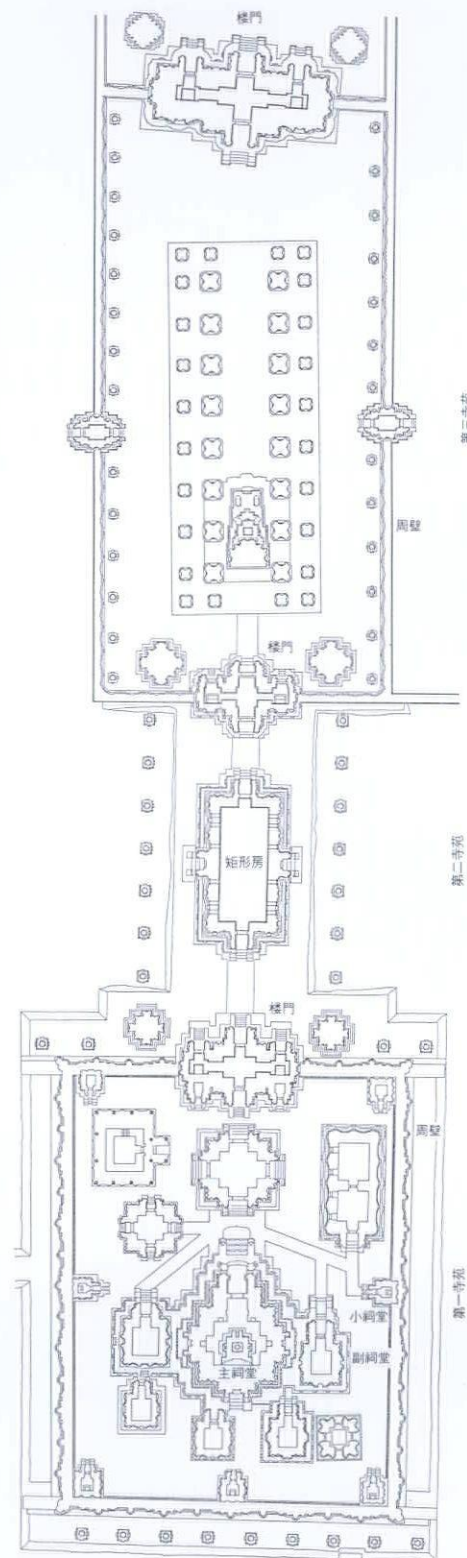
ジャワとクメールの影響のあるクオンミーの壁面彫刻



クオンミー東立面図 S=1:550

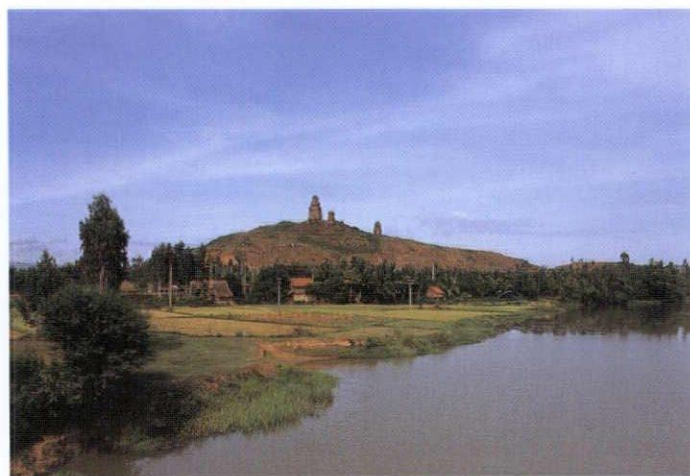


クオンミー平面図



ドンジュオン配置図 S=1:750

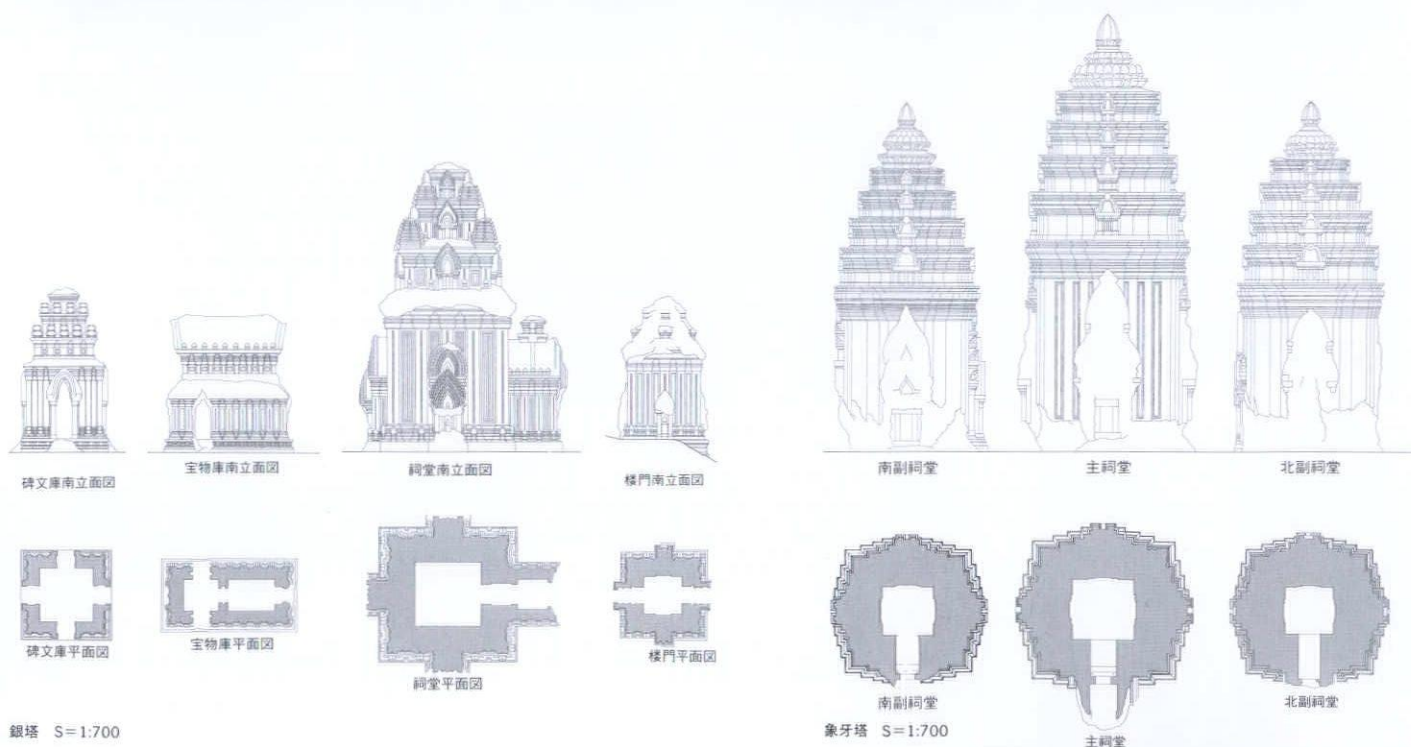
ビンディン遺跡群



南シナ海に流れ出す河口近くの丘上に位置する銀塔



クメール建築の影響を強く受けた象牙塔

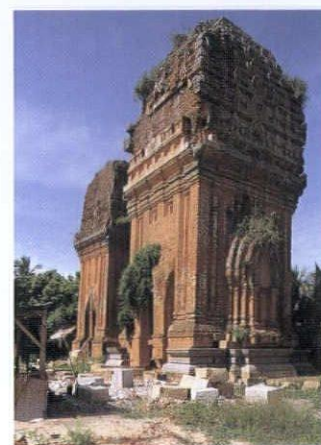


ダナンから300km程南下すると、ビンディン地区の中心地クニョンに到着する。この周辺部はヴィジャヤ(梵語)と呼ばれた地域で、ビンラム(11世紀)、銀塔(11世紀初頭、上図)、雁塔(11世紀)、フン・タン(12世紀末)、象牙塔(12世紀末、上図)、銅塔(13世紀)、金塔(13世紀)、トゥーティエン(13世紀)の8つの遺跡が残っている。これらの建築群は、ビンディン様式またはその過渡期の様式として分類されるが、この時期のチャンパは北部の大越、西部のクメールの侵攻を受け国土をしばしば占領されている。そのためチャンパの建築技術に加えて、クメール建築の影響を強く受けた遺跡群と位置付けられる。

敷地の選択に関して見てみると、ビンラム、フン・タンとトゥーティエンの3遺跡は平坦地に展開している。特にビンラムは南シナ海に近い2つの河川が

合流した平野部にあり、周囲に水路網を巡らしている。このような意味では交易に直接結び付いた水利都市的な配置の代表とみることができる。

その他の5つの遺跡は、形状に違いはあるが丘陵上に伽藍が配置されている。特に銀塔、金塔、雁塔は昇るのに骨が折れるほどの高さの山頂に造営されている。銅塔、象牙塔は周囲の平原よりは小高い丘が敷地として選ばれている。今世紀初頭この地域を調査したフランス人研究者、アンリ・バルマンティエによれば、銅塔はチャバンというチャンパの王都の中心寺院であった。考古学の本格的な調査が行われていない現在では、都市的な範囲を含めた研究は進展していないが、今後の新たな解明に期待が膨らむ地域である。



修復作業の開始されたフン・タンの祠堂

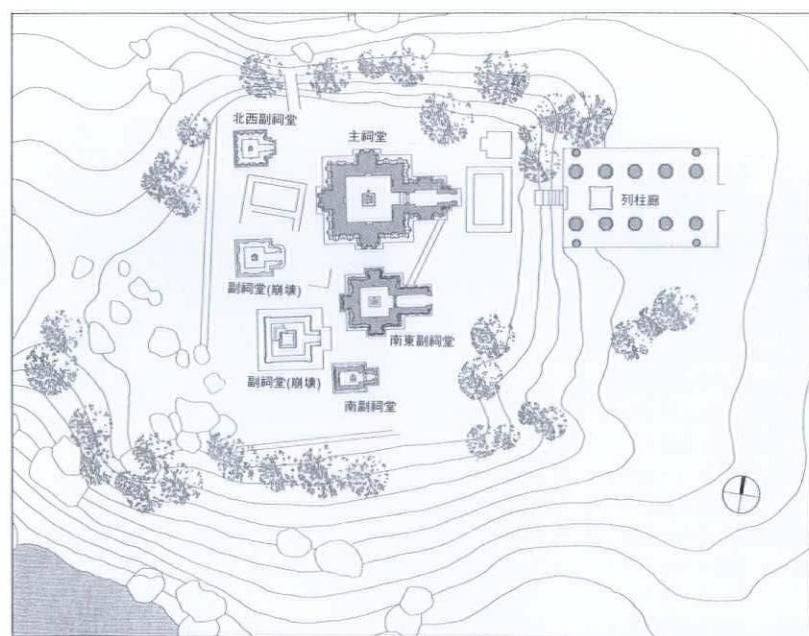
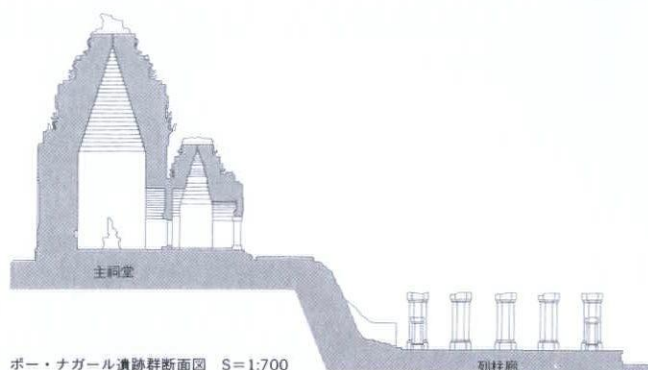
ポー・ナガル遺跡群

ニャチャンの市街地にある参道を昇ると、カイ川の河口に広がる雄大な南シナ海の眺望が広がる。今から1200年以上も前、この地域がカウターラ国と呼ばれていたころ、774年と784年の2度にわたってジャワ軍から侵攻されて、創建期の木造寺院は焼き払われ演滅的な被害を受ける。同時に、貴重な宝物のほとんどが持ち去られた。「海の道」は現在よりも身近な存在だったようである。その後、レンガと砂岩による最初の寺院が再建されている。伽藍は丘上の500m四方に密集して建てられていた。8世紀から13世紀までチャンパの王によって諸塔が建立され続けたが、現在は主祠堂、副祠堂や列柱廊など5棟の建物が残る。

この遺跡のみどころのひとつは、主祠堂の内部にのこされているポー・ナガルを祭った女神像である。線香の煙で充満した堂内には、11世紀半ばに再造された10本の腕を持って台座の上に足を組んで座わる着飾った像が見える。今は顔はペイントされているが、本来は祭りに際して天然の材料で彩色され、祭りが終わると洗い流されていた。チャンパ遺跡の多くはベトナム人から見捨てられ、彫像のほとんどは博物館に収蔵されている。この寺院ではベトナム人の信仰と結びつくことによって辛うじて信仰とつながっている。堂内にはチャンパ時代の2体の象の木彫が残っている。

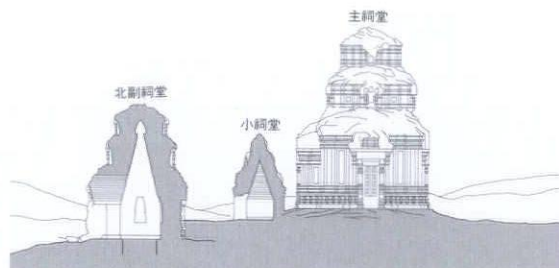


カイ川の河口に立地するポー・ナガル遺跡

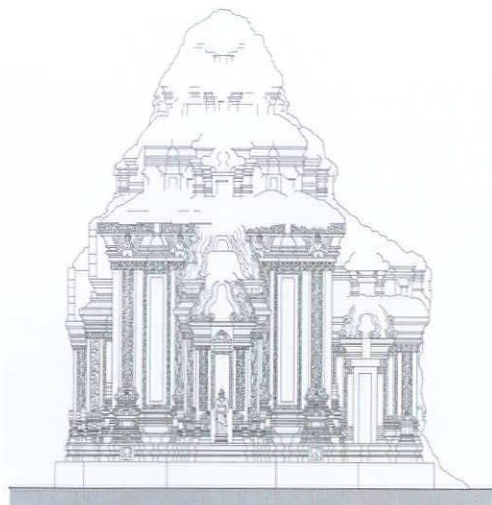


ポー・ナガル遺跡群配置図 S=1:1000

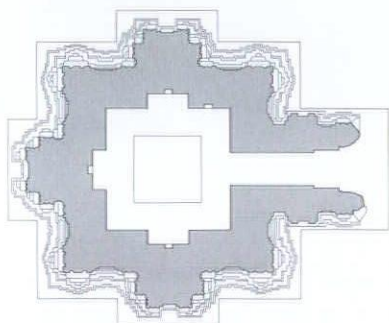
ポー・ハイ遺跡群



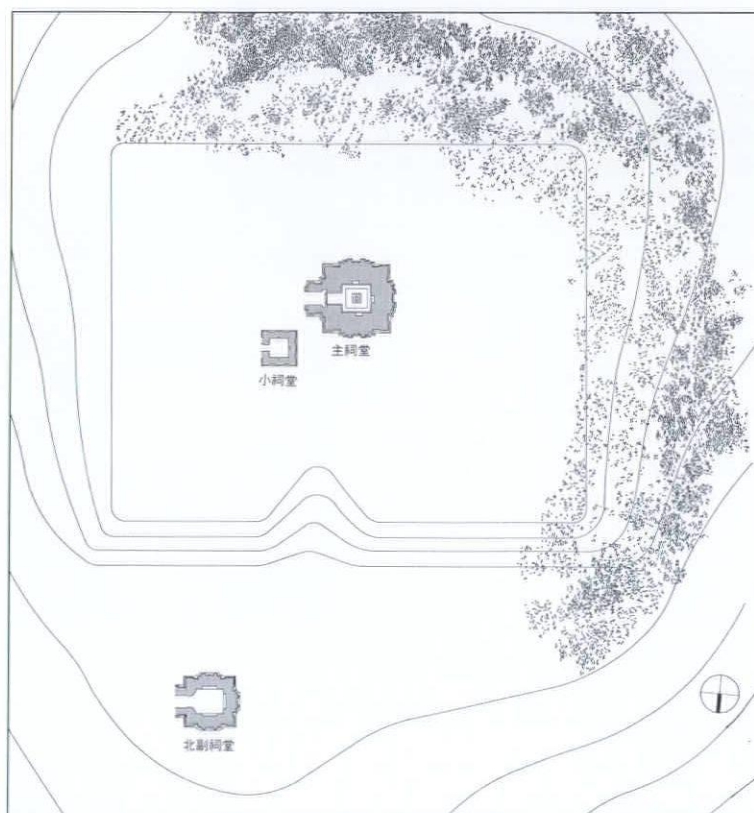
ポー・ハイ断面図 S=1:550



ホアライ北副祠堂南立面図 S=1:300



ホアライ北副祠堂平面図



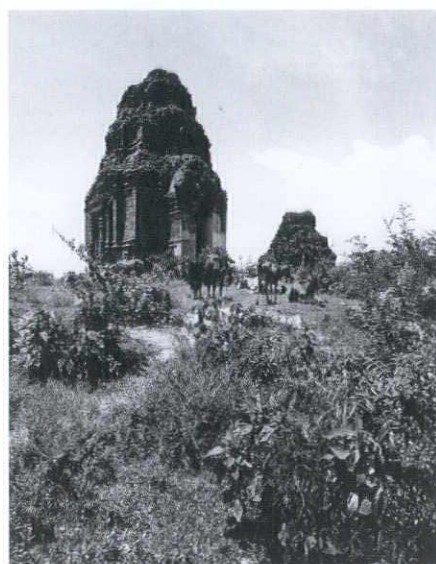
ポー・ハイ配置図 S=1:800

この遺跡群に含まれるポー・ハイ遺跡、ポー・ダム遺跡、ホアライ遺跡の3つは、チャンパの最南部の都市ファンラン、ファンティエット周辺に点在している。それぞれは8世紀から9世紀中葉までに創建されたチャンパ遺跡の中でも古い部類に入る。3つの遺跡はバードラング国域に属し、チャンパの現存遺構としても最初期に属するものである。ホアライ遺跡はニャチャンから南下する国道1号線に接しているが、壁面に施された精緻な彫刻は必見に値する。ポー・ハイ遺跡はファンティエットの町の北東7kmにあり、南シナ海と市街地を眺望できる景勝の地に配置されている。

この遺跡群の特徴は、敷地の選択に関して3つの遺跡に類似点がないことである。ホアライはほぼ平坦な敷地に、ポー・ハイは丘上に建設され、ポー・ダムは、山の斜面に埋もれるように建てられている。それぞれが特異なロケーションに造営されている。

同時期のクメール建築の立地を見ても、同様に変化に富んでいる。一元化されない形式で伽藍が構成されることに、この遺跡群の特徴があると言える。

ポー・ハイ、ホアライに関しては、壁龕の複雑な配置、レンガ装飾の多様性に特徴がある。ポー・ダムではホアライと同様な壁龕の構成が見られ、出入口の構造にも類似した工法が用いられている。これまでのフランス人による時代考証を、技術史的な面から再検討してみる必要がある。

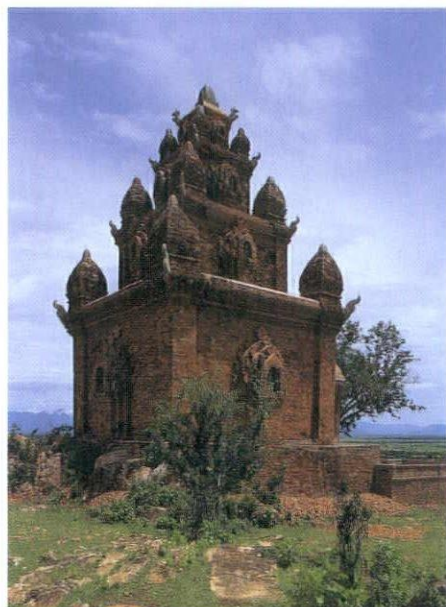


海に向かって入口を開く主祠堂と副祠堂、ポー・ハイ

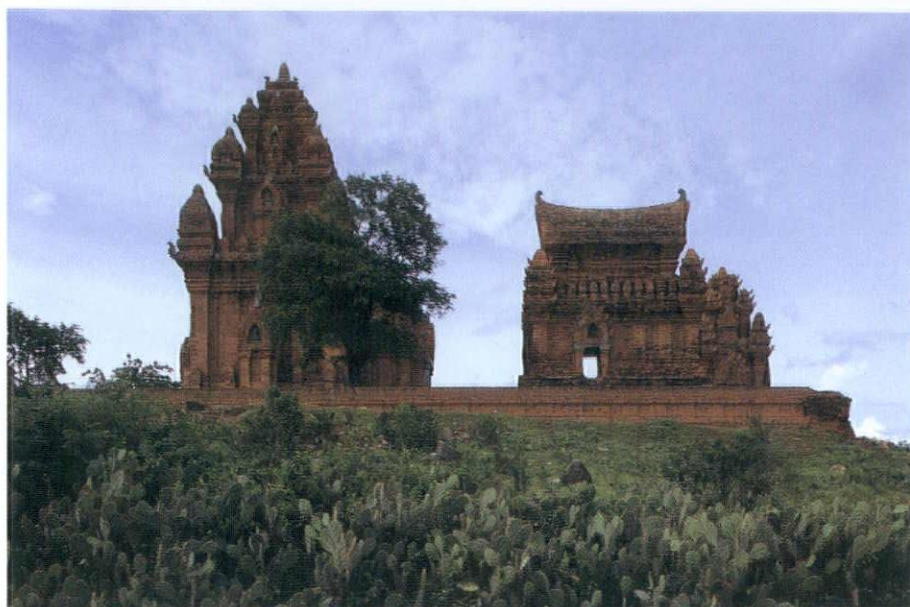


主祠堂が失われた3塔型のホアライ

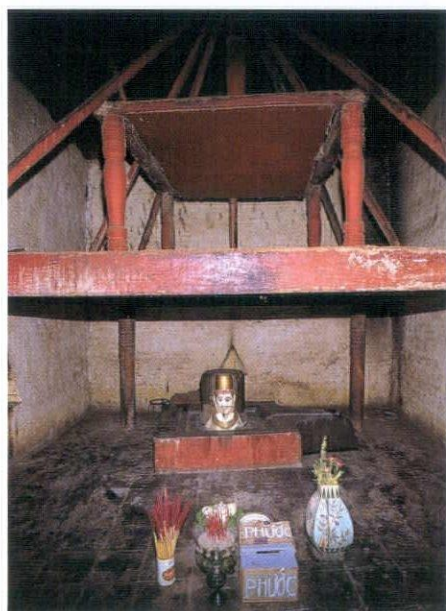
衰亡期の遺跡



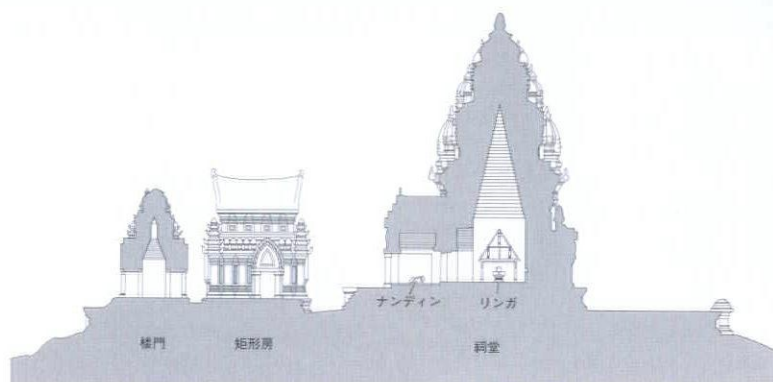
チャンパ族の最後の遺構であるポー・ロメ



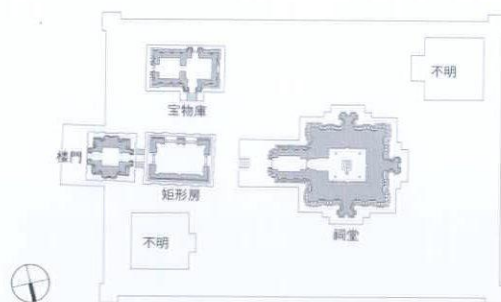
修復の終わったポー・クロン・ガライ



内部に残るムカリンガと木造の鞘堂



ポー・クロン・ガライ断面図 S=1:550



ポー・クロン・ガライ配置図 S=1:800

ファンランにあるポー・クロン・ガライ（14世紀初頭）、ポー・ロメ（15世紀末）が造営された時期には、チャンパは越族の圧迫などを受け隷属化した地方勢力となっていた。ポー・クロン・ガライ遺跡は地味の薄い地域の丘上に建てられ、主祠堂や供物を収める倉庫（宝物庫）と塔門から構成されている。祠堂入口には2本の砂岩製の付柱があり、ジャヤ・シンハヴァルマンIII世治世の古チャム語で刻まれた碑文が残されている。そこには、この寺院の修復と、捧

げ物と奴隷を寄進したことが記されている。2つの遺跡は数年前に修復が終わっており、門前ではチャンパ族の織物や衣装を土産として売っている。

ポー・ロメ遺跡は、トアンハイ省の人里離れた不毛の地の中央にあるチャム王権の最後の遺構である。主祠堂にはポー・ロメ王が、小祠堂にはポー・ロメの王妃とポー・ロメ王の葬儀に際して捧げられた碑文が祀られている。チャンパ族最後の遺跡であるせいか、ここには物悲しい雰囲気漂っている。

チャンパの遺跡保存事情

1990年以降、主にベトナム中部から南部地域にかけて10回を超えるチャンパ遺跡の総合調査とフエ、ホイアンの木造文化財調査と研究にかかわってきた。その経験の中で文化財調査と保存修復に関しての問題点を整理すると、現状は次の3点に集約されると考えている。1つは修理報告書が不備であること。2つ目は文化財保存修復と研究との関係が脆弱であること。3つ目は修復技術者の育成が図られていないことに加えて、研修のための施設が整備されていないことである。これらの3つの課題は互いに関連しており、明確に分離して考えることができないのだが、あえてそれぞれについて事例を紹介しながら報告したい。

1. 修理報告書の不備

1980年以降、ベトナムではポーランドの技術者を主体として様々な形で文化遺産の修復が着手された。しかし、一部を除きこれらの修復について建築的、または考古学的な報告書がベトナム側で出版されていないのである。日本では文化遺産の修復に当たっては、詳細な報告書の刊行が義務付けられ、一定の水準の修理記録が残されている。このことは、次に述べる問題とも深く関係しているのだが、報告書が公刊されないと、どのような保存修復が、どのような意図で行われたかが、担当者の記憶以外には残らない。国内外の研究者には修復の詳細や意図を想像する以外にはなくなってしまう。

多くの修復現場では、出版経費を捻出できないという経済的な理由が挙げられるが、仮報告書なども作成されていない。極論ではあるが、修復方法が明らかでない文化遺産修復の修復は、一種の「文化遺産破壊」に通じるものと言える。この背景には文化遺産の修復が観光整備の一環として位置付けられていることにも通じている。ドイモイ政策により急速な経済発展を遂げつつあるベトナムでは、都市整備が急ピッチで進められている。そのため開発行為が主体で、歴史的な景観を含めた文化遺産保護の意識は社会的には極めて未成熟であるといえる。

修理報告書の出版は他にも大きな意義をもっている。それは地方で文化遺産修復にかかわる人々にと

っての、修復の貴重なガイドブックとして、地方の研究者にとっては重要な研究資料となり得るのである。文化遺産修復がハノイを中心とした一部の限られた人々の特権的な仕事に留まる限り、地方では修復という名を借りた観光開発や結果としての文化遺産破壊が広範囲に進行する危惧があり、現実にはこのような破壊作業が急速に進行しているのである。

2. 文化遺産保存修復と研究との関係の脆弱さ

近年、ベトナム国内でも海外からの援助を得て、様々な文化遺産の修復が行われている。しかし、これらの修復作業によって、新たな技術的解明や、歴史的な発見がなされたという報告を見ることは少ない。近年、ベトナムでの調査に参加した日本人研究者からは、現状でこの程度の技術なら過去に報告された研究成果の信憑性が問われるとの発言も出る始末である。新しい発見や解明が注目されていないのは、保存修理作業によって建築史研究上の成果や、遺跡整備によって考古学上の発見がなかったことを意味しているのではない。それらの作業の中から判明した新しい知見が形に残されないまま、消滅してしまったことを意味している。

文化遺産研究の手法は様々で、工法、技術、計画手法、材料など、どのようにして文化遺産を構築したかを明らかにし、それらを解明することから現代人が学ぶことは多い。文化遺産修復から学ぶという認識がなければ、修復という名の行為によってこれまで残ってきた過去の貴重な遺産の価値を半減させることにもなりかねないのである。

3. 修復技術者の育成と施設整備の緊急性

修復現場を見て感じたことは、ハノイの一部の技術者と地方の文化遺産担当者の経験と知識のギャプである。地方の文化遺産修復センターや各省の文化局には建築や考古学を担当できる専門家が極めて少ない。まずは、各地に建造物の修復や発掘を担当できる専門家を配置、育成することが急務である。それらの人々を育てるのは決して容易な道ではない。さらに、もうひとつの課題は、文化遺産を修復できる職人の確保である。建築工法や材料の変化から、大

工を中心として瓦やタイルを焼く職人、漆喰塗りの職人などの技術者保持が困難になっている。木材を丁寧に加工し、細工できる技術をもつ職人は、地方でも高齢者に限られ、急速にその技術が伝えられないまま失われつつある。文化遺産の修復が長期的な計画に基づいていないため、1つの修復作業が終われば、それらの技術者や職人も含めて仕事が終わってしまい経済的な面からも後継者が育ちににくいのである。その対策として、文化遺産修復に携わる技術者や職人を国や省で認定し、一定の補助するなどの政策や、技術者の研修センターを各地域に設けることが考えられるが、財政的な問題からベトナム独自ではまったく手が付けられないのが現状である。

4. ベトナムの文化遺産修復の将来について

文化遺産修復の基本的な考え方を広く浸透させるには、修復理念や技術を現場作業の中で理解してゆけるような修復を実施し、全国の文化遺産担当者に参加、見学してもらうことがひとつの方法として考えられる。さらに、修理報告書の出版を修復の資金援助と同時に義務付ければ、多く修復手法に関する問題が顕在化すると同時に、課題の検討ができるだろう。さらに、文化遺産修復の研修施設に併設して、文化遺産修復のための良質な部材を定期的に収集し保存しておく施設や、各国の修復資料が閲覧できるリファレンス施設などが必要とされる。本格的な文化財の修復作業に向けては、木造文化遺産の修復指導のできる人材を長期間派遣するか、日本のような木造文化圏での修復現場で長期間研修すれば効果は上がるであろう。これからのベトナムでの文化遺産の修復事業には、文化遺産修復の理念だけでなく、技術を習得して、ベトナム理念として再構築することが必要なのではないだろうか。このような意味からフランス、日本、オーストラリア等からの文化財保護に対する援助も、長期的なビジョンに立った人材育成と同時に文化財に関する研修システムの構築が望まれる。

●しげえだ・ゆたか／建築史、日本大学理工学部建築学科研究員

チャンパ歴史略年表

西暦(年)	チャンパ	東南アジア・世界
B.C.1000後半 B.C.111	中部ベトナムにサーフィン文化	前1000年紀後半 北ベトナムにドン
A.D. 168	漢の武帝、南越を滅ぼし、中部ベトナム北半に日南郡を設置	ソン文化、東北タイ・カンボジア、メコンデルタにメコン文化、日本に弥生文化
192	大秦国王安敦の使者、日南郡にきたる	紀元前後 海のシルクロードが確立
4c後半	日南郡象林県の区連が自立、林邑国を建てる	1~7c メコン文化を基礎に扶南が建国
446、605	パドラヴァルマン王がはじめてサンスクリット語碑文を建て、ミソンでシヴァ神をまつる	4c後半~5c 東南アジア各地のインド化
7c初	中国軍、林邑の首都(チャキウカ)を占領	6c末 東北タイ・南ラオスから真臘が勃興(モン・クメール諸国の形成)
758~838ごろ	サンヴァルマン王(629没)の碑文にチャンパの名が初出	7~8c イスラム商人の活動などによりマラッカ海峡貿易ルートが発展。スマトラのシュリーヴィジャヤ、ジャワのシャイレンドラなどが繁栄
774、787	中国資料が林邑を環王と改名(このころカウターラ・バーンドゥランガの勢力拡大)	
875	ジャワ(シャイレンドラ朝)が侵攻	9~14c カンボジアのアンコール期
982	インドラプラに建都(中国は877から占城と呼ぶ)	10c ベトナムが中国から独立
1000ごろ	ベトナムの黎壇にインドラプラを破壊される	10~14c 東・南シナ海に初期華僑ネットワークが成立
1044、1069	ヴィジャヤに新政権確立	11c ビルマ族の同家形成
1145、1203	ベトナム李朝のヴィジャヤ襲撃	
1177	カンボジアにヴィジャヤを占領される	13c 東南アジア大陸部のインド文明の衰退とタイ族の勃興、上座仏教化の開始
1252、1312、18	カンボジアのアンコールの都を占領	13c後半 東南アジアの元寇(ベトナム、ビルマ、チャンパ、ジャワなど)
1282~85	ベトナム陳朝のヴィジャヤ襲撃	14~16c 倭寇の活動に、各国は海禁政で対抗
1371、77、78	ベトナムの首都ハノイを襲う	15~16c ヨーロッパのルネサンスなどの影響で東南アジアから西方への香辛料輸出が激増、ヨーロッパ人のアジア進出(大航海時代)を招く一方で、マラッカ王国を拠点に島嶼部各地がイスラム化
1390	ベトナムに攻め込んだ王「制誅我」が戦死	
1403、1446	ベトナム軍のヴィジャヤ襲撃	
1471	ベトナム軍の黎壇宗、ヴィジャヤを占領、ビンディン以北をベトナム領とする	
15c末	バーンドゥランガにチャンパ王権が復活(1543まで中国に朝貢)	
1516	最初のポルトガル船がチャンパに漂着	16c末から1680年代 日本・東南アジア貿易が繁栄(日本の銀銅と中国生糸、各種熱帯産品の取引。日本の鎖国後も中国・オランダ船が大規模交易)
1606	徳川家康がチャンパの奇楠香を求めて手紙を送る	
17c	ブルネイの布教などにより1676ごろまでに王家がイスラムに改宗	17~18c ベトナムの鄭氏(トンキン)と広南阮氏(コーチシナ)の南北抗争。
1611	広南阮氏にフーイエンを奪われる	広南阮氏は明清文代期に移住した華僑勢力と結び、メコンデルタをカンボジアから奪う
1653	広南阮氏にカインホアを奪われる	1680年代~ 日本市場の閉鎖とヨーロッパ勢力の商業的農業への集中によりアジア海上貿易は衰退。18c末から産業革命期の欧米勢力が貿易に再進出
1692	広南阮氏、バーンドゥランガの地を順城鎮とする(1697同地域のベトナム人を統治する「平順府」を置く)	1802 阮福映、西山を倒して阮朝を立てる(~1945)
1771~1802	西山の乱。順城鎮が阮福映との主戦場となる	1858 フランスのインドシナ侵略開始
1832	阮朝の明命帝、順城鎮を廃止。33~35年の南部大反乱の中でのバーンドゥランガの反抗も鎮圧される	

チャンパ遺跡略年表

西暦	遺跡名
600	(ミソン・クアンナム地域)
700	ミソン遺跡群 ミソンE1
800	ミソンA3 ミソンC7 ミソンA13
900	ミソンB4 ミソンA1, B5, B3, B7, D1
1000	ミソンD2, D4 ミソンC1, C2, C3, C4, C5, C6
1100	ミソンE4 ミソンK
1200	ミソンG ミソンH
1300	
1400	
1500	
1600	
	(南部地域)
	ボー・ハイ遺跡群 ボー・ハイ主祠堂 ホアライ南副祠堂 ボー・ダム主祠堂 ホアライ主祠堂 ホアライ北副祠堂
	クアンナム遺跡群 ドンジュオン クオンミー南副祠堂 クオンミー北副祠堂 クオンミー主祠堂
	(中部地域)
	ボー・ナガル遺跡群 副祠堂F 主祠堂A ビンディン遺跡群 ビンラム、銀塔 雁塔 フンタン 象牙塔 銅塔 金塔 トゥーティエン 多住殿M
	(南部地域)
	衰亡期の遺跡群 ボー・クロン・ガライ主祠堂 ヤーン・ナム主祠堂 ボー・ロメ主祠堂

チャンパ遺跡マップ

凡例
 現名称
 旧名称
 所在地/竣工年/設計者
 解説



凡例 ▲：ベトナムのその他の遺跡 ■：その他の古蹟



A



B



C



1. ミンソン Mỹ Sơn

Duy Tân, Duy Xuyên, Quảng Nam-Đà Nẵng/
8~13C/不詳

4世紀末の碑文からミンソンにリンガを祀った宗教建築が造営されたことが知られる。13世紀末まで7つの伽藍、70基以上の堂塔が建立される。聖地式伽藍



2. ドンジュオン仏院 Đồng Dương

Bình Định, Thăng Bình, Quảng Nam-Đà Nẵng/875年/インドラヴァルマンII世

875年の碑文に王が大乗仏教の施設を造営したことが記される。抗仏戦争時に戦場となり、チャンパ最大規模の遺跡も碑文庫の一部が残るだけである。平地式伽藍



3. バンアン Bàng An

Điện Hồng, Điện Bàn, Quảng Nam-Đà Nẵng/12C/不詳

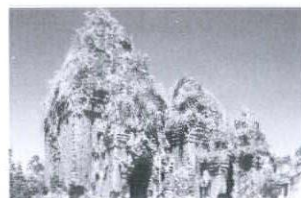
チャンパで現存する唯一の八角形平面の祠堂が見られる。平地式伽藍。1主堂型



4. チェンダン Chiên Đàn

Nhơn Hòa, An Nhơn, Bình Định/
11世紀中葉から12C。12C末にジャヤシンハバルマンが修復/不詳

基壇部や身舎に砂岩の補強材が使用されている。平地式伽藍。3主堂型



5. クォンミー Khương Mỹ

Tam Kỳ, Mỹ Thành, Quảng Nam-Đà Nẵng/
10C初頭から半ばにかけて/不詳

祠堂の壁面を埋め尽くした浮き彫り彫刻が特徴。平地式伽藍。3主堂型



6. 銀塔 Tháp Bạc

Nhơn Hòa, An Nhơn, Bình Định/
11C初頭/不詳

コン川に面した丘上に主祠堂、碑文庫、宝物庫、樓門が残る。丘上式伽藍。1主堂型



7. ビンラム Bình Lâm

Phước Hòa, Tuy Phước, Bình Định/
11C初頭/不詳

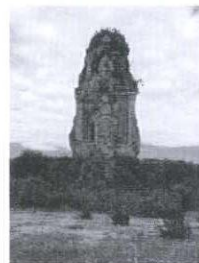
シュリーヴィナヤと呼ばれる城壁で囲まれた港湾都市の中心に建てられた祠堂。平地式伽藍。1主堂型



8. 銅塔 Cánh Tiên

Nhơn Thần, An Nhơn, Bình Định/
13C初頭/不詳

15世紀まで繁栄していたチャンパ都城の中心寺院。丘上式伽藍。1主堂型。カンティエン(仙女の翼)、コンガイ(少女)塔とも呼ばれる。



9. 金塔 Thốc Lốc

Nhơn Thần, An Nhơn, Bình Định/不詳/不詳

トック・ロック(Thốc Lốc、カンボジアの塔)と呼ばれる。丘上式伽藍。1主堂型



10. トゥーティエン Thủ Thiến

Thủ Thiến, Bình Nghi, Tây Sơn, Bình Định/
13C/不詳

銅塔と同様式。平地式伽藍。1主堂型



11. ユンロン・象牙塔 Dương Long

Bình An, Tây Sơn, Bình Định/12C末/不詳

3塔式の伽藍配置や基壇、屋蓋部などの砂岩材の使用はクメール建築の影響とされる。丘上式伽藍。3主堂型



12. フンタン Hưng Thạnh

Đống Đa, Quy Nhơn, Bình Định/12C末/不詳

7層式の特異な屋蓋の構成に特徴がある。平地式伽藍。3主堂型(現存は2基)



13. 雁塔 Tháp Nhạn

Tuy Hòa, Phú Yên/11C/不詳

ダーラン川の土手上の丘上に位置する。丘上式伽藍。1主堂型



14. ボー・ナガル Pô Nagar

Nha Trang, Khánh Hòa/8C創建/不詳

ボー・ナガル女神を祀るチャンパ王国南部の聖域に建てられる。現存するのは10世紀から14世紀の堂塔。丘上式伽藍



15. ホラアイ Hòa Lai

Thuận Hải, Ninh Hải, Ninh Thuận/
8C末から9C半ば/不詳

国道1号線に境内を横切られる。中央祠堂は倒壊。平地式伽藍。3主堂型



16. ボー・クロン・ガライ Pô Kloong Garai

Lưu Vĩnh, Phan Rang-Tháp Chàm, Thuận Hải/14C初頭/不詳

主祠堂、宝物庫、塔門、矩形屏が残る。修復完了。丘上式伽藍。1主堂型



17. ボー・ロメ Pô Rômê

Hậu Sanh, Hữu Đức, Ninh Phước, Ninh Thuận/15C末/不詳

レンガを使った最後の施設。毎年カテ祭り(豊稈祭)が行われる。丘上式伽藍。1主堂型



18. ボー・ダム Pô Dam

Tuy Tĩnh, Phong Phú, Tuy Phong, Ninh Thuận/9C初頭/不詳

丘の中腹のテラスに主祠堂と5基の小規模な副祠堂が残る。丘上式伽藍。1主堂型



19. ボー・ハイ Phú Hải

Phú Hải, Phan Thiết, Thuận Hải/8C半ば/不詳

フォー・ハイとも呼ばれる。南シナ海に面して3塔が残る。丘上式伽藍。1主堂型

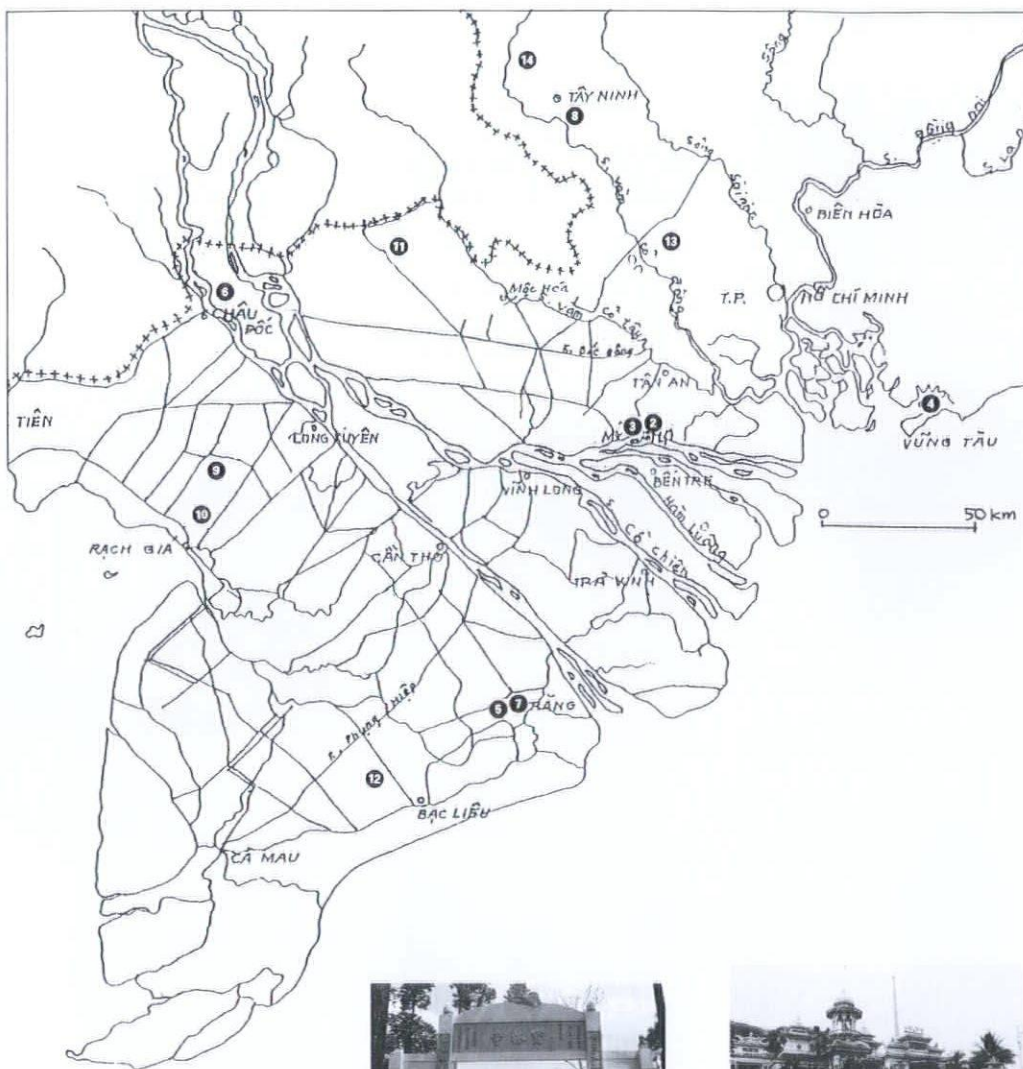


20. チャンパ彫刻博物館 The Museum of Champa Sculpture, Da Nang

Đà Nẵng, Quảng Nam-Đà Nẵng/
1915~16年/Pelaval & Auclair

7世紀から15世紀までのチャンパ彫刻を300点以上展示した専門博物館

凡例
現名称
所在地 / 竣工年 / 設計者
解説



①：ダラツ市内 (p.110 地図参照)



1. パレス2、パレス3 Dinh 2, Dinh 3
Dà Lạt, Lâm Đồng / 1933—1938年

パレス2はフランス植民地時代のフランス総督の邸宅。パレス3はヴェトナム最後の皇帝バオダイの別荘。ともに、1920—30年代のヨーロッパ建築の影響を受けている。



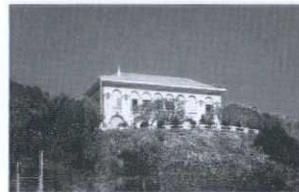
2. 永長寺 Chùa Vinh Trạng
Mỹ Tho, Chợ Gạo, Tiền Giang

14世紀はじめに創建されたと伝えられている。現在の寺は1894年に再建されたもの。伝統的な要素と西洋建築の要素が合体した寺院。寺の前には庭園がある。南部で最大規模の寺院である。



3. 寶林寺 Chùa Bửu Lâm
Mỹ Tho, Tiền Giang

1803年創建。1905年に修理。
この寺所蔵の木版や印が有名。



4. ホワイトパレス Bạch Dinh
Vũng Tàu, Bà Rịa - Vũng Tàu / 1889年 / 不詳

フランス植民地時代のフランス総督の別荘。その後、南ベトナム政府時代の大統領が使用。現在は、ブンタオ沖の沈没船から引き上げられた17世紀の中国陶磁器を展示する博物館になっている。
参考文献：博物館解説書



5. クリアン寺 Chùa Kleang
Sóc Trăng, Sóc Trăng

1533年創建。その後、部分的に修復。
クメール族の寺院。タイ国仏教の影響を受けている。3層の屋根をもち、ガルダ像を配す。



6. 西安寺 Chùa Tây An

Núi Sam, An Giang / 1847年 / 不詳

1847年『大南一統誌』の記載による。1960年に補修。

たいへん独特な建築様式で、このタイプに属するものはベトナムで他にない。それは、門までの階段が多く、また中央にひとつの門と両側にふたつの門がある。また、丸天井の尖塔があり、これはイスラム教の影響をうけている。中央門に観音像がある。



7. ゾイ寺 Chùa Dơi
Sóc Trăng, Sóc Trăng

16世紀の創建と伝えられる。
クメール族の寺院。本来はマートック寺と称したが、周辺にたくさんの蝙蝠が棲息しているため、この名がついた。寺所蔵のさとうきびの葉に書いた教典は貴重な資料。

8. カオダイ教寺院
Tòa Thánh Cao Đài

Tây Ninh, Tây Ninh / 1933—55年 / 不詳

カオダイ(高台)教の総本山。1920年頃、伝統的な混合信仰にキリスト教の道徳律を取り入れて創始。極彩色の聖堂と、ヨーロッパ風の塔、イスラム寺院風の礼拝場があり、また仏陀像のほか、孔子、老子、キリスト、シバ神像まで安置する。

9. オクエオ遺跡 Di tích Ốc Eo

10. ネンチュア遺跡 Di tích Nền Chùa Tân Hiệp, Kiên Giang

AD270—AD480 (放射性炭素分析)
宗教建築遺跡。1942年に発見、1982年に発掘調査。長方形で、長さ25.60m、幅16.30m。基礎は石とレンガ造り。身部は既に破壊されている。砂岩製のリングが出土。現在まで知られているオクエオ文化期の最大の宗教の建築遺跡。

11. ゴドン遺跡 Di tích Gò Dòn Dức Hòa, Long An

1967、1988年の発掘調査でラテライト、レンガ、砂岩で造られた遺構を検出。主祠堂、副祠堂などかなり、シヴァ神像、ガネーシャ像、ドラパーラ像、リング、ヨニなどが出土。ヒンドゥー寺院であるが、細かな年代比定はこれから。



12. ヴィンフン塔 (塔形祠堂) Vinh Hưng

Vinh Lợi, Minh Hải

周囲で892年の石碑発見。発掘調査で得た木柱の放射性炭素14Cでは928±45B.P.

1988 / 1990年の調査の時、入口付近を発掘調査し、レンガによる基礎と柱穴を確認し、一部に木柱が残存していた。調査当時はチャロン塔あるいはルックヒエン塔と呼ばれる。残存高は9.30m。平面形は長方形で、一辺が3.6m内外。レンガと一部に石造り。この塔は前アンコール期やアンコール期のもので様相が違い、引続き研究の必要がある。オクエオ文化以後の塔である。



13. ビンタイン塔 (塔形祠堂) Binh Thanh

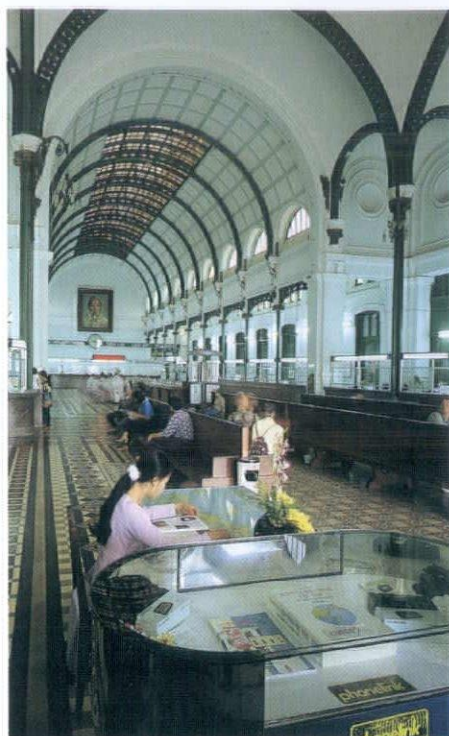
Trảng Bàng, Tây Ninh

紀元8世紀以降と考えられている
地元民はチャム塔とも呼んでいる。残存高約7mで、レンガ造り。平面形は方形(6m×5.6m)で、東に入口部をもつ。

14. チョップマット塔 (塔形祠堂) Chòp Mạt

Tân Biên, Tây Ninh

紀元8世紀頃
1909年にバウマンが報告。塔の半分ほど崩壊。1988年に周囲の発掘で別の建物遺構が検出される。



中央郵便局

ベトナムの都市と建築 5

ホーチミン

T.P. Hồ Chí Minh

東京大学生産技術研究所
藤森研究室

動き出したベトナム最大の都市ホーチミンシティ

大田省一

ホーチミン・嘉定・サイゴン

現在ホーチミン市と呼ばれている街は、ベトナム戦争まではサイゴンとチョロンという別々の街であった。特にサイゴンは、南ベトナムの首都として我々の耳にも馴染んだ名前である。

元来、この地はクメール人の支配下にあり、サイゴンは「ブレインコール」と呼ばれた交易場であった。これがベトナム語風に訛って「サイゴン」という名になったといわれている。中部ベトナムから進出してきた阮氏が、カンボジアの内紛に乗じてブレインコールを占領したのは1698年のことである。このときには「嘉定」と改名された。18世紀末には戦乱を逃れた華僑が大挙して移住し、中華街を形成した。これが「チョロン」の始まりである。チョロンとは、ベトナム語で「大きな市」の意である。

1802年、阮朝がフエを都として創業したが、北部ハノイの北城総鎮とともにサイゴンには嘉定城総鎮が置かれ、重要な支配拠点とされていた。1790年には、他の拠点都市と同様に幾何学的ヴォーバン式の城塞が建造されている。

フランス支配の時代

東南アジア海域への進出を狙っていたフランスは、1859年にサイゴンを攻撃し、続いて開港宣言をする。1862年には南部ベトナムがフランスに割譲され、直

轄植民地コーチナとなった。

サイゴンは、以後フランスによる統治の中心地となる。1861年には軍の技師コフィンによるプランが立案されたが、この時点で2500ha、人口50万人を想定していて、すでに将来にわたってここをベトナムでの拠点とする意図があったようである。

軍政下の現地最高指揮官であるボナール提督は、コフィンのプランを下敷きしつつ、単純なグリッド状街路に修正して土地区画を決定している。サイゴン川岸には商業港がつくられ、これに面してロータリーもつくられた。旧城塞は濠を埋め立てられてフランス軍用地となり、施設の整備が進む。植物園と市立公園のふたつの公園を結ぶノロドム街、港からカテネット街が大聖堂へと延びて、都市の骨格がほぼ形を見せてきている。

建築物は開港後、しばらく木造バラックが使用されていた。提督の官邸ですら、シンガポールから運んだ木造プレハブだった。しかし1866年、まだフランス人の入植がほとんど進んでいない頃から、サイゴン初のボザール卒建築家ジョルジュ・レルミットが、インドシナ総督官邸と大聖堂のふたつのモニュメンタルな建築を設計するために呼ばれている。プランはすぐに提出されたが、政府はその贅沢さに難色を示し、工事はなかなかはかどらなかった。総督官邸は1873年に完成したが、大聖堂の方は一旦断念され、結局、コンペを行い、1875年にパリ在住のジュール・ブラールの案が採用される。同じ年には政府建築局長としてアルフレッド・フォーローが着任する。彼

によって、裁判所、税関、コーチナ総督官邸等の建築が完成する。サイゴンの市庁舎もまた、贅沢な設計案が拒否されて建築家も交替させられ、1898年になってようやく着工される有り様だった。

このようにフランスによる都市計画は、都市を派手な建築物で装飾しようという意図ばかりが先行し、実態が伴っていなかったのである。フランス本国の建築をそのまま移植することに当局が腐心し、サイゴンを如何にヨーロッパ化するか、ということに力が注がれていたのだ。

政府が財政難である傍らで、サイゴンはメコンデルタの米の積出港として繁栄し、都市ブルジョアジーが育っていく。ポール・ドゥメール総督がインドシナ連邦の政治機構を整備し、ハノイが首都としての地位を占める一方で、サイゴン・チョロンは経済の中心地として君臨し、インドシナ最大の都市となっていた。

サイゴン都市計画

豊かな経済力に支えられてサイゴンの開発は進み、ボナールのプランを下敷きしながらも堂々たる景観が出現していた。かつての運河を埋め立てることで幅の広いブルバールが通り（ボナール街、ソム街、カルネル街）、そのアイストップには市庁舎や劇場が置かれていた。通りには並木が植えられて、都市公園も備えた豊かな環境を演出していた。一方、



インドシナ総督官邸



コーチナ総督官邸



サイゴン郵便局
SD9603
114



歴史博物館

米の輸出を手掛ける華僑が多かったため、中華街チョロンも賑わいをみせていた。

しかし、都市の規模が大きくなると問題も生じてくる。3本の大通りはビスタに拘ったために通過交通を十分に捌けず、幹線道路としては機能しきれていなかった。港湾の拡張の必要性も生じ、人口も増えて混雑が激しくなっていた。都市の全体を見据えた計画が必要になっていたのである。

インドシナに都市計画担当部局が創設されるのは、1921年になってからのことである。エルネスト・エブラールがインドシナ連邦の主要都市のプランを立案したが、サイゴン・チョロンの計画も彼が手掛けている。1923年に立案された計画のなかでは、サイゴンとチョロンはひとつの都市圏として認識されている。サイゴンはフランス人主体の街、チョロンは華僑主体の街として別個の存在ではあったが、その実は密接な関係を持っていた。それがプランの上に反映されることとなった。まず、サイゴンの拡張計画が考えられた。市街地の内陸部への伸展を見越した街路網計画をつくり、駅を移設することで空地を増やし公園の整備も行なって都心の密度を下げようとした。サイゴンでは500ha、チョロンでは750haの公園が計画された。港湾施設の整備拡張とともにカインホイ地区（シノワ運河の対岸）には工業地区が大々的に建設されることになっていた。

1931年には両市は合併し、総人口40万人を数えた。しかし、ヨーロッパ人はそのうち1万人程度を占めるにとどまっていた。華僑やベトナム人が人口の大半を占め、特に下層労働者には深刻な居住問題があったが、そのようなことはエブラールのプランにはほとんど反映されることはなかった。

経済都市が世界恐慌から逃れることは不可能で、エブラールの都市計画が実現に移されるまでには、さらに時間を要することとなる。恐慌の痛手から立ち直った頃、再度都市改良の気運が生じる。これを指導したのは、都市計画中央委員会のセルッティである。サイゴン市街は北側にスプロールし、人口増に対処する必要があった。この時には50年後の人口を100万人と想定していた。1939年には、鉄道駅の

移転、現地人労働者層のための居住地、地方との連絡道路等が検討されている。都心の再開発のために、依然として広大な敷地を占めていた軍施設との用地交換が実行されたほか、街路の延長、さらに既存街路を接続して混雑を解消するために、市庁舎を取り壊してカルネル街をテーブル通りまで延長する案もあった。チョロンでは都心の街路（ナンシー通り、フィボンホア街）にグリーンベルトを作ることになった。

第二次大戦中は港湾施設、植物園が空爆される等の被害を出したが、都市計画は続けられた。レオ・クラストが担当した計画は、駅の移転とカインホイ地区港湾開発を主眼としており、エブラールのものと共通している。

サイゴンの建築

サイゴンでは、主要建築物は新古典主義で飾られていた。30年代に入ってもこの流れは変わらず、インドシナ銀行がコロネードを前面に押し出した姿を見せている。同じインドシナ銀行の、同年代のハノイでの建築がモダン・デザインだったことは、対照的である。また、ハノイで流行したインドシナ様式の建築は、サイゴンでもプランシャール・ドゥ・ラ・ブロス博物館が顕著な例として挙げられる他、サイゴン中学校がエルネスト・エブラールによって設計されている。しかし、ハノイほど広範な影響を窺うことはできない。

この時点までは、サイゴンの建築界は保守的だったといえるが、ここに新しい流れをつくったのは、都市計画にも携わったレオ・クラストである。モダニズムをベースとしながらも、熱帯の気候に対応するために通風用のグリルを設置したり、深い屋根を載せたりした。サイゴン総合病院やチョデュイ学校、ラルン・ボネル現地人病院等が彼の設計である。同じく熱帯植民地の建築の創造を目指したエブラールが、文化面での表現が目立ったのに対し、時代背景の違いか、それとも土地柄の違いか、クラストの

ものは機能面での追求が中心である。

南ベトナムの首都

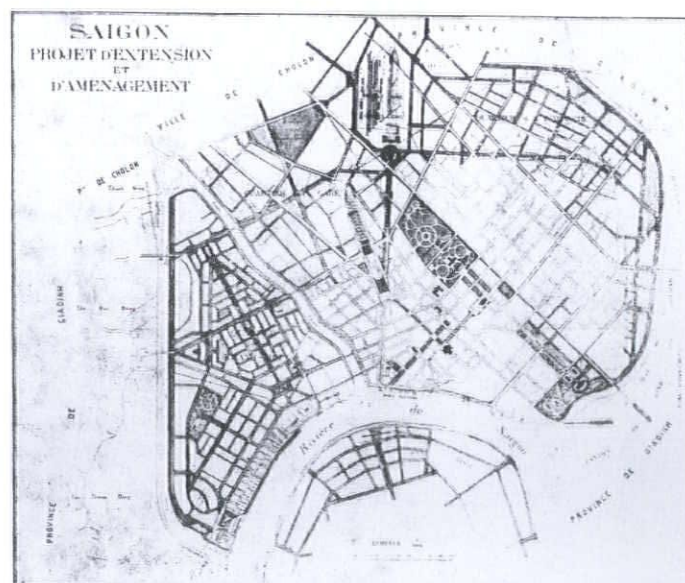
第二次大戦が終了しても、ベトナムには完全な平和は訪れなかった。国土は遂に二分されることとなるが、サイゴンを中心とした南部は、メコンの米の利権を守ろうとする都市ブルジョアジーを背景に資本主義政権が布陣した。1954年のジュネーブ協定の後はベトナムの南北分断が確定し、サイゴンは南ベトナムの首都となる。サイゴン市劇場は国会議事堂となり、インドシナ総督府官邸は大統領官邸となった。国土は至る所戦場となるが、サイゴンだけは繁栄を続ける。アメリカ軍将校向けにヴィラ建築が改装され、商業資本による建て替えも大量に行なわれた。大統領官邸は爆撃を受けて大破したが、1962年からベトナム人の手で再建される。日射を防ぎながら風通しを良くするために、ファサードの工夫が見られる。

サイゴン川の対岸にまで迫ったベトコン軍が、その大統領官邸に戦車で入城し、サイゴンを「解放」したのは、1975年のことであった。統一後は、サイゴンの名は植民地支配、資本主義の垢にまみれているものとして、「ホーチミン市」と改名された。資本家層への取り締まりが行われ、街は灯が消えたようになったが、ドイモイ以降は再び活気を取り戻し、街には高層ビルも建ち始めている。今後は、市街地再開発プロジェクトとともに、郊外の開発計画も国際コンペで決定し、ここ数年で大きく変貌を遂げられると思われる。

●おた・しょういち

参考文献

- ・桜井由紀雄編『もっと知りたいベトナム』、弘文堂
- ・Ernest Hebrard, "L'urbanisme en Indochine," L'architecture aux colonies, La Charité-sur-Loire, 1935
- ・Leo Craste, "Urbanisme et Architecture en Indochine," L'architecture d'aujourd'hui, Sept. Oct., 1945
- ・Gwendoly Wright, "The Politics of Design in French Colonial Urbanism," The University of Chicago Press, 1991



E.エブラールのサイゴン都市計画



サイゴン総合病院



統一会堂

現在のホーチミン市の市街地は、サイゴン川の西岸に広がり、ベンゲ川（旧シノワ運河）に沿ってチョロン地区まで伸びている。フランス時代の市街プランが現在の都市構造の根幹を成していて、統一会堂と植物園を結ぶレズアン通りを基軸にグリッドを基本とした街区が広がる。第二次大戦後は郊外の開発が進められたが、中心部の構造には手が加えられなかったため、現在でも植民地時代の様子が色濃く残っているのである。

建築では19世紀に都市の体裁を整えるために、ボザール出身の建築家によって公共建築がつくられたが、この頃ののものには見るべきものが多い。グエンフエ通り、ドンコイ通りやサイゴン川沿いに多く分布している。その後も適宜、建築作品が登場しているが、ハノイのように大きな動きは生じていない。一般の技師が手掛けた実用的建築物が街の大部分を作り上げているのである。統一まではさほどの断絶もなく建築活動が続いたため、モダニズムの流れを受けたものが少なくないのも特徴として挙げられるだろう。

川沿いの地区には元来町家が建ち並んでいた所が多いが、商業活動も盛んであったため、南ベトナム時代に盛んに開発が行われている。3、4階建ての連続家屋が見られるが、そこには東南アジア都市の70年代を凍結した姿がある。この時代には公共建築や邸宅建築の新築は思いのほか少ないが、改造はかなり行われている。ドイモイ後にはあらゆる所で増築が行われているが、このような、市民の生活欲求が直接に反映された姿も興味深いものである。

現在に至るまで原型を保つ建築は少ないが、一方で近代建築の保存措置がかなり進んでおり、公共建築の主要なものはその美しい姿を取り戻している。これらの建築は、変わらない姿を見せることで、かえって社会意識の激しい動きを表現している存在である。（大田）



作図＝津村泰範





凡例
現名称
旧名称
所在地/竣工年/設計者



3. ホーチミン市税関
Hải quan TP. Hồ Chí Minh
サイゴン税関
21 Tôn Đức Thắng/1887年
/アルフレッド・フォーロー

サイゴン川に面した、グエンフエ通りとハムギ通りの交差する地点に建つ。アーチの連続するファサードはアジア開港地の商館建築を想わせるが、ペランダは付いていない。



4. コンチネンタルホテル
Khách sạn Continental
コンチネンタルホテル
132-134 Đồng Khởi/1880年/不詳

旧サイゴンで最高の格式を誇ったホテル。市場前の広場に面した市街中心部に立地する。中庭を囲むようにつくられた建築は、初期の商館建築を大型化したもの。



1. ホーチミン市人民委員会
Ủy ban nhân dân TP. Hồ Chí Minh
サイゴン市庁舎
86B Lê Thánh Tôn/1908年
/フェルナン・ガルデス

市庁舎は当初中国人建築を使用していたが、1871年に市政会が改築を決定。しかし予算規模を超える物であったため工事は中止され、1898年に設計変更してようやく竣工された。アンピール様式の装飾を全身にまとった姿は当初から評判が悪く、グロテスクと評されていた。両翼は後に増築されている。



2. 会計局
Kho bạc nhà nước TP. Hồ Chí Minh
会計局
37 Nguyễn Huệ/不詳/不詳

グエンフエ通りに面した公共建築。中央にホールを取り、両翼を伸ばしたE型の平面を持つ。平坦なファサードは間延びした印象を与える。現用途のまま修復作業を行うことが検討されている。



5. ベトナムハウス Việt Nam house
事務所
93-95 Đồng Khởi/不詳/不詳

商館建築には珍しくパラディアン・ウィンドウとピラスターでファサードをつくっている。現在は美しく修復され、ホーチミン市で、二を争う人気のレストランとなっている。



6. マジェスティックホテル
Khách sạn Majestic
マジェスティックホテル
1 Đồng Khởi/不詳/不詳

サイゴン川に面した大型ホテル。各部屋にはバルコニーが張り出している。ピラスターを付けた古典系を基本としながら、1階外壁やコーナーのカーブに、アールヌーボーの曲線を活かしたデザインが見られる。



7. リバーサイドホテル
Khách sạn Riverside
第一区警察署
18 Tôn Đức Thắng/不詳/不詳

1階をルスティカ仕上げにし2、3階にイオニア式柱頭を持つピラスターを通して、中央にペディメントを載せる新古典建築。ファサードのレリーフが見事である。外壁は濃淡のベージュで塗られている。現在は海事会社とホテルが入居している。



8. フランス海軍 Hải quân
ベトナム海軍
Tôn Đức Thắng/不詳/不詳

3階のペランダ建築で柱には鎧の装飾を付けている。旧サイゴンのペランダ建築では最高のもので、保存状況も良い。



9. 中央郵便局 Bưu điện Thành phố
中央郵便局
2 Công Xã Paris/1891年
/アルフレッド・フォーロー

アンピール様式の公共建築。ファサードには19世紀フランスの著名人の名を記したレリーフが飾られている。中央ホールはガラスドームの見事なものだが、熱帯の気候に適合せず一部取り外されている。



10. サイゴン大聖堂 Nhà thờ Đức Bà
サイゴン大聖堂
Núi Tôn nghiêm/1880年
/ジュール・ブラール

総督官邸とともにジョルジュ・レルミットが設計するはずだったが、当局との交渉が折り合わずサイトプランのみで取り下げられた。そのため1875年に国際コンペでデザインをやり直して完成された。ロマネスクの外観にゴシックの内部ホールという構成を見せる。尖塔は1894年の増築。1942年に通風孔を穿っている。



11. サイゴン劇場 Nhà thờ Đức Bà
市劇場
7 Trương Lam Sơn/1895年
/ジョセフ・ヴィクトル・ギチャール

マンサード屋根の新古典建築。正面エントランス上部は半球ドームをふたつに割った形をしている。南ベトナム時代は国会議事堂として使用されていた。近年は何度も塗り替えられているが抜本的な修復は行われていない。



12. 革命博物館
Bảo tàng Cách Mạng
コーチシナ総督官邸
64 Lý Tự Trọng/1890年
/アルフレッド・フォーロー

コーチシナ（南部ベトナム）は直轄植民地であったため総督が派遣されていた。イオニア式オーダーによるコロネードが圧巻である。正面中央の車寄せは後に増築されたもの。



13. ホーチミン市人民裁判所
Tòa án nhân dân TP. Hồ Chí Minh
サイゴン裁判所
131 Nam Kỳ Khởi Nghĩa/1884年
/アルフレッド・フォーロー

旧総督府に隣接した所に位置する。コロネードにペアカラムを用いている。中央ホールの大階段も壮麗である。



14. 第2児童病院
Bệnh viện Nhi Đồng 2
グラル病院
14 Lý Tự Trọng/1865年/不詳

現存する中では、ホーチミン市内最古の植民地建築の一つ。煉瓦造寄せ棟屋根の躯体の周りに鉄製のペランダを作っている。通風に配慮してペランダには十字型の孔が開けられ、レース状のスクリーンようになって見た目にも軽やかである。95年に修復工事が行われて、その姿を後世に伝えることが可能になった。



15. ベンティン市場 Chợ Bến Thành
中央市場
Lê Lợi/1914年/プロサール&ミュビン

正方形平面の大型建築物。現在でも市内最大の商業建築である。正面に時計塔を持つ。魚や牛などの、扱われている品目を表したレリーフがファサードにある。1910年代の建設だが、すでに装飾的な趣はない。



16. サイゴン病院 Bệnh viện Sài Gòn
サイゴン総合病院
Lê Lợi/1940年代/レオ・クラスト

サイゴンの都市計画にも携わったレオ・クラストの設計。降雨に対処するための寄せ棟屋根、通風・遮光に配慮したルーバーの採用等、サイゴンの気候を考慮した設計がなされている。彼以降、このルーバーはサイゴンで一般化している。



17. 国立銀行
Ngân hàng nhà nước Việt Nam
インドシナ銀行
17 Bến Chương Dương/1930年
/ジョルジュ・トロロフ

かつて植民地経済を牛耳った銀行のインドシナでの本拠地。新古典の堂々とした建築で、列柱のファサードは80mに及ぶ。時代相を反映して直線的な造形になっている。同年完成のハノイの店舗がモダンデザインを基本としていたことを考えると、その対照が興味深い。



18. 国立銀行
Ngân hàng nhà nước Việt Nam
チャータード銀行
9 Bến Chương Dương/1934年
/H.R.レーン

旧インドシナ銀行に隣接する銀行建築。こちらにも列柱のファサードを持つ。頂部にはバルメットの代わりにペディメントを載せている。



19. ホーチミン記念館
Nhà lưu niệm Bác Hồ
サイゴン港事務局
1 Nguyễn Tất Thành/1863年/不詳

ベンゲ運河の対岸にあるかなり古い形態を残す建築。入母屋屋根の周りに不完全な形のベランダが作られている。ホーチミンがここから祖国解放運動のためフランスに渡航したことに因んで、記念館として残されている。開港期を知る貴重な遺構。



20. 美術博物館 Bảo tàng mỹ thuật
フイボンホア会
97A Đức Chính/不詳/不詳

事務所建築では規模の大きい部類である。軒下の曲線的造形が目目を惹く。棟飾りも装飾的である。現在は美術館に使用され、手入れも行き届いている。



21. 歴史博物館 Bảo tàng lịch sử
フランシール・ドゥ・ラ・ブロス博物館
2 Nguyễn Bình Khiêm/1929年/不詳

サイゴンでは数少ないインドシナ様式の建築。屋根の形態はベトナム建築の直接的な模写であるが、全体的に現地の伝統と西洋の融合を意図した跡が窺える。建物の前にはブロスの胸像が今も残る。



22. レーフォンホン高校
Trường phổ thông trung học Lê Hồng Phong
リセ・ベトラス・キー
235 Nguyễn Văn Cù/1912年/不詳

ベランダ建築の校舎が中庭を囲むように配置されている。正面ポーチは入母屋屋根の時計塔が付属している。渡り廊下は広く快適な空間となっている。



23. ホーチミン総合大学
Đại học Tổng hợp TP. Hồ Chí Minh
サイゴン中学校
An Dương Vương/1926-1928年
/エルネスト・エブラール

エブラールのサイゴンでの作品。屋根の深いインドシナ様式。ハノイのインドシナ政府財務部とよく似たスタイルである。現在は増築も多く、状態は概して良くない。



24. マリー・キュリー高校
Trường phổ thông trung học Marie Curie
女子高等学校
159 Nam Kỳ Khởi Nghĩa/不詳/不詳

サイゴンの学校建築の代表例。1ブロックを占める広い敷地を持つ。木造架構の屋根を載せている。入植期の公共建築の系譜に属するが、アーチの色を変える等、装飾への意志が表れている。



25. パスツール研究所
Viện Pasteur TP. Hồ Chí Minh
パスツール研究所
167 Pasteur/不詳/不詳

市街北部、フランス時代の市街地の外れに立地する。寄せ棟屋根の建物が3棟、庭を囲むように建っている。正式な建築家の作品ではないが、都市施設として重要。保存状況も良い。解放後、各種名称から多くのフランス名が駆逐される中で、パスツールの名は、民生への貢献が評価されて現在も残っている。



26. 統一会堂
Hội trường Thống Nhất
南ベトナム大統領官邸
Nam Kỳ Khởi Nghĩa/1962年
/ゴヴィエトチュエ

もこの地にはインドシナ総督官邸があったが、爆撃により破壊され、1962年にベトナム人の設計で再建された。現在は賓客接遇の他は一般に公開されている。通風と遮光に配慮してファサードにはスリットが細かく入っている。



27. サイゴンフローティングホテル
Khách sạn Saigon Floating
1A Mê Linh Sq.

オーストラリアのドックで建造された。ゴールドコーストで使用された後、ホーチミン市へ回航され、サイゴン川岸に係留されて営業している。その名の通り川面に浮かんだ水上建築。



28. ビンタイ市場 Chợ Bình Tây
チョロン中央市場
Hậu Giang/1930年/不詳

チョロンの中央市場。回廊を正形状に回している。インドシナ様式の影響を受けて伝統建築の形態を写し、時計塔も寺院の楼閣のようである。中華街にあるため棟飾りの龍が目立つ。



29. ホーチミン市希望師範学校
Trung học sư phạm Mầm non TP. Hồ Chí Minh
修道会
4 Tôn Đức Thắng/不詳/不詳

切妻の壁面に3層にわたって尖頭アーチが並ぶゴシック建築。敷地内には礼拝堂、教室棟が並んでいる。隣接して修道会があり、キリスト教施設が多い地区である。



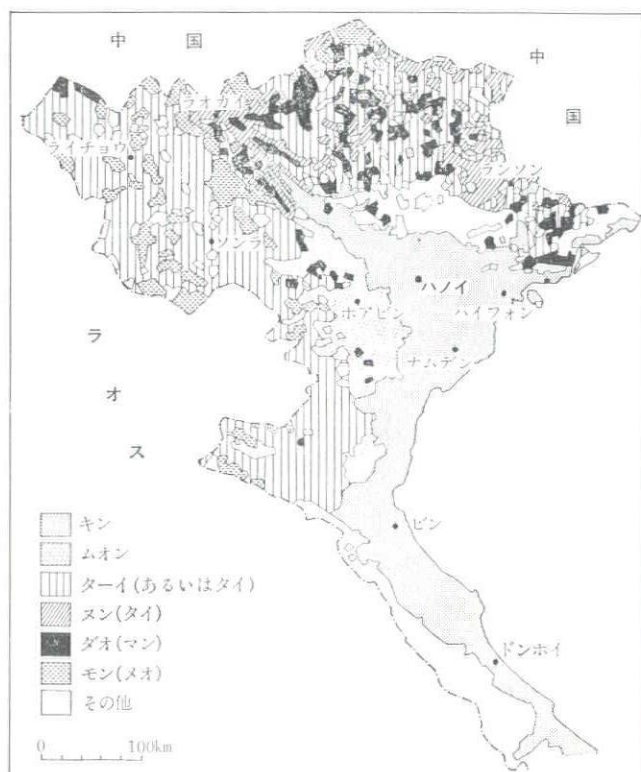
30. 給水塔 Tháp cấp nước
給水塔
Pasteur/不詳/不詳

基部を煉瓦造にしてその上部に円柱水槽をふたつ並べてトタン屋根を載せる。1階には事務所が入居している。市街北部はまだ高層ビルが少なく、特徴的なシルエットはランドマークとなっている。



ベトナム少数民族の住まい

重枝 豊



1: ベトナム北部の民族分布



2: 中南部の主要少数民族の分布

煩雑な手続きを必要とした「移動許可書」がなくなり、ベトナム国内での外国人の行動は、軍事的制約のある一部地域を除けば比較的自由になった。しかし、短期間であれ外国人が農村に居住して調査することは公式には認められていない。近郊の農村などに日帰りで行くか、特別な場合にのみ短期の集中調査が許されるだけである。この状況は外国人の研究者やNGO関係者だけでなく、ベトナム人の役人や研究者でもほぼ同様である。ベトナムの村落では外来者を長期間滞在させるシステムと経験がない。そのため他のアジア地域のように村落に住み込んで研究成果を上げることがまだ難しい。ドイモイ政策で自由になったとはいえやはり社会主義国としての管理システムは生きている。

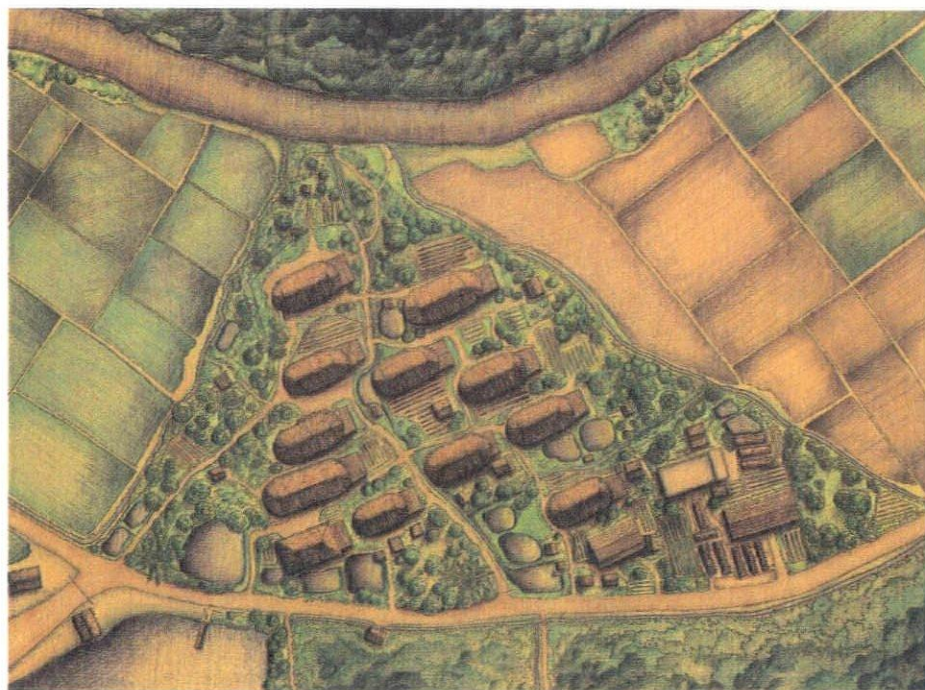
ベトナム社会主義共和国は、約33万km²の国土に6,266万人(1989年)の人々が生活している。多数民族であるキン族は平野部を中心に居住し、その他の少数民族の多くは国土の3/4を占める山間部を中心に居住している。国土は南北にチュオンソン山脈が貫き、北部は中国と接する山岳・高原地帯、紅河下流にはデルタ地帯が広がる。中部地域は海岸沿いに

わずかな平野があるだけだが、南部には肥沃なメコンデルタがあり、国土の南北に広大な穀倉地帯をかかえている。

現在、国家によって公認されている民族は54で、そのうち約9割の圧倒的多数を占めるのがキン族である。キン族は自らを文明化した民族として「京」族と称しており、歴史的に他の少数民族を冷遇してきた。一般にはこのキン族を狭義のベトナム人することが多い。少数民族はオーストロ・ネシア語族、オーストロ・アジア語族、シナ・チベット語族系の3種に大別できる。これにハノイやホーチミンなど都市部に住む華人(中国系住民)が含まれる。少数民族の多くは山間部や高原地帯に住むグループが多く、平野部にキン族と華人、山間部や中部高原に少数民族、その間の地域に両者の融合した民族や一部の少数民族のグループが居住する基本構成を示す。しかし、少数民族の多くはキン族との混血などにより、人口比率が減少する傾向がある。全人口の1割という存在であること、キン族の少数民族に対する積極的な融和政策、経済格差の広がりなどから少数民族社会は崩れはじめ、一部では社会不満も生じている。

この少数民族の建築文化を考える場合、歴史的に中国の強い影響を受けたクアンビン省以北の地域を北部、旧チャンパ王国の影響圏であったクアンチン省からビントゥアン省までの地域を中部、それより南の諸省を南部とすることができる。北部にはオーストロ・アジア語族、シナ・チベット語族が、中・南部にはオーストロ・ネシア語族、オーストロ・アジア語族が居住している。以下このように大きく区分した上で、各地域の少数民族の住まいの概要を示したい。これらの少数民族の多くは、畑作農耕、または水田耕作の他に、トウモロコシなどの雑穀、採集漁労、狩猟などに今なお従事している。住居は伝統的に杭上住居が多いが、土間形式もみられる。人口比率の高いキン族は土間式住居が基本で、低い基壇を用いる場合もあり、両者が融合、混在している地域も多くみられる。各家屋は家族単位で居住する場合もあるが、中南部ではロングハウスといわれる共同住居に住むコー族やセダン族のような事例が圧倒的に多い。村落構成に関しては各村で共同集会施設を所有している少数民族がみられる。

1, 2: 『インドシナの少数民族社会誌』菊池一雅、大明堂、1989の図を一部訂正



3: アイ村集落(チーム部分)

北部は少数民族が多く、オーストロ・アジア語族とシナ・チベット語族で比較的新しく居住した民族が多い。比較的人数の多い少数民族は平地部に住み、その他の少数民族は、山間部に住まうという棲み分けが長い歴史の中で自然に行われている。さらに山間部の少数民族の間においても、生業として平地で水田耕作を営む比較的多数の民族と、山地で焼畑農業、オカボ栽培を行う少人数の民族にわけられ、棲み分けが行われているといえる。

少数民族は、自然と密着した暮らしを営み、農業を中心とした生活を行ってきた。これらベトナムの少数民族の生活・集落・住居は、民族の固有性をよく残しており、その集住形態とともに注目すべき点が多いにもかかわらず、その実態は明らかにされていない。

ここでは、ベトナム北部で人口104万人、全人口の1.6%、少数民族の12%を占め少数民族の中では、多数をしめる民族であるタイ族について述べる。タイ(Thai)族は、タイ・カダイ語系の6分類上中央高地グループとして、他のタイ系民族と別のグループとして扱われている。(1)姓を持つこと、(2)比較的高地で水稲耕作をし、(3)アニミズム信仰が強いなどの点で一般的に言われるタイ族の特徴とは異なっている。また、その生活する地

域ごとに、言語・服装などが違うことから白タイ、赤タイ、黒タイに分けられる。

黒タイ族の集落と住居

黒タイ族の住むアイ村の集落は、山に囲まれた谷筋の道路に沿って線形に並んでおり、川幅が20m以上ある川幅の河川が流れている。集落の中心を通る道路は道幅も広く、この地域の幹線道路となっており、この集落で大きく曲がり河をわたるルートをとる。集落内は、村の共同の池、個人のため池(3世帯に1カ所の割合で、池・井戸をもつ)、河川をつなぐ水路がめぐらされている。集落には墓、池、売店、稲干し場、水車小屋などの共同施設があり、村の入口・集落の入口には門がある。この門には外部との結界として段階性がある。

ここでは73戸の世帯が生活しており、農業協同グループ(生産合作社)の単位で4つのドイといわれるチーム(各チームはそれぞれ、17戸、22戸、12戸、22戸)、9つの氏族に分かれている。その他に、村域内の空地に非農家の新住民が増えているが、村民としては扱われていない。各チームにはチーフがいて、このチーフを経験した人の中から村長が選ばれる。実際には各チーム単位が住民の認識するムラであり、協同組織としては、1つの村で

あるが、チームが村の機能を有している。これらの世帯は伝統的な高床式茅葺き住宅で生活しており、全戸が同一方向を向いている。新住民の住宅ではキン族の土間式煉瓦造住宅は同一方向を向いているが、それ以外の新住民の住宅は同一方向を向いていない。生活経験から生まれたムラの伝統的なルール(ソフト面のみならず、建築形態・集落形態といった具体的なモノまでも)が、新住民という、土地・氏族と無関係な者によって崩壊させられつつあることがわかる。

黒タイ族は農業を生業としているが、一部煉瓦づくりを職業とするものもいる。農業は米作2期作、その他キャッサバ、メイズなどの山地畑作を行なっている。村全体に河川の氾濫などの影響も多く豊かとはいえない。そのため公有林から樹木を切りだし販売することや狩猟で生計を立てている世帯もある。また、用畜家禽の売買、村有の池で養殖漁業もおこなわれている。

年中行事として、ベトナムの正月に当たるテト(旧暦1月1日)が最大のお祭りである。その他2回の米作の収穫を祝う収穫祭が村をあげて盛大に行われる。

その他には、個人の通過儀礼があるが、子供の誕生、結婚、男性70才、90才、女性100才の長寿の祝い(村(チーム中心)をあげて行う)。

婚姻関係は、村内で結ばれるが、同族近隣集落の者と結婚することもある。

●うえだ・ひろゆき/兵庫県立人と自然の博物館研究員



4: 黒タイ族の住居(アイ村)

黒タイ族の住居

すべての住居の敷地は、竹の生垣に囲まれている。これは、家畜・家禽が隣家に入り込まないためと、財産管理の目的による。敷地出入口には門がある。

住宅は、胸飾りをもつ高床式木造、茅葺き屋根のものが大半を占めている。この集落の高床式住宅はすべて、棟が北から東に20度ふれている。これは、フウ・モオ・トゥ・モオと呼ばれる占い師が決めている。

占い師はこのほか、住宅のロケーション、建設日などについてもアドバイスをする。

住宅は、入口を必ず2つもち、それぞれ男の入口・女の入口と呼んでいる。現在男女が別の入口を利用することはないが、20年くらい前までは厳格に男女の入口は分かれており、現在でもテト、結婚式、その他祝い事の際には必ず男女は入口を使い分けている。現在は平常時は女の入口がメインの入口になっている。

この住宅には平均的に3世代2世帯7～8人が住んでいる。

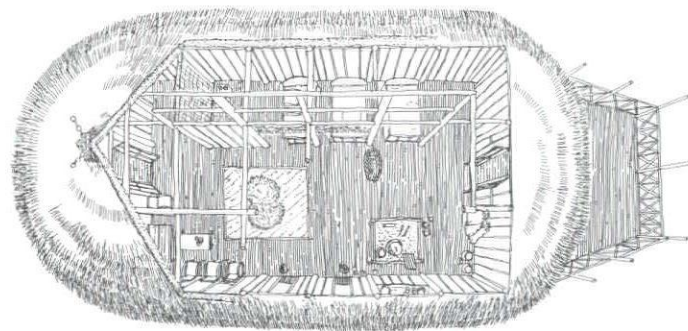
室は1室空間であるが、男の入口側に完全に閉鎖された室があり、独身の男性の寝室とされている。このスパンには夜間女性は近寄れない事になっている。その隣のスパンに神（先祖）がま

つられ、死者が死後数年、そこで寝起きしていると信じられている。この神（先祖）には死んだ日から10日ごとに供物を備え、お祈りをする。

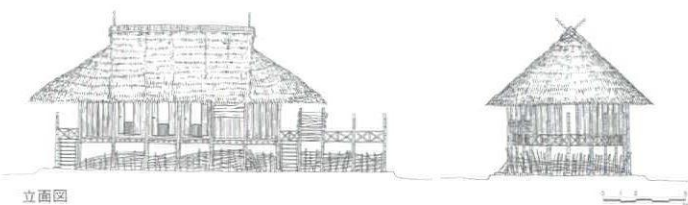
その隣が幼少の子供の寝室（寝室といっても簡単なついでで、カーテンで仕切った程度のものである）であり、順に老夫婦、その隣、女の入口に一番近いところが若夫婦の寝室となっている。独身男性が結婚した場合、女の入口側に一番近い位置へ移動する。

住宅内にトイレはなく敷地内・集落内にもない。炊事は、水を使うものは、女の入口側のバルコニー（バルコニーも2つの入口にあるが、女の入口の方がかなり大きい。）で行い、火は女の入口の2スパン目にある囲炉裏で行う。

床下は家畜・家禽小屋、農作業場としている。住宅は、20年に一度くらいの割合で新築され、屋根の吹き替えを10年ごとに行なっている。その家の若い男性が材料を山から切り出し、親戚、村の友人によって建築される。大工を雇う家も最近では増えているが大半は自力建設である。



平面図



立面図

5: 黒タイ族住居(アイ村)

中部地域の少数民族

ベトナム中部では中部都市ブレイク、パンメトゥーを中心とした地域に、島嶼部から北上して移住したとみられるオーストロ・ネシア語族系のザライ族、エデ族、チャム族、ラグライ族、チュルー族が分布している。その北方にバナー族、セダン族、カトゥー族、コー族など、また南方にムノン族、スティエン族などのオーストロ・アジア語族系の少数民族が居住している。メコンデルタには、下流部に先住民であったクメール族が、上流部には移住したチャム族が多く生活している。オーストロ・アジア語族系に属するカトゥー族、ハレー族、コー族の住まいを紹介した後で、中部と南部に住むチャム族の住まいについて記したい。

語族	民族名称	人口	住居形式	集会施設 (有無)	住居の構造	平面形式
AA	モン	558,053	家族単位	無	土間式住居	一室式
ST	シラ	594	家族単位	無	基礎式住居	分割式
ST	ハニ	12,489	家族単位	無	土間式住居/杭上住居	分割式
ST	コーン	1,261	家族単位	無	杭上住居	分割式テラス付き
AA	ターイ	1,190,342	共同居住	無	杭上住居	一室式テラス付き
AA	ムオン	914,593	家族単位	無	杭上住居	分割式
AA	トー	51,274	家族単位	無	杭上住居	分割式テラス付き
AA	ヌン	705,709	家族単位	無	杭上住居	分割式
ST	ロコ	3,134	家族単位	無	土間式住居	一室式
					杭上住居	分割式
AA	ザオ	473,945	家族単位	無	杭上住居	分割式
AA	サンチャイ	114,012	家族単位	無	杭上住居	分割式
AA	ルー/バンキウ	40,132	家族単位	有	杭上住居	分割式
AA	タオアイ	26,044	共同居住	無	杭上住居	分割式
AA	カトゥー	36,967	家族単位	有	杭上住居	一室式
AA	ジェチュン	26,924	共同居住	有	杭上住居	中廊下式
AA	コー	92,190	共同居住	無	杭上住居	片廊下式
AA	ハレー	94,259	家族単位	無	杭上住居	一室式テラス付き
AA	セダン	96,766	共同居住	有	杭上住居	片廊下式
AA	バナー	136,859	共同居住	有	杭上住居	一室式テラス付き
AA	ブラウ	231	共同居住	有	杭上住居	一室式テラス付き
AA	ムノン	67,340	共同居住	無	杭上住居/土間式	中廊下式
AA	スティエン	50,194	共同居住	無	土間式住居	(中廊下式)
AA	チュルロ	15,022	家族単位	無	杭上住居	一室式
AA	マー	25,436	共同居住	無	杭上住居	不明
AN	ジャラーイ	242,291	家族単位 共同居住	無	杭上住居	一室式テラス付き
				無	杭上住居	一室式テラス付き
AN	エデ	194,710	共同居住	無	杭上住居	分割式
AN	チャム	98,971	家族単位	無	杭上住居	一室式
AN	ラグライ	71,696	家族単位	無	杭上住居	分割式
AN	チュルー	10,746	共同居住	有	杭上住居	不明

6: ベトナムの少数民族基本構成

家族単位とは大家族の同居を含めるが、基本的には直接血のつながりのある家族や、家族の一員をいう。共同居住はロングハウス形式の大家族が一つの建物に同居する場合を指す。平面形式は一室式、分割式、片廊下、中廊下式に便宜的に分類した。杭上住居、土間式住居について

は、同じ部族の中でも混在している場合も多いが確認できたものについて整理した。AA: オーストロ・アジア語族 ST: オーストロ・ネシア語族 AN: シナ・チベット語族 人口は1989年人口総合調査による。

中部都市ダナンから8時間、悪路を進みいくつかの川を渡ってカトゥー族の集落の一つジャラー村に到着する。集落の中心にはグールと呼ばれる集会場がある(図7)。グールは本来、遠来の客人を迎えたり、祭祀に用いられる村落の共有施設である。そのため外来者があると村人は薪と食物を提供する慣習となっている。このグールの周りに個々の民家や穀物倉が円を描くように配置される。ジャラー村は川沿いに立地しているために全体が東西に長く分散している特殊例である(図14)。

住まいは杭上住宅で、矩形の平面に楕円形の屋根を架けている。高床上には一家の妻帯した女性の数だけの炉がある。通常は一枚の炉が2つの場合が最も多いが、4つの炉が並ぶ大家族が居住することもある。

生業は焼畑によるトウモロコシ、芋類、陸稲栽培が一般的で、豊かな家では高床式の穀物倉を個人で所有する(図8)。この倉は奄美地方にある四脚倉や、台湾の山地の高倉、インドネシアの穀倉などと類似した形式で、4本の柱上に円錐形屋根が載っている。この屋根の架けられた円錐形部分に穀物が貯蔵され、柱上には円形の鼠返しがある。穀物倉にはテラスが付属することが多く貯蔵した穀物の乾燥作業場として使われる。

集会施設であるグールの前には、彫刻された掘立式の木柱が立っており、チャー・ヌールと呼ばれる(図13)。これはカトゥー族が信仰する聖なる水牛の儀式の際に、生け贄にする水牛を繋ぐ柱として用いられる。このチャー・ヌールの4面には村ごとに異なった幾何学文様が描かれ、カトゥー族間ではその文様の組み合わせで、どの村のものかを識別できる。いわば各集落固有の紋章であり、情報伝達の手段でもある。

グールは、中央に太い主柱(モン・グール)が設置されている(図10)以外、基本的に村人の住まいと類似している。それを囲むように6本の側柱(トランナン・グール)で屋根を支える。このグールとチャー・ヌールを中心にして収穫祭、結婚式など様々な村の行事・儀式が執り行われる(図11、12)。その儀式の間は女性是个人的にグールの中に入る事が許されない。内部にはこれまで捕獲した猪や祭りに使われた水牛の角が飾られ、呪術的雰囲気がいっぱいである。6本の側柱の間には4本の頭置が渡され、そこには蛇、竜、亀などの彫刻が施されている。

一般の住居の構造・意匠は前述の通り、グールと同様である(図9)。平面規模の大きなものでも内部に間仕切りを設けることはなく、間取りの中央部に独立した柱を設けないことが特徴で、住居では竹材を用いることが多い。テラスを付属させる事例もある。

クワンナム・ダナン省の南に隣接するクアンガイ省は、広さ5,480km²で、山地が2,350km²を占める。省内には山間部を中心にして3部族約11万人の少数民族が居住している(1994年クアンガイ省情報・文化局資料)。ハレー族(またはチャム・ハレー族)8.5万人、コー族2.0万人、カヨン族5千人である。ハレー族、コー族は旧暦1月初頭(太陽暦2月10日頃)に、カヨン族は3月から4月にかけて祭りを行う。3つの少数民族の中で、祭祀などの民族学的な要素を保っているのはコー族で、伝統的な民家や慣習をよく保存している。祭りの時期は、ハレー族は稲作を終わった直後に、コー族は収穫の後に、カヨン族は森に焼き畑を作った後におこなうのが一般的である。クアンガイ省ではこれらの少数民族に加えて、船で2時間ほど離れたリー・ソン島にも伝統的な民家群が残る。

水の豊かな地域の水田では稲作を「直播き」とし、乾田では「苗代」を作って田植えをする。インドネシアで見られるような整備された棚田(水田)が山腹の随所に作られている。山間部ではすべてが陸稲耕作というわけではなく、水が入手可能なところでは棚田を作っている。

コー族の杭上式ロングハウス(共同住居)は急速に失われつつあり、キン族の土間式住居に建て替えられている。今では複数の家族が共同生活する古い形式のロングハウスは奥地にしか残っていない。コー族のロングハウスは建物が古いほど床高が高く、伝統的な住まいを新築する場合にも徐々に床高を低くする傾向がある。だがロングハウス内での居住様式はあまり変化していない。コー族は人口150人ほどの単位で1つの集落を構成し、家屋はすべて山の傾斜面に建てられている。斜面下手側の床を水平にせずに、床高を15~30cm高くするのが古い形式である(図16、17)。

村を訪れた客は各家に立ち寄って食事をする慣習があったが、今は廃れている。狩猟によって猪などの大きな獲物を入手したときには、解体して各家に分配して食べる。カトゥー族のように中央集会施設(グール)などを持たないため、村中が共同して会食することはない。

コー族もカトゥー族と同様に水牛祭を行うが、水牛祭で生け贄を殺す際には村人がそろって水牛と別れを惜しむ「泣く」儀式を行う。水牛祭の掘立柱は儀式の1カ月前から用意をしている。カトゥー族の場合と異なって、1年以上も前から祭事用の水牛を準備しておき、1日目に内蔵を、2日目に足など、3日目に心臓の周辺を、4日目にその他の肉を食べる。残った半分ほどの肉は、炉上で乾燥肉として保存する。祭は3日間続けられ、踊りと楽器



7: カトゥー族の中央集会施設で儀式の場でもあるグール。ジャラー村



8: 円形の鼠返しが付いた高床の倉。穀物の乾燥がテラスで繰り返される。



9: ドンと呼ばれるカトゥー族の杭上式民家。両脇に棟持柱が立つ。住まいに接してテラスが接続され、穀物の乾燥がおこなわれる。

の演奏に合わせて歌い続ける。

ハレー族の住まいも杭上住居で一つの部屋にいくつもの炉を持っており、大家族で生活する。同様にコー族も大家族制だが、建物をいくつかの部屋に分割した平面を持ち、各小部屋に一つの炉がある。ハレー族の住まいの内部は原則として1室構成だが、両側の軒下部分を合わせて、3つの空間として区分して使われる。ひとつはチンと呼ばれる家族のための軒下空間で、次が本来の内部空間で日常生活に使われるノイ、もう一つの軒下空間がプラー

と呼ばれる接客空間として用いられる。この接客用のプラーも上手と下手側に二分割され、上手を就寝のための空間、下手を食事飲食のための空間に分けている。この分類は、チンやノイでも同様である。来客はノイの中に入ることはなく、ノイの出入口は狭く開口面積は狭い。家屋の基本構造は木造又は首組で、床や壁材には細かく裂いて編んだ竹が、屋根は稲藁や茅などを用いて葺いている。

中南部チャム族の住まい

中村理恵

チャムという名の民族がいる。この人々はかつてベトナムの中部海岸地域に存在した、チャンパ王国の末裔である。ベトナムは、北部に紅河デルタ、南部にメコンデルタを抱えているため、両端に米のバスケットを吊した天秤棒に例えられる。この天秤棒の棒の部分にあたるのがチャンパ王国の領土であった。チャンパ王国は、インド文化を早くから受容した東南アジアの古代国家で、9世紀から17世紀にかけて「海のシルクロード」の中継地として栄え、特に沈香の最高級品の伽羅の産地として有名で、チャンパの伽羅は日本にも伝わっている。

ベトナム中部に住んでいたチャム族の起源は明らかではないが、東南アジア諸島の民族と同じ、マラヨ・ポリネシア系の言語の使用、風俗、習慣の類似性から、インドネシアやマレーシアに住んでいた海洋民族がその起源であろうといわれている。

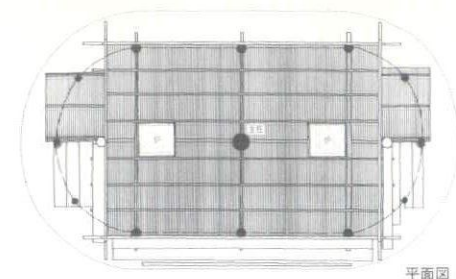
2世紀の末に建国されたチャンパは、4世紀に入ると、インドの文化や宗教を受容し、チャンパの王達はミソンというヒンドゥー教の聖域を造営した。8世紀以降「海のシルクロード」が東西を結ぶ重要な交易ルートになってくると、チャンパは東南アジア交易において、ますます重要な位置を占めるようになった。海上交易に伴い、アラブやベルシャの商人達を通じてイスラム教がチャンパに紹介された。チャンパでは9世紀末頃に、一時期ヒンドゥー教に代わって大乘仏教が信仰されたが、現在でもイスラム教がチャム族の中で生き続けているのに対し、仏教は儀礼の中に僅かにその名残を止めているだけである。

チャンパ王国の末裔たち

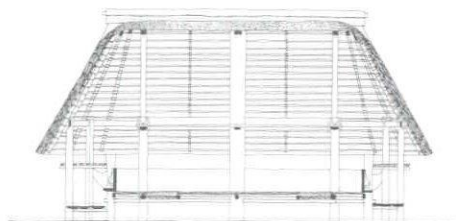
チャム族は、現在ベトナムに9万8千人ほど住んでいる。チャンパ王国の衰退期に、多くのチャムがカンボジアへ逃れたため、現在カンボジアには、10万人以上のチャム族が住んでいると言われている。カンボジアのチャム族は、ボル・ポト政権による大量虐殺の犠牲となり、多くが命を落とした。

ベトナムに住むチャム族は、地理的に中部と南部のふたつのグループに分けられる。

中部チャム族は、ニントアン省と、ピントアン省に住んでおり、人口は約6万3千人。かつての海洋の民は、今はベトナムで最も乾燥しているといわれる内陸部に閉じこめられて、主に農業によって生計を立てている。教育レベルは比較的高く、教師、医師、看護婦、

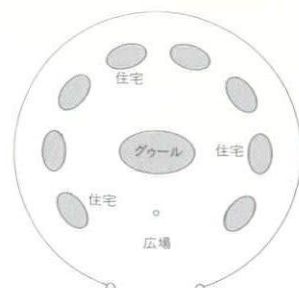


平面図

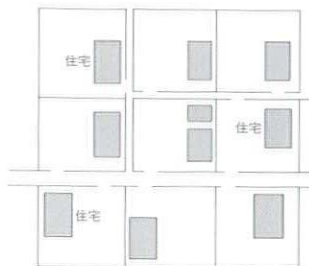


断面図

10: カトゥー族の集会施設グール (作図: 大橋智子)



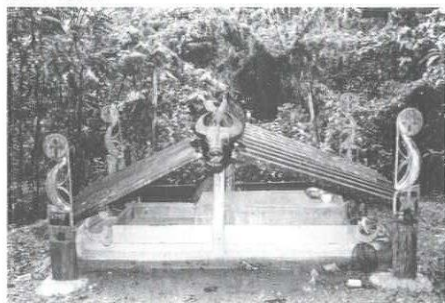
14: カトゥー族の集落概念図



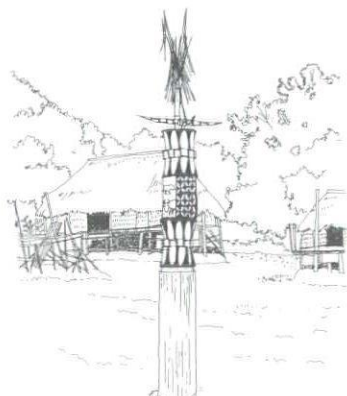
15: チャム族の集落概念図



11: グールの前でおこなわれる水牛祭。村人の代表が水牛を追い詰めて突き殺す儀式である。儀式の前には村人が総出で水牛を囲んで踊り続ける。男性は太鼓、鐘、笛の演奏、女性は民族衣装を着て踊る。



12: カトゥー族の墓。水牛と鳥がモチーフとなっている。水牛は信仰の対象として崇められている。



13: カトゥー族のチャー・ヌール (スケッチ: 大橋智子)



16: 敷地の境界に垣根をまわすハレー族の民家の配置。敷地内に別棟で高床の米倉、豚小屋が建つ。



17: ハレー族の住まいは傾斜地に配置され、下手の床を少し高くすることに特徴がある。

以上カトゥー族、コー族、ハレー族の住まいを概観した。同じオーストロ・アジア語族系に属するグループであるが、住まいの構造や生活様式には相違が多い。しかし、詳しくはふれられなかったが、水牛を神として崇める祭儀や焼き畑の際に祈禱師が行う儀式など民族・宗教面では多くの類似する伝統を残している。現在はまだ各グループについての研究をはじめた者が数名という状態で、ベトナム人研究者の調査すら制限されている。しかし、現存するベトナム各地に残る少数民族の住まいを含めた民族資料は、単に各民族の歴史を伝えるだけではなく、ベトナムという固有の国土に残る貴重な財産といえるだろう。このような意味でまずベトナム国内で各少数民族の文化が再認識されることが望まれる。

●しげえだ・ゆたか

弁護士として活躍している人々もいる。チャム族の村の小学校には、チャム族の教師が必ずいて、チャム文字を教える特別の授業が行われている。ニントアン省には、チャム文字センターがあり、省内で行われているチャム文字教育の水準向上に努めている。中部のチャム族は、さらに宗教によってふたつのグループに分けられる。ひとつは、土着化したヒンドゥー教を信奉するパラモンと呼ばれるグループで、パ・セツと呼ばれる僧侶集団に率いられ、ポ・ヤーンという神を信仰し、牛肉を食べず、死ねば火葬される。もうひとつのグループは、土着化したイスラム教を信奉するパニと呼ばれる人々で、ポ・チャルと呼ばれる僧侶集団に率いられ、ポ・アロワ（アッラー）を信仰し、豚肉を食べず、死ねば土葬される。パラモンはパラモンの村に、パニは、パニの村にというように住み分けており、両者の間の婚姻はかつては厳しく禁じられていた。両者の婚姻が可能な現在でも、その例は少ない。

ベトナム中部に住んでいるチャム族から、

「チャムブラウ」（新しいチャム）と半ば軽蔑的に呼ばれているのが、ベトナム南部、メコンデルタのアンザン省に住んでいるチャム族である。アンザン省はカンボジアと国境を接する省で、かつてカンボジアへ逃れたチャム族の子孫が、19世紀の中頃、メコン河を下ってこの地に定住した。彼らの一部は、ホーチミン市、その周辺のタイニン省、ソンベア省にも移り住んでおり、総人口は約2万人である。彼らはスンニー派のイスラム教徒で、モスクを中心にコミュニティを形成して生活している。南部のチャム族は、農業や漁業にも従事しているが、布や、古着の行商が経済活動の中心である。

中部に住むチャム族と南部に住むチャム族は、互いを区別し、同一視されることを嫌う。ホーチミン市で勉強しているチャム族の大学生は、南部のチャム、中部のチャムそれぞれ分かれて会合や集会を開いており、ほとんど交流がない。

ベトナムの少数民族政策は、少数民族の言語、

文化、伝統を保護する一方で、彼らの遅れた、非科学的な習慣を取り除き、進歩、発展を促すというものである。チャム族の中には、進歩、発展、イコール、ベトナム人化と考え、進歩、発展と文化、伝統の維持は相反するものだと思っている人が多い。本来家を受け継ぎ家を守るべき女性の中に、伝統的なチャムの家は近代的でなく不便だと、ベトナム人式の家に建て替えようとする人も増えている。若いチャム族の中には、チャム族の文化、伝統の維持や継承よりも、経済的、社会的にベトナム人に追いつくことの方が重要だと考える人もいる。都市部の大学で勉強しているチャム族の学生の中には、少数民族出身という自分の素性を恥じ、決して人前でチャム語を話さない若者もいる。ドイモイという新経済政策の中で、ベトナム人の経済発展に追いつき、かつチャム族独自の文化、伝統を維持し継承していくことは難しい。

●なかむら・りえ／ワシントン大学大学院、在ベトナム

チャム族の村落と家

少数民族であるチャム族が、彼らの言語、習慣を失わずにいる大きな要因は、彼らがチャム族の村落で共同して生活していることにある。中部のチャム族はベトナム人（キン族）との混住を嫌い、ベトナム人が集中して住む省都や国道から離れたところに村を形成する。村の周囲には水田や葡萄畑が広がって、村の入口にはたいてい小川が流れている。小川を渡って村に入ると、小枝を組み合わせた、ブロックを積み上げたりして作った堀に囲まれたチャム族の家が見えてくる。中部のチャム族は、どんなに貧しい家でも家の回りに堀をまわし、門をつくる。門には、神がいて悪霊から家人を守ってくれていると信じているためだ。

中部のチャム族の多くは、レンガとセメントでベトナム人と変わらない家を建てるようになっているが、古い木造建築も結構残っている。大方の古い家には、セメントの外壁で囲まれているので外からは見えないが、中にはいと美しい木造建築であることがある。窓や戸のサイズが小さく、部屋は薄暗い。戸や部屋の仕切り壁に、花や鳥、幾何学文様などの彫刻が施されており、優美な印象をうける。また、釘跡を見せない精緻な施工技術には驚かされる。

中部のチャム族の村が閉鎖的、孤立的なのに対し、南部のチャム族の村は、

外に対して開放的である。一般的に村は、モスクを中心にして、道路や川沿いに造られ、細長い形状をしている。チャム族の村はベトナム人の村と隣接しており、村の境界は不明瞭である。しかし、ベトナム人の家と並んで建っているチャム族の家は、一目でそれと分かる。南部のチャム族は、木造高床式の家を建てるからである。地面から家の床までは1.5mほどで、この部分は作業場や倉庫になったり、家畜を飼ったり、ハンモックを吊るして昼寝場所になったりする。

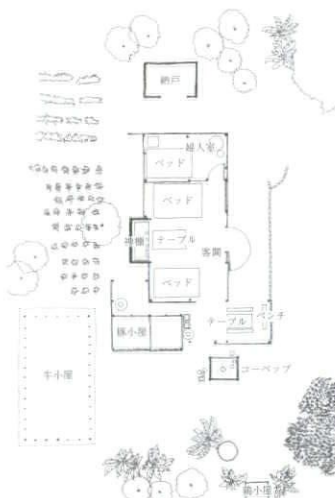
南部のチャム族の家は堀で囲まれておらず、入口が道路に面しているの、食料品を売りに来るベトナム人の行商人を、家の中から呼び止めたりする。彼らの家の内部は、家具の数が中部のチャム族と比較して少ないせいか、広々として明るい。部屋数は4室ほどで、必ずテラスが入口についている。部屋を仕切っている木製の壁には、幾何学文様の見事な細工が施されていることがある。

南部のチャム族は、家の中心の太い柱の傍らに、びんろう樹の実、ユリカの葉、石灰でつくったペーストが入っている木製の丸い入れ物を置く。これはファトリバン（柱に住む精）への供物である。ファトリバンに家人が気に入られればその家は栄え、逆に家人が気に入られなければ、その家の家運は傾くと信じられている。

チャム族にとって家とは、女性が所

有するものである。チャム族は、母系制社会を構成していることで知られている。結婚すると、夫は妻の家に移り、妻の両親と一緒に暮らす。夫婦の間に生まれた子供はすべて妻の家系に属する。南部のチャム族は、イスラム教徒であるために、母系制を失ったと思われる。男性は家から家へ渡り歩く浮遊分子であり、女性は、常に家とともにある不動の存在とされる。家は母親から娘へ、そのまた娘へと代々受け継がれていくのである。

旧ソ連で、チャム族の家のシンボリズムについて博士論文を書いたチャム族出身の民族学者、タン・ファン氏は、チャム族の家が女性の体を象徴しているという。中部のチャム族の家の構成は、入口から、客人たちを迎え入れる居間、寝室、そして、米などを蓄えておく倉庫となっている。入口から中に入ると、まず正面に2本の柱があるが、これは両手をさし伸ばして人々を暖かく招き入れる女性の姿を示しているという。寝室の屋根を支える棟木から出ている柱は、女性のあばら骨を表しており、寝室は女性の胸部にあたる。人々は女性の胸に抱かれて眠りにつく。倉庫は、お腹に食物がたまるように、米や他の穀物を貯蔵して置く所である。まさに、チャム族の家は女性そのものを具象化した存在なのである。



18: チャム族の住まい チャムトイ村



19: 台所を別棟で造ったチャム族の住まい、ミー・ヒェップ村



20: 軒が深く台所を別棟で付属させるチャム族の住まい、ソンロンソン村

ベトナム南部のオクエオ文化と前アンコール期の建築遺跡

菊池誠一

扶南国の出現と滅亡

メコン河デルタ地帯にあった扶南国(フナン)は紀元1世紀頃に成立したとみられ、東南アジア大陸部でもっとも古い国家とされる。「扶南」の語源ははっきりとしないが、古いクメール語で「山」を意味するブノムからきたという説が有力である。主要な住民は、モン・クメール系と考えられている。

中国の史書『梁書』『扶南伝』のなかにある建国神話によると、扶南の人びとはもともと裸体で、入墨をし、衣服をつくらず、柳葉という女性が王であった。あるとき扶南の南にある国の混壇という者が神のお告げによって神弓を手に入れて船出し、扶南に至ると、柳葉の部下が船を奪おうとした。混壇が神弓を射ると、柳葉は恐れて降伏した。そこで、混壇は柳葉に貫頭衣を教え、ついに国を治めるようになり、柳葉を妻とした、という。

この伝承は、インド文明の東南アジアへの伝来、あるいはマレー半島からの文化の影響のもとに国家形成がはじまったという史実を反映した説話と考えられている。

この扶南国は、現在のベトナム、カンボジア領を中心としたメコンデルタの肥沃な土地を背景とし、また東西海上交易の中継拠点として、6世紀まで順調に発展していった。都をヴィヤダブラ(カンボジア南部のプレイヴェン州)に定め、その外港をオクエオの地(ベトナム南部アンジャン省)においていた。

3世紀はじめにはマレー半島や周辺諸国を征服し、時の王は「扶南大王」と称した。225年頃には、インドのクシャーナ朝との間に使節の交換、229年には中国の呉の使者が扶南を訪れ、また243年には扶南の使者が中国を訪れるなど、活発な交流がおこなわれていた。

4世紀末になると、扶南に渡ったインドのバラモン僧が王位につき、再びインド風の文物をもたらしたという。「インド化」が明確になった頃である。シヴァ神の信仰や大乘仏教も盛んにおこなわれ、扶南王の名に「……ヴァルマン」といった形のサンスクリット名が登場するようになった。

6世紀後半になると、もともと扶南の属国であったクメール族の真臘国が勢力を強め、扶南国を圧迫するようになった。現在のラオ

スのバッサク地方にあった国である。扶南国は首都であったヴィヤダブラを攻め落とされ、そして滅びていった。

この真臘は8世紀はじめ頃、北の陸真臘と南の水真臘に分裂し、混乱に陥った。しかし、802年に即位したジャヤヴァルマン2世によって再統一され、トンレサップ湖の西北のアンコール地域に国の中心が移り、クメール帝国繁栄の基礎を打ち立てたのであった。

この9世紀から13世紀までをアンコール期、真臘国から陸真臘と水真臘の時期をあわせて前アンコール期、そしてそれ以前を扶南期(オクエオ文化)と呼ぶ。

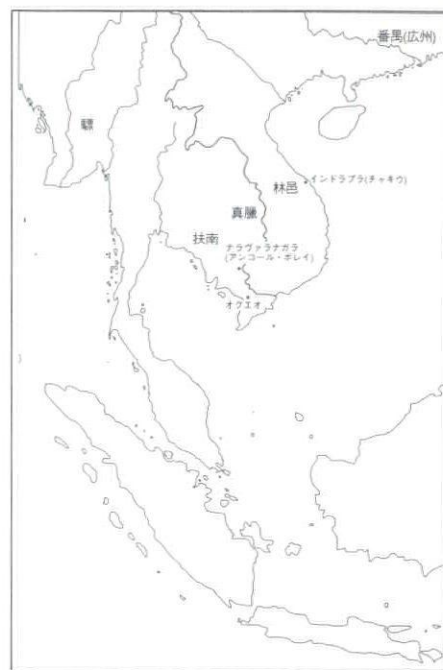
扶南国の外港オクエオ遺跡の発見

フランス人考古学者マルレーは第二次世界大戦中、メコンデルタの考古学調査を開始して扶南国の外港と考えられるオクエオ遺跡などを調査し、貴重な遺物の発見をもたらした。この遺跡はメコン河の支流バッサク川とシャム湾の間にある沖積平野に立地し、現在の海岸線から20数km入ったところにある。現在のベトナム南部のアンジャン省内である。

オクエオ遺跡は長さ3km、幅1.5kmの長方形で、4重の土盛と5重の濠が巡らされ、その中央を運河が貫流している。付近には運河が縦横に走り、あるものはシャム湾や内陸のアンコール・ボレイまでのびていたことが知られている。

発見された遺構はレンガ建築と高床建築であった。そして、出土した遺物は、土着の文化を示す遺物とともに、海上交易によってもたらされた諸外国の広汎な文物があり、また金製品や錫製品が多かった。

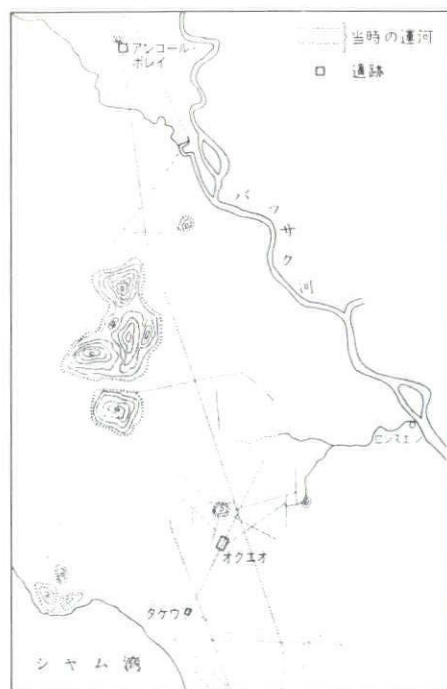
たとえば、西方文化の影響を示す遺物として、152年銘のあるローマ皇帝アントニウス・ピウスの肖像を刻した金貨とマルクス・アウレリウスの肖像を刻した金貨(紀元161-180)がある。また、装身具などの宝石細工や金細工、錫細工などの紋様や形式から、インドやそれ以西の影響が認められる。たとえば、金製指輪のなかには、インドで使用されていた文字、ブラーフミー文字と考えられる印章をつけたものがあり、またインド系の名前も認



6世紀頃のインドシナ半島



7-8世紀のインドシナ半島



オクエオ遺跡とその周辺

められる。また、遺物のなかに錫製品があるが、この地域には錫の産地がなく、おそらく材料はタイ、マライ半島からもたらされたと考えられる。

中国との交流を示す遺物に、2世紀後半と考えられる鏡片がある。ひとつは夔鳳鏡、もうひとつは方格規矩四神鏡であり、ともに後漢代の製品である。また、北魏様式の仏像がある。こうした遺物のほかに、近隣の東南アジア諸国の遺物と類似するものもある。

広汎な出土遺物から、オクエオ遺跡はインド商人の貿易基地として建設されたという説がある。時期はほぼ紀元2世紀から7世紀頃にかけてと考えられ、史書の語る扶南国と一致するのであった。

1975年のベトナム戦争終決後、ベトナム人考古学者たちがメコンデルタの遺跡調査に乗り出した。現地踏査や発掘調査を経て、オクエオ文化に属する遺跡が89ヵ所確認された。その分布は、アンジャン省14遺跡、キエンジャン省5遺跡、ミンハイ省1遺跡、カントー省7遺跡、チャヴィン省11遺跡、ティエンジャン省6遺跡、ドンタップ省6遺跡、ロンアン省25遺跡、タイニン省5遺跡、ホーチミン市2遺跡、ドンナイ省4遺跡、ラムドン省2遺跡の計89遺跡である。

これらの遺跡から、高床建築遺構や宗教建築遺構、墓跡、そして居住地などが発掘された。出土した遺物は、ホーチミン市の歴史博物館やアンジャン、キエンジャン、ロンアン、ティエンジャン、ピンロン地方博物館に展示されるようになった。そして、1995年にその研究の集大成ともいえる書物、『オクエオ文化』が刊行されたのであった。

オクエオ文化の宗教建築遺跡

オクエオ文化に属する建築遺構は、高床住居と宗教建築がある。たとえば、遺跡内で3～4m、太さは15～20cmの木杭が残っている遺構は、現在でもクメール民族が使用している高床住居と同じ種類の高床と判断されている。こうした遺構は、オクエオ遺跡をはじめ、各遺跡で検出されている。

ほかに各種の建築遺構があり、そのなかの寺院、塔形祠堂はオクエオ文化期で普遍的なものである。現在、オクエオ文化期に属する祠堂や塔形祠堂はすでに破壊され、基礎や基壇部分を残すのみである。では、発掘調査された14遺跡から、オクエオ文化期の宗教遺跡とその出土遺物の特徴をまとめてみよう。

まず、祠堂（塔形祠堂とは別の平屋の祠堂をここでは祠堂とよぶ。以下同）の平面形は

長方形、方形、その変形からなる。基壇の高さは、ゴカイチョムでは0.6m、ルウクーでは1.5mほどある。そして外面はレンガで覆い、その内側は割れたレンガ、砂、粘土をつめている。遺跡によっては、瓦の出土量が多く、瓦葺きの屋根が想定されている建物もある。

塔形祠堂は規模が小さく5～6m四方で、平面形は方形か長方形、高さは4～5mほどと推定されている。1塔、あるいは2塔の例があり、2塔の場合はどちらかが小さい。塔の周囲に濠や長方形の池がある場合、レンガ敷きの水路でもって水を寺院内に導いている例がある。塔の基礎は約1mほどの深さで掘られ、レンガや土、砂で造られている。基壇は平均1mの高さである。これらの祠堂と塔形祠堂はセットになっている場合もみられ、この時期のヒンドゥー建築の特徴的な形態を示している。

つぎに、出土遺物では貴重な発見があつた。4世紀、7世紀頃の石製ブラフマー神像、砂岩製ヴィシュヌ神像、5世紀から6世紀頃の砂岩製シヴァ神像、石製や青銅製のガネサ神像、そして砂岩製などのリング22点、ヨニ18点が発見され、ヒンドゥー教関係の遺物が多い。また、1930年代末にマルレーが発見した木製仏立像4点のほかに、アマラヴティ様式の木製仏立像片が16点、5世紀から7世紀頃と考えられる石仏像が8点発見されている。5世紀前半と考えられる青銅仏像もあり、仏教関係の遺品もある。

なお、個々の遺跡に関しては、遺跡マップ(p.112)を参照されたい。

オクエオ文化以前と以後

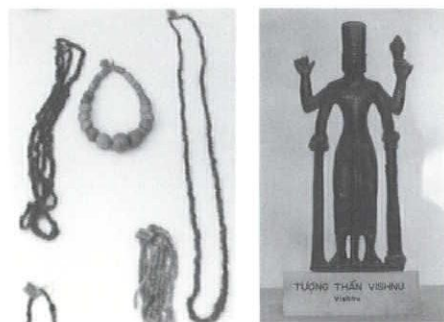
オクエオ文化、つまり扶南国がメコンデルタに成立する以前、この地域はどのような状態であったであろうか。

近年、ベトナム考古学院をはじめ各研究機関は政府要請のもと、南部地域の考古学研究を進めている。ホーチミン市の東に位置するドンナイ省では、オクエオ文化遺跡の発見はまだ少ないが、オクエオ文化の母胎のひとつとなったと考えられる遺跡の発見が相次いでいる。そのひとつが紀元前2世紀頃と考えられるゾクチュア遺跡である。豊富な青銅器鋳型と製品を伴う文化で、タイ、ラオス、カンボジアの青銅器（とくに扇形斧）との類似性が指摘されている。

また、ホーチミン市ではオクエオ文化に先行するゾンカーボ、ゾンフェト、ゾンアンの各遺跡が発見された。1994年のベトナム考古学界最大の成果と称されているゾンカーボの発掘調査では面積200㎡のなかに、310基の甕



木製仏立像（オクエオ文化）、ホーチミン市歴史博物館所蔵



左：オクエオ文化の各種装身具 右：ヴィシュヌ神像（青銅製、オクエオ文化）、ともにホーチミン市歴史博物館所蔵

棺と10基の土坑墓が検出され、副葬品のなかに瑪瑙やガラス製の玉類、金製品などがあり、次代のオクエオ文化との結びつきが想定されている。

メコンデルタ地域では、オクエオ文化成立以前に、高度な青銅器文化と豊富な副葬品をもつ社会がすでに存在し、これが扶南国成立の母胎のひとつであったことは確かであろう。

扶南国が滅亡した後、真臘国がこの地域を支配する。前アンコール期、アンコール期の遺跡はオクエオ文化遺跡の調査のなかで徐々に発見されている。たとえば塔形祠堂がミンハイ省に1基とタイニン省に2基現存している。ミンハイ省のヴィンファン塔は、A.D.892年の石碑をもち、レンガ造りによる塔が約9.3m残存している。1990年の調査で、レンガによる基礎と柱穴を検出し、その柱穴には木柱の一部が残存していた。またタイニン省のピンタイン塔はレンガ造りで残存高約7m、8世紀以降の所産と考えられている。チョップマツト塔はレンガ造りで、8世紀頃と推定されている。また、タイニン省ティエントゥアン遺跡から前アンコール期のスールヤ神像、フックチー遺跡の青銅製ナーガ像や砂岩製のリング、ヨニ、ヴィシュヌ神像、そしてロンアン省ゴチャムクイの青銅製ガネサ像の発見の報告がある。さらに、ロンアン省ゴードンでは9世紀から10世紀頃のシヴァ神像、ミンハイ省ヴィンファン塔では10世紀頃の青銅製ブラフマー神像が出土している。概ねカンボジアに近い省での発見が多い。しかし、これらの遺物を出土した宗教建築遺跡は十分に解明されたとは言いがたいのが、現状である。

長きにわたったベトナム戦争、そしてボルボト派との国境紛争があり、今ようやく、ベトナム人研究者によって南部調査とベトナム・カンボジア国境付近の調査ができるようになった。こうした調査を経て前アンコール期・アンコール期の各宗教建築遺跡の様相が徐々に浮かびあがってくるであろう。

●きくち・せいいち／宇都宮大学非常勤講師

参考文献

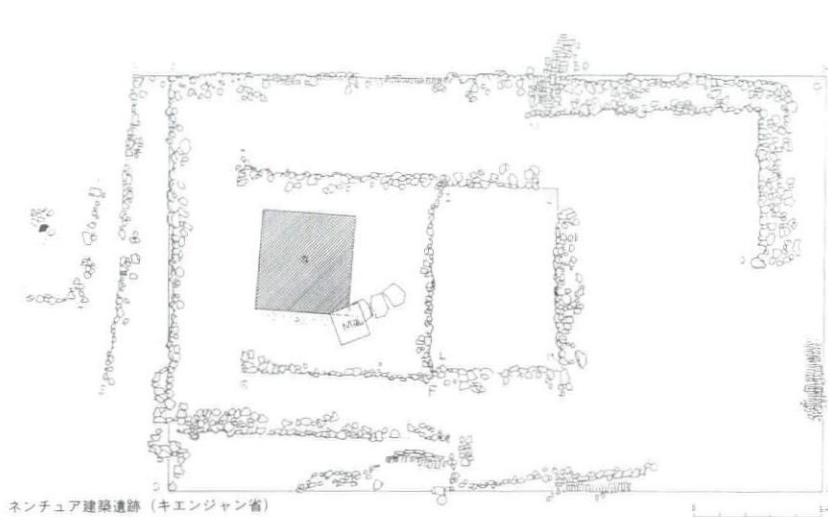
- 1:『VAN HOA OC EO』(オクエオ文化)ハノイ社会科学出版社、1995年、ベトナム語)
- 2:『VAN HOA VA CU DAN DONG BANG SONG CUU LONG』(メコン河デルタの文化と住民)、ハノイ社会科学出版社、ベトナム語本)1990年
- 3:『KHAO CO DONG NAI』(ドンナイ考古)1992年、)ドンナイ出版社、ベトナム本)
- 4:『東南アジアの民族と歴史』山川出版社、1984年)



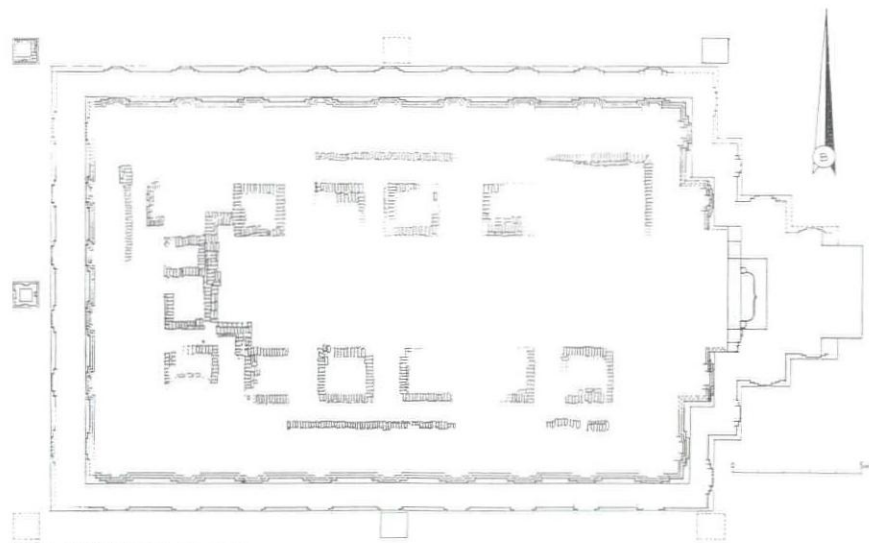
グラフマー神像 (石製、アンシャン省)



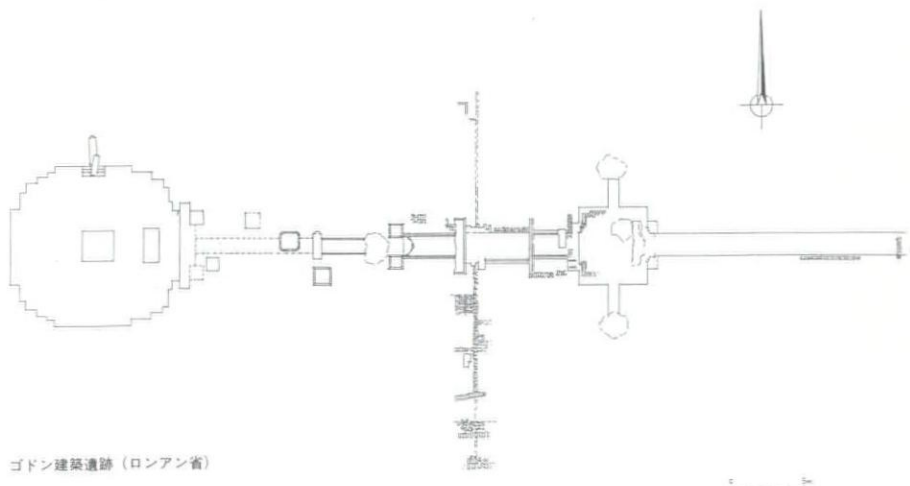
シヴァ神像 (石製、アンシャン省)



ネンチュア建築遺跡 (キエンジャン省)



ルウクーII建築遺跡 (チャヴィン省)



ゴドン建築遺跡 (ロンアン省)

ベトナムの木造架構

ハノイの金蓮寺とフエの太和殿について

中沢信一郎

はじめに

世界の建築に対して、中国伝統建築がもたらした代表的な特質のひとつに、主として軸部の接合部に用いられ、その後、多種多様な展開を遂げた斗拱形式が挙げられよう。今、中国系建築という分類を世界建築史上に持ち込んだ場合、この斗拱の存在によって分類される木造建築は、中国の他、モンゴルの一部、日本、朝鮮半島そしてベトナムという地理的な広がりの中にある。その他、東南アジア大陸部、島嶼部の処々には、チャイナタウン（華人街）が主に中国明代より断続的に形成され、寺、観、廟、会館などは、華僑と長く呼ばれた共同体の中心的な役割を果たしている。ここでは南中国に顕著な建築様式が用いられ、斗拱の発達が多分に見られる。これらは、東南アジアにおける中国伝統建築文化の拡がりを具体的に示しているといえよう。

ここでは、ハノイ市内の古刹である金蓮寺や西方古寺（図1）とフエ阮朝王宮内で最も格式の高い太和殿の平面及び断面形式を中心にその比較を試みる。また、ハノイ市内および近郊のいくつかの代表的な寺廟建築とベトナムに顕著な亭と呼ばれる建築を選定し、それらの木造架構の特質を簡単に紹介する。

冒頭で斗拱形式について触れた。斗拱は外観上、審美的な役割を十分に果たしているが、初源的には接合部として軒の長さを確保しながら屋根の重みを基壇へと伝える建築構造上大切な役割を担っている。さらに中国や日本に残っている古文献を繙くと、斗拱は部材としての役割のみならず伝統的な建築設計方法の決定要因のひとつとしても重要な概念であり、そのことから多義的な質を有するものであることが理解できる。古くから斗拱は自立した部分を形成し得る強い細部として中国系建築をその他の文明から生まれた建築と峻別し、また、特色付けているといえよう。一方、ベトナム伝統建築の際立った特色は、やや逆説的な言い回しにはなるものの、この斗拱形式の不備もしくは未発達にあるといえるのではなかろうか。ベトナム伝統建築は、柱頭に斗を載せ、十字に肘木を組み、卷斗を配して徐々に挺出していくという斗拱形式を本格的に受容しなかった分、他の中国系建築と異なる展開を遂げ、距離を置くこととなる。ベトナム伝統建築においては、主にふたつの手法が見られる。ひとつは、阮朝王宮太和殿に代表されるように登り梁を巧みに用いて母屋桁を支える架構であり、もうひとつは我が

国の大仏様の様式の典型的遺構である浄土寺浄土堂に顕著に認められる身舎-庇間の大虹梁から三重目虹梁へ至るまでの架構方法と同様の方法である。ただし後者は、ベトナム伝統建築においては母屋桁間隔が短いためにさらに虹梁を密に配した手法が取られている。しかし、ベトナムの木造建築に斗拱そのものがないわけではない。ベトナムにおいても、大仏様に顕著にみられる挿肘木の手法を用いて、自然な流れで上層の荷重を伝えていく方法も取られている。斗拱形式が未発達な印象を覚えるのは、現存する建築遺構の多くが18~19世紀を中心とした新しい時代に属しているため時代的な偏りがあり、ベトナム史全般を通して伝統建築を俯瞰する程の一次資料に欠けていることと、北属期と称される中国からの直接の支配を受けていたおよそ一千年の長い期間について、具体的な建築の形象を描くことができていないことに起因している。例えば、神光寺（図2）の鐘楼では、組物や詰組、また、それらの細部手法としての疑似尾垂木（おだるき）の他、日本の東大寺南大門の様に通肘木を前方へ挺出しており、この地域に残る完成された斗拱形式の例証として特筆されよう。この鐘楼は、時代的には阮朝以前のもので、寺内



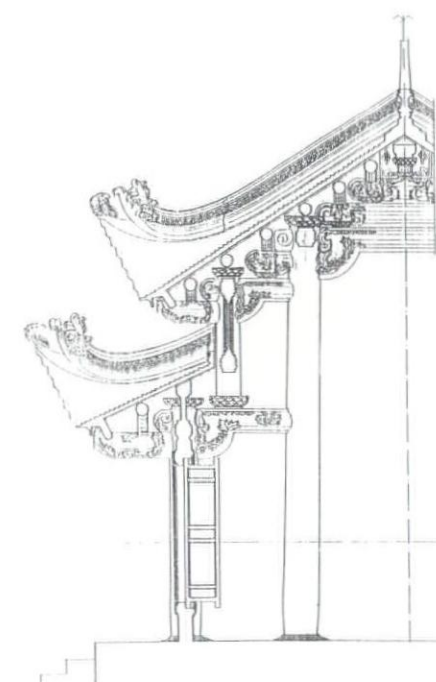
1 西方古寺断面図



2 神光寺外観



3 斗拱をモチーフとして扱う



4 金蓮寺断面詳細図

に残る石碑に造営期間は1630年～1632年とされているので現存遺構としては比較的古いものである。また、ハノイ郊外の西方古寺（別称を崇福寺という）や天福寺では、貫と貫の間を埋める薄い板に斗拱を彫刻絵様のモチーフとして用いている（図3）。本来、柱上に並ぶべく斗拱がここでは頭貫と飛貫に見立てた水平材の間に表現されているのである。この板は構造上特別な役割を果たしているわけでもなく、このことからここでは斗拱の連続した様を渦巻き状の絵様と併せて審美的に捉えている。一方、斗拱以外の建築を印象づける細部として、例えば、柱間装置や開口部などには、連子窓や我が国で唐棧戸と呼ばれる禪宗様の扉と同じ構成を用いたものを有している。その他、龍、鳳凰、麒麟、蝙蝠そして門神などのモチーフと併せて、多分に中国系建築のアイコンを振り撒いている。構造に直接影響を及ぼさない様式的な細部においては、東アジア建築全般に顕著な中国系建築表現の多くの事例をベトナム建築は有しているといえよう。ベトナムの伝統建築は、全体的な印象において、一見すると中国伝統建築に準じた法則によって建築を成立させているように見受けられる。しかし、ここでも日本伝統建築とは別のかたちで中国伝統建築との本質的な差異を潜ませている。ベトナム伝統建築においては、斗拱が伝統的設計方法に不可欠な概念として考えられる部材相互間の比例を秩序立てる役割を担っていないという点が注目されよう。

ここではハノイを代表する仏寺である金蓮寺とフエ阮朝王宮太和殿の断面形式を見比べな

からベトナム伝統建築の特色について言及したい。

金蓮寺・西方古寺

金蓮寺は、前殿・中殿・後殿の三棟を平行に連ね、各殿屋の間に細長い中庭を有する配置構成を取る。各殿屋は皆一重入母屋造葺階付き、平入りの建築である。フエの太和殿は一重入母屋造であるが、双方を一瞥して感じうる似通った印象と比べて、その断面形式は根本的に異なっている。金蓮寺と、また、これとほとんど同型の西方古寺においては、入側柱と側柱間の繋ぎ梁の上に比較的長い束を置き、初重の屋根にこの長い束が達している（図4）。束はその長さのために細部様式上、柱のように見立てられ、柱と同様に大斗の役目を果たす円形の斗を束下に置き、直接母屋桁を支えている。

一般に、ベトナム伝統建築の母屋桁間の長さは、他の中国系建築よりも比較的短く、密に配されている。桁上には我が国の万福寺など黄檗建築に見られる、木口が薄く平らな形状の垂木を架けて、野地板を置かず直接瓦を葺いている。そして、例外に漏れず両寺ともこの手法を踏襲しており、例えば、金蓮寺の場合では梁間三間に実に15本もの母屋桁を有している。このことから派生して、小屋の架構は日本伝統建築の仏寺に用いられる虹梁の役目を果たす水平な梁が密に重ねられ、その高さ方向の狭さから梁の上下間には藁股が入り込む余地がない。その代わりに、藁股より成の低い斗が梁を受けるように配されている。このような特色は、例えば中国広東省広

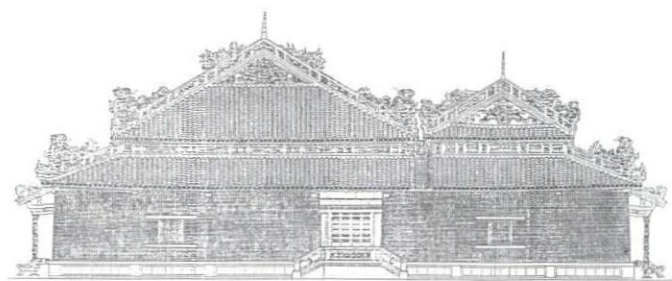
州に在る陳氏書院やその他の中国南部に存在する建築にも認められるものであり、母屋桁の多さについては、おそらくは薄く平たい垂木が構造上長い距離（母屋桁スパン）を架け渡すことができないことに起因するのではないと思われる。今後の中国南部地域との比較研究の成果によって、相互の関連と位置付けが解明されることが待たれている。

太和殿

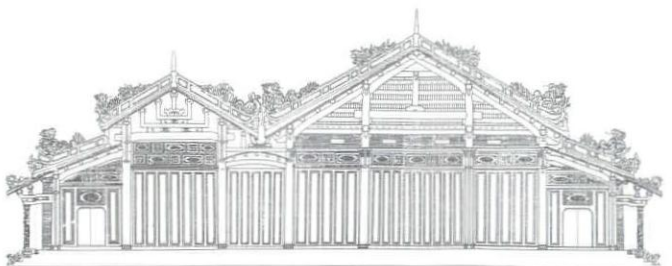
ベトナム宮殿建築の典型的事例として評される太和殿は、二棟造りの連棟式建築である（図5）。皇帝との謁見や儀式の際には、大朝儀と称される殿屋前面にしつらえられた大広場と共に一体感のある壮麗な舞台となり、その配置構成は中国北京にある紫禁城内の太和殿（図6）を範に取っていることが広く知られている。

このフエの太和殿（図7）と北京のものとの主な違いとしては、宮殿建築の壮麗さを担う組物や詰組がフエにおいては見受けられないところにある。また、中国建築においては、格式の高い建物に一般に用いられる寄棟造りがフエにおいては採用されずに、入母屋造りを用いてすべての主要宮殿建築群をまとめていることも対比的に興味深いものであろう。フエの太和殿は、前殿と正殿の間に造り合い

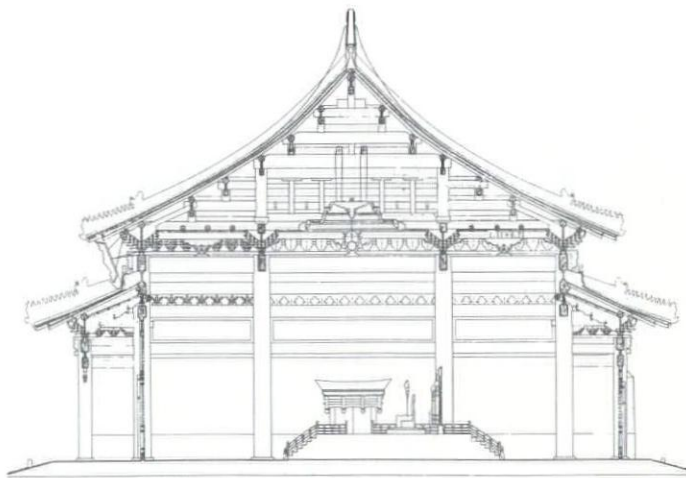
（図8）をしつらえて一体化させる手法により、その平面規模を拡大させている。そこでは連棟式建築物の宿命として、前後の殿屋のぶつかる軒先の部分に大きな谷ができ、通常、雨樋を配さなければならない。このような方法を用いて平面規模を広げる手法は、王宮の



5：太和殿側面図



7：太和殿断面図



6：北京故宫太和殿断面図

みならず歴代諸皇帝陵にある木造建築においても見受けられ、造り合いの部分にゆるやかな円弧を描く天井を設けて雨樋を隠す手法と併せて、ある程度類型化され得るものである。

また、太和殿の正殿の身舎や庇に用いられる登り梁は、基本的には叉手構造であり、このような大規模の建築物において水平方向の梁が極めて少ないことが興味深い。正殿身舎の前後の登り梁は頂部で交わり、棟桁を支承する。棟桁を少し下がったところで貫が前後に伸びて登り梁の中程に貫入しており、最下部の大きな梁に載る束と併せて単純な架構を形成している。この手法も他の宮殿建築に見ることができ、ある程度類型化され得る手法といえよう。登り梁は、太和殿前殿の庇と正殿の孫庇にも用いられている。側面図を見ると、これらが連結して四周をまわし二棟造りを一体化させ、ひとつの単体建築としての表現に貢献していることが理解できる。このことは、その他の現存する宮殿建築の基本的な屋根形状と平面形式からも、規模の小さい前殿とそれより大きな正殿を連ねる方法が典型的な特徴を見せており、機能の面では一体化させて用いられていることが理解できよう。

一方、太和殿の前殿の身舎の架構は、驚くべき手法を用いて組まれている。入側柱を繋ぐ水平な梁の上部には、鉤手状(図9)の梁と束の役目を兼ねた部材が直接母屋桁を支承している。この大胆な試みの発想の源は定かではないが、その手法は一般にはフエ宮殿建築固有の建築表現として考えられている。さらに王宮世廟区域にある興廟には、束に大胆な役割を担わせて、柱の様な迫力をもって束が直接母屋桁まで到達している(図10)。最下部の梁が柱の途中で組まれており三重に梁を

配し、柱は母屋桁を受けている。ただ、南中国の建築においては、斗を連続的に垂直方向に重ねて束の役割を担うものがあり、それらの手法を支える発想の源に何らかの共通要素があるのかも知れない。この特異な部位においても斗拱形式の発達した中国とそうではないベトナムの建築表現の差が象徴的に現れており、興味深いものである。鉤手状の架構は日本の伝統建築から見れば特異な発想ではあるものの、フエ宮殿建築においては、ある程度定型化された手法のひとつとなっており、世廟区域の顕臨閣や同慶帝陵において見受けられる。

斗拱形式の有無は、一方においては建築を宗教系建築と住居系建築に分類する手立てとなろう。この点から鑑みると登り梁を多用するフエ阮朝宮殿建築は、住居系建築の木造架構の伝統を強く継承している様にも思われる。その他、王宮内外の官吏の住宅などもその架構に登り梁は顕著に用いられている。また、ホイアンにおいても、一般に中国人街と称される町並みに並ぶ多くの住宅で、基本的にはフエの王宮と同様の登り梁を用いる架構を見せており、これらはベトナム中部を代表する建築表現としての拡がりを持つ可能性もあるだろう。このことは、宮殿が宗教建築以上の壮麗さを求められると同時に、皇帝の住み処でもある所以とも考えられよう。

まとめ

金蓮寺と太和殿の断面形式に関してその概説を試み、ベトナムの伝統建築のふたつの典型的側面を紹介した。以下に簡単に整理したい。

小屋組においては、最上部の梁や貫を底辺とし前後の登り梁を斜辺として形成される三

角形の「空き」の部分や、その頂部の「空き」から前後に順々に下がった位置に柱と水平な梁をそれぞれ長短辺として形成される三角形の「空き」の部分が必然的に生じることとなる。ベトナム伝統建築は、上述したように母屋桁間の距離が短いためにその空いている部分を密に埋め合わせていく傾向が認められる。ベトナムにおいては、このような「空き」に虹梁に相当する梁を密に重ねたり、華美な木彫をパネルとして施す手法が顕著であるといえよう。小屋の架構は、上述したように水平な梁を密に用いる方法と登り梁を叉手に組む方法が代表的な手法として広く認められ、その架構に双方の手法を折衷させて用いる建築がベトナムでは非常に多く見受けられるのである。この他、ベトナム木造建築の軒先の処理の仕方などにも際立った手法が発揮され、甚だ興味深いものである。しかし、ベトナム木造建築の研究は始まったばかりであり、様式的分類の他、伝統的な設計方法にまでおよぶ言及は、今後の課題として残されている。

注

*1: ふたつの殿堂の屋根の出会う部分。ここでは、雨が溜まるため樋でそれを受ける。

参考文献

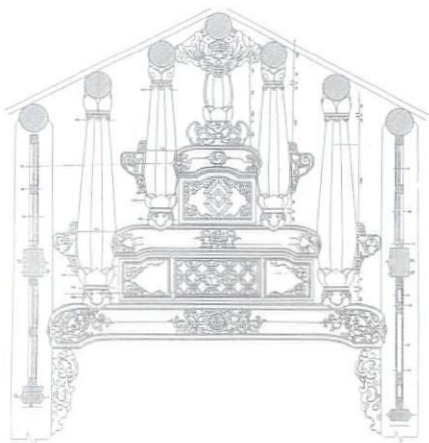
- ・日本建築学会編『東洋建築史図集』、彰国社、1995年
- ・ハーバン・タン他編『ベトナム仏教建築』、ハノイ、1993年
- ・ゴー・フィ・チン著『ベトナム建築史』、ハノイ、1992年
- ・ルイ・ブザシエ(フランス極東学院)著『北ベトナムの古代遺跡の記録』、パリ、1959年
- ・中国科学院自然科学史研究所主編『中国古代建築技術史』、北京、1985年
- ・フエ遺跡保存センター作成の実測図



8: 太和殿の造り合いの空間



9: 太和殿内の鉤手状の架構体



10: 興廟の特色ある束

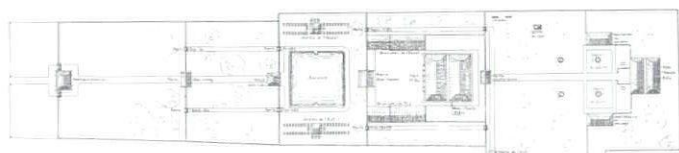
天福寺／チュアタイ

ハノイ近郊にある天福寺は、ベトナム固有の伝統芸術である水中人形劇が行なわれる場所として名高く、また、その現存する建築は、ベトナムで最も古い部類に属するものであるといわれている。

一種形容し難い独特の形を成した小高い山に囲まれ、伽藍前方には広い池を配している。そして、池の中には楼閣風の建築物が忽然と建っている(図11)。水中人形劇は、この建築物を舞台として賑やかに行なわれる。前殿は工字型に屋根を構成し、本来ならば中庭に該当する部分に屋根を架け渡している。前殿と本殿はぎりぎりの間をとって置かれて、本殿を抜けると中庭に直接出る構成を取る。この本殿背面の軒高の低さは強く印象に残るものである。図版を参照すれば後殿を含めて4種類の妻方向の小屋の断面形式に、各々微妙な変化があることがうかがい知れよう。ここでも母屋桁間の距離は短く、それらは密に配されている。しかし、斗を束として代用するだけでなく、束そのものを用いた手法も見受けられ中国系建築の標準的な架構を彷彿させる一方で、入側柱より外側は本殿を除いて登り梁が使用されている。この本殿の妻方向の断面形式は、我が国の浄土寺浄土堂を想起させる架構ともいえ、同様の部材名を仮に与えるならば、身舎一庇間の梁は大虹梁から四重虹梁までと呼称することもできよう。



11：天福寺断面図



12：文廟平面図

文廟／ヴァンミュウ

文廟はハノイ市内にあり、その沿革は11世紀にまで遡り、ベトナム最初の大学として名高い。また、廟内の19世紀阮朝期建立の奎文閣には、82本の石碑が整然と並べられ、それらには官吏の登用試験である科擧の合格者が刻まれている。この石碑は、中国の科擧制度の導入の証としてよく引き合いに出されるものである。

配置図を参照すれば、南北中軸線に沿って左右対象に整然と配置されていることが一目瞭然である(図12)。主要建築物がある区域の前方に布置される人造池を横切ると主殿を成す大成殿へと入る。大成殿の正面七間奥行き七間の平面規模を確保する手段は、連棟形式を用いて解決させている。フエの太和殿やその他を併せて考えてみると、二棟を連ねる方法を用いて平面規模を拡大する方法がベトナム建築の大きな特色を形成しているといえよう。

さらに後方の開成殿の断面図を参照すると、側柱と入側柱を登り梁を用いて連結させると同時に、装飾が施された登り梁の上に母屋桁との接合のための欠き込みがある登り梁を直接重ねて用いている(図13)。このように登り梁を上下に重ねる手法もまた、ベトナムでは広く散見される。



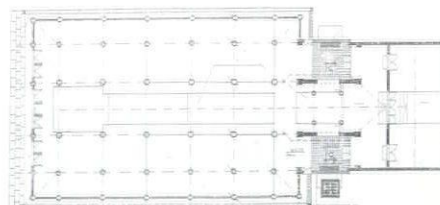
13：文廟断面図

燕夫亭／ディンイェンフー

亭は、主として農村部に存在し、土着的な精霊崇拜に基づく守護神を奉る建築である。村の長老達の寄り合い所であったり、祭りの時に村人が集まる場であったり、村にとって重要な人物を奉る場であったり、多義的な要素を併せ持つ。このように「亭」という文字からあずまや風の小建築を思い浮かべると全く別の「亭」に出会うこととなる。亭の建築図集『ディン・ラン・ベトナム』を眺めると実に多様な建築表現の世界を垣間見ることができ、ここでは図集にも含まれているハノイ市内西郊の燕夫亭の建築的特質を紹介したい。

大きな妻を有する入母屋造の燕夫亭は、ずんぐりとした印象を覚える。正面左右に門神を描き込んでいる。平入りを主とする中国系建築文化の中で、妻入りであることが特徴であり、正面5間奥行き7間の拝殿とその後方に正方形に近い祀堂を置く(図14)。内部は天井を設けず架構を露出させ、身舎一庇間の架構は、梁を6本も重ねて天福寺の本殿と同様の手法で小屋組をまとめている。亭は、ベトナム建築史上、非常に興味深い対象であり、ベトナム文化に強い規範と影響を与えていた村落共同体の中心的存在である。亭は、ベトナム人が形成した宇宙観の形象として捉えることができよう。

●なかざわ・しんいちろう



14：燕夫亭平面図

中川 武＋中沢信一郎

1975年4月30日、サイゴン陥落。ベトナム戦争は終結した。

1. 王宮の現況

フエ^{フエ}阮朝王宮は20世紀中葉までほとんど手つかずで残り得たが、第一次インドシナ戦争とベトナム戦争というふたつの大きな戦争のために甚大な被害を受けた。華麗な宮殿建築とそれらに囲まれる中庭が、交互に奥深く繰り返されるはずの王宮・紫禁城の現況は、太和殿を抜けると突然大きな広がりの中に放り出されることとなる。しばらく呆然とその場に立ちつくすと、廃墟になびく草によって風の流れがわかる。そして、時折変わる風と草の戯れの中に、かつての宮殿の基壇の一部と残された階段を認めることができ、本来あるべき姿に思いを馳せることとなる。

1995年。ベトナム社会主義共和国の開放・独立から20年を隔てた昨年は、かつての敵対国アメリカ合衆国と国交を樹立するという、今後のベトナムの道程を占う上で極めて重要な選択が行なわれた。また、90年代に突入するとベトナムに関する情報は、かつてないほど我が国に入ってくるようになった。これらの一連の情報は、以前の政治社会問題を反

映した重く厳しい課題のみではない。80年代の後半から俄かにブームとなっていたアジアへの熱いまなざしの中に、ベトナムがその対象として入ってくるようになったのである。ドイモイ（刷新）政策という名のお墨付きをもらい、世界中の企業からのベトナムへの開発投資の関心が伝えられるようになり、それらと連動するかのよう観光事業の開発も急速に発展している。アジアにおける対外開放政策の1事例が、新たにまたひとつ加わった。

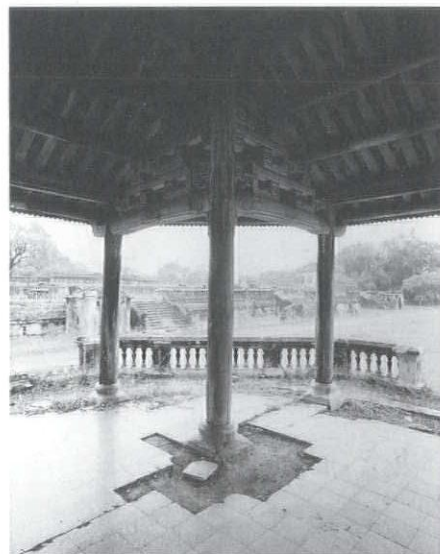
フエ阮朝王宮はこの1975年と1995年の象徴的な出来事に深く関係をもつ。なぜなら、ベトナム戦争の激戦区のひとつがフエの王宮であり、また、ベトナム観光の最大の目玉商品が王宮であるからだ。そして、このふたつの点を結ぶ線が、現在、ベトナムが国をあげて進めている王宮の修復保存事業といえよう。フエ王宮の修復保存はベトナム国内のみならず国際的な協力の下に進められている。修復保存事業と国際協力の連関はユネスコを窓口として始まり、ユネスコから要請された外国人研究者を含めた国際会議は着実に会を重ねている。旧宗主国であるフランスは、かつてのロイヤル・シアター（問是堂）の修復事業を

始めており、95年11月の時点では小屋組の修復作業が進められていた。中国・上海の研究組織は、王宮唯一の3層の楼閣である顕臨閣^{キョウリンカト}の修復に協力し、また、アメリカの財団が戦争で破壊を受けた城壁の修復に助成を行なうようである。12月には、フエ遺跡保存センターのタイ・コン・グエン（Thai Cong Nguyen）所長以下、保存センターの主だった技術職員が中国を訪れて北京の関連組織との協力関係を結ぶ予定である。後述するが、このような国際的な協力関係は、我が国との関係においても進められている。

王宮の修復保存問題と国際協力を考えていくには、専門的な課題を個別に検討すると共に、その背景となる社会が歩んだ歴史について思慮しなければならない。ベトナムの場合、およそ150年にわたる阮朝の歴史とその後の社会主義共和国が歩んだ道程は、目指す理念として決して連続するものではない。差し迫った文化遺産の危機的状況の克服と保護という現実的な課題もさることながら何を修復し何を保存するかということは、さまざまな形で国民のコンセンサスを得る努力が必要となろう。復原案まで含めた修復保存計画を進めていく



洪水の被害を受けた午門



修復の成されぬままの宮殿施設

ことと、廃墟と化した王宮の現況をそのまま保存することの果たしてどちらがよいのかという問題提起は極めて理念的な課題である。

一方において、観光事業の促進がベトナムに波及する経済効果は、今後ますます大きくなるものと思われるし、急速な発展と繁栄の影に豊かな自然環境の破壊や古い伝統的な町並みの消失が同時に進行していくことは近代化のジレンマとして過去に多くの事例をもつ。急速な発展に付随して、伝統的な建築生産技術の体系が加速的に崩壊していく姿は想像に難くない。また、環境問題にまつわる倫理的な規定や文化財保護法のような法制度の確立には、訪れる側と生活する側、そして文化遺産を管理する側々々との対話が必要である。王宮は広域的な地域であり、現に今もかつての京城内に人々が静かに日常生活を営んでいる。

2. 修復保存の経緯

そのような社会的背景を踏まえて、修復保存事業が抱える問題点を具体的に取り上げてみたい。はじめにこれまでのフエの修復保存の歴史の整理を試みたい。

ベトナム政府は、1975年の解放独立後、すぐに遺跡の保護に関心を寄せ、ユネスコなどの国際関係機関に協力を要請していた。しかし、統一間もないベトナムにあっては、その後も続くカンボジアへの出兵や中国との戦争などにより、なかなか遺跡の保護にまで余裕をもたせることができなかったのが実状である。制度が整い始めるには、1980年代末まで待たなければならなかった。

フエの遺跡に国際的関心が集まる契機となったのは、ユネスコの世界遺産のリストにフエが挙げられ認定されるようになってからである。この出来事が1993年であるから、一般的にはいかに王宮への関心が新しい出来事であるか推し量ることができよう。

90年代には、日本政府のフエへの文化財保護に関する支援についても独自の展開がみられた。日本は、ユネスコに世界遺産保存日本信託基金を創設し、フエ王宮の修復保存に関しても基金が拠出されたのである。91年より始まった午門の修復に関しては、中川武がユネスコ・コンサルタントとして、文化財保存関係者へのレクチャー、午門の彩色保存の方法に関する協議のために短期間の技術協力を行なうなどして、93年に一応の修復事業の節目を迎え、95年には王宮内にあるフエ遺跡保存センターに所属する2名の修復保存の専門家、同センター副所長兼建築家フン・フー氏(Phung Phu)及び同センター木造建築物修復保存担当技術職員レ・ダン・チュン氏(Le Dang Trung)が日本において3ヶ月間の研修を行なうという段階に達している。

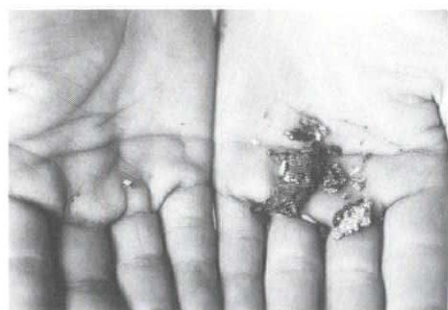
95年はまた、財団法人トヨタ財団の助成により明命帝陵^{ミンマニ}の修復が始まり、重枝豊氏を中心に現状の図面化の作業が精力的に進められている。このように年々活発になるフエと日本の研究組織の結び付きは、おのずと我々日本の研究者にも細部にわたるまで多くの問題が知られるようになってきた。

当初から顕在化している台風と高温多湿の風土による雨漏りや白蟻などの自然条件による被害は、現在、防腐剤・防虫剤を用いる科学

的処理によって対応する試みがなされている。このような処理は、まだ試行期間が短いので、効果がどの程度あるのか今は待たなければならない時期にある。例えば、白蟻に食われて空洞化した柱の内部にコンクリートを充填するなどの修理方法が用いられているが、外側に亀裂が入り必ずしも成功しているわけではなく、埋め木や継ぎ木を行なう我が国の修復方法からみると、いささか乱暴な処置を施しているといわざるを得ない。

また、王宮正門である午門や太和殿の屋根は、ベトナム本来の屋根の瓦葺き方法ではなく北京の太和殿の方法をそのまま簡易化し移入したといわれており、そのためもともと構造的に雨漏りが生じるようになっている。このような造営当初の構造的欠陥を現状のまま保存すると恒常的に雨漏りが生じることとなり修復方法の具体案に先行して理念的な検討を加えなければならない。さらに台風の被害は、水はけの悪いインフラストラクチュアに直接影響を与えており、ひとたび大きな台風が来襲すれば王宮は水に浸かってしまうことになる。このような被害は隔年毎に出ているようである。広域的なインフラ整備は最も重要な課題であり、望み得るならば、かつての京城内を横切る運河を復活させ、伝統的な技術と併せてその解決を図る処置が必要となろう。

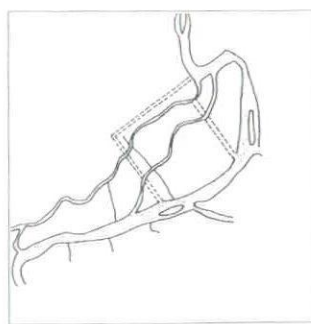
文化財の修復保存には、緊急な処置をとらなければ文化財そのものが崩壊の危機にさらされてしまう場合の対処と、失われてしまった伝統技術の解明という基礎的研究の結果を踏



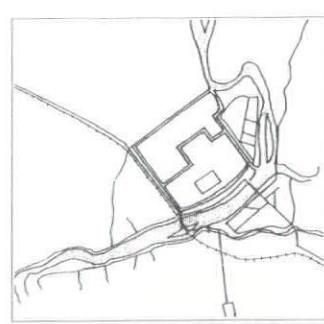
木造建築に甚大な被害を与える白蟻



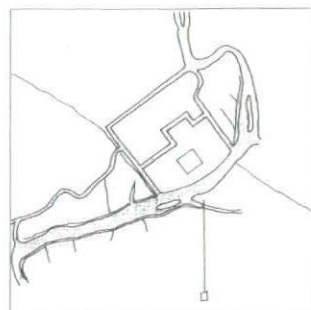
台風により浸水した王宮



1800年



1930年



1870年



1990年

王宮の造営過程と現況

上述した3ヶ月間に、ベトナムの修復保存技術者の日本における研修が、ユネスコ、日本政府外務省を通じて早稲田大学を受け入れ先とし、関東と関西において行なわれた。彼らに、現在日本で進行中の多くの修復保存現場を見てもらうことが大きな目的である。関東においては、文化財保存工学研究所（渡邊保弘所長）が進めているいくつかの修復保存現場と日本を代表する修復保存の専門家、そして、伝統的大工技術保持者として絶大な信頼を多くの専門家から寄せられている田中文男氏の工場（眞木工作所）において、厳しい研修が進められた。関西においては、奈良国立文化財研究所（田中琢所長）にて、建造物研究室室長の木村勉氏が見学会と集中講義を合わせたきめ細やかなプログラムを作成され、木村氏自身を含めて多くの研究所所員が対応された。ベトナムの専門家は、修復現場において、古い部材が有する情報と技術を守っていくことがどれほど大変なことか身をもって体験した。残念ながら、ベトナムにおける多くの修復保存の現場は、仮設の仮屋根も架けられず、また、古い材は残されぬまま廃棄される場合も多い。修理工事の作業を正確に記

このような観点からベトナム伝統建築を見据えていくことは、様式的分類以上に困難な状況が伴う。現時点においては、これらにまつわる研究は端緒についたばかりであり、ベトナム木造建築全般の伝統的な設計方法とそれに携わる大工を中心とした生産組織に関して多くを述べることはできない。ここでは90年代に入り、少しずつ集まり始めた研究成果と併せて、フエ王宮修復保存が抱える問題と研究の一事例を紹介しよう。

我が国では、木割りや規矩術について述べられた多くの書物が残存し、また、中国においても宋代の『营造法式』、明代の『魯般营造正式』、清代の『工部工程做法^{さほう}』等の建築技術に関する古文獻が確認され、それら一連の書物から建築を設計する上での多くの規範につい

王宮を三重に取り巻くしにようへき圍繞壁については、紫禁城と皇城の壁の周長そして北、東、西の3方向にあるけつだい閣台の長さを新たに実測したが、その結果、換算値は、一尺あたり42cm前後を示す傾向が認められた。一方、ベトナムの大

『大南一統志』の中の京城と皇城の説明

工への聞き取りでは、固有尺度の単位長さについて一尺あたりおよそ40cmの見解を得ることができた。実際に手に取り計測したもののさしの長さが示す値は、40.4～40.8cmの範囲に入り、皆40cmという長さを越えていた。さらに、一点のみではあるものの造尺の他、田畑を測るための目盛を併せて刻んでいたものさしでは、量地用の尺度は一尺あたり42.2cmの値を示していた。実測調査の結果が示す一尺42cm前後という値は、我が国の一尺30.3cmと程遠いものである。また、同時代の中国清代の建築用のものさしに刻まれている尺度が一尺あたり32cmである。『大南一統志』は、中国の勅選書『大明一統志』や『大清一統志』の書式を模して記されている。このことから、ベトナムに残る漢字で記された文献に使用された丈、尺、寸から推測してベトナムの史料に記載されている建築の規模を想定するには注意が必要となろう。さらに、ベトナムのものさしは単にものを計るだけでなく、吉凶を占う道具となっている。中国のものさしのもうひとつの側面でもあるこの行為は、ベトナムでは広く浸透し、そのものさしの名称は中国と同様に魯班尺と呼ばれている。魯班尺は、我が国においては沖縄諸島に見られる以外はあまり浸透せず、日本建築には積極的に包含されなかったものである。ベトナム伝統建築は斗拱が未発達な印象を覚えるが、魯班尺のように建築を支えるコスモロジーを中国から直接踏襲しており、東アジア文化圏のなか日本とベトナムの中国文化の受容の相違を読み取ることができ興味深い。

このような固有尺度の問題から、阮朝が中

国文明世界に抱いた憧れを宮殿建築に投影させたことと裏腹に、実際の造営過程においては地元根付いた固有の尺度でしっかり建築をつくっていることをうかがい知ることができた。また、このことはベトナム伝統建築、特にフエ阮朝王宮を考えていく上で、一般的に王宮は中国世界の模倣とその体現といわれる中、それでは一体どのような部分において中国文明を踏襲し、また、どのような部分がベトナム的なものであるのかという重要な問に対するひとつの例を示唆しており、大変興味深いものである。

阮朝は多くの文物と制度を中国から取り入れ、初期の皇帝はその力を統率しまとめていく中心としての役割を果たす必要があった。宮殿建築とそれらを建てることで現出する空間は、大中華を結晶化させて最も強力なかたちをもって皇帝の威光を象徴させた。王宮を中国風にまとめるということは、中国文化への憧憬というより、むしろ、天下を治めるための手段である。ベトナム史を鑑みると、恐らくこの手段以外に国家をひとつにまとめていくことは不可能であったと思われる。壮麗な中国系宮殿は、細部様式を斗拱によって飾らなくてもその効果を臣民に対して存分に果たしたであろうし、政権を安定させるためにはかなり念入りに中国の文物と制度を移入していく必要があった。太和殿前の大朝儀の広場に立ち、かつての歴代皇帝が描いた壮大な大中華帝國的な世界観に思いを馳せるならば、皇帝の中国宮殿建築に対する思い入れの強さは並々ならぬものがあることが認められよう。しか

し、皇帝の観念を現出させるために建築を具体的に生産するということは、比例値や寸法値を決定し、その見えざる体系を駆使していく過程を必然的に生じさせる。そこでは長い間に形成された伝統的な建築技術の体系が確固として存在し、その体系を援用せずに建築を整えていくことは、当然のことながら皇帝といえども不可能であることが、一尺40cmの尺度に潜んでいるといえよう。

この阮朝王宮造営と固有尺度に象徴される設計方法をめぐる問題は、文化受容と伝統技術の統合という問題のせめぎ合いの中にフエの午門や太和殿、そしてかつての宮殿建築が成立していったことを告げているといえるのではなかろうか。

●なかかわ・たけし／建築史、早稲田大学教授

●なかざわ・しんいちろう

参考文献

- ・財団法人ユネスコ・アジア文化センター『救おう！ベトナム・フエの文化遺産』、1994年
- ・早稲田大学アジア建築研究会『ウィエトナム／フエ・阮朝王宮の修復的研究』（その1～その4）、日本建築学会、学術講演梗概集、1995年
- ・“HUÉ—Planification et Développement”, Dynamique Urbaine, 1995

作表＝中沢信一郎

名称	所有者	一尺のメートル単位換算値	表2との照合
1-1 周元尺	フエ故物博物館	55.7cm	—
1-2 逢尺	＊	59.6cm	—
1-3 経尺	＊	40.2cm	有
2 周元尺	ハノイ歴史博物館	未確認	—
3 トウック・モック	レ・ダン・チュン氏	40.6cm	—
4 トウイク・ニャック	グエン・ライ氏	39.8cm	有
5 トウック・モック	レ・フォン氏	40.725cm	有
6 トウイク・ニャック	レ・キー・ソアン氏	40.4cm	有
7-1 魯班尺（8進法）	グエン・タン・アン氏	42.4cm	—
7-2 続尺	＊	40.4cm	有
7-3 官尺	＊	42.15～42.2cm	有

表1：ものさしの単位長さの換算値 ＊1-1～3、7-1～3は1本のものさしの3面に刻まれている

	実測値 (a)	大南一統志 (b)	欽定大南會典事例 (c)	a/b	a/c
皇城					
東回牆壁	568.369m	155丈5尺	155丈5尺	3.66m	3.66m
西回牆壁	568.060m	155丈5尺	155丈5尺	3.65m	3.65m
北回牆壁	639.784m	151丈	151丈、151丈5尺	4.24m	4.24m、4.22m
南回牆壁	641.786m	151丈	151丈	4.25m	4.25m
周	2417.999m	614丈1尺	614丈	3.94m	3.94m
皇城十關台					
東回牆壁	613.723m	155丈5尺	155丈5尺	3.95m	3.95m
西回牆壁	613.414m	155丈5尺	155丈5尺	3.94m	3.94m
北回牆壁	686.367m	151丈	151丈	4.55m	4.55m
南回牆壁	688.369m	151丈	151丈	4.56m	4.56m
周	2601.873m	614丈1尺	614丈	4.24m	4.24m
紫禁城					
東回牆壁	308.583m	72丈6尺	72丈6尺、72丈6尺7寸	4.25m	4.25m、4.25m
西回牆壁	307.762m	72丈6尺	72丈6尺7寸	4.24m	4.24m
北回牆壁	341.549m	81丈	81丈	4.22m	4.22m
南回牆壁	342.125m	81丈	81丈	4.22m	4.22m
周	1300.019m	307丈2尺	307丈3尺、307丈3尺4寸	4.23m	4.23m、4.23m
關台					
東關台長辺	64.518m		15丈5尺		4.16m
西關台長辺	67.067m		15丈5尺		4.33m
北關台長辺	64.964m		15丈5尺		4.19m
東關台短辺	23.177m		5丈5尺		4.21m
西關台短辺	23.406m		5丈5尺		4.26m
北關台短辺	23.606m		5丈5尺		4.29m
平均値					4.24m

表2：実測値と史料をもとに割り出した換算値

ベトナムの都市住宅

内海佐和子＋友田博通＋北川泰三

ベトナムの都市住宅

初めてベトナムを訪れると、過去にタイムスリップする。都心部は第2次大戦前のフランス植民地時代に築かれた緑の大通りと洋館、下町は伝統的町家に洋館風のファサードが混在し、その他の地区も古びた建物ばかりなのである。ベトナムでは数年前までは建設活動は低調で、都市の人々はこれらの伝統的ストックを区分して過密に住むのが通例だった。それでも人々はドイモイ政策による活気にあふれていた。

現在のベトナムはドイモイ軌道にのり、海外からの産業投資により工業開発のただ中にある。ただでさえ住宅建設の立ち後れた状態で、今後の都市への人口集中にどう対処するのか。現在、外国企業の誘致に全力をあげるベトナムはすでに深刻な住宅問題に見舞われつつある。都心部の美しい伝統的町並みの保存を重視するベトナムの大都市では、都心部を離れた新都市開発、ニュータウン建設に期待がかかる。従来、細々と行われてきたベトナムの住宅建設の状況と都市計画の現状を見て、今後多数建設されると予想される集合住宅や都市のあり方を考えてみた。

1. 南北ベトナム時代の集合住宅

1975年の開放以前、南北に分かれていたベトナムでは、北は共産圏の援助で、南はアメリカ軍向けに、それぞれアパート建設が行われた。現在、これらは政府職員に分譲され、ベトナム人家族が住んでいる。

旧米軍アパート（ホーチミン）

このアパートは5階建てで、調査住戸は5階にあり、かつては南ベトナムの軍人が居住していた。住戸平面はアメリカ式で、玄関ホール、リビングを通して各個室へ行く典型的なホール型。住棟形式は2列・背面を合わせた階段室型。日射を避ける意味で効果的である。しかし、日本のダブルコリドール型のように2棟相互に行き来ができるなどコミュニティへの配慮も必要である。

北朝鮮の援助を受けたアパート（ハノイ、キムリエン）
1957年、北朝鮮・朝鮮民主主義人民共和国の協力でハノイの中心部に近いキムリエンに低層集合住宅として建設された。各住戸は居室のみで水廻りは共用、生活するために住居の外に出なければならないため

オープンタイプと呼ばれた。入居対象は若い政府の職員夫婦に子供1人の3人家族と想定して建設され、居室面積18㎡、22㎡、24㎡、32㎡の4タイプがある。18㎡タイプから24㎡までは1居室、32㎡は2居室、広さは給与の額で決められる。現在は古くなりスラム化し、改修計画が必要な状況で、調査はできなかった。

2. 共産圏の援助による集合住宅

1975年の統一、78年から89年のカンボジア出兵によりベトナムは資本主義圏からの経済封鎖を受けた。この頃は共産圏からの援助により、戦災復興のシンボルとして集合住宅建設が行われた。

ソ連のアパートをモデルに建築されたアパート（ハノイ、ザンボー）

ハノイ市街の湖の脇にある大団地である。この団地はまだ社会主義色の濃い1975年から80年にかけて建設され、5階建ての片廊下型である。建設当初は、政府職員向けのモデルのアパートであった。しかし、現在は子供や知人に家を譲る人もあり、一概に官舎とはいえない。この団地は、各住戸毎に水廻りがあるので、前述のオープンタイプに対してクローズタイプと呼ばれる。

インタビューを行った住棟は、1978年竣工で、現在の居住者は92年に前居住者から購入した。間取りは2Kで、そこに厚生省を退職した60代の主人夫婦、30代の末っ子夫婦と小学校2年生の孫、3世代・5人で居住している。

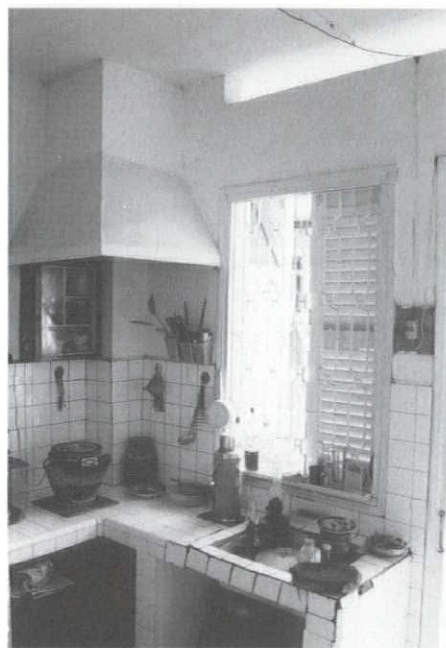
玄関で靴を脱ぎ、屋内には裸足で入る。入るとすぐに台所。熱源は、電熱器で2口あり、その廻りだけにタイルが貼ってある。水道、シンクはない。台所は広さにすると一畳もなく、廊下の片隅に電熱器があるだけだ。

玄関脇の部屋に入ると、窓が片廊下に面してひとつしか無く、やや薄暗く感じる。通風を考えてカスチール製の格子のみの窓で、外廊下を通る人からの目隠しにはなり得ない。その格子の外側には木製の戸があるが、戸の下部3分の2はガラリで、上部3分の1にガラス、戸を閉めるとますます暗くなる。外廊下を通る人からの視線については、窓を開け放っているの、廊下を歩く人に家の中を見られてしまうが、明かりがとれず仕方がないと言う。日本のリビングアクセス形式と比較するとプライバシーへの配慮は十分ではない。

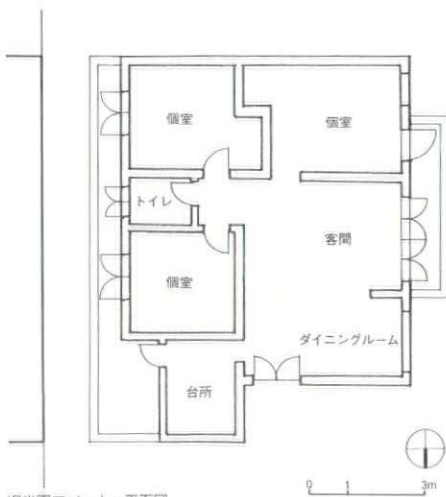
奥の部屋には本来、はき出し窓とベランダがあったが、部屋が狭いためベランダに壁を立ち上げ、屋根をかけ物置に改造した。そのため、窓がつぶされ採光も通風もとれない。玄関脇の部屋には、ベッドとともにテレビなどの家電製品や手入れの行き届いた家具があり、飾り棚の中には家族の写真が何枚も飾ってある。ベトナムではまだ普及率の低い冷蔵庫もあり、全体的に裕福な印象を受ける。



旧米軍アパート・客間



旧米軍アパート・厨房



旧米軍アパート・平面図



ザンボーのアパート・ファサード



ザンボーのアパート・客間に付いている窓の木製扉



ザンボーのアパート・客間



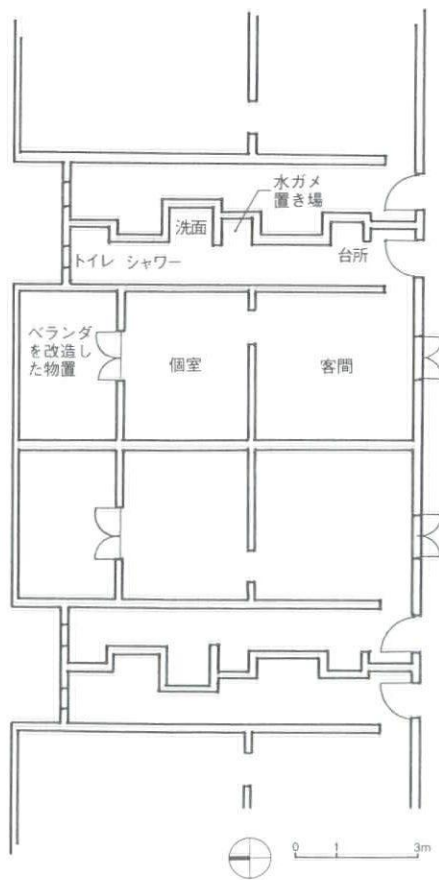
ザンボーのアパート・厨房

2Kのため、玄関脇の部屋で食事や勉強も就寝もする。ベッドは日中は椅子がわりになるうえ、このインタビュー中はずっと孫の遊び場所となっていた。夜間は、玄関脇の部屋で主人夫婦が、奥の部屋で息子夫婦と子供がそれぞれ1台のベッドで就寝する。

また、ベトナムでは自転車やオートバイは貴重品で室内に片付ける。そのため、共用階段の中央にはスロープが設けられ、外廊下と玄関のたたきとの段差も5cm程度と低い。

主人に、この家は気に入っているかと質問すると、「この団地の天井高は2m70cmと低い。最近のアパートの天井高は3mになったが、もっと高い方が良い」と言う。フランス時代の影響か、それとも天井に扇風機を設置するためか？ 日本の天井高について質問され、日本では2m40cmという気の毒がてくられた。

また、台所と食事室が一体化したダイニングキッチン形式について質問した。「最近では台所の熱源に炭を使用しなくなったので、煙の問題はないが、来客時や子供が勉強する時に台所仕事ができずに困るので賛成できない。それよりも、来客時に不便なので客間を通らずに奥の部屋へ行ける廊下が欲しい」と言う。



ザンボーのアパート・平面図

3. ドイモイ政策前後の小規模アパート

1980年から85年は経済的に困窮した時代で、ザンボーなどの延長工事が行われた程度である。また、85年以降も、ソ連、東欧諸国の社会主義体制の動揺・崩壊により、援助が減少し国内経済も低調であった。そのため、援助も資本主義国に頼らざるをえなくなり、86年にはドイモイ政策に転じた。

住宅建設も、国は独立採算化した一部省庁に土地を与えるだけで、省庁が集合住宅を建設し、職員に賃貸住宅として供給する形態となる。その結果、5階建て程度の小規模開発が市内各所で行われるようになった。設計は各省庁が独自に発注する方式で、ソ連留学経験のあるベトナム人建築家を採用するなど、きめ細かな設計も可能になった。

エネルギー省官舎（ハノイ）

政府が土地を提供し、エネルギー省の資金で1987年から88年にかけて建設された。当初は、その職員に賃貸する官舎で、現在もエネルギー省の職員が多数居住している。また、建設資金を融資した関係で銀行員も何世帯か居住している。

近年は、光庭のある階段室型のアパートが流行し、1階には店舗と共用の駐輪場、共用階段には自転車やオートバイを自宅の中に片付けるためのスロープがある。住戸については、エレベーターが無いので、1、2階の部屋に人気があり、南向きの部屋は暑いので嫌われる。勤続年数の長い人や功績をあげた人に優先的に住戸を選ぶ権利がある。

インタビューを行った家は5人家族だが、2人の息子は独立し、エネルギー省に勤務する56歳の主人夫婦と長女の3人が暮らす。

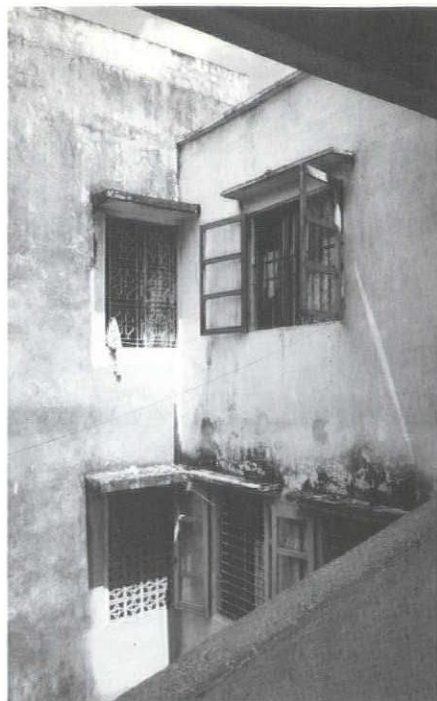
玄関で靴を脱ぎ裸足で室内に入る。間取りは玄関脇に水廻り、その奥に2部屋の2Kである。面積は、居室面積24㎡に水廻りなどの付属部分が22㎡。最近、コンクリートで廊下を4㎡増築した。ベトナムでは、この家の様に居住者が勝手に部屋を外に張り出させたり、ベランダを物置や個室に増築する例が多い。改造の仕方も外から見てとれる程がかりで、板を貼るだけでなく煉瓦壁を立ち上げてしまう。

1部屋は接客や食事に使われ、長女の寝室ともなる。接客用の木製の長椅子は座る部分の幅を拡げてベッドになる。もう1部屋は夫婦の寝室で、花ござを敷いた高さ5cm程度の木製の台をベッドとしている。

主人は、ここのアパートは階段室型なので風通しも良く気に入っている。また、玄関脇の増築部分を食事・接客に使い、ふたつの部屋を独立した個室とし、2DKとして使いたいと語る。生活の近代化要求は、日本もベトナムも変わらない。



エネルギー省官舎・ファサード



エネルギー省官舎・吹き抜け



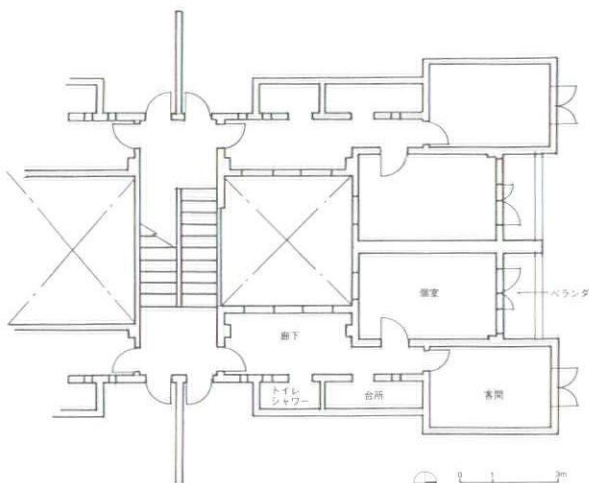
エネルギー省官舎・客間



エネルギー省官舎・厨房



エネルギー省官舎・増築した廊下



エネルギー省官舎・平面図

4. 経済の市場化とペンシルビル住宅

1990年から95年は、経済の市場化に伴い、国家プロジェクトとしての住宅建設は少なく、政府は土地を各省庁に与え、各省庁は土地を細分化して職員に与えた。都心部では1戸あたりの敷地面積は50—80㎡と中層住宅地なみの密度を想定し、敷地形状はウナギの寝床型。その結果、建物はペンシルビル住居の林立で、施主同士が意匠を競い合う不思議な景観となった。

採光、通風といった住環境が良くないとの理由で、この方式は95年には見直されることになったが、そこにはベトナム人の憧れの住居が暗示されている。

5. 集合住宅の新たな展開

1995年以降、ペンシルビル住居の反省に基づき、再び集合住宅への期待が高まってきた。ベトナム経済も上向きはじめ財政も豊かになって、省庁の一部は民間企業へと転換する。好況の企業を中心に再び集合住宅建設が盛んになりつつある。

また、近年は海外からの投資が盛んで、外国人向けの賃貸アパート、独立住宅団地も多数建設されるようになった。

フリープラン採用のアパート（ハノイ）

このアパートは、旅行会社が社員のために建設し、当初は賃貸で、ゆくゆくは分譲する予定。1フロアあたり3戸の階段室型を採用している。

この住戸は居住者の希望によって内装工事中。専有面積55㎡、若夫婦と子供2人の4人家族が居住する。間取りを3DKにしたいため、ふたつあるバルコニーのひとつを潰し、トイレ、シャワールームなどの水廻りとしている。この住戸は3面採光で、バルコニーをひとつ潰しても、採光、通風の面の問題は少ない。また、玄関の位置も間取りに合わせ、多少ずらしている。最近のアパートの流行は、居住者が各々の生活様式に合わせることが可能なスケルトン渡しだそうだ。

6. 郊外住宅の動向

一方、大都市の郊外でも、ドイモイによる高度経済成長により独立住宅の建設が行われている。幹線道路を走るとよくわかるが、沿道から数メートルバックして新しい住宅が竹の子のように建ちはじめている。バックしているのは、幹線道路の多くは幅員の拡張が予定されている計画道路のためである。この戸建て住宅の多くが、1階が店舗となり2—4階部分は住居。間口は最大でも5mで、居室を奥に繋げる町屋型。大都市や市街地の中心部はともかく、郊外の沿道に建つ住宅も間口が狭く奥行きが深いレンガ造モルタル塗りで、洋

館風の装飾やバルコニーをつけたりする。

郊外住宅には、敷地が広く間口の広い平屋ないし中2階建てのものも多いが、郊外でも新規の土地分譲に際して短冊型を採る例も見られる。郊外のペンシルビル住宅の波及は、最近の急激な地価の値上がり起因するばかりではなく、ベトナム人にとって憧れの近代化住宅の象徴なのかもしれない。

7. 都市の発展の課題

最近の都市開発によって、住宅をめぐる都市環境が急速に悪化してきている。周知のようにベトナムでは都市周辺部はインフラが貧しく、その整備が追いついていないからである。都市部では、オフィスビルやホテル等の再開発が進み、バブル経済状態を生み出している。一方、スプロール化が進み、住宅やミニホテルのバラ建ちが拡大している。無秩序な市街地化は、最近の洪水に見られるように、被害の度合が高まっている。湿地帯に形成された都市には、排水処理を重視した水と共生する開発コントロールが急務であろう。また現在、郊外での道路網の整備の遅れにより、それをはるかに上回るスピードで交通混雑が起きている。以前は自転車、シクロが中心であったが、この1、2年でオートバイ、車が急速に増え、特に、ホーチミンやハノイでは逆転してしまったかのような印象を受ける。最近では、騒音、大気汚染が肌で感じられるほどである。交通混雑を和らげるための新たな公共交通手段として、バスの交通システムの導入が試みられているが、人々の関心は、便利なオートバイ、かっこいい自動車へと注がれている。この調子で進むと、フランス領時代にストックされてきた町並みの重要な位置を占める並木を伐採して、道路を拡幅しようという主張が起きかねない。都市の拡大に伴う鉄道などの大量輸送機関が必要な段階に入ってきたといえよう。

8. ベトナムの都市計画の現状

都市の計画づくりを担当するベトナム建設省都市農村計画研究所の人達との議論から、ハノイの都市整備の姿勢が見えてくる。「ハノイ2010マスタープラン」にも見られるように、彼らはハノイの伝統的下町「36通り」の町並みや、フランス植民地時代の町並みを保存するため、その周辺の空間を含めた都市計画の必要性を十分認識している。そのため、ハノイやホーチミンの都市整備は伝統的な美しい市街地を保存して、町並み保存地域から離れた新たな副都心に、高層ビルや高層住宅を考

えているようだ。

現在、注目されているのは西湖と紅河にはさまれた地区で、ここにニュータウンと新業務地区、工業団地を作ろうというもの。既に同研究所ではプランは持っているが、ファイナンスや事業手法が明確ではない。

海外のあらゆる機関が、多くの魅力的な計画をその後の期待を込めて提供している。そうしたプランを学びながら、ベトナムはより良い選択をしようとしている。ホーチミン市郊外の新都市開発、サイゴンサウス計画はそのような中で現実的な選択の結果とも言える。

今ベトナムの都市にとって何が必要か。都市の開発コントロールは可能なのか。道路整備、鉄道、交通手段の制御も含めて大きな岐路に立っている。

ベトナムの集合住宅の最近の設計例は、驚くほど質が高い。光庭型による通風の確保、フリープランの採用、自転車・オートバイ用のスロープ、共用空間の充実など。20年前のソ連をモデルにしたアパートに対し、ベトナム独自のアパートは、見栄えは良くないが実質的でよく配慮されていた。

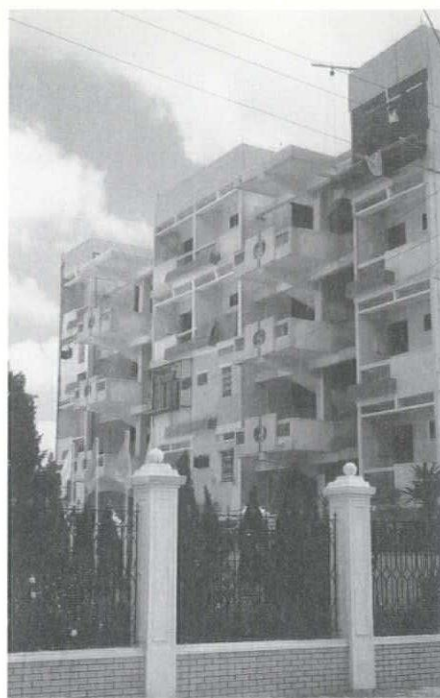
実は集合住宅にしても、町並み保存にしても欧米諸国や日本でも必ずしもうまくいったとはいえない。まして、ベトナムが期待する今後の新都市開発はさらに難しい。今ベトナムが臨もうとしているこれらの近代化信奉に対し、伝統を軽視した自戒を込めて日本の近代化の実態を伝えていく必要がある。近代化の最後の波を受けるベトナムは、あるいは彼らの伝統に対する意識と計画能力なら、これらを参考に都市住宅についてかつてない成功をおさめるかもしれない。

また、都市計画においても資金不足のために実施はできないが独自のプランをもっている。そしてなおかつ、海外のプランを学びながら、資金の問題も含めてより良い選択をしようとしているのだ。意外にも、資本主義のメカニズムを生かした現実的な選択のできる不思議な国と言えよう。

●うつみ・さわこ／昭和女子大学大学院

●ともだ・ひろみち／昭和女子大学助教授

●きたがわ・たいぞう／(財)日本地域開発センター (6. 郊外住宅の動向、7. 都市の発展の課題、8. ベトナムの都市計画の現状)



フリープランのアパート・ファサード



林立するペンシルビル住居



外国人向け賃貸アパート

「建築家なし」のミニ・ホテル

村松 伸

ホー・タイの湖畔で

ノイ・バイ空港からハノイの町に向かうとするなら、まずは、その田園風景に流れるゆったりとした時間に魅せられることだろう。水田では水牛がゆっくりと歩き、ひとびとも野菜を担ぎ、道を行く。やがて、車は高速道路を抜け、紅河にかかる大きな橋をわたる。そこここには、伝統的な村々が点在し、子供たちの遊ぶ姿が多く見られる。犬を食べさせるミニ・レストランが軒を並べているのもこのあたりである。

と、突如、大きな湖にぶつかる。ホー・タイと呼ばれるハノイの西北端にある風光明媚な湖である。中国杭州の西湖になぞらえて、命名されたこの湖の畔には、寺や廟が並び、そして、植民地時代には学校や少数の別荘が作られた。が、ここ数年で、見る間に景観が変わった。

色とりどりの屋根、バルコニーやアーチなどで飾りつけられた3～4階建ての外国人長期滞在者用の住宅である。土地持ちたちが、一攫千金を目当てにつくりだした建築タイプで、そのルーツはわからない。推測をたくましくするならば、建物のスタイルは、フランス植民地時代のヴィラのそれを模倣し、何層にも重ねていったのだろう。だから、オリジナリティは2階ほどの低層の住宅を中層化した点にある。

それらは数で言えば、200棟程あるだろうか。道の両側、ホー・タイの湖畔を浸食し、新たな光景を作りだしている。家賃は、一軒月50万円はざら、それでも外国人にとって住宅難とあっては、それを借りざるを得ない。日本と物価が一桁違うこのハノイでの50万円は、日本でならば、500万円に相当する。借金しても、すぐさま元は取れ、かくしてホー・タイ湖畔は洋風中層ヴィラの多産地として新しい名所となりつつある。

ミニ・ホテルの誕生

一方、町中では、ミニ・ホテルが乱立する。

外国人観光客の増加で、ホテルは明らかに不足している。その上、老舗の国営ホテルは、親方ベトナム共産党を地味でいって、この御時世でも体質改善はままならない。サービスの意味を理解せず、泊まらせてやるという意識が根強く残る。

これに眼をつけて、いずこかの知恵者が作ったのがミニ・ホテル。92～93年頃から始まって、いまではハノイの町中に蔓延している。総数は不明だが、100軒はあるのではあるまいか。

通常は、4～5室の客室をもち、家族総出で経営している。もちろん、金は払う必要はあるものの、空港とホテル間の送迎車も予約でき、日本からファックスを送ればそれで一切切が済んでしまう。ベトナム国営旅行社の煩瑣な手続きを介在させずとも、きちんと部屋を予約することができ、便利なことこのうえない。

例えば、ほくの愛用しているハノイ36通り地区のミニ・ホテルは、その名も古風に「クラシック・ホテル」。玄関を入ると、2階までの吹き抜けロビーがあり、その奥に小さなレストランが付く。片言の英語と片言の中国語を話すアルバイト風の青年がフロントに立ち、すぐさま友人となって何くれとなく気を使ってくれる。

全部で部屋は7室あって、道路側の部屋など10畳ほどで、中国風の家具が豪華に設えてある。これで一泊55ドル。もちろん、ベトナム人にとっては法外の価格で、だからこそ儲け目的でミニ・ホテルが乱立するのだが、家族的な雰囲気などを考慮すれば決して高くはない。

昼飯を食べたいとあらば、近所のレストランから出前を取ってくれ、帰国時にはお土産をやまほどくれる。あつち経済的に潤い、こっちはリラックスしてハノイ滞在が満喫できる。ミニ・ホテルのよさは相互の利益が合致する点にある。

「建築家なし」の建築

このミニ・ホテルは、ホー・タイ湖畔に建つ外国人用邸宅と同様、風変わりな雰囲気をはノイの町に醸し出している。

風変わりと呼ぶその理由の第1点は外観。フランス風の装飾文法も採用し、さらにネオン・サインを豪奢につける。町をうろつく外国人のバック・パッカーを引き寄せるためには目立たなければならない。まずは、ネオン・サインで「ホテル」であることを喚起させ、ついで、外側の装飾やスタイルで、他のミニ・ホテルよりも「好い」ことを表現する。

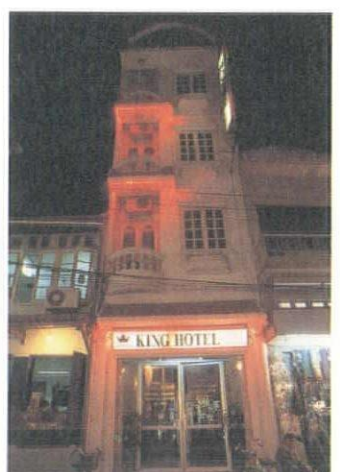
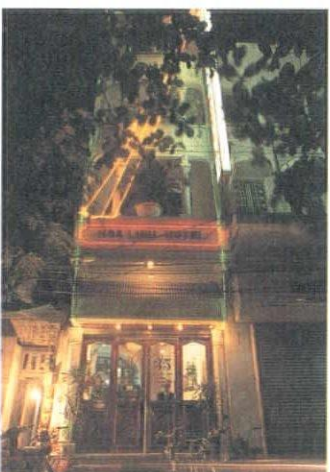
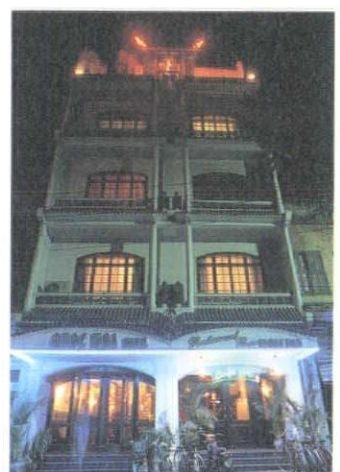
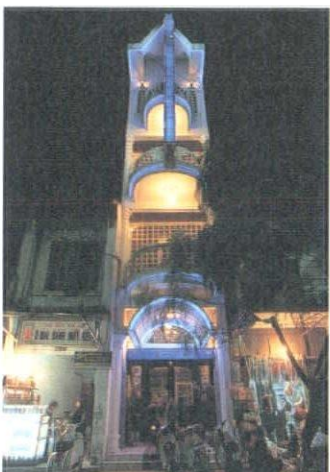
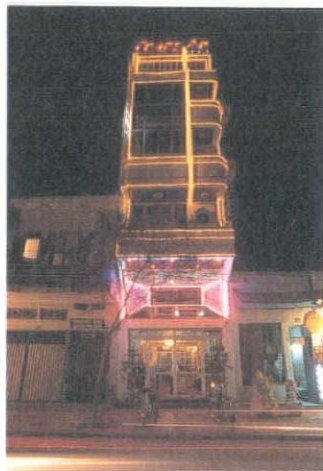
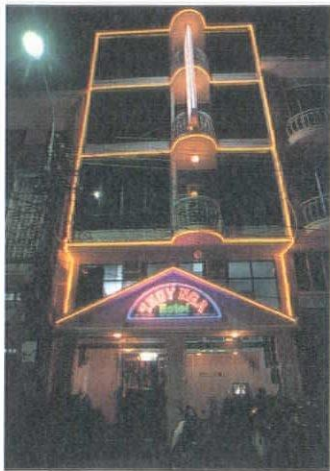
ただ、設計者の掌中にある装飾やスタイルの手駒はさして多くはない。差異をつけるためには、装飾の「語彙」自体の巧みさやその組み合わせの妥当性よりも、「過剰さ」が利用される。外から移入され、装飾本来の文法が理解されていない状況下で、ありがたいことである。

奇妙な風景を発生させるその第2はプランにある。ホー・タイ付近の外国人住宅は、比較的大規模な敷地の上に建てられ、比較的正常な風貌をもつ。だが、ミニ・ホテルの大方は間口が狭く、奥行きが深い短冊状の敷地の集合した伝統的町並みの中に造られている。

この敷地に4～5階のミニ・ホテルが建つとあらば、当然、偏平なペンシル・ビルになってしまう。低い伝統的な町並みに、突如、によっきりと屹立するミニ・ホテルの風景は、ある人間にとっては伝統的町並みの破壊に見え、また、ある人間には、アジア都市の普遍的未來像にも見える。

観光客の増加はやがて下降し、国営ホテルの逆襲も始まる。1992年から約5年間に建ったハノイのミニ・ホテル群は、将来、「建築家なし」の建築として脚光を浴びるはずだ。

●むらまつ・しん



阿部俊行

ベトナムは、1975年アメリカとの戦争を集結させ国際社会に復帰したが、その3年後ポル・ポト政権下のカンボジアに軍事介入した。これが西側諸国の反発を招き、援助、投資停止などの経済封鎖を受け、ベトナムはソ連・東欧圏への依存を深めた。しかし、1980年代に入るとソ連・東欧圏の経済困難から援助が停滞しはじめ、経済状況は最悪の事態となった。こうした状況から、1986年末にグエンバンリン新書記長のもとベトナムはドイモイ政策（経済開放）に転じ、1989年にはカンボジアから撤兵し西側諸国との関係改善も計られた。その結果、1992年には日本からの援助も再開され、1993年1月にはアメリカは経済封鎖を解除。その後は多くの外国系企業がベトナムに非常に大きな関心を寄せる時代となった。当初は、サービス業を中心とした華僑資本が多かったが、現在はベトナム政府は特に工業分野での外国からの投資を歓迎し、その中で日系企業の進出もようやく具体化してきた。その一方で、受け皿としての工業団地の整備となるとベトナム側は資金不足で、インフラ整備、工業団地造成も外国に頼っているのが現在のベトナムの状況であり、これについて報告する。

1. 外国資本のアプローチ

ベトナムはドイモイ政策によって政治も経済も開放されつつある。とはいえ、やはり共産主義体制をひきずっており、中央集権的構図は強い。工業進出に際しても、やはり様々な規制や指導、問題点も多い。

ベトナムへの進出にあたっては、まず第一に、進出地域や100%外資現地法人、合併企業形態などについて希望を決定したうえで、これを担当する国家協力投資委員会(SSCI)に進出の意向を伝えることが必要になる。規則は業種、地域によって様々に異なる。

次に、市場性、土地リース料、労働力の質、量、国民性、地域性、競争相手の進出地、受け入れ地のインセンティブ、税制、港湾、空港、大市場などからの距離等々を検討のうえ、適当な候補地域を選定する。そして、その地域の人民委員会にある対外経済関係局や投資計画局、投資計画委員会などを訪ね、適地を紹介してもらう。

また、共同企業のもつ工場を利用したり、あるいは100%外資の場合、業種により各省庁の国際局にて担当の局を紹介してもらい、休業中や使用していない施設を探すのもひとつの方法である。

また用地を、ベトナム国内の工業団地にするか、輸出加工区にするかの選択も大きな問題である。輸出加工区は外国扱いであり、従ってSSCIの許可は不要で開発会社とその地域を管轄している市町村で作る管理委員会が審査、許可を出す。材料の持ち込み、持ち出しは原則自由。生産物は輸出が原則であるため、100%外資企業も認められる。しかし、ベトナム国内販売には関税を払う必要があり、投資目的によってどちらを選ぶか違ってくる。

2. ベトナム政府の全国総合開発計画 ——北部重視の方針

ベトナム政府国家計画委員会(SPC)は1995年2月、2010年に向けて「ベトナム地域開発計画の方針」と銘打った長期計画を打ち出した。これは、ベトナム国内をハノイを中心とする北部3地区、ダナンを中心とする中部2地区、ホーチミンを中心とする南部3地区、計8つの地区に分類し、それぞれの地区の開発方針を決定したものである。GDP(国内総生産)に占める割合は、ハノイを含む紅河デルタ地区が17.9%、ホーチミンを含む南東部地区が32.0%(1994年調べ)で、現在南東部地区の経済成長が著しいのは周知のことである。しかし、この計画によると、GDPの成長率は2000年以降、紅河デルタ地区が南東部地区を上回るという見方をしている。

そして一方、外国企業誘致を核とした計画では、ハノイ・ハイフォン・カンニンの北部三角地帯、ホーチミン・ビエンホア・ブントアの南部三角地帯に加えて、ダナン・ドゥンカットの中部回廊地帯を経済成長の上で3大戦略地域と位置付けている。今後はベトナム北部、ベトナム中部の開発にも力を入れていく方針という。

特にベトナム北部について、国家の投資、援助を担当する国家計画委員会は、政府開発援助(ODA)を出来るだけ北部に充当しようとしており、現在、外国政府からの援助で北部インフラ整備に全力をあげている。これに

より発電所、湾港、道路、鉄道、水道などを整備する予定である。また、民間の投資許可を担当している国家協力投資委員会(SSCI)は、外国投資家がホーチミンを中心とする南部に投資したがる傾向の中で、経済的にも立ち後れている首都ハノイのある北部に出来るだけ投資するよう外国投資家に働きかける方針をとっている。なお、昨年12月からSPCとSSCIは計画投資省(MPI)に統合された。

3. ハノイを中心とするベトナム北部 ——政府による進出企業支援

ハノイを中心とする北部は、投資の呼び水となるインフラの整備が遅れており、現在外国の援助により整備を行おうとしている。現在までの外国企業の進出に際しては、水田、荒れ地を投資家自らが開発したり、休眠中の国営工場などの敷地、設備を利用してきた。

そのような中で、韓国、大宇グループがハノイ郊外のジアラム地区、サイドンで工場用地を造成したが、これが北部では初めての工業団地開発として注目されている。ここには大宇関連の数社が工場進出を決め、日本のカメラメーカーも参加を予定している。

ハノイ周辺では、都心から空港へ抜ける途中の紅河にかかる越ソ友好橋周辺のタンロン近辺も開発が期待される。しかし、現状は青々とした水田であり、排水処理などに困難が予想される。

これに対し、洪水等の心配のないハノイのノイバイ国際空港より西のヴィンフー省が今後注目を集めると予想される。T自動車、H自動車、D自動車、M自動車などの日本を代表する企業がこちらを選んだのも、地盤、洪水、排水、湿気、国際空港からのアプローチなど、どれをとってもハノイ近隣より条件が良いと考えたためと思われる。現状は水田であるが、ヴィンフー省としてはT社、H社の進出予定地近くの土地を工業団地として造成する計画を策定中である。

ハイフォン市郊外の「野村・ハイフォン工業団地」も開発が進められ、北部で今すぐ進出できるところとして注目されている。しかし、土地の標高が海拔1.5m～2m位で地盤の不安があり、ハノイから100kmという距離にも問題がある。現在、国道5号線が日本、台湾

の援助で改良中であり、国際空港の計画もある。今後、様々な整備が進めば非常に期待できる工業団地になるものと思われる。

いずれにしても、ベトナム北部はこれからインフラ整備が進むにつれて発展してゆく段階である。

4. ホーチミン市を中心とするベトナム南部 ——民間ベースでの企業進出

ホーチミンを中心とする南部は、乾期と雨期に分かれ暖房は不要、温度の高いわりには湿度が低く凌ぎ易い。台風も直撃することはない。気候条件は良い。

ホーチミン市から100km以上離れたメコンデルタでは、上流の中国雲南省、タイ、ラオス方面で大雨が降ると毎年洪水が起きるが、ホーチミン市およびその東北方向は標高も高く、水害の心配は少ない。サイゴン河はカンボジア国境から発するドンナイ河の支流であり、河川の総延長は短く大きな増水は無い。サイゴン河は流れも緩く河川港として利用されている。

南部で最も活発に開発が進んでいる工業団地は、台湾が開発した「タントウアン輸出加工区」。第1期分譲が完了し、第2期もほぼ完了となりつつある。全進出企業数100数社のうち、台湾系企業50数社、日系企業42社というほどの盛況ぶり、10社が操業中、11社が工場建設中、他の土地も予約済みとなっている。

この他に、ドンナイ省ビンホア市の「ビンホア工業団地No.2」はコンピュータメーカーF社の進出が決定、日系企業も他に数社が進出を決め、約350haのほとんどが予約済みという現状である。また、隣接地にタイのバンパコン社が日本の商社と共に「アマタ工業団地」を開発予定であり、来年中にはインフラ整備を完了する予定となっている。

さらに、海水浴場で有名なリゾート地ブンタオ近くの「ゴウヤウ工業団地」も、食品、化学工場などが決定し売上に近い状態である。ブンタオ方面での今後の新しい開発予定地として、建設省とドンナイ省が「ロンタン工業団地」開発を競っており、クライスラーの進出先と言うこともあって注目されている。

国道13号線沿いのソンベにある「ビエンホア工業団地」も注目すべき地域で、シンガポール企業が500haを開発する計画もある。メコンデルタの中心地カントー市も、輸出加工区を設けて外国企業を誘致しようとしている。

ベトナム南部は、「ベトナム共和国」(南ベトナム)時代に西側諸国が社会インフラ充実のための援助をかなり行ってきた事により、地域の産業基盤、中小企業の蓄積などが残っている。また、資本主義的合理性を多少理解

した経営者、技術者が75年以後も活躍し、西側の国より資金と技術を身につけて戻ってきた者も多い。これらが、投資家の安心感と進出意欲をもたらしていると思われる。

5. ダナンを中心とするベトナム中部 ——インドシナ開発構想の将来拠点

ベトナム中部のフエ、ダナンは乾期と雨期のある南部の気候となり、台風も毎年来る。地形的にも山が迫っており、平野があまりなく土地もやせている。しかし、天然の良港ダナン港の評価は高く、ラオス、カンボジア、タイ東北部と結びついた新たな地域経済圏の拠点として有望視される。日本の国際協力事業団(JICA)によるベトナム中部地域総合開発計画もスタートし、ベトナム政府は中部経済圏を新たな国家開発の軸をすることを目指している。具体的にも、ダナンには数年前からマレーシアと合弁の輸出加工区が設定され整地が完了寸前まで来ている。とはいえ、南部ばかりでなく北部に比較してもこれからといった感はまだぬがれない。

6. ベトナム北部・中部の今後

こうしてみると、やはり現時点での外国企業の進出先として、ベトナム南部に安心感がある。役所との折衝でも、北部と南部では対応が異なり、北部では役所への訪問に際しては予約を事前にとることが必要で、ことにハノイ市の場合多くの訪問者に対して担当者が少なく、予約にも時間がかかる。また、受け皿の組織、例えば〇〇団地開発公社といった組織もまだ少ない。南部は、比較的対応が早く、より積極的に省や市の各人民委員会の下に開発公社が作られている。中部は、現在この対応をハノイを介さず地元だけの打ち合わせで中央の許可を代行できるような体制作りを進めている段階にある。

しかし、今後の計画をみると、北部の政府の肩入れによる大規模なインフラ整備、中部の白紙からスタートする計画とインドシナ全域に対するポテンシャル、即効性に賭けるか将来性に賭けるか、今やベトナム全土が開発と工業化の波の中で前向きに進んでいることは間違いない。

●あべ・としゆき／(株)間組ベトナム駐在員事務所副所長

工業団地	所在地	概要
サイドン工業団地	ハノイ市、ハノイ市南東	韓国工業団地が最も進んでいる。韓国へのリース代は3\$/m ² /年。今後これよりも高くなるだろう。これ以外に近辺一帯を工業団地にすることが中央政府により決定されている。現状は主に水田または畑である。インフラ整備は投資家の負担である。
タンロン工業団地	ハノイ市、ハノイ市北部	最近ハノイ人民委員会が推進している。日本の某商社が進出を決定したようである。ハノイより国際空港への紅河の堤防であり、洪水排水地盤の面で心配。
ドンアン工業団地	ハノイ市、ハノイ市北部	ハノイよりノイバイ空港途中のコーロア近く。ハノイより25kmで通勤可能。一面の畑、国営工場と思われる建物で散財している。日本の資金で現地企業が開発予定という。日系企業はここに誘致する予定。約200～300ha。水は地下水。電気は送電線が辺りに見られ、心配はなさそう。
ソクソン工業団地	ハノイ市、ハノイ市北部	ノイバイ空港の北東側。ハノイより45km、車で70分通勤は現状で難しい。経済自由特別区を予定。近郊にニュータウンも計画。200ha以上。
カイクアン工業団地	ヴィンフー省、ヴィン・イエン市	ハイフォン市よりハノイへ15のフク・イエン市には日系自動車企業のT社、H社、M社、D社の進出が決定されている。その西10kmの場所がヴィン・イエン市であり、当時はその郊外である。T社、H社の敷地は田園であるが、例外的に工業用地転換の許可を首相より得た。しかしながらヴィンフー省は、それ以上の水田の転換は認めず、当地の岡を開発したところ工業団地を開発し、その受け皿にしようと計画している。面積500～1000ha。電力は豊富にある。近くに変電所がある。日系の開発をヴィンフー省は期待している。
野村、ハイフォン工業団地	ハイフォン市	ハイフォン市よりハノイへ15km。予約を受け付けた1995年9月より1996年1月より仮契約開始(この時点で総額の10%預託)分譲予定面積は第1期63ha、第2期60ha。海拔約2m、排水洪水、地下水位地盤に問題がある可能性あり。現在のところ、国際空港がなく、ハノイより車で約2時間かかる。ホーチミンからは国内便で直接行ける空港がある。
タントアン輸出加工区	ホーチミン市	一歩進んだ工業団地と思われる。住民の立ち退き問題はない。推奨進出業種は軽工業。充分な環境対策がある場合はどの業種でも歓迎する。インフラ整備は申請後3ヶ月に敷地の入口まで上下水道、電気電話道路を完成。進出企業数は申請24社、その内6社にはライセンスが発行された。
ビンホア工業団地	ソンベ省	国道13号線、ゴルフ場東にシンガポール企業が500haの工業団地開発予定。1996年着工の予定。申込み状況は30社がSCCI(国家協力投資委員会)の許可待ち。12社は許可済み。3社は操業開始。
アマタ工業団地	ドンナイ省	ビン・ホア工業団地の東。分譲開始は1996年5月、受付中。インフラチャージはなし。発電所が2～3年後に完成の予定。
ロンタン工業団地	ドンナイ省	南部でもっともポテンシャルが高い、と思われる。ビン・ホアよりブンタウ市に行く国道51号線に沿う。2社が進出の申請を出している。当初は75年以前にアメリカが石油基地を予定して工業団地造成をしていた。75年以後はソ連が同じく石油基地を建設する計画があり、多少アコム関係の施設を建設。現在は石油関連はバリア地区に変更されている。
ゴウヤウ工業団地	ドンナイ省	ビン・ホアよりさらにブンタウに近い。すでに開発が始まり、あと10haしか空きがないとか、既に全域契約済みという話もある。国道51号線の入口には化学調味料の工場が建ちつつある。重工業所属の肥料工場が敷地に隣接して操業している。
ダナン輸出加工区	中央政府認定輸出加工区	整地が行われやっとなだかという感じである。最近アメリカ企業が現場近くのノンノック海岸にホテルを建設する話がある。ラオス、タイと国道を通じて有機的につながってくると発展する可能性がある。

北部の開発

——ハノイ周辺の新都市開発

森 映子

ハノイ市人民委員会が掲げる「ハノイ市マスタープラン2010」が現在進行している。この中で最重用とされるのは今後の都市化、工業化に則した道路交通網と新都市開発である。

道路交通網に関しては、1、3、5、6、18、32号線といった高速道路の計画に加え、「ハノイ環状道路」が郊外の開発地域と中心部を結ぶものとして期待を集めている。今後の都市化はこの「ハノイ環状道路」の外側に向かって国道沿いに広がるものと思われるが、インフラ整備を伴う新都市開発は、都市のスプロールを食い止め、環境保存に留意したニュータウンコンセプトが用いられるであろう。現にゴー・スアン・ロック建設相は、工業に関しても輸出加工区に設けられる企業と工場は環境にやさしいものという条件を出している。工業開発・観光開発の点で注目を集められる地域は紅河の北岸、ジアラム、ドンアン、ソクソンといった地域である。

こうしたハノイ周辺の開発の中でも、中心市街地からノイバイ国際空港につながる北部回廊地域、および近隣の輸出加工区として計画の進むドンアンおよびソクソンは注目すべきである。ノイバイ国際空港はベトナム国内にある3つの国際空港のひとつであり、もうひとつのダナンにある空港がほとんど機能していないことを考えるとホーチミン市のタンソンニャット空港に次ぐ国際ゲートウェイである。経済面こそホーチミン市に先行を許しているが、官庁の集まるハノイは外交上欠くことの出来ない都市であり、今後の国際化に伴い発展が予想される。

こうした状況の下、特にソクソン地区の工業開発は臨空港型開発として他のアジア諸国からも注目されている。同地区は人口22万人(1994年調べ)、年に2.2%の増加を示している(国家平均とはほぼ同値)。そのほとんどが農業に従事しているが、国家計画に従い現在の農業中心経済からハノイ市の工業および観光の中心に移行しようとしている。しかし地勢状況から起こる問題として地域給水や排水システムの不足、さらにノイバイ新空港開発に伴うインフラ整備計画地域からの移動を余儀なくされている。だが、立地条件に恵まれた同地区は次世紀の都市化を担う地域となること

は疑いもない。

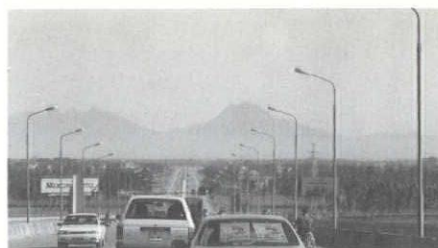
昨年4月、マレーシア資本との合弁会社であるノイバイ開発会社は、政府の承認を受け(認可期間50年間)、ハノイ土地管理局から用地を引き渡された。現在450haのハイテク工業団地が計画され、第一期案100haの用地が準備されている。3分の2を89ブロックに区分し、業種単位で配置する計画である。総投資額300万米ドル、創業後は年間1.5億ドル以上の輸出製品が生産されると見込まれる。今後の建設には電力・水道・通信といったものの整備が重要になってくるが、各々調査が行われており、ハノイ郵便局も3000回線の電話交換局を計画している。

地域住民の雇用の増加も2万人以上と期待されている。事実、農業に従事する地域住民の中にも職業訓練を受けて農業以外の職を手にしたいという希望が多いようである。こうした現地住民の意識からすると、良き指導者がいれば急速な変化発展を示す基盤は整っているということになる。政策としても、現在南偏重の経済格差を是正しようという機運が高まっていることもあり、北部に乗り出すには大変良い機会であると思われる。現在の経済状況および水田ばかり目につく現状を見て、北部の開発に消極的になってしまうのは大変もったいないことと思う。

観光開発計画も進行中である。ハノイ市人民委員会は「ウィークエンド&ホリデイビレッジ」としてホテル・自然環境適応型の娯楽施設・歴史的資産などの複合開発500haを計画。それに加えてマレーシア資本とのジョイントベンチャーで100haのゴルフコースを併設する計画がある。

一方、ノイバイ空港とハノイ市街地の中間点にあたり、タンロン橋の近くの、タンロン工業団地の計画は350haの敷地を予定されている。また、国道3号線沿いのドンアン工業団地は現敷地の拡張(150ha)およびドンアン2(350ha)の開発も計画されている。現在ドンアン地区では、自動車、自動二輪、自転車の部品および電気機器を扱う工業が立地しており、さらに拡張を図るという構想である。

観光開発に関してもドンアンにあるコロー城塞は価値ある歴史的遺産としてハノイ市人



ノイバイ空港へ向かうハイウェイ

民委員会による5大観光開発のひとつとなっている。また「ヴァン・トリ・ホリデイパーク」もその1つで、自然環境に恵まれたスポーツと娯楽のための複合施設として計画されている。

●もり・えいこ/株バシフィック・コンサルタンツ・インターナショナル



ハノイ周辺の工業団地



ホーチミン周辺の工業団地

作図=久世健

南部の開発

——タントアン輸出加工区とサイゴンサウス計画

高橋俊介

南部は国内で最も早くからインフラが整い、北のハノイよりも外国からの投資が多い。中でもホーチミン周辺は最も活発に開発が進められてきた。現在その代表は、タントアン輸出加工区とサイゴンサウス計画である。

ホーチミン市はかつて、東のサイゴン川と南のドイ運河に挟まれた小さな港町であった。その後の市街化の動きはこの「古いサイゴン」を起点としてもっぱら北と西へ向かった。メコンデルタを背景にベトナム第一の都市として成長を続けたホーチミンの機能は、河の北西のエリア内で飽和し、停滞し始める。

タントアン輸出加工区

ドイモイ政策が掲げられてから、真っ先に経済的な牽引力を期待されたホーチミンは、急速な工業化と市街地開発が必要であった。手っ取り早い方法は海外からの投資である。ところが現状のベトナムは、海外の投資家にとって、未知のチャンスをつかむ魅力より大きなリスクがある。未整備なインフラ、不安定な流通、商取引に加えビジネス上の法体系も未整備なためトラブルはそのままダメージにつながる。このジレンマを解決した画期的な手法が輸出加工区であった。輸出加工区とは、自由貿易工業ゾーンであり、整ったインフラ

つまり、工業団地が準備され、そこに進出した投資家は税制上、財務上優遇措置を受けられるというもの。いわば免税店の工業版である。これを世界で最初に実現したのは台湾・高雄輸出加工区であった。この自国のノウハウを生かして、中華民国国民党を主要株主とする企業、CT&Dグループはベトナムに「タントアン輸出加工区」を提案、投資を始めた。

タントアン輸出加工区は、ホーチミン開発の盲点ともいえる。北西に延びていった市街地であるが、逆に間近な東隣りのサイゴン川流域の300haの土地を開発した。1991年にプロジェクトが成立し、2万tの船舶を入港させる港湾の隣に位置する好立地に助けられて、ベトナムへの投資の呼び水となる。過去1年半に、台湾、日本、韓国、香港などから約100社が契約を済ませている。

サイゴンサウス計画

タントアン輸出加工区が軌道に乗り始めた1992年の前後に、ほぼ同時に日本と台湾から新市街地開発の提案が出された。日本のゼネコンと商社のグループはサイゴン川の東を、台湾のCT&Dグループはドイ運河の南を敷地として選んだ。結果は川を越えるのに障害が少なく、既存市街地との連携の取りや

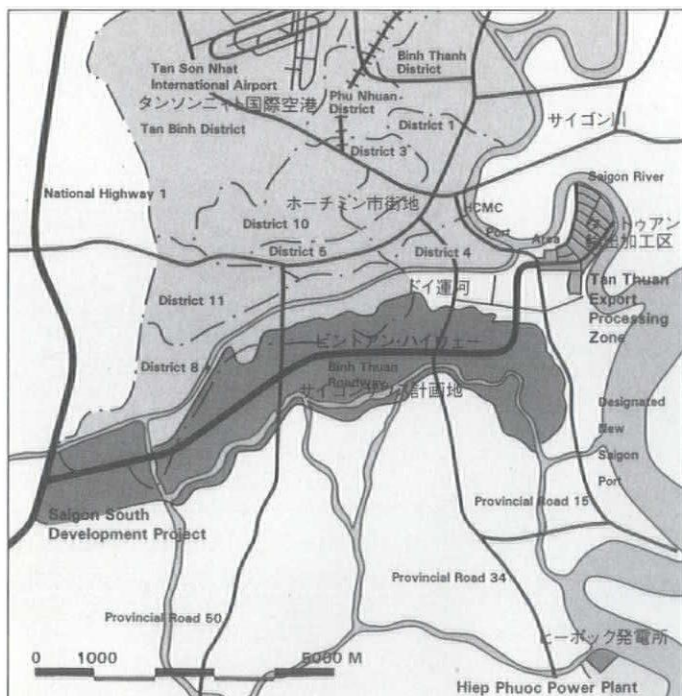


アンビン工業団地

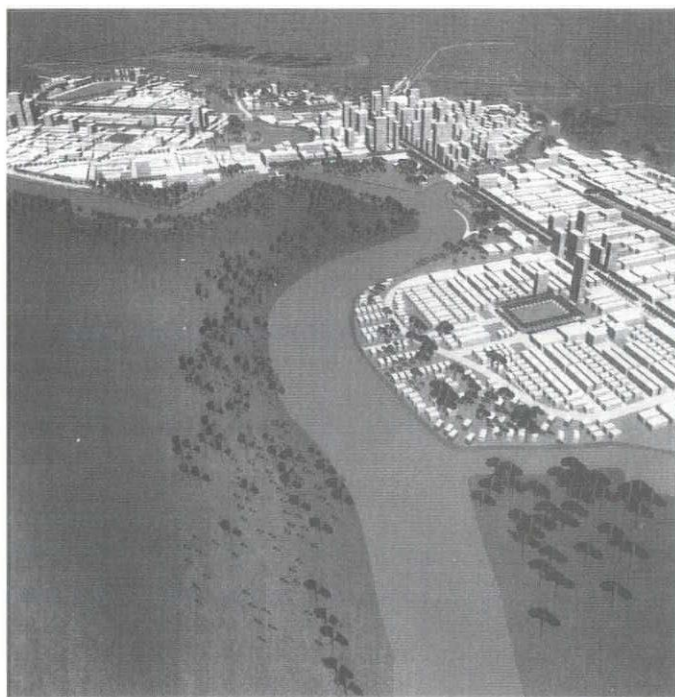
すい南側の土地を選んだ台湾案が採用された。当然台湾案は、タントアン輸出加工区との連携も考えられている。この工業団地と西端の国道1号線を17.8kmのバイパス「ビントアン・ハイウェイ」で繋いだ形が主な骨格である。このバイパスによって両側の3,300haの土地には付加価値が加わるだろう。台湾案にはさらに周到な計画が準備されていた。出力675MWのヒープボック発電所である。これは公共事業ではなく、サイゴンサウスとタントアン輸出加工区に電力を保証するためにCT&Dグループが自前で用意する自家発電設備である。

開発プロジェクトのマスタープランは国際コンペにかけられ、首位のSOM (Skidmore, Owings & Merrill, San Francisco) のデザインが1994年に国家の承認を得た。計画は100万人規模の市街地を開発するもので、自己充足型のコミュニティを繋げてゆくのが特徴である。10分で歩ける距離、約直径800mを1エリアとし、住宅、商業施設、公共施設など、異なる用途を混在させ、エリア内だけでも経済的に自立できる。1995年1月から造成工事が開始され、街区は徐々に姿を現し始めている。

●たかはし・しゅんすけ/テンフェイ総合計画(株)



タントアン輸出加工区とサイゴンサウス計画の配置図



サイゴンサウス計画実施案

村松 伸

熱血青春ドラマ——背景と主題

ベトナムの建築的混乱は、おそらくここに来てみなければわかるまい。中国など社会主義国家の開放政策に追随して、本格的に市場経済性を導入するのは、やっと1988年のこと。日本は言うにおよばず、韓国、台湾、香港、シンガポールなどのNIESの国々、タイ、ドイツ、オーストラリア、アメリカ、フランス、そして、中国までもが最後の経済フロンティアを求めてこの地にどっと押しかけてきている。それが建築的混乱を生み出している原因のひとつ。

ベトナムの各地、とりわけ、ハノイやホーチミンの都市で新たにつくられている建物は主に以下の4種類である。

- ・外国企業のためのオフィス・ビル
- ・外国人用の大小のホテル
- ・外国人駐在たちの住居
- ・成り金ベトナム人たちの邸宅

いずれも、ベトナム全体に突如舞い降りた経済的活況と関連する。外国企業のオフィスや駐在員の住宅は言うにおよばず、外国人観光客の急増もホテル乱立に拍車をかける。それで潤ったベトナム人小金持ちたちが、外国人用の住宅の後を追って家を新築する。経済も何十年ぶりかで「発熱」しているが、建築も同様、ベトナムでは異常「発熱」である。

美術館、官庁建築、体育館などという公共建築はつくられていない。一般市民の住宅事情も決して良いわけではない。が、それを解消するための住宅政策はないに等しく、だから公的集合住宅はない。もちろん、ベトナム人のために建てる民間のディベロッパーなども存在しない。

植民地時代を経験し、独立を獲得した国々は、戦後のしばらくの間、植民地時代の都市や建物をストックとして利用した。美術館も博物館も、学校もそのまま使える。銀行もあるし、政府官庁や公園、植物園、動物園、一切合切そろっている。住宅でさえそうだ。支配者たちがいなくなり、空き家になった建物数が数多くある。

それは、日本の植民地であった韓国や台湾でも、オランダ領のインドネシアでも同じであった。だが、それらの地域では70年代からの経済成長によって、かつてのストックは更

新されていった。現在、韓国、台湾、インドネシアに残る植民地時代の建物は、耐久性があるか、何かの偶然に残ったもの、あるいは保存するという強固な意思によって残されたものにすぎず、数としてはきわめてわずかである。ベトナムでも、資本主義を導入した旧南ベトナムのホーチミン市は、こちら側に属する。

社会主義諸国は計画経済を採用し、独立してすぐは脚光をあびた。だが、中国でも、北朝鮮でも、そして北ベトナムでも、やがて、経済は失速し、植民地時代のインフラや建物を建て替えることなく、後生大事に守り続けた。市場経済を導入した時、例えば上海でも同様であったが、外貨獲得のための建物—ホテルや外国人駐在員の住宅、オフィスがまず建てられた。外国人目当てにレストランが改装されるのも、開放政策の直後である。

いま、ベトナムはこの時期にある。ついでに述べておくらば、市場経済の経験がハノイなどより長い上海では、すでに中産階級の萌芽が見られ、中国人向けのデパートやブティック、ファミリー・レストラン、郊外の小綺麗な住宅が作られ始めている。バンドから黄浦江を越えた向かい側の浦東地区で、上海版マンハッタンが生まれつつあるのは、もはや旧聞に属することだろう。

さて、再び、ベトナムの都市。ここで繰り広げられているさまざまな建築現象は、さながら熱血青春ドラマのようだ。ぼくは興味をそそられずにはおれない。なぞらえついでに悪のりすれば、ドラマのタイトルは「発熱・ベトナム現代建築事情」^{チー・マツ}、主題は激変するベトナム建築界の現状を通して、アジアの都市や建物がどうやって変わっていくかを述べるものである。



ホー・タイの周りの外国人用マンション



「設計院」のつくった典型的な社会主義建築、ハノイ市政府庁舎

外国人建築家——複数の主役 1

ドラマの主役たち、すなわち、建築を設計するひとびとは、大勢いる。これも次のように4つに分類できる。

- ・外国人建築家
- ・少数のベトナム人「正統」建築家
- ・大勢のベトナム人建築家
- ・建築を学ぶベトナム人大学生

しかし、冒頭に述べた現在建設される4タイプの建物と、この4種の建築家たちが、一対一に対応するわけではない。むしろ、クライアントの国籍が設計者を決める主たる要因となる。外国人は外国人建築家に依頼し、ベトナム人クライアントはベトナム人建築家、学生を雇用するのである。

主役の第1は外国人建築家。彼らはクライアントとともに国外からやってくる。ドイツ企業がかかわるオフィス・ビルならドイツ人建築家が、フランスのそれならフランス人建築家が、という具合である。ベトナムへの投資の上位にはシンガポールや香港、台湾が顔をだし、NIESの建築家たちも大勢ベトナムにまでやってくる。彼らにとってこの地での設計活動は、さして問題ではない。メンタリティは近似し、多数いる華僑を通じて、ほぼ母国と同様、トントンと仕事を進めていく。

だが、ベトナムにおける日本人建築家の活動はないに等しい。そもそも、ほんの少数の例外を除けば日本人建築家は異文化のなかで設計活動ができるほど豪胆ではない。著名な建築家であっても、彼らが外国で設計する場合、国賓待遇のゲストとして丁寧に遇され、建物も大切に大切に「芸術作品」としてできあがるのである。NIESの建築家たちの如く、地元の施工業者と丁々発止できる人材はいまだほとんど育っていない。

唯一の例外は、長年丹下事務所に勤務した

後、独立した建築家Fさんである。ハノイでも風光明媚なホー・タイの湖岸に外国人用のマンションを設計した。日本の建築雑誌に掲載された紹介記事や写真から見ると、日本の何処かにあるものと大差はない。が、できあがるまでの経過を実際に見知っているものとしては、そこに涙ぐましい努力があったことを伝えずにはいられない。

マンションの建て主はシンガポール人、エンジニアはインド人、施工の元締めもシンガポールの建設会社、その下にベトナムの施工会社があり、出稼ぎベトナム人労働者も数多く参与する。ハノイにはF設計事務所のアメリカ人スタッフを駐在させ、Fさん自身もアタッシュ・ケースに下着を詰め込んで、週に1度ハノイ―東京を往復していた。こんな壮絶な生き方をしなければ、ベトナムで建物は設計できないのである。

日本人の建築家はFさんを除けば皆無ではあるものの、大手ゼネコンはここベトナムにすべてが揃い踏みしている。製造業の海外展開は、下請け部品生産企業の国外への進出を促し、それと同様、ゼネコンも日本企業の工場建設のためとあらば、地球の果てまで、どこまでもどこまでもくっついて出掛けていく。日本人建築家の不甲斐なさとは裏腹に、日本ゼネコンの逞しさは称賛に値する。

ベトナム人「正統」建築家——複数の主役2
続いて、第2の主役が少数のベトナム人「正統」建築家。彼らには、国家の大規模プロジェクトが割り振られる。グ・コイ・グエンやヴー・ホアン・ハックなど、何人かの名前を掲げることができるが、まずは、彼らがいかにして世に出たか、そのシステムを述べておかなければならない。

社会主義諸国は、かつてソ連のやり方をまねて、「設計院」を各地につくり、独占的設計体制を堅持してきた。それは、国家や地方政府の営繕機関の変形のようなもので、一定の設計能力をもった建築家を組織的に養成する点でメリットがあった。ブルジョアジーのためのみ奉仕するエリート建築家ではなく、主旨でいえば、人民に服務する社会主義的建築家である。

建築は、ひとりの「建築家」という英雄に

よってつくられる「作品」ではない。大勢の労働者や参加者すべての汗と涙の結晶だという平等主義に、それは支えられてもいる。しかし、何千人もの人員を抱える巨大化した設計院システムはこまわりが効かず、悪平等の平均主義で士気は次第に落ち、非能率的等々の弊害がそこに生まれた。

市場経済が導入された時、その影響は設計院にも波及し、国外の民間の建築事務所を模倣した。ここベトナムにも、いくつかの事務所が開設されたのである。悪平等にいらつきながら、爪を研いで待っていた若い建築起業家たちはすぐさま競って独立宣言を表明した。ただ、儒教の教えが色濃く残るここベトナムでは、韓国や中国と同様、出るクギは打たれてしまう。ドイツに留学し、そこで獲得したノウハウを武器に事務所を開設したベトナム人若手建築家A氏は、若手のみのグループを成立しようとして年上の建築家たちの怒りを買った。「正統性」を如何に獲得し、いかにそれを保持するかがベトナムではもっとも大切とされる。

その点で言えば、60歳も間近なグ・コイ・グエン氏（1937年～）には、「正統性」が備わっているようだ。長い間、建設省民用設計院に勤務し、現在は独立してコンサルティング会社を営む。諸外国からやってくる外交官のためのアパート（1993年）や国連地域開発センターのハノイ事務棟（1993年）は、ベトナム建築家協会大賞を受賞し、ベトナム随一の名建築家として通っている。

42歳のヴー・ホアン・ハック氏（1953年～）は、次世代の「正統性」を担う建築家。彼も、ハノイ設計院に勤務し、独立し、そして、SOS村やその付属学校（1990年）を設計している。SOS村は、ベルギーに本部を置き、アジア全体にネットワークを広げて、足長おじさんを募る国際組織である。冒頭に述べたように、現在ベトナムに建つ新しい建築物は、ホテルやオフィスやミニ・ホテルなど、サービス業のための建物のみだと述べたが、この学校は唯一の例外。ただ、これも外国資金で建てられている。

彼らは、年長者を立てるという儒教精神に富む。小心翼翼と行動する術を知っている。しかし、もちろん才能が二の次というわけで

はない。ベトナム現代建築の現在の水準から言えば、このふたりの作品は、一、二を争うものである。ヴー・ホアン・ハック氏の設計したハノイのホー・タイの中のボートハウス（1990年）など、今でこそ薄汚れてはいるけれど、そこには才能がきらりと光って見える。



グエン氏の作品（国連地域開発センター、ハノイ事務所）



ヴー・ホアン・ハック氏設計のボートハウス

建築家たちの狂奔——複数の主役3

しかし、ベトナム現代建築の熱血青春ドラマたる所以は、普通のベトナム人建築家に起因する。数でいったら6千人。8千万人の人口を有するこの国で、6千人はいかににも少ない。なぜと言うなら、この中には大学を卒業したばかりのできた建築家も含まれているからだ。近年施行され始めたライセンス制度では1級建築家が200人、2級建築家が350人だという。

需要は多く、建築家は少ない。ならば、どうなるか。建築学科に在学中の学生たちも総出で設計にあたらなければならない。いや、「あたらなければならない」というのはやや語弊がある。社会主義経済から市場経済に突如移行したこの国では、温かく扶養してくれる親方ベトナムの福祉社会はすでにない。国中が生き馬の目を抜く競争社会へと様変わりし、すべてを自らで解決しなければならない。

建築家はもとより、学生も教師も、こぞってアルパイドの設計に精を出す。経済成長は同時にインフレをもたらし、旧態依然の俸給だけを頼っては生活することすら難しい。学



若い学生たちがつくったドラゴン・アーキテクト

生たちとて、カメラを買ったり、見学旅行にでかける資金が欲しい。それに、隣が儲ければ自分もという、人間特有の羨望の心があちこちに芽生え、かくして、建築家たちの「狂奔」となるわけである。

この「狂奔」で生まれる建築は、主に、ミニ・ホテルと外国人用住宅、そして、成り金ベトナム人の邸宅である。微妙な差異とその分析手法について、すでに本誌「ミニ・ホテル」(p.142~143)の項で述べた。欲望を記号に置き換えて、「箱」にベタベタと張りつけていく。「箱」と言うのは、プランニングのこと。間口が狭く、奥行きのある短冊状の敷地から新たなアイデアが、そうおいそれとできるとは思えない。

ただ、こうまで、「ミニ・ホテル」や外国人用邸宅のすべてがすべて同じようなプランニングを採用しているのを見ると、設計者の頭には、「箱」の外側への装飾＝設計との考えがインストールされている、そう邪推してしまう。ベトナムで設計資料集として売られている書籍には、いくつかの「箱」のタイプが掲載される。してみると、やはり、ここベトナムでの建築家の善し悪しは、「箱」にいかにつ加価値、つまりは、表層的なスタイルを付着させていけるかにかかっている。

先に述べた、ベトナム建築界の「正統」建築家、若手のホープのヴー・ホアン・ハック氏設計の住宅を見学したことがある。場所はフランス人によって計画された新市街地の真っ只中、1930年代の住宅を改築したものである。一軒の家を半分に割り、その右側だけを改築している。骨董を取り扱うクライアントが、ここ数年間急増する外国人相手に小金を貯め、住まいを一新しようとし、年来の友人であった建築家ヴー・ホアン・ハック氏に依頼したのである。

半分に割ったから、一軒でも狭い敷地がさらに細長くなり、そして、その上に洋館が出現する。ヴー・ホアン・ハック氏が設計した住宅にはよくが期待したのは、ベトナムの「正統」建築家が、この自由度の少ない短冊状の敷地で、いかにステレオタイプを打破し、新鮮な解法を示してくれるか、であった。だが、残念ながらはくはく期待ははずれてしまったようだ。細長い既成の平面計画を踏襲し、前から2/3ほどの位置に階段室を配置する。

外観の洋風スタイルはさすがに見事、フランス人の設計した付近の年代物のヴィラと比べても遜色はない。おそらく、クライアントがヴー・ホアン・ハック氏に依頼したのは、外側部分の薄洒さぎを期待してのことであつたろう。完成した住宅は、クライアントの希望に違うことなかった。だが、ベトナムにおける住宅の「革新」には寄与していない。

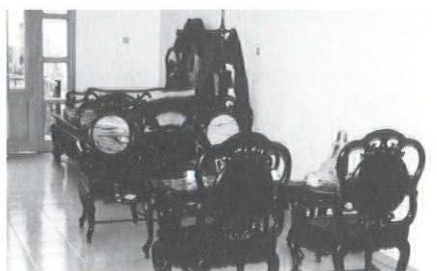
まして、「狂奔」するその他多数の建築家たちに、同様のことを求めても酷であろう。ヴー・ホアン・ハック氏ほどの外皮の装飾でも長けてはない。彼らのつくった建物の装飾はフランス建築という文法の統辞法から逸脱し、そして、ラブ・ホテルに似たキッシュ建築がベトナム全土を埋め尽くすことになるのである。

挑発装置としての建築メディア——大道具

ベトナム人建築家たちが同じ方角へと「狂奔」



ハック氏設計の改築住宅



住宅内部にもステレオタイプがはびこっている

するのは、建築界への貢献や住宅整備という志よりも、とりあえず、儲けられる時に、儲けておけという世俗的な本能に駆り立てられているからではある。

だが、下半身の欲望刺激は経済成長が生み出しているとしたら、上半身、つまり、頭脳部分を挑発するのはメディアである。これも思いつくままに羅列するならば、

- ・衛星テレビ／越僑のインフォーマル・ネットワーク
- ・外国の建築雑誌
- ・国内の建築雑誌
- ・建築家たちの海外視察

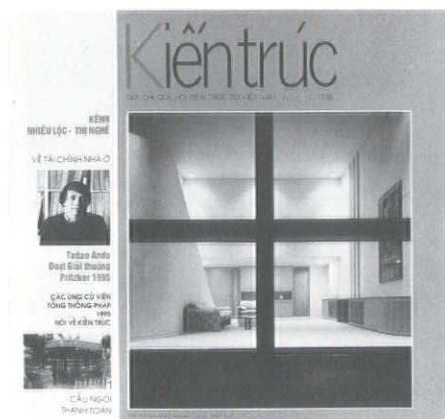
とでもなるであろうか。

第1の衛星テレビや越僑のインフォーマル・ネットワークは、主にベトナム人一般に訴えかける。CNNやスター・テレビから流されるドラマやコマーシャルは、きわめて具象的に、視覚的に憧れのライフ・スタイルを、目の前に提示する。難民として出ていった同胞たちも、欧米や日本で送る「優雅」な生活実態をなかば誇張して、ベトナムに残る親戚に伝えている。

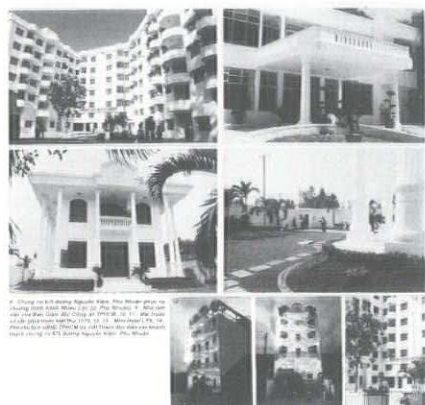
建築家に影響を与えるのは、国外の建築雑誌。『GA』やら、『a+u』といった建築雑誌からは、「世界」の「正統的」建築情報が流れてくる。もっとも、それとて長く国を閉ざし、しかも外と異常なる経済格差のあるこの国では、雑誌や書籍が系統だって集められているわけではない。知り合いがたまたま海外で購入してきたり、国外の雑誌社から寄贈され、偶然に集まったバックナンバーの何号かが、ベトナム人建築家が把握可能な「世界建築」なのである。

タイや香港の建築雑誌、インテリア雑誌はもう少し身近である。ハノイやホーチミンの大きな本屋に並べられ、たしかにベトナム出版の雑誌より高価なことは高価であるが、欧米や日本の雑誌とは異なって、実際に手にとって、買うか買わぬか、選択権を行使することはできる。ただ、これとて常にあるとは限らず、たまたま購入できたもののみが、建築家やその卵たちの本棚に納まる。

衛星テレビにしろ、建築雑誌にしろ、そこから伝わることは、きわめて皮相的なことにすぎない。何ゆえその建物が建てられ、そう



ベトナムの伝統ある建築雑誌『建築』



メディアによって通俗な情報がベトナム建築界に浸透していく

いった形態になったのか、といった背景はボンと抜け落ち、写真に映る建物の形態のみが伝達される。

ベトナムの建築関係の雑誌は、しばらく前まで、『建築』という雑誌の独断場であった。2年前に『ベトナム建築』という大型で、ビジュアルな雑誌が創刊されて、やっと競争社会に突入したのである。そこには、世界の建築家や建物の情報が紹介される。日本で言えば、まず丹下健三が、続いて安藤忠雄、そして、横文彦などが続々と写真と文章で伝えられる。

一見、体系だった紹介のように見えるものの、解説を書くベトナム人批評家や学者たちの実態を知れば、お世辞にも満点とは言えない。かれらの情報源も結局のところ偶発的にでくわした外国の雑誌の何号かにすぎず、自らの意思によって体系化したり、評価したりすることはもちろん、ない。

香港やシンガポール、マレーシアの建築家たちが、ベトナムの建築雑誌を賑わすのも、

ほくたちから見ると奇妙に見える。明らかに自己宣伝と判るが、ベトナム学生たちにはそれも夢の夢に映ることだろう。学生や建築家たちに見本となる建物が、さまざまなルートでやってくる。

ベトナムには現在4つの建築大学がある。国立はハノイにふたつ、ホーチミンにひとつ、私立は最近ハノイに設立された東都大学建築学科。学生たちは信じられないほど純である。外界を何も知らない無垢な学生や若い建築家たちにとって、一旦『建築』や『ベトナム建築』に掲載されてしまった情報は、どれが価値があるのか、判断を下すことは無理に等しい。偶然や広告やさまざまな意図で流入した建築情報が混合して、ベトナム建築の未来を養育していくのである。

青春ドラマの幕は降りず

1996年1月、知り合いのベトナム人建築評論家D先生が来日した。訪日の目的は日本の古代から現代までの建築を見学し、先進国日本の先端建築を学ぼうという、希有壮大なものである。関西国際空港に降り、大阪を皮切りに、京都、奈良、そして、「のぞみ」に乗って、東京へ、合計8日間の日程であった。

D先生の経歴は、まさにベトナムの戦後建築の歩みを象徴しているようである。高名なる文学評論家の子息として生まれた先生は、中国で中等教育を受け、ハノイで建築学を学ん

だ。大学院は上海の同济大学で修了した後、祖国ベトナム、ハノイで教鞭をとる。以後、ルーマニアと東ドイツにしばらくの間、研修のために滞在している。そして、いま、日本の現代建築に関心を示し、3月からは政府から派遣されてスウェーデンに、建築保存の研修にでかける予定とのこと。

ほくとは中国語で意思疎通をし、ロシア語、ドイツ語、フランス語に長け、そして、いま英語の勉強に動いている。建築のモデルが常に外側に存在しているこの国で、もっとも重要なのは外国語の習得である。いかに早く正確に、国外のものを紹介するかが学者の命綱、いかに早く設計に活かすかは建築家に課せられた役割なのである。

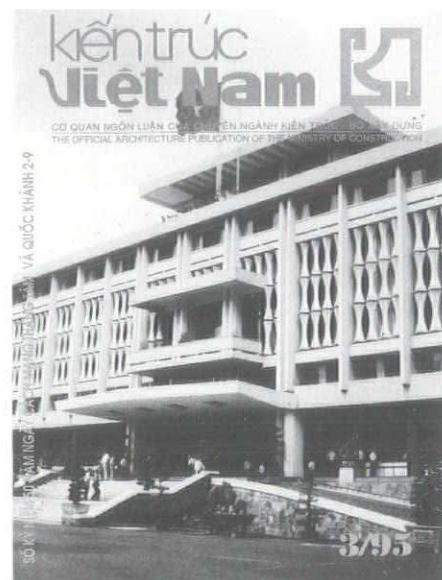
戦前から、現在にかけて、学ぶべき目標はフランス、中国、ソ連、東ドイツ、アメリカ、日本、シンガポールの建築へと七転八転する。D先生のように、すべてに通じる人物は少なく、通常は1〜2か国の建築に通暁するのみではある。が、教える方も、学ぶ方も、変化の激しさにはなかなか追いついてはいけない。さまざまなスタイルの建築が、ベトナムの町を埋め、さまざまな国の建築知識の翻訳本が書店の棚を賑わせる。

そんな激動の歴史を潜ってきたD先生の建築の見学はすばやい。ハノイで準備した予習用ノートには著名な日本建築のコピーが整頓されて貼りつけられている。先生にとってもっとも大切な事項は、ノートに貼られた建物をしらみ潰しに見ること。造形がどうの、空間がどうの、光が影が、ディテールがなどというセコイことは言わない。「見た」という事実が重要なのである。

D先生の最初の訪日の成果は、原広司氏を「発見」したこと、丹下健三氏の最近の作品を「発見」したこと。いずれもベトナム建築界にとって、はじめての経験で、それはすぐさまベトナムに役立つとのことであった。ベトナム随一の建築評論家D先生の言動を見るかぎり、この青春熱血ドラマは、まだまだ続くように見える。

通行人のひとりのほくとしては、せいぜい舞台をうろうろしながら、ドラマの行く末を見続けていきたいものだ。

●むらまつ・しん



新しく創刊された『ベトナム建築』

Photo Credit

鈴木 豊：

p.9-24, p.29左下, p.31右2点, p.33, p.49, p.59, p.66
右, p.67, p.69, p.70上1点, p.71, p.75下1点, p.79,
p.81左, p.84, p.85上中, p.86-87, p.89, p.91上, p.94
-95, p.98上右, p.101, p.113, p.114右下, p.115右下,
p.120, p.134右, p.135左上, p.143, p.147, p.152

上田博之：p.122

大嶋信道：p.53-56

菊池誠一：p.80, p.91下6点, p.112-4, p.128

重枝 豊：

p.98上左, 下, p.99, p.103-107, p.111, p.124-126

辻 鈴子 p.50-51

土田 愛：p.48

東京大学生産技術研究所藤森研究室：

p.31左, p.37-1-4, p.38-43, p.57-4-6, p.58, p.62-26-
30, p.118, p.119の27以外

友田博通：

p.85下, p.112-1, p.138-141

フエ遺跡保存センター：p.134左

福川裕一：p.81-1

森 映子：p.146

村松 伸：p.148, p.149下, p.150

早稲田大学アジア建築研究室：

p.28, p.29右上, p.37-A-H, p.57-1-3, p.60-61, p.62-
13-18, p.68-14および16, p.70下3点, p.72右, p.73,
p.74下2点, p.75上4点, p.76-78, p.130-3, p.132,
p.135下, p.136

Nguyen Khoi Nguyen：p.149上



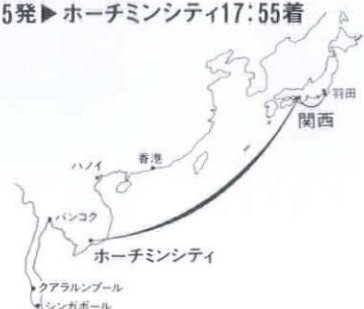
ベトナム直行、週3便。

羽田-関西=ホーチミンシティ(旧サイゴン)水・金・日曜発。

JAL115便 羽田11:30発▶関西12:45着 JAL749便 (水・金・日曜) 関西14:15発▶ホーチミンシティ17:55着

●上記スケジュールは3月現在のものです。

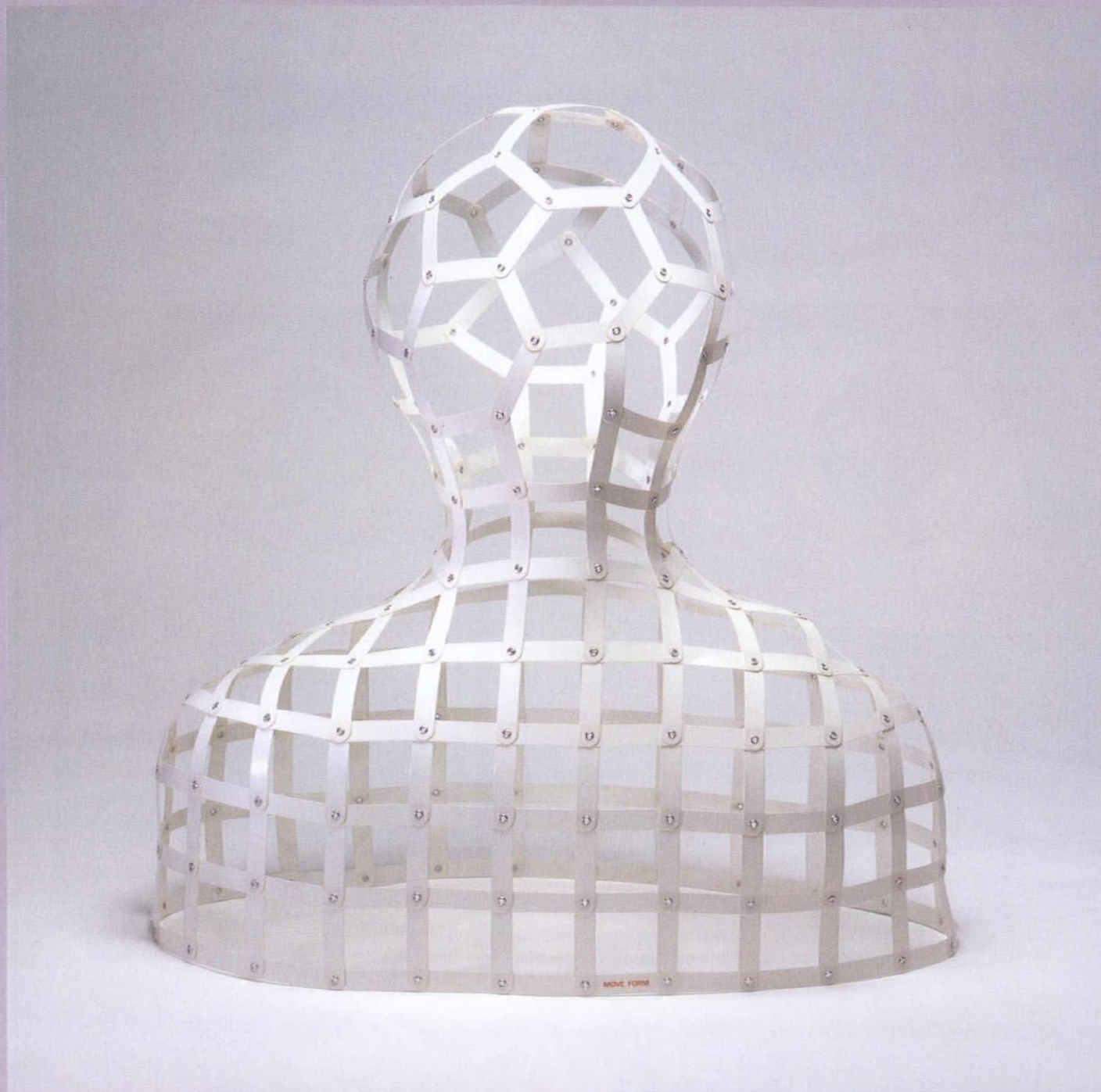
ビジネスはもちろん観光でも注目を集める。
若い力にあふれた国ベトナムへ。
関西国際空港からわずか5時間半で直行。
羽田をはじめ国内他空港からの乗り継ぎも便利です。
JALの翼で、新しいアジアへお出かけください。



お問い合わせはお近くの日本航空まで

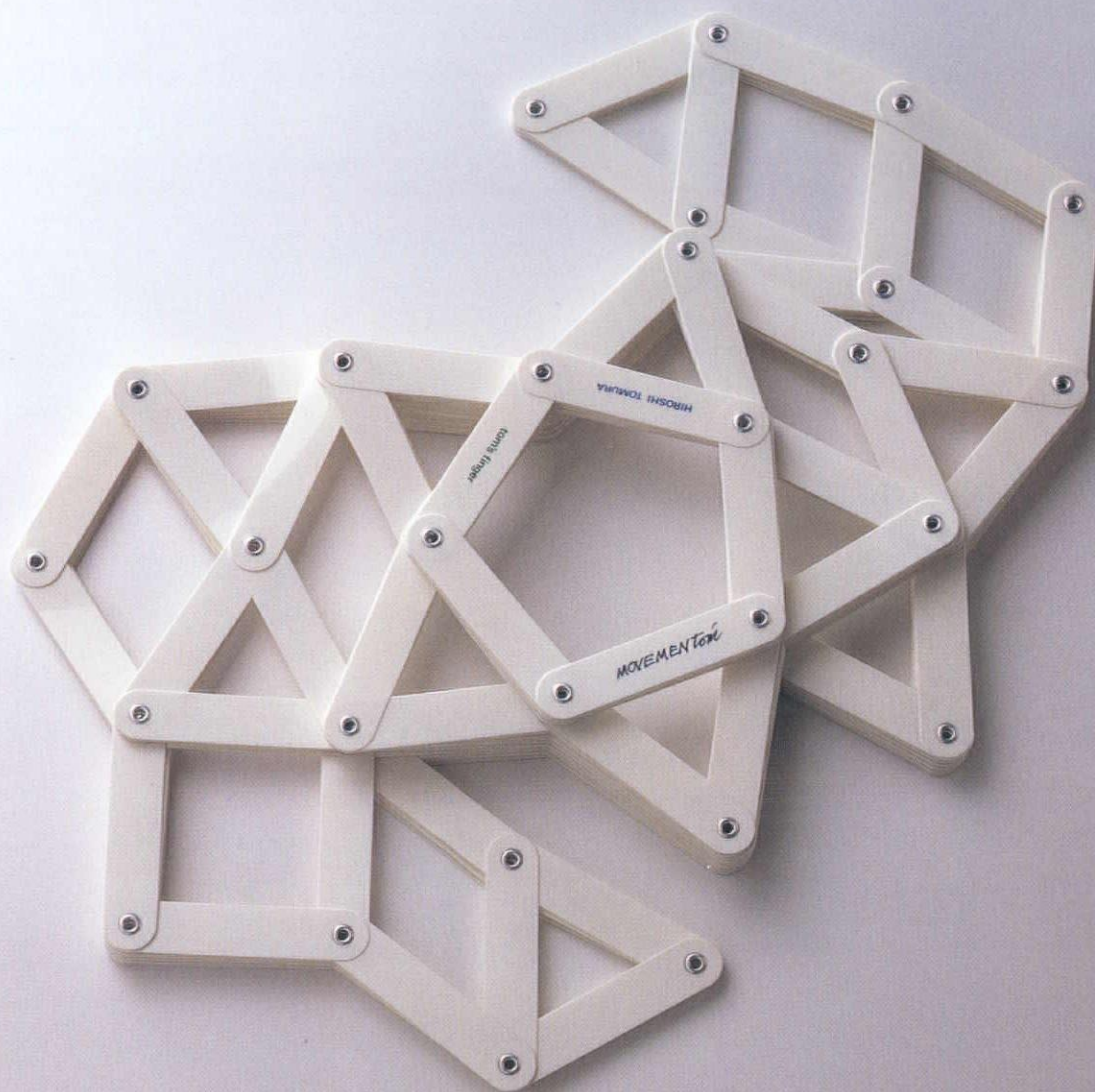


MOVE FORM——たためる彫刻: MOVEMENTOM



正方形の色紙を丁寧に折り進み、翼を広げながら、体内に息を吹き込む。すると、一枚の紙片から折り上げられた、端正な折り鶴が誕生する。今や国際語ともなったオリガミは、我々にとっても、日本の特異な伝統文化に、直接触れることが出来る良い機会である。また、幼い頃には指先を使う訓練にもなって、幾度となくその小さな方形の世界に没頭したものだ。紙の縁と縁、折り目と折り目をきちんと合わせながら、丹念に折りたたみ、一羽の折り鶴を手にした時は、物事をちゃんとやり上げたという、無心の喜びを感じることが出来た。

しかしながら時間をかけて丁寧に仕上げた、この労作の折り鶴も、壊そうと思えば、一瞬にして元の平らな紙片になってしまう。ものを造るという行為は、正にこのようなことだと、もののはかなさと、また、清めに似た感情を、ひしひしと悟らされたかのようなであった。折り紙の代表的な創作である折り鶴のように、もうひとつ、幼い頃に痛く感銘を受けたものがある。それは皮肉にも、世界の平和を願うシンボルとなった、この折り鶴とは違って、戦争のために開発された用具、落下傘であった。



はじめて映画を見たとき記憶しているのは、風船爆弾を飛ばすシーンを写した、戦争報道のニュース映画だったと思う。昇り去る風船爆弾以外に、黒々とした空爆機から、点となって、次から次へと飛び降りる兵士達。間もなく、その点が線となり、線の先端がタンポポの穂のように開いて、大空にゆったりと漂う。まるで、手品のように出現したドーム型の天蓋にぶら下がり、舞い降りてくる兵士達。その落下傘の姿は驚異的であり、真に美しかった。

絹で出来た落下傘は、折り鶴と同様、幾重にも折り込まれた見事な構造を持っている。だが、手間をかけて完成する折り紙とは逆に、このパラシュートは空中に飛び出してこそ、初めて、その折りから解放され、実体化し、的確な機能を発揮するのである。

パラシュートが開くがごとく、一瞬にしてものが完成し、折り紙が容易に平らな紙に帰るように、ものが瞬く間に解体され元に戻る。構造物として、瞬時に組み立てられ、瞬時に元に戻され

る。または、その逆の迅速な解体と再生のこの構想は、現在においても、特に未来では、大変重要な思考であろう。現に我々の生活を、急速に変えた情報社会も、この原理に即して発展してきた。テレビメディアを例にあげるならば、カメラによって写されたスタジオの実像は、直ちに電気的信号へ分解変換されて、電波として空中に発信される。それを、我々の自宅にある受信機で受け、増幅器によって組み立て直し、ブラウン管上に実映像として結ばせる。このように、情報を信号記号化、媒体を通じて伝達し、再生実体化するのが、非物質的なニューメディアの共通した本質である。

たためる立体の MOVE FORM は、このパラシュートと折り紙の、瞬時の生成回帰、双方の特質をその根底に潜めている。今回の作品も、前回のたためる絵画同様、変化し、平面になっても動き廻る、たためる彫刻「MOVEMENTOM」である。

●とむら・ひろし／造形美術家

洋の東西、伝統と近代性をむすんだ、2つの異才が交差する

芸術家の仕事とは、ただひたすら美しい“もの”を制作し、発表するだけとは限らない。

みずからの美意識を作品という〈物質〉に結実させる作業もさることながら、さらにはそうした作品が置かれる場やみずからが生活する空間の雰囲気をも、独自の美意識によって洗練させていく……そうした多面的な才覚をそなえた異才2人が、ここにいる。

彫刻から環境やインテリア・デザイン、舞台美術と総合的ジャンルで活躍したイサム・ノグチと、

書や篆刻にはじまり、作陶や美食へと展開していった北大路魯山人である。

50年代に来日したイサムは北鎌倉の魯山人邸を訪れ、かれの仕事場の一棟を借りて、陶器制作に励んだ。

本展では総合的な空間設計者として才能を遺憾なく発揮したこの2人の「趣味の眼差し」を、実際のインテリアや展示スペースの中に各自の作品を据えることで、追体験してもらえるよう工夫をほどこしてある。

ノグチ滞在時の珍しい陶器による彫刻などの作品をも含め、立体的・多角的な展示を通じて、この2人の異才の足跡を辿っていただきたい。

ジャンルを越えた空間デザイナーでもある

彫刻家イサム・ノグチの手による陶磁器、環境計画、インテリア、舞台美術など200点と、

食を中心に生活を美に変えた男、北大路魯山人の書、篆刻、絵画、陶磁器、漆器など100点を展示……

2つの空間／2人の美意識がここに出会う。

趣味の空間、モダニズムを超えて

イサム・ノグチ と 北大路魯山人

'96年3月7日(木)～4月14日(日)まで

開館時間＝午前10時～午後8時(入館受付は閉館30分前まで) 休館日についてはお問い合わせください。セゾン美術館 03-5992-0155

主催＝セゾン美術館、美術館連絡協議会、読売新聞社、日本テレビ放送網 後援＝外務省、文化庁、アメリカ大使館

協力＝イサム・ノグチ財団(ニューヨーク)、日本航空 協賛＝花王 東京展協賛＝加ト吉、三洋電機、セコム、テック、東芝、

テックエンジニアリング、ファミリーマート、丸大食品、良品計画 制作協力＝西友、西武百貨店 入館料＝一般1200円(1000円)、

大・高生900円(700円)、中学生以下無料 ※()内は団体10名以上料金(消費税込) たたし、午後7時から午後8時までは夜間特別鑑賞時間として、下記の料金で

ご覧いただけます。一般1000円、大・高生700円 セゾン美術館(東京・池袋) TEL.03-5992-8700 (アンサフォン・サービス)

Photo © The Isamu Noguchi Foundation, Inc.

セゾン美術館
SEZON MUSEUM OF ART

1995年度ブラウン賞発表

電気器具メーカーのブラウン社がスポンサーを務め、新人デザイナーの発掘を目的に1968年から行われているブラウン賞が今年も開催された。参加は39ヶ国、400人以上。委員長、ディーテル・ラム博士を始めとする審査員により、1位はマチアス・ボーナー（ドイツ、アカデミー・オブ・ファイン・アーツ・シュトゥットガルト）のポータブルテレビカメラ、2位は歯科治療用の椅子、3位はコックピットが旋回するビーチセーラーに決定した。

ポータブルテレビカメラ

現在使われているポータブルカメラは、移動しながら撮影すると、どうしても不必要な揺れが生じる。だがボーナーのこのカメラでは、まったく新しい技術コンセプトによって、そのブレが解消された。カメラは正方形の箱に設置され、その箱はさらにカメラケースの中に入っている。箱は磁気を使ってケースに固定されているため、いわば宙に浮いた格好になっている。そのためカメラマンが動いても、その動きはカメラには伝わらない。さらに画期的なのは、カメラケースが取り付けられている入れ子式のアームだ。潜望鏡のように伸ばせるため、たとえばかなり高いところからの撮影や逆にきつい仰角の撮影が可能だ。左利きの人でも右利きの人と同じように使える工夫がされ、またモニターもカメラマンの視野に入るように設計されている。

審査員は「斬新で独創的なアイデアを盛り込んで、ポータブルカメラの可能性を広げた作品。磁気を使って固定するという先端テ

クノロジーを適用した点も非常に優れている。コンセプトは現在のアートの状況を超えており、かつ現実味がある。作者のプレゼンテーションも抜きん出ている。今後は、カメラ本体の強度を重視して開発を続けると良い」と評価した。

歯科治療用の椅子

歯科治療には、患者と歯科医の双方に精神的にも肉体的にも負担がかかる。そのため、歯科治療用具のデザインではそうした苦痛を和らげることが最も大きな課題だ。今回2位に選ばれた椅子はその点を考慮し、歯科医が自由に動けるようにした点と、患者が最適な姿勢を取れる基本コンセプトが特徴だ。医療器具は、天井に取り付けられた旋回アームに設置されている。このアームは伸縮自在で、また患者の頭の回りを丸く動く。歯科医は、患者の右左どちらからでも、また左利きでも右利きでも、常に最も楽な姿勢で治療にあたれるし、器具もすぐ手に届くところに置ける。サービスユニットに取り付けられているので椅子自体には支えがなく障害物がないため、歯科医は自由に足を動かすことができる。椅子は、1m30cmから2mまでの患者の身長に合わせて、的確に調整できる。ジョイント部分は人の身体を模しており、椅子の深さや膝の曲がり具合なども思い通り。歯科設備は、患者にも医師にも気を配ってデザインをすることが重要だが、すっきりとして明るいこのデザインは、患者のストレス軽減に役立つだろう。審査員らは「この作品は、現場で何が

必要とされているかを徹底して調査し、デザイナーの中で消化してから製作されている。ここ数年、歯科設備のデザインは全体に高いレベルに達しているが、この作品はそれをもかなり上回る」と評。

ビーチセーラー

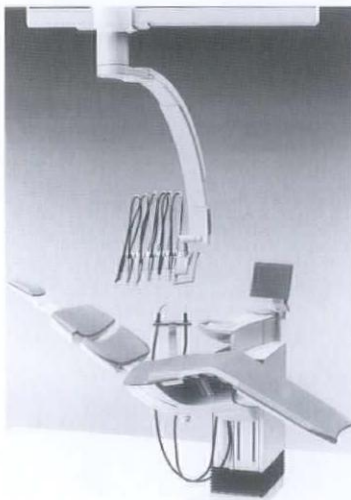
従来のビーチセーラーは、逆風のときに、体重を移動させてその風に乗ることができず、ひっくり返ることがよくある。3位のビーチセーラーの新しいところは、コックピットが旋回するようにして、それを解消したこと。風でマストが傾き、ホイールが地面から離れたら、コックピットの動きに合わせて身体を動かす。コックピットは、ピボットピンでシャシーに接続され、後ろはロープで固定されている。ドライバーは、ペダルを使ってコックピットのラッチを外し、反対向きになる。またシートバックが動くため、自分の頭の位置、視野を調整することができる。本体は、以前のようにトレーラーを使わなくても、スキー同様車の屋根に乗せて運ぶことができる。マスト、シャシー、ホイールは取り外し可能でコックピットの中に収容できる。

審査員は「コックピットを旋回させることによって、セーリングのパフォーマンスを向上させ、同時に車での持ち運びも楽になっている、非常に画期的なデザイン」としている。

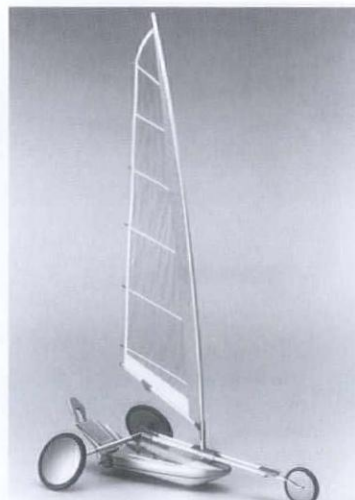
受賞作品の展覧会が12月からドイツで行われていたが、その写真展が、今後世界各地を巡回する予定になっている。



1位のポータブル・テレビカメラ



2位の歯科治療用の椅子



3位のビーチセーラー

見ること——目のウロコを落とすこと

照明探偵団が再びSDに登場する、と言っても今回は団長の面出薫をコーディネーターとする12回シリーズ「照明探偵団・連続実践講座」の内容を本誌上に毎月報告しようというものである。

ご存じの方もあろうが、照明デザイナー10人あまりで結成された照明探偵団は、1991年8月から20ヶ月にわたって、都市をとりまく様々な光の現象を調査してそれを本誌に連載した。93年にはそれをまとめて加筆し、「SD別冊23・照明探偵団」が出来上がった。それから2年が流れ、その間もこっそり夜の街を七つ道具を携え徘徊していた探偵団は、もう一度、改めてその役割を発展させる時期が訪れたと感じた。探偵、観察、調査をそれ自体の行為で終わらせるのではなく、来たるべき21世紀の都市の照明の在り方を語り、「光害」や「騒光」といったものをどうやって糾弾していったらよいのか、また、気持ちのよい快適な光はどうやったら実現することができるのか、というレベルまで発展させること、それが探偵団の新たな任務と考えた。

「日本の都市は夜に強力な光を発する自動販売機の群にいつの間にか支配されていること。東京タワーに上って街を俯瞰すると、ニューヨークやパリのような暖かい色の夜景とはまったく違って、真っ白で眩しい光に満たされていること。地下鉄のホームで電車を待つ人たちが、目をやる美しい景色もなくつまらな

そうに見えること。オフィス街では残業中の光が歩道までも煌々と照らしていること。昼間にほっとする水のみえる風景も、夜には台無しになっていること。眠れない緑が泣いていること。……」これは、面出が95年10月に毎日新聞に寄せた「照明探偵団が行く」という記事の抜粋である。これらの問題意識こそが探偵調査の原点であるわけだが、都市における様々な問題を考えるときに、私たちの活動が照明デザイナーという専門的な職能を持った仲間だけの勉強会から一歩外に踏み出したい、つまり一般性や市民性を持つことが今回の連続実践講座の主旨である。

都市生活を構成している様々な人種が、自分をとりまく環境を鋭く観察すること、都市を作り上げていくのは自分自身であるという認識を持つことを忘れてはならない。そういった意識を促すためのきっかけとして、街に出て実際に自分の目で見て学ぶ体験を共有したい、その願いを込めて照明探偵団・連続実践講座は開講されたのだ。

初回は、実際のところ第0回とも言うべきで、96年1月から12月までの毎月一度の講座のためのプロローグ=旗揚げ興行式、と位置づけられるものであった。「ようこそ照明探偵団へ—探偵団員になるための5つの心得を身につけよう」というタイトルで、建築探偵、路上観察それぞれの大家である藤森照信、赤瀬川原平

の両氏をゲストに迎えて「観察—みること」とはどういうことであるかを両氏の豊富な体験に基づいて伺った。

今回の講座には、定員を大幅に上回る多くの参加希望をいただき、会場の東京デザインセンター・ガレリアホールは立ち見が出るほどの満員。探偵団の活動に興味を持つ人の多さを改めて確認できるものであった。まず、面出によって照明探偵団の連続講座の趣旨説明がなされた。光・明かり・照明という素材が私たちの毎日の生活にたくさんの楽しさ、豊かさを与えてくれると同時に、戦後50年「暗いところを明るく照らす」ことのみに心を奪われてきた日本の照明文化の反省すべき現状についての簡単な基調報告。そして1回目のサブタイトルである「探偵団になるための5つの心得」を紹介した。

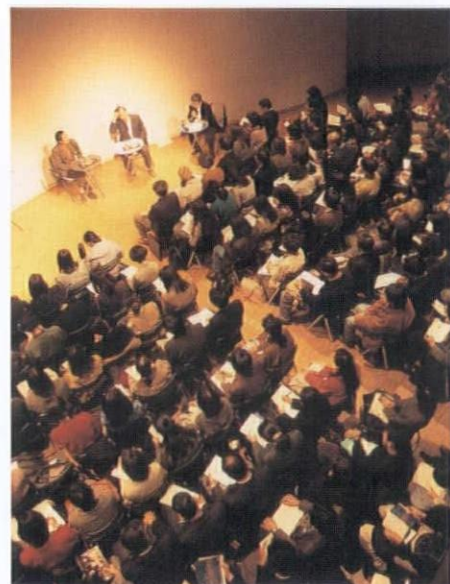
1. 常に身の周りの光の害に憤慨すること
2. 深く鋭く現場の光を観察すること
3. 芸術的な光に大袈裟に感動すること
4. 感動的な光の内容を冷静に推理すること
5. 光の体験を継続的に蓄積すること

そのような心得を持ってどのように私たちが探偵して来たのかを、照明探偵の東海林がスライドで実例を挙げながら報告した。

藤森氏、赤瀬川氏はスライドを見せながら多くの路上観察の実例、超芸術、トマソン現象を発見することの楽しさ面白さを紹介した。



会場風景
SD9603
158



会場風景

第1回テーマ：「ようこそ照明探偵団へ」
 日時：'95 11/24 18:00～
 会場：東京デザインセンター ガレリアホール
 ゲスト探偵：藤森照信 赤瀬川原平
 コーディネーター：面出薫

両氏の巧みな話術に会場には笑いが絶えなかった。彼らは、路上観察学の元祖・神様であるところの林丈二氏によって「見ること」の奥深さに文字どおり開眼して、それをきっかけとしてあらゆることが観察に足る、ことに気がつく。両氏の表現では「目からウロコを落とす」こと、これこそが純粋に『見る』ための必要十分条件であり、同時に目的でもある。

「ウロコ」は自分でおとすことは難しく、林氏のような「ウロコ落とし」の達人に出会うことが大切だと言う。それは、自力では自分にウロコがあるということに気づけないため、ウロコの落ちた人に会ったり、ウロコの落ちるような現象を複数の眼で見ることで、折り重なる自分のウロコを知るからである。彼らのこの遊びともいえる観察の中に、実は漫然とではなく「見る」ことの意味が示唆されている。

「見るというのは一回だけの体験だが、それを繰り返して行く。確かに路上観察を始める前というのは相当いい加減に見ていた。『見る』ということを経験して見えていない。始めてみて『見る』ということを経験するようにになると、全然気付かなかったことも見えるし、逆に自分の網膜の特性もよくわかる。…10年(路上観察を)やってみて人間の目の知られていない可能性が見えてきた感じがある。」(藤森氏)

「見ること、自分の目がどういう特性を持っているかを体験すること、理屈ではない人間

の眼の可能性を探る、そのためにはまず、外へ出ないことにははじまらない。「見ること」を楽しむ遊びの中に思想がつくられる。」これが、両氏からの最大のメッセージである。

対話のなかでのもうひとつの論旨は、照明探偵として光を追いかけてゆくことは、光の洪水に溢れんばかりのこの現代都市に於いては逆にどんどん明かりのない世界(原始の状態)にひかれていくのではないか、という点であった。

「照明のない世界、都市のなかでは探せない暗さ、闇を目指すこと、暗い闇に人類がはじめて光をみたときのシーンを復元的に体験する。」(藤森氏)「人間の豊かさが広がって行くのはむしろ薄暗がり、そういうところから妄想をはじめ、いろんなものが生まれて来る。神がいた場所というのも本来は暗い。明るくするとそういうものが全部なくなる。神や妖怪が棲む闇とどのようにつきあうかを探ることが大切だ。」(赤瀬川氏)

明るくないと夜も眠れないという現代の子供たち、あらゆる刺激に鈍化され慢性的の不感症に犯されている私たちは、闇の中の灯火に明るさを見いだすことを忘れてしまっているのかもしれない。「街の中でたくさんの光に翻弄されながら生きてみると、光の本当の有り難さや楽しさ、美しさをだんだん忘れていって、ただ大量の光に囲まれて満足しきってしまうことがある。」これは、サハラ砂漠に照明

探偵に出かけ、月明かりに照らされながら砂漠を歩いた東海林の実感である。

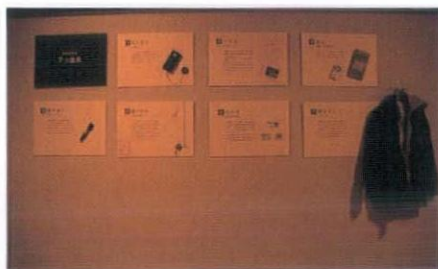
この連続講座においては、参加者が意見や質問、または提案を自由に発言できる場にしよう、というのが私たちの望みでもあるのだが、第1回目ではあっと言う間に2時間が過ぎ去ってしまい、残念ながら参加者との対話の時間がなくなってしまった。

次回以降、毎回様々な分野で活躍する文化人をゲストに招き、コーディネーターの面出との対話を通して、光・あかり・照明を切り口とした都市論、文化論に発展させていくつもりである。12回の講座が終了したときに、私たちの目指す明日がどのようなものであるか、という命題がそれなりの形となって浮かび上がってくれば成功である。連続講座を聞くだけではなく、探偵の本質であるフィールドワークを共有するために、探偵団ツアーや、ライトアップゲリラなどの参加型実践活動も適宜行う予定である。探偵団活動に参加するたくさんの仲間が、お互いの視点に触発されて、一日も早く目のウロコをバリバリと音を立てて落とすことができるように、と願っている。

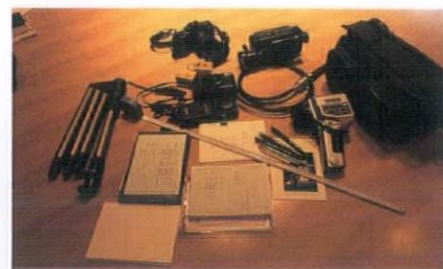
● 葛西玲子/LPA



会場風景



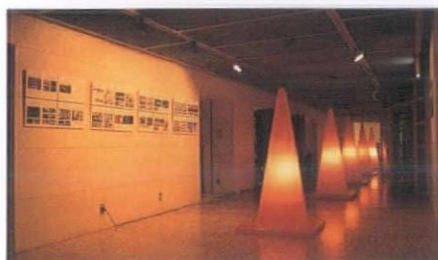
展示会場



照明探偵団七つ道具



スライドによるプレゼンテーション



展示会場風景



団員証

Salone Internazionale del Mobile
together with
International Lighting Exhibition: Euroluce
Furnishing Accessories Exhibition

18.22
April
1996

第2回
「異国」への玄関口 大連ヤマトホテル
永井良和

ホテル文化研究会メンバー（執筆順）
角野幸博（武庫川女子大学教授）
永井良和（関西大学助教授）
橋爪紳也（京都精華大学助教授）
竹山 聖（京都大学助教授）
毛谷村英治（京都大学助手）
横川公子（武庫川女子大学教授）



大連周辺



大連市街地図



中山広場（現況）

アカシアの町

「満洲」となんらかの関わりをもった日本人にとって、大連という都市は格別の感慨を呼び起こす。大連が属したのは「関東州」であって「満洲」ではない。だが、大連の港は中国大陆に向かう日本人を最初に迎える玄関口であった。大隈重信は1921（大正10）年発行の篠崎嘉郎著『大連』に序文を寄せ、この街を「満蒙の門戸」になぞらえている。多くの人びとが漠とした期待を胸に大陸への第1歩を踏みしめた。大連市歌には「東亜に誇る大埠頭／欧亜を結ぶ大鉄路／日に日に集ふ文明の／姿はこゝに映あり」とある。そして同じ埠頭で、敗戦国の民は引揚船を待った。それぞれの人生の背景にアカシアの並木がある。

大連のシンボルとなったアカシアの木は、しかし、帝政ロシアによって経営がもくろまれた時代の名残りである。関東州の租借権を得たロシアのニコライ2世は、極東の寒村・青泥窪をダルニーと名づけた。隣の旅順を軍港として、またダルニーを自由貿易港として

開発しロシアの極東経営の基盤に据えるためである。ダルニーは当初、多心放射状の街路によって特徴づけられるドイツ風の都市イメージでデザインされた。

建設途上にあった市街を、1905（明治38）年に日本軍がひきついだ。町は大連と改名、主な街路には帝国軍人の名が冠され、町名も浪速町、常盤町、信濃町などと定められた。やがて関東庁がおかれて民政に移行。1919（大正8）年には市街拡張計画決定・用途地域指定などが行なわれ、日本人の移住も本格化した。1920年代にはいと農産物や工業製品が集積する中国屈指の大貿易港に成長、1940（昭和15）年末には人口が65万人をこえている（うち日本人は約18万で全体の3割に満たない）。住居や商店のみならず学校や病院、神社仏閣、劇場や遊園地なども整備され、占領末期には百万都市の構想もあった。

連載第1回にも書かれているとおり、植民地のホテルが担われた役割は宗主国による支配のための「橋頭堡」に擬せられる。大日本帝国が満鉄線に沿って「ヤマトホテル」を

飛び石のように配置した背景にも、そういった意図を読み取ることができるだろう。

けれども、建設された場所が内陸部の都市か臨海都市かによって、ホテルが帯びた色合いもやや異なっている。とりわけ、大連という港町に建てられたホテルは、移住者や旅行者にとっていわばベースキャンプであった。もっとも、最高級のもてなしをもって知られた大連ヤマトホテルに、開拓地をめざす農民たちや小さな資本に未来を賭けた商人たちが気軽に投宿できたわけではない。が、このホテルのありさまをつうじて、私たちは大連という都市の性格を知ることができる。

ニッポン文化の移植

アジアの多くの港町がそうであるように、大連にも西洋風の文化が流れ込んでいる。ただ、この町の場合経路はいささか複雑だ。まず、ロシア人がシベリアを経由して陸路で西洋の文物をもたらした。このなかには大連という町の基本的なデザインも含まれる。その計画に基づいて開かれた港が、ドイツやイギリス、



中央公園（西公園）野球場（『大連写真帖』）



中山広場での夜間街頭ダンス（撮影：伊藤潤子）



大連賓館正面（現況）

アメリカの文化を受け入れた。だが、海路による西洋の流入は直接的な部分が少なく、むしろ「よじれた」かたちで進行したようだ。

たとえば、社交ダンスを例にとろう。中国東北部にダンスを持ち込んだのはいうまでもなくロシア人である。都市の酒場では、テーブルのおかれたフロアで酔客が女性店員と踊った。けれども日本が進出してからは娯楽施設としての専門のダンスホールが開業する。ダンサーたちが客の相手をするのが一般的だったが、同伴客が踊りを楽しむことも少なかった。遼東ホテルの屋上「第七天国」や、主だったホテルの宴会場ではダンス・パーティーがしばしば開かれている。こういった遊興のしぐみの起源は欧米にあるが、店を営んだり舞踏会を催していたのは日本人である。大正末から昭和初期にかけての日本のモダン都市文化が、大連にも移植されたといつてよい。

野球もそうだ。大連にはかつて「大連満洲倶楽部」と「大連実業団」のふたつのクラブ・チームがあって覇を競っていた。1927（昭和2）年にはじまった都市対抗野球では、この2球団のどちらかが第1回大会から3年連続で優勝旗をさらっている。六大学出身の名選手を集め、実力は日本のトップクラスにあった。しかしながら、現存する栄光のスタジアムは、野球よりもサッカーの試合に利用されている。大連はいま「サッカー都市」の称号を与えられており、野球に比べサッカーの

人気は圧倒的だという。日本人がもちこんだ野球は、日本人のためのものでしかなかった。

西洋風の音楽やスポーツ、料理やファッションが、西洋から大連に直接もたらされたわけではない。それらは、ひとたび日本に輸入され変形した西洋、いわばニッポン的西洋であった。そこにはヤマトホテルのような宿泊施設の形式も含まれる。欧米人に見られても恥ずかしくない偉容とサービス。それは、植民都市に住まう中国人や朝鮮人を威圧する装置であり、近代ニッポンの薄っぺらな自尊心の表現でもあった。

大連ヤマトホテルの支配人だった横山正男という人物が、洋食の食べ方と洋服の着方をくわしく解説したマナー・ブックを著わしている。緒言には、テーブル・マナーを知らないうちに「一等国民が野蛮人の様に誤解される」ようなことがあっては残念だ、との執筆動機が示される。中国大陸に進出していく「アジアの盟主」が欧米人の前で恥をかいてはならない。——この意識に支えられて、近代ニッポンの文明が大連に移植された。

現在の大連には、日本占領時代の残り香をかくことができる。だが、あるものはちがったかたちに変えられ、あるものはすでに幻と消えた。幻の国への入口、大連埠頭も1987年に取り壊されている。

アヘン道路

戦前の日本がしたことは悪いことばかりでは

ない、今の中国にとって財産になったものもある。——そんな発言が繰り返される。この点について、「満蒙の門戸」に立って考えてみた。

大連と、軍港・旅順を結ぶ旅大道路が完成したのは1924（大正13）年。私たち研究会のメンバーも、星海公園（旧星ヶ浦）へのドライブを楽しんだ。タール・マカダム方式で舗装されたこの道は、「阿片道路」との異名をもつ。大連市の初代市長・石本鎖太郎がアヘン売買に関わっていた経緯があり、そのときになした財をつぎこんで完成した策が旅大道路なのではないか、と松原一枝は推測する。だが、これは事態の一部に過ぎない。大陸に新たな都市をつくりあげていくために、関東庁の財政は常に莫大な支出を余儀なくされた。その財源を確保するためにとられたのがアヘンの売買である。最近の研究では、明治末から大正半ばまでの関東州の地方費収入の約54%がアヘンの取引からもたらされたという。大連は日本によるアヘン製造・売買の拠点であった。

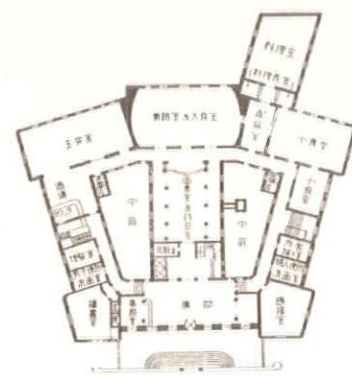
この話には前がある。日清戦争で台湾を獲得した日本は、1896（明治39）年アヘンの専売制度をスタートする。名目は中毒患者の治療であったが、初めて手にした植民地経営のための増収策でもあった。患者を治療するために必要なアヘンを製造し、一手に販売することで収益をあげるという一石二鳥のアイデアだ。これは「阿片漸禁政策」と呼ばれ、



大連ヤマトホテル（創建当時）



2階



1階

大連ヤマトホテル平面図
（高橋豊太郎他『ホテル・病院・サナトリウム』より）

発案・実行にあたったのは後藤新平である。後藤が日本の都市計画の基礎を築いた人物であることはよく知られているが、同時にたぐい稀な衛生学者であったことに注意しよう。アヘン専売事業と近代的都市経営は、植民地支配の車の両輪であったとみることができる。

台湾での実績をひきつづけて、後藤は南満洲鉄道の総裁に就く。その結果、アヘン専売は関東州でも採用された。だが、四方を海に囲まれた台湾とちがひ、大陸での「漸禁政策」はもくろみ通りに進まなかった。隣接地域から大量のアヘンが密輸され、流通のコントロールが効かないからだ。日本の支配下では、多数の中国人がアヘンの罠に堕ちていった。大連で行なわれたことは序曲に過ぎない。アヘンやさらにはモルヒネの売買が財源確保に苦しむ軍部や植民地事業関係者にとっての命綱となり、満洲事変後は中国の広い地域で展開された。中国ではこれを「毒化政策」と呼んでいる。

大正半ば、大連は「モルヒネ景気と阿片ボナス」に沸いた。旅大道路の途中、星ヶ浦には臨海リゾートが形成される。現在は若いカップルや家族連れがふりそく陽光のもとで楽しいひとときを過ごしているが、かつてその一角には後藤新平の銅像が建てられていた。

大連ヤマトホテル／大連賓館

私たちの訪問目的のひとつ、大連賓館についてスケッチしておこう。賓館の前身・大連ヤ

マトホテルは、満鉄がロシア時代のダルニー・ホテルを改築し1907（明治40）年に開業した。「満鉄ホテル」ではなく、「ヤマトホテル」と命名したのは後藤である。そののち旅行者の増加にともなう手狭となったため中央大広場（現在の中山公園）に移転、総工費90万円をかけて新築工事が進められた。近世ルネッサンス式煉瓦造地上4階地下1階、建坪660坪。設計は満鉄の太田毅と太田宗太郎、施工は山葉洋行と大庭組とが担当した。竣工は1914（大正3）年で、8月から営業を開始している。その後順次増改築を施したが、詳細は略する。115の客室のほか、主要設備として300人収容の舞踏室兼大食堂、玉突き室、読書室、酒場、大小応接室、屋上サンルーム、理髪室などがあった。舞踏室の2階にはバンド席が設けられ、専属バンドも雇われていた。

日本の敗戦とともに大連を解放したソ連軍がホテルを接収、司令部をおいた。ソ連軍が引き揚げた後は、旅大地区人民接待所としてホテル営業を再開。その後、独立採算の大連賓館となり現在に至った。客室は78に減っている。シングル1泊の料金は約1万円である。

私たちは、正面の回転ドアからホテル内部に入った。フロントの周囲や階段などは、昔の面影をとどめているようだ。客室のインテリアも、落ち着いた雰囲気にとめられている。1階奥の舞踏室では若い女性従業員が仕事のあいまのおしゃべり。中央の大応接室は、党幹部がやってきたときの特別室に転用され

たとのこと。また、読書室だったスペースだろうか、そこに「カラオケバー大和」の表示があった。中からは「昴」を歌う声が漏れてくる。こんな露骨なかたちでホテルの履歴と出会うとは思ってもいなかった。見学中に話した日本人の老人は、毎夏ここに泊まりに来るといっていた。

不粋なネオンが取り付けられた屋上に出て中山広場を見渡す。公園の整備や周辺ビルの改築のためにたくさんの労働者が汗を流していた。

大連のいま

1995年現在、大連の人口は177万。上海に次いで中国第2の港である。市内では、まさに至るところといってよいくらいあちこちで建設作業が行なわれていて、道行く人びとのようすも活気に満ちあふれている。

当然のことながら、日本とのあいだの経済活動もさかんだ。中国東北部のどの都市でも、日本製品や日本企業の広告が目をついた。日本人の姿も多い。占領時代にこの地で青春を過ごした日本人が懐かしい町並みを訪ねる、そういう旅もあるだろう。が、ふたつの国の関係はもっと大量のモノや情報の流れをつくりだしている。大連は、ふたたび日中間の物流の拠点になった。

日本だけではない。アメリカや韓国、香港の資本も進出している。そして、中国に滞在している外国人ビジネスマンの活動を支える



大連埠頭（現況）



大連埠頭（創設当時）



大連会館メイン・ダイニング（現況）

のは、やはりホテルだ。大連には、フラマホテルやホリデー・インなど400室規模のホテルがいくつかある。私たちが宿泊したフラマホテルは、ス大林路（スターリン・ロード／旧山縣通）に面してそびえ、ビジネス・センターや会議室、プールやディスコ、ジム、サウナなどの設備を誇る。館内には和食レストランもあった。このホテルは近い将来、さらに400室クラスの新館を建設する予定だという。

こういった新興ホテル群は、大連賓館や南山賓館（旧満鉄社員住宅を外国人用ゲストハウスに改築したもの）などとはまったく異なった趣きをもつ。が、国際的な経済・文化の交流の場としての機能は、植民地時代のヤマトホテルが担っていた役目のある部分を受け継いでいる。大連が「異国」への玄関口であり続けるかぎり、それは変わらないだろう。

もっとも、人びとが去来する舞台は埠頭から空港に移った。大連周水子空港との間に空路を開設しているのは全日空と中国国際航空で、成田・関西のほか福岡・仙台からも直行便が飛ぶ。興味深いのは九州財界と中国東北部との密接な関係だ。1991年から大連・青島・釜山・仁川・北九州・下関の6市による

都市会議が開かれている。目的は「環黄海経済圏」を形成するため、さまざまな共同事業を展開中である。高度経済成長時代に公害問題をかかえた北九州市と環境問題で悩む大連市とが、共同でセミナーを開くなどの実績をあげた。

かつて海路で結ばれていた東アジアの港湾都市が、ふたたび強い経済交流のネットワークをつくらうとしている。また1992年の中韓国交樹立を受けて、94年には大連—ソウル便も運航を始めた。中国・韓国・日本の関係は、今後いっそう多方面に広がっていくだろう。

半世紀前、植民地ホテルは人やモノの流れを一方通行にコントロールする政治性をそなえていた。ヤマトホテルの扉も、ほとんどの中国人や朝鮮人には堅く閉ざされていた。私たちは、もういちどやり直さなければならない。今度の旅で見た大連賓館の玄関は回転ドアだった。おそらくヤマトホテル時代のものだろう。だが、ドアはわずかな力でまわり、私たちを迎え入れてくれた。ホテルという国際交流の玄関口は、このドアのように軽やかであってほしい。

●ながい・よしかず／関西大学助教授

- 参考文献：
井上謙三郎編 1936『大連市史』大連市役所（複製版 1972 大連市史刊行会）
宇田博 1992『大連・旅順はいま』六法出版社
江口圭一 1988『日中アヘン戦争』岩波新書
江口圭一編、及川勝三・丹羽郁也 1991『証言 日中アヘン戦争』岩波ブックレット
加藤祐三編 1986『アジアの都市と建築』鹿島出版会
清岡卓行 1995『大連港にて』福武文庫
木村達次 1972『大連物語』講光社
越沢明 1978『植民地満洲の都市計画』アジア経済研究所／1988『満洲国の首都計画』日本経済評論社／1993『台湾・満洲・中国の都市計画』岩波講座 近代日本と植民地3 植民地化と産業化 所収
後藤朝太郎 1932『支那及満洲旅行案内』春陽堂
篠崎高郎 1921『大連』大阪屋號書店／1928『大連商工名録 昭和三年』大連商工会議所
全日本空輸株式会社 1995『北京・大連・上海・青島』三推社・講談社
長永義正 1937『経済都市大連』／1938『大連商工業内 昭和十三年度』／1941『関東州経済図説 昭和十六年版』大連商工会議所
高橋豊太郎他 1935『改訂版 高等建築学第15巻 ホテル・病院・サナトリウム』常磐書房
武田徹 1995『偽満洲国論』河出書房新社
玉置真吉 1935『満洲の舞踏界』『ダンスと音楽』1935年10月号
土屋清見 1921『満洲開発之策源地 大連写真帖』日華堂書店
鶴見祐輔 1965『後藤新平第二巻』勁草書房
富永孝子 1986『大連・空白の六百日』新評論
長谷川典 1994『日本ホテル物語』プレジデント社
松原一枝 1994『大連ダンスホールの夜』荒地出版社
松本豊三編 1937『南満洲鉄道株式会社三十年史』南満洲鉄道株式会社
山田義一 1995『オールド上海阿片事情』亜紀書房
山室信一 1993『キメラ——満洲国の肖像』中公新書
横山正男 1925『洋食の食べ方と洋服の着方』大阪屋號書店
60年史編さん委員会編 1990『都市対抗野球大会60年史』日本野球連盟・毎日新聞社
董志正主編 1985／録々江信光監訳・味岡徹訳 1988『大連・解放四十年史』新評論
顧明義・張徳良・楊洪范・趙春陽主編 1991『日本侵佔旅大四十年史』遼寧人民出版社（中国）

自然を慈しみ、
人に愛される、景観づくり。

こころひかれる景観には、まちが培ってきた個性を感じます。
こころときめく建築物には、景観への愛を感じます。
不二サッシがめざしているのは、そのまちと人と
景観にここちいい、建築物への取り組みです。
365日、自然の恵みを受取る超大型
アトリウムも、積み重ねた開口技術
とハイグレードなデザイン研究の
成果です。人にやさしく、まちに
ふさわしい、個性豊かな景観
づくりへ、不二サッシの
活動領域は無限です。

やがて、そのまちのシンボルへ

総合研修センター・安田生命アカデミア／施主：安田生命保険（相） 設計：株日本設計 施工：株アジタ、鹿島建設株、飛鳥建設株、五洋建設株共同企業体



窓から夢をひろげていきます

不二サッシ

本社 〒211 川崎市中原区中丸子135 TEL.044-422-1111
東京本部 〒150 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7024

『ヒルサイドテラス白書』

横文彦+アトリエ・ヒルサイド=編著

B6版 277頁

住まいの図書館出版局 2600円



評者＝

西脇敏夫

都市環境としての建築

ヒルサイドテラスは、街路に開かれ、公共空間へ積極的に参加し、地区の環境をリードしてきたプロジェクトである。本書は、その25年に亘る生生について、建築家だけでなく、事業や管理をする立場、そこで生活や活動する立場など様々な視点からの報告である。

短時間で、建築的に全ての世界をつくってしまう巨大プロジェクトと違い、長い時間をかけ、節目ごとに、周辺環境への影響とそこから返ってくる手応えを確かめながら、その展開を図ってきた。プロセスを含め、全てがヒューマンスケールの計画である。

そこにはコミュニティと建築との関係、都市空間や環境の形成に対する建築的アプローチの可能性などについて、一つの貴重な模範解答が示されている。

そしてあとがきには「この計画は場所、時期、経済すべての点」そして「それにもまして多くの人々の善意に恵まれた。そうした善意なしには現代社会の町の実体は砂上の城のような脆弱なものであるという事実につながっていく」と述べられている。

単独の事業主体による、建築物を中心にした計画という点で、数多くの多種多様な主体が、時を越えて複雑に絡み合う都市や街の状況とは違う。しかし本書で浮き彫りにしようとした「人々の意志決定のダイナミック」には都市デザイン活動と共通するものがある。

我々は現代の都市で生活せざるを得ない。我々自身が都市空間や環境に人間的な価値を獲得する努力をしていかなければならない。

横浜市の都市デザイン活動はスタートしてから約25年、ヒルサイドテラスの歴史とほぼ同じ時間である。

都市デザインは、都市空間の魅力と特徴を創りだし、生活の場として快適な環境を育ん

でいこうとするものである。全体としての都市計画と、個々の建築計画などにはたつきかけながら、地域や地区レベルでの質の向上を目指す街づくりである。

砂を固めようとしている活動かもしれないが、目指す目標や価値に対する社会的、市民的関心や評価は、時と共に20年前、10年前、5年前と明らかに変わってきている。

都市や街の状況は、そこでの自然、歴史、文化などをベースに、社会、経済、制度など様々な要素の複雑な関係によって決まる。またその性格や姿は、時とともに変わっていく。複雑で有機的で、巨大な生き物のようである。

都市空間や環境の秩序は三次元でなく四次元で動的にとらえなければならない。

そして具体的な流れは、その時々街づくりに関わり参加する人と、人間関係が最も大きく影響するというのが実感である。

そのため都市デザイン活動は、地域に対し継続して行われることが必要である。

このような意味で、建築家の都市空間や環境の形成に対する関わり方や、取り組みの姿勢などについて考えさせられることが多い。

建築は人々の生活を包み込むと同時に、公共の空間や場を形成する重要な役割を負っている。本来、そうした公共的な視点をもって計画、設計、管理運営されることが必要だが、現実には多くにおいてその視点や配慮が弱い。単体のものづくりの視点が支配的である。

横氏が随所で述べておられるような、環境としての建築や、環境に対する建築家の姿勢が、街づくりに求められている。

本書が建築家をはじめ、街づくりに関わる様々な立場の人に読まれることを期待する。

●にしわき・としお／アーバンデザイナー
横浜市都市計画局

Metropolitan Library

3月評者＝

難波和彦

今回は、読んで絶対に損はない3冊の本を紹介したい。

1冊目は本誌の1月号の書評でも取り上げられた『錯乱のニューヨーク』である。今や世界で最もエキサイティングな建築家として注目されているレム・コールハースの18年前の幻の名著であり、彼の建築思想の底流にあるポストモダンなアーバンイズムを知る上でも必読書である。ほくが興味を持ったのは、ニューヨークの歴史を通して、ヨーロッパ流のビューリタンの・マルクス主義的モダニズムとは異なるもうひとつのモダニズム、つまり、アメリカ流の快楽主義的・資本主義的モダニズムを描いている点である。それは過密と巨大さを特徴とする大都市（メトロポリタン）の文化であり、彼はそれをマンハッタニズムと呼ぶ。コールハースはニューヨークの歴

史を、マンハッタニズムがヨーロッパの理念主義の浸透によって解体するプロセスとして批判的に描き、マンハッタニズムの現代的な再生を提唱している。しかし逆説的なのは、その主張さえ西欧文化のコンテクストにマンハッタニズムが位置づけられ、再発見されることによって初めて可能となったという事実である。平たく言えば、アメリカの先行現象がヨーロッパを啓発し、ヨーロッパはそれに文化的意味を付与し、それをアメリカが再輸入するというねじれた歴史的関係が、依然としてくり返されているわけである。

『エッフェル塔試論』はそうしたねじれた近代史を、エッフェル塔というモニュメントをめぐるさまざまな歴史的なエピソードを通して、ヨーロッパの側から描いている。著者の松浦氏は建築の専門家で

『「建築」批判—空間をめぐる光芒』

鈴木隆之=著

四六判

彰国社 2400円



評者=

松畑 強

さわやかな一冊

著者はすでに実作のある建築家で、いくつかの小説をものしている小説家でもある。もっとも建築批評をまとめて発表するのは、おそらくこれが初めてだろう。本書は、1980年代末から現在にいたる著者の建築評論のなかから、主要なものをまとめたもので、これまでの著者の「建築」に対する考えを窺わせるものとなっている。

さて、一通り目を通した限りできわめて僭越ながら、個人的に感じた点を、いくつか記してみたい。

まず、文章の構成である。著者は小説をものしたことがあるらしいのだが、しかし、この書に収められている文章の多くは、小説としてははとまかく、論文としては、いささか弱いように見える。レトリックがいささか過剰であったり、個人的な学習ノートにつきあわされているような部分がないわけでもない。なにか現代日本のマスメディア状況の写し鏡を見るような気もするが、何を言いたいのか、そのためにはどう構成すればよいのか、今一度よく考えてみる必要があるだろう。

第二に、「批判」のあり方である。評者の理解する範囲では、近代的な「批判」作業とは、ものごとの内在的論理を追っていくところから始まる。それゆえ、もしも「建築」が批判されるとすれば、あくまでその内在的論理から「批判」されるのが、よくも悪くも基本的な「批判」のあり方ということになる。しかしながら、この点でも、ここでそうした作業がどこまでなされたかは、いささか疑問の余地があるように思える。そうした作業を省き、「すべてが『建築』でしかないという認識がありうる」と言ってみても、はたして批判になるようには、あまり思えない。

この問題に関して、もう一点だけつけ加えるなら、この書で言われている「建築」の多くは、基本的に磯崎新氏が展開、あるいは参照している「建築」という概念であり、必ずしも歴史的に形成されてきた「建築」という概念ではない、ということである。もしも磯崎氏の言う「建築」をもって「建築」を批判するのだとすれば、本来、磯崎氏の言う「建築」概念と、歴史的に形成されてきた「建築」概念を、今一度検討する手続きが必要となるはずである。控えめに言っても、その手続きが弱いように見える。

さしあたりの結論をいうなら、それゆえ「建築」批判とは、「磯崎」批判ということになる。とはいえ、繰り返すようだが、もしも磯崎氏の「建築」概念の「批判」をもって、「建築」が批判されるのだとすれば、それは結局のところ、磯崎氏の「建築」概念の過大評価ということになってしまう。それが果たして著者のもくろんだことなのか、評者には、判断しかねるところだ。あるいは本書は、基本的に「よき磯崎新論+α」というべきなのかもしれない。

「批判」をめぐる、きわめて僭越ながらいささか「批判」めいたことを述べてしまった。しかしながら、この書を読み終えたとき、どこかしらさわやかで、すがすがしい感じを持ったのも事実である。これは著者の人柄によるものなのか、あるいは作文能力によるものなのか…。著者はおそらく、さわやかですすがしい好青年なのだと想像してみた。

文体ははっきりしていて、読みやすい。値段も手頃で、持ち運びにも便利な一冊である。

●まつはた・つよし/建築家

はないにもかかわらず、鉄骨材料と構法の発展、エレベーターの開発といった技術史の細部から説き起こし、近代建築史における「技師の美学」と「建築=芸術」との相克を、壮大なヨーロッパ精神史として余す所なく描き上げている。著者の興味の焦点は、あくまでイメージとしてのエッフェル塔にあるのだが、それをエッフェル塔の物質的な側面を通して読み取っていく切り口の鮮やかさには、読んでいて感動さえ憶えた。この本の結論は、コールハースのそれとほとんど重なり合っている。例えば次のような警句は、コールハースの本に書かれていてもおかしくはないだろう。「近代」とは、実のところ「バリ」対「アメリカ」のイメージ闘争そのもののことなのだ。

この2冊の本から、ぼくは近代建築史における技

術と思想の錯綜した関係、あるいはアメリカとヨーロッパのねじれた関係について多くのことを学んだ。両書はぼくたちが教わった近代建築史が完全にヨーロッパの視点から見たものであることを明らかにしている。これによって近代建築史は、これまでよりひと回り大きなコンテクストの中に位置づけられたような気がする。

同じようなことは先月号の書評で取り上げられた「スーパーシェッツ」を翻訳している時にも感じた。この本は、大スパン鉄骨建築の歴史を描いたものだが、工場、ハンガー、高層ビルにおける鉄骨造の技術は、ヨーロッパよりもアメリカで大きく展開していたにもかかわらず、近代建築史のなかではほとんど無視されてきた。近年、建築デザインにおける鉄骨造の新たな展開が見られるようになって、ようや

くその歴史が見直されるようになったのである。

とはいえ、以上に述べてきたような錯綜した歴史を、まるごと輸入しながら今日まで来た後発的な日本やアジアにおいては、近代建築史はさらに二重三重にもねじれていることは言うまでもないだろう。

『錯乱のニューヨーク』

レム・コールハース=著 鈴木圭介=訳

筑摩書房 4200円

『エッフェル塔試験』

松浦寿輝=著

筑摩書房 3900円

『スーパーシェッツ』

クリス・ウィルキンソン=著 難波和彦・佐々木睦朗=監訳

鹿島出版会 4635円

自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです



空気調和の 三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋蛸船町1丁目35番8号
☎(03)3667-3431(大代)
支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・九州

新刊紹介

『サステイナブル・コミュニティ』

川村健一・小門裕幸＝著

B6版 208頁

学芸出版社 2575円

現代のアメリカは物質的な支配が浸透し、民主主義の礎であるコミュニティが失われつつある。が、阪神大震災でも指摘されたようにコミュニティの重要性が改めて見直されている今、アメリカで進められている「人とのふれあいのある人間性豊かな町づくり」の運動について、その考え方を紹介する。



『ナチュラルハウスブック』

デヴィッド・ピアソン＝著

前川泰次郎＝訳

A4変形 288頁

産調出版 4940円

ガイア思想を背景にした本書では、環境に優しく、健康的でかつ快適な住空間をいかにして作り出すか、実用的な提案をする。建築の環境への汚染原理に始まり、有害物質の除去、消費者の好みに合わせた効率の良い資源の利用法などテーマも幅広い。



『コンフォルト・ライブラリ1 室内学入門』

渡辺優＝著

B6版 223頁

建築資料研究社 2000円

日本人にとっての「インテリア」は、モノを媒介とした洋風化で、西洋の新しい住様式が生活に根ざすまでには至っていない。本書では日本の空間特性を尊重しつつ、日常生活の様々な場面における判断や考え方の糸口を提案、12のキーワードを基に現代の内部空間を見つめ直す。



『近畿町家の住まい——日本列島民家の旅⑤近畿Ⅱ』

林良彦＝著

A5版 48頁

INAX 927円

近畿地方は、早くから都市が開け、独自の文化をつくっている。建築も高い完成度を誇り、その歴史的景観は伝統的な町屋様式を現代の住まいとして工夫して暮らす人々に守られている。本書では今も住居として使用されている町屋を紹介する。今後の町並みを考える上で、示唆に富んだものと言えよう。



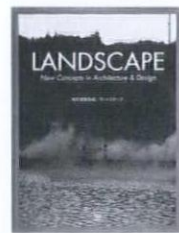
『現代建築集成集——ランドスケープ』

宮城俊作＝監修

A4変形版 224頁

メイセイ出版 16000円

本作品集は、1989～1995年に竣工された建物の中で、ランドスケープの内容、また時代性や個性のある環境文化として優れた26作品を収録。作品を街路・広場、ランドスケーププランニングなどに分類し、都市へのアプローチをヴィジュアルで紹介する。作品のコンセプト、専門データ等も豊富に記載。



『アンビルトの理論』

浜田邦祐＝著

四六版 256頁

INAX 2060円

建築は本来、建てられる空間や環境において制約を受ける。対して気鋭の建築家である著者は、具体的な制約や制限を解除した場に成立した建築は建築ではないのか、と問いかける。本書は「アンビルト(不可能な建築)」を観念し、物理的不在の中で建築と言う用語を再編しようという試みである。



戸村浩展
「alphanumeric relief」

2次元平面への最小限の操作によって制作した、アルファベット、数字、その他によるレリーフ作品40数点を展示。

会期：3月21日(木)～4月11日(木)

11:00～18:00(日、祝日休館)

会場：ギャルリーMMG

港区東麻布1-5-8 麻布保坂ビル Tel.03-3586-7666

問い合わせ：ギャルリーMMG Tel.03-3586-7666

第4回照明探偵団・連続講座
「光の中の天使」

パリに住むアーティスト田原桂一が「光のエコー／カナル・サンマルタン運河計画」を紹介する。パリは絶えず新しい光の価値を提供する。

日時：3月19日(火) 18:00開場

会場：東京デザインセンター

品川区五反田5-25-19 Tel.03-3445-1121

ゲストパネラー：田原桂一(写真家、アーティスト)
コーディネーター：面出薫

応募方法：往復はがきに住所・氏名・年齢・職業・連絡先を記入の上、「東京デザインセンター照明探偵団係」まで。3月5日(火) 必着。

問い合わせ：東京デザインセンター

Tel.03-3445-1121

フェリックス・キャンデラ展
「重力の交差点」

会期：3月15日(金)～4月27日(土)

会場：ギャラリー・間 入場無料

港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3F

Tel.03-3402-1010

会場構成：斎藤裕

問い合わせ：ギャラリー・間 Tel.03-3402-1010

「身体と表現1920-1980
ーボンビドゥーセンター所蔵作品からー」展

「身体」というテーマのもと、20世紀美術の殿堂・ボンビドゥーセンターの所蔵品の中からマティス、ピカソから現代美術の作家まで20世紀を代表する作家の作品120点で構成。

会期：3月5日(火)～5月19日(日)

10:00～17:00(毎週金曜は20:00まで)

会場：東京国立近代美術館

千代田区北の丸公園3 Tel.03-3272-8600

入場料：一般1250円、大学・高校生900円、

中学・小学生400円

問い合わせ：NHKプロモーション

Tel.03-3476-5688

NTTハローダイヤルTel.03-3272-8600

「リチャード・マイヤーとフランク・ステラ
ー建築と絵画の接点ー」展

建築を手掛かりとして、二人のこれまでの活動を紹介するとともに、二人の共同制作による新しい公共建築のプロジェクトを提案。

会期：～4月7日(日)

10:00～18:00(毎週金曜は20:00まで、毎週月曜休館)

会場：愛知県美術館

名古屋市東区東桜1-13-2 Tel.052-971-5511

入場料：一般1000円、大学・高校生700円

問い合わせ：愛知県美術館 Tel.052-971-5511

写真家 畠山直哉展
「都市のマケット」川の連作ほか

コンクリートによって造られた都市の相貌を捉シリーズ。

会期：3月13日(水)～3月25日(月)

13:00～20:00(火曜休館)

会場：ギャラリーNWハウス

新宿区西早稲田1-3-7 Tel.03-3204-0246入場無料

問い合わせ：ギャラリーNWハウス

Tel.03-3204-0246

キリンアーツスペース原宿オープニングイベント
横尾忠則Collection宣言「瀧狂一万枚のポスト
カードが放つ波動がアンビエントな空間に導く」

横尾が収集した1万枚の瀧のポストカードを展示し、瀧の放つエネルギーによって埋めつくされる新空間を創造。

会期：3月18日(月)～5月19日(日) 11:00～19:00

会場：キリンアーツスペース原宿

渋谷区神宮前6-26-1 Tel.03-5485-6321

入場料：一般500円、学生300円

問い合わせ：キリンビル株式会社広報部

中央区新川2-10-1 Tel.03-5540-3450

横浜国立大学建築学教室卒業設計展
「NO!」

会期：3月8日(金)～3月10日(日) 10:00～20:30

会場：横浜駅相鉄ジョイナス 4F自然の広場

問い合わせ：横浜国立大学卒業設計展実行委員会

Tel.045-316-5773 担当/森本

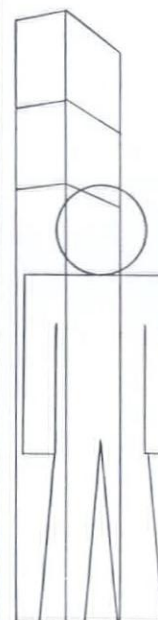
筑波大学芸術専門学群デザインコース卒業制作展
「3DLINK」

会期：3月9日(土)～3月10日(日) 9:00～20:00

会場：東京デザインセンター

品川区東五反田5-25-19 Tel.03-3445-1121

問い合わせ：筑波大学担当/塚本Tel.0298-64-7730



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないのでしょうか。

ビルや建造物の場合も、これと全く同じことで、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはり神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空調などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴らしい居住性が生れると思います。

しかし……

それだけで終わったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれらの機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もつと素晴らしいことではありませんか。

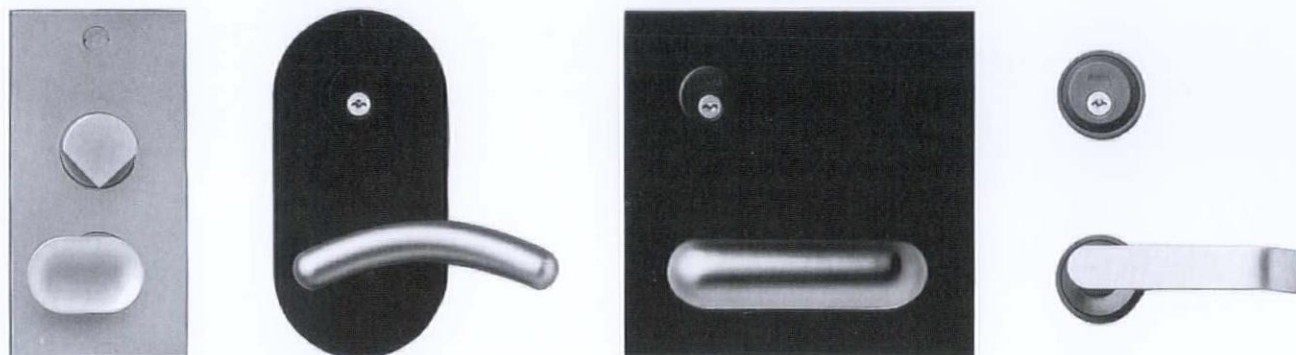
集中管理或は集中制御によって……省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完べきな、からだのしくみ、つまりビル全体の機能をフルに発揮できるのではないのでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社
KAWASAKI ELECTRIC CORP.

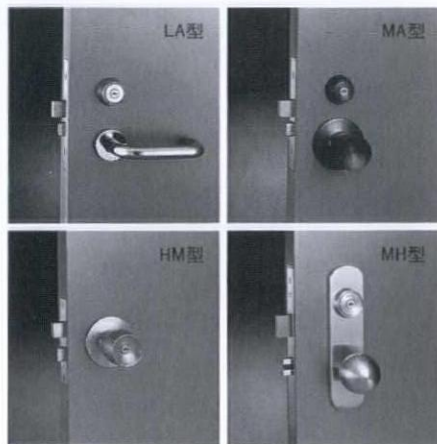
東京本社 千108 東京都港区芝浦3丁目7番4号
電話03(3454)5271(代)
本社 千999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011(大代)

なぜINTERFACEは



いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用していただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせま



せん。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。

時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させることが必要です。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システムチックに整備されているアメリカのANSI規格(米国国家規格協会)に着目しました。

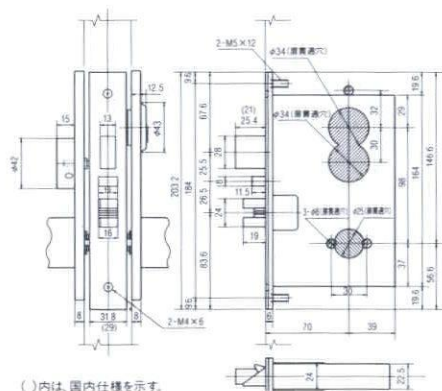
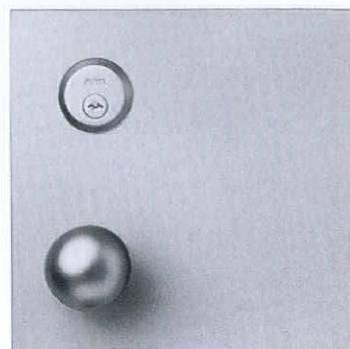
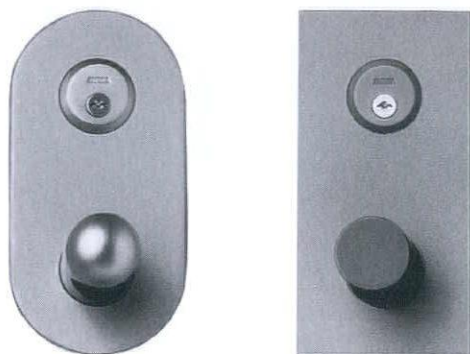
●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的に行ってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。

生まれたのか。



●ANSI規格はロックの機能を統一。

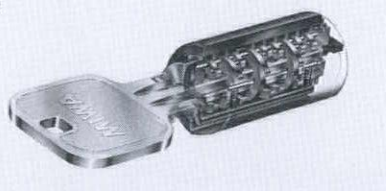
ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

INTERFACEの安心を支える『U9』。

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少ありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。

U9



格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エス

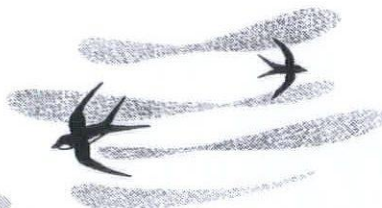
カチオンは自由な組合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げるにより、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。

記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠	室外側 Exterior side 室内側 Interior side	常時、内外のハンドルでラッ
F02	個室 寝室 浴室錠	室外側 Exterior side 室内側 Interior side	ラッチボルトは内外のハンド ムターン、外からは非常開錠 を操作すると、外ノ
F21	一般居室用	室外側 Exterior side 室内側 Interior side	ラッチボルトは内外のハンド ムターン、内からはサムターンで開
F22	個室 寝室 浴室用	室外側 Exterior side 室内側 Interior side	ラッチボルトは内外のハンド ムターンの操作で施錠されま すのハンドル操作により外ハン

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元氣である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ピュイ、ピュイ。
澄みわたった空気に、
待望の轉りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一歩一歩標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと

梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齡は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

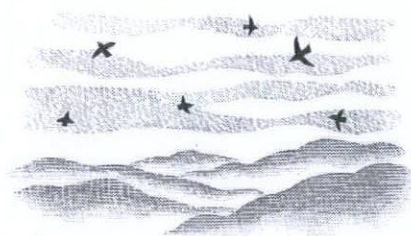
山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒトリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちょっと早起きして
近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

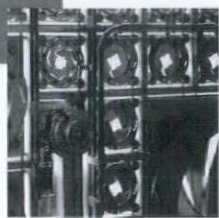
日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代) 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

五十嵐太郎
奥田真也
紫雲照英
橋本直明
堀井義博



この数年間における建築生成のプロセスの変質は著しい。これは、社会的に「発展」という一方向的な流れに「抑制」の必要が認識された事による影響が大きいと言えるだろう。過剰に消費的な経済活動による地球環境破壊、経済自体の破綻、人口爆発等の問題は、我々に新たな意識の水準を要求している。そして、昨年インフラストラクチャーのシリーズで取り上げた、都市や社会が反建築要素となって建築が生まれにくいという問題も、このような状況の中で顕在化してきたものである。つまり、建築をつくる者にとって、「どのように建築をつくるか」ということは「どうすれば建築をつくれるか」という問題と密接に関わるものとなってきているのである。何しろ社会が、建築においても「人口が増えて困るなら子供を生まなければいい」的な短絡的抑制思想に陥らないようにしないと、建築家は失業してしまうのだから。

「抑制」の力が建築に働くとき、建築生成のプロセスの「より効率的に機能を発現する」という部分に重点が置かれ、その結果として、建築にはある意味での単純さが求められる。しかしその単純さが、ポスト消費イメージ

るだろう。その「機能」が構成されているフィールドは、政治、経済、歴史、人の感情、自然環境、都市環境、など無限に有り得るし、その設定の仕方によって新しい「機能」が見出される事にもなる。しかし、何れにおいてもその縦軸となるのは現代という時代性であり、これらの要素の中でも時代性によってその性質が変化している部分に注目すべきであろう。逆に、変化のないものに関する「機能」は今回の対象とはなり得ない。今回のシリーズでは「機能」の再構成が新しい表現（建築生成のプロセス）に絡がっているような建築を、最も現代的な対象として取り上げていきたいと思う。

さて、第1回目のテーマは「場所」による機能である。「場所」といっても、気候や地形の違いのようなものには時代性が反映されにくいと思われる。一方、本来的に建築がその建っている場所による強制力を何らかの形で受けるのは当然であり、時代による「場所」の変質は建築にも影響を及ぼすはずである。そこで各論者には、現代的な「場所」の概念と、そのコンテキスト上にある建築の「機能」をピックアップしてもらったのだが、それらは実に統一感を欠くものとなった。

「政治的な場所」は、建築にとっての強力な外力として

海外建築情報リミックス

としてのミニマリズムという表現に止まるものであるならば、そこに見出されるのは単なる自己批判であり、問題解決への道標とはなりえないだろう。かと言って、プロセスの工業的画一化への逆戻りはもちろん意味を成さない（現在の建築と都市の行き詰まりはそのようなシステムの結果である）。それでは、現代において建築表現はどのように差異を構成していくのだろうか。もし建築生成のプロセスに究極的な単純さが求められるとすれば、建築の差異を生み出すのはそのプロセスの出発点にある「機能」の差異でしかない。そして、そこに立脚する表現の方法論は、機能の表現を恣意的に操作することによって差異を構成することではなく（それはプロセスの単純さに矛盾する）、現代的な機能というものを鋭敏に認識する事に外ならない。そのような分析は固有性を持った機能に従うことによって一般性を持ったシステムを生み出す、近代以降結果的に「機能」を固定化している「プロセス」の反復の打開へとつながるものと思われるのである。

この方法論が近代における機能主義と異なるのは、そのアナロジーの対象が現代という時代そのものであるという点であり、ジャン・ヌーベルによって「現代主義」あるいは「コンテクスチュアリズム」という言葉で表現されているようなものである。ここでは、基本的に「機能」が建築を取り巻く状況（時代性）によって変化するという前提に立っている。すなわち、今回シリーズテーマとする「機能」を定義するとすれば、「現代的状況において建築の必然性をもたらすもの」というような事にな

Theme: 「機能」 その1 「場所」による機能

の「場所」の存在を浮き彫りにする事例である。しかしこの関係における影響力は一方向的なものではないという点で、「政治」も建築の射程内にあるという見方もできるのではないか。「歴史的建築物のある場所」では、その保存再生において手を加えること自体が「場所」を崩しかねないという、自己矛盾の問題へのアプローチが示されている。次に「都市」の読み取り方はいろいろあるが、ここではその局所的な部分における情報の固有性の分析が、その集合体としての都市への分析力を持つ可能性が示されている。一方、次のミラーレスの建築は、建築をとりまく状況の質そのものを提示するような作品である。彼の作品にはグチャグチャ信仰に陥りがちな傾向があるが、それを超える独特の説得力も感じさせる。そして最後に挙げられた「設計競技」では、建築プログラムの内部において予め固定化してしまっている部分を、その残りの部分を形成する「場所」としている。結果としてこれらの全てを「場所」という言葉で括るのは苦しい感じがする。しかし、ひとつの概念に対して多様な分析の水準を見いだすことこそ、現在求められているのではないだろうか。そして、いずれの例にも共通して言えることは、それが批判的に終始したり、問題回避的であったりせず、「現代」をポジティブに捉えている点であろう。このようなスタンスの示す現代性が、近代批判の次の時代を標榜しているように思われるのである。

山本想太郎

昨年のシリーズ「都市のインフラストラクチャー」を継承する形で本年度のシリーズテーマを「機能」とした。様々な水準における現代的な「機能」の再構成は、現在そして今後、建築（表現）が価値を持ち得る（つまり建築が必要とされる）ために必要な分析であり、文化あるいは社会的価値観のターニング・ポイントにおいて、決して単なる建築家の自己弁護に止まるものではない。そこには、現在建築を取り巻く逆風の強い状況を、より積極的に建築の枠組みへとアクセスするための動機とするポジティブな姿勢がある。

コア・スタッフ'96
岩下暢男
今井公太郎
アトリエ・ワン
曾我部昌史
山本想太郎

d: domus
EC: El Croquis

すでにP. ヴィリリオは『速度と政治』(1977年)の中で、地政学から時政学へのシフトを語っていたけれども、今回はそこまで突走らずに、近い過去に発動した建築をめぐる事件を考えよう。つまり、場所がもつ政治的な機能である。その大きな外力によって建築の価値や存在すらも規定を受けるのだ。そして同時に、これはPCというすぐれた90年代的な問題機構につながっている。

ソウル—8月15日

光復50周年を迎えた日、齢69才になる旧朝鮮総督府の首はちょんぎられた。かつて日本が物理的にも精神的にも朝鮮を支配する目的で、李朝のシンボル、景福宮に暴力的に挿入された建物(平面も「日」の字!)のことである。視覚的にも圧倒的なスケールで街を威圧し、その古典系の紫禁城にならった宮殿の建築様式をも押さえつけるものだった。しかも手前の光化門をどかして、明らかに勤政殿の前をふさぐ、政治的な場所がはっきりと王朝の軸線を通る。そこは風水都市の要に位置していたことから、まことしやかな日帝断脈説も囁かれた。つまり北岳山からの気脈を断ち、指導的な人材を生む明堂の地をつぶすというわけだ。そして同時に、市内を見下ろす南山の中腹には朝鮮神宮も建てられ、ソウルを南北から、政治と宗教の両面で挟み撃ちにした恰好となる。ゆえに旧総督府は破壊されねばならなかったのである。それが幾ら建築史的な価値をもとうと、また戦後、米軍政庁舎、中央政庁舎、国立博物館と用途が変更されようともだ。「歴史の清算」を政権の課題にする金泳三大統領が、「植民地時代の傷を思い起こさせる汚辱の象徴」を解体する方針を決めたのは1993年のこと。これには韓国国内でも「撤去は現代史破壊」と反対の声が上がったが、昨年、解放を記念する慶祝行事の目玉として実行される。午前9時過ぎ、5万人が見守るなかで、爆竹の煙がドームを包むと、

あらかじめ切断されていた最頂部をクレーンがゆっくり運びあげる。強力な磁場をもつ敷地に立つ、建物の運命は皮肉である。おそらく戦後、韓国のナショナリズムを高揚する舞台のひとつは、何よりもこの建物をめぐる言説にほかならなかつたと思われるからだ。

台北—10月25日

同じ総督府であっても、台北の場合はちょっと違う。日本統治の終わりを記念する50回目の光復祭で、旧台湾総督府は破壊されなかった。が、やはりその場所は政治的な機能を担う。その建物の前で、李登輝総統は国内の政治的な対立や、戦前から住む本邦人と戦後に来た外資人の争いに対して、団結を呼びかける演説を行い、夜8時から4万人を集めたダンス・パーティーが催されたからだ(これは今年3月の台湾総統の選挙にも影響するだろう)。旧総督府は日本初の正式なコンペにより、1916年に長野宇平治の基本デザインで完成したものだが、当然、以前と文脈の異なる政治の祭典においては手が加えられた。辰野式を加味した古典系の意匠に対し、光復祭では中華風、極彩色という衣装がファサードの全面を覆う。大きな文字で「中華民國萬歳」や「三民主義」と記され、国旗を中央に掲げ、古典のオーダーは赤い宮殿風の柱に変装する。他にも旧台北地方法院、旧台北州庁舎、旧台湾銀行本店など、日帝時代の建物は同様に飾られた。しかしながら、総督府が破壊を免れたのは、反日感情の度合いが違うこともあるが、ソウルに比べて、それほど象徴的な場所ではなかったことも大きかったと思われる。ちなみに街を北から見下ろす丘には、当時、日本人との精神的同化を目指した台湾神社も建てられていたが、現在は同じ場所で、あからさまな中国宮殿風の巨大ホテル、圓山飯店が民族のイデオロギーを体現している。

モスクワ—8月19日

この日、モスクワの中心、クレムリンのほど近く、再建工事の進む救世主キリスト大聖堂の敷地内で、小さな第2聖堂の建立式に数千人の信者が集まった。もともと大聖堂はロシア正教の象徴として、宗教弾圧を強めたスターリンが、1931年秋にダイナマイトで爆破された建物である。そして同年には跡地で、メルニコフも参加したソビエト宮殿のコンペが行われ、巨大なレーニン像を持ち、アメリカの摩天楼を凌ぐ、420mの高さの最終案が決定していた(結局、完成に至らず、50年代から温水プールになっていた)。これは過去の宗教的なロシアと訣別し、新しい政治的なソビエトを誇示する建築的な儀式だったのである。当時、「宗教は阿片なり」の言葉のもと、多くの教会が壊され、モスクワは鐘の音が響かない街に変身する。しかし1991年に無神論国家のソ連邦が崩壊すると、精神的な空洞を埋めるかのように、教会はつぎつぎと復活。そして1994年、モスクワ市議会は「社会の安定をもたらすため」(ルシコフ市長)、救世主キリスト大聖堂の再建を決定した。しかも破壊という事件の記憶を抹消するがごとく、以前と同じ場所で同じビザンチンの外観である(構造はRCに変わったが)。現在5基のクレーンと3500人が昼夜働き、1996年のモスクワ生誕850周年に大聖堂は完成するという。そしてルシコフ人気にも一役買っていると聞く。だが、他宗教のイスラムからの批判や巨額の費用への不満、下院総選挙での共産党の大勝、エリツィンの健康問題などによる今年6月の大統領選挙の行方など、不安定な要素も少なくない。再び政治と宗教の振り子は動くのだろうか？

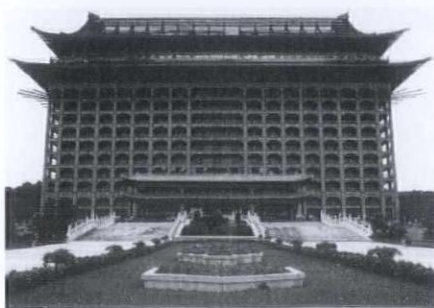
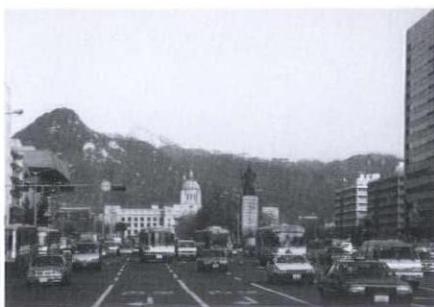
参考文献＝朝日新聞1995年1月7日、8月6日、8月15日、10月26日
日本経済新聞1995年1月6日、8月15日、8月26日、10月26日
赤旗新聞1995年11月30日 木村浩「世界の都市物語 モスクワ」

1995年の地政学

ソウル/台北/モスクワ

五十嵐太郎

旧朝鮮総督府 1993年12月筆者撮影 北岳山を背景に、世宗路を北上したつきあたりに位置し、後の景福宮を隠している。——①
旧台湾総督府 1995年11月筆者撮影——②
圓山飯店 1995年11月筆者撮影 屋根は工事中。——③
クレムリン北のマネージ広場では、現在、大規模な地下街も建設中。——④
救世主キリスト大聖堂——⑤



ある古い建築物が、移築されずに当初の場所で保存修復されるということを考えてみたい。保存修復とは、その場所の、もともと持っていた価値の回復である。この場面での、場所性は、その建物自体が建っていることによって規定されているものである。保存修復という操作では、自分自身を対象化し、自分自身が変容することがその目的である。

現代の視点で歴史的建築物を眺めれば、歴史的建築物は、いま現在、歴史的建築物であるということが、その価値なのである。言い換えればわれわれ現代の人間が、ある建築物を振り返ってみた場合、「歴史的に価値のある建築物である」と思うこと、まさにそれこそが、その場所に建っている建築物の持つ機能なのである。(本当に価値があるかどうかは問題ではない)。

ミイラの頬に紅をさすような表面的な修復で、単に失われた機能を回復しようとするリハビリではなく、積極的にかつては持ちあわせることがなかった機能をも獲得しようとするものを、とくに保存再生とよぶことにする。ジャン・ヌーベルの「クリヨンオペラ座」(1987—1993年)はその一例であろう。

パリ北西のルーアンに建つ修道院として建てられた17世紀の建物は、マッシミリアーノ・フクサスによって「ヨーロッパ設備・建築協会本部」として保存再生された。

修道院はオリジナルとしては17世紀の建物であるが、上部2層(3・4階部分)は19世紀に屋上屋を架す形で増築されたものであった。フクサスは19世紀に増築された部分を破壊し取り除き、17世紀につくられたオリジナルの屋根を露出させた。その上で、3・4階部分を二等辺三角形の断面を持ちセットバックした形につくりあげた。中庭方向にむかう部分は、

スチールと木のフレームにガラスを嵌め込んだものとし、その内側は回廊となっている。

この保存再生例で最も、特筆すべきことは、積み重なリスクリーン状となった東側回廊の付加である。オリジナルの建物は、コの字型の平面を持ち東側の部分は外部に開放されていた。フクサスは、この開放された部分を鉄骨のスケルトンな立体的回廊により、曖昧な形で閉じた。鉄骨回廊の両端には、ガラス張りの外皮に覆われた鉄骨階段を仕込み、回廊中央やや北より、もうひとつの垂直導線としてエレベーターを据えた。

このように新しく付け加えた3つの垂直導線を東側のウィングに集中させ、東側回廊により、中庭としての性格を強めると同時に、これまでは持ち得なかった機能、1階〜4階までそれぞれ中庭を周遊する機能を獲得した。

フクサスが東側回廊の付加を決定した背景にはふたつの理由があるようだ。第1に、フクサスは、フランスで数多くの仕事をしており、いわゆる田舎に残る中世の修道院建物などを熟知しているであろうこと。第2に、3つの垂直導線を仕込んだスケルトンな立体回廊による半透明なスクリーンと石造建物の対比という構成の面白さであろう。後者は、現代の建築家にはもちろん共通に理解されることで、この場で特に扱うべきテーマではない。前者、修道院の建物一般に対する熟知というテーマを、少し扱っておこう。

フランス、特に南フランスは中世の修道院建物の宝庫である。修道院は一般にギャラリー・ホールなどの幾つかの建物から構成され、建物の存在しない部分は大小様々のいくつかの長方形の中庭となっている。外周を回廊が巡っている中庭にハーブなどが

植わっていて、修道僧が散策したりするのである。

この長方形の中庭は一般にクロイスターズと呼ばれる。この名で呼ばれる建物が、マンハッタン島の北西にメトロポリタン美術館の分館(1934—1938年)としてあるが、これはフランスのあちこちの田舎から、中世の修道院建物の部材を持ってきて、ニューヨークのリバーサイド教会を設計した建築家とメトロポリタン美術館のキュレーターとが共同してひとつの建物に設計(合成)したものである。この建物は、その名の示すように多数の中庭を持つものであるが、フランスにあった時とそっくりそのままに再現させたものはたったひとつしかない、その他の中庭は、回廊の柱の本数の欠落などのためオリジナルよりも小さく設計し直され配置されたのである。

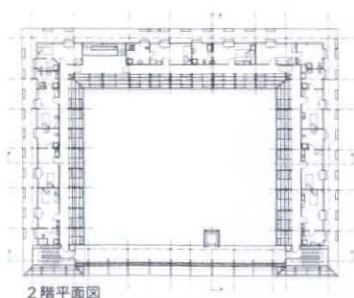
ニューヨークのクロイスターズの場合は移築であるが、そこに行ってみるとフランス中世の修道院に來ているかのような気がする。建築家とキュレーターは、必ずしもオリジナルそのままであることにこだわらずに、そのエッセンスを汲み取り、中世の修道院らしさを設計したものである。エジプトのデンドゥール神殿をメトロポリタン美術館のウィングにそのまま持ってくるやりかたは、「アメリカ的」の一言で片付けられることも多いが、クロイスターズは持ってくるだけではなく換骨奪胎した再設計なのである。

フクサスは、コの字型の平面を持つ修道院の建物を、東側回廊を付け加える操作により「クロイスターズ」という、より修道院らしい形状につくりかえた。「クロイスターズ」という形式が、より「歴史的に価値のある建築物である」と思われること」という機能を増幅したのである。

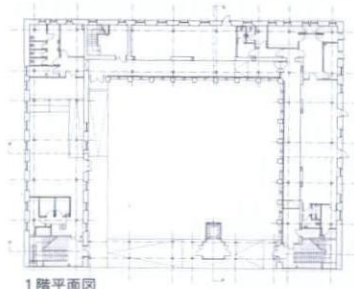
「より〜らしいということ」 —M・フクサスによる17世紀の修道院建物の保存再生—

紫雲照英

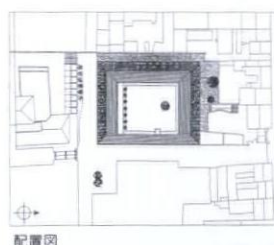
A Reclaimed Building
Massimiliano Fuksas
l'ARCA 9511



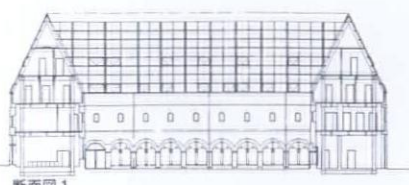
2階平面図



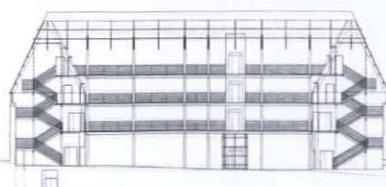
1階平面図



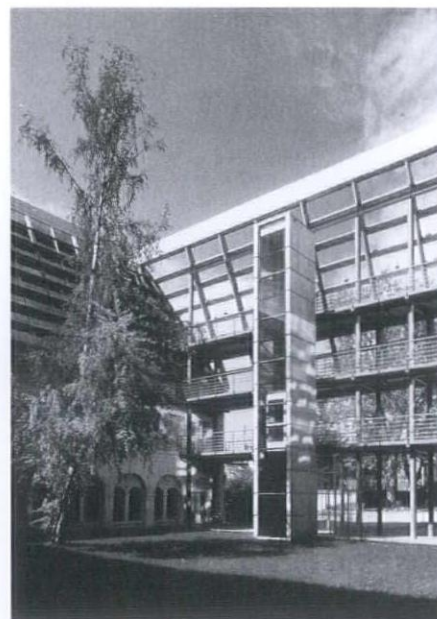
配置図



断面図1



断面図2



(語りつくそうとしない方がいいこともある)

その10

いつかジグソーパズルで遊んだときのことを思い出してほしい。

ちくちくちくちく組み上げられていくパズルの傍らで、正体不明のままにあったピースが、突然に絵柄の一部として判明したり、はたまた完成間近のパズルに残された空白の領域が埋められてしまうには惜しい形をしていることに気付いたりする。

もっとも、そんなことはパズルが完成した暁には絵柄のなかに忘れ去られてしまう感傷に過ぎないのだけれど、そもそもがパズルを組むことの楽しみが、絵柄の欠落部分の謎を解く過程のもどかしさにあったような気がする。

(ほくらを取り巻く環境もそんな感じで変わっていくのだし)

その20

インターネットとか携帯電話のような機械はもはや日常的な風景になるのだろう。

リアルタイムで行う情報交換のネットワークが整備されるにつれて、それ以前には存在しなかった領域が発掘される。例えばそれは、電波の届かないエリアであったり、機器や個人的な都合で電源を切っている時間、あるいはレスポンスの「遅れ」であったり。電子情報ネットで編成される環境のなかに、アンリアルな「場所」が浮かび上がる。つまりはオフラインにある、もしくはそうさせている時間や空間がコミュニケーションの奇妙な隙間として残されていることを発見するのだ。

(それを言い訳の理由にしたり、その裏を察したりするのも楽しい)

その30

リサイクルすることの価値。それは決してエコロジーとかいう道徳観念では説明できない。むしろ、発展的進化論にも似たモデルチェンジという製品開発の神話がそれを保証しているのだろう。

新たな欲望に対応すべく付加された性能と、改良母体となった旧製品が保証する基本性能。常に時間差のある他製品との「距離感」をもとに新製品の効能は語られる。他との隔たり、つまりは商品としての差異性は比較するものとの関連がよく見えるほど「ちがいが」よくわかるし、アレンジされた複数の素材や情報といったものの脈絡は、微妙に確実に切れているほうがおもしろい。

差異性の楽しみは、おらかじめカテゴライズされた共通認識を再読するゲームだ。リバイバルあるいはリサイクルといったことが心地よいのは、「タイムラグ」ともいう誰もが共有可能な読み解くべき空白が残されていることによるのだろう。

(だから再生紙でタイムマシンを作ったところで、比較のしようのないものは絶対に売れない)

その40

都市という場所。情報が高密度に錯綜した領域では、新たなデータベースを追加することよりも、それらを整理するためのバイパスを敷設することが必要となるのだろう。それは膨大な情報を差異の多様性へと回収するための「すきま」を作り出すこと。既存の施設を再編成するための余白をプラグインす

ること。Heinz Tesarがザルツブルグの中心部にあるケルト美術館を改修した作業はそんな試みだ。

彼は17世紀に作られた歴史的遺構ともされる建物群に挟まれた場所に16mの高さをもつヴォイドを挿入した。美術館のエントランスにしては、エレベーターや空中廊下といった昇降移動設備を収容するにしても巨大すぎるこの吹き抜け空間は、両隣の古い建物に収容された展示室、研究室、事務室といったプログラムをリンクさせる場であるとともに、さまざまなイベントを許容する「すきま」の領域でもある。いわば垂直のパッセージともいうべき、白いメタリックな空洞が都市に穿たれる。

(未だ見ぬことではなく、まだ気づいていなかったこと。その未解決なままになっていた時間)

その45

時代による様式のちがいという、改築につきまとう困難をHeinz Tesarは巧みに調停してみせる。

古い構造体を再編するにあたり、彼は雑多なプログラム、形態の間に物理的な「空隙」を挿入した。その効果は、ファサードのデザインに端的に現れている。コンクリートで作られた壁面には内部の機能とは、何ら関係のない開口がランダムなまま配置されている。それらは、外壁から80cm後退して残存している古い壁面の窓のかたちをトレースしたものだ。

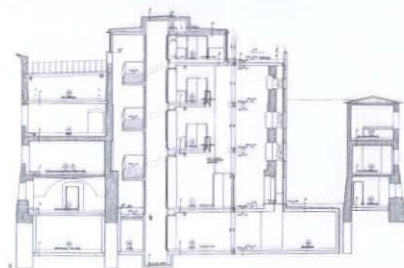
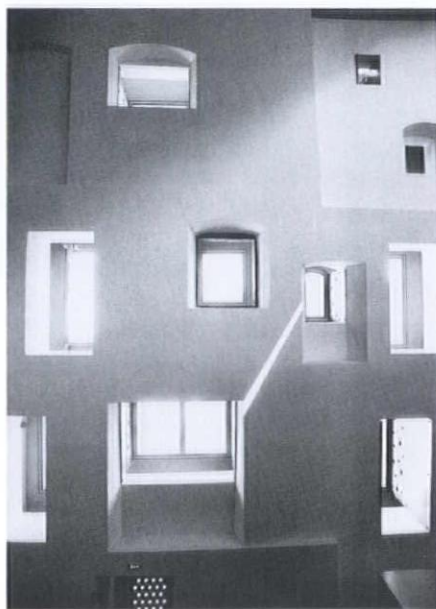
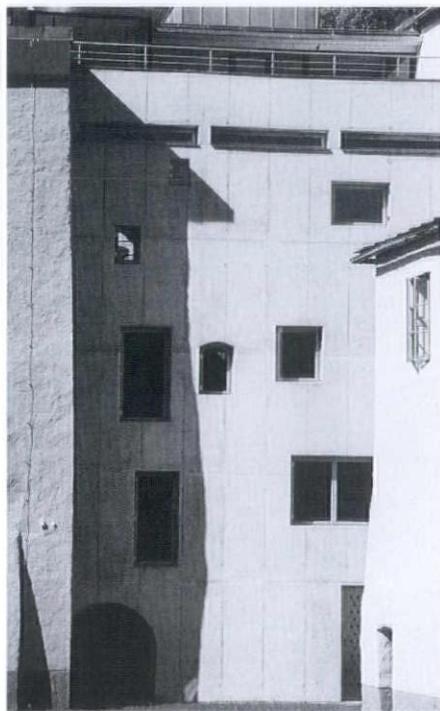
彼は、この2枚の古さと新しさをもつ壁の空隙に、美しくも触れることのできない「時間の隔たり」の輪郭を描き出したのかもしれない。

(例えて言うなら、偶然にかつての恋人と再開したときに覚える動揺。のようなもの)

時間の遅れというところ

橋本直明

Keltenmuseum, Hallein
architect: Heinz Tesar
d9505



エンリック・ミラーレスは、なかなか笑える建築家だ。El Croquisで今までに3回ぐらいあった特集のうち、49/50号ではクロワッサン(←雑誌じゃない)についての研究、72 [II] 号ではブレッツェルや、ヘヴィ・メタ・キッズ調の落書きをモチーフにしたプロジェクト、ノミ(←刺されると痒いヤツ)の形態分析などが載っており、およそ脈絡の無い、複雑な形を持つモノへの執着が見られる。

さて、今回は「現代的な意味での場所性」を喚起する建築について書かねばならないのだが、これは、いわゆる「合理主義」には見落とされているものの合理性を考えるという意味で、新しい「合理主義」開発の試みだと理解している。とすれば、ここでミラーレスを例に挙げるのは、いかにもを外しているように見える。しかし、彼独特の、場所とは無関係に恣意的な形態を用いるという手法も、視点の置き場所とその向きをちょっと変えるだけで、全く違った意味を為し始めるのだ。

ところで、「合理主義」という概念と態度は「モダニズム」の下位区分としてその範疇に納まっている。本誌95年6月号で書いた「意味作用と指示形式とを同一化させようとする動機こそが『モダンの精神』である」というのは私の見解だが、そこから、今回のテーマに対するありふれたモダニズムの評論として、例えば次のようなミラーレス論が可能だろう。

「『モダン／モダニズム』という言葉の慣習的な理解から言えば、ミラーレスは決してそれに相当しないが、にもかかわらず、彼は真正のモダニストである。何故なら、彼の建築は、対象を複雑であると記述／表明することによって、それが複雑であるという^{こと}を一目瞭然にするからだ。そこから、彼の建築は、場所の状況を明確にし、統合し、それがあべき状態にあらしめていると言える……」等々。

この説明は、それなりに「明快」で解りやすい上に、何となくラジカルに思えるという嬉しいオマケまで付いているために、ついうっかりと同意してしまいがち

だが、しかし、どちらかという通りが良過ぎて深みに欠けている。そこで、これをひとひねりした次のようなミラーレス論の出番となる。

「『モダン／モダニズム』という言葉の論理的な理解から言えば、ミラーレスは真正のモダニストであるが、にもかかわらず、彼は完全に反モダニストである。何故なら、彼の建築は、対象を複雑であると記述／表明することによって、それがあたかも複雑であるかのようにしてしまうからだ。その結果、彼の建築は、その場所の状況を隠蔽し、解体し、全く別のものに作り替えてしまう……」等々。

両者の違いは明らかだ。前者のまなざしの向きは、指示形式を、意味作用へと同一化させようというもので、そこに意味作用(内容／本質といってもいい)が存在することを前提としており、そこに隠された内容／本質が形式となって立ち現われる……というように、一種の神秘主義を秘めている。いわゆる「モダン／モダニズム」の最大の弱点は、こうした神秘主義を、論理的には払拭できない点である。しかし後者の場合には、意味作用も指示形式も恣意的なものとして捉えており、指示形式が意味作用に対して、一種の教育を施すのだ。この(一見)非論理的な態度は、論理的な態度に付き物の神秘主義に陥ることなく、全くその逆に、正体不明の、あるいは空っぽの対象に対して、特定の意味(内容)や外観を付与する効果を発揮する。

ふたつの態度のうち、前者は、エンリック・ミラーレスを言わば「隠れモダニスト」として説明する。一方、後者においては、同じ人物が「モダニスト・キラール」になってしまう。しかし、モダンの運動とは、不安定な放射性物質みたいに、止まるところを知らない切断／分離／解体の連続である。モダニズムは、習性として常にその前のモダンを殺すのだ。ところで、どんな「〇〇主義」であれ、その〇〇を態度の基盤にただ据えているだけのことであって、

実際に〇〇かどうかは関係がなく、〇〇は、単なる意思表示の看板に過ぎない。この種の看板を掲げる人達はたいがい、その対象〇〇へと、想像的に同一化しようとする(が、もちろん失敗する)。一方、ミラーレスのようにこの種の看板を出さない人は、その対象〇〇へと、象徴的に同一化する。これをもって直観的に解りやすい(しかし、完全に間違った)言い方で説明するなら「建築家は、建築家として振る舞うのではなく、建築として振る舞わねばならない」とでもなるだろう。対象として建築物を作るのではなく、主体として、建築そのものになること。

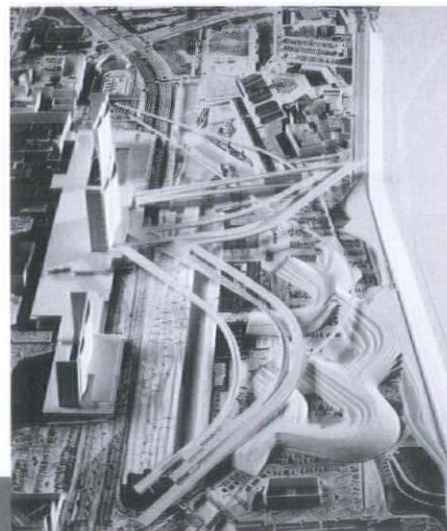
ひとつの物事を、ある特別な視点から見ると、突然それが全く違ったものに見え始め、今まで知っているとされた事柄は、新しい主人にその座を譲って意識の背景へと退き、やがて跡形もなく消え去ってしまう……。この特別な視点こそ、主体が「想像的領域」から「象徴的領域」へと移行する臨界点であり、現実界に現われ、主体の位相を反転させる裂け目である。いいかえれば、対象が、そこから主体を見つめ返しているような点である。実のところこの裂け目は、主体の移行を促す魅惑的な対象なのだが、移行がすっかり終わってしまうと陳腐な残骸にしか見えない……。

エンリック・ミラーレスは、いわゆる「モダニズム」とは逆さまのまなざしを据えることによって、主体の位相が反転した後に、この魅惑的な対象(現代社会のさまざまな側面)が、残骸と化してしまうことを、巧みに隠しているのだ。写真のプレーマーハーヴェン港(ドイツ、1993)のプロジェクトを周辺の写真と見比べてちょっと想像してみよう。この取るに足らない、十分に醜いとも言える凡庸な風景は、プロジェクトのおかげで、複雑そう、厚みがありそう、何やら楽しげなものに見えるに違いない。

魅惑的な対象の残骸

堀井義博

New Center in Bremerhaven port
architect: Enric Miralles
EC 72 [II]



JR山の手線に沿った旧庁舎跡地に建設されている、東京国際フォーラムは、会議棟とガラスホールからなるガラス棟、ホール棟、それらに挟まれたプラザ、その地下の展示場という、大きく分けて4つの要素から構成されている。これらのうち、ガラスホールを除くすべての要素はあらかじめ設計競技の要項に定められたものであり、ここでは建築家に対する与条件（そこには社会的、経済的、政治的外力があらかじめ集約された形で盛り込まれている）としての設計競技要項を、ガラスホールが生成されるための「場所」とみなし、それに対する読み取り方の適切さ、斬新さを競う場こそ、設計競技という制度であると理解することとする。第3者によって、すでに整理されているという意味で2次的な「場所」である「要項」へのアプローチにおいて、生の（1次的な）「場所」から直接読み取れるものの多様性に対し、不確定なノイズが削ぎ落とされ、「場所」が均質化されているだけに、読み取り方そのものの勝負がよりシビアに展開されているといえるだろう。

さて、その設計競技の最優秀案であるヴィニオリの解答は、4つのホール棟と山の手線に沿う円弧状の会議棟を引き離して、それぞれを敷地周縁部に配置し、それによって周囲から切り取られつつ開かれた「プラザ」が、有楽町界隈と東京駅を結ぶ都市導線の一部としてパブリックに開放される、というものである。ここまでなら決して珍しい提案ではないが、ヴ

ィニオリ案ではそれと隣接して、プラザと視覚的に一体となる、凸レンズ型平面のガラスのホールをつくることを提案している。このガラスホールという、構造的な挑戦をはらむ読み取りこそ、ヴィニオリ案を他の応募案から際立たせた点であったことは疑いえないが、ガラスホールをひとつの独立した建築物として見たとき、それがはらむ「機能」とは一体如何なるものであろうか。

実はガラスホールには、機能主義として標榜されるような意味合いにおいての具体的な機能がない。正確には、ロビーと称される全長208mにおよぶ広大な床面があるのだが、そこはギャラリーや展示場としても使用できるいわゆるフリースペースである。約60mもの高さの吹き抜けには、内周に沿って上るスロープと会議棟とを結ぶブリッジが横断するのみであり、さらに会議棟より上のレベルには船底型の屋根架構とそれを支える2本の大柱以外にはなにもない。

ここで与条件たる「場所」から読み取られたガラスホールの「機能」とはすなわち、ホール棟や会議棟、あるいはプラザといった各機能の関係を視覚化するという「機能」である。例えばガラスホールを、分離されたホール棟・会議棟の間の引き伸ばされた境界線として捉えてみるとよく分かる（ちなみに、凸レンズ型は両端を引っぱると一本の線になる）。本来、構造上必要な耐風梁を兼ねるものとして採用されたスロープとブリッジは、吹き抜けに面して

“FORUM”をみるための観客席として「機能」するのみならず、それ自ら、積層された会議室間を繋ぐ引き伸ばされた境界として、各機能の関係を視覚化している。それだけではない。ガラスホールの真価はもちろん、ガラスの透明性にある。それによって、隣接するプラザや会議棟、展示場、あるいはブリッジを隔てたホール棟とも視覚的融合が起こり、そこに“FORUM”という語の原義での「公開の広場」が現出することが計略されている（実際設計コンセプト上は、プラザのみならず、ガラスホールもパブリックに公開されている）。さらに、遠景からみたガラスホールは、そこに“FORUM”が存在することを都市に向かって視覚的にアピールしており、その役割をより効果的にしているのは、ガラスホールを構造的に成立させているモニュメンタルな屋根架構である（しかもこの屋根架構によって、ガラスホール壁面の透明度は一層上がっている）。

建築は最終的には物理的な構築物、すなわちカタチである。関係性という見えない「場所」と、それを顕在化させるという「機能」。そして、それを現実化するとき必然的に立ち現われる構造という問題機構。ともすると、建築家の意図を否定的に鈍化する方向に働きがちなこのベクトルに対して、構造が「機能を強化する方向に転換することが、この「機能」の現実化へのプロセスには不可欠である。

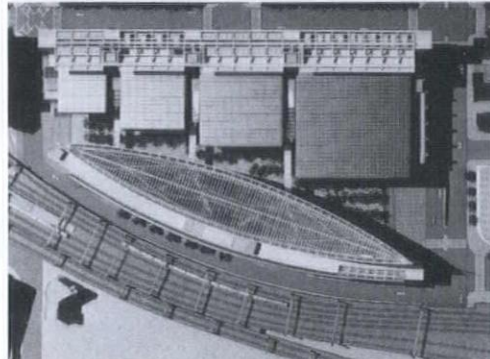
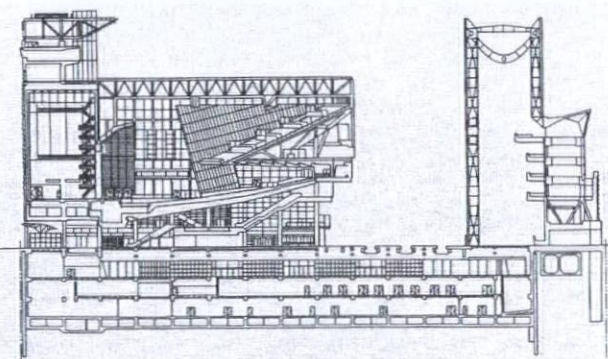
不可視な「場所」の視覚化

奥田真也

東京国際フォーラム
設計：ラファエル・ヴィニオリ
「東京国際フォーラム」(財)東京国際交流財団、1994年
「95アーキテクチャ・オブ・ザ・イヤー展」アーキテクチャ・オブ・ザ・イヤー実行委員会、1995年

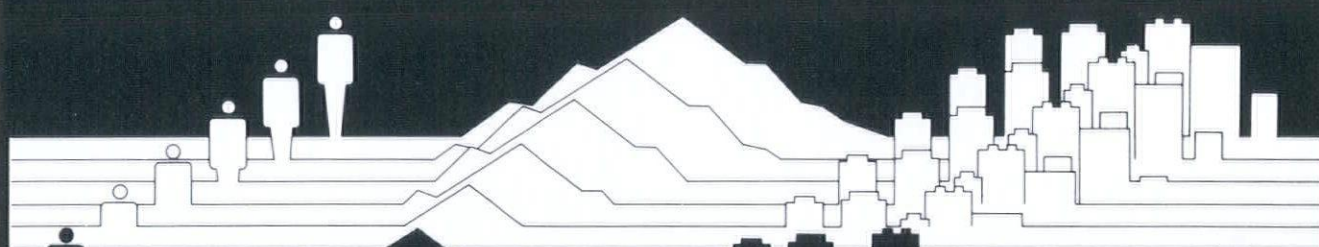


現地写真（八重洲側より望む）。1996年1月17日、筆者撮影



SANKI

人を育む。自然を守る。産業を支える。
三機のエンジニアリング技術は多彩。



人間活動のすべてを支える社会環境を一体化させ、
そして調和させようとする三機の総合エンジニアリング技術。

快適で機能的な都市生活、
合理的で先進的な産業活動、そして、それをとりまく自然。

三機は、これらを単独ではなく、
総合技術を通して見つけ、有機的なひとつの流れを実現しようとしています。

多彩な技術を結び、
新たなシステムを展開している三機。

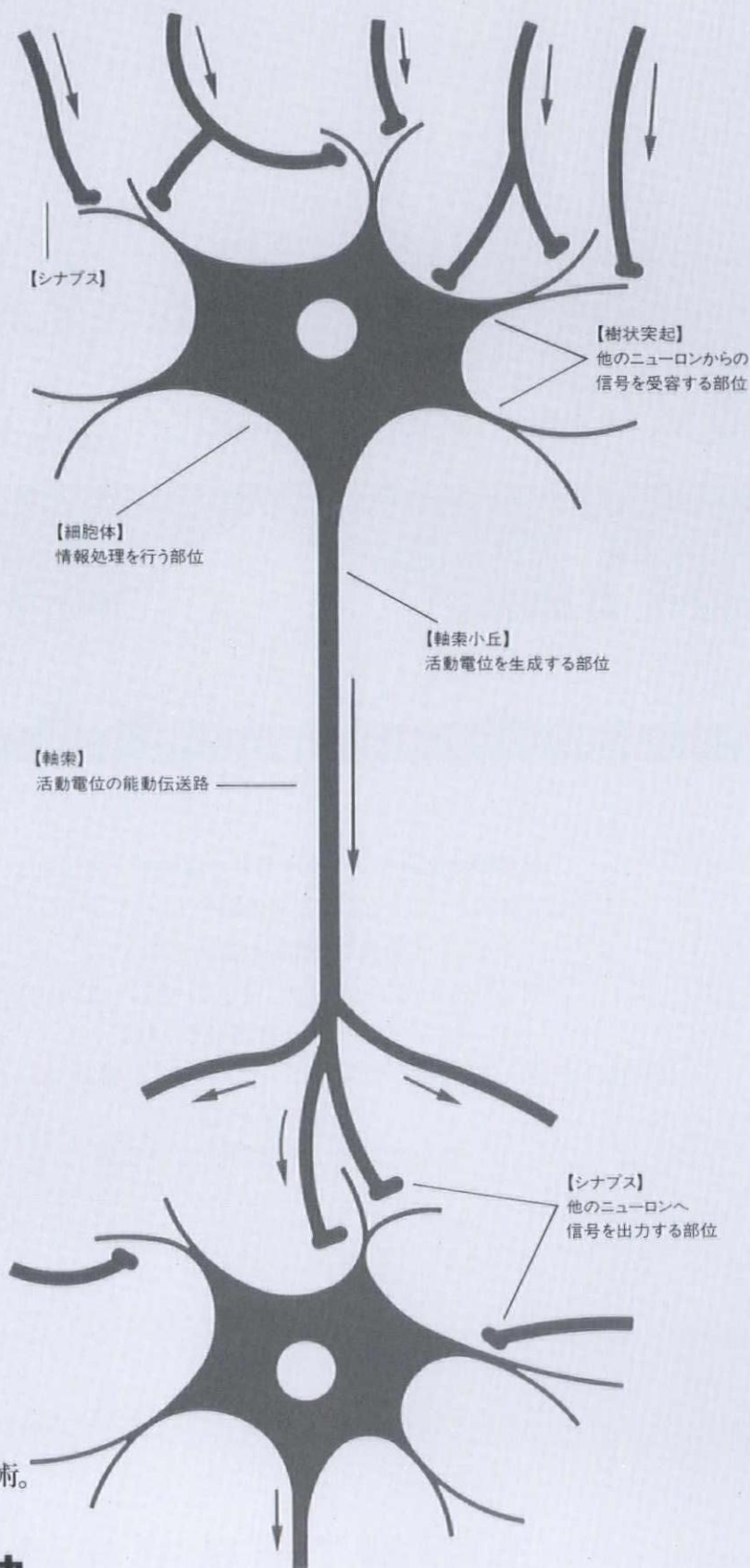


三機工業株式会社

本店 東京・日比谷・三信ビル TEL.(3502)6111

支店 北海道・東北・北関東・東関東・横浜・名古屋・北陸・大阪・
神戸・四国・中国・九州

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



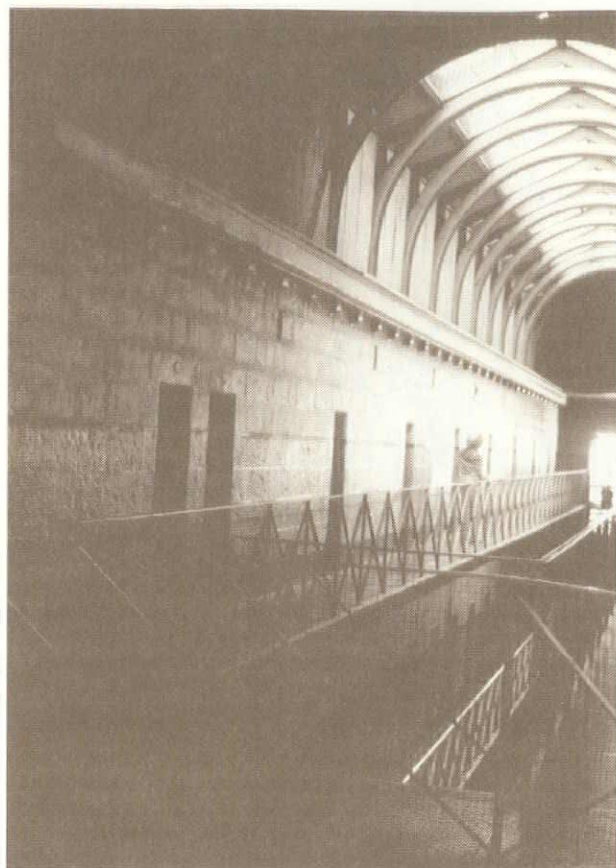
私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマにこたえるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋 2-15-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



東 熱



メルボルン・オールド・ゴール

9604

特集

大地と光の変様：オーストラリア建築1788—

イギリスの諸建築様式を出発点としつつも、オーストラリア建築には、新しい環境に適応させようとする建築家達の積極的な意志を見ることができる。それは、1788年の流刑地として入植以来の、苦難な文化的状況の歴史の中から徐々に開花してきたといえる。

本特集では、今までほとんど触れられることのなかったオーストラリア建築の原点から現在までに辿った様式の変遷とその魅力を、現地実地調査をもとに紹介する。

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1：原住民アボリジニと囚人建築 | 2：シドニーのコロニアル建築 |
| 3：タスマニアの教会建築 | 4：オーストラリアン・ハウス |
| 5：メルボルンのヴィクトリアン建築 | 6：都市住居テラスハウス |
| 7：キャンベラの新首都計画 | 8：現代建築の可能性 |

〔文＋写真〕 東京都立大学建築学科 小林研究室

〔論文〕 片木 篤、ピーター・ウィルソン、ジェニファー・テラー

ニューヨークのNext Generation

与えられたプログラムに独自の思考を加えながら、プロジェクトに終わらず、エレガントな実現作を生み出しつつある、今後が期待されるニューヨークの建築家、スミス・ミラー＋ホーキンソンとジョエル・サンダースの新作を紹介する。

〔作品〕

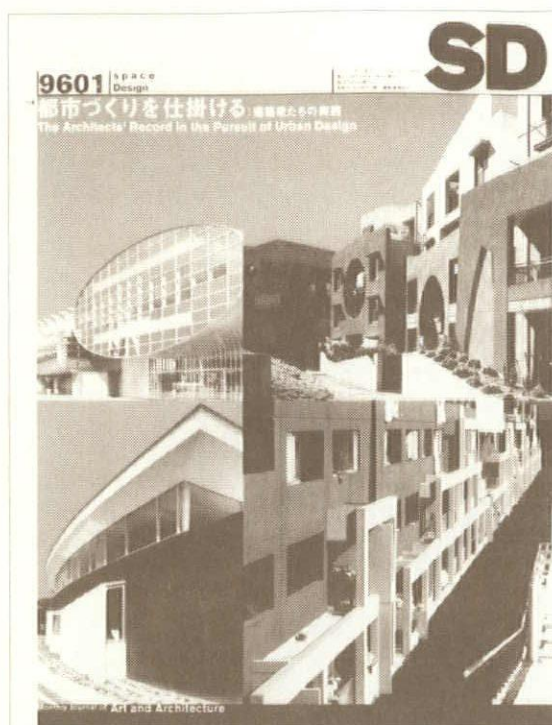
スミス・ミラー＋ホーキンソン／コーニング・グラス・コンプレックス、マクスミン・ハウス

ジョエル・サンダース／視覚の住宅、ペダーセン邸

〔文〕 松畑 強

連載：トムの時空形象学6／戸村 浩

連載：ヤマトホテル巡礼3／橋爪紳也



9601

特集

都市づくりを仕掛ける 建築家たちの実践

くまもとアートポリス（SD9101参照）を機に、建築家がコミッショナーあるいは顧問としてまちづくりを提案する試みがなされてきた。本特集は、地方自治体を主体としたプロジェクト、くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石まちづくりを取り上げ、行政側のねらいと共に、建築家たちのまちづくりの実践を紹介する。

〔事例〕

くまもとアートポリス（コミッショナー：磯崎新）：
熊本市営新地団地、牛深漁港連絡橋、鮎の瀬大橋、県営竜蛇平団地、花の温泉館、杖立橋、牛深水産観光センター、馬見原橋、有明フェリー長州港ターミナル、他

クリエイティブTOWN岡山（コミッショナー：岡田新一）：
県営住宅中庄団地、倉敷市立玉島北中学校、水島サロン、グリーンヒルズ津山センター・ビレッジ、倉敷市西部学園地区給水塔、加茂川町民体育館、岡山県バイオテクノロジー研究所ひるぜんジャージーランド・ビジターセンター、他

長崎アーバン・ルネッサンス（顧問：堀池秀人）：
長崎港ターミナルビル、長崎港B棟上屋、他
白石メディア・ポリス（プロデューサー：堀池秀人）：
白石市第二小学校、しらさぎ橋、白石市北保育園、他

〔論文〕

三宅理一、国吉直行

〔鼎談〕

岡田新一、八束はじめ、堀池秀人

連載：apple tomology トムの時空形象学 4

文＝戸村 浩

特別定価＝2,800円／本体2,718円



9602

特集

建築のメモリア： イタリア合理主義の流れ

今世紀前半に、リベラやテラーニらのアバンギャルドたちによる運動として注目された合理主義建築。それはポストモダンやデコンとも明らかに一線を画し、歴史的な脈からアプローチする手法を通して、現代イタリア建築の一翼を担っている。本特集では、6人の建築家の仕事と思考に触れ、現代におけるイタリアン・ラショナルイズムの流れを考察する。

〔建築家〕

アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステッラ、マリノ・ナルボッツィ、ウンベルト・シオーラ、アルド・ウイノ・カンターフォラ、ニコラ・ディ・パッティースタ

〔論文〕

アルド・デ・ポーリ、櫻井義夫

新連載

ヤマト・ホテル巡礼： 都市とホテルの空間文化誌

ある都市文明が、異なる都市文明との接触を試みるとき、そのための装置としてホテルが重要な役割を果たしている。この連載では、第二次世界大戦前に日本が中国に展開した5つのヤマト・ホテルを、現地取材した筆者たちが拠点、異国、リゾート、様式などの観点から考察しようとするものである。

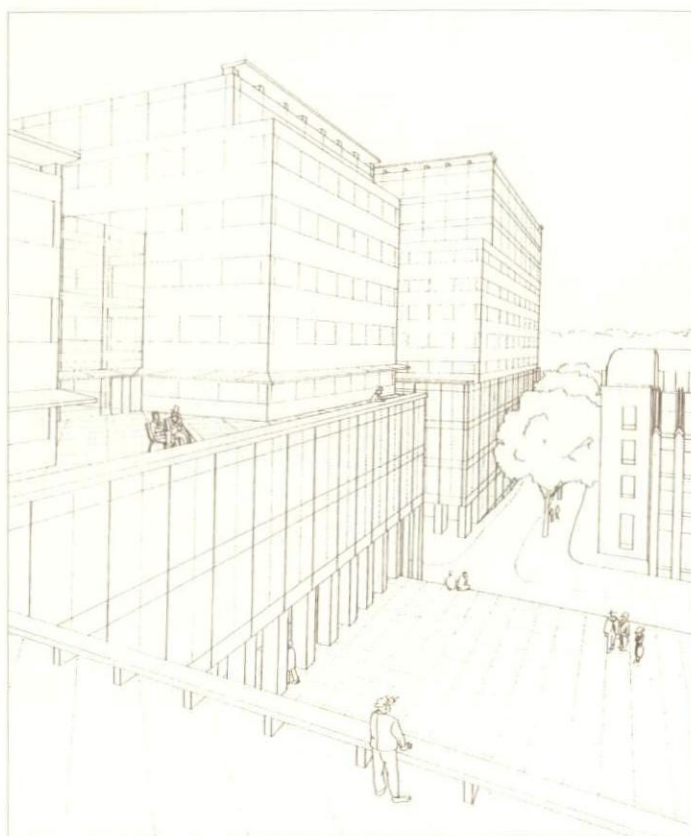
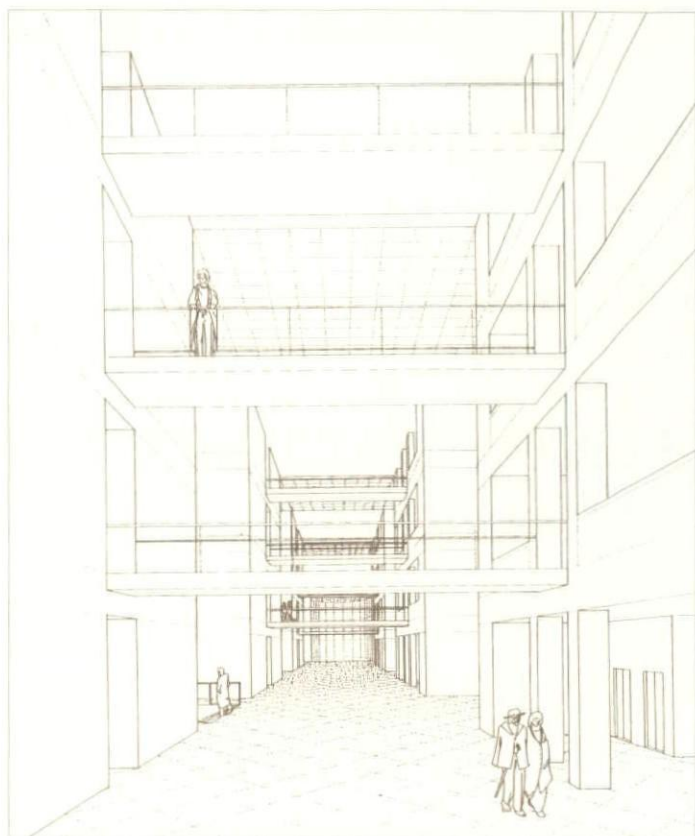
〔筆者〕

角野幸博、永井良和、橋爪紳也、竹山聖、毛谷村英治、横川公子、全6回のリレー連載

連載：apple tomology トムの時空形象学 5

文＝戸村 浩

定価＝1,950円／本体1,893円



SD別冊28

大学の空間

ヨーロッパとアメリカの大学23例と東京大学本郷キャンパス再開発

判型：A4判変形

総頁：176頁

発行日：1996年2月15日

定価：3900円

教育と研究の最高学府としての大学を取りまく環境は、大きく変わりつつある。それに対応した改革の必要性は高く、現実に様々な策が講じられている。キャンパスを構成する物理的な環境も例外ではない。本別冊では、東京大学本郷キャンパスの再生計画の一端を担っているグループが、次世代のキャンパスのあり方を探るべく、欧米の諸大学を実地に調査した記録をベースとして、様々な角度からキャンパスの発展のかたちをスタディしたものである。

それらは多くの問題を抱えながら再生を図ろうとしている日本のキャンパス計画だけでなく、より一般的に、既存街区の保存、再生、増設などについての多様な方法の実例としても興味深く、役立つものである。

論文：

香山壽夫（東京大学建築学科教授）、岸田省吾（同助教授）、他

実例：

フランスの最新プロジェクト——リヨン大学、ストラスブール大学、アミアン大学、他

中世都市にたつ大学——ハイデルベルク大学、ケンブリッジ大学、サラマンカ大学、他

アメリカのキャンパス——ハーバード大学、プリンストン大学、ワシントン州立大学、他

モダンキャンパス——サッセックス大学、イーストアングリア大学、ベルリン自由大学、他

東京大学本郷キャンパス——外構、食堂、工学部14号館、1号館、2・3号館、将来計画



不朽の名著

堀口捨己著作集〈全8巻〉

刊行委員 50音順

稲垣栄三、内田祥哉、木村徳国、神代雄一郎、平良敬一、高橋純一、中村昌生、早川正夫

堀口捨己博士が、大正9年、分離派建築会をおこして世に出られてからの設計・著作活動は、まことに濃厚なエネルギーと鮮烈な姿勢によって貫かれております。

堀口博士の建築作品は芸術院賞や学会賞に輝き、またその著作は毎日出版文化賞、北村透谷文学賞、学会賞を受けられています。

著作集は先生自ら企画・装丁され完結までに10余年の歳月を要し、堀口先生の研究成果の集大成となった我が国唯一の堀口捨己著作集です。

庭と空間構成の伝統 (縮刷版)

B5変・318頁
¥20,600

庭の意義、庭のあり方、庭の生いたち、庭作りの伝え書きなど、日本古来の伝統を解明し、写真を通してその空間構成の伝統を追求する名著。

堀口捨己作品・ 家と庭の空間構成 (縮刷版)

B5変・266頁
¥16,480

書名の示す通り「自然を入れた庭と建築の連り」という一貫した設計思想を背景とした作品の集大成である。

利休の茶室 (復刻版)

A5・714頁
¥18,540

文章家として歌人として、また建築家としても一流である著者が、コクのある文章と史実に基づく数多くの資料や図版・写真を挿入しつつ、利休の茶室の真髄を解明する名著。

建築論叢

A5・554頁
¥13,390

1.現代オランダ建築、2.現代建築に表われた日本趣味について、3.建築における日本的なもの、4.信長茶会記、5.桂離宮、の5編を収め、とくに1、5は約200頁の写真を付す。

茶室研究 (復刻版)

A5・876頁
¥23,690

利休の茶を受けついで人たちの茶室をまとめたもの。利休が作った茶室を更に進めた江戸時代の秀れた人たちのもので、利休の弟子の織田有楽の如庵から尾形光琳の遠廊亭などまで、国宝や重文を主として調べた成果。

書院造りと 数奇屋造りの研究

A5・614頁
¥18,540

書院造りと数奇屋造りについて永年にわたる研究の成果。(一)書院造りと数奇屋造りについて (二)君台観左右帳記の建築的研究 (三)君台観左右帳記の異本校注 (四)洛中洛外屏風の建築的研究

利休の茶 (復刻版)

A5・782頁
¥18,540

茶の湯のもつ深みと広がりに基づきそれを知り究めようとする。昭和16年北村透谷文学賞をうけた論文をもとに今回加筆された。利休の茶の真髄を探る名著。

堀口捨己歌集

A5・558頁
¥13,390

建築・庭の大家として知られる著者には、歌会始の召人に選ばれたほどの歌人としての一面がある。自選の和歌800首と珠玉のような随筆5点に、自作の絵・茶杓の写真等13点を配し、年代順に編集されたユニークな歌集。

【関連書】

堀口捨己 〈現代の建築家〉

SD(スペースデザイン)82年1月号の堀口捨己特集をハードカバーとした保存版です。堀口先生の作品・著作を理解するための格好の入門書となっております。

SD編集部編
A4変・176頁
¥3,300



鹿島出版会 107 東京都港区赤坂6-5-13
TEL (03) 5561-2551 FAX (03) 5561-2561

物語／ものの建築史 門のはなし

山田幸一監修 佐藤 理著 四六・128頁 ¥1,339

古来から、日本建築における門は、その建物の風貌であり顔立ちである。その形には様々な機能のほかに、格式などの隠された意味があった。こうした門の歴史をひもとき、社寺や離宮の門を中心に形と意味を解説する。

〈物語・ものの建築史〉シリーズ

山田幸一監修

本シリーズは、日本建築の各部位や材料のルーツ・変遷をありのまま記述するものである。記述対象の評価が定まっているだけに、その中から今後の日本の建築のあり方を探るよすがの1つでも見いだすことができればより幸いで、内容も極力この方法でまとめている。

畳のはなし

佐藤 理著 四六・128頁 ¥1,339

日本壁のはなし

山田幸一著 四六・120頁 ¥1,339

建具のはなし

高橋康夫著 四六・128頁 ¥1,339

風呂のはなし

大場 修著 四六・128頁 ¥1,339

台所のはなし

高橋昭子、馬場昌子共著 四六・128頁 ¥1,339

便所のはなし

谷 直樹、遠州敦子共著 四六・128頁 ¥1,339

窓のはなし

日向 進著 四六・128頁 ¥1,339

床の間のはなし

前 久夫著 四六・128頁 ¥1,339

屋根のはなし

石田潤一郎著 四六・128頁 ¥1,339

和瓦のはなし

藤原 勉、渡辺 宏共著 四六・128頁 ¥1,339

住み続けるための新まちづくり手法

佐藤 滋＋新まちづくり研究会著 A5・250頁 ¥3,296

バブルの地価高騰は家賃値上と相続税の支払不能を誘起した。都市では家を借りるのも生家に住み続けるのも難しい現在、それを乗り越え“まちに住む”を実現した地区があった。まちに住み続けたい人必読の実録＆手引書。

[SDライブラリー]②

建築と非建築のはざままで

ロバート・ハービソン著 浜田邦裕訳
A5判・208頁 定価3,193円

本書は、建築を分析していくための新しいシンタックスを「建築の意味性」「虚構性」に見いだそうという視点から建築を語る建築論である。庭園、モニュメント、要塞、廃墟、絵画空間、イマジナリーな建築に言及する。

かたちに見る造形の構成

イメージ・ジェネレーターの展開
島田良一編著 B5判・146頁 定価3,502円

造形のイメージを発想し、三次元で展開した造形教育の教材として編集。素材の基礎形態のシステム化、形の連続・断片的活用を、コンピュータ・グラフィックス処理し、建築の部分・全体・パターン考案の補助手段にて解説。

都市と建築の解剖学

形態分析によって[設計戦略]を読む

ジェフリー・ペイカー著 富岡義人訳 B5判・296頁 定価5,974円

歴史的な町並や集落の成立を探り、また現代建築の巨匠であるアルト、マイヤー、スターリングの作品の設計過程を分析する豊富なイラストによって構成された本書は、建築を学ぶものにとって貴重なテキストである。

ハイテック・コンストラクション3 スーパーシェッズ 大空間のデザインと構成

クリス・ウィルキンソン著 難波和彦・佐々木睦朗監訳
B5判・144頁 定価4,635円

本書は大架構建築の歴史と今後の可能性について、具体的な事例を中心にまとめており、単に技術的な視点からだけでなく建築的視点からも論じている点が特異である。19世紀の博覧会展示場、鉄道駅舎、工場などからはじまり、最近の空港、競技場、展示場にいたるまで、多種多様な大架構建築の事例を機能別に分類し、それぞれについて過去から現在までの歴史の変遷をコンパクトにまとめている。写真・図版多数。

インテリアデザイナーのための 住宅設備設計の知識

石崎清士著 四六判・182頁 定価2,266円

技術開発の著しい住宅設備の設計について、インテリアデザイナー向けに解説。コンセントやスイッチの配置、空調や照明、給排水設備の留意点、さらにマンション等に設置されるホームオートメーションなどにも言及。

人気急上昇

予約申込殺到!!

年間予約購読、郵送制

書店ではお求めになれません

月刊

ダルトンレポート

DALTON REPORT

「建設業のいま」を満載したニューリトルマガジン



9602号 目次

●特集●国土審提唱、一極集中是正へ4国土軸

- わいどあぐる ●ややこしい「霞が関」と「霞ヶ関」どっちがホント? / 現代を詠むーキャリアウーマンに俳句が浸透
- 霞が関ホットライン ●インターネットに発注情報 / 容積率、斜線制限などを緩和
- 阪神復興 ●大震災はフォーカシング現象 / 神戸市が局を大幅削減
- 列島を拓く ●高松市港頭地区再開発、容積率800%にアップ / 既存ダムに魚道設置
- 学会・協会・業界 ●セメント袋が4月から軽くなります / 首都移転による誘発効果は25兆円
- 海外建設事情 ●メコン河開発、新規プロは22件
- こんな方法考えました ●テレビ受信障害予測地域図を自動作画 / 仮囲いにクイズ
- こんなモノつくりました ●カーテンウォールの汚れ付着を防止 / 石膏ボード廃材の8割を再資源化
- ただいま研究中 ●再生粉体で高流動コンクリ / 削孔機の打撃音で切羽前方地質を把握
- ハウジング ●木造住宅は安全 / 3.3平方m 27万円の輸入住宅

▶ 今月の「拾出し」 ◀ 新経営戦略・戦術を追う

●用語・語録 ●ロジスティクス戦略

建設マンのための気楽に読めるユニークな建設情報誌です。

- 忙しいあなたに代って必要な情報を収集・整理してお届けします。
- これさえ読んでいれば高度情報化社会で遅れをとることはありません。

DALTON 定期購読申込書

□新規購読申込

SD

フリカナ
お名前

ご自宅 〒
住所

お勤め先
(職種)

該当の
ものに
○印を

ご専門
ご担当

建築	土木	機械	電気	事務	ほか
設計	施工	管理	営業	経理	ほか

購読期間(☑印をつけてください)

☐ 1年

☐ 3年

購読のお申し込みは今すぐに!
大変割安な定期購読料金です。

ただいま定期購読のお申込みを受付けています。
申込書用紙をきりとり、もれなくご記入のうえ、ハガキに
全面のり付け貼付し、下記までお送りください。
※お申込みは個人名でおねがいします。

購読申込書の送り先

〒107 東京都港区赤坂6-5-13

(株)鹿島出版会 情報システム事業部

ダルトンレポート読者係 ☎(03)5561-2553

●定期購読料 1年購読(12冊) 4,900円(税込)
(送料共) 3年購読(36冊) 9,800円(税込)

※購読料金のお支払いは、ダルトンレポート本誌に添付の
郵便振替用紙でお近くの郵便局からお払込みください。



9411 Airport Architecture as the Nexus of the City:

Featuring Kansai International Airport Passenger Terminal Bldg. And 21 airport terminal buildings in the world; Stansted, Denver, Chicago O'Hare, Stuttgart, San Pablo, King Abdul Aziz in Jeddah, New Seoul Metropolitan, Chek Lap Kok in Hong Kong, etc. Texts: Deyan Sudjic, Paul Andreu, Hiroyoshi Yamada, Noriaki Okabe, etc. ¥3,500



9412 SD Review 1994: Featureing SD Review 1994: The 13th Exhibition of Winning Architectural Models and Drawings. Text: Naoyuki Takashima, etc. **International Collaboration Project: The Children's Village in Oswiecim:** Architect: Mario Botta, Fumio Maki, etc. **Projet pour La Chapelle de St. Viogor de Mieux par Takubo 2.** ¥1,950



9501 Riken Yamamoto: Introducing his works for last 5 years. Ryokuentoshi=Inter-Junction City, Takashimacho Gate of the Yokohama Expo'89, Day Care Center for the Geriatric Patients, Junior High School in Iwadeyama, House in Kamakura, House in Okayama, etc. Text by Riken Yamamoto, tom Heneghan, Motomu Uno. ¥3,000



9502 Baroque Architecture in Sicily and Lecce: Features the distinctive Baroque style resulting from the mingling of Roman Baroque and the indigenous ancient Grecian and Hellenistic cultures. Introduces Palazzo Spadaro, etc. Photos: Ichiro Ono. Text: Hirohide Yakeyama, Masanobu Hasegawa, Satoshi Okada. ¥1,950



9503 Multi-unit Housing Today: Introduce architects who have made many multi-unit housing recently and their works. Masahiko Araki: Living Alley, Takao Endo: Higashi-Osaka Yoshita Public Housing Complex, Hidetoshi Ohno: YKK Namerikawa Dormitory, Yuzuru Tominaga: Shinchi Housing-C, Yasumitsu Matsunaga: Project 951, Makoto Motokura: Seikousou. ¥1,950



9504 Scenes from the Technoscape: Focus some scenes or landscape constructed by industrial facilities, civil engineering structures, etc. Introduce Wind Firm, The Thames Barrier, The Arecibo Observatory, The Kurobe Dam, Shiobara Hydro-Electric Power Station, Kasai Sewage Processing Plant, Trans-Tokyo Bay Highway, Drilling Platform, Japan Microgravity Center, Circular Farm, etc. ¥3,000



9505 Mega Architecture: Recent Works of Paul Andreu: Introduces some of Andreu's many monumentalscale buildings, railway stations, sports stadiums, and other works. Feature on **The Creation of the Foreign Settlement in Kobe and Its Development.** ¥1,950



9506 The Potential for Using Computers in Architecture: Examines how architecture is being influenced by the use of computers. Architects: Neil Denari, Peter Eisen-man, Keiichi Irie, Toyo Ito, Hani Rashid, ARX, Kengo Kuma, Makoto Sei Watanabe, etc.. **Mysterious Design Drawing Exhibition:** T.Ara, F.Enomoto, S.Hisada, N. Iijima, E. Sottsass, S.uchida, etc.. ¥1,950



9507 Takahiko Yanagisawa: Art Museum Space and Detail: Features five museums by Takahiko Yanagisawa, who won the competition for the Second National Theater in 1986. Museums introduced: Utsubo Kubota Memorial Museum; Museum of Contemporary Art, Tokyo; Kazumasa Nakagawa Art Museum, Manazuru; Kiri-yama City Museum of Art; etc.. ¥2,700



9508 Urban Public Spaces: Features small public facilities designed by architects. Architects: Atsushi Kitagawara, Naoko Hirakura, Shuichi Kitamura, Toyo Ito, Waro Kishi, Kazuko Fujie, Atelier Zo, Koichi Nagashima, Mitsuru Senda, etc. **Digital Urban Design: The New Language for Design Cities:** Introduces new methods by Yanagida Ishizuka & Associates. ¥1,950



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Eiji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horiike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesso D'Artico, etc.. ¥1,950



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to **Space Design** and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in _____, 1994

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of **SD**:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

● テラス フォルテラス

● 新日軽株式会社



新日軽株式会社では、納まり対応力や施工性および価格面などの充実化を図った、アクリル屋根テラス、フォルテラスを新発売した。

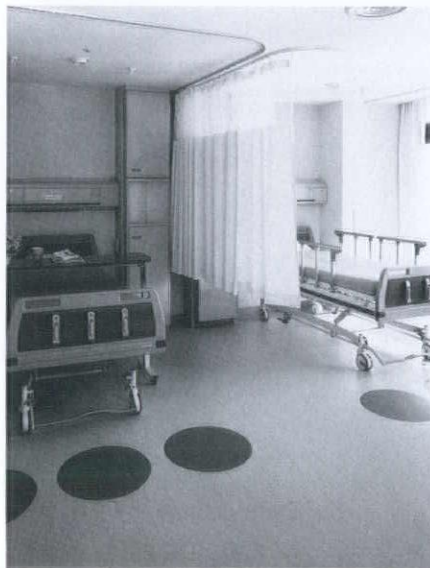
特長

- ①アール屋根タイプ・C型と直線屋根タイプ・F型の2種類。屋根材にはアクリルパネルを採用。
- ②直線屋根タイプF型(間口:1.5間×出巾:3尺、こはく色)が8万円台からという経済的な価格帯である。
- ③間口を連棟する時の切り詰め作業が不要である。
- ④中骨の取付けはブラケットに差し込むだけ、屋根材(アクリル)の取付けもたる木掛けに差し込むだけで簡略化し、施工時間を短縮した。
- ⑤出隅・入隅納まり、階段屋根、バルコニー用屋根など建物の条件にあわせて納まり対応ができる。
- ⑥柱は間口方向に35cm以内、奥行き方向(移動桁仕様の場合)に30cmの移動ができ、従来と比べ、納まり対応の範囲が広がる。
- ⑦サイズは、1~2間、出巾3~6尺を用意。間口2間タイプを3連棟し、最大間口6間まで対応。
- ⑧本体(アルミ形材)は高級感のあるセピアブラック・こはく色・ホワイトの3色。屋根材(アクリル製)はライトブロンズとブルースモークの2色。

新日軽株式会社 住宅建材商品部
東京都江東区本場2丁目7番23号
〒135 Tel 03-3820-2159

● 床材 SFフロアシリーズ

● 東リ株式会社



東リ株式会社では、高齢者福祉施設をターゲットとした床材を開発した。床材に銀系の抗菌剤を練り込み、安全で持続する抗菌性を持たせたクッションフロア、SFフロアシリーズを新発売した。同シリーズは、高齢者福祉施設がメインターゲットのため抗菌を標準仕様としたのが最大の特長で、ワックスに混ざる抗菌剤も別売りする。抗菌以外にも高齢者施設向けに、転倒事故などを防止するように滑りにくい表面加工が施してある。転んでも衝撃を吸収しやすいよう下地に発泡シートを張り合わせられる。老眼や白内障など視力低下の症状が現れるが、サインの役目を果たす部分のシートには緑や青、赤などの目立つ色を使えるよう種類を揃えた。また塩化ビニールの特長である耐薬品性や防汚性のため掃除がしやすい。

価格

抗菌仕様 4,400円/㎡~

東リ株式会社
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664 Tel 06-494-6605

● 掘削機 ハイブリット掘削機

● 株式会社レンタルのニッケン



株式会社レンタルのニッケンでは、ディーゼルエンジンと電気の両方で作動させる事のできるハイブリット式の掘削機を開発した。また、この掘削機に同社が開発したテレスコアーム(深掘掘削アーム)を取付け製品化し、レンタルを開始した。この開発により騒音を出すことのできない夜間作業、市街地での作業、トンネル内作業など排気ガスを放出できない工事現場などでは、電力で掘削作業をすることを可能にした。また、電源の取れない現場などではエンジンで作動させることができるなど用途に応じて使い分けができる。

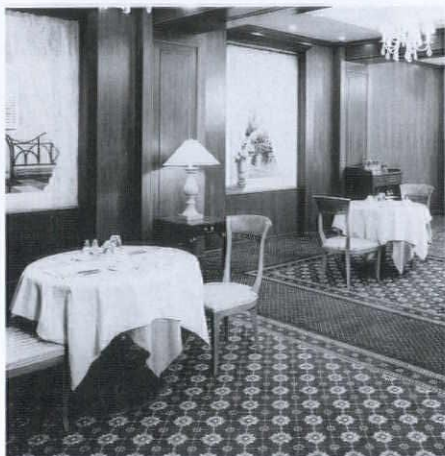
仕様

最大掘削深さ	15,200mm
最大掘削半径	9,800mm
最小施回半径	4,140mm
最大ダンプ高さ	5,720mm
全装備重量	22,000kg
アーム全長	6,030mm

株式会社レンタルのニッケン
東京都千代田区永田町2丁目14番2号
〒100 Tel 0120-14-4141

カーペット
カーペット

株式会社サンゲツ



株式会社サンゲツでは、カーペットの新商品を収録した見本帳「1996—1997カーペット総合」と、その中から5,000円/㎡までの商品のみを収録した「1996—1997カーペット500」を発表し、新発売した。

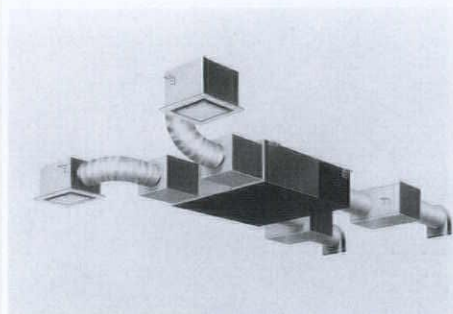
特長

- ①防ダニ商品を増加させた。東洋紡が開発した抗菌剤「アローストップDX」および防ダニ剤と、パイル糸とを化学的に結合させた防ダニ糸を使用し、ダニを寄せつけない忌避効果があり、繊維上での細菌・カビ類の増殖を抑制し、防臭効果も発揮する。
- ②「カンガバック」という高発泡のポリウレタンを裏側に直接コーティングすることにより、遮音性・保温性・断熱性を高めた商品を開発した。
- ③耐久性・弾力性にも優れているほか、重量も従来のジュート（麻）タイプの半分と軽量なために施工を省力化できる。
- ④英国製の優れた輸入商品を一層充実させ、さらに最近のトレンドを意識したデザインを豊富に揃えた。
- ⑤前見本帳からの継続商品について価格を合理化するとともに新商品開発において品質価値を徹底した。
- ⑥個性的にニーズに応える別注システムの手引きを掲載した。

株式会社サンゲツ
愛知県名古屋市中区西区下丁4番1号
〒451 Tel 052-564-3111

防音換気システム
ベンティエール

ダイキン工業株式会社

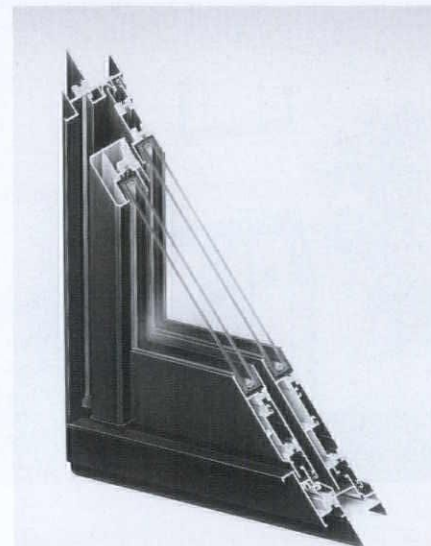


ダイキン工業株式会社では、防衛庁飛行場などの基地周辺にある学校、病院、福祉施設（老人ホーム）、庁舎などの公共施設を主に対象とした防衛施設周辺用防音換気システムを開発した。この防音換気システムは、財団法人日本建築総合試験所による性能評価を受け、「防衛施設周辺防音工事標準仕方書」の基準である防音規格をクリアし、1級工事の採用認定を受けた。同システムは、静音タイプ全熱交換器ユニット、「ベンティエール」をベースに、屋外側用・L型消音ボックスなど防音性能に優れた専用システム部材で構成され、これらを合わせて使用した場合のみ所定の防音効果が得られる。例えば、飛行機の離発着時などの騒音（90～100dB）をテレビやステレオなどの日常的な音（60～70dB）にまで下げることができる。商品展開は、150～1000㎡/hの幅広い範囲に応じた風量7タイプを設定し、専用リモコンを付属した単独運転仕様2シリーズと、エアコンとの連動運転仕様1シリーズに、それぞれ単相100Vと単相200Vの2つの電源機種をそろえ、全42システムである。電源の電圧を選択することで、空調機の電源と共用化でき、電気工事の簡略化と電気使用量の一括管理が可能である。

ダイキン工業株式会社
大阪府北区中崎西2丁目4番12号
〒530 Tel 06-373-4348

サッシ
サンシャダン

三協アルミニウム工業株式会社



三協アルミニウム工業株式会社では、新・省エネルギー基準における田地域以南の熱貫流率K値=4.0以下に対応する、断熱・防露型サッシ、サンシャダンを新発売した。

特長

- ①ビル用サッシで実績のある樹脂注型工法は、樹脂注入によるブリッジ構造で、高い断熱性と水密性を発揮する。
- ②アルミを熱の伝えにくい樹脂部材で、室内と室外に遮断した構造によって、優れた断熱・結露性を発揮する。
- ③熱伝導率の小さい複層ガラスの採用により、開口面積の大半を占めるガラス面からの熱損失量を単板ガラス（1枚ガラス）に比べ、1/2程度に軽減する。
- ④枠見込み・納まりが一般サッシと変わらず、一般サッシと同様に施工できる。
- ⑤デザイン性に優れ、家一棟の開口部が全てカバーできる豊富な窓種サイズ。
- ⑥これまでの断熱タイプのサッシと異なり、一般アルミサッシとの併用でも違和感のないすっきりしたサデザイン。

三協アルミニウム工業株式会社 広報室
富山県高岡市早川70
〒933 Tel 0766-20-2332

技術と伝統の...

■ 内線工事 ■ 外線工事



東光電気工事株式会社

取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1-4-5 〒101 電話/東京 3292-2111

支社所在地/札幌・仙台・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工



大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄

人のまわりを優しく 明るく ヒューマンエンジニアリング



株式会社 九電工

代表取締役社長 白石 司

〒815 福岡市南区那の川1丁目23番35号

電話 092(523)1231

最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

いろいろな技術を結んで、トータルに考える。
トーエネック エンジニアリング

先端技術で、システムする。

TOE/NEC

株式会社 トーエネック

本店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111
東京本部/東京都豊島区東横1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181

N 日章工業株式会社

- 本社 〒101 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎03-3254-3000
- 大阪支店 〒541 大阪市中央区高麗橋 2-4-6 (大正不動産ビル 6階) ☎06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央 3-2-27 (日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイペース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサ
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

ハイスプリット・ハイペース
鉄骨
大昭和ユニボード

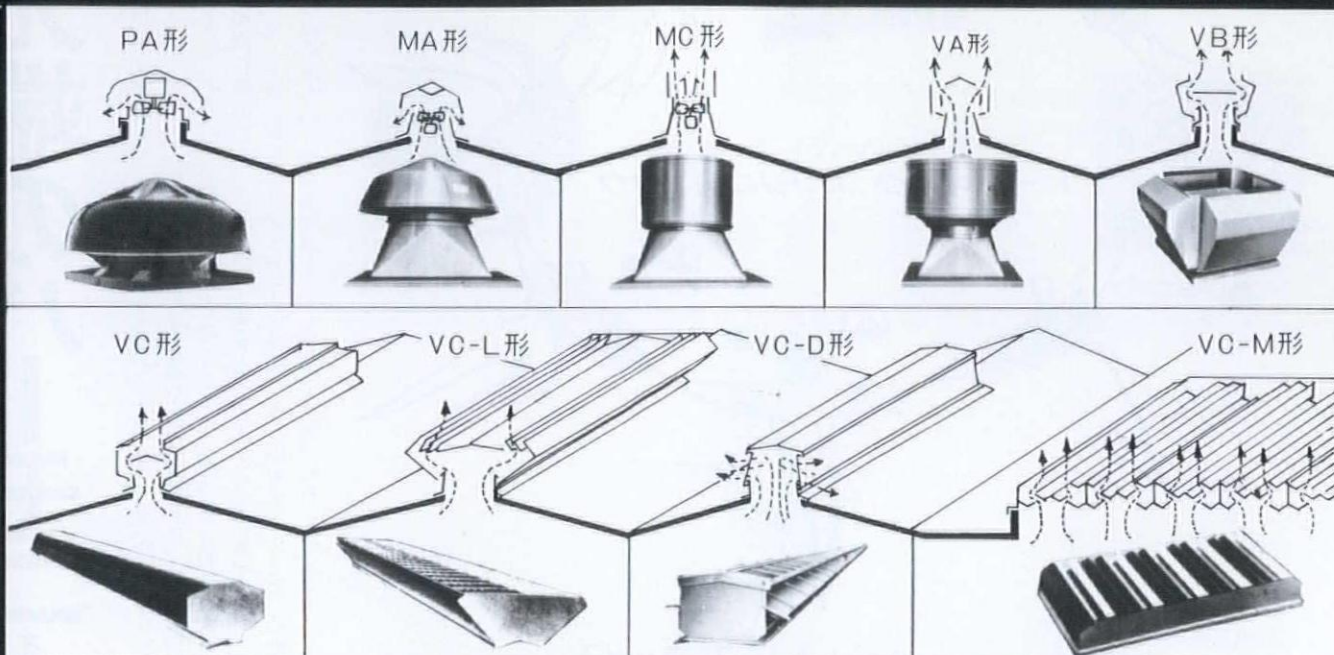
建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

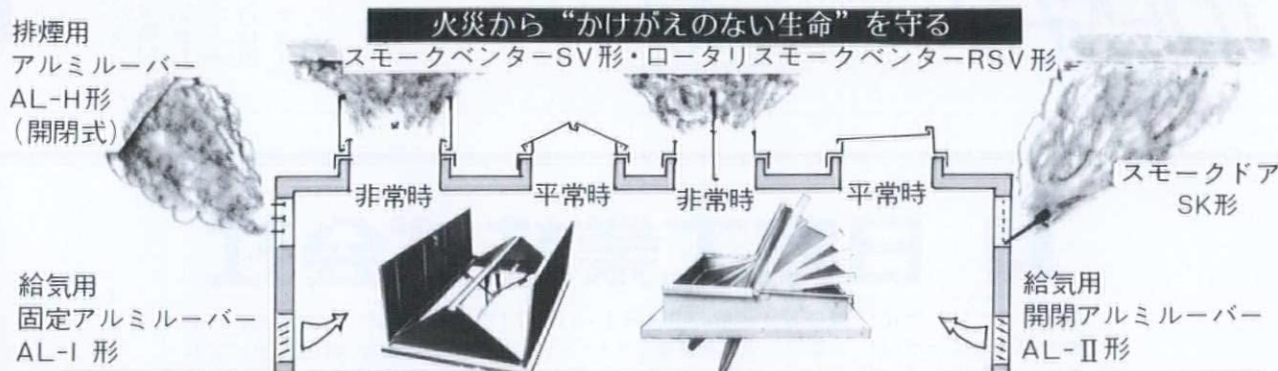
坂本商会は創業80年 換気・排煙・採光の専門メーカーです

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

強制換気・自然換気装置

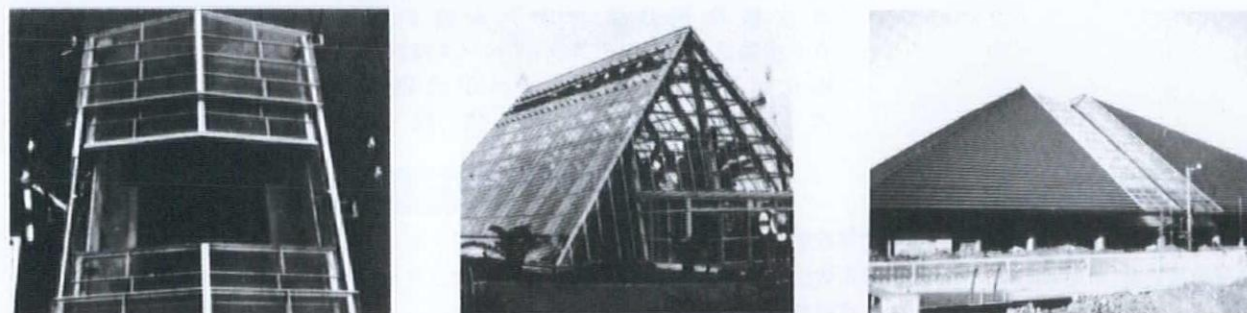


排煙・ルーバー装置



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト



株式会社 坂 本 商 会

本 社	東京都中央区日本橋2-16-12(江戸ニビル)	〒103 電話 東京 (03)3271-5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270 電話 松戸 (0473)87-3148
施工部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131 電話 東京 (03)3619-2221(代)

広告目次

S D誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命ください(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル (3572) 3381

FAX (3572) 3590

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル06 (362) 6515

FAX 06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8

(3818) 1961

FAX 03(3818)1968

大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9

昭栄ビル06 (231) 4548

FAX 06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10

ハヤシビル (3552) 8247(代)

FAX (3552) 8249

●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25

日本生命天六ビル06 (379) 1791

東京——東京都千代田区岩本町2-5-12

神田ポンピアンビル (3863) 6011(代)

名古屋——名古屋市中区錦2-2-13

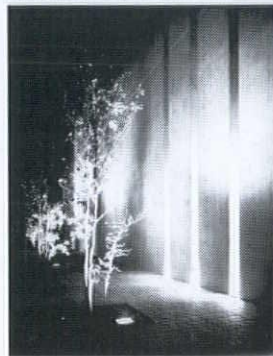
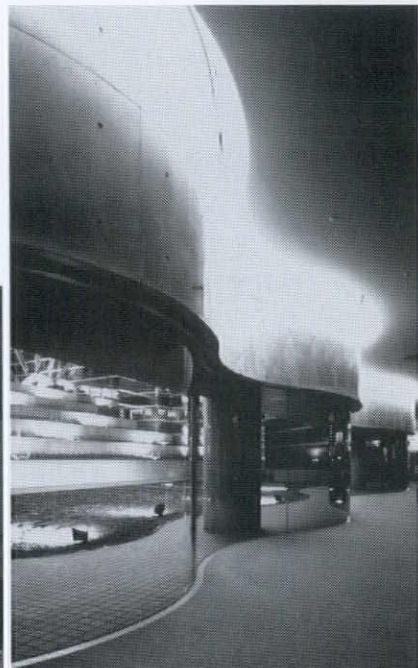
名古屋センタービル052 (221) 7641(代)

イ	イタリア家具見本市	160
カ	㈱関電工	表2
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A5
	川崎電気㈱	169
キ	㈱きんでん	A3
	㈱九電工	A16
サ	三建設備工業㈱	168
	三機工業㈱	179
	㈱坂本商会	A18
シ	新菱冷熱工業㈱	172
セ	セゾン美術館	156
タ	大興物産㈱	A7
	ダイゲン㈱	A11
	大栄電気㈱	A16
	大成温調㈱	A11
ト	東陶機器㈱	A1
	東洋熱工業㈱	180
	東光電気工事㈱	A15
	㈱トーエネック	A17
ナ	中立電気㈱	A10
ニ	日新工業㈱	A9
	ニチアス㈱	A12
	日本航空㈱	153
	日章工業㈱	A17
ヒ	㈱日立製作所	表4
フ	不二サッシ㈱	165
ホ	ホテルイースト21	A8
マ	松下電器産業㈱	A2
ミ	美和ロック㈱	170・171
ヤ	山田照明㈱	A20
ロ	ロンシール工業㈱	表3

表情多彩



照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



東京都立科学技術大学（東京）

山田照明株式会社 本 社／ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12 TEL 03-3253-5161 横浜支社／ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1 TEL 045-311-1731
仙台支社／ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOビル) TEL 022-267-1630 大阪支社／ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23 TEL 06-643-3421

福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30 TEL 092-282-7635 名古屋営業所 〒460 名古屋市中区 5-16-14 (新栄ビル) TEL 052-252-5161 札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水三条 4-2-3 TEL 011-811-2215
北関東営業所 〒370 高崎市緑町 3-14-8 TEL 0273-63-1442 千葉営業所 〒260 千葉市稲毛区緑町 1-25-14 TEL 043-244-2540 静岡営業所 〒422 静岡市稲川 3-12-4 (山中ビル) TEL 054-283-9788
広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34 TEL 082-293-6119 鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14 (東5組ビル) TEL 0992-58-0031 秋田出張所 〒010 秋田市山王 6-8-6 (けあビル) TEL 0188-65-2550
宇都宮出張所 〒182 宇都宮市海道町 818-2-1002 TEL 0286-60-1381 長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27 TEL 0262-43-8420